

奇譚グラス

新しい風俗文献誌

1967

12月号

12

December



奇譚クラブ

昭和四十二年十二月号

昭和四十二年十一月二十日印刷 昭和四十二年十二月一日発行 十二月号(第二十一卷第十二号) 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別取扱承認雑誌第二一〇号

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(〒共) 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王Ⅱ山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄じポーズ満載)

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動!

女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化

動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎フアンの要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

「女性刑罰拷問特集」 △西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号△美9▽

モデルⅡ清楚な美木乃々子Ⅱグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によつて嚴重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによつてグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽ (日本篇) 「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ。

サディズム文学の最高峰 S派必読の書

長篇羞恥責小説の一大傑作

臨時増刊

花

と

蛇

△小説・絵画▽

特集号

残部僅少! 定価五〇〇円 略号「花と蛇」

圧倒的な人気上昇とともにSMフアンの絶大な支持を得ました臨時増刊号「花と蛇」小説絵画特集号は、残部数十部を余すのみとなり売切れも目前に迫つてまいりました。前篇の特集号に引続き、この続篇の特集号も愈々入手困難となるものと思われまふ。本号に未掲載の新しい原稿は本年一月号より引続いて連載中でありまふので何卒御愛読下さいますよう、お願い申し上げます。

新しいモデルに依る強烈縛りフオート集

絶妙のバック姿態

大手札四枚一組 略号「せき」
左近麻里子 定評のある麻里子嬢の美しいバックスタイルを余すところなく晒して縄にもだえる有様を見せる。

松葉のさるぐつわ

大手札四枚一組 略号「せか」
左近麻里子 松葉模様の粋な手拭で息もつかせず強く猿轡されて殊に美しい瞳を大きく瞳いて縄目に耐える。

ポリウムをしぼる

大手札四枚一組 略号「せも」
左近麻里子 豊かに息づいた女体の首、胸、胴へと縄は蛇のようにまといつき肌へ喰い込んでゆく見事な姿態。

左右開股をしぼる

大手札四枚一組 略号「せみ」
左近麻里子 両脚を縄という小道具によって無理矢理開かされた肉づきのよい左近嬢の全身の表情は美しい。

ゴムカバーの猿轡

大手札三枚一組 略号「せな」
左近麻里子 生ゴムのオシメカバーによって鼻も口も一緒に猿ぐつわされて、その息苦しさにのたうつ表情。

開股羞恥椅子縛り

大手札四枚一組 略号「せけ」
左近麻里子 正面向いて椅子に坐らされた麻里子の両脚は思いきり開股され椅子は羞恥の椅子に早変わりする。

黒布の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 略号「せこ」
左近麻里子 真黒い布は妖しいムードをかもし出して麗顔に襲いかかり可愛い鼻口を無惨にも踏みこむ。

甘美な椅子プレイ

大手札四枚一組 略号「せま」
木村洋子 両足をいやでも開けなければならぬように、縄掛けされて吊された女体は、正面向いて揺れる。

開股吊り縛り姿態

大手札四枚一組 略号「せむ」
木村洋子 甘美な女体責めのムードの中で、甘美な又最高の好さを持った開股吊りで大きく揺れる女体美。

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号「せえ」
木村洋子 瘦型の裸身にぎりぎり縄が喰い込む菱縄に更に滅茶苦茶に掛けられた雁字搦目の縄のきびしさ。

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号「せろ」
中河恵子 私をいじめて下さいという名札を前にぶら下げて緊縛の身を花と蛇フアンの前にさらすお嬢さん。

豆絞りに映える顔

大手札四枚一組 略号「せれ」
中河恵子 豆絞りの猿ぐつわをされて輝く瞳も美しい麗顔をしかめて縄の苦痛に耐える絶妙のポーズは最高。

裸身に悶える表情

大手札四枚一組 略号「せり」
中河恵子 全裸の肌にまといつく縄目に悶える美しい表情は、彼女の若々しい肢体の魅力と共に最高の逸品。

麗身の裏と表の綾

大手札四枚一組 略号「せと」
中河恵子 縛られた美しい裸身の正面と背面を二種の狙いで四葉のフオートに仕上げた恵子の魅力満点の作品。

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号「せて」
中河恵子 竹棒と猿轡と縄の三点によって責めつけられた女体が激しく反応して狂いまわる表情のアップ集。

豊満な全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「せゆ」
左近麻里子

両脚を竹の棒で固定された拘束女体は、更にその豊満さを誇示して女体縛りの魅力を發揮する。

陽光に映える裸身

大手札四枚一組 略号「せい」
左近麻里子 陽のさす六階の庭園に亀甲縛りにあった真白な女体が、その全裸の羞じらいをいじらしく晒らす。

縄で弄ぶ豊満女体

大手札四枚一組 略号「せた」
大島照代 身動きできぬ程厳しく拘束された女体は、その縄尻の操りによって面白くように猿らに揺れる。

後手縛りに狂泣く

大手札四枚一組 略号「せの」
大島照代 一分のすきもない嚴重な後手縛りの女体を思いのままにいたぶるその全裸の変化を楽しむ男の眼。

逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号「せね」
大島照代 後手縛りのまま豊満な臀部をむきだしのまま高々と掲げて、あらゆる打擲と暴虐にゆだねられる。

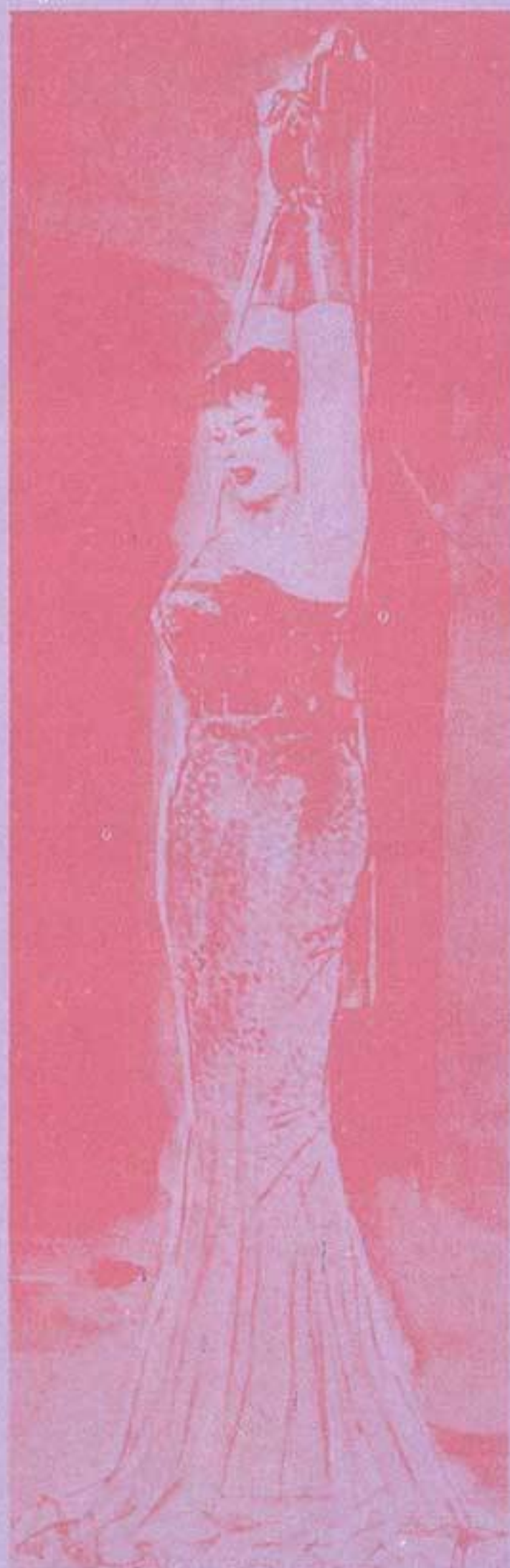
強烈縛りに喘ぐ顔

大手札四枚一組 略号「せに」
大島照代 仰向けにされた豊かな裸身に下敷きとなった後手が痛さに痺れ喰い込む二の腕の縄目がむごい。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

12月号 ¥ 350

新録クラブ
昭和四十二年十一月二十日印刷 昭和四十二年十二月一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号
毎月一回一日発行

☆鞭打ちの女王関谷富佐子夫人悦虐図

情で鞭打ちによる絶妙のポーズと表
最近益々円熟した関谷富佐子夫人の
く最近撮影した悦虐図決定版としてこ
に、関谷夫人悦虐図の真実なる表情
供にいたします。強烈なる実際の答
打ちに出る狙って、その真実なる表
の露出に狙って、その真実なる表
論、柔肌を喰って、その真実なる表
使用の方々に、その真実なる表
姿態と豊かな悦虐表情を十分に楽
しんで頂けるものと思ひます。

鞭打ち惑溺の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
き、簡単な縛られ方で身自由が思
い、きりもがき苦しむたいう夫
人の希望をかなえた惑溺の瞬間。

股裂き縛りで痛打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
股が厳しき縛り目によって、開いて太
く、股の間に縛り目によって、開いて太
容赦なく、柔肌に炸裂してゆく。

海老縛り鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
で、締めあげたロープをちぎれるま

かりに張りきらせて、あくなき革
鞭の暴虐の下に悶え苦しむ表情。

尻立縛強打に泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
て、この豊かなお尻を思いきりぶ
緊した、腰と突立てた、腰と突立てた、
れば、遂に女体は横倒しになる。

答は臀部に炸裂す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
ら、背を豊かに開き、左右に吊
をきしませて、全身はねじれる。

鞭に悶える鉄砲責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
で、右腕は鉄砲と呼ばれる縛り方
で、連結され、七転の苦悶を示す。

逆手吊で晒す臀部

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
は、その目標が、逆手に吊り上げられ、
は、その目標が、逆手に吊り上げられ、

鞭に縛りに夢心地

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
う、激しい鞭の洗い込む、夢心地を奪う。

鞭は美体にからむ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
に、手ごたえのある、重量感のある

狂う鞭に狂う夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
ど、狂った、狂った、狂った、狂った、

両手吊女体に強打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
を、右腕は鉄砲と呼ばれる縛り方
で、連結され、七転の苦悶を示す。

鉄砲縛り鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
を、右腕は鉄砲と呼ばれる縛り方
で、連結され、七転の苦悶を示す。

鞭打ち感泣の極致

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
夫人は感泣の表情をこれ以上出す

逆海老開股の鞭打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
に、逆海老開股の鞭打、逆海老開股の鞭打、

悶絶した関谷夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
と、反響を示さなく、悶絶した。

のけぞる悦虐表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
爪、先を立って、頭をふり、強打は、

責による法悦表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 略号 一〇〇円
う、苦痛を耐える表情が、これほど美

昭和四十二年十二月号

<第21巻第12号・通刊第234号>

奇譚クラブ 12月号 目次

◇奇クサロン.....編集部構成

○孤独の人生観.....沼川溪音 (9) ○サロンの楽我記.....第四十二回.....辻村隆
(10) ○短歌.....浜辺の狂宴.....山本羊子 (11) ○ひそかなる私の願い.....三好留美
(12) ○東京マゾ男 (ある落書).....山本羊子 (11) ○ひそかなる私の願い.....三好留美
査?.....○交身の哀欲.....編集部 (13) ○最近の緊縛映画.....細川英治 (14) ○幻幸三郎のイメ
ジ集.....○身より.....編集部 (16) ○モデル・叫喚地獄への誘い.....清野 (16) ○幸三郎のイメ
往来・岡辰彦様.....予世場良三 (17) ○〇〇〇〇.....志願の投書.....溜肉刑 (18) ○短信
○青空に想う様.....病院長三 (18) ○〇〇〇〇.....志願の投書.....溜肉刑 (18) ○短信
私.....萩原正史 (2019) ○〇〇〇〇.....志願の投書.....溜肉刑 (18) ○短信
理強.....原由貴子 (21) シャの革鞭.....芳野眉上 (21) ○〇〇〇〇.....志願の投書.....溜肉刑 (18) ○短信
画集.....〇蛇に与えられた花 (21)遠藤春一蛇.....考野眉上 (21) ○〇〇〇〇.....志願の投書.....溜肉刑 (18) ○短信
(23)〇羽鳥水江の独りごと.....憎縄の記.....と蛇倉に咲かされた花.....羽鳥水江 (24)

△本文▽

本誌自粛の徹底.....編集部 (25)
プレイ川柳考.....水沢登 (26)

稿談 性風俗資料入門.....斎藤夜居 (30)

「生活文化」と「新生」について.....能美積 (40)

マニアの落書々女と縄のある限り.....室井亜砂路 (46)

僕の憎まれぐち.....西条操 (56)

連載小説 心傷たむ遍歴 (仮釈放審査).....井上俊彦 (61)

幼児願望者の夢「ママとボク」.....辻村隆 (64)

SMカメラ・ハント△田宮恭介・寿子夫妻の巻.....馬場好男 (84)

「妻よ薔薇に似て」.....木場研次 (92)

私のマゾ雑記帳.....

奇ク論議「自信作」.....



懸賞入選「狂獣の宴」(中)……………	能美 積……………	(100)
贗作カメラ・ルポ 縄と汗とカメラと……………	蓑輪 三郎……………	(117)
裕姫戦記Ⅱ女四条暇……………	鶴見 和男……………	(120)
水中花(すいちゅうか)……………	芳野 眉美……………	(132)
エネマの想い出……………	吉村絵梨子……………	(138)
連載S小説 復讐／＼ガンベッタ……………	千葉 青鬼……………	(140)
告白続・フエチの海水浴……………	安田 隆夫……………	(147)
懸賞入選「私評論・優しい女たち」……………	木見 修……………	(150)
創作 残照の中で……………	河村 操……………	(164)
切腹研究夜話「愛と死の映像」……………	中康 弘通……………	(170)
鬼六談義Ⅱ好きな人達……………	団 鬼六……………	(174)
懸賞入選 告白・オムツ狂騒曲……………	川村 順子……………	(185)
女子レスリング人形……………	芦浦素舞夫……………	(188)
懸賞入選 今夏の回想……………	中河 恵子……………	(191)
赤いウエット・スーツ……………	中河 恵子……………	(191)
漫談千一夜物語……………	田代 俊夫……………	(194)
「薔薇と蜜蜂」(めぐりあい)……………	田代 俊夫……………	(194)
連載小説「花と蛇」(続篇第三十七回)……………	団 鬼六……………	(210)
娘相撲物語若き領主の試み……………	海野美津夫……………	(218)
論評「奇譚クラブ」を斬る……………	星野 直……………	(230)
ある夫婦プレイ 深夜の引廻し……………	早木 夢二……………	(236)
酷連処刑大会Ⅱ私は殺される……………	黒田 寿……………	(242)
読者通信……………	編集部選……………	(250)

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

逆ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けき)

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けく)

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けし)

浣腸後オシメ着用

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けこ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原、東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原、東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原、東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原、東浦 略号 (かち)

アーマス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原、東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)



孤独の人生観 沼川 溪 音

街の舗道に街路樹の落葉がかさ
かさ乾いた音を立てている晩秋
の日曜日。散歩に出た私は、ふと
小綺麗な書店に立ち寄ったとき、
何げなく手にした雑誌、それが本
誌に対する私のなりそめだった。
世界中でたった自分ひとりだけ
の奇妙な性癖だったと思っていた

孤独な私にとって、それは眼前に
光明の輝きを得たにも等しい感激
だった。同好の人たちがこんな
も沢山いるといった安堵の思いと
何か掌中の珠を奪われるにも似た
寂寥の二つを同時に味わう複雑な
心境で手をわななかせながら、そ
の雑誌を買い求めたのだった。
あれから何年経っただろうか。
読者通信欄で自分と同じ人達を見
つけたとき、その人達と共々膝を
つき合わせて掌を握りあい胸襟を
ひらいて語りあいたいという衝動
的な欲求にかられることがある。
一瞬の線香花火の燃えるにも似
たそのときの心のときめきは、孤
独な私の生活にうるおいを持たせ
生きる張りあいさえ持たせてく
れるのだった。

静かで落ち着いたこの城下町に
あれから幾度目かの秋を迎えよう
としている。始めて本誌を手にし
ることの出来た清潔な小書店は、
大きくなるでもなく小さくなるで
もなく、あの頃と少しも変わりな
くしつとりとしたたたずまいの中
にひっそりと店を開いている。
発売日がくると奥の一隅のいつ
もの場所に、淑やかな笑顔を見せ
て本誌が私を待っていてくれる。
私は、まるで熱愛する恋人にでも
逢ったように、年甲斐もなく胸を
ときめかして、その雑誌を懷中に
する。何度買い求めても、この妖
しい胸さわぎだけは消えない。
専門の経済書に混って、本誌は
毎月欠かさず私の座右に侍って、
孤独な私の心を慰めてくれる。読
書や執筆に倦きて、石畳の舗道を
歩くとき、嘗つては城の濠に水を
曳くため掘ったという疏水の澄み
きった水がさらさらと岸辺を洗っ
ているのが、淋しい私の心に生あ
るものの愉しさを教えてくれる。
元来、私は厭人癖なのかもしれ
ない。大学の文科を卒えて教壇に
立ったこともあったが、わずらわ
しい対人関係に耐えかねて三年も
経たないうちにやめてしまった。
それ以来、宮仕えというものを
したことがない。本を読むことと
文を書くことが、いつとはなしに
私の仕事のようなものになってし
まった。私の厭人癖は益々昂じて
私を孤独に追いやってしまった。
うつろう自然の移り変わりが、い
つとはなしに私の友になってしま
い方丈記や徒然草、或は平家物語
に見られる無常感が、私をして死
を憧れさせたこともあった。
そんなとき、私の目の前に彗星
の如く現われたのが本誌だった。

こんな雑誌が、この世の中に現
実にあったのか、その驚きは私の
今までの人生に大きな衝撃を与え
たといってよかった。孤独感は次
第にうすらぎ、自然ばかりではな
く、人をも温かく愛したいという
気持がふつふつと湧き上ってきた
のは不思議な心の変化だった。
人を厭いながらも人恋しさに泣
く孤独な心の中に、明るく曙光が
きざしたのは人生七十年の半ばを
過ぎてからだった。何にも増して
この雑誌が毎月欠かさず地道に、
しかも確実に発刊されているとい
うことが、私の孤独なそれでいて
傷つき易い繊細な神経をやわらか
くもみほぐしてくれた。
浮草のようにはなく消え去つ
たり、或は又急激に発展を遂げた
りしたとしたら、私の孤独な神経
はとてつもないゆけなかつただろ
うと思う。私の生のある限り、こ
の雑誌の続くかぎり、私は毎月本
誌の愛読を欠かさないだろう。
今年も又、私の大好きな秋がや
ってきた。次第に陽足が短くなっ
て、そこはかとなく人の世の淋し
さを感じる今日この頃。私は孤独
のほろ苦い味を噛みしめながら灯
影の下でペンを走らせている。本
誌の永遠の発展を心に念じつつ。



(第四十二回)

辻村 隆

京都の大宮劇場へ出演する筈の予定であった秋山夫妻が、秋山美智夫氏の舞台での腕の負傷で突然休演し、九月の初旬、夫婦揃って私宅を訪問された。つもる話もいろいろと弾み、その夜は一泊されたが、私の対談とカメラ・ハントが予想以上に反響があつて、各地でファンが訪れて、力強いアドバースを受けて嬉しかったと言っておられた。大阪公演中の東洋劇場でも、開演前のアナウンスで、

中してしまった。秋山夫妻にとつては、ファンの声援が何より嬉しいといつておられたから、諸賢も御覧の節は何かと御後援してあげて下さい。九月下旬、岡山。十月始めから再び大阪へ戻つて、大晃ミュージックで公演の予定。彼等御夫妻の、御健斗を祈るや切である。

× × ×
フーテン族は関東の専売かと思つていたら、大阪にも大分フーテン族を見かける様になった。悪友のSが好きな男で、一度フーテン娘をハントしようじゃないかと言ひ出し、年甲斐もなく誘ひ出されて、大阪梅田界限をうろつく仕儀になった。彼等の溜り場のスナックバーなど、大いに私の苦手とする処だが、深夜族に混つて、サングラスなど掛け、努めて派手な若づくりの服装で、喧噪と汚濁の中にもぐり込んだ。午前三時、Sがやっと一人の娘を掴まえ、三人で

安ホテルにもぐり込んだが、十九才で広島から半年前上阪した娘だった。カメラなど持合さなかったで、その夜は娘を挟んで、悪の愉しみに耽つたが、ハントするつもりで三日後、固く約束して堂山町で待合させたなら、ものの見事にスッポカされた。フーテン娘を相手に、その言葉を信用して、のこ出掛けていつた自分がおかしく、約束なんかくそくらえといった処がフーテン娘なんだろう。世代の相違か、貞操の觀念などんで持合せていない。あの年令で結構自分自身愉しんでいるのだから恐れ入る。所詮、フーテン娘のカメラ・ハントは私の柄に合わない。あきらめた方がよさそうである。

× × ×
山本一章氏に川越美佐子さんを紹介してもらつた。早速プレイフトを撮つたが、山本氏の二番煎じになるので今回は遠慮することにした。山本一章と、後になり先になり、ハントとルポが交錯してややこしい事になった。執れ又、私のハントのネタが切れた時、彼女を呼出して、新しい観点から私流に書く日もあろうが、今の所大分ハントした余裕があるので次

＜短 歌＞

浜辺の狂宴

高村 初子

砂浜の必死のもだえたちまちにおしたおされてからみゆく縄

人かげははげしくもつれ砂浜の悲鳴はやがて猿ぐつわに消ゆ

助け呼ぶ声は空しく草むらにねじふせられて縄のかかりぬ

たちまちに手首はひしと括られて砂にもだゆる水着のあわれ

夜の海一人泳ぎて上りたる砂浜に待つけどものの群れ

砂浜に悲鳴はたえて括られし水着に砂の縄目あざやか

引き裂きし水着の下の白肌に粗き砂の目あざのごとつく

美しき人魚は今や陸の上むくつけき手に弄ばれつ

のびやかな小麦の肌は今にはや砂にまみれて縄にあえぎぬ

の機会に譲ることにした。

私のカメラ・ハントも、気がむくと三日にあげず凝るかわり、仕事多忙やうるさくなると全然気が乗らない。ハントしたい気持が周期的に拾げてくるのだ。女性が生理期に昂揚する様に、男にもそんな生理期があるのだろうか。女性のメンスに対して、男性のオンスといった時期が――。

カメラ・ハントの時期に、かなりフィクションのあることを、そんな点で御諒承下さい。

漫画読本十月号を読んでいた杉浦幸雄氏の漫画『ウワーキ氏のめんくい録、ムチの巻』で、堂々

「衆田満氏への直言」

一言居士

「十一月号「奇クサロン」トップの文章について

『読む文献誌』とは、大義名分ではない。そうしなければ発行がむずかしいのだ。大方は、見る雑誌を望んでいる。その不平を、むしろ「内容充実」ということに賭けて懸命に編集部も投稿者もがんばっているのだ。その実は、団鬼六氏の『花と蛇』辻村隆氏の『カメラ・ハント』山本章氏の『カメ

とSMを扱っているのには驚いた。漫画を再録出来ないのは残念だが、コマ通りの文を説明するとウワーキ氏が①カレンなオトメをくどく②オタカラもチラつかせる③やっとなO・K④ホテルへ⑤（脱がせる図）このひと時がなんともいえない⑥突如形勢逆転・あッなにをするッ（ここで娘がウワーキ氏のハダカの両手をうしろにねじ上げている図）⑦意外！彼女がサジストとは（ハダカで後手に縛られてへたばっているウワーキ氏の腰へ、ハダカの娘が傲然と左足をのせて踏みつけている図）⑧さらに意外！おれがマゾヒストとは（ウワーキ氏の顔に、娘が背面で

大きいヒップをデンと据えている図）⑨ピシーピシー・ヒーヒー（ウワーキ氏娘に鞭打たれた図）⑩余は満足であるぞよ（男女逆さの姿勢で伸びている図）⑪お送りしましょ（車で送る図）⑫ガツン・追突くらう⑬ムチウチ症とはよくよくのご縁ね⑭もひとつおまけに・このウワーキモノめーッ（女房ツノを生やして亭主の尻を叩く図）以上（）内は私の註であるがSMプレイも有名になったものである。おひまの方は、マントク10月号の58ページをどこかでお立読み下さい。ちなみにマントク10月号思わず買ったのは、表紙が梨花悠紀子そっくりなんです。

それとも、かくも「発行が続けられる」こと、そして制約下一杯の「内容充実」に近づく努力を喜ぶことが必要か。私は衆田大先輩にあえて問う。本文巻頭の「本誌自粛の徹底」を前提として、旧号に劣らぬ編集とは如何なる方法ありや？ 本堂にK誌を愛するならば愛着の念を捧げる前に悲哀より、建設的な発言を期待したい。あとは投稿者、大方読者、及び衆田大先輩の言を聞くのみ。

【短歌】「含羞」

山本羊子

おぞましき責めを待つべくしらじらとわが双丘を陽に曝し臥す

台風の余波ある樹々のさざめきよアヌス検温あられもあらず

やわらかき襦袢の上に縛られし身を横たえて浣腸を待つ

犬よりもみじめに這いて浣腸の前のアヌスをつぶさに診らる

縛られし身はみじろぎもかなわずてただ仰ぎみるイルリガートル

秋すでに深みゆくかも浣腸の液ひややかに腹にしみゆく

洩らさじと祈れど遂にきわまりて便にまじりてガスさえ洩るも

身悶えつ耐えむとするに耐えがたきもの溢れいず襦袢のなかに

汚れたるアヌス洗うと襦袢とりシャワーの下に尻挙げて這う

ひそかなる私の願い

名古屋市長 三好留美



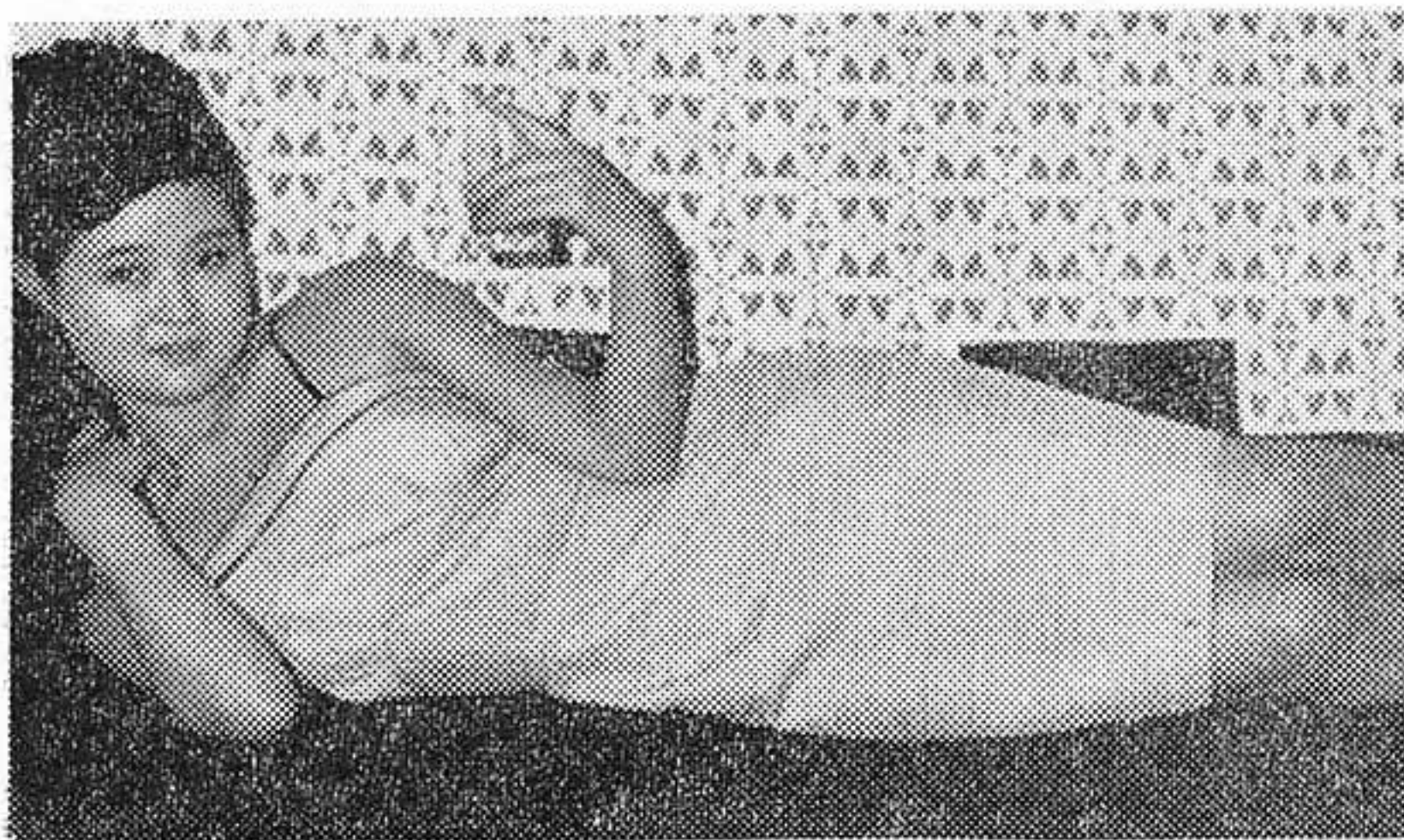
二十一才のOLです。昨年『コレクター』というイギリス映画を見てから、私も収集されて、飼育されてみたい気持ちでいっぱいです。最後にしめ殺されるのはイヤですけど、これを演技のプレイとしてなさって下さる方があれば私のひそかなお願いなのです。

高校生時代から本を読むのが好きで、自分でも同人雑誌に短篇など投稿したことありますが、昭和四十一年の八月号のM誌に一度だけ掲載されました。先日、古本を漁りにいって奇クを何気なくとり上げ、内容を見て本当にびっくりしました。私と同じような願望の

方もずいぶん多いですね。サングラスをかけてドキドキしながら、今年の八、九月号の二冊を買い求め、夜みんなが寝しずまっから、貪るように読み耽りまして。そして私自体、早くよりこんな願いをもっていたことに気付いたのです。特に『花と蛇』と『カメラ・ハント』が私の好みにピッタリです。

最近、うつしてもらった写真二枚、同封いたしました。誌上に発表しても構いません。絶対にプライバシーの秘密を守る紳士の方に、収集されてみたく思います。生れて始めての大胆なプロポーズですが、近頃は毎夜、縛られたり、いろいろと恥ずかしい仕打をうけている夢ばかり見ます。きつく縛られたりムチ打ちを受けることはとても未だ辛抱出来ないと思います。が、ぼつぼつと飼育して下さい。写真でお分りと思いますが、容貌の方はまあまあと自負しております。ボーイフレンド四、五人おりますが、みな檜山文枝と梓みちよを足して二で割った

ようだと申します。身長一六〇センチ、体重五一キロです。バストやヒップはご想像にまかせますが、大きい方です。辻村先生、私をカメラ・ハントにいかがでしょう。夢と実際とは違うかも知れませんが、今の私の願いです。



東京マゾ男

(ある落書)

早 木 夢 二

これは、私が書いたものではない。たまたま、ある公衆便所で拾った落書である。

このごろは私鉄の駅がどんどん改築されて新しくなって、それに随分小綺麗な公衆便所が見られるようになって

たが、それが出来ると、忽ち、わつと群がるように、おびただしい『人間性の発露』で壁を塗りつぶして行く落書族のエネルギーには恐れ入るよりほかはない。
「Ⅱ女性のサディストの方にお願



僕のイメージ画集

「口腔検査？」

春川ナミオ

私は十八才の大学生で、生来のマゾヒストです。女性の残酷な責めの前に完全に屈服し、ドレイのように使われたと思います。

何とぞ、貴女のムチで私をコテコテンにいじめ、のびたところを尻敷き、座ぶとん代り、便器の代用などあらゆること、そしてはずかしめ、ストレス解消のお役に立てて下さい。ある時は踏んづけ蹴とばし顔の上に腰かけて女王の快感を味わって下さい。

お礼を、月二万円さし上げますから、毎週逢って下さい。まともな……など望みません。但し十七―十九才の方で豊満美女の方に限ります。TELを書いて下さい。

右側の絵をごらん下さい。このようにいじめられたいのです。

東京マゾ男

右側には、なるほど、素っ裸の男が馬のり、ムチ打ち、顔のふんづけなどの責めにかけられている絵？ がある。

後手に縛られた男が、顔をふんづけられている絵は、正に豊満美女の臀部が克明に描いてあって、「ここで気絶！」などと注が入っている。

流石に電話番号はまだ書かれていないようだ。「風俗奇譚」「サ

スペンスマガジン」をたくさん持ってあります」と傍らに書いてある。

ちょっと纏まりすぎて、何か作文めいた感じがするし、大学生のくせに、月二万円のお礼など大それたもんだと思われる。十七―十九才の豊満美女というのも虫が良いが、これは若い人としては当然の願いかも知れない。

「まともな……など望みません」はちょっと泣かせるが、これで見ると、どうやらこの若いマゾヒスト、もう既にまともな……を知っているのか知ら……。

九月初旬の残暑きびしい頃だから、公衆便所の中で、これだけのものを読むのは仲々骨が折れた。汗が全身にびっしょりと出て参った。

何やかやと試みてみたものの、この狭い息苦しい中で、これだけの労作をものした東京マゾ男に、同じマゾヒストとして、ある意味に於ては、やはり相当の敬意を表しなければなるまい。

誰か奇特な豊満美女が電話番号を書いてやることを祈っている。又その内、見届けに行かなくてはならない。



映画通信

最近の

緊縛映画

細川英治

「非行少女の群れ」は、父親に反抗したみどりという名前の小娘が一人、東京に家出してバーのホステスをしている内に客の川辺伸次というヤクザと知り合い、うまくだまされて伸次に犯されてしまいます。その日からみどりのヒモになった伸次はみどりに売春を強要し、コールガールにおとし入れてしまう。その生活に耐えきれなくなつて逃げたみどりは、ヤクザの組長や幹部につかまりリンチをうける。

そのリンチが物凄く、天井から逆さ吊りにして、長時間放置したり、鞭打ったり惨々に責めなぶるシーンがある。いきなり娘を押さえつけるパンティを剥ぎとって

口に押し込み、スカートをめくり上げて頭の上で縛りかたくむすぶと、ヤクザ十数人でけだもののように輪姦をするところがあるが、このシーンは、とても凄じく、小娘のうめき声が悲痛に流れるところなど、とても好い出来であった。また、椅子に荒縄で縛り上げられて火のついたローソクであり責めにされるシーンも、思わず生つばが出る思いであった。

「コレラの城」これは松竹映画で主演は丹波哲郎。タイトル・バックから、四人の丸裸の女が荒縄でお寺のような高い天井から一とまとめにして三本の縄で吊り下げられ、爪先立って右に左にゆらゆらと不安定にゆれ動いている場面が

写し出され、十分間ぐらいのキャスト説明の終るまで、長々と続くのである。

なにしろ、豊富な四人の裸女が背中を見せて一つにぶら下げられ爪先立って、ゆらゆらとゆれ動くさまは、何ともいえない色気があって、じつに壮観であった。

一人の女の背には、いもりの入墨がされており、三人共よく張りきった身体をしていて、ゆれ動くたびに女達の肩やプリプリとした双尻が小さくみよくぶつかり合うのがよく、その肉感的な音が見ている私の耳に小さく聞こえるようであった。私は、その場面だけを見るのに三回も映画館に通ったぐらいであった。

このほか肉体派、宝みつ子の愛欲シーンで、彼女の豊かな乳房を南原宏治に両手でギュウとつかませたり、清純派の代表、鰐淵晴子が丹波哲郎に荒れた物置小屋で天井から逆さ吊りに責められる場面もあった。

また、町娘をなぐる蹴るのナブリ殺しにしたり、S的要素の多い場面が、かなりあった。

「異常者」では女を縛り上げ、その豊かな女体全身にバターを塗りたくって番犬になめらせたあげく

犬に犯させるシーンが見ものであった。その他、若妻が椅子に雁字搦目に縛られ、椅子の足に固定されることもある。

「刑事」(東映作品)では、静かな公園を散歩している若いアベックを暴漢が襲い、男の方を拳銃の台尻でなぐりつけ失神させて、女の方だけさらって縛りつけ犯すシーンが見るべきところがあった。

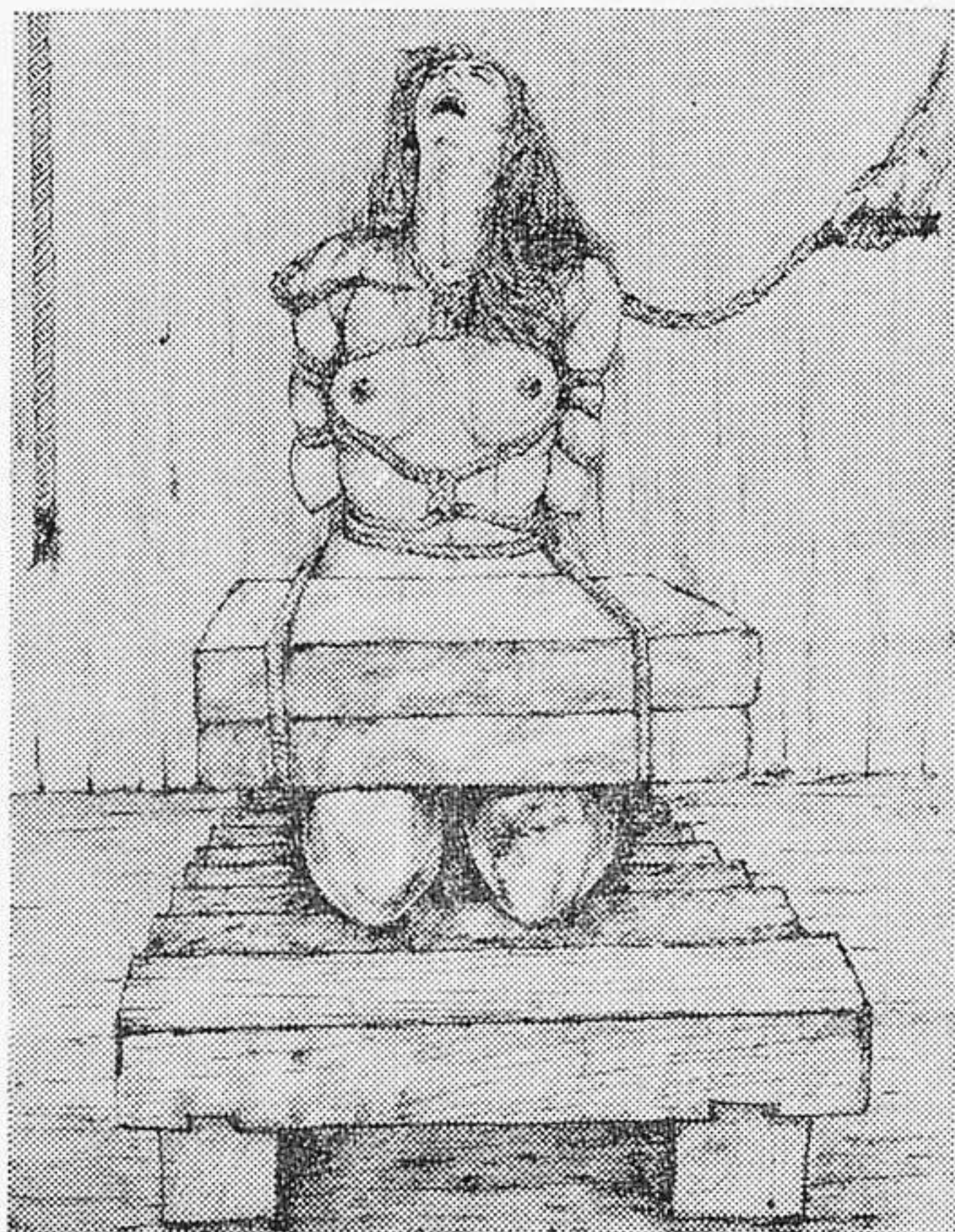
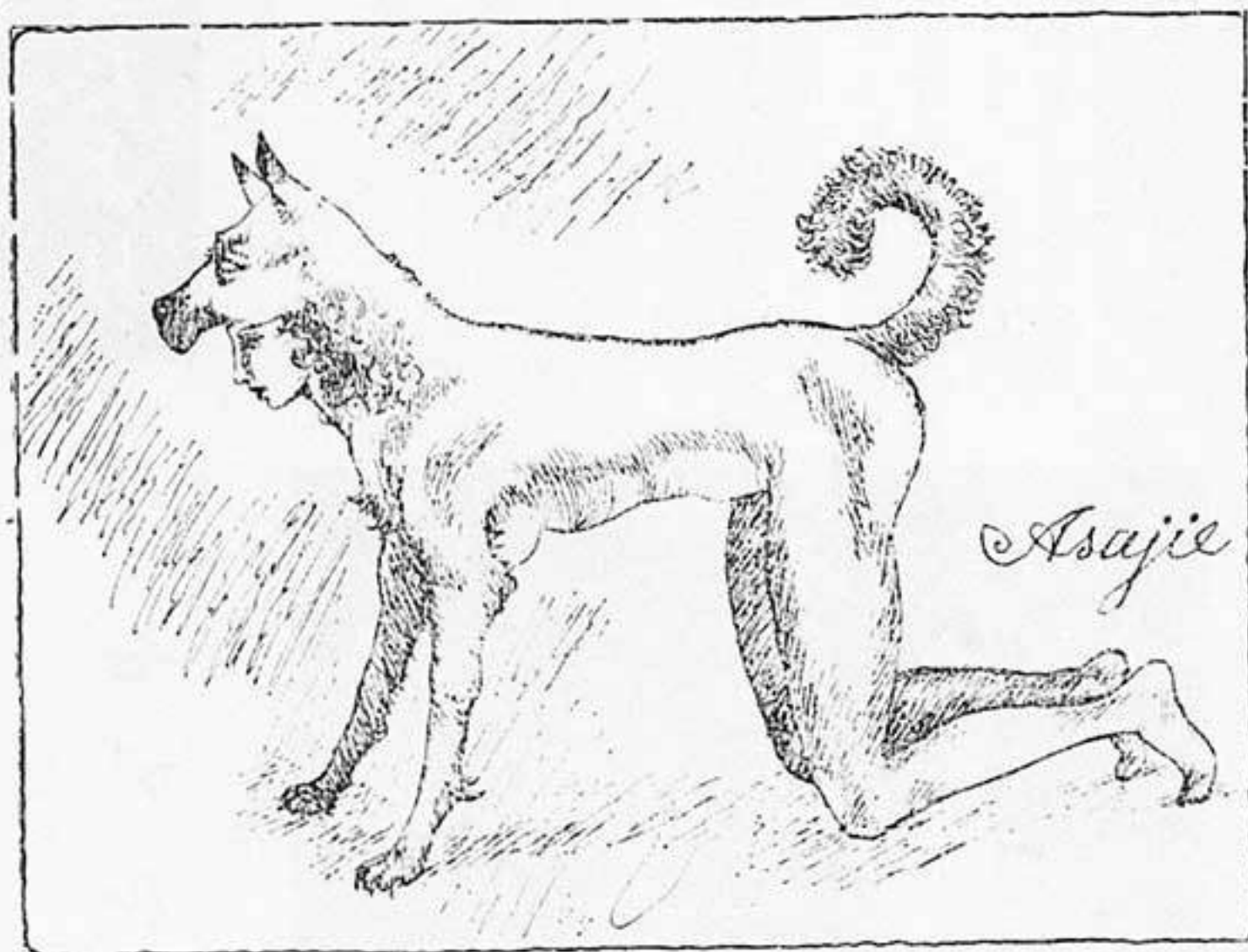
「眠狂四郎女妖剣」(大映作品)

では、藤村志保が初めてヌードになつて、けがれのない処女の肉体を惜げもなくさらす。どうしてもキリスト教を信じて、キリスト教にはやましい心はないと叫び続ける牢獄に捕われた外人宣教師に、キリスト教にも悪人や浅ましい性欲に交りはないというところを見せるために、役人がその実験のモルモットとして、宣教師の入っている牢屋の中に全裸の藤村志保をむりやりに押し込む。はじめは目をつぶって藤村の裸体を見ないようにつとめていた宣教師も、つきあがて来る人間の本能に遂にたまらず、その女体に抱きついてしまう。いけにえのため、しんみょうにその全裸の身体を外人宣教師に抱かし身をゆだねる女。

残酷場面あり、お色気シーンも

僕のイメージ画集

『変身の哀歓』 室井亜砂路



豊富な作品であった。

「網の中の暴行」若松プロ作品、金髪の豊満な美女が両手両足を別々に縛られて、網の上で犯されるところが、かなり強烈であった。「集団脱獄」(昭映フィルムズのギリシャ映画)夜の女の矯正収容所から脱走した十一人の夜の女の物語で、その収容所から逃げてエー

ゲ海のある小島に逃げのびるのであるが、無人島と思った島に元ナチ親衛隊くずれの七人の荒くれ男たちが待ちかまえていた。男達はユダヤ人から奪った宝石や金を島の何処に埋めたのを知って、それを掘り出しにきている。女達は荒くれ男達につかまり、翌日からセックスと宝石さがしの穴ほりの奴

隷にされてしまう。男達の見ている前で十一人の女達がパンティだけの裸体で強制的に穴ほりするところに何ともいえぬ色気があり、汗で光る女体が、なまめかしかった。また、女達が逃れようとしてつかまり、なぐる蹴るのリンチにあたり集団強姦のシーンが、どの映画よりも凄じかった。

「逆情」この映画では、川の中での暴行シーンが、とても強烈で迫力がある。ここに述べた以外にも数多く緊縛シーンやSM要素の多い映画がゾクゾク出来ており、我々SMに興味を持っているSファンにサービスしてくれるのは、ほんとうに嬉しいかぎりである。(スチール・「変態」の一場面)

『叫喚地獄への誘い』

幻 幸 三 郎

編集部だより

○故郷へ帰られた中河恵子さんからの最近の便りによると目下妊娠五カ月の由。未来の夫君となるボーイフレンド氏の承諾も得ているので必ず妊婦のモデルになってくれるとのこと。妊婦ファンは大いに期待下さっていると思う。

○昨年は丙午で出産を制限した余波か今年はやたらと妊婦の姿が目につく。未曾有の出産ブームにあやかって恵子さんの妊婦緊縛フォトが撮影されることになると貴重な資料がまた増えることになる。なお因に恵子さんの夫君とられる協力的な方は本誌の愛読者である。

○九月上旬、待望の団鬼六・辻村隆二氏の対談を実施した。折よく左近麻里子嬢も同行したので面白いフォトも沢山撮れた。いずれ辻村隆氏の手で記事にされることと思うので次号の巻頭を飾れるだろう。団氏の「鬼六談義」でも言及されるかも知れない。

○本格的なSM作家を志すという二十四才になる独身女性から百万円懸賞応募作品『白い玩具』を寄せられてきた。文章は洗練されて

モデル志願の投書



清野勝子

撮影がはじまると、私はもう夢中でした。いったい自分がいま何をやっているのか、どんな部分をうつされているのか、考える余裕さえありません。しかも、そのポーズは、私がはじめに想像していたよりも、はるかにみだらで、露骨なものだったようです。

私は全身がカーツとしてしまつて、反抗することさえできません

でしたけれど、彼らは次々に私のからだに手をかけてはポーズを直したり、あるときには縄で縛ったりします。そして色々な小道具で私の全身をなさけ容赦なく、そのすみずみまで責め虐むのです。

縛られた肉体の苦痛というより精神的なショックは何と云ってよいかかわからないほど激しいものであったことはたしかです。

こんな状態ですから、私自身とてもそれ以上普通の神経でいられる筈ありません。いつのまにか私は歯を喰いしぼり、冷汗を首筋から胸のあたりまでタラタラと流しながら声にならないうめき声をあげていました。それは聞く人によつては、男の欲望の犠牲にされた自分をうらむようにも聞えたと思いますし、ある人々は反対に女としてあやしい快楽にふるえる喜びのうめきとも聞えたことでしょう。私自身、それがどちらだったのかと問われましても、両方だったとお答えすることができないのです。でも、私がそのとき知らず知らずの間に洩してしまった異様な嬌声は、グループの人たちにとっては、思いがけずかえって気に入られた様子でした。

こうして、それ以来、私はこの秘密クラブ専属のアルバイト・モデルとして収入も毎月三万円近く得ることができるようになったのです。私は本年十九才、春に母親をなくして生活が苦しくなったのです。そこで友達がよい働き口があるからとすすめてくれて秘密クラブを紹介して下さったのです。

お仕事は週に三度あります。会員はみんな45才から50才ぐらいの

いないが内容は面白かった。戸川昌子ばりの一人三役を演じてくれたら、ファンの熱狂的な支持を受けると思うのだが。

○「花と蛇」の前篇第一回から読みたいというマニアの方が多いのだが連載していた本誌もいち早く売切れとなり前篇の臨時増刊も売切れて大変ご迷惑をかけていた。

今回作者団氏の諒解を得たので、前篇続篇を一挙に収録したものを刊行したいと思ひ、企画を進めている。来月中旬に発売の運びとなるかもしれない。

○絶妙の迫真的な表情によって数多くのファンから神秘にも似た憧憬を捧げられていた関谷富佐子夫人は、ご主人の理解ある支持によって、再びその麗姿を私達の前に現わして下さった。鞭打ちの女王のご多幸を祈ることや切。

○懸賞応募作品は創作、告白とも日を追うて増加、机上に山積する状態なのは嬉しい。これらの中から珠玉の作品が現われて満天下の愛読者をうならせるようになってほしいと思う。これはと思うものは長短に拘らず逃さず掲載し、その労に報ゆる賞金を提したいと考えているので、是非力作をお寄せいただきたい。

短 信 往 来

麻生 保

岡 辰彦様

八月号のサロンにのった「女子乗馬考」を嬉しく拝見しました。

今から四十年前といえ、わが国の資本主義が最もはなやかな時代でした。麻生は勿論知っていたでしょう。またひそかに憧れている時代なのです。貴方が牛込の乗馬クラブの柵にもたれて眺めた華族富豪の令嬢たちは、彼女等の一日のお小づかいが同年輩の女工の一月の給料よりもまだ多いなどということを知る必要のない時代だったのです。彼女等が本能的に身につけていた、あの優雅な嬌慢などというものは、戦後のお安民民主教育を受けた現代女性には

人たちがばかりです。そこで奇く読んでみなさいといつて渡されたのです。はじめは何んだか変な本だなあと思つていましたが、だんだん読んでいくうちに興味がわいてきました。

先日奇く九月号を持ってきて山本一章さんの「左近麻里子」を見せて、今日はこれをやろうと、五人がかりで私を責めるのです。その人たちがみんな一生懸命で目を輝やかせて私を縛ったりするのでも私も少しづつ興味を抱くようになってきました。私はこの道からのがれることはできなくなりました。おかげで身体は元気です。今

もとむべくありません。

そのよき時代の美しきアマゾンたちの思い出を、もっと書いて下さいませんか。ご健筆をいのります。(なお、当時の映画女優では酒井米子がよく乗馬をし、またいささかフラゲロマニアの傾向があったとか耳にしましたが……)

× × ×

馬場好男様

八月号の「雑記帳」に紹介のあった朝雲照代の乗馬姿のステイールを誌上で公開して下さいませんか? デコちゃんの一馬は、麻生にはゼンゼン興味なし。貧農の娘が、モンペ姿で馬に乗るなんてキライ。

昭和三十三年ごろだったと思いますが「花嫁の抵抗」と「花嫁立候補」に女性の乗馬シーンが沢山ありましたね。後者はたしか八潮悠子と川崎敬三の主演でした。

日責められた後は何か気持がすうっとしました。勉強にもみが入るのです。山本さんと一度プレーしてみたいと思っています。誰もしたことのないことをしてもらいたいと思います。読者の方々に喜んでもらえれば私も満足です。

(東京都北区・清野勝子)

江川詩二様

十月号の「読物紡唄」を興味深く拝見いたしました。「二十五番目の鞭打」は、戦後間もない頃、たしか「文芸春秋」に出ていたように記憶します。もっともこの場合は、あらすじだけが何かのついでに引用されていたに過ぎませんが、年少の頃に、強烈な印象を受け、いつか全文をよみたいものと思つておりました。おっしゃる通り、この頃マゾッホの作品があり、まり話題にならないのは何とも淋しい限りですね。いろいろとお教えいただきたく思います。

× × ×

前述の岡氏のエッセイにそえられたカットがたいへんに美しく、しかも、よく雰囲気伝えています。この画家先生にもっともっと描いていただきたいものです。



いつの頃から私はブルマーに魅入られるようになったのか。はじめは女学生の黒の運動ブルマーを見て、ぞくぞくする喜びにふけっ

作った自分。私は四十才の会社員。私の趣味はブルマーを工夫して作って、自分で穿いて楽しむこと。妻もない一人暮らしの私の夜の時間は、私の夢がはばたいてゆくときです。

黒の木綿のブルマー……これが最もオーソドックスなスタイル。

どこの運動具店にもあるもの。最近では形も三種類にふえて、昔式のぶかぶかのヒダのついたもの、ニチボー貝塚式のわりにぴったりと腰の線に合ったもの、パンティに似てもっと体にぴったり合

――告白――

ブルマーマニヤ

の溜息

並原新一

青空に想う

予世場良三

ったものがあります。しかし太腿にぴったりくいこむゴムと、そこから自然に流れ出るヒダの感じがブルマーの最高の魅力でして、水着のようなものはダメ。私はとくにニチボー型を愛用しています。秋ともなれば運動会のシーズンであちこちの中学や高校のグラウンドで、太腿もあらわな形のいいブルマーにお目にかかれます。ああ、あのごわごわの黒いブルマーの下に、みずみずしい女生徒の肌が汗ばんでいる！

紺のブルマー（サージ）……東京方面ではわりに紺のサージのブルマーがよく用いられています。白い肌にうつる紺色もまた格別の味です。厚ぼったくて余りだぶつかない程度がいい。白のウールのブルマー……これはブローンス銃声一発。スタート！

走った、拾った、開いた。観覧席へ走り寄る。紙片をかざして「十九才、女の方、願います。十九才の女……。アッ、あなた、済みません。ではお願いし……」

まず、を省いて、パートナーの手を引き、再びグラウンドへ。走った、拾った、開いた。娘さんに見せて、またもや観覧席へ。

「赤い色の腰ひもを……」私よりよく通る声で、娘さんが頼んでくれる。和服の奥さんがわざわざ帯の下から抜いてくれた。

「ありが……」とう、を省いてグラウンドへ。娘さんの足が私より早く引張られる恰好で、第三課題の紙片を拾う。開く、見せる。彼女の白い豊頬がサッと紅潮する。

私はテレル。彼女は思い切ったように蹲って両手を背に組む。急がされて腰ひもを持ち直す。観客の眼が痛い程に感じられる。

「高手小手縛りに首縄ですナ。フーム、少し緩いようだが……」審判が、紙片と照し合せて、旗

ではありません。れっきとした運動用ブルマーです。かつて陸上競技場でトップを走っていた高校生が穿いているのを見て目がさめるようでした。私も二着もっていません。一着は相当に穿きこんで、洗っても落ちにくいほどの汚れも残

っています。

ブルマーを穿くにも下のファンデーションが大切で、私はふうめんスパンドを使用、その上にいろいろなパンティ（もちろん女性用）を穿き、その上にブルマーをつけます。ときにはガーターも



最近の縛りシーン

「肉刑」

と

「処女残酷」

東山映史

最近の縛り映画では、美矢かほる主演の「肉刑」それに、加山恵子の「処女残酷」が新旧の売春婦ものとして残酷なリンチ場面があり、楽しませてくれた。

「肉刑」では、ファースト・シーンから「ウムウム」うめく美女のうめき声を聞かせ、カラーで、全裸にむかれた美矢かほるが手足を大の字に床の上にはりつけられ、ムチ打たれている。それを冷笑しながら眺めているのが、グラマー

の松井康子。美矢かほるは松井康子がマダムのコール・ガール。脱出を試みたが捕えられてリンチにあっているシーンである。ムチ打たれながらも悲鳴をあげている。「十分骨身にこたえるようにいじめておやり」

その度にムチ打たれる美矢。そして、次のシーンでは、後手に緊縛されて向う向きに坐っている。一寸このらであぐら縛りがほしいところだった。

用います。コルセットをしめることもありますが、その代りに、総ゴム式の女学生用コルセットという、簡便型をよくつかいます。奇クにももっとどしどしブルマーの絵や写真がのることを希望しています。

松井康子との格闘。女斗美ファインにはきんせんおくあたわざるシーン。そして松井の顔を傷つけて逃走し、故郷の漁村に帰る。そこへ追跡してきた松井らヤクザ連。遂に発見され、美矢と恋人の妹まで柱に緊縛される。頭上縛りで、柱に緊縛された美矢。その前で犯されようとする義妹。息つく間もない美女の緊縛シーンは十分堪能させてくれた。

次の「処女残酷」は「舟遊女」といわれる離れ小島の海員相手の売笑婦の生態を描く。

旅館の娘でありながら宿の番頭に無理に犯され、連れ出され、売笑婦に売り飛ばされた加山恵子。「夜開く花」など古風な遊女向きの顔に出来ている加山恵子である。その島へ連れてこられた時、恋人と逃走しようとして連れ戻された遊女のリンチ場面にあう。このシーンがすさまじい。

をくれる。無念、二等。でも娘はニッコリと、縛られたまま私に寄り添い、共に授賞席へ……。

こんな運動会の一ツや二ツあっても良い……ことはないだろうナア、やはり。空は青いが、どうにかなったかな、私のアタマが……。

「木馬責め」のように、醤油タルの上に渡した二本の丸太棒の上に跨がされた女。そして、足には重いつけもの石がぶら下げられる。首にも重い石が……。そして、棒でなぐられる。「ヒイヒイ」という悲鳴。そして最後に、むき出された乳房に焼けごてを当てられる。ジューンと煙をあげる。そして、彼女は狂女になる。

最後に、恋人に会いに行こうとする加山が、ボスの女房になれと迫られ、拒絶すると「納屋にほうりこんで置け」と緊縛される。それが、手足を背中縛り上げられ、逆エビというすさまじさ。友人の遊女に助けられるが、さすがに「拷問」などで責めに強い彼女だけにうまいものである。

他に「女体蒸発」で、ベッドの上で縛られて「電気責め」に遭ったり、自動車の中で緊縛されたり変った緊縛シーンを見せる。

病 院 に て

吉 田 京 子

「浣腸のことなど」

私がはじめて浣腸を目撃したのは、高校一年の冬、或る外科病院のベッドの上でした。隣のベッドの中学生の少年が浣腸されたのです。むきだしにされたお尻が、まるで茹卵のように艶があつて真っ白なのを、美しいなあとおもいました。

薬を注入されるあいだは大人しかった少年が、やがて便器を示されると同時に、しくしく泣きはじめたのを憶えています。

ベッドに臥たままでする排泄というのは、その習慣になれるまでは想像以上に困難なことです。不測の交通事故による突然の入院という生活環境の激変に、永い間私の生理機能は容易に順応することができませんでした。ですからお小水すら自力で排出することができなくて入院の第一日から導尿という忌わしい処置をうけねばなりませんでした。

アルコールに浸したガーゼのひやりとした感触と、カテーテルのむず痒い感触、そして自らの意識にかかわりなく、他愛もなく溢れ

出てしまう多量の尿——それは自分の肉体を、もう人間の機能を喪った、血と肉と排泄物を詰めた袋みたいなものだと思わせるに充分でした。浣腸をされたのは、それから三日後のことでした。

その日は夜明け前からおなか出張ってきて、すごく苦しかったのです。朝食も殆ど食べられず、少し食べたものもすぐに吐いてしまいました。（それにしても病院の給食って、どうしてあんなに不味いのでしょうか。残飯屋の手を経て近郊の豚を肥らすために食費を払っているみたいなのです）

左鎖骨骨折、肋骨挫傷で上半身を動かすことのできない私は、少年のように側臥の姿勢をとることができず、赤ちゃんがオシメをあてられるときのように看護婦さんに両足を抱えられながら、その間に別の看護婦さんが、硬い浣腸器を使って薬を注入するのでした。そのあられもない光景をひそかに盗み見している少年の目を感じながら、耐えていました。

苦しい排泄が終わった後、ふと隣

奇クと私

萩 原 正

奇クの11月号を机の左端において書いています。今日も又発売と同じ時に買った。今月も又買ってしまつた。僕の心の中には、こんな本は人間の心を歪めるかも知れない。だからこんな本は読んではいけませんという心がある。いつも奇クからは手をひこうと考えている。しかし、いつのまにか、奇クの数が二十冊にもなっている。僕は奇クいやSMということに本当は嫌悪を感じている。これは僕の性来の潔癖性からかもしれない。人は皆平均的見地からそのものを価値づけてしまう。つまり世の中で価値あるものとするのは、多くの人が価値ありと認めているからにすぎない。つまり価値なきものとは、それに同調し共鳴し認める人が少ないのである。

このように考えると、奇クという本の性格は、世の中には受け入れられない本である。つまりSMの世界とは、世の中の平均的見方

から、いやらしいもの、つまり覗いてはいけない世界だときめつけられていのである。だから奇クを愛読する人は、多かれ少なかれ秘密というものに憧れを抱いている人である。秘密というものは何かにつけて、楽しいものである。

現に奇クを真正面きって、往來や、電車の中で、人前を堂々と持って歩ける人がいるか。奇クの読者の中にはいないと思う。その意味においては奇クは良書でなくて悪書である。つまり人前に堂々と示すことができないもの、すなわち奇クは所詮裏のものである。世の中が変わらない限り、日影で生きつづけるより仕方がないのである。反対に奇クが人前で堂々と読まれるようになった時、奇クいやSMの世界は終りなのである。

奇クは秘密のもの。SMは秘密のもの。それでこそ楽しいものなのである。読者通信欄によく同好の士を求めようとしているが、これはあまり利巧な方法ではない。実際にこのようなことをしてプレイをしてくれる相手がみつかったためしはない。それよりはいつも奇クかあるいは緊縛写真を持って歩くのである。時と場合に依じてそれを利用するのである。だいた

のベッドに目をやると、少年は一瞬とまどったように顔を紅潮させましたが、すぐに思いきったように話しかけてきました。

「姉ちゃん、とうとう流腸されちゃったね。僕、あれが一番嫌だ」「そうね、でも病気だから仕方ないのよ。キミ、こないだ泣いてたわね」

「うん……だってお姉ちゃんがみてたから、恥ずかしかった」

「そう……」

少年はやはり知っていた……。

私は羞しさに絶句しました。

「ごめんなさいね。キミのお尻がすぐくきれいだったから……」

ギリシヤの革鞭

芳野眉美

ヨーロッパ、中東旅行から帰国した三原寛氏から、お土産にギリシヤの革鞭をいただきました。八月号の『苦悶の部屋』で、ちょっと触れておいたものです。革で編まれた黒鞭で、柄に鋭利なナイフが隠されています。奴隷用の鞭だとわかります。「M専門の娼家で購入した」とありますように、ギリシヤの女主人から、彼はこの黒

「お姉ちゃんのだって、……きれいだっただ」

少年はポツンとそう言うのと、黙って天井をみつめました。

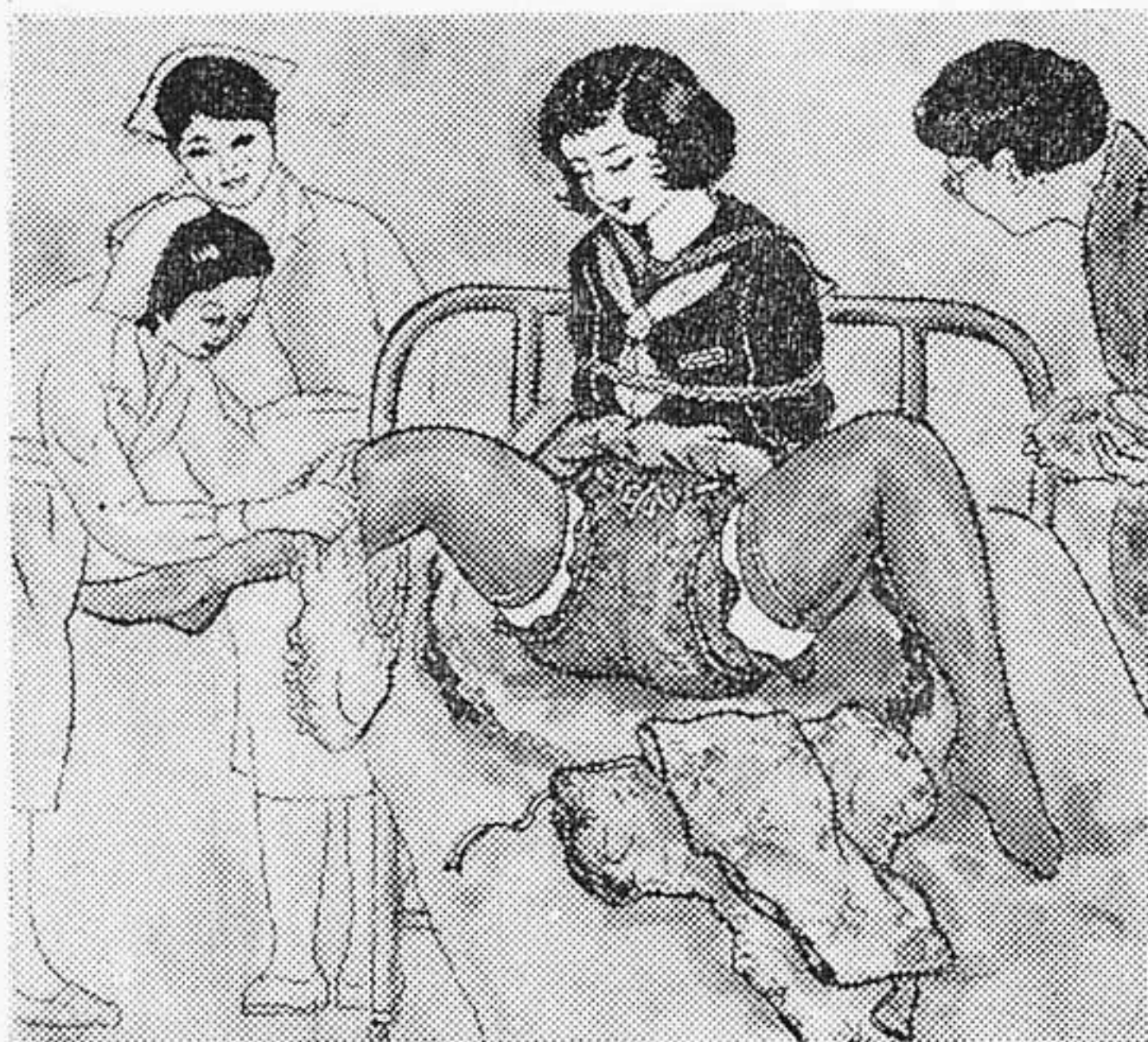
「そう、ありがと。……この次のときもみていいわよ。だからキミの時もみせて……もう泣いちゃだめよ」

私が、流腸という単純な医療行為に、異様な愛着を覚えたのは、この時からでした。それ以後流腸の度毎に、ふたりはお互いに、処置される間中と、それに続く様子を觀賞しあうことに、甘美な恍惚感を味わいあったのでした。

鞭で打たれ、髪をつかまれて、憧れの「Line」を浴びせられたそうです。まだ鞭の跡が残っていると肩を押さえていました。さっそくバーに飾りましたが、SMを御存知ないお客様には、ギリシヤの民芸品だと申し上げています。「あら、奴隷の鞭じゃない」などと、カワイイコちゃんがにっこりすると、ぞくっとします。ハイミナルなど飲んでラリっていると、尻をこの鞭で打つぞとかなんとか、教育にも役立っています。彼は今度アメリカに行ってしまうって日本にはいません。右報告まで。

私のイメージ画集

由貴子の回想 『無理強い』 原 由貴子



い奇クの読者なら、それを、相手に示して、相手の反応がどのようなあるかを区別をつけるくらいに推断力がほしい。そして、SMに興味があると解したら、実行にもっていけばよいと思う。求めよ、さらば、あたえられんのである。何かあたり前のことを書いているが、このようなあたりまえのこととするのが困難なのである。僕

はもう今では本を読むだけではガマンがなくなってきた。誰かプレイをしたい相手を見つけたいのである。だが、辻村様、山本様のようにはなかなかいかない。しかし、偶然というところ。あえてこれに期待する以外にない。僕は、奇クが悪書だからこそ好きなのである。

「花と蛇」考

山上四郎

毎号、奇クを開けると必ずといってよいほど、「花と蛇」に関する文章が眼につく。このことは「花と蛇」がいかに多くの読者の支持を得ているかを、如実に物語っていると思う。

「花と蛇」は言うまでもなく奇ク誌におけるエース的存在であり、私などは奇クを買って読む楽しみは「花と蛇」を読む楽しみであるといってもいいくらい、夢中になっている。(反面、奇クに「花と蛇」に匹敵する小説がなかなか現れないということは悲しむべきであるが)

「花と蛇」は羞恥責小説の傑作であり、責めの方法も数多く、それらの一つ一つが私を喜ばせてくれる。奇ク十月号の中で、安藤秀一氏が「花と蛇」に現われた「羞恥責」の類別“という項目の文章を載せていたが、実に適確にとらえて読みごたえがあった。分類が仔細にいきとどいており、安藤氏の「花と蛇」への傾倒ぶりがうか

がえた。

本題にはいるが、いかに種々の責めを考え出したとしてもその素地がしっかりしていなくては効果も薄いというものである。(ここで私のいつている素地というのは登場人物の性格等の小説の最も基本的なことである)

団氏は私の見る限り実にうまくこの素地を利用しており、効果をより一層のものにしている。

素地ばかりでなく、責めを受けている間に受け手のヒロインたちの心理的、肉体的の変化もやはり重要なポイントをしめる。

今述べたことは、この小説がこれほどまでにうけている一つの原因でもあり、従って小説自身に迫力を与えているものなのである。では具体的にはどうか、これよりまとめてみることにする。

◎組合せ

いわゆる美女と野獣の組合せである。古くからいろいろ試みられているテーマであるが、男性とし

ては、最も興味ある素材である。「花と蛇」の根底に流れているテーマも私はこれだと思っている。やくざが美女をいたぶるのを読むことにより、我々は日ごろの思いをとげるのである。

◎ヒロインたちの性格

いかに美女といえど、責めを喜んでいいるのでは羞恥責めとはいえない。羞恥責めはあくまで精神的なものであるから、肉体は責めを好むようになって、心だけは以前と変わらないようになってはいけない。

◎縦の人間関係

つまり、責める側とうける側との人間関係である。川田と千代が静子夫人の下で働いていた運転手と女中であつたこと、京子はかつてはこのやくざ達を取締るはずの女探偵だったことなどである。静子が千代や川田の前で恥しい姿をみせるとき、あるいは京子が自分のうちまかした男に処女をうばわれたりする場面で効果を出す。

しかし、団氏はまだこの関係を十分利用しているとは思えない。例えば千代であるが、彼女は静子を責める時はほとんど第三者的立場にいる。もっと千代を積極的な加害者にしてもよいと思う。

◎横のつながり

これは責め苦に遭うヒロイン同志の関係である。団氏は、あさましい姿は親しいものに見せるほどつらいという心理を、うまくついている。

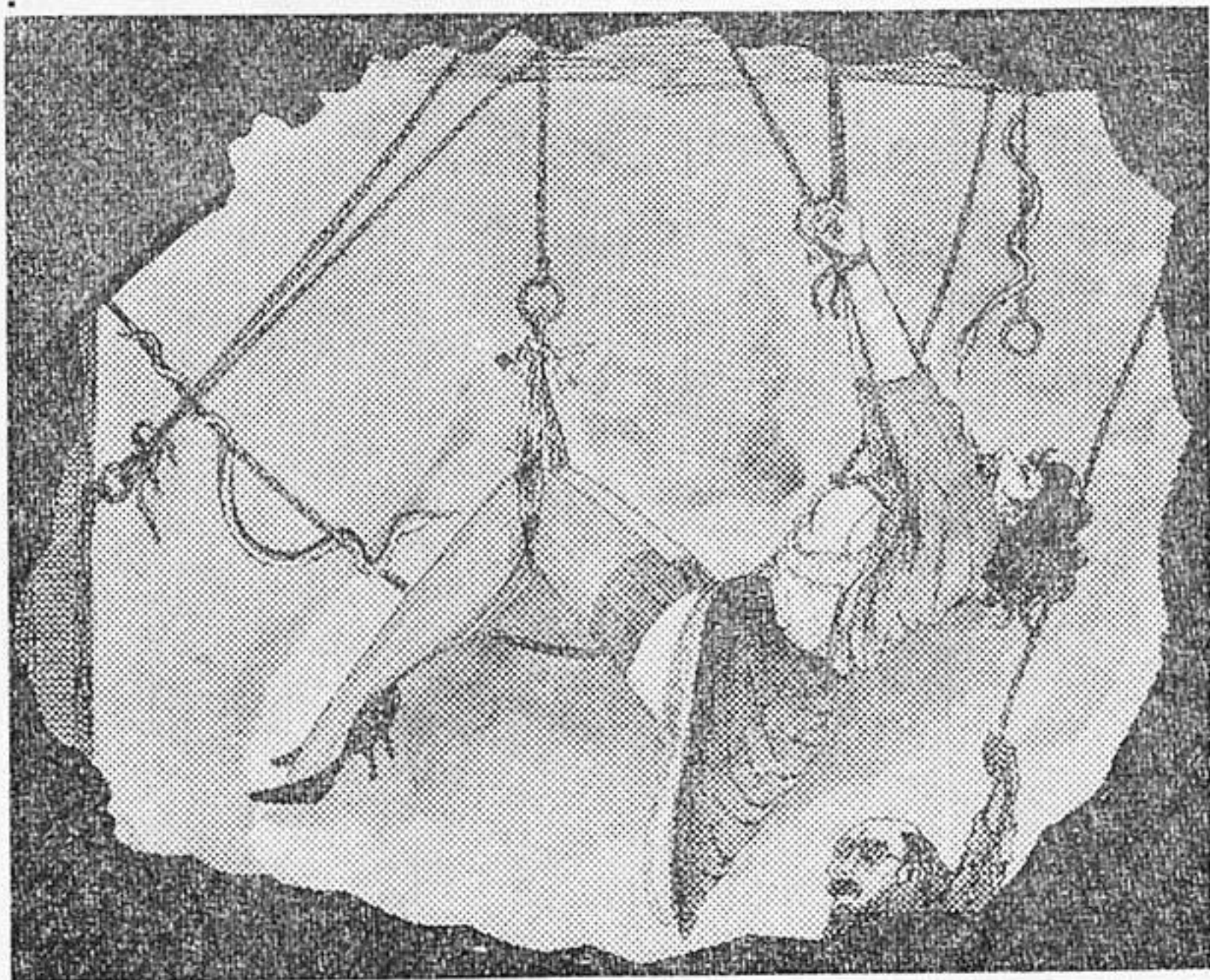
団氏は静子を京子・小夜子・桂子の三人とレスビアンの関係にしている。静子と京子とはいつしか本当のレスビアンになってしまつており、小夜子も積極的に静子を受けいれているのでこれからのたのしみである。ただ桂子の使い方が少いのが気にかかる。静子対桂子の親子のレスビアンが成立すればおもしろい。組合せの方法も色々変えられると思う。文夫と静子、文夫と京子、文夫と桂子というように。その上文夫が他の女に接する時は常に美津子がみまもっている。女同志の関係も複雑になるとよい。美津子と静子、美津子と小夜子、京子と小夜子、桂子と京子桂子と小夜子などである。小夜子と文夫でもよい。

◎愛

美津子と文夫のように連れてこられる前から恋人同志であつたものをいうのではなく、無理矢理に演技させられているうちにしだいに愛が芽ばえてくるという形のも

僕のイメージ画集 (花と蛇2題)

「蛇に与えられた花」 遠藤 一



のである。

いまのところ、これにあてはまるのは京子と静子だけである。しばらく二人はプレイをしていないが、共に大スターであるから会えさえすれば恋情がもえあがるであろう。最近、小夜子が静子をすな

おにうけいれているので、この二人にも愛が芽ばえるかもしれない。そうになったら小夜子と京子に対立させて静子の取り合いをさせてもよいだろう。

—○—

気の向くままに書いてみたが、

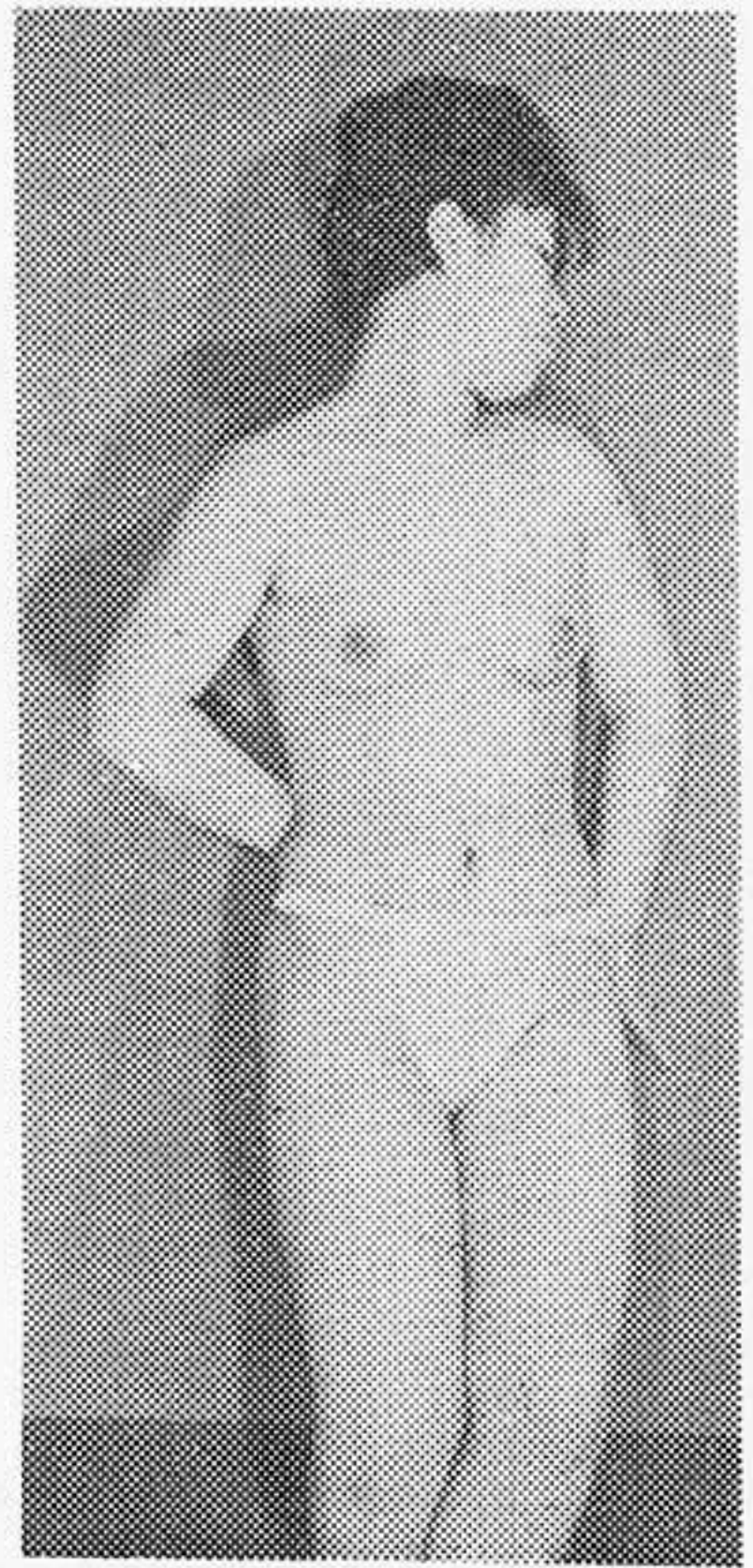
他の読者とくい違ふところが出てくるかもしれない。私なりに「花と蛇」の魅力について述べてみただけであるので、人それぞれの好みによってすきなように解釈されることだろう。

最後に編集諸氏へのおねがいで

あるが、それはほかでもない「花と蛇」特集号前編の再版である。私のように途中から奇クを読み始めた人も多いと思う。誌上にも再版の申し込みが多くみうけられた。ご英断を待つ。

本文の「花と蛇」とは無関係。古来、蛇というヤツ、気の毒によく悪役に起用される。異様で不気味な形態と触感。ゾーッとさせられる条件の故か。蛇族よ許したまえ。

「蛇倉に咲かされた花」



羽鳥水江の独りごと

……「憎縄の記」と「甘い羞恥」……

羽 鳥 水 江

☆十一月号の「憎縄の記」を読んだでショックを受け、大いに考えさせられました。というのは、両当事者の理解にもとずく娛しきみでなければならぬと考えている私にとって、心の通い合いの上にこそSMプレイが成り立つものであるからです。この野蛮で、無神経、卑怯、強いものに対して弱く、その劣等感を自分より弱いものの上に爆発させて、心の通い合いなどということをもったく無視して、妻を奴隷と考へ、やたらに強がっ

て見せる男、それも抵抗にあうや否や、フテくされてメチャクチャの態度になり、若い無邪気な妻をおどかさうとする、どう形容しても、し足りない下劣な、本質的な意味で変質者、異常性格者である男―その文の筆者の夫―にたいして、心からフンガイしました。☆少しずつ、控え目に自分の性癖を誠意をもってうちあけ、協力を頼んだなら、幸福なM夫人になったかも知れないこの若妻を、まるでバイブルか教科書のように奇ク

を読むことを強制することによって、私達が遠慮しながら、少数派としてのわずかの慰さめを托している奇クへの憎悪にかりたててしまった、この野蛮で無神経な男こそ、てつてい的に、奇クは非難すべきではないでしょうか。

☆その点「甘い羞恥」の大島照代さんは、辻村さんのテンポの早い流れるような達意の文章のせいもありましようが、非常にすばらしいと思います。照代さんと辻村さんの呼吸がぴったり合って、甘い雰囲気の中で、心を許し合ったもの同志の、相互的な娛しきみの要素を十分にもったプレイ。最初の夫とのプレイでマゾを自覚し、その夫の経済的破綻による性格の変化から別れなければならなくなったという点もよく納得できます。☆その彼女が今度は熟れきった肉体で、もう一度の切ない夢を追っているのです。プレイというものは、ある程度溺れてもよいが、ムキになってはいけません。スカッと思いきり暴れてもよいが、日常生活の原理になっではいけない。義務ではなく娛しきみなのです。娛しめる範囲ですべきもの、人生の目的などではないのです。この点をとりに違えた、むしろ、こういう点

を全く無視した大まちがいの理論をおしつけられたところに、「憎縄の記」の悲劇があり、何ともギクシャクとくいちがった破綻があったのだと思います。

☆辻村さんの「甘い羞恥」は、言わばクリスタールという形の「ハラワタ・プレイ」と言ってもよいでしょう。「蛙のプレイ」です。小さい子どもが、自転車の空気入れで蛙の肛門から空気を入れ腹を膨らませて、パチンと破裂させる遊びを、人間の体でやってみよう、ということなんです。この「蛙のプレイ」「ハラワタ・プレイ」の協力者が今こそ得られたのです。

☆爛熟したセックスの持主である照代さんは、他人の前に恥しい姿を晒したいという欲望を生じたのです。二回目の七月には、「ハラワタ・プレイ」に積極的に協力するつもりで、つまり自分のハラワタを辻村さんに「自由に賜って」もらうべく提供する気になっていたので。相互的に娛しきもうという条件が成立したのです。☆つまらぬことをいろいろ書きつらねてしまいました。照代さんを実験台にして、辻村さんの手で素晴らしい「ハラワタ・プレイ」を実施していただきたいと思います。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 42 年 12 月 号

(1967年・12月号<第21巻第12号・通刊第234号>)

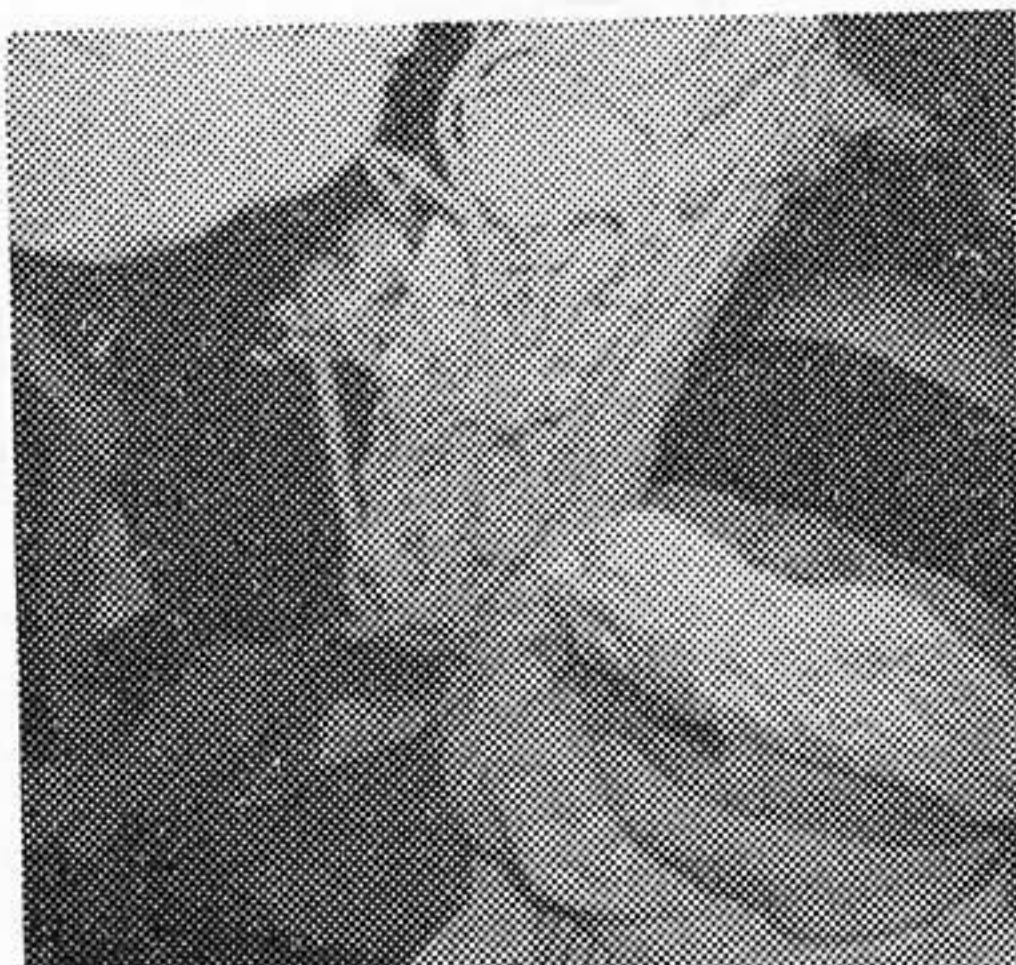


本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



プレイ川柳考

水沢 登

欧米では古来、尻打ちの家庭訓育が広く行

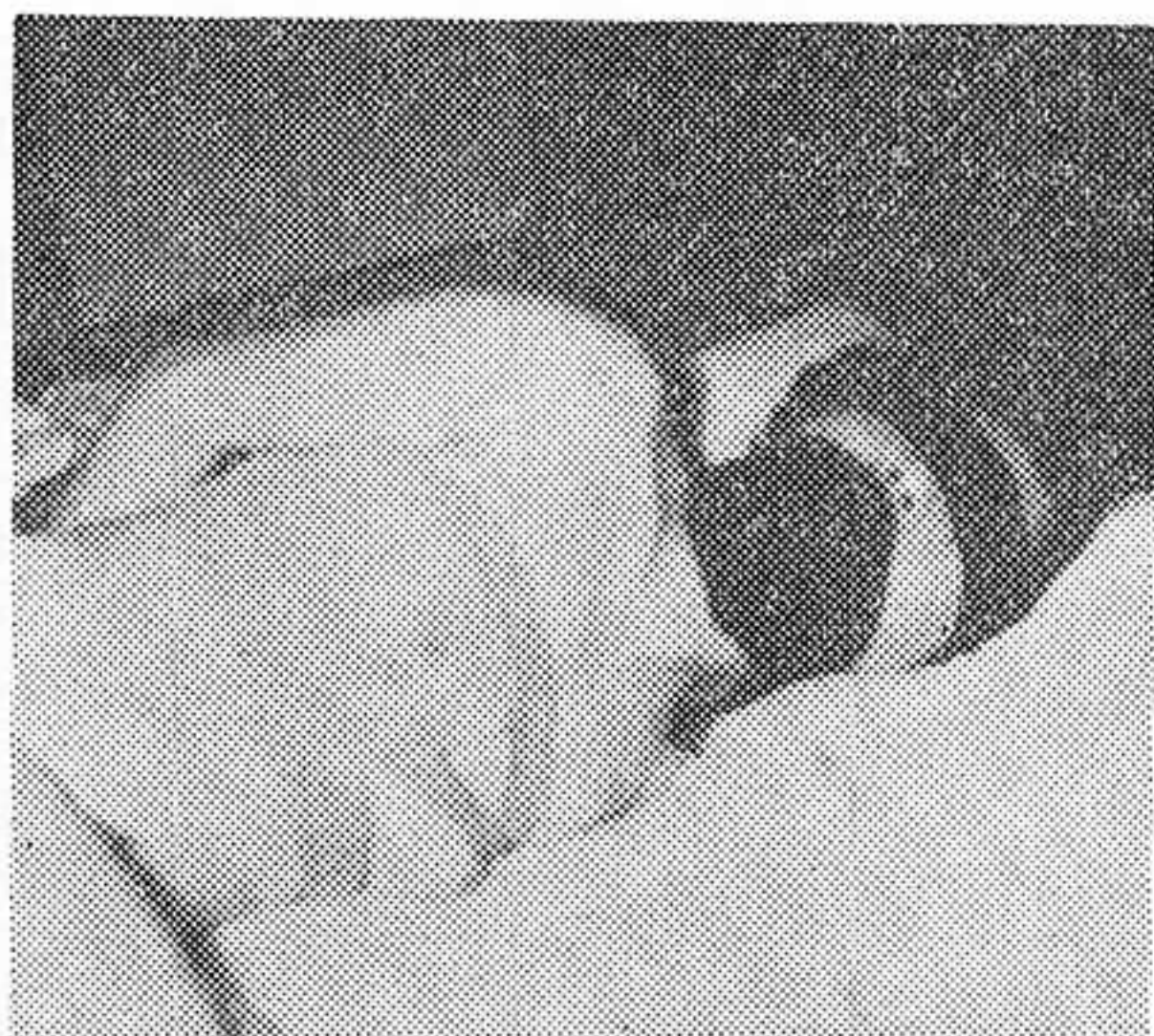
なわれて来た。適齢期の娘を二つ折りにし、薄いパンティに包まれたバラ色の尻を、平手打ちする。父親はやがてエレクトシ、エクスタシーをおぼえるのもあるだろうし、娘も懲罰される苦痛に、異様な快楽を経験してゆくかも知れない。息子は早く父親の立場になりたいと思い、父を羨む気持を持つのも出てくるだろう。米国では、尻打ちは本来の意味の外に、男女の性的快楽のプレイとなっているらしい。夫婦の寝室での尻打ちは完全にフォア・プレイである。

欧米諸国でのこの慣習に育まれた社会的なSMの素地に芽生えた鞭打ち、責め、拷問等は個人生活の内部に浸透し、慎しみ深く潜行しながらも、割合気楽に男女間に取り入れられているようだ。

我々の生活、慣習には、SM的行為が暗黙の中にも是認されるような、一般的バック・グラウンドをも持っていない。プレイは全く蒼ざめた隠湿なアンダー・グラウンド的行為と受け取られる。とは言え、世界的な性の開放の潮流にのって、男女間の、特に夫婦間の和合の一環として色々な様相のプレイが、僅

かながらも融けこみ始めたようである。

プレイが人間生活の一部であるとするならば、おかしみも、真面目さも、そこには人間性として存在する筈である。性の開放を自由奔放にうたいあげた江戸の川柳子達のように、抑圧され続けてきたプレイを最も人間臭い短詩、川柳で表現したくなった。息の根も止る猿轡にもどこかギャグがあるように、陽陰にあるものを単に陽の当る場所へ、陽氣に出してやりたくなったただけの話である。拙句の程は御容赦。



おトイレは逆立ちででなのと新妻は問つまい

フランスの小咄に——石膏像の一部を折ってしまった娘が、それを上向きにくっつけた。違っているとなじると、私の知っているのは皆こうよ。——というのがあった。

妻は短かい新婚生活で、そう認識してしまつたに相違ない。現代娘の中では珍品だとも思い、飼育しがいがあるとも、ほくそ笑んだものである。

はじめては冗談にする猿ぐつわ

猿ぐつわの「さ」の字も知らない妻が、どんな反応を示すか興味があった。ある夜、新しい手拭で喘ぐ唇を掩ってやった。案の定、驚いて詰問しだったので「余り声が大きいでね。乱暴して御免」返事も最初から考えておいたもの。妻はそれを本気にして、追及の手を止めた。

お隣りに気兼ねじゃないかとぐつとはめ

孫子の兵法宜しく、敵の羞恥心を刺戟し、先入感を植え付けてしまふのが肝要。呻きが高かろうが低かろうが問題ではない。夜毎々々、「お前は異常体質だよ。とっても声が激しい」と吹き込み続ける。相手は夢中になっている折りから、判断力は全くゼロ。かくすれば遂には異常体質と思ひこみ、厳しい猿ぐつわもはめられるようになる。

「私は正常だわ」と譲らない奥さんは、過去に経験がある証拠。そうでなければ正常と異常の区別ができる訳がない。

物音に響の呻きをおつぶさぎ

ミシリという音に縮み上らせて慌てる。誰しも経験のこと。

女房なら暴力でもとその気なり

男なら暴力の衝動には誰しも駆られよう。週刊誌などで「女性の何十パーセントかは秘かにそれを待っている」などと焚きつけられようものなら、一丁オレも、という気にもなろう。

妙な妄想に取りつかれ、喉が渴き目が血走ってくる。男とはアワレなもの。

「た」だけで「すけて」がくぐもる猿響

寝こみを襲い、常でない緊縛。突然の暴力に妻は絶叫する。その唇に無理矢理、小布れをつっこむ。

咄まされたままで妻はよよと伏し

女の武器は涙である。狂ったような狼藉にうらめしそうな眼が訴える。涙が今にもこぼれそうである。やがてその涙が猿響を濡らしてゆく。夫たるもの俄かに理性を取り戻し、鼻白める面持になる。

泣いている緊縛を好きだと抱く上手

縛りも響もそのままに、ぐつと抱いて耳たぶに囁く。「好きなんだ。もう放さないぞ。今夜の君は天使の様だ。だから縛ったんだ。

こんなこと他の人にもできると思う?」飼育の途中ではキザな文句も必要。そうしないと変態と思われ、実家へ駆けこまれる虞れがある。特に泣き出した時などは決して謝ってはいけない。縛りも解いてはいけない。自分の非を認めることになるから、最後まで「魅力あるものは責められる」と思いこませることに努力する。女の自尊心、自己愛から、やがて、今泣いたカラスが……の譬通り許す気になってくる。そしたらそのままの姿の彼女を、息も絶えだえになるまで愛してやればそれでよい。

責めのあるシーンを羞うようになり

プレイ・フォトやハント・フォト、絶対見ないと言う。そのくせテレビや小説の責め、縛り、特に猿轡には固唾をのむ。「好き?」と聞くと「知らない」と席を立ててしまう。秘かな関心が生れてきたのは間違いない。

猿轡手近なもので間に合せ

ネックチーフ、スカーフ、しごき、包帯、ベルベット帯が常備してある。ベルベットは縛るとよく締って猿轡に好適。生地も厚いので箝口されると息使いが荒くなる。表面はし

なやかだが、裏はザラついて粗野な感触がある。英語で二重人格の意味も持つ。飼育者の責め具にふさわしい。

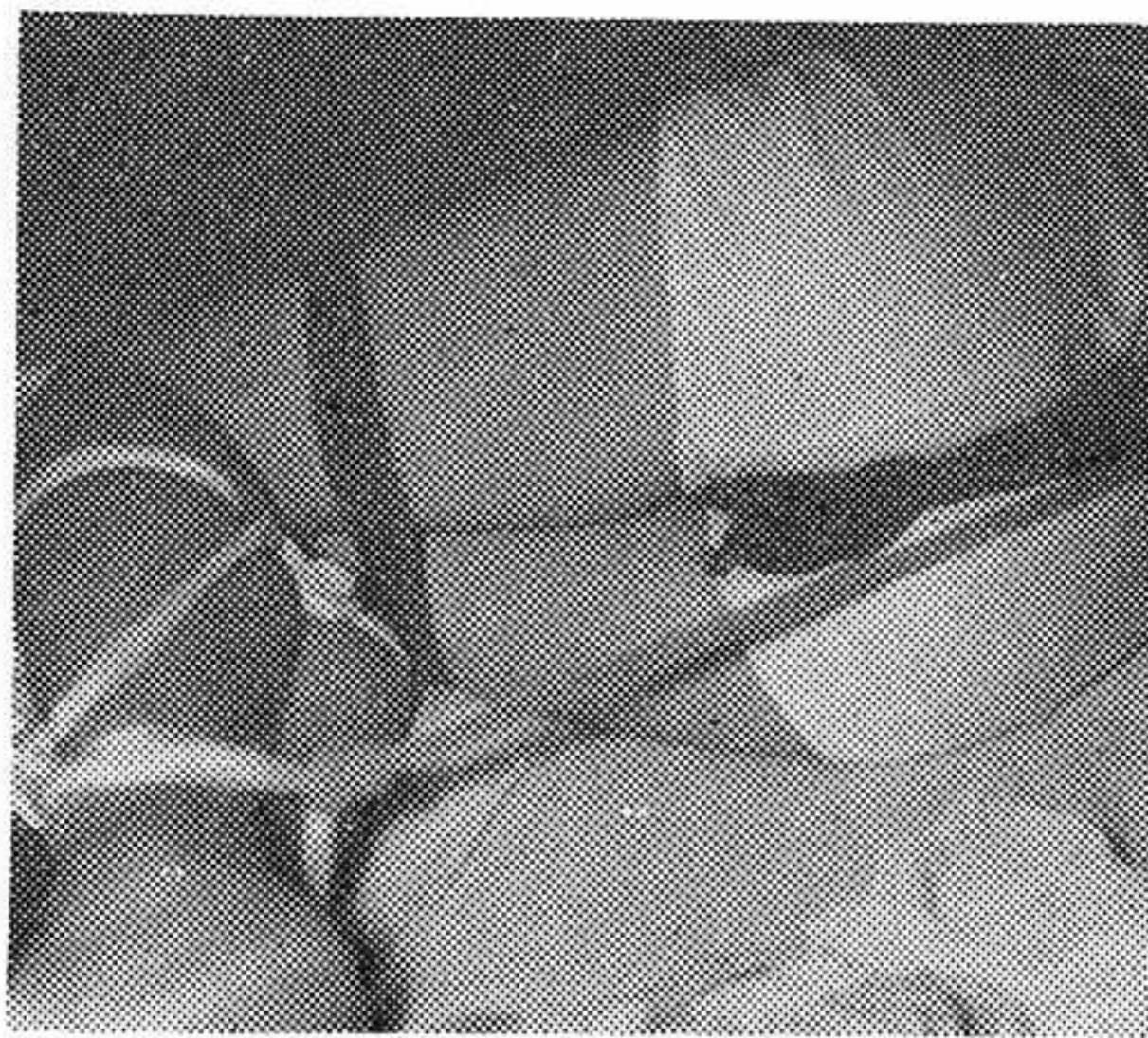
とっさの場合、手に触れたものを即興に用いるのも面白い。まさかと思ったものが詰められたり、恥かしいものを噛まされたりすると責められる者は一層被虐感をあおられる。

八の字の眉が轡をせかすなり

しつような攻撃に、呻き一つあげず耐えている抵抗が眉に現われてくる。堰は今にも切れそう。いまわしくとも猿轡をはめられていた方が、かえって楽かも知れない。そんな期待が生れてくる。それと察してピンクの薄いパンティを詰物に、唇を割ってしごきで押え、ベルベットで二巻きして口も掩ったものである。

乳首がここを責めてと謀叛する

厳しい縄目。むせかえる猿轡の束縛から逃れたい欲求と裏腹に、責めが進むにつれて肌は紅潮し乳首は屹立する。乳房責めの要求である。ここに女の生理の言うに言われぬ深遠さがある。



おのが香のぬくもりを噛んでいた恥かしさ自分だけが体験したことの中で、公表できる時は、名誉感になるが、公表し得ないものであれば羞恥となる。今まで身につけていた下着を詰物にされたことさえ恥ずかしいのにそれを噛みしめていたなどは、とても口に出しては言えない。

妻奇怪洗わずしき猿轡

妻は非常に綺麗好きで、下着は少くとも日に二回は取り換える。家に汚れ物を置くのは



大嫌い。洗濯機は一日中、フル廻転している。

所が意外にも、自分に噛まれた詰物や猿轡は一切洗わない。これらの布片は彼女の唾液のみで汚されたものばかりではないのに、二月も三月も放置されたままである。そして夜毎、唇をこの猿轡のために開くのである。

轡とは知らずしゅうとめ洗濯し

妻のお袋がやって来て、娘も忙しかろうと洗濯を手伝う。洗濯物の中に、昨夜、口一杯に含ませたパンティやハンカチーフがあると、お礼を言うのもこそばゆい面持になる。

妻は勿論、すましたものである。

時たまは轡の眼が怖くなり
まなこ

異常に欲った夜は、プレイのワン・サイド・ゲームになることがある。ふっと気が付くと、冷たい眼がジッとこちらを見ている。物言えぬにしてあるだけに譬の通り「口程に物を言う」途端に、ガックリしてしまう。

女性誌の綴じ込みつきつけ貴方も異常です
冷静にプレイを受けた夜明けの出来事。女とは全く勝手な生きものではある。

目隠しにイヤイヤをする猿轡

視力を奪われると、予知判断の能力が減退し、責めへ、言い知れぬ不安を感じるようになる。妻はギャグを受け入れても、一枚の布の目隠しを怖れ、縦縄の身をもがく。

目隠しをすると責めは容赦なく

プレイとは言っても、自分の責手を見られていると本腰が入らない。目を塞いでしまえば理性もホッとする。責めは本格的になる。目隠しは被虐者に不安を、

加虐者に安心を同時に与える。責めの効果は一段と増す。目隠し愛好者の多いのも、この辺の理由か。

秀英の和歌にプレイのことはなく

女学生時代からの同人で、選に入るくらいの和歌は創作できる腕前なのに、妻はプレイについての歌はつくろうとしない。彼女の人生でプレイは、一大エポック・メーカーな経験だったろうに。

末摘花の名句——かきまわすたびに背伸る
猿轡——は仲々意味深である。これからは解説抜きにした。一連の句と見ても、独立の句と見て頂いても結構。自由に御鑑賞下さい。

事始め姫始めの責始め

湯の町之泥坊にでも来たものを持ち
カブレぬかと断り大きなコケシ買い
ディープ・キスとタグマツチする猿轡

ホッとする間もなく縄がくびれこみ

引き剥いだショーツでノッペラボウにする
むごい手に噛み切らんばかりなり布と縄
責めの果て轡も縄もしとど濡れ

解かれても吐き出す気力既に尽き
エピローグ出流れた茶も甘露にて

稿談性風俗資料入門

『生活文化』と『新生』について

斎藤 夜居

性風俗雑誌『あまとりあ』（昭和28・4）

の挿み込みに、特殊会員雑誌『生活文化』への入会勧誘の広告が、明るい人性観建設の為に、と堂々と謳揚^{うた}って切取線つきの申込書まで副えて出している。この時は、既に第一冊創刊号を配布中であつた——。あまとりあ読者というだけで、その読書傾向の嗜味は当時だって尋常の者ではなかつた。その中の特に好奇者を誘う訳だから、これは愈々くさいものを出すな、という第六感がピンとあたまにくる。然し、兎角この種の雑誌というものは、金銭物質の問題ばかりではなく、購読会

員がわにも、それ相当の心得がなくてはならぬ。いちどでも斯道資料誌に入会した体験がある者だったら、経験者ほど前途に対する負担を重苦しく感じる……知らなければ、別だが。

発行者は勿論その覚悟でやっている仕事であらうが、読者も又問題が起されば、家庭や勤務先までも、その筋のコワイおじさんがたずねて来るし、場合によっては裁判沙汰にでもなれば、証人席に坐らなければならぬ。まったく、日本国の現状では真性のセックス文化資料の入手・購読のためには、どれらい

勇気が必要で、先ず大ていの者は一度でふるえ上り、おじ気づいてしまう。従って、特殊会員雑誌の継続読者の立場は、殆ど発行者と対等位置にある。このことを知らなければ、この種の△資料▽を純正に味読することは不可能である。また、識る者は言わずというところが、風流之書に対するエチケットとして厳守されている。筆名と本名を通人はみな知っている……知っているから、黙っているのである。

が、歳月という非情の時間は容赦なく流れて行く。現在では当時の雑誌資料はみな散逸

しようとしているから、せめては寄せ集めに過ぎぬ不備不統一の資料からでも、我国における性文化の記録の一部として、私は簡単な説明をのこして置きたいと思う。『生活文化』『造化』『新生』この三種の資料誌こそ日本に初めて生れた性資料雑誌として、最も高く評価されなければならぬものだ。——次に、さきに記した『生活文化』の広告の入っていた雑誌、『あまとりあ』の巻頭言を要約し、性風俗雑誌の置かれた位置や時勢を概観すると、

世の中は、行き過ぎ時代から又一転して、今度はもっとひどい反動時代が来そうである。性文化の世界にまでも！これに押し倒されると「性」の問題ばかりでなく、すべての人間性は薙ぎ倒され、再び奴隷社会になってしまう。チャタレー事件と下田了仙寺秘仏事件と、二つの弾圧裁判を受持っている正木ひろし弁護士は「もうこうなったら革命だよ。革命以外に日本は救えないよ」と、言われた。然り！

時も時、進歩的な性科学者のグループは、セックス・レヴォリューション（性革命）の会を結成した。大新聞社・大雑誌社・放送会社・映画会社等も後援を約し、今のと

ころ児童研究の豊島博士、霜田静志。青年研究の朝山新一教授。医家では古沢嘉夫、福岡武夫、太田典礼。心理学の堀秀彦、等々の諸氏、そして私T・T。みんなで、卓を叩くが如く討議したのである云々。

と、以上のように言っているが、性革命の会とは大袈裟な表現だが、この会がその後になんという活動をしたか知らぬが、昭和二十八年という年は、復古調ムードが盛り上ったりして、我国は非常に経済的にも安定期に入って、△革命▽だの△弾圧▽だの、△反動時代▽が来そうなの、と騒ぐのは一種の言葉グセだとしても、時代認識にも誤りがあるばかりではなく、性研究家グループの代表者の、常に身についてしまった被害意識の表現になっってしまった。が、当時でも現在でも、我国に於いては△性▽は公開研究の段階に達していないから、研究や資料の発表を続けて行く限りは、官憲との衝突は絶対に避けられない——性研究活動と法律との対決は、まだ長い時間を必要とするであろう。日本生活心理学会の事件も、有光書房の国貞事件も、いまだに決着をみていない——。所で、『生活文化』の案内文というのは次の通りである。

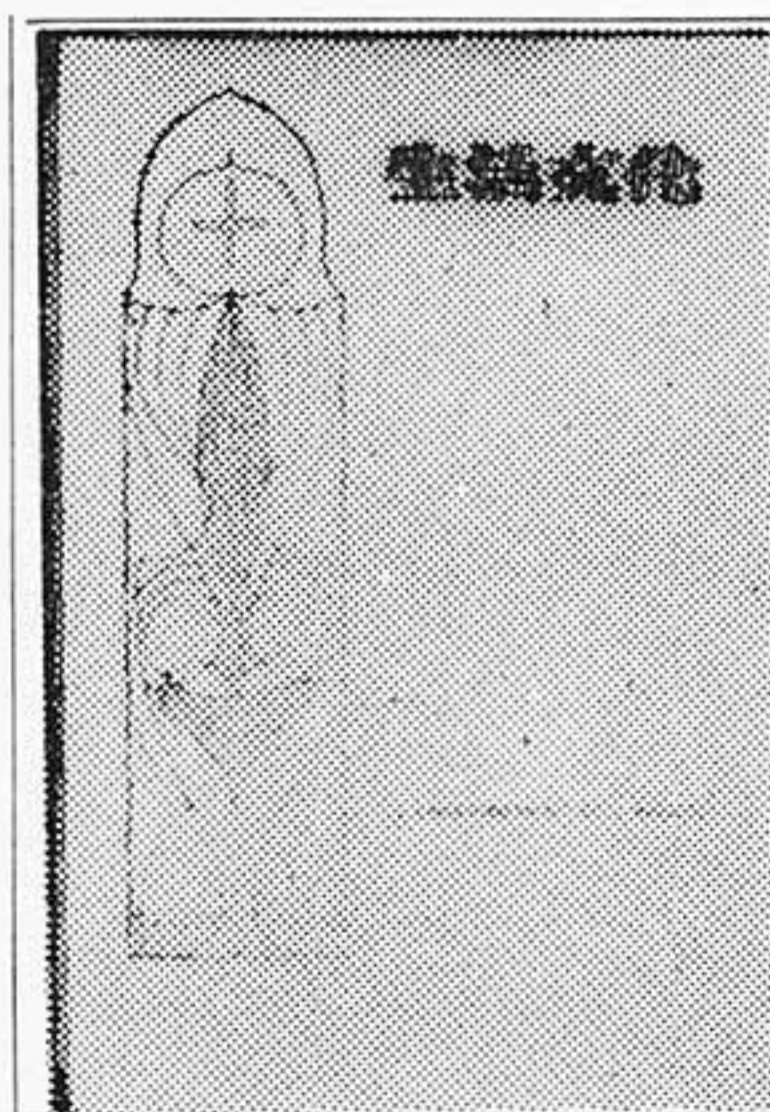
「我が『あまとりあ』は創刊以来日本人の生活の中に△性▽を正しく位置せしめる前衛誌として活躍して参りましたが、原子科学の発達と反比例する陰鬱な勢で人間の危機が叫ばれつつある現在、ますます文化面に於ける△セックス▽啓蒙の必要が痛感されます。又、この研究の価値を完全ならしむる為には発表に当って曖昧な態度は許されません。然しながら必要欠くべからざる研究資料も、今後他の一般誌と同様に店頭販売するとなれば、理解力不完全な未成年の手にも取られ、誤読誤解される憂いも生じますので、ここに真剣な研究者を糾合して「生活文化資料研究会」を設立、毎月一冊の会誌を発行、その他時宜に応じた連絡を密にし、互に進歩充実を計って明るく人性観建設に邁進したいと存じます」

（註。会費は一カ月一五〇円。半年九〇〇円。一カ年一、八〇〇円。会の所在地は中野区江古田一ノ二三〇二）

◇ ◇ ◇

何事もその時代の気運というものがある。現在この資料雑誌を手に入れば、地下出版活動とはいふものの、余りにも赤裸なセックス追究の情熱に啞然とするばかりである。そ

「生活文化」創刊号



して、性の本質や根源研究に就いて、読む者は各自の立場で考えさせられる点が多い。やはり正義の信念が無ければ、絶対にやれなかった仕事だったと思う。やましい事業ではなかったと思う。紹介の正確を期するために『生活文化』—生活文化資料研究会・編集発行人・広橋梵—全冊の総目次を記す。

第1号 口絵・古土佐絵巻、土佐派の男女像（部分）。

性愛とは何か（連載）押鐘篤。花電車と括約筋 比企雄三。早漏苦との格闘 橋爪横榔子。二つの性科学討議 高橋鉄。弄戯奇譚 竜胆寺雄。「犬」の性欲描写 斎藤昌三。訳註・百戦必勝（連載）伏見冲敬。ア

ラビア女陰異名考 大場正史。陰名随筆 花咲一男（連載）。逸著聞集の一章 岡田甫。性的英語辞典（連載）。

第2号 口絵・北斎画作万福和合人。

男根・女根入門考 高橋鉄。性感とオルガスムス 宇佐美正夫。同性愛的性歴（連載） 竜胆寺雄。白き日の妖術 薔薇蒼太郎。陰裂の美 原比露志（連載）。われらが神よ—聖書随想— 三宅一朗。大願成就法 小西茂也。

第3号 口絵・国貞・今様三休志。

性交態位俗名考 木村芳郎。あしあと—女性会員の性歴—松平布美子（連載）。倒錯放浪記 荒井常雄。録音による一つの記録。艶本序文集 中野栄三。明治の春本について 青山繁。末番句明治篇 水戸抱夢バビレスキー反射 武野藤介。たのしみ列車 三宅一朗。

第4号 口絵・歌川派名品選。

性毛運命論序説 西島実。寝室秘事雑筆 帆田春樹。一奇人の性歴 岡田甫。のぞき綺談 三宅一朗。陽物神プリアプレス 原浩三。大仏コンプレックス 広橋梵。艶笑文学中の性具 蓮池一郎。第5号 口絵・国芳傑作選。

民族比較態位考 坂ノ上言夫。腎虚の破礼句 宇佐美正夫。御釜の製造法並使用法 岡田甫。アリウシャン土人の性生活。聖器正名説 荒井常雄。十五才のヴィナス 広橋梵訳（連載）。小説・悪魔灯籠 石川堯（連載）。

第6号 口絵・納涼怪奇展。

会員性史・秘戯見聞抄。同・痴呆の告白。破瓜のエピソード 三宅一朗。性的俗諺抄 武藤秋一。交合の後悲し 花咲一男。実娯教絵抄 中野栄三（連載）。灯草禪師伝 伏見冲敬（連載）。特別附録・釈花八粧矢的文庫（連載）。

第7号 口絵・女性陰毛展。

浮世絵性毛考 高橋鉄。舐める祭式 坂ノ上言夫。自己色情の美術 原浩三。秋がわき猥談会（出席・高橋鉄。岡田甫。原浩三。花咲一男。伏見冲敬。広橋梵。）特別附録・旅枕五十三次（連載）。

第8号 口絵・日本艶情画集。

鎖陰漫考抄 坂ノ上言夫。昨日今日能物語 会員性史・椿の童貞 万江ハナ。開談玉の物語 花咲一男。性的俗諺批判上田鹿園。犬と指と処女膜 武野藤介。うなぎ床・淫乱娘 三宅一朗。いすとわある・ごうろわ

あず(フランス艶笑小咄)花町右門。

第9号 口絵・日本艶情画集(2)

閨房新風説 松井確太郎(連載)。王朝の花蕊 薔薇蒼太郎。会員性史・自慰記。同・自慰から売笑婦。同・童貞献上。二つの予審調書 青山繁。淫液にまつわる或日の幻想 村上芳樹。閨中始末記 中野栄三。「淀君乱姪録」の態位 菅原次郎。むしめがね(艶本紹介)。

第10号 口絵・張形六佳撰。

輪姦願望—高資料特別発表—水野澄江(連載)。道化師と女臈 大場正史。

第11号 口絵・ジュリオロマノフ艶画集。

誘誘女人姿態抄 帆田春樹 騒声喃語集。武野藤介(連載)。いんすい奇譚 室町三三。

第12号 口絵・現代日本女性陰毛実写。

窃視録—高資料の2—若林悦郎(連載)。会員性史・女体開眼。同・童貞献上。同・艶夢解。

第13号 全誌特集。

態位別・近代文学性愛描写「研究と鑑賞」武野藤介編・解説

第14号 口絵・現代の性神祭礼。

連載物のほかに、破瓜異聞 松井確太郎。

逢身八契(艶本紹介)。

—以上—

◇ ◇ ◇

いずれも「性」に関する研究・随筆・漫談・資料呈出・文献紹介というのが、その内容である。創刊号から三号あたり迄は、『あまりありあ』を幾分どぎつとした程度の記事であったが、しだいに脱線・独走して、まったく特異な性資料雑誌となった。誌上の執筆者たちも、始めは風俗雑誌類では馴染深い研究者が多かったが、のちには覆面筆名のナマの報告や、稀世の珍文献の解説紹介で全誌を埋めるに至った。

赤裸なセックスの報告記事と「春本」は区別されなければならない。また、現実には私たちの性体験の実際は、知識として乏しい事柄に属するから、改めて真実新たな認識を得る点も多いのである。セックスは科学のみで解決できることではないし、また男女間の情緒の発展に伴う交りぐらいの甘い解釈だけで、それで安心できることでもない。それ位のことは誰だって分っているのだが、知るための素材に乏しいから、二十代、三十代、四十代……と年齢の分岐点に立つたびに、人はいつも振り出しに戻される。性本能に深奥な哲理を含んでいる訳ではないのに、自己の性

欲に対して、いつでもこれ位でいいのだろうか、とか、この情熱の終幕を告げる合図の鐘は誰が鳴らしてくれるのだろうか、とか。総て皆目さっぱり見当が附かずにいる。性欲は神秘ではなく盲目的本能かもしれないが、他人の性欲というのは、これは「神秘」的である。私は何時もおもうのだが、セックスは常に科学と俗論に毒されていて、性典などで陰門と陰茎の描かれている図解を見て判断できるほど、生易しい造器ではないと思う。——以下、『生活文化』各号から、内容に就いて抄出してみよう——全般に亘れない点を遺憾におもう。

「花電車と括約筋」花電車というのは女性単独の実演で、戦前では玉の井など特殊地帯だけで、ごく少数の人たちだけが実際に見物しただけだったが、広く世間に宣伝され、見せるだけで乗れないから花電車の評判はあまねく知れ渡った。戦後は世の中の風紀も乱れ、実演・映画・花電車という観光コースが、ある時期にはそれ程に苦勞も危険も伴わず眺められたりした。バナナの輪切りや弾丸の如く鶏卵を発射したり、または悠然と煙草をくゆらしたりする芸術で、女性下腹部の括約筋——正確には球海綿体筋という——の作業で

職業人としての彼女たちの体筋はもともと先天的に強力な上に、更に加えて苛烈なトレーニングの賜物で、このような芸を可能にする。戦前では容易にお客をのせない花電車だったが、戦後はなんでも自由流行で、ある物好きが臨時に乗車したが、事前の期待に外れ、意外も意外まったく平凡だったというお話である。(1号)

「陰名随筆」近世風俗語集成の内で、極めて良心的学究肌の語彙研究。秘語の語源・語意を江戸艶本原典より綿密に調査した力作であった。この雑誌に数回連載したが、完結に至らず未定稿のままに了った。花咲一男は戦後の一時期には、江戸性文献の探究に全力を傾注したが、数次の筆禍事件に連坐し、遂に艶本研究から離れてのちは、古川柳や江戸地誌の地味な研究家として転身した。(1号)

「陰裂の美」^{デルタ} 我々は展覧会に出かけて、裸体画をみるとき、その女体が陰毛も陰裂をももたないでも気にしない癖がついている。美術品というものは、そういうものだと思っているからだ。ではなぜ陰毛や陰裂を美術家は表現しないのだろうか？ 陰毛の如きは成年の誇りとも言うべき表徴であるのに——、ということの理由や原因に就いて述べ、ヨーロッパ

ッパ美術のうちには、必ずしもギリシアの伝統に則して陰裂を無視したものばかりではなく、陰裂を恐れずに描いている写実的な美術家もいたことを、図版入で紹介している。

(2号)

「白き日の妖術」この筆者、薔薇蒼太郎は女子の無毛礼讃者であり、研究者でもあるという——江戸川乱歩の実弟で、昭和初期には平井蒼太、耽好洞人などとも称し、当年の軟派雑誌に随想風の研究や探訪記事を發表していた。兄乱歩に似て非常に文章家だったが、自己韜晦の癖が甚しく、業績が隠れたままである点が惜しまれている。この掌篇は少年が、ある日ふと桓間見た隣家のおばさんの秘し所に畏怖する、陰毛恐怖症の心理を描いたものである。(2号)

「あしあと」松平布美子という仮名の女性の性歴の告白で、幼女期より年増ざかりになるまで、七才の頃乳母の亭主の建具屋にいたずらされた事より、三十七才の流転の果の女給生活の日々に至るまで、女性性史は珍しく貴重な文献だったので、数回に亘って連載された。(3号・8号)

「のぞき綺談」ノゾキは卑怯であり低劣である。みずからを卑怯低劣にすることによっ

て自虐的快感と恐怖感を起すのではあるまいか。そのままに推移すればノゾキは無害である。所が、他人の秘密を知って後で当人を脅したりすれば甚だ有害である——と前説して、戦前の話だが、大森海岸に水道局の営業所があった。その建物の海に面したところが絶好の逢引場所になって、毎晩幾組かの男女が来た。それを水道局の宿直員が塀から覗いて面白がっていた。ある晩、一組の男女の密会を覗いていた宿直員は、外へ出てふたりを脅し、男を帰して、女連れ込み準強姦みたいなことをしたが、結果がおもしろくなかった。女が、水道局員のほうが好きになり、前の男を袖にしたのである。男はたまりかねて局員を訴えた。それから騒ぎが大きくなり、とうとう新聞の話題になってしまった。

(4号)

「聖器正名説」ハックスレイの恋愛双曲線の翻譯に、ペニス・ペンシルという洒落があり、永松定は、おチンチン鉛筆と訳した。昭和十二年のことで軍国主義時代だったが、削除されるようなことはなかった。陰茎とか陰門というのは直観的に陰気で淫猥なひびきを持つ言葉で感心できない。玉茎、玉門がいいのだが、こういう漢語は発音がむづかしいか

ら、やはり従来から使用されているオチンコが決定的に、自然で妥当だ。マラというのはよくない。梵語の魔羅の意味が示す如く、悪魔的でサディスティックで、滑稽でもある。

男根は、何だか大根か弾痕ともきこえてグロテスクすぎる。ペニスは、世界的な常用語だが、わざわざ尻尾という意味をもつリディキユラスな学術語を用いる必要はないだろう。

チンボコは血の鉾、キンタマは金玉というより気の魂である。ホーデンだのボールズだの外国語は不要で、おタマとよぶのがよい。小便はおションの語感よろしく、すべて性器に関する言語は「お」の字をつけた略称で呼ぶことが望ましい——という説。以上は男性の部の抄出だが、女性の部はとも紹介できるものではない。(5号)

◇ ◇ ◇

「閨房新風説」(9号10号12号)は、夫婦生活にマゾを自然に接取する話、という副題が附いており、三回に分けて載り完結した。体験記録というより、マゾ文芸として稀にみる迫真の作。読んでいて息苦しくなり、掌や額に汗を感じる程に文体の魅力もあり、人間におけるセックスの業(ごう)の深さに恐怖する。性欲記録をナマの素材のまま提出する

ことも尊いが、やはり達筆の士が原素材を傷つけないで、更に読み易く、かぐわしく再表現することは、新しい文芸の道を拓くことにもなろうかとも思っただが、後に『高資料』(三冊のみ刊行)など一連の作品化を見ただけでおわってしまった。但、この「閨房新風説」は筆致において高資料とは異っている。次に、この物語を見ることにしよう。

「みつ子」は旧市内で海産物問屋を開き、多くの店員を使っている金持の四女、兄が旧柄な父親の許を飛び出し、郊外の新道で小さな喫茶店を営み、彼女も時々その店に手伝いに行くうち、縁は異なるもので「僕」という妻帯者で子供が三人いる男と数回交り进行をかわし、僕とみつ子は着のみ着のまま家を出て、同棲することになる。みつ子は餅肌で無口な女で、フランス人形のようなエキゾチックな顔の美人である。派手な衣裳を好み、パーマント・ウェーブの常用者で、その時分はパーマなどはよほど洒落な女性でなければたしなまなかった——という頃、昭和十年前後か。

早速衣食住の生活に窮して、エントツ長屋の玄関先二畳を借り、僕は九段下の旧飯田橋駅取り毀し作業の日やとい人夫になる、日給

二円五、六十銭。所でこのふたりが間借りしている家主は、なまけ者で酒呑みの仕事師で五十才前後の男、通称「親方」とよばれている。二十才も年下の「おゆきさん」というこれも妖艶で色白な美人をおかみさんに持っている。みつ子はこの家の唯ならぬ異妖な雰囲気と、みだらな親方の眼をおそれて、別の処に住みたいというのだが、一カ月間五円の家賃で雨露をしのがせてくれる所は見つからない。このような生活背景と登場人物で物語が始まる。

慣れない連日の筋肉労働で僕は疲れ、時々仕事の垢や泥や汗を洗いおとすのも臆劫でそのまま横になる。それなのに、みつ子は終日の無為(僕を待っているだけの生活のため、本を読んだり、夕方になって入浴に行くだけというような)のため、一そう肌が磨き上げられ、何とも言いようのない美しさになる。毎日々々しだいに指も節くれ立ち汚くなっている僕なのに、みつ子は「このままがいいのよ。もっとまっ黒になって……ざらざらになっていいのよ。そして、わたしをこうして……ね……どんなにしてもいいのよ……ぶっても……いじめても……幸福なんですもの」という。僕は、彼女にこのような刺戟的な性

癖があるとは夢想もしなかったもので、この親方の家に厄介になるようになってから、急に、つましい上品な彼女の心と肉体の中に何か隠秘なものが影響したことを知る。

ある雨の日、工事現場は仕事にならなかった。みつ子と僕は一本しかない傘で抱き合うようにして近所の便所臭い映画館に入った。

久しぶりの休みだった。僕は、映画を観終るまで何も気がつかなかったけれど、いつでも陰に陽にみつ子のからだを附け狙う悪魔のようで、サディスティックな親方は、よき機会到来なれとばかり、映画館の暗闇にまぎれ込み、声を立てられない周囲への気兼ねや、彼女の気の弱さにつけこみ、隣りに坐って、彼女に手弄を強いて行なわせ、場内が明るくならぬうちに、立去る。もともと自己恋慕的^{ナルシスムス}性情の濃いみつ子は、破壊的な狂暴な親方の手にかかつては一たまりもなかった。そして、その出来事を僕に告白するのだった……僕はきいている中に気が狂いそうになり、息ばかり烈しくなり、胸がつまりそうになった。相手は家主であり遅い仕事師だ、畜生！ と思っても、どうにもならぬ。体中がいかりでふるえてくる……それなのに、そういう報告を訴えながら、親方の不屈千万な淫行を喋舌

りながら、みつ子の瞳は、しだいに熱を帯びて濡れているのだった。どうも変だ……彼女はこの頃急に媚態が濃やかになり、体内の衝動的変化が表に現れたりするようになった……が、そのことに就いて、僕は口にすることをおそろしく思った。

じわりじわりと袋の鼠を追いつめて行くように、親方の魔手はみつ子のか弱い白いからだに伸びて行く。また、みつ子には淫らで執拗な親方の手をふりほどく力もなく、毎日のように、僕が仕事に出ている白昼でも、親方とおかみさんの△サド▽と△マゾ▽の世界を嫌応なしに見せつけられてしまう。つまり、「マゾヒストにしても、決して生れながらのものではなく、個人的な嗜好が自己陶醉の体験まで高められ、それが撰択権を持つようになる(第二の性)」という境地に突入しているのだった。みつ子は、もう正常な性愛行動の単調な起伏には堪えられなくなって、親方と僕との二重幻像をいだき、「あなたのきたない陽焼けして、不潔な手で……」いつまでも何処でも愛撫してくれ、と言うようになってしまふ。

以上は、この物語「閨房新風説」のほんの導入部分に過ぎないが、女性における肉体と

心理の謎は、とても解明しつくされるものではないという、後味の悪い息ぐるしい感想が残る作品である。

◇ ◇ ◇

「窃視録」(第12号第14号)は、第10号第11号に載った「輪姦願望」に同じく、『高資料』に拠った……。この資料は、もと回春堂病院長、雑誌『性と愛』主幹、ドクトル山尾清氏をめぐって結成された第三次木曜会の同人が蒐集した性生活記録を、同会解散後、若干の有志が整理し、文章を調整し、単なる手記記録に過ぎなかったものに、聊か文学的潤色を試みたものだが、資料そのものを歪曲するようなことはしなかった、と言い何故文学的潤色したかという、文学の一ジャンルに「性欲文学」というものがあり得ると、その主張を確信し実証したかったからだ、とも言っている。また、性欲文学の中で扱われる不倫と悖徳は、我々の経験上、必ずしも不倫と悖徳を刺戟するのではなく、その点社会主義文学が、それを読む者に、社会主義イデオロギを眼覚ましめるのとは自ら異っている……。性欲文学は閨房文学としてある事が正しい在り方であるから、之を閨房以外に持ち出すことは禁忌す可き筈であるが、然しこ

の資料は性生活記録として性研究資料価値をも兼ねているから、之を閨房内に閉込めて置くというのも当を得ない。——と、大要以上の如く前書している。高資料は雑誌に二編を發表、のちに『風俗資料』と題して単行本三冊を發行した。

「窃視録」は手記記録者の思春期前後の青少年期から、結婚までの独身期、それ以後の結婚生活期に至るまで、あらゆる機会を利用して、猥褻な窃視を行った詳細な告白で、その觀察を克明に記録したものである。特に、結婚後はしだいに窃視癖が昂じて、まったく明瞭なる変態性欲者と化し、自分の妻を、朝鮮系少年や町會議員に策を弄して姦通せしめ、その行為を秘密にのぞくことによって、自己の性欲を興奮せしめるという、完全に異常な病的心理の所有者となってしまう迄の物語である。

従来の艶笑文献とは違った、異相な余りにも現実的な描写に、つまり筆を省略するといふことをしない、行為・心理・背景ともに同等の筆力を傾注しつくした、読み応えのある作品である、——詳細に亘って紹介できない点を惜しむ。

この高資料編纂者が、繰り返し主張してい

ることは、「性的イリュージョンを豊富ならしむることが精一杯であって、それ以上の悪徳には加担しないものである」と言うことなのだが、つまり判り易く説明すれば、一巻のブルーフィルムでも観たような後くされのないう気持ちでいて欲しい、と読者に願うのだが、「窃視録」はその唱道する通り、まさに性欲文学という新ジャンルを形成したようである。おそろしい作品である。

『生活文化』は昭和二十八年二月に創刊、昭和二十九年五月に終刊した。そして『造化』に接続するのだが、二誌共にまったく法規無視の無政府出版物で、江戸時代は別として、また将来の我国の出版文化がどのように変貌するか分らないけれども、この種の特殊雑誌が、まるで市販雑誌と同様に毎月発行するなごといふことは、まさに未曾有の事柄で、よくぞこれまでやれたものだ、と、改めて驚嘆する。それもこれも八敗戦Vという異常人心の流れの果てにうまれた思想からで、読者は遂に行きつく所まで来たという、痛快な満足感が得られるのだけれども、やがて、惨敗への道が間近に迫ってくることを知るだろう。

『造化』に続く最後の性風俗資料雑誌『新生』を次に語る前に、生活文化資料研究会よ

り刊行された文献類に就いて一瞥してみたい。これらは生活文化、造化ともに共通するものである。

江戸艶本叢刊 二冊 枕文庫初編（複製）
徳川性典大鑑 二冊 淫書開好記（複製）
四畳半襖の下張 通不通堪鹿運談（複製）
絵入去垢集（木版複製）肉筆着色裸体珍画集
ヌード傑作写真集 風流戯画（木版）
歌麿・床の梅（コロタイプ）
乱れ雲（大正艶本）
柳の葉末（艶句集） 子種時（江戸性典）
風俗資料 三冊 完訳痴姿子伝
バイロス画集 二冊 三大奇書
黄素妙論 壇之浦戦記

当時の案内状や現品実見によって記載したが、これらはその一端にすぎず、研究会製作以外の各所からの持込みの猥物的物品は実に膨大な数にのぼり、性愛秘具・媚薬・避妊薬・強精剤・猥褻玩具・エロ写真・特志私家出版物・責写真・傍系会員雑誌刊行物・錦絵写真複製・江戸艶本原本・等々もし今日これらの目録が完備できたら絶好の性文化資料となること受合である。資料刊行物の造本に就いて一言すれば、大判のバイロス画集が美術書だけに流石によく出来ているが、他は不便な印

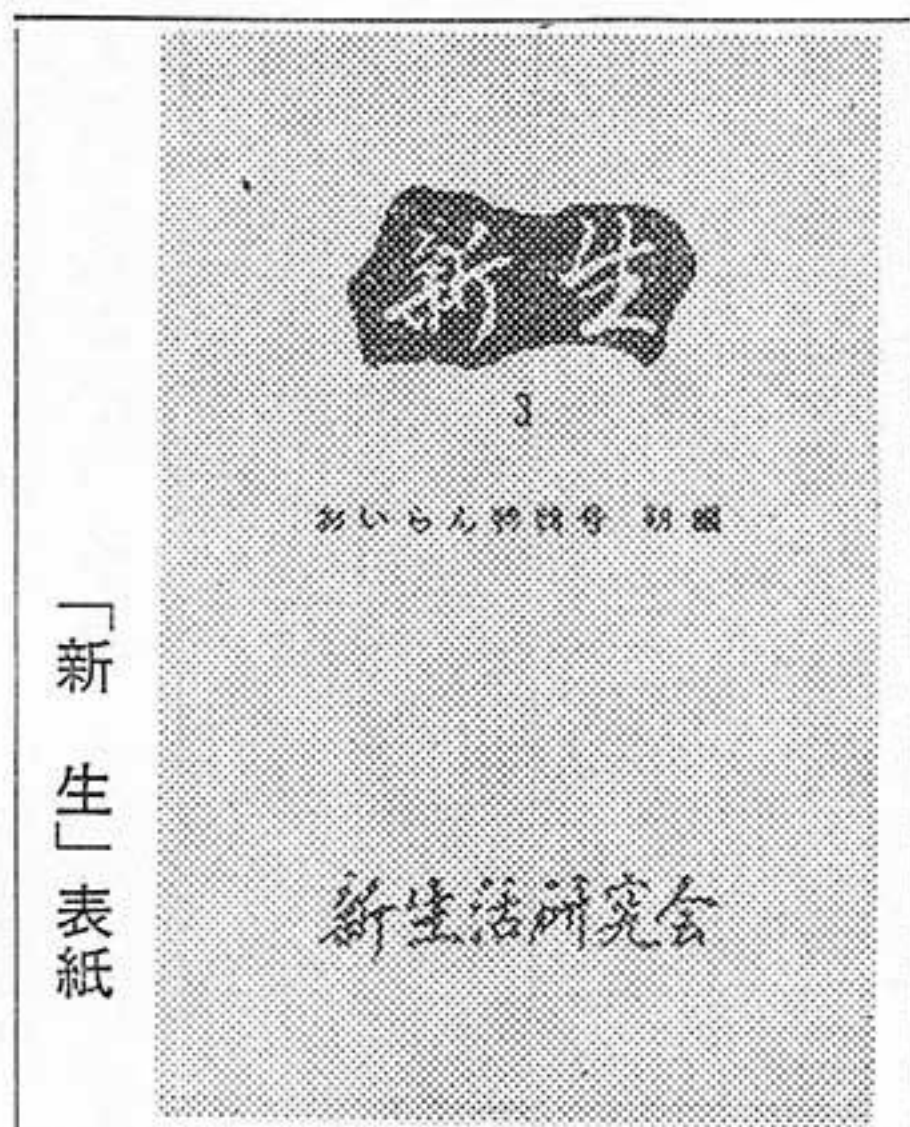
刷事情にもよるが、図版は写真版・凸版をつかっていても、本文は孔版タイプだったりして苦しい印刷様式のものが多かったし、小型本が主で装幀も簡略だった。『徳川性典大鑑』と『江戸艶本傑作選』は帙入和綴の美本だった。

当時、頒価一冊九〇〇円だった『徳川性典大鑑』が、こんにちでは二万円というのが相場である。刊行者は以て瞑すべきであろう、その労苦はむくいられたのである——。然しそうした高価でも尚ひとに需められている、ということの意義に就いては、考えなければならぬ問題だと思う。

◇

◇

◇



「新生」表紙

『新生』創刊の辞

人間の生存と再生産——即ち子孫の維持に食と性の絶対欠くべからざるものであることは何人と雖も否定することは出来ない。然るに、食生活の改善は広く呼びかけられると共に、実際にその知識の普及が行はれつつあるにも拘らず、性知識は明治維新以来、似而非道德家、似而非宗教家たちの横行するにつれて、徐々に社会の裏面に押しやられてしまった。戦後民主主義の興隆に伴って、この方面にも漸く光明がさしかけて来たが、これを維新前に比べるならば、なほ甚しい距りがある。我々が徳川期の風俗文献の紹介に力を注いで来たのも、幾分でもこのレベルに近づけようという意図によるものである。徳川時代の人民は、ガンジガラメの拘束の中にあつたとはいえ、人生須要の性知識の吸収と、これが愛用については、なほ相当の自由を保有していた。当時の庶民文学に見えるところの、人生観の明るさは多くこれに起因するというのが識者の定論となっている。漸く強権政治への移行の萌しが顕著となって来た現在、我々は個人生活の最後の牙城である、性生活までも圧迫しようとする企てに対しては、

断呼として戦わなければならない。

私は先年来、この方面の知識の啓蒙普及に微力を尽して来たが、不幸にして当局の嫌忌に触れるところとなり、私の主宰する「造化研究会」は弾圧の下に解散の止むなきに至った。ダンテはベアトリーチェとの愛によって新しい人生への開眼をして、その詞華集を「新生」と名づけた。私は壊滅した我々の会の再出発に際して同じく「新生」と名づけた。

この巻頭言の起草者は会長・川崎清一である。性生活は個人生活の最後の牙城だ、と言った、泪ぐましい真情に溢れた言葉である。

この章の始めに要約した、あまとりあ(昭和28・4)の巻頭言にくらべると、矢鱈と短章のうちに権威のありそうな社名・人名などを並べ立てて笠に着たりしないで、直情真摯な態度でものを言っている。今になって想えば刊行者は最後の意地をつらぬいたもので、破れかぶれの境地に立っていたのである。始めにも記したように、一連のこの資料誌は、あまとりあ系の資本によって設立されたことに疑念はない。広橋梵とか川崎清一は風俗文献誌上においては、編集者・発行者という以外に、まとまった特別の業績を残した人では

なかった。傀儡として踊らされたに過ぎなかった、それで人生を棒に振った人たちである——。雑誌『あまとりあ』の晩期にはその社は経営に苦しんだ時期もあり、その折には、逆に旦那（資本系）に金をみつぎ込んでいたとも言われているから、情のふかい商売女みたいで、殉情可憐でいじらしいではないか。

『新生』は全五冊。謄写版印刷三冊、活版二冊、惨憺たるもので、刊行事情の系譜を知らなければ、印刷のキタナイ雑誌で、とてもこれを手に取っても眼が疲れて読む気が起らない。然し性雑誌のうちで揃物を最も入手できないのが、この『新生』なのである。この種の印刷物の通例として刊記はないけれど、『造化』停刊は昭和三十年四月、その直後より発行された様子である。

第一号 口絵・陰門見八化異図

徳川性文献に現れたる背交位諸態高橋鉄。オーガズムと性交態位論 R・ケリー 大場正史訳。性交態位の医学的考察 宇佐美正夫。川柳体位考 岡田甫。噛みつく女坂ノ上言夫。残像（会員体験報告）。快鳴考 阿南岳史。香閨秘記 甚眉軒主人訳。

第二号

態位より見たる性交運動について 宇佐美

正夫。いかにして結婚生活を幸福に導くか・ソートン夫妻共著「性書」の紹介 平野威馬雄。女難草（会員性史）。艶道の大意 岡田甫。衛生秘要抄の研究 伏見冲敬。お茶碗の肌（回想記）牡丹耽八。

第三号（活版）

おいらん特輯号 初編 逸名氏原著 青山繁補綴

第四号

性の祭典 坂ノ上言夫。ソートン夫妻の共著（続）平野威馬雄。お茶碗の肌（続）。愛の饗宴サド原作。いつわりの橋 角田庄平。泉平の話（会員報告）。香閨秘記（続）

第五号（活版）

おいらん 中編

結局、内容としては生活文化・造化のストック原稿を整理した程度に過ぎず、何といっても謄写版印刷という制約下の仕事だったので、捲土重来の意気込みだけに了ってしまい盛り上りを見せることができなかった。特記すべき点は「おいらん」という秘文献を二冊も特集号として発表したことである——。

◇ ◇ ◇

この「おいらん」という物語は、既に雑誌『あまとりあ』に（昭和29、1・3・4月号

に亘って）青山繁により、その全編が紹介済みとなっているから梗概を知ることができ。勿論忌避さるべき文字に富んでいるから、物足りない所が多いけれど、市販雑誌であるから現在でも入手し易い。大正末期から昭和初期の花街性風俗資料として、また社会裏面史にも関連し、作者の性遍歴のおもしろ味もさることながら、私娼の風俗や遊興費に至るまでの細い記載もあって興味深い。著者は横川三郎となっているが仮名である。「おいらん」は次の六編を以って構成されてる。

1 悪友 2 鋸合戦 3 川崎の夜 4 遊女の貞操 5 第四号室 6 拾円札の価値

作者は平井蒼太だといわれている。ついでに戦前の軟派雑誌その他に発表された平井の文章を探し出すと次の通りである。

『浪速賤娼』（昭和9年自刊）。『想嫁考』

（孔版、刊年不詳）。『大阪賤娼誌』（『犯罪科学』昭和5・12）。

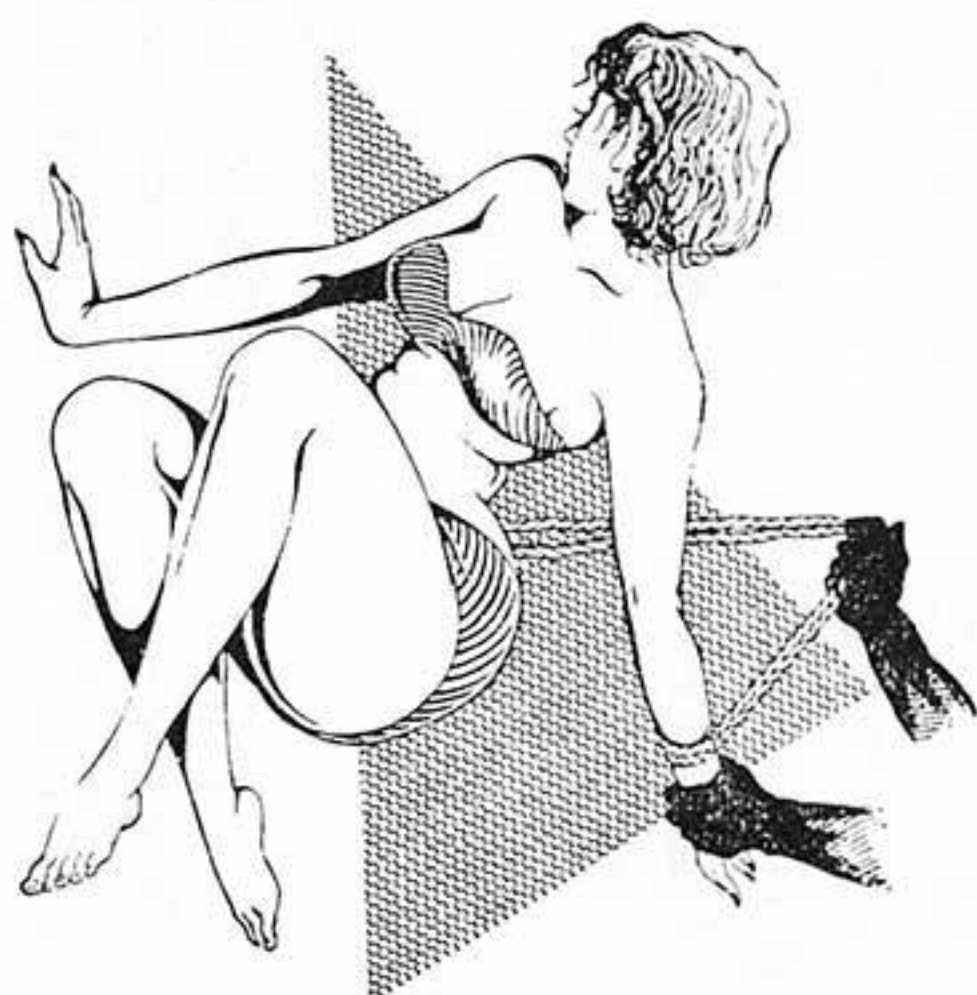
『大阪の男娼街』（『犯罪実話』昭和7・5）。『風俗資料』

の昭和五年度に「想嫁時世粧」「見世物女角力志」「同、続編」。『変態黄表紙』（昭和3、4年）に「女角力誌考」「紅説緋縮緬和讃」。雑誌『匂へる園』（昭和7年

度）に「末摘花及び其類句」「おぢゃれ考」

「鮑とり」（『談奇党』昭和7・3）。等々、まださがせば出て来るであろう。婦人の腰巻、月経に関する迷信、遊女のおまじない、私娼・男娼の生活、海女、女角力、見世物、などを素材に書いている。戦後は女子無毛症を主題に薔薇蒼太郎名で一連のかわらけ小説を発表していたが、あまとりあ廃刊と同時に筆を絶った。

稿本「おいらん」は昭和七年頃の執筆だ



その一

S傾向の男性が、妻を娶る場合、不可欠の

が、とにかく二十年以上も地下に眠っていたものを掘り出したのは、雑誌『新生』の大手柄だった——あるいは最後の松明を聖（性）なる殿堂に捧げたものであったのかもしれない。原稿本は四百字詰約九十三枚で、青山繁紹介文にある二百枚はまちがいである。尚、伝えて置きたかったが、途中でペンを挿む場所がなかったが『生活文化』『造化』の編輯者広橋梵は刊行途中で病にたおれ、の

こり少い青春を精神病院のベッドに埋め、『新生』発行者川崎清一は心労の重りから、不幸にも急死したということである。共に、この二人は考えようでは△時代▽の犠牲者でもあった……。人の身は危急存亡のもとにある時△明日をも知れぬ命▽という言葉をつかう、特殊風俗雑誌の刊行者も又△明日▽はどうなる運命やら、はかり知られぬ毎日々々だったであろう。

マニアの落書

女と縄のある限り

能 美 積

条件として私は妻を自由に、否、不自由に成し得る事を第一義だと考えます。如何に才色兼備の美女を得ても意のままにならぬでは、

全く結婚の意味が無い。ましてや、妻に己れの性向を恥じて打明けられず、悶々の日を送るなぞに至っては、愚かです。

たしかに、私はサジストであるなどとは公表出来ぬ事でしょう。然し文字通り寝食を共にし、嫌でも応でも死ぬまでその総てをさらけだす夫婦であってみれば、事の序でに、何かの方法で己れの主張を通してみるべきではないでしょうか？ でなければ貴方は一生を通じて最愛の妻をだましつづける事になる。極論でしょうか……。

奇ク十月号に天道光男氏が、拙作、「責め絵のある関係」をとりあげて下さり、温かい御批判を下されたので御返事を兼ねて一言申し述べたいと思うのですが、多少共SMに心のある女性に巡り合えた、というよりも女性総じてMであるので、たまたま私のS性と合致したのではないのでしょうか。つまり私がSである事を主張したので、女はMに落着いた。そう私は解釈しておるのです。

もっとも数年前までは私はSという事に何の関心もありませんでしたし、愚妻雅代も今以ってM性を発揮してはくれません。いわゆる亭主の好きななんとやらで、私がそうであるから止むなく同調していると思えるのに過ぎないのです。

むろん私は雅代に対して、M、つまり縛ら

れたり、責められたりされて喜ぶ女に、なつて欲しいなどとは望みません。すくなく共、現状はそうなのです。体験記に詳述しましたように、たしかに私は、婚前に雅代を縛る機会を得ました。でもそれは、一人の女を奪う手段として、行なった事で、SMの世界とは全く関係はないのです。

ですから、当然の報いとして結婚せざるを得なくなったので、仰つ有るように多少どころか充分に芳子に対して未練は有りました。でも正しく、サイは投げられたのですから諦めらるのも又、当然な成行きだったのです。そんな訳で私達二人は、SMとはなんのかかわりもなく、結ばれたのです。

ブツチャケた話をしますと。新婚初夜のその日から、たしかに私は縄について考えない日は有りませんでした。悩みに悩み、ついに打ち明けずに終るなどという程の大袈裟なものではないけれど、なんとかしないとだんだんやり辛くなるぞ、位には思っていたものです。そしてその通りになったのです。

新婚旅行を済ませ、両方の里へも帰り、仲人である知人（以下親爺という愛称で呼ばせて貰う）の許へ挨拶へ行った帰路、雅代は、

親爺の夫人の手首の処が赤く腫れあがっていた、というのです。伯父さんは良い人だけどもHな事をするから伯母さんが気の毒やわ。大要、そんな事を云ったものです。私はなんとなくタメイキが出ました。でもそれくらいでは、決して諦めたりはしませんでした。オレ達二人の生活は、まだ始まったばかりなのだから。そう自分に云い聞かせて、気を取り直したものでした。

その二

最近、雅代は暇な折など、婦人雑誌をめくるような調子で、奇クを読むようになりました。以前、親爺の処で働いている折にも盗視をした前科があるので、別にどうという事もないのですが余程の事がない限り、本文を読むむような事はないのに、どういう訳か、熱心に見ているな、と思っていると、急にプツと吹き出すのです。どうしたのか？ と尋ねると、

「この本の人、案外純情なのね。……もっともあなたが特別製の変態なのかもわかんないけどな」

と言ったものです。雅代の見ていたのは末

尾にある読者通信の欄でした。結婚して七年になる男性のもので、妻が自分の性向を認めてくれず悶々の日を送っているのだが、誰方かM性の女性の方、プレイに応じてくれないか。という意味のものでした。

私はSを以って自任していますが、読書が好きで奇クもSは勿論、凡ゆるものに目を通すのですが、読者通信だけは見た事がありません。でも此の投書が気になって、一日を費やし、手持の既刊号を片っ端から読んだものです。これは大変な収獲でした。編集長宛の私の通信も発見しましたし、奇クへの批判やら、お互の呼びかけやら。そして前記の悩める夫族のなんと多い事か……。無論、独身の諸氏も含めてです。

話が前後して申し訳ありません。要するに私が此の手記を書く気になった最大の因は其処にあった、という事を知って置いて欲しかったのです。閑話休題。

三月程して、非番の朝でした。私は朝食はとらない主義です。代りに朝酌をやります。つまり晩酌の代りです。後は床に入って睡眠をとるか、眠くない時は映画に行きます。むろん一人で出掛けます。雅代には女の観るよ

うな映画では無い、といてありますので同行を求めるような事は有りません。連れて行く時には差し障りのない物を選びます。

三月程して、というのは結婚以来という事です。現在でも縛りのある映画は絶対に観せません。物語に登場する悪党と、夫である私とを混同されては、プレイにマイナスになる事はあっても、決してプラスにはならないと思うからです。

雅代は、例によって朝酒を楽しんでいる私に「十五分間だけお隣に行ってもいい？」といました。テレビを観せてもらう為です。「おはなはん」という番組が人気のあった頃でした。

職業柄、私はテレビを余り見ません。お互いに異郷で式を挙げた関係で、家財道具等も二人で揃えたのですが、安眠を妨害し、眼の疲れるテレビは不要、という理由で買ってなかったのです。（誰です、ゼニが無かったのだらうって。つやけし）

十五分間、私は考えたものです。この三カ月間、妻を縛る、その一事の為に私はあらゆる策謀を練ったものです。例えば、夜具の中では女性の手は不要なものであるという事を

印象づけるように努力しました。両手を頭の上で押えておいて、その曲線の美しさを殊更に賞でてやったり、（のろけをいうな、とは言わないで下さい。あたしは真剣なんです）奇クをわざと開けて放置したり、他愛ないものです。

反応はありません。仮に雅代が何かを察知したとしても、M性でない限り、此の程度では積極的に応じてくれる訳はないでしょう。後は只、何かのキッカケを掴んで、男性側から行動に移すより方法はありますまい。

でもそれは多分に危険を含んでいます。下手をすると、夫への嫌悪、不信等が湧き、つり、そしてやがては離婚という事にもなりかねません。だからこそSの衝動を覚える世の男性は、天道氏の仰有るように、悩みに悩むという事になる訳でしょう。このまま自身自身を無理に押さえつけて、悶々の日を送るか、或は離婚覚悟で行動するか、は、総て男性側の決断にかかっている訳です。

私は、後者を選ぶ事に始めから決めています。やってみなければ解らない、但し決断といったような早急なものでなく、じわじわとそのキッカケを待っていたのです。

今考えてみますと、このじわじわの期間も私は別に悩んではいなかったようです。むしろ楽しんでいたのかも知れません。結婚によって捕えた獲物を、いつ、どんな方法で縛りあげるか。猫が鼠をいたぶる。それに似て、舌舐めずりをしながら観念するのを待つ。これも又サジストの特権に通ずるのではないのでしょうか。

雅代が戻ってくると私は、これからテレビを買いに行こう。と言ってやりました。雅代の喜び方は想像以上のものでした。無理もありません。今時、テレビのないアパートなんてありっこないし、週の内、四日は家にいない私です。余程淋しかったのでしよう。涙を流さんばかりの感激振りで、早速外出の支度を始めたものです。

私は態と冷静に条件を出しました。運転手という職業上、私は、テレビを観る事はしない。であるからあくまでも君自身の為を買うのだ。だから私の睡眠中は絶対に見ない事。というものです。

雅代はその条件を即座に承諾しました。私は序でに、君だけの為に六万円を投ずるのはなんとも痛い、と女々しくも渋ってみせたの

です。雅代は、買ってくれたらどんなサービスでもする、と甘えかかってきました。単純な彼女は、或は多分に単純を装っている彼女は？ 表面上は少しずつ私の網の中に入ってきたように思えたのです。サービスなんかは望まない。今の君で私は充分満足なんだ。但し約束を破ったら罰を加える。それだけというのが精一杯の私。

「いいわよ。殺されたってあなたの命令にそむいて、罰をうけるような事はしないわ。だから買って」
いやはや、なにをかいわんやです。

その三

『快楽を強烈にするためには、男は女の犠牲においてのみ、享楽を得るものであるという考えを徹底させよ』

大先輩、マルキ・ド・サド氏の格言です。妻が夫に縛られるという事は、後はどうあれ矢張り始めは、女の犠牲心によって行われる事と、いえるでしょう。その行為に於て、真の快楽を得ることの出来るのはサド夫だけであって、妻は苦痛を強いられるのですから問題は厄介なのです。

何十回、何百回、責めを、縛りを繰り返しても、余程の事が無い限り、普通一般の女は被虐の喜びにめざめるものではありません。他を論ずる資格など、私にはありませんが、少く共、私の体験ではそうなのです。では、愛妻にそれを強いるのをやめれば良い、なぞとは奇クファンなら仰有らないでしょう……が。

雅代は、私とのその約束を忠実に実行しました。私はかつて、愛人であった芳子にステレオをただ取りされたように、テレビも又、今度は雅代に無駄取りされちゃったような妙な気分で落着きませんでした。

いくら夫婦であるから慌てる事はないといっても、じわじわ趣味にも限度があります。型に嵌った夫婦が出来上ったら、其の殻を破るのは困難なのです。唯一の友である親爺に会うたびに、私は愚痴るようになりました。雅代に素質があると、私に押し付けようとしたのも、この親爺です。

「まあ慌てる事ないがな。わいらの例もあることやし、その内、わいが雅代に……」
しかし、この申し出は断りました。如何に友人でもそういう形で雅代を納得させるなん

て私は嫌なのです。独力の涙ぐましい闘いを私は続けました。

八時になると、テレビのスイッチを入れま
す。逃亡者という番組をみるのです。ヒュー
マンなドラマだから是非観るように雅代にも
勧めます。八時三十分CM。これから場面は
どのように発展するのか、練りに練られた脚
本らしく興味があります。が、私は突然席を
たちます。疲れた、と云い捨てて別室へ去り
ベッドへもぐります。すると雅代は、間髪を
おかずスイッチを切るのです。

夫の心、妻知らず、とでも云いますか。然
し諦めはしません。私は、こんなことぐらい
で絶対に諦めては駄目だと思ったのです。私
が、そして、あなたがSの王者と成り得るの
は、この広い世界に、妻をおいて他にはない
のですから、少しぐらいは子供だましみたい
な生き方を、自己嫌悪するような事があって
も、くじけずに斗わねばなりません。

六カ月を経てしまいました。何等効果もな
いままにです。私はなんとなく、手中の花を
どうする事もできずにいらしている自分
が、ぎゃくに雅代になぶられているみたい
な錯覚に陥る事さえありました。

雅代がイヤホーンを使ってテレビをみてい
るのを発見したのは、そんな時でした。女と
はかしいものです。或は私がかつたのか
も知れませんが……。ベッドの中でウトウト
していた私は、奇異な声にはっきりと眼覚め
ました。夜の事です。隣の奥さんがビールを
借りに来たのですが、慌てた雅代が、耳栓を
外さずに立ち上ったひょうしにコードが外れ
たのでした。声はすぐに消されましたが、代
りに二人の会話がきこえてきました。

「あら旦那さま非番なのね。御免なさい」

「叱っ、ぬすみ視してるの。内証よ」

ついに六カ月目にして、六万円のテレビは
その本来の目的を果たしてくれたのです。私は
入口に施錠して雅代にテレビの前に坐るよう
に命じました。

「約束を破ったから罰をあたえる。いいね」

「だって、襖をしめてイヤホーンできいてる
から、別に迷惑にはならないと思って」

「いい訳にはならない。然も君は盗み見をし
ているといったね。罪を意識して罪を犯す。
厳罰もんだぞ。どうだ？」

「はい、悪うございました。今後は絶対にい
たしませんから許してヨ。ねっ」

「駄目だ。口先だけでは性根が入らない。そ
れに今迄にも度々観ていたんだろう」

「ええ。でも、ほんのチョクチョク」

「ますます、許せん。罰をあたえる」

「仕方ないって。でも、一体どんな罰をうけ
ることになるの？」

「そうだな、絶食三日というのはどうだ」

「そんな。無茶やわ。重すぎるわよ」

「重すぎるという事はない。もしだぞ、その
為に私が睡眠不足になり、とんでもない事故
を起したらどうなる。即死でもしたらどうす
るつもりだ」

「でもよ、三日も食べさせて貰えなかったら
あたしも死んでしまうかも知れないわよ」

「それもそうだな。では一カ月の外出禁止」

「きつい。残酷よ。絶対反対」

「そんなら一時間の正座というのはどうだ？
これなら軽すぎる位だろう」

雅代は諦めた、というよりは私に本当に罰
を与える意志はないとみくびって、不承不承
に承服しました。私は細紐を一本解くように
命じました。

「私は寝る。勝手に動かないように足は括っ
ておくからね」

「そんな、まるで罪人みたいなの……」

「そうさ、君は罪人だよ。夫の目を盗んで悪い事をするような女だからね。括っておかなくて安心出来ん。一時間経ったら起せばいい。テレビは見せてやる」

雅代は、ブツブツ言っていました。私は構わず両の手を背後で縛り、両足も固定しました。それから、さっさと席を立つと、あいの襖をピシャリッと、しめてやりました。

それが結婚以来、一日として忘れた事なかった、プレイの序奏だったのです。

その四

このようにして、曲りなりにも私は雅代を縛る事に成功しました。一時間後、私は雅代に呼ばれて再びその背後に立ちました。

「どうだ。もう二度と悪い事をしないと約束するかい」

「足が痛いわ。ねえ、早く解いてよ」

「反省の色がないな。もう暫くそうしていたいのなら、それもいい」

「充分、反省しました。だから早くう」

私は細紐を解くために、雅代をその場に押し倒してやりました……。

話が前後して申し訳ないのですが、最近になって二つの事件が持ち上りました。一つは、私の書いた物が奇クに掲載された事に就いてです。稿料が届けられた時に私は適当に胡魔化して置いたのですが、「続・責め絵のある関係」をよんだ親爺のおくさんが、雅代を連れて買物に行った時、

「能美さんて、あたしの事をあんな風を書くなんて人権侵害もいいところよ」

と、いつてしまったのだそうです。

ツンボ機敷に置かれていた雅代は驚いて、おくさんの宅に行き、奇クを見せてもらったのだそうですが、

「私生活をかいてまで、お小遣稼ぎをしなくても良さそうなもの」

と、女性二人に猛烈に抗議されてしまったのです。冗談ではありません。私は奇クのファンです。私だけのものつ秘かな楽しみ、それは到底、彼女らの理解する処ではないのかも知れませんが。なんでもすぐに奥さんに公開する親爺。稿料の半分は、アルコールになって自分の腹の中に納めた筈なのに……。

もう一つは、ラジオ番組が縁となって三人の芦屋夫人と親しくなれた事です。とくに、

その内の一人は、団先生の「花と蛇」の読後感をよせて下さいました。そんな事からますます親密になり、先日は三夫人とピンク映画を観賞しました。

世の中は広いようでせまいものです。という事は、SMに関心をお持ちの方が意外に多いという事なのです。

天道さん、自分の性格を恋人に話すというような冒険は止めるべきです。まず妻にする事です。そして絶対に愛してあげようではありませんか。

私なんか向う三軒両隣に、優しい亭主で通っております。雅代に言われて気軽に洗濯物を取りこむ私。そんな私が夜ともなれば、縛りあげた妻を膝下に組み敷く事も自由なのです。昼と夜の世界。それはあなたが造りあげねばならないもの、だと私は思うのです。暴言は何卒お許し下さい。長くなりますので私のたわ言は一旦筆を置かせて頂きますが、次回、夫婦プレイは添物程度にして、一夫人の「花と蛇」読後感を中心に駄弁ってみたいと思います。

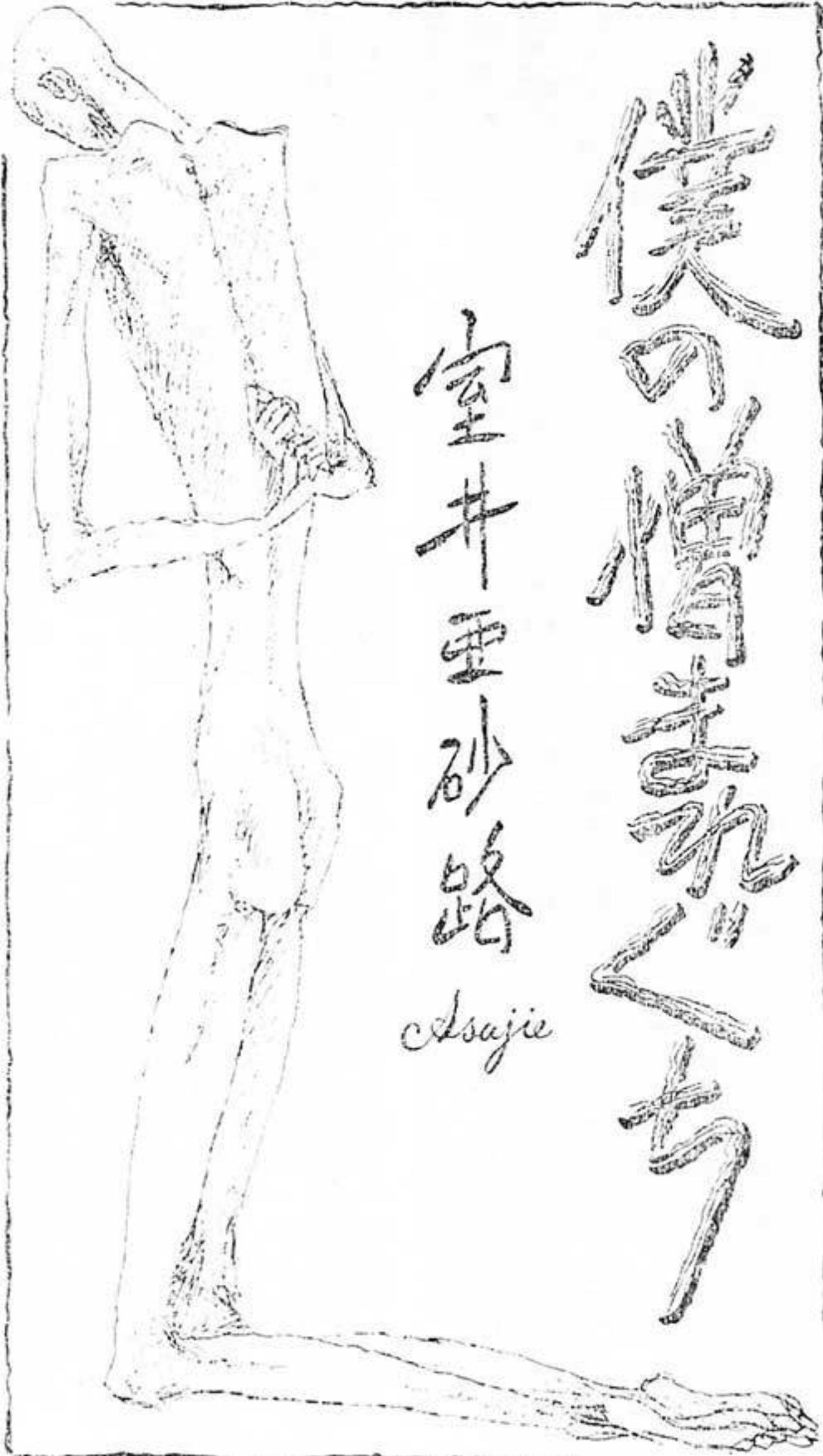
女と縄のある限り、此の世界に終りという文字は不要なのです。

—未完—

僕にくまれ口

室井亜砂路

Asajie



豪華絢爛たるポリショイバレーも場末のストリップも、ショウは哀しい。ジントのせいだけでもなく、呼込みの調子のせいだけでもない。いくら現代風な健全娛樂ムードにイメージを塗り変えても、この哀しさはあらゆるショウにつきまとう。この哀しさこそ人間の生命そのものの持つ哀しさなのだ、と僕はストリップ劇場を出ながら考える。

ストリップを観にゆくのは決して芸術観賞

に行くわけではなく、ただ踊子だけが対象なのだが、肉体とは不思議なもので、銭湯で洗面器を抱えていれば誰々の女房でありどこそこの娘であるに過ぎないのが、一度舞台のスポットライトを浴びれば、忽ち生命の輝きそのものになって、そうした哀しさが観客の持つめいめいの哀しさに向って直接吹きつけるのである。だから劇場から出て来る男達は肉親の死に立ち合って来た時の様に肅然とした

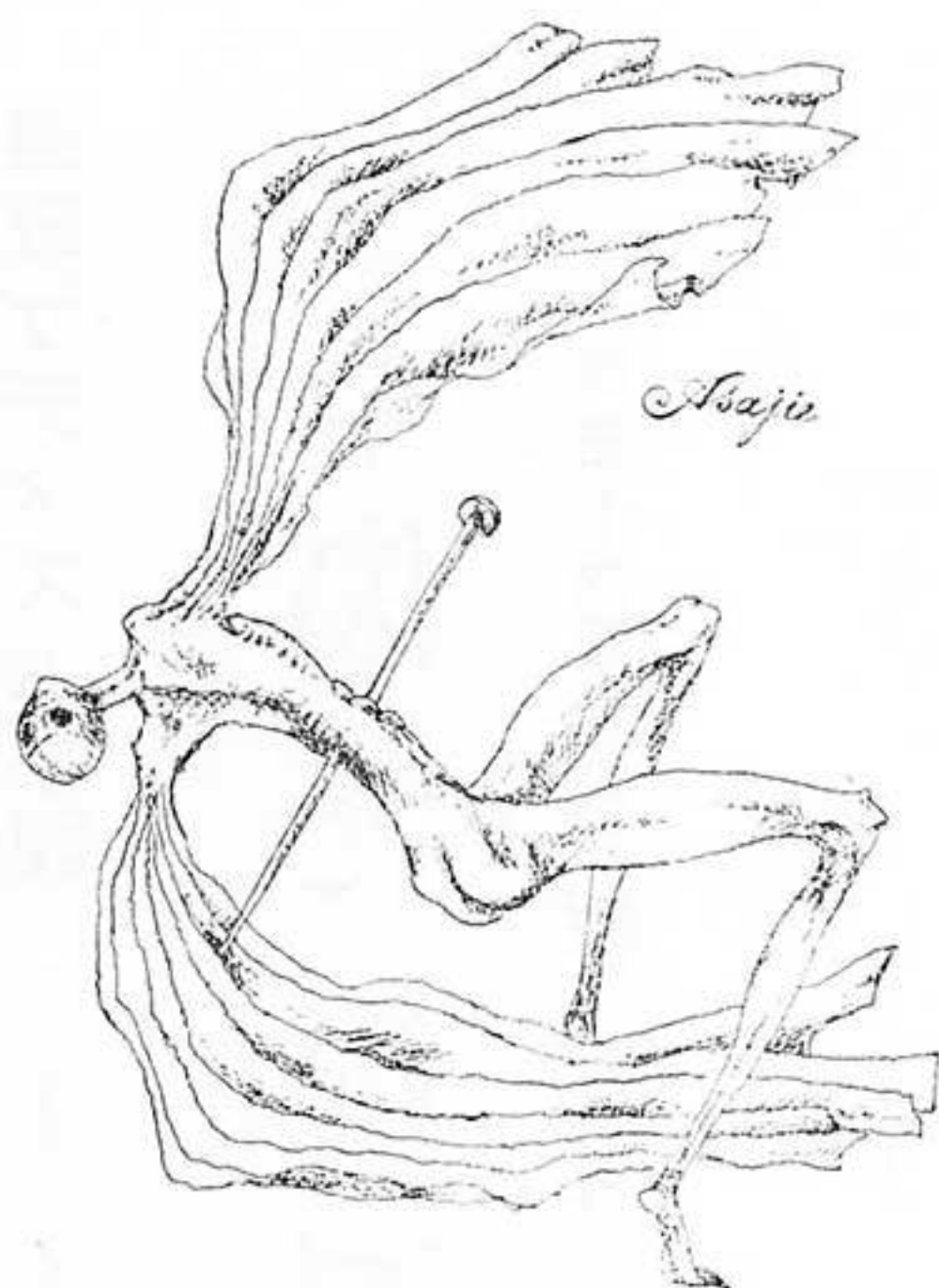
顔つきで、子供に土産の一つも買ってみたり、フト郷里の母親の事を柄にもなく想い出したりしている。そうした善心は、観てはいけないものを観てしまった、という後めたさであって、人間にとって観てはいけないものとは人間の死そのものでしかない。

人間の肉体というのは一見死から最も遠い時代、若々しく美しくければ美しい程、死を感じさせる。と言うよりも、命は死と隣り合わせになった時、もっとも美しく輝く。ボディビルで作られた不自然な程立派な若者達の肉体は、みな死の臭いがする。舞台に生きる芸人達、バレリーナやサーカスの団員、アクロバットやストリッパー、競馬の騎手やプロボクサーにいたるまで、肉体に生活を賭けて生きる人達は、皆多かれ少なかれそうした死と隣り合った生命の一抹の哀しさをその肉体に表わしている。

昔々、男達が手に手に石斧を持って、荒野に猪を追いかけていた狩猟時代には、彼達の肉体は皆、生命に輝いていただろうが、今日若者達は石斧のかわりに一斉にヘアドライヤーと男性用整髪剤を持ち、女達はテレビのモーニングショウと、女性週刊誌のナルチャンの写真に眼をほそめている日常では、死の

恐怖も無いかわりに、生命の輝きなど在于るわけもなく、それどころか、自分の生死など考えたこともなく、ズルズルと無自覚に生活し続けるのである。

かつて略奪結婚の時代には、若者は何里も先の部落から、目ざす娘をうばうために、夜を徹して山路を駆けつけたのであり、女を得るのはまさに生きるか死ぬかの冒険だったのである。夜道を駆ける若者の肩の上で、半死半生の夢うつつで娘を感じただろう男の、野獣のような生命へのおののきと恐怖を、今日、新幹線で新婚旅行にゆき、ナイロンネグリジェを着て、先にベッドに入った新郎が「君、早



くおいでよ」なんて言ってるのを聞きながら、女性週刊誌の性医学のページの切りぬき読んでおさらいする娘達が、はたして一生のうち一度でも感じる事があるだろうか。

だから、心ある男達はストリップ劇場に通い、もっと心ある男達は奇クを読み、更に心ある男たちはSMプレイに浸るのである。しかし、プレイは所詮プレイにすぎず、自分一人冷酷なサディストを気取ってみても、実は劣等感から生じた女性恐怖症で、対等に女と接する事が出来ないで、紳士的にしますと百万遍も繰返して、やっと女に縛らせてもらって、形の上だけ完全に支配的な立場にたっ

て始めて安心出来るという、サドだかマゾだかわからないのが大半の自称サディストの本心なので、もっと情無いのになると、二十三年の今日まで、プレイどころか女の手一つにぎった事も無く、欲求不満が嵩じて「僕のイメージ画集」などという、下手くそな責画を描き続けている室井亜砂路なんという男も居るが、こういうのは勿論、問題外である。

独身者の負惜しみついでに言う

と、夫婦プレイと言うのが流行っているらしいがこれこそ馴合いもいい所。健全なマイホームの中で、古女房と菱縄だ高手小手だと荷作りの練習みたいに縛りっこしていて、なにが面白いかね。と言ってもその人達が悪いのではなく、問題は今の社会通念そのものに在って、堅気の市民で生きる為にはこれもしくはたがなく、一世紀やそこいらで解決出来る問題ではないのである。

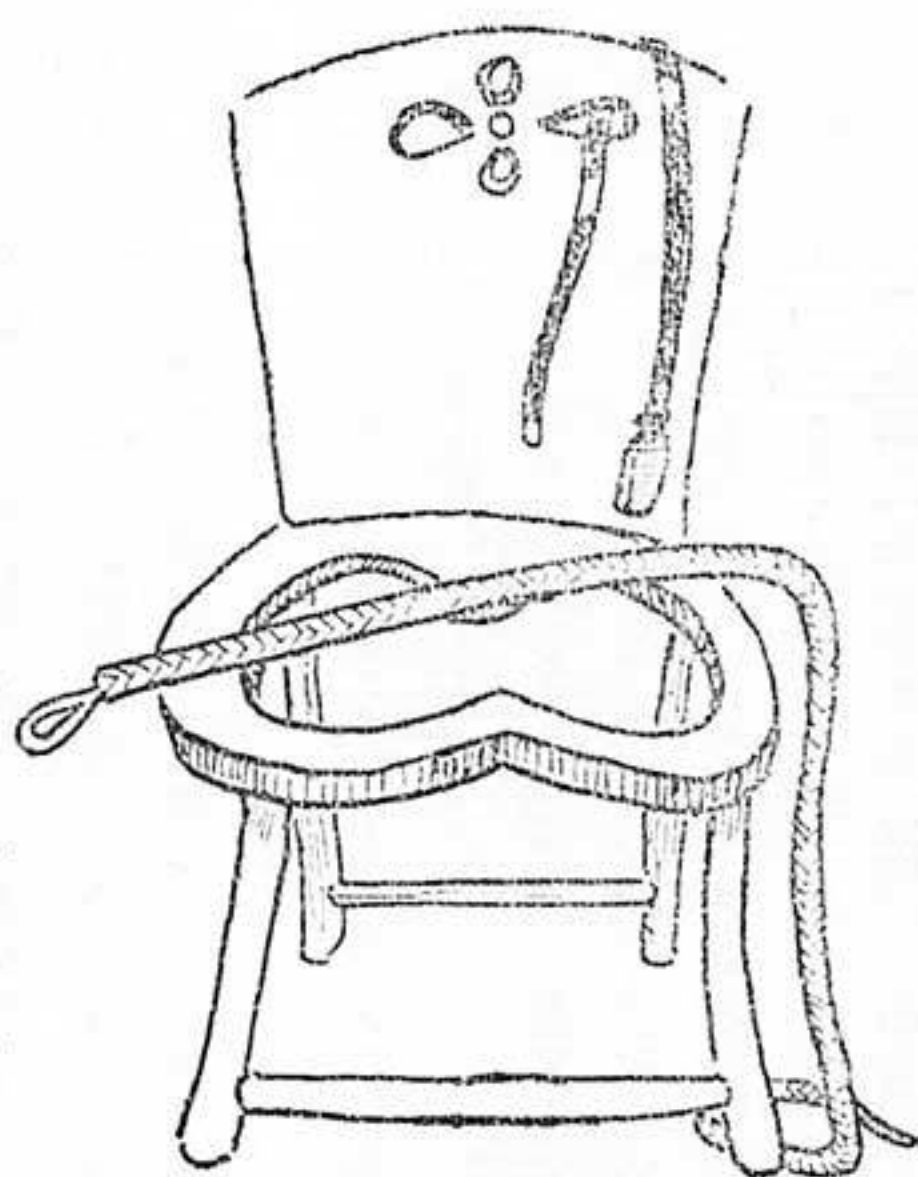
性と言う字は立心偏に生きると書く。つまり、過去もなく、未来もなく、ただひたすらその瞬間に、全身全霊を込めて生を生きるという崇高なものなのである。人間性不在の現代で、人間の尊厳を取戻す最後の場であるはずなのだが、斯様にマイホーム化し、既成品に成ってしまったて、はたしてこれがセックスなのかね、と思うのだが、これが文明というものであり、平和というものであり、洗練というものである。

死は燃えさかる生命のうちに見るからこそ美しい。現実の死は、ただ醜く恐しくいやなものではない。ただ、安全無害な社会に生きて、たとえ馴合いでも真似事でも、果てもなく原始的性の夢を追い続けるのも、人間の哀しさのなせる業^{わざ}なのか。

心^{こころ}傷^いたむ遍^{へん}歴^{れき}

第三十六章 仮釈放審査（二）

西 条 操



女囚キャプシーヌは呻いて膝を立て、よろけて腰を落し、やっとの思いで立ちあがって、もう一度呻いた。

扉のところで肩をふるわせ、クク、クと鳴咽し、促がされて連れ込まれた。

扉は分厚くて隙間とてなく、面接室の聲は控え室には洩れない。全神経を集中し、耳を澄ませて必死の思いに息さえ詰めて、残る女囚四人の胸は不安に襲われ、期待にときめき、そして、絶対の審判者たちへの畏怖の念に締めつけられた。

ことに、次に引き出されると悟った一五〇

号などは、壁を見詰める眼も据ってしまい、喘いで波打つその胸からは、慟悸の音が早鐘のように響いても来る。

キャプシーヌがしゃくりあげながら戻って来て、崩折れるように脚を折った。扉の向うでは、委員のお歴々たちが意見をまとめていることだろう。審査の結果は、全員の面接が一とおり済んでから改めて呼び出され、委員長から言い渡される。それまで待つのだ。

「お次を入れて下さいな」

女の子が顔を覗かせていい、ジャポネ娘の一五〇号がヒーと声をあげた。

「立って。おや？ あんまり嬉しくって締りがなくなったのかい？」

緊張のあまりに失禁してしまうということも屢々あるのだ。一五〇号は、辛うじてどうやら持ちこたえた。

「しっかりおし。裁判の言い渡しときはどうしてたんだえ？ まさか腰を抜かしたわけじゃあるまい？ どう転んだって、満期一杯より悪くなるこたないんだってば——」

「鉄砲玉に向って突撃するよりもさ、退却して逃げ切れるかどうかって瀬戸際の方が恐ろしいのよ。万国共通の心理ね。ジャポネだっ

て人間なもの」

「へえ？ 戦死した御亭主が枕辺に現われて
そう云ったのね、マルタ課長。こら、よろよ
ろするんじゃないよ。だいたい、こんな坐り
方はお前の国が元祖じゃないか。お蔭でみん
なが——。その正座の申し子がそんなザマで
恥ずかしくないのかい？ ま、来るんだ」

「まあ!! ワナワナ、ガチガチとふるえちゃ
って。寒いのかしら。こんな度胸のないのも
珍しいじゃない？ やっぱり、草や木の根っ
こばかり喰べて育ったからだよね」

「そうさ。だから、ヤンキーにシッポ振って
FLNに声援なんかしてるのよ。おっと、こ
んなこと関係ないわね。これッ、膝をシャン
と立ててッ、入りな」

ミシュリーヌよりも小柄なジャポネ娘は顔
をひきつらせ、しびれ、冷えきった膝をガク
ガクさせながら連れて行かれた。そして五分
ほどで戻って来た。

「ずいぶんと早かったじゃない？」

「そう。言葉のハンディキャップが、かえっ
て同情票を集めちゃったの。シドロモドロで
さア、何訊かれたって「すみません」——ど
う思ってるの？ “ハイ”——。そういうこ
とでウヤムヤと無事終了よ。まあね」

「へえ？ 私、とうとう、ジャポネ語を習い
そこねたってわけよね」

「まだ、もう一人いるわよ。少しトウが立っ
てるけど純血種よ。だって、髪の毛が全然ま
っすぐだもん。おや？ お前、私たちの云う
ことなら分かっちゃうんだね」

囚われの身の劣等感に加えて、さらに常々
身に泌みてみじめな人種的劣等感——ジャポ
ネ娘は安堵の吐息とともに唇を噛んだ。娑婆
の方々のお言葉は聞き取りそこねても、制服
女性のおっしゃることだけは、分らないでは
通して頂けない。

「ま、お前も立派な通訳になれてよ。語学は
スパルタ教育に限るわね」

ジャポネ娘はホロリと涙を落とした。さぞ
かし悲しい何年間かであったろう。

「お次、ねがいます。四五三号囚」

ミシュリーヌは、両のこぶしを更に握り締
め、鼻先の壁に頭打ち当てつつ、よろめいて
立った。モレシェンヌが後ろ腰に捕縄を結び
つけ、ふらつく腕を扼してくれる。

重い扉が開かれ、ミシュリーヌは深々と首
を垂れた。室内には厚い絨氈が敷き詰められ
ているが、女囚控え室からの扉より一文字に
床が露出している。女囚は、絨氈のない通路

を素足で踏んで、絨氈の手前三呎に立つ。む
き出しの床が尽きるところは、コの字形のデ
スク群の開口部から少し手前で、中央席に陣
取る委員長と相對し、三方から觀察される仕
掛だ。

ミシュリーヌは女囚用通路を眼で追ひ、そ
の尽きるあたりの左右にデスクの脚を見て取
り、再び眸を伏せた。絨氈を踏むモレシェン
ヌが無言で促がし、腰の捕縄を静かに曳く。
ミシュリーヌは、幅二呎の通路に脚をすくま
せ、やっとの思いで踏み出した——。

真正面の委員長席で、シュバリエ老夫人は
凝然と見詰めていた。

かけがえのない一人息子エミール。そのエ
ミールにかけていた総ての希望を、夢を、儚
なくも打ち砕いた憎い女——。そのミシュリ
ーヌが、今ここに見るも哀れな女囚姿で、刑
の桎梏からの解散を哀願するために、悲しい
装身具もいと浅間しく打ちうなだれて、眼前
へ曳かれて来るのだ。

シュバリエ老夫人は椅子の肘掛けを固く握
り締め、まばたきもせず真正面から見詰め
た。この瞬間を待ちに待った彼女であった。
顔をおあげ、ミシュリーヌ。お前みたいな
女に似つかわしい恰好だよ。懲役は苦しいか

い？ 辛い？ そうだよ、それが当然よ。いい気味なこと。まだ半分しか苦しんでいないのに、もう鎖から解いてくれだって!! 冗談じゃないわ。死ぬまで繋いどいてやりたいよ。ま、見てて御覧。仮釈放なんて絶対に駄目なんだから。気の毒だけど、却下する材料はたとと持ってるわ。一カ月もかかって、とことんまで調べたんだからね。ほかの委員たちが何と云おうと駄目よ。私は委員長なんだから。さ、顔をおあげ——。

女囚ミシュリーヌは絨氈を眼下に見て立ち止まり、同時に、後ろ腰で引き絞られるロープを腰のバンドに感じ取った。分厚い絨氈に囲まれて唯独り固い床に立たされると、哀しくも素足に馴れ親しんでいるコンクリート床よりも、その木の床板の方が冷たい。

ミシュリーヌは足裏の位置を僅かに変え、まだ硬張りの解けぬ両脚に力をこめて、命じられている直立姿勢を取ろうとした。腿を合わせて膝をくつつける。途端、情けなくも恥かしい革具がギギ、ギと軋んだ。

女囚は思わず両腿をゆるめ、我が姿の浅間しさをいまさらのように想った。

「これ、チャンと立って。不動の姿勢よ。分際をわきまなさい」

ミシュリーヌは再び革をきしませ、両手に光る手錠を見詰めて打ちうなだれた。直立不動と命じられてはいるが、如何にしても頭を起せないミシュリーヌだった。

「四五三号を連れて参りました」

モレシェンヌが踵を鳴らせ、コリンヌ刑務課長がうなずいた。

「四五三号。罪科と刑期と、そして、お願い申しあげてを云いなさい」

「——は、はい、課長さま——」

ミシュリーヌは唇をふるわせ、かすれた声を絞りあげた。われとわが罪名を口にするのはうら悲しい。

「——仮釈放を——仮釈放を、おねがい申しあげます。おねがいでございます——お、おねがい——」

女囚の手錠が哀れに音を立て、その頬に涙が滴った。

シュバリエ老夫人は、女囚の蒼白い頬に流れる涙を見詰めた。老夫人の想いは、過ぎしそのかみの日に馳せ戻る——。

昔とちつとも変わっていないわ、このひと。

ミシュリーヌ、お前が初めて私の前に現われた夜のことで、この私は今でも憶えていてよ。

初めての舞踏会に、あなたは初々しく上気し

て恥かしそうに、それでも、なんと嬉しそうだったこと。肩紐のないイブニングドレスは生まれて初めてだったのね。しゅっ中、胸のあたりを気にしてたわ。あれは、そう——私がリシュエール夫人とグランプリ競馬の予想に花を咲かせてたときだった、あなたが伯母さまに連れられて私に挨拶したのは——。

シュバリエ老夫人の臉にも涙がジンと溢れた。頑くかな老いの胸も、そぞろ懐旧の情に溶け始める。

——ミシュリーヌ。純白のローブの膝を曲げて、なんと優雅な仕草だったことか。なんと愛くるしい笑顔だったことか。私は、はつきりと憶えてるよ。憶えてますとも!! だってねえ、一目見たときにハートに響いたの。私のエミールの妻になるひとだって——。あなた、エミールと何曲も踊ったわ。私は、どんなに胸弾ませて眺め入ったことか。夜更けの庭の噴水のほとりでエミールと語らってたわね。私、そっと盗み見て泣いたのよ。もちろん、嬉し泣きだったわ。ああ、それなのに。そんなエミールと私だったのに——。

老夫人の胸の氷は殆ど溶け去った。

——ほんとに恨みに思ったことよ、ミシュリーヌ。私とエミールがどんなに悲しんだこと

か。でも——でも、あなたを眼の前に見ると駄目。もう充分に苦しんだのよね。エミールはとうに許してるのよ。ただ、この私だけが口惜しくて残念で——。でも、もういいの。さ、顔をあげなさいな。私を見て、ニッコリ笑っておくれ。それですべては——

シュバリエ老夫人は肘掛けから手を離し、眼前五米の女囚に声をかけようとした。しかし、その唇は再び固く引き締められた。初夏の窓外の空高く、裏々たるエンジンの音が窓をふるわせたからだ。青い空に美しく曳く数条の飛行雲——その編隊は軍用機の一隊と見受けられた。シュバリエ老夫人の胸に、見る見る氷がひろがる——。

おおエミール。珠玉と育てた私の息子——いまを去る十とせの昔、ドーヴァー海峡の夕陽を浴びて、イングランドの基地へ帰投するスピットファイヤーの銀翼が二機——。

シュバリエ老夫人は、夏空を翔け去る編隊を見詰め、そして、老いの双眸を固くつぶった。

——戦い疲れてよろめき還る二機の背後、いましも忍び寄った送り狼が一機、断雲の切れ目から見下ろしてブリルに入った。帰心矢のごときスピットファイヤーは気付かず、二番

機がよろめいて火を吹く。落下傘はついに開かず、痛恨のドーヴァーは白堊の断崖のほとり、エミールは若き命を終えた。凱歌を奏してターンする送り狼——翳えす黒き翼には鉄十字のマークが——。そして、憎々しく突き出た精悍な機首は、これぞ好敵手「長鼻」戦闘機と見受けられた——。

シュバリエ老夫人は、辛うじて帰還した一番機から、エミールの最期を涙ながらに聞き知っていた。不倶戴天の仇敵「長鼻」——その名は、おお、フォッケウルフ一九〇戦闘機——。彼女はその機の塔乗員の誰かを知らず、ただ、フォッケウルフ一九〇をひたすらに憎む——。

シュバリエ老夫人は老いの眸を見ひらき、いまぞ、ふきこぼれる憎悪をばこめて、女囚ミシュリーヌを見据えた。

一昨年の秋、ニースへの転居を見送った資金で買い求めた株式——そのなかには、リリアンヌ夫人が手離したのも混っていた。そして、それを見た老夫人は、双腕ふるわせて怒り悲しんだことだった。皮肉なことに、銘柄の選択を他人まかせにしたこととはいえ、なんと、それはフォッケウルフ航空機工業の株券だったからだ。その名義人の名を調べ

て、夫人はさらに激怒したのだった。当初名義人はシャルル・クープドリュエ伯爵、そして、その次の裏書人の名は、おお、ミシュリーヌ・クープドリュエ!!

そのとき、シュバリエ老夫人は魂も凍るばかりに憤怒し、あわや千切り捨てんばかりの激情に駆られたことだった。

——ミシュリーヌ、よくお聞き。お前は、私のエミールの心をもてあそんだあげく、生きる望みを失なわせたのよ。そして、なんとその上にまだ、あの子を殺す兇器までこさえたんだわ、シャルルとかいう亭主と一緒に。資本を出せば、こさえたも同然よ。エミールと私に何の恨みがあつてそんなひどいこととしたの？ エミールが命を賭けて戦つてたというのにコモ湖で贅沢三昧に暮してたのね。戦争が終わったらノコノコと訪ねて来たりして——。やっぱり——やっぱり赦せないわ。ゆるせるもんですか!! たんとお泣き。泣いて泣いて、跪くがいい——

ぐらついた老夫人の胸は、再び、初志貫徹の呪いに立ち帰った。

オッセン夫人が、口を開きかけて眉をひそめ、爆音が去るのを待った。

ミシュリーヌは、いまだ嘗てないほどの屈

辱を全身で味わいながら、人々の視線を浴びて立ちすくんでいた。そのみじめな心地は何とも云えなかった。この姿のまま腰縄握られて立たされ、これからいろいろと吟味されるのだ。

こんな思いをしてまで——。もういいわ、もう——。あと二年足らず勤めりゃ大威張りなのよ。正々堂々と出て行けるのよ——。

悲哀は口惜しさを混えて胸に迫り、微かに怒りさえ、こみあげて来た。さっき、コリン又課長の一喝にふるえおののき、夢中で口にした哀願の言葉も、思い返せば齒がみする心地だった。

どんなひとたちかしら？ 見たいわ——しかし、その思いはあっても、ミシュリーヌの首は垂れたまま挙げ得ず、眸は絨氈を見やるのが漸くであった。

どんなに口惜しく悲しくとも、口を開けば哀願の言葉が洩れてしまうであろう。どんなことがあるうとも、哀訴嘆願だけしか許されない身なのだ。ミシュリーヌの頬に新たな涙が伝わった。

——「これは試練なのよ。みじめで堪まらないかも知れないけど、耐えねばならない試練なの」——

マジョーリ婦人看守は、面接審査を迎えた女囚たちに、心構えとして、常々そう云って聞かせている。

そうだわ、試練なのよ。辛抱しなきゃ。あと二年もこんなところでなんてウンザリだわ、申しわけないけど——。精も根もすり減ったわ、もう。こんな——こんな手錠なんかなしで、堂々と鉄格子の外を歩きたい——こんな服を脱ぎたいの——。

オッセン夫人が、やおら口を切った。

「お前、仮釈放して欲しいということだけどねえ、いったい、どういうわけでそうして欲しいの？ 正直にいい」

「——は、はい。私、心から悔い改めさせて頂きました。それで——こんどは、自活しながら、償いの残りをさせて頂けたら、と思ひまして——」

「そう。刑務所が辛いから、というんじゃないのね？ え？」

「は、はい——。そりゃ、もう。正直申しあげて、ほんとに毎日毎日が辛ろうございませす。でも、それは当り前のことですわ。決して、刑を受けるのがイヤだからというわけではございません」

「そう。犯した罪を償い終えたと思ってるわ

けじゃないのね？」

「はい——。そんなこと。私の罪に対する刑は、あとまだ二年ほども残っております。それを——それを償い終えなければ、世間さまに申し訳なく顔向け出来ませんわ。そのことは、よく存じてますの」

ここらあたりの受け答えは、女囚仲間で常日頃から研究され尽していることだし、仮釈放嘆願書にだって、そういう風な要領で書かされている。いわば茶番劇のセリフであり手紙の冒頭に書くキマリ文句のようなものだ。要するに、鉄窓暮しが苦しいから出たい、というだけの話だ。

とはいえ、ミシュリーヌは我が卑屈さ加減に胸を熱くし、若奥さまがたは儀式の定形パターンに徹し切らないのか、肩をすくめて舌さえ出しかねない様子だった。

「訊ねるけど——」

フロレンスが口を出す。

「刑務所へ入れられて口惜しいと思っやしないこと？ 何か自分だけが損したような気持じゃなくって？ 誰かを逆恨みなんかしてないわね？」

「——そんなこと!! 私、ここへ連れて来て頂いて、ほんとによかったと思ってます」

「まじめに暮す決心はついてるのね？」

と、ブリジットも存在を示した。

「——はい。もう、決して悪いことは致しません。仮釈放して頂けましたら、いままでと同じように、まじめに更生の道を歩ませて頂きます。誓います——ですから——」

「ちよっと、お前。顔を見せなさい。うつむいてばかりいないで、私の眼を見て御覧」

これは勇気の要ることだった。女囚は必死の想いで顔をあげ、言葉の主のレニエ夫人をおずおずと見やり、忽ちにして再び首を垂れ、手錠姿の哀しさを見詰めた。

レニエ夫人は「ふむ」と何かうなずき、モントルイユ氏が顎を撫でる。

「その——つまり、なんだな、タチのよくない男でも居るといふようなことはないのかい？ 腐れ縁で奴は、本人の決心だけではなかなか——」

なんと云っても、男性の方が視野が広く、観察も客観的だ。氏はジェラールあたりのことを云っているのだが、若奥さまがたはサンシール事件を想って眼を輝やかせた。触れても益なき古傷には言及しないのが委員会の不文律なのだが、恋に身を焼く現職警官の女囚連れ出し事件ともなれば、女性たちにとって

は、今なお興味津々でもある。

女囚ミシユリーヌは今度は自ら眸をあげ、モントルイユ氏をちらと見やった。隣り合う男性二人が思わず眼を輝やかせる。恨めしげな双眸に、本人は知らずとも、男性にとっては堪まらない色気がたゆたつからだ。

二人の男性委員は首を振って眺め入った。さっきのキャプシーヌなんかより、この女の方がずっと佳い。さすがは元伯爵夫人で、想像以上の女っぷりだ。それに、スレていないし、素直で上品だ。

男性委員二人に関しては、ミシユリーヌは既にパスしてしまった。

「これ。ちゃんと立って。もっとまっすぐに背を延ばすのよ」

モレシエンヌ婦人看守が注意を与え、女囚の腰縄を後ろ腰で軽く引きあげた。

「ねえ、看守長さん。このひと、手紙も面会も、全然少ないんですね。どういふのかしらねえ？」

「ああ、それはですね。この四五三号は可哀想に身寄りがありませんのよ。それに、しおらしいほどに思い定めちゃって、自分から社会と縁を切ってる、という風ですの」

ジョアンヌ女史はマダム・オッセンに答え

て請け合い、担当看守長として当然といえ、えらく同情的に弁護してくれる。

オッセン婦人とレニエ夫人がうなずき合って、雲行きはどうやら晴れるらしい。

ミシユリーヌも敏感に感じ取って、全身をゆるめて鼻を吸った。

そのとき、シユバリエ老夫人がオッセン夫人に何事か囁いた。

「そうだったわ。ちよっと、四五三号」

「は、はい——」

「お前、盗んだお金をどうしたの？ ほんとのことを云いなさい」

男性二人は眉を寄せた。そのことならば既に勘定は済んでいる。一件書類は握っているのだから、大抵は察しがつきそうなものだ。

この佳人ならば、隠した金なら進んで返したことだろうし、そうなりや実刑を喰ったりするものか。これだから、御婦人がたの洞察力不足と執拗さには参っちゃまう——。

「え？ どうなの？ ほとぼりの冷めた頃に取り出してウマクやろう、というのね」

ミシユリーヌの全身に、こらえようもない悲憤が吹き抜けた。

「——そ、そんなことおっしゃったって!! 一フランだって隠してなんかいません。ほん

とですッ。メグレ警部さんにだってそう申しあげましたし——」

女囚は身を揉んで哀訴し、レニエ夫人は片頬で笑った。

メグレ警部さんか——。あの方は立派なひとだけど、すこし情に脆過ぎたわね。特に女には優しいらしいし。この女のとときだつて見惚れて、ろくろく調べなかったんじゃないかしら。そこへ行くと、私の弟なんかピシピシしてるものねえ——。

レニエ夫人の弟はギャバン警部で、メグレ警部の跡を襲った敏腕家だ。

「——それに、予審のときにだって、ヴォードレ判事さまにお調べを受けましたわ。信じて下さいましッ。誓って隠してなんか——」

女囚は双腕を絞り、革と鉄の音を立てて悲痛に訴え、おぞましくも恐ろしい疑惑を晴らす術なきを身もだえる。

こんどはフロレンスが肩をすくめた。

「ヴォードレじゃねえ——」

「あら、知ってるの？」

「ええ。ホラ、私をしつこく追い廻してた貧乏判事よ。仕様がなから、一ぺんだけ、オペラにつき合ってたわ」

「そうお。ところで、マダム・オッセンたら

いいところへ気付いたわね。そうよ、考え直さなくちゃ。顔や姿だけがいくらしおらしくつたってねえ」

「ま、いいじゃないの、ブリジット。あの薄ノロ判事もそんなこと口走ってたわ。人を裁くには心眼とやらが要るんだって——。でもいいじゃない？ 面倒くさいわ」

オッセン夫人は女囚を、じっと見据えた。「もう一度だけ、ここで機会を与えます。誤魔化そうたってダメよ。ほんとのことを白状するの。でないと——」

女囚は号泣して膝を折った。

「泣くだけじゃ駄目。肝心のことを誤魔化しといて、それで悔い改めましたなんて、白々しいったらありやしないわ。さ、どうなの」

ミシユリーヌはキッと眸をあげ、オッセン夫人をまっすぐに見あげた。

「立ちなさいッ」と、腰縄がしゃくられる。

「——は、はい。すみません。でも——でもあんまりでございます。お金を返せないの重い刑を受けたんですのに——。もちろん、一生かかっても少しずつお返し申し上げるつもりです。だけど、一フランだって、半サンチームだって、隠すなんて卑劣なことだけはしてませんわ。——して——ま——さんの」

「なんでもいいから立つのよッ」

「——はい」

ミシユリーヌはよろよろと立ち、肩ふるわせて嗚咽した。

「ずい分と強情なのね、そんな顔してて」

「そうよ、マダム・オッセン。この女は、昔からそうだったわ。まだ性根が直ってないのね。隠してないなんて信じられません。この女の件については、再検討の要あります」

ミシユリーヌは、真正面の席の主の声を初めて耳にした。そして、その冷たい言葉に胸を搔きむしられた。

昔からそうだとおっしゃったわね。なんだか、どこかで聞いた声——。

ミシユリーヌは思い切って顔をあげ、涙にかすむ眸を凝らした。

おお、シユバリエ夫人!! 二人の眸と眸が合い、ミシユリーヌは茫然と立ちすくみ、やがて、ガクリとその膝を落とした。

ミシユリーヌの胸に想念が渦巻き、悲哀と絶望と、そして微かな期待とが湧いたが、期待は忽ちにして消え果てる。

「なんだか、やっと白状する気になったようよ。やっぱり隠してるのよねえ」

「そうらしいわね、フロレンス。仮釈放って

そんなに魅力あるものかしら？」

若奥さまがたのお声が切れ切れに聞え、女囚の胸に激情の嵐がこみあげた。

「——そんなにまで私を苛めたいの？ よってたかって苛め抜くのね——」

ミシュリーヌは体を三つに折って身もだえた。横領金はそっくりジェラルドに——そう告白したところで、いまさら何になろう。自分がいじめなだけだ。

「あなたたち、一ぺん服役なすって見たら？ 半年、いえ、一カ月でいいわ。番号で呼ばれて暮して御覧なさいな。こ、こんな服を着せられて、鎖をつけられて——穿いてるものにもまだ鍵かけられて、泣いて頼んでやっとはずして貰うのよ。ど、どんな気持だか——」

女囚は上体を起し、手錠を鳴らせて、腹部の革をゆすぶった。

「あら、この女は模範囚じゃなかったのね」

「そうよ、フロレンス。今日の五人のうちでこの女囚だけがね」

「しかしですな——」とクレマンソー氏。

「——模範囚を飛ばされた原因の反則の動機には、純粹なものが認められますよ」

「あら、そんなだったかしら？」

どうやら、若奥さまがたは資料を丹念に読

んでいないらしい。

「ま、私個人としては人間として反対ですなア、下半身の衣服に錠をおろすなんて——」

と、モントリュイユ氏が痛ましげに呟く。人間として、ではなく、男性として反対なのだろう。

ミシュリーヌはモレシェンヌにたしなめられ、叱られて、泣きじゃくりながら腰をあげた。

「——あの、シュバリエ奥さま。おねがいです、お、おねがい——。私のこと、おぼえていて下さって？」

ミシュリーヌは跪いたまま、鋼鉄をきしませて、真正面の席へ手を合わせた。

「立ちなさいッ」

「まあいいじゃないの、看守さん跪かせておいてやったら？」

「そう。その方がふさわしいわよ。もう、充分に休つきは見たし——」

若奥さまがたのお言葉に、しゃくられて軋む革具の音が止んだ。男性委員たちは苦笑いして、机上に積んだ書類やなんかを、さりげなく動かして背を伸ばした。凄艶な顔がよく見えないからだ。

シュバリエ老夫人は、夢にまで見た光景を

眼前に見詰め、取り纏る双眸の憫れさを冷然と刎ね返し、恨みのたけを噛みしめていた。

さぞや驚いたことだろうねえ、ミシュリーヌ。もっともとお泣き。しっかりと手を合

わせて拝むのよ。まだまだ涙が足りないわ。お前に裏切られたときのエミールの涙、そして、エミールを喪なったときに私が流した涙——その二つを合わせただけは泣いて貰わな

くちゃ。そうだろ？ ミシュリーヌ。それになきや、世の中は闇だよ。もっと泣き叫んでごらん。だけど、いくら涙流したって仮釈放は駄目だよ。どんなに私が嘆いたって、あの

エミールは——私のエミールは、もう帰っては来ないの。それと——それとおんなじことよ。どう？ ミシュリーヌ。出たいかえ？

鎖を解いて欲しいだろねえ、さぞかし——。女囚の眸が力なく床に落ち、絶望の涙が溢れた。

「——やっぱり、やっぱり——私を赦して下さいないのね、まだ——。でも、無理ごさいませんわ」

ミシュリーヌは切れ切れに呟き、逝きし日を胸に繰った。あれほどまでに真剣に、この自分を見込んで下さった男とその母——それなのに、いくら世間知らずの乙女だったとは

いえ、はっきりと諾否を与えないままに、伯父伯母のすすめる伯爵家へ嫁し去ったミシュリーヌであつた。あれから幾星霜、そのかみの乙女も浮世の風雪に叩かれて、いまでは、人の情けの哀歎ときびしさとを知っている。

「四五三号囚。私はね——」

シュバリエ夫人は、ゆっくりと云つた。

「——お前のときだけは委員長を返上してるのです。このお方、オッセン夫人にお願いしなさい。さっきの御質問のお返事がまだね」
女囚ミシュリーヌは金髪を垂れ、深い悲しみと怒りを噛みしめていた。

「ね、ねえ。やっぱり、白状するつもりじゃなかったのよ」

「そう。あくまでシラを切るつもりなのね。ねええ、こんな場合、盗られたお金を取り戻す方法はないかしら？」

「そりゃ難かしい問題ですな、若奥さま方。トコトン行けば、刑法を金銭で左右できるや否やの問題ですよ」

「ともかく、被害者としては、刑事裁判に係なく、損害賠償の訴えを起せますよ。原則としてね。しかし、泥棒相手にそんな——」
「要するに取り戻せないのね。とすると、この女だってシラの切り得ってわけ」

「いや、さっきのは一般論でしてな。このミシュリーヌは隠してなんかいないと思いますかねえ」

オッセン夫人が男たちをジロリと見た。

「ポレット・ベラフォンヌの例もございましたよ。あのようなことが許されると思ひかしら？」

男たちは首をすくめた。ポレットは数年前にここを出獄した多額横領女で、隠し通した金を元手に金貸業をおっぱじめたのだが、暴力団を使ってまでの苛酷な取立てが明るみに出て、いまは拘留所の中で世の指弾を受けている。

「さ、四五三号。どうなの？ 洗いざらい綺麗になつて、一から始める気になれない？」
「——ああ、どうしたら信じて頂けますかしら？ どうしたら——」

ミシュリーヌは身を揉み、またも上体を床に折って動揺した。

「そう。じゃいいわ。云わないのはお前の勝手だし、そんなお前の鎖を解いてやるやらないは私たちの考え一つだものね」

ミシュリーヌは、背筋が凍るばかりの絶望と、胸張り裂けるほどの憤怒を感じた。

捕まえた鼠を猫がいたぶるように、残忍な

までの執拗さで追究される横領金——その額は、取り澄まして責め立てるオッセン夫人がまとっている衣裳と装身具一式を購ひ得るやいなや——。そして、コモ湖畔の館での日々には、執事への一言で自由に出来た額に過ぎない。女囚はみじめさに打ちひしがれた。

「——盗みを働いたから刑務所へ入れる——」

ええ、それは当然ですわ。ですから、一生懸命、身を粉にして服役しましたの。それなのに、こんどは——盗んだお金を返さないから出してやらないとおっしゃるのね？ あ、あんまりですわ、あんまりひどい——ひどい」

シュバリエ夫人が会心の笑みを浮べて冷たく眺め入り、オッセン夫人は卓を叩いた。

「お黙りッ。お前、考えちがいでしてやしないこと？ 服役し終えたわけじゃないのよ。なんとという不心得なことを——」

「そうよ。仮釈放を当然の権利とカンちがしてるのね。とんでもないことだわ」

「決められた刑期を終えれば、泣いても笑っても出して頂けるわよ」

若奥さまがたも尻馬に乗って、したり顔でお説教する。キャプシーヌのとき以上に殿方たちの眸が好意的に光るので、それがどうやらお気に召さないらしい。

「それに何よ、さっきの言い草は!! 私たちに服役して見ろだつて——」

「そう。私、なんといったつて、曲りなりにも元伯爵夫人だったんだから、と思つてやつてたわ。でも、そんなじゃダメね。あら、髪が絨氈に触つてゐる。もっとキチンとおし。囚人は囚人なりに身だしなみしなきゃ——」

後ろ腰の捕縄が手繰られ、軽くお尻を打たれ、女囚は肩ふるわせつつ身を起した。

レニエ夫人が久しぶりに口を開く。
「お前、ほんとに身寄りはないのかい? 身元引受人のあった方がいいんだけど——。さあ、もう落ち着いて。泣くのはおよし」

レニエ夫人は冷静に議事を本筋に戻し、モレシエンヌは溜息を押えて、髪ネットを直してやった。

「親兄弟はないのね? 配偶者もないし、親類もいないの? ほんとに独りぼっちなのねえ。友人ぐらゐはいるでしょ? でも、信用できる良い友達でなきゃ駄目よ」

こみあげる淋しさをミシユリーヌは耐えかねた。声を放つて泣きたい心地だった。しかし、嘗て乙女の日に突き放した男たちには、齒を喰ひ縛つてもそんなことは頼めない。

「子供もいないのねえ」

と、レニエ夫人が書類を指で押える。

「もっとも、いたところでもまだ小さいわね」
ミシユリーヌの双眸に、熱い涙が滂沱と溢れた。

おおジュヌビエーブ!! いま、どうしてるの? 今日は日曜ね。よく勉強したかい。
レイモンドさんのお手伝いしてるだろうね。
お前は私の子なのよ、そうですとも!! こざっぱりした夏服を着て、さぞ可愛い女の子なんだろうねえ。外へ出るときにはお帽子をかぶるのよ。もうお前だつて十四の娘でしょう? 新しい陽除け帽子持つてるの? ああ、逢いたい、一目でいいから逢いたいよ。こんなお母さんだけ——もう、晴れて逢えない母さんだけど、でも、お前のママは、やっぱりこの私なのよ——。

落ちる涙が手錠に散り、男性委員たちは咳払いをし、オッセン夫人も深い眸の色を浮べた。眉根寄せていたジョアンヌ女史が、ここぞと口を出す。

「さ、四五三号。ようくお詫び申しあげて、もう一度お縋りしてごらん」

「——は、はい——」

ミシユリーヌは鼻を吸りあげ、ジュヌビエーブの後ろ姿を臉にまさぐった。あの子に——

目逢うためならば、七重の膝を八重、九重に折つて、ただひたすらに哀願しよう——。

「——身のほどをわきまえないことを申しあげました。おゆるし下さいまし。でも、お金だけは、誓つて隠してなんかおりません。ほんとでございますッ。なんなら、今後ずっとお調べになつて下さいまし——」

「バカね。それは警察や探偵社のお仕事よ。そんなにまでいうのなら、そういうことにしといてあげます」

「——は、はい。すみません。ありがとうございます。みなさま、どうか力になつてやつて下さいまし。哀れとお思ひになつて——。こんな——こんな風にされますと、つい、ひがみっぽくなつてしまふんですの。悪うございました。お、おねがい——仮釈放を——もし、そうして頂けましたら、もう決して悪いことは致しません。金輪際いたしません。懲り懲りでございます——」

「ほんとなのね? 信用していいのね?」

「——は、はい。たとえ飢え死にしましようとも、今後はもう絶対に他人さまの物には——はい」

「ずい分と神妙じゃない? フロレンス」

「そう。こうなると私たち弱いよね」

若奥さま方は囁やき合い、オッセン夫人も男たちに片眼をつぶった。

「じゃ、まあ、そういうことに——」

「ちよっと待って頂戴、マダム・オッセン」

シユバリエ老夫人が眸をキラリと光らせ、

その声の低さに、女囚はビクリとふるえた。

「この女は天涯孤独なのよ。ええ、それ自体は哀れだと思わ。でも、身元引受人をどうするの。保護観察官の負担が、ふえるばかりじゃないの？」

「そうですね。でも、子供がいませんし、その点は身軽ですから——」

「その身軽なのが曲者なのよ」

シユバリエ老夫人は舌なめずりするようだった。暗示にかかり易いオッセン夫人を表面に立てて、陰から糸引いて操るのは、心楽しい。このミシユリーヌを、このままおめおめと鉄鎖から解いてやるなんて——。

「そうだわ」とフロレンスもうなずいた。

「子供が一人でも居れば、更生の機会はダンチよ。第一、心のハリがちがうわよ。ねえ、ブリジット」

若奥さま二人は、昨年の暮、相前後して、若きママにおなり遊ばしたばかりだ。

「そもそも、子供がいれば悪いことなんて出

来ないわよ、初めっから。ねええ」

ミシユリーヌの耳朶を囁き声が刺し貫き、

彼女は心の制御を失なった。

「——子供ですって!! ああ、私の——あの

子——私にだって——」

「おや? お前、子供があるの?」

ミシユリーヌは我に返り、乳色の咽喉をふるわせた。口が裂けても口外すまいと、固く思い定めた秘めごとではなかったのか——。

「どこにいるの? 名は? 年はいくつ?」

ミシユリーヌは唇を固く閉じ、凝然と跪いていた。

「あら、身許調書には『子供なし』となってるじゃありません? 結婚の相手は相当なお

年寄りだったんだし」

「でもねえ、でてなし子を産むってこともあってよ。フロレンス」

心ないことをブリジットが囁やき、思慮ある男たちが眉をひそめた。口にするべからざることを軽々しく口走るのだから、お若い御婦人には困ったものだ。

「ほんとに独りぼちなね? 逢いたくて堪まらないとか、早く一緒に暮したいとかいうひとはいないのね、え?」

「——はい——ございません」

ミシユリーヌの声は血を吐くようだった。

「なら、どうしてそんなに早く出たいの?」

あと二年じゃないの。ここで罪を償うのも、社会生活しながら償うのも、結局はおんなじことじゃないかしら。はっきりいうけど、いま社会に出たって、一人前のことは許されな

いし、窮屈なのよ。お前、世間さまに迷惑かけないで暮す自信あって?」

「そうよ。マダム・オッセンのおっしゃるとおりだわ。どっちみち、出して貰った当座はマゴつくのよ。まだ若いんだし、二年ぐらいはすぐ取り戻せるわ。ねええ、フロレンス」

「まあね。お前、どうせ独りぼちなら、気兼ねして暮すより、ここで服役し終えた方が

気楽なんじゃない?」

「そう。私たち、お前を仮釈放してあげるのがイヤだと云うわけじゃ決してないのよ。お前にしたって二度とはない人生なんだし——

でも、こんなこと云いたくないけど、お前は模範囚じゃないしね」

「ただ出してくれて頼む前に、よく考えて見ることをね、どうしたら罪を償い切れるかって。そりゃね、お前の更生も大切だけど、

その前に、犯した罪の償いを考えなさい。それが、結局は更生につながる道です。分っ

て？」

女囚ミシユリーヌの胸に、蒼白い怒りが燃えた。これほどまでになぶられねばならないのか。ああ云えばこう、こう云えばああ、と袋小路に追い込んで――

「――ああ、みなさま。こ、こんなにお願ひしても駄目なんでしょうかしら？」

「あら、駄目とは決めてないのよ。ただね、私たちとしては、お前の心掛とか、いろいろの事情とかを慎重に考え合わせなきゃいけないの。泣いて頼んだからって、仮釈放というものはそんなに軽々しくは決められないわ」「そうですとも。いいこと？ 刑罰ってものはね、とつてもきびしいものなのよ。雨が降ろうと火が降ろうと、泣こうが笑おうが、すべてに優先して執行されるんだわ。ねええ」

「お前、要するに、ここが辛いから出して欲しいというのよね。そりゃ、駄目だわ。少しは苦しみなきゃ刑罰と云えないじゃない？」

それによ、私たちの見たところじゃ、そんなに苦しめてはいなくてよ。みんな血色もいいし、病人だって学校の寄宿舎以下の率だし」

コリンヌ課長とジョアンヌ女史とは、顔見合わせて首を振った。どこでどうこじれてしまったのか、こうこんぐらかってしまっ

処置なしだ。

ミシユリーヌは、こらえにこらえた胸の裡をぶちまけ、我を忘れて叫んだ。

「ここを出ても出なくても、おんなじですって!! あと二年だからついでに辛抱しろとおっしゃるのね。子供一人すらいなカタワ女だから、何を仕出かすか知れたもんじゃないというんだわね。も、もういいわ。結構よ――でも――でも――」

女囚は激しく双腕を悶えた。

「でも――私が――いえ、ここに入ってるひと全部が、それぞれそうなる事情があったのよ。どうしようもない深いわけがあるの。あなたたちはお仕合わせそうね。だから、そんな悲しみなんかお分かりになる筈もないわ」

コリンヌとジョアンヌが顔色を変え、モレシエンヌが肩を押えつけた。

「お黙りッ。どなたがたの前だと思ってるの？ お黙りったら。なんですッ、いったい」

「四五三号。お前、やっぱり駄目ね。罪ある女は、すぐに、男のせいにしてたり、社会が悪いの、運がよくなかったのと、そんなことばかり云いたがるわ。でも、それは甘えです。どんな事情があったにせよ、罪は罪よ。償いをするには、まず、自分の罪をきびしく見詰

めるのが第一歩です。お前は、そういった姿勢と反省が足りません。神さまに対しては、お祈りと懺悔をすれば罪は消えます。けど、人さまに対する罪はね。いいこと？ それ相応の報いと苦しみと反省を経て、初めて赦されるのです。償いというものは厳肅なものなのよ。泣いて頼んだだけで赦されるものではありませんよ」

オッセン夫人の言葉に、シユバリエ老夫人はニンマリと笑み、若奥さまがたは片眼をつぶり合う。さぞかし、オッセン家の女中たちは悩み多いことだろう。

「分ったかしら？ もういいからお退り。みなさんと相談して見ます。かけてあげられる慈悲ならば、なんとかしてかけてあげます」

女囚ミシユリーヌは呻きを絞った。

この期に及んで、あれだけなぶっておいて恵んでやれるお慈悲なら、ですって!!

モレシエンヌ婦人看守の手がゆるみ、ミシユリーヌは再び身をよじった。

「――どなただったかしら、おっしゃったわね!! そんなに苦しい筈はないって――。そんな寝言、いっぺんでいいから鉄格子を中から見て云って下さらない？ 朝から晩まで、いえ、寝てるときだって規則々々、規則――

そして、片時だって見張られてるのよ。おトイレのときだって監視されて、真っ裸にされて体中調べられて、号令と笛で動き回って」「お黙りなさいッ。さ、おいで」

ミシュリーヌは腰ロープを引張られた。よろけながらも両膝を踏張り、鋼鉄と革具を軋ませつつ、憑かれたように叫び続ける。

「——云わせて下さいましッ。でなきゃ、このひとたちお分かりにならないんです。どんなに私たちがみじめな暮しをしてるか——いえ、暮しなんてものじゃないことよ。あなたたち、首環を嵌められたことございまして？ ガッシリした鉄の首環よ。雪の降る日に火の気のないお部屋でお仕事なさったことあって？ かじかんだ指でビーズ玉を糸に通すのよ。手に息を吐きかけても叱られて、僅かの不足でも撲られるのよ。ええ、ビシビシと撲られるの。申し開きなんかしたら蹴り倒されてよ。どんなに悲しくてみじめだか——。あくびしたと云って減食、ちよっと睨めたからって反省——コンクリートの上に脚折って坐って見たら？ そうね、五分間とモタないでしようね。革の鞭を御存知かしら——」

ジョアンヌ女史が駆け寄り、モレシェンヌと二人で両腕を扼して引き摺った。

「——こ、こんな手錠やバンドなんか平気ですわ。そんなに哀れっぽく見て欲しくないのよ。みじめなのは——ほんとに悲しいのは」

テレエヌ婦人看守が飛び込んで来て、荒々しく嵌口具を当てがった。

「——情けないのは、自分の時間というものが無いことです。人格を無視されてることですわ。到底お分かりにはならないでしょうけど、三日でいいから服役して見たら？ そしたら、そんな高いところからさっきみたいなこと、とても云えたもんですか!! 私たちが仮釈放をどんなに夢見て暮してるのか。たとえ三日でいいわ、あなたたちも服役……」

必死にあがらって叫ぶ女囚の声が消えた。

ミシュリーヌは控え室の床に引き据えられ、委員たちはホッと体をゆるめる。独りシュバリエ老夫人だけが眼を細め、臉に残る光景を満足げに噛みしめていた。まったくのところ予期以上のシーンだった。

「ほんとに申しわけございません。然るべき処置を取ります」

コリンヌが詫び、お茶が配られた。マルチーヌが居たなら、シュザンヌ婦警潜入の件をミシュリーヌが口外しなかった善行について仄めかしてくれたかも知れぬ。

「あら、あれは何の音かしら？」

「きまつてるじゃないの、ブリジット。いまの女囚がお尻を撲られてるのよ」

「まあ。ね、ね、私たち、ちよっとばかりひどかったかしら？」

「ちよっとどころか!! 稀に見る精神的虐待ですな。魔女裁判もかくやあらんかと——」

「左様。あんなことになっちゃったそもそも何の起りは何でしたっけ？ よく分らんなあ」

「だけど、あの女囚だって少しばかり生意気じゃなくって？」

「いや、云ったことは、いちいち尤もなことでしたな。まったく勇気のある佳い女だ」

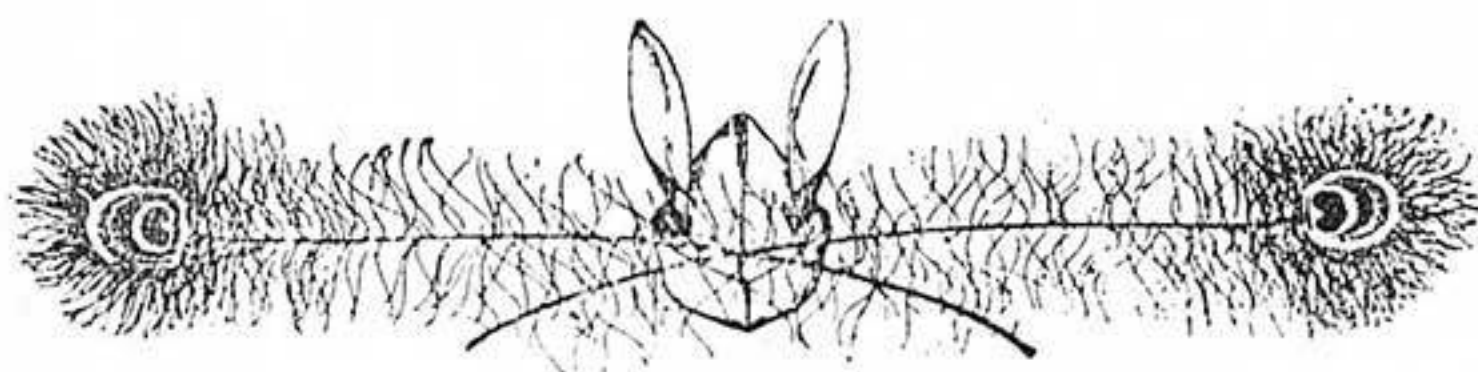
「左様。私はハートが痛くなりましたよ。なんとかしてやらなくちゃ」

「さて、と——。では、マダム・オッセン」

分別ある男二人は義侠心に燃え、いくぶんかは後ろめたい御婦人たちに向って、やおら喧払いをしたのだった。

「バカね、ミシュちゃんたら。正直馬鹿に受け答えしたんでしょ？ ああ、私がそばについててやらなきゃ——」

クラリスが呟いて嘆息し、テレエヌの革ロープが音低く背に鳴り、そして、ミシュリーヌは既に興奮も醒めてわなないていた。



ある幼児願望者の夢

ママとボク

井上 俊彦

私はそこから逃げ出そうとすれば、いつでも逃げられたのです。私の手足は自由でしたし、ドアに鍵をかけたとはいうものの内側からははずせました。むろん見張なんて者はいません。でも私はもう一カ月近くも、そのマンションの一室にいました。私はそうしたかっ

たのです。ずっとマンションにいて、私をこへ連れてきた女の人から、赤ちゃんの扱いを受けたかったのです。

「ただいま」

女の人——私は今ではママと呼んでいます——は、私が逃げ出さないのが解っているの

か、そう言って室に這入ってきました。ママはバーに勤めているので、いつも帰りは零時すぎになります。でも私は、ママの帰ってくるまで、必ず本を読んだり、ラジオを聞いたりして起きていました。

「おりこうさんにしていたの？」

ママは寝室へ行って着替えを始めました。いつものように私はママの後からついてゆきベッドの上に仰臥しました。普通の寝室ならば、ベッド、タンス、鏡台等があります。でもこの寝室は私のためにもう一つ余計なものがありました。それはオムツです。オムツが室の中で干されていました。いろんな模様のオンパレードが、室内を奇妙な雰囲気染めて旗のように掛け並べられてあるのです。

ママはオムツを片づけると、私の方を見てニコツと笑い

「ボク、オムツ、汚れていないの？」

と尋ねました。そしてタンスの中からオムツカバーを取り出すと、ベッドの私の寝ている横でオムツを整え、

「さア、オムツをとり替えましょうね」

と、私のズボンに手をかけます。私は、今ではこうしてママからオムツをとり替えても

らうのがとても嬉しく、ママの作業に喜んで協力しました。

「いい子ね、今すぐ取り替えますからね」

と、優しく云ってくれるのです。私は恥かしいオムツカバリの姿になって、幼児同様にじっとしています。ママは巧にオムツカバーの腰ひもをほどこき、ホックをパチンパチンとはずしてゆきました。

「アラアラ、気持悪かったでしょう」

私はママが帰って来る前に、ママの拍子抜けを防ぐために、がん張っておきましたので取り換え甲斐があるのは当然です。

「ボクはいつになったらオムツがとれるのでしょうかね」

ママはワザと眉をひそめてそう言いながらも楽しそうに、新しいよく乾いたオムツと取り換えてくれるのです。

「さア、さっぱりしたでしょ」

ママは始終その顔から笑みを欠きませんでした。私にオムツをさせ、世話するのがママにとっても嬉しいらしく、いそいそとした仕事で、手際よく取り換えるとオムツカバーでしっかり圧えました。ホックが全部一つずつはめられ、腰ひもでゆわかれてしまうと、私は、

「アア、オムツをしているんだな」

と感じます。私の腰を包み、柔らかに優しくお尻全体を被っているオムツ。

私は思わずオムツに語りかけるように、

「オムツ……オムツ」

と、つぶやいてしまいました。

「そうよ、ボクはオムツしているのよ。いいわねエ。ボクはオムツをする赤ちゃんよ」

ママは私がオムツを好きになったのが、はつきり解っているようにそう言いました。

私がこんな具合になってしまったのも、元はママの責任です。

私は、もともと酒飲みではありませんでしたが、友人に誘われて、ある日ママの勤めるバーへ出かけてゆきました。そこで友人に勧められるまま、飲めもしないウイスキーをガブガブ飲んでしまい、気づいた時はママのマンションに居たのです。ママの話によると、一緒だった友人たちは私のつぶれたのを見て、ママに介抱を頼み、帰ってしまったそうです。それで、ママが仕方なくマンションまで連れて来て、寝かせてくれたとの事。私はママに感謝して、その場を辞しました。その時も「まだ二日酔いで頭が痛いでしょう。かまわないから、あなたさえよければずっと

治るまで寝ていらっしゃい」

と、ママは優しく言うてくれました。

その時のママの優しい面影が忘れられなく私はそれから二、三度、お礼の意味もこめてママの勤めるバーへ通いました。ママも私が気に入ったらしく、私といろいろの話をしました。

「でも学生なのに駄目よ、こんなバーなんかでお酒など飲んで。下宿しているんなら、もっとお金を大事に使わなけりゃ」

ママはその後、私が行くたびにそう言いました。でも私は高いお金を払っても、ママの傍にずっといたい気持でした。そのうちとうとう私の手持の現金も底をつき、これが最後と悲壮な思いで、出かけました。ママにその事を話すと、ママはとても私を叱り「今夜、私についてきなさい」

と言って、帰りじたくを始めました。私は何だかママにしかられるのが楽しい気分でママの後についてゆくと、ママはマンションへ帰りました。そして室にはいるなり、サイドボードから、いろいろなお酒を持出して、私に飲むように命じました。私はバーでも多少は飲んだし、少し酔っていましたが、それが却って勢いをつけることになったらしく、マ

マの命ずるままに、どんどんグラスをあけてゆきました。

翌日起きた時は、頭がガンガンと鳴るようで、日の光もまぶしく、とても正常の状態ではありませんでした。暫くそのまま横になっ

ているとママがやってきて

「アラ、目が覚めたの？　ボク」

と言いながら手に洗濯物をかかえ、それを室内に干し始めました。私は物を言う気力もなくボンヤリとママの仕草を見つめていました。ママは赤い花柄のある布を干してました。私は始め、それが何であるか解りませんでした。それにこんなによい天気なのに、何故、室内に干すのだろうと思いました。

「元氣？」

と、ママは途中で私の方を見つめ、フフツと笑いました。

「……どうして家の中に干してるの？」

私の目は、まだおぼろげでした。

「そうね、外に干した方がいいわね……でもそうするとボク、恥ずかしいでしょう？」

私はその意味が解りませんでした。が、だんだん目がはっきりなるにつれ、花の模様も解り、その花がバラだと気づく前に、干され

ているのがオムツだと解りました。

「ボク、オネシヨするなら、その癖があるって寝る前に言ってるね」

私は、きょとんとしていました。オネシヨ……、まさか私が……。

「ボクは酔っ払ってしまっただけで何も覚えていないでしょうけど、寝させてあげようとした時に、ボクったら粗相し始めたのよ。丁度、昔使った大人用のオムツカバーとオムツがあったから、そのまま役に立ったのよ」

そう言えば、私の腰のあたりが厚っぽたくいつもと違うのが解りました。

「……、僕……」

「今もしているのよ。でも、いいわね」

私は何がいいのか理解できませんでした。

まだ頭も痛く、私はそのまま再び寝てしまおうと思いました。オムツだなんて変なことが出てくるのは、まだ夢を見ているのだと考えたからです。

でも正気にかえった時、それは夢の中のことではないのをハッキリと知り、私はとても恥ずかしい思いをしました。大人の私が赤ちゃんのようにたしかにオムツをあてていたのです。しかもピンク色のオムツカバーまでさ

れて……。そしてそのオムツが正しくぬれているのが解りました。ただオムツをしているというだけでなく、赤ちゃんみたいに取り換えの世話にまでなっていたのです。ママは、笑いながら世話をしてくれるのですが、それがたまらなく恥ずかしく、私は顔を隠してしまいました。

「アラ、いいのよ、恥ずかしがらなくても。

オネシヨだって病気ですものね」

あとから考えてみればおかしい話で、完全な謀略だったことに気付かない私がどうかしていたのです。私はその時オネシヨをしたわけではなく、ママが故意にオムツをぬらしておいたのだと解りました。でも、ともかく私はその時、生れて始めて意識あるもとでオムツをあてられたのです。

「ねエボク、オネシヨ直るまでここにいなさい。下宿じゃオムツ干すのも不便でしょう」

私はその日からママの言うなりになってしまいました。ママを私の支配者にして。

恥ずかしいと思う半面、オムツをあてていたいという気持が湧いてくるのでした。こんな幸福で楽しい生活から、私はどうして逃げ出すことができるでしょうか。

SMカメラ・ハント

△田宮恭介・寿子夫妻の巻▽

妻よ薔薇に似て

辻村 隆



のびのびになっていた、田宮恭介・寿子夫妻とのプレイが実現したのは、九月の声をきいてからであった。それまでに数度か綿密な私信を交わしながら、私の気持がもうひとつ盛り上らなかったのは、田宮氏自身は私を混えてのプレイに大乘気でいるのだが、寿子夫人が幾分難色を示しているような感じを、私信の行間からそこはかとなくうけとれたからに外ならない。寿子夫人は、彼のレポートにも書かれてあったような理由から、その背信

への代償として、夫の如何なる行為に対して、易々として甘んじておられる様子であるが、見ず知らずの、私という第三者を加えての、そうしたプレイの行為には、激しい羞恥と屈辱を感じているのではなからうか。と、そんな先走った想念が、躊躇させた原因のひとつでもあったのだ。

それにしても、彼のレポートの『屋外での緊縛実験』に掲載されていた二葉のフオトはショッキングな強烈きわまるものであった。

しかもそれが、緊縛を開始して以来、僅か数カ月の成果であるというにおよんでは、競い立つ彼の、プレイに対する遮二無二の前向き意欲がまざまざと窺えて、この先どうなることかと、空恐ろしくさえ感じられる程の情熱であった。

田宮恭介のひしひしと迫る情熱には、たじたじと気圧される思いであるが、夫婦プレイの場合、相互の緊密な信頼感がなくては、第三者を混えてのプレイは成立はしない。あと

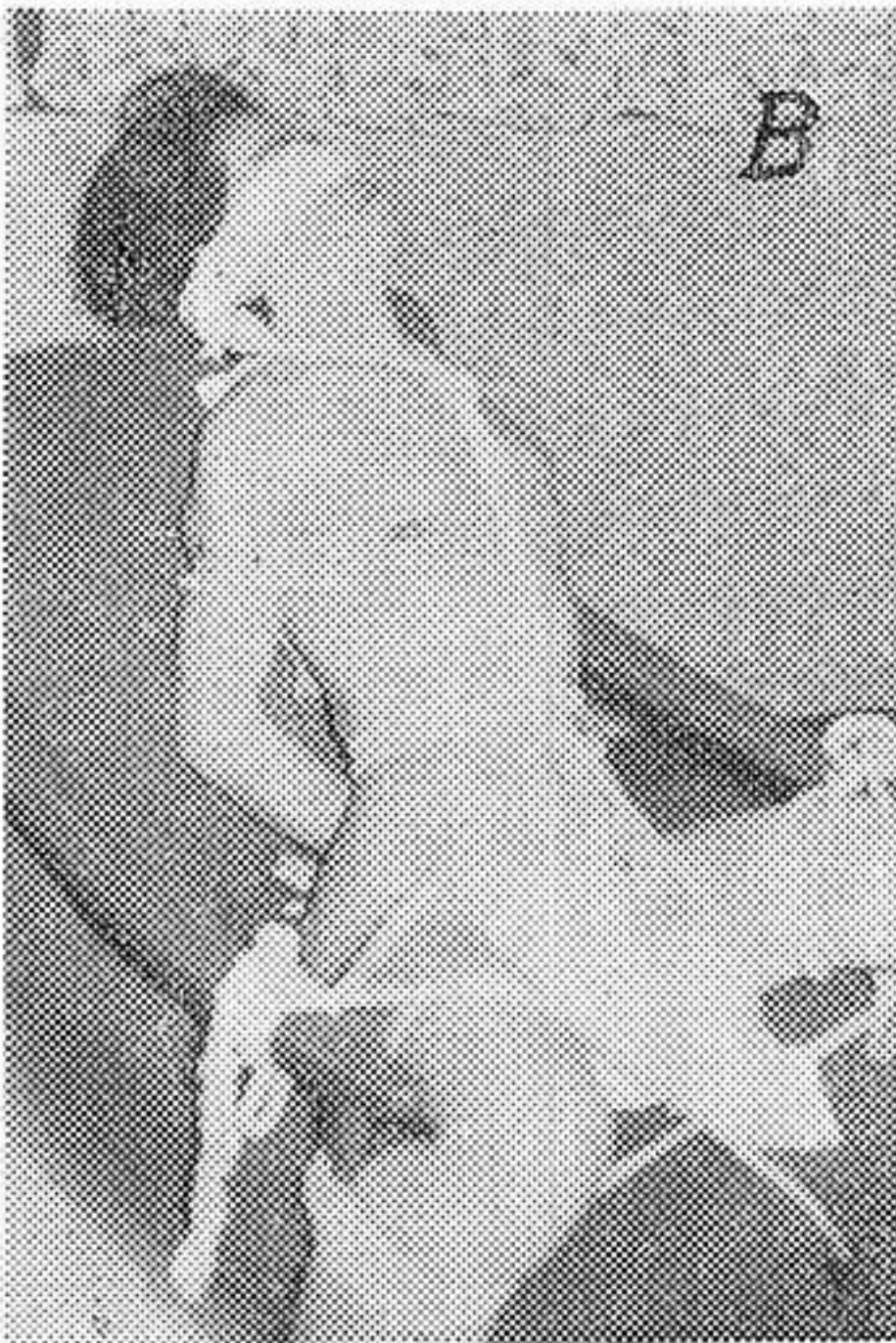
にいざこざの根を残さないように配慮しないと、禍根の爪跡は大きいからである。仮に妻が渋々であったにせよ、プレイの意図を納得して諒承した場合に限り可能性が生れてくるのであるが……。

私は、そうした夫妻の機微に関する危惧を重点的に書いて、寿子夫人の気持を改めて確かめて貰おうとした。二日後に電話で折り返し返事があった。妻を充分に説得して快諾させたというのである。生理中でない限り、いつ何時でもいいし、なるべくなら自宅の方が都合よいということであった。

私は田宮氏の並々ならぬ傾倒ぶりに、これ以上間をおくことは、折角盛り上ったプレイへの情熱に、水を注すことになるかと、早々に承諾の旨を告げたのである。

九月の第二日曜日。残暑は厳しく、日照りは相も変わらず強かった。相当の暑さを覚悟せずにはなるまい。縄やその外、プレイの必須用具は、彼の自宅に殆んど備えてある筈であるが、予備の目的で、数条の縄をバッグの底に忍ばせていった。

最近、布施市を主力にして、田園都市の河内市、枚岡市などが合併して、



東大阪市という、大きい衛星都市が誕生した。彼の住宅は、その東大阪市のほぼ中央の、近鉄奈良線の八戸里駅から歩いて十分近くの処にあった。電車で行く方が早かったがこの暑い日盛りに、駅より歩くのも大そうで、車で出掛けることにした。阪奈有料道路に通じている往来の激しい路を大東市に向って走り、茨田浜の交叉点を右折して直進すると、八尾市に向う地点の途中で、八戸里駅の近くを通過する。彼の送ってきた細密な地図に頼り、容易に探し当てる。

新興住宅かと思ったら、意外に古く、どっしりとした門構えの二階建ての家であった。時計を見ると十二時十分前、昼食時の悪い時

間に訪れたものだ。

住宅地で駐車禁止でもなし、私はぐんと道肩に車を寄せて、彼の家の前に駐車した。

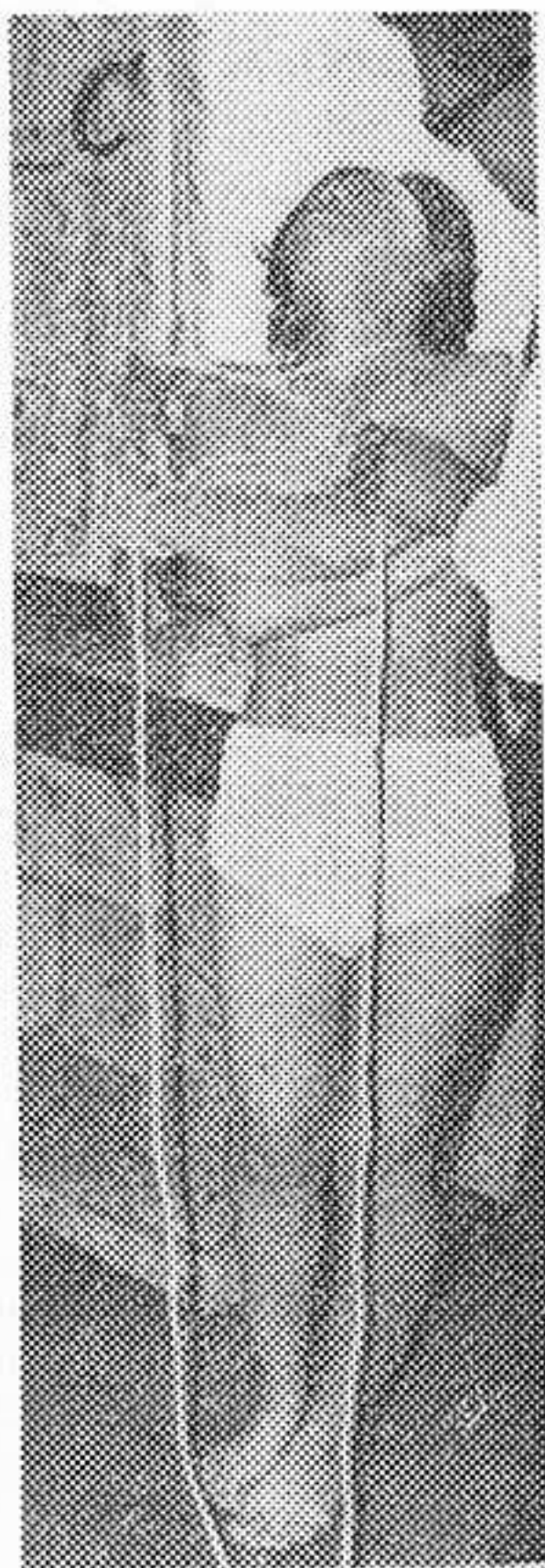
ベルを押すと、待つ間もなく、硝子戸が開いた。若々しい小柄な人だった。ハッとしたように、軽く会釈すると、あわてて奥へ小走りに逃げるように去った。入れ代りに慌ただしく田宮氏が現われる。

「ああ、辻村さんですね。早く来られましたね。随分判り難かったです。さあどうぞお上りになって下さい」

嬉しそうに彼は声を弾ませて招じた。

「ご夫婦二人暮らしにしては、かなりお広いですね。実の処、もっと小じんまりしたお住居を想像していたんですよ」

「私が子供の頃の記憶では、この家が建った頃は、それこそ、タンボの中の一軒家でしたよ。近鉄奈良線の、小阪と若江岩田の間に、この八戸里という駅が出来て、車庫になった頃は、辺り一面、田圃ばかりだったそうです。私の父が近鉄の傍系の会社におりましてここへ建てたのです。私のは妹五人おりますが、みんな嫁いだり、結婚したりで、兄も戦死しましたので、結局、三男坊の私が家を継いで、ここに住んでいるのです。おふくろは



私宅を根城にして、気が向くと、あちこち泊り歩いていきます。勿論、今日は留守しているんですよ」

子供がないので通った廊下も、チラリ覗いた居間も、通された応接間も、よく整頓が行届いていて気持がよかった。

「家内の手製の料理なんです、どうぞ遠慮なく召上って下さい。お口に合うかどうか」
寿子夫人は、小柄な体に大きい盆を一杯に抱えてきて、田宮氏はその盆から料理を盛った大皿を次々にテーブルに移した。二人の精一杯の誠意が、凝った料理から感じられた。

オードブル、鶏のもも焼、サラダ、八宝菜の洋風煮など、その外、何という料理か分らないものもあったが、三人では到底、はかしきれぬ量が、テーブル一杯にズラリと並んだ。

「料理学校で習ったものばかりで、ボクの口に合うのも合わないものもあるのですが、しかし

の心尽しを遠慮なく頂戴することにした。

食事しながらのSMの雑談――。

「奇くは随分昔からの愛読なんです」と私「そうですね。たしか昭和三十一年頃からでしょう。薄っぺらな白表紙時代でした。読み出してから、以前のものを手当たり次第、古本屋で探し集めました、仲々揃いませんでした。それもフォトが切り抜かれてあったり、ひどいものになると、全然フォトなしというものもありまして、値段だけは何百円とするんですよ。たしか梨花悠起子さんでしたか、あの人の観賞用女性という、今の辻村さんのカメラ・ハント式のものを読んだ時以来、辻村さんのファンになりました。あの梨花さんはその後、消息はないのですか？」

「K化粧品のマネキンやチャームガールをやっていました、東京へ行って以来、消息はとだえ勝ちです。彼女の友達の伊吹真砂子の

バラエティに富んではいるんですよ。さあ、どうぞどうぞ」

田宮氏はグラスにブドウ酒をすすめてくれた。小皿にとり分けながら、私はそ

話では、結婚したとかいっていましたが、もう彼女もたしか二十五、六才ですからね。しかし、いい娘だった」

「もっと早く辻村さんを知っていたなら、是非ご紹介していただきたかったですね」

「いやいや、あんたにはこんな可愛い、いい奥さんがいる。しかし貴方たちプレイを始めて半年足らずというが、フォトから見ても信じられないですね」

「本当なんです。ボクには早くからその気持は大いにありましたが、何しろ寿子が全然非協力的なものですから、うまくゆきませんでした。といって辻村さんのようにハントする程の勇氣はとても持合せてもいず、数度、アルサロやトルコの女など小当りに当たって見ましたが、セックスの方なら案外簡単にOKするんでしょうが、縛ったり、SMのプレイとなると、それまでいい出せなくて、独り悶々の情、やる方なしといった状態でした」

「それで奥さんとのプレイの動機は、あなたが奇くに書かれていたようなことなの？」

「ええ、ボクに内緒で、さとうの方に融資したのですが、不渡りを喰っちゃって返らなくなりました。現在、再建に努力していますから、軌れ軌道にのれば、いつか返金して貰え

ると思いますが、それが自尊心の高かった寿子の心にショックを与えたのが反ってよかったのです。いささか高い代償ですが、妻がボクの思いのまま意のままになる女に生れ変わったとなると安いものです。禍転じて福となすですよ」

「いずれにせよ、何かのきっかけが夫婦の微妙な転機となることが多いですね。それで今はすっかり協力的なんですね」

「極言すれば奴隷妻ですね。今仮にボクが、この場でハダカになれと命じたら、躊躇せずハダカになる素直な妻に生れ変わりましたよ。でも奴隷妻はプレイの時だけ——。普段のボク達夫婦の生活は、母も驚くほどの変貌ぶりです。夫婦の真の結びつきは奈辺にあるか、これは夫婦プレイの可能な夫婦でしか分らぬ機微じゃないでしょうか」

熱のこもった田宮氏の話ぶりの合間に、私はチラチラ、寿子夫人に眼をやったが、彼女は夫の言葉を肯定するかのよう、静かにつつましく食事をつづけていた。夫の不遜ともとれる言葉にも一言も口出しをせず眼の色も変らなかった。私は内心疑義を抱いた。寿子夫人は、本来Mの官能を内蔵していたのではなからうかと——。夫にそれを妻の口から求

めることは、深窓育ちの彼女の自尊心が許さなかった。折あらば彼女自ら被虐を求めているのではなかったか。たまたま夫に対する背信行為が契機となって、被虐の潜情がうまくそれに便乗し、SとMとの合致によって、夫の愛をしつかと把握し得て、妻は背信にことよせて、被虐の陶酔にゆくりなくもひたれたのではなかったであろうか。

寿子夫人は、夫がかねて奇クを秘かに耽読し、あるいはSMのフोटを秘蔵していたことを知っていた筈である。不潔といって焼き捨てる以前、奇クの内容を知ればこそ不潔とか忌わしいとかいえるのである。いい換えれば彼女自身、己れの恥部に触れたような気恥かしさが、そんな行為に出たのではなからうかと、私はそんな想念で夫人の横顔を見つめていた。

嫌い、嫌い、嫌いという言辞を裏返せば、それが好き、好きに通じるように、自らの心にMの感能が沈潜していればこそ、なお反動的に、奇クとか一連のフोटを忌避しないのかも知れない。もう一ついい換えられ

ば、夫が見知らぬ女の緊縛フोटを愛蔵することにジェラシーを覚えていたと極言してもいいのではなからうか。なればこそ、夫が自分の背信にかこつけて、プレイを求めた時、己むを得ぬ素振りやで応じながらも、実をいえば、妻はその日を一日千秋で待ち望んでいた——と考えるのだが……。これは私のあながちに穿ち過ぎた論理ではないと思う。でなければ、僅か半年そこそこで、プレイの極致に近い緊縛の種々相が納得出来ないのだ。

妻は秘かに待ち望んでいた被虐の悦楽に酔い痴れ、夫は妻を縛り得た願望達成に喜悅している。SとMの想念がピッタリと一致したそこに、プレイは超特急で飛躍していったのではなからうか。背信の代償として、己むを得ずに、洩々に応ずる態度が、寿子夫人のあ



のプレイのフオトからは微塵も感じられなかったのが、私の立証への何よりの証左ではなからうか。なればこそ奴隷妻と呼ばれても、易々としてそれに応じているのだ。

私は寿子夫人の被虐心理を、我流に少し分析し過ぎたようだ。現実に戻ろう。

「随分、私をお望みのようでしたが、何か目的でもあったのですか」

「それなんですよ。何しろボクは実際のプレイに対しては浅学非才ですから、辻村さんにご指導していただこうと思ひまして。辻村さんのお手紙によると、寿子がいやがってはいないかと、そんなご配慮でしたが、実際はその逆ですよ。本当は妻の方から辻村さんに会って一緒にプレイしたら、なんていい出したのですよ」

「あら、そんなこと……」

始めて寿子夫人が、恥らいげに抵抗した。

「だって本当じゃないか。自分みたいな女でもカメラ・ハントになるかしらって、暗にい出したのはお前だよ。だからボクが……」

「もういいですよ。余り田宮さん、奥さんを虐めなさんな。しかし光栄の至りですな。それで緊縛のプレイは随分やったのでしょ」

「引伸機一式を購入してからは、大袈裟じゃ

なく連日連夜でした。夫婦プレイの挙句の行きつく処は、辻村さんもご存知でしょう。やっと近頃は三日か五日に一度というくらいに少し減りましたが、あの頃は新婚当時より未だ消耗がひどかった。毎朝ぼんやりして、仕事碌々手につかなかった。その代り、フオトの方は、いつときにドッと殖えましてね。寿子のフオトだけで二千枚を超えましたよ」

「凄いですな、そいつは。ひとつ拝見出来ませんか？」

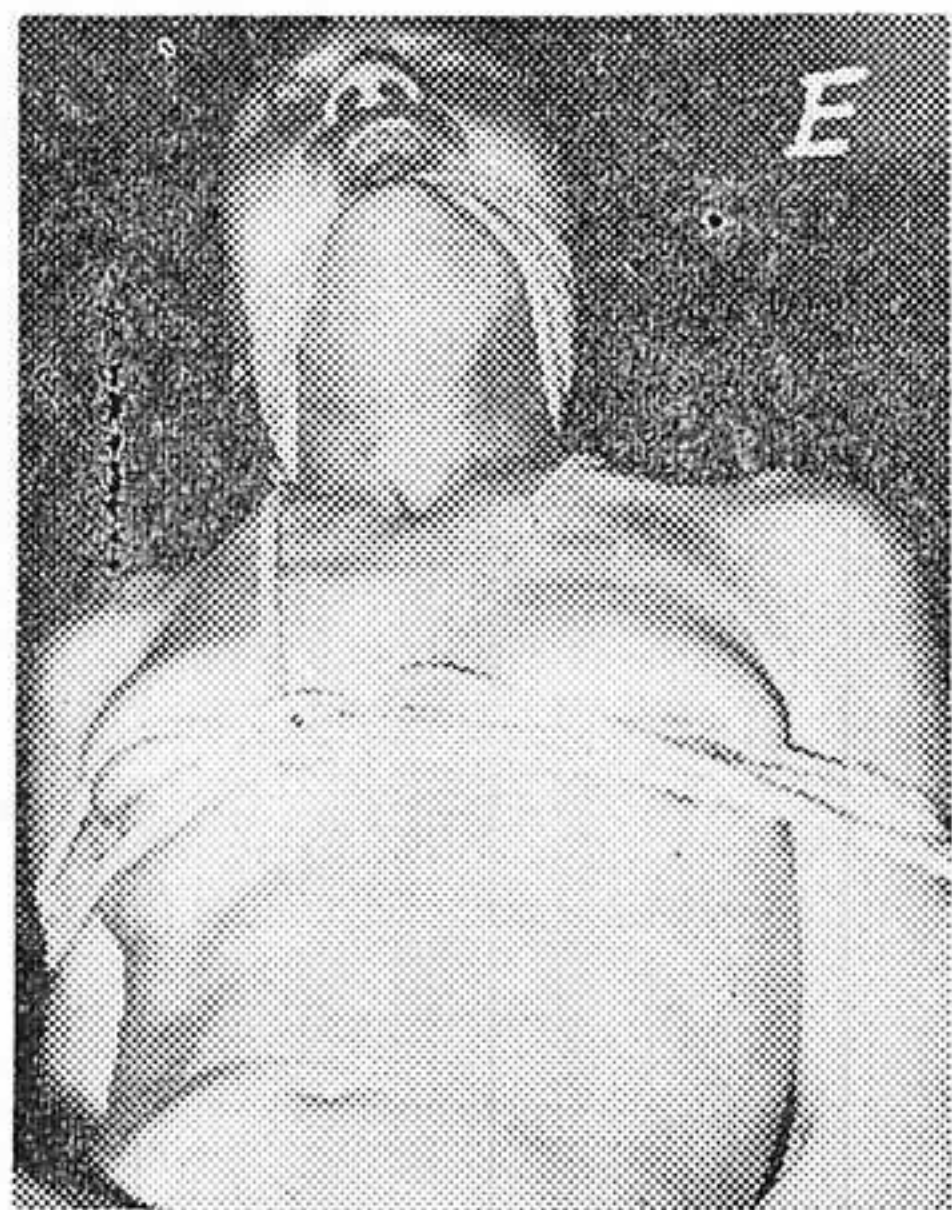
「未だD・P・Eが下手なもので、余り美しく仕上っていませんが、是非、見て下さい。いろいろと忌憚のないご意見をして下さい」

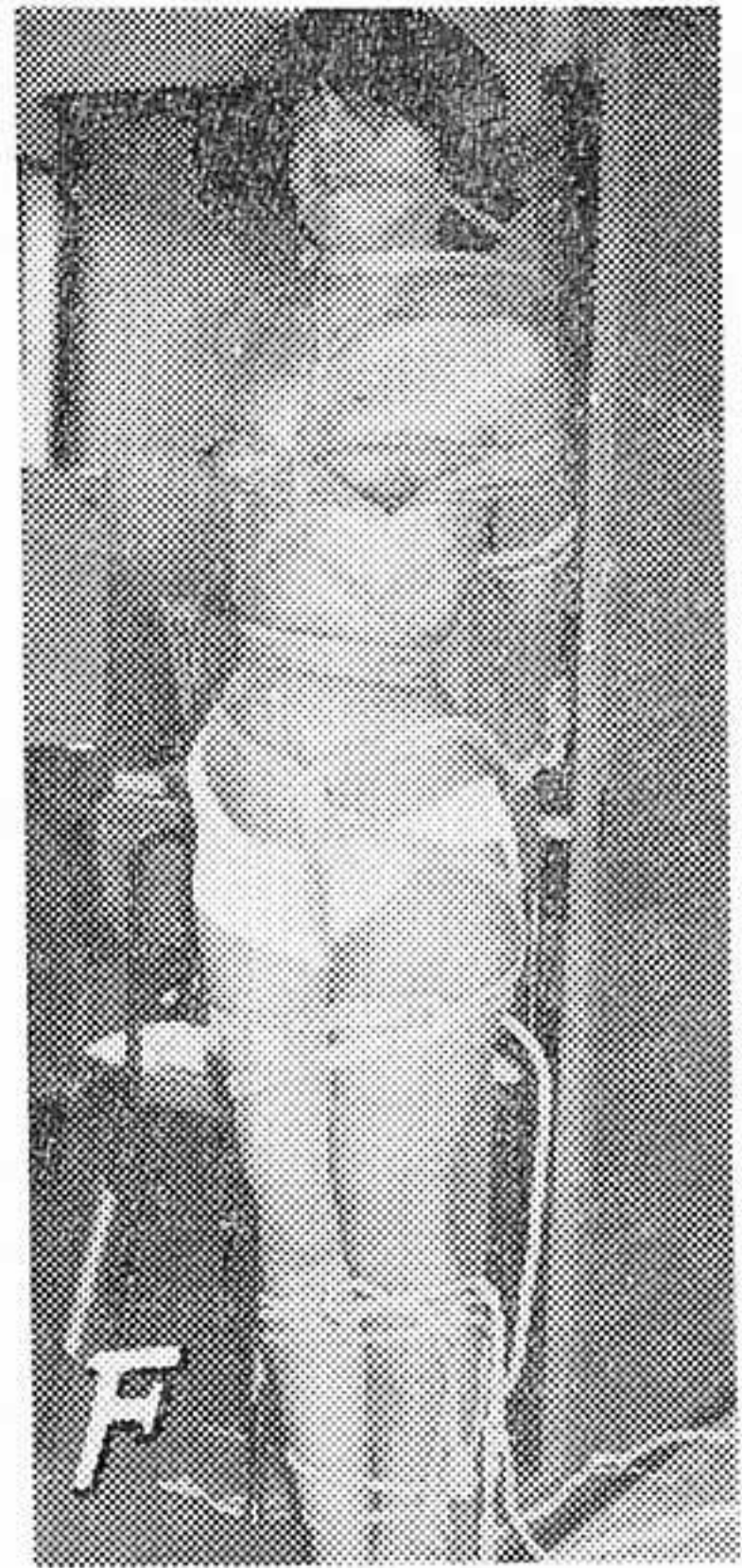
彼は立上って応接間を出たが、すぐ戻ってくると、大きなボール箱を抱えて来た。開くと、月光やシーガルのキャビネ用の箱を次々と出した。四つ切判の黒い袋もある。

寿子夫人が机上を素早く片付けて拭いた。何百枚とも知れぬキャビネ判、手札判のフオトが、机上面にバラ撒かれた。どれもこれも寿子夫人の緊縛やら、露出フオトオンリーである。机上は彼女の洪水だ。とても短時間では見きれぬものではない。激しい眼眩らむような真昼

のショック！

そのフオトの数々のポーズを説明しては最早きりが無い。あらゆる残酷、非常、無惨のポーズがそこにあった。殆んどが全裸であった。私はフオトから視線を挙げた。ソファに手をおいて、うるんだようなまなざしで佇立する夫人の放心に似た姿が、そこにあった。夫人の底辺のクローズアップをまざまざとフオトに多く見出して、今夫人を見た時、ヴェールに蔽われたその深奥を垣間見る思いで、私の心はいつしか疼き始め、燃え始めていた。プレイの構図や、その時の状況を彼はいろいろと説明していたが、最早私は上の空であった。心はこの夫人を轟々と縛り上げた





い想念に赤く爛れていた。のどの渴きが、私の心を如実に示していた。

「じゃあ、ぼつぼつ始めましょうか」

田宮氏は立上った。その時、寿子夫人が、つと夫の傍らに寄添うと、耳許で何ごとか囁やいた。彼はウンウンとうなずいていたが、一寸いい難そうに、私に向って、

「矢張り最初は気恥かしいらしいのです。十分許り、ボクが呼びにまいりますまで、奥の座敷の方でお待ち願えないでしょうか」

「ああ、いいですとも。じゃあ勝手に行つて悪いけど、私は向うで一服していますよ」

私はきさくに応接間を出た。許容したといつても、さあ始めようといわれれば、夫人にとって、どうも恰好がつきかねるらしい。

私は期待に胸をふくらませて、廊下を奥へ

へ顔を覗かせた。

「お待たせしました。さあ行きましょう」

ぐつと生睡をのみ込み、大きくうなずいて私は立ち上る。

応接間の扉を開いた正面に、寿子夫人の糸纏わぬ緊縛のポーズが、突然に現出した。

自分の恥かしさから逃れたためか、夫人の両眼は細い帯紐で眼隠しされてあった。応接椅子に後手に縛られて胸に四重許り縄がつよく巻きついている。こじんまりとした、子供をうまぬ小さい乳房が、縄で押しつぶされていた。両脚は開いて、椅子の左右の脚にしっかりと縄で固定されていた。見るまいとしても私の眼は、自然に、その縄目の厳しさに

灼きつくように、注がれていった。すべてと幼女を思わす白肌に走っている深いくびれ

と歩んでいった。

× × ×

待つ時間というものは長い。二人はどのようにプレイを始めているのか。私は度々腕時計を見た。十数分経った頃、廊下に足音が響いて、田宮恭介が座敷

が、不自然さを超越した、清潔な感懷を抱かせる。気配で私のちん入を知って、眼隠しされた夫人の頬にパッと血の気が浮かび上り、刹那、体が硬ばったようであった。

既に田宮恭介は、女体に向つて、しきりに閃光を浴びせかけていた。私も慌ててカメラをとり出す。凝々と動かぬ被写体へ、数発のストロボが光ったが、ハントには発表しかねるポーズである。

「田宮さん、あそこへ縄の束をおいて下さいな。でない……」

「ああ、そうですね。分りました」

私の気持を咄嗟に察したのだろう、彼は床に投げ出してある縄の一束をとって置いた。山本流に言えばそれが(A)である。この縛り方は、しかしごく初歩的なものであった。

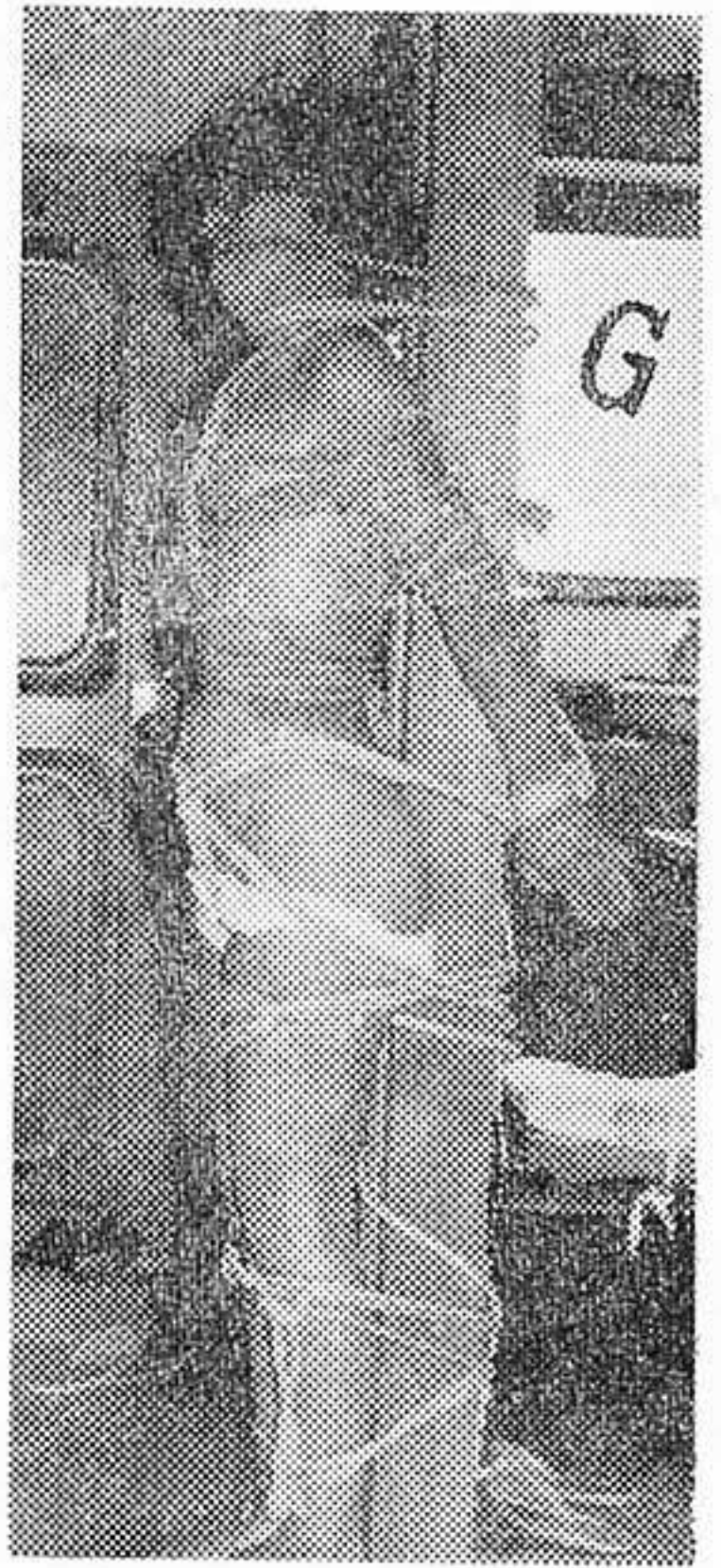
「もう少し、縄を使つては如何です？」

私は田宮氏に催促する。

「じゃあ、この俵でもう少し縛りましょう」

彼は隠蔽の縄をとり上げて、首縄をつくり胸から降して腰で巻き、臍下で開いて、両脚にかけていった。それが(B)である。

私が撮り終った時、田宮恭介はわざと寿子夫人の眼隠しをとった。彼女は一旦開いた瞼をあわててまた強く閉じた。私を正視出来な



かったのであろうか。そこに私は新鮮な若い人妻の強烈な羞恥を見た。しかしその行為がかえってSの追求に拍車をかけたようであった。

田宮恭介は先ず妻の全身の緊縛を、余すところなく見せておいてから、おもむろに縄を解いていった。解き終った時、この雅妻は、全身を抱きかかえるようにして、向うむきに慌ててパンティを履いた。

「辻村さん、縛ってやって下さい」

「構いませんか」

「待ちかねているんですよ」

「そんなこと……」

向うをむいた俤、寿子夫人は小さな声で抗議した。

「構いませんから、さあ早く」

田宮恭介にせき立てられて、私は縄を握った。

「変った縛り方を見せて下さいね」

カメラを構えながら期待する彼の声が飛んでくる。私は腹を据えて夫人に近づくと、彼

女の腕をとった。とった腕を握って手首に縄を結び、背に廻して他の一方の手首に縄を巻く。恰度胸を抱えたポーズになる。(C) 腕ごと三重許り巻いて引締める。小柄な夫人の

体は、私の腕の中で少しもがいた。背で結んで止めて首に廻し、肘の交叉したところをき

つく巻いて縛ってゆく。余った縄を股に通して背の縄で結び、一本の長い縄での変型前手縛りは完了した。この間、時間にすれば三分

そこそこの早さであった。彼は私の縄捌きに感心したようにみとれていた。(D)

「早いですね、驚いた。どうだヒサコ、辻村さんに縛られた気持は？」

「余り痛くありませんわ」

「ボクのは、きつくて痛いからね」

田宮恭介は皮肉めいたいい方で、軽く彼女

の頭を小突いた。猿轡をはめた、小柄な寿子夫人の膝立てのポーズはみずみずしかった。

第三者によって、愛妻が緊縛されたというところで田宮恭介の心は激しく疼き始めているようであった。彼のカメラ持つ手は心なしか震え、吐く息ははげしかった。心の昂ぶりが歴々と感じられる動作の、はしばしであった。

「奇クの七月号でしたか、確か山本なんとかて人が書いておられた、奇クサロンの『奴隷妻』の文が、ボクの気持ちにピッタリしましたね。ボクも折々は誓約させるんですよ。辻村さんの前でやらせると、なおさら効果的ですから今から誓約させます」

彼はマントルピースの上の、携帯用の小型テープコーダーを下してきて机上においた。妻を隷属させ、羞恥と屈辱を与える、これもひとつの手段であらう。

「どんなポーズでやらせましょうか」

「どうぞ田宮さんのいいように。私はなるべくオブザーバーでいて、あなた方のプレイの状態を見ていたいですよ」

田宮恭介はニヤリと、会心の笑みを洩らした。我が意を得たというところであらうか。

二台の扇風機が、絶え間なく涼しい風を送ってはくるが、閉め切った応接間は相当な熱気

を孕んでいた。

彼は依然として縛られた俤の寿子夫人に近寄ると、私の縛った縄をゆっくり解き始めた。二の腕や手首に、くっきりと縄跡が残っていた。彼はビニール袋から、犬首輪と、キラ光る、細身の鎖をとり出した。

「寿子、辻村さんの前で誓約するから、そこへ四ツ這いになるんだ」

彼女は全身に羞恥をみなぎらせて、チラリと恥かしげな視線を私に送ってから、それでもいわれる俤に床に這った。彼の顔は上気していた。のどがカラカラになっているのか粘っこそうな唾をゴクリとのみ込む音がした。

手にした犬の革首輪を、妻の首にはめて尾錠をしめる。茄子環で細い鎖を首輪につなぎ、首輪の丸い環に名札をつけた。（女奴隷・ヒサ公）と赤いインキで丹念に書いてある。

細い革バンドをウエストがぐっとくびれるほどに締めつけて、それに一本の縄を通すと縄の一方が双丘に喰い入るように引き絞って胸を伝って首輪の名札の環につなぎ、他の一方の縄尻を足首で結んだ。こうすれば四ツ這いの俤で立上れないのであろう。立上ろうとすれば、股間をくぐった縄が、強くきつく皮肉に陥没してゆくに違いなかった。

私は田宮恭介の、この

作業を、好奇と昂ぶりの眼でみつめていた。二、三枚、私のカメラに、その動作が移動した。

「寿子夫人の頬はピクピクと引きつり、泣きそうであった。マイクを四ツ這いの口許近く据えて、テープを廻す。」

「奴隷妻の臨時誓約、ボクのいう通り復唱するんだ。分ったか」

「ハイ、分りました」

「ヒサ公はご主人様および辻村様の奴隷でございます」

「（復唱）」

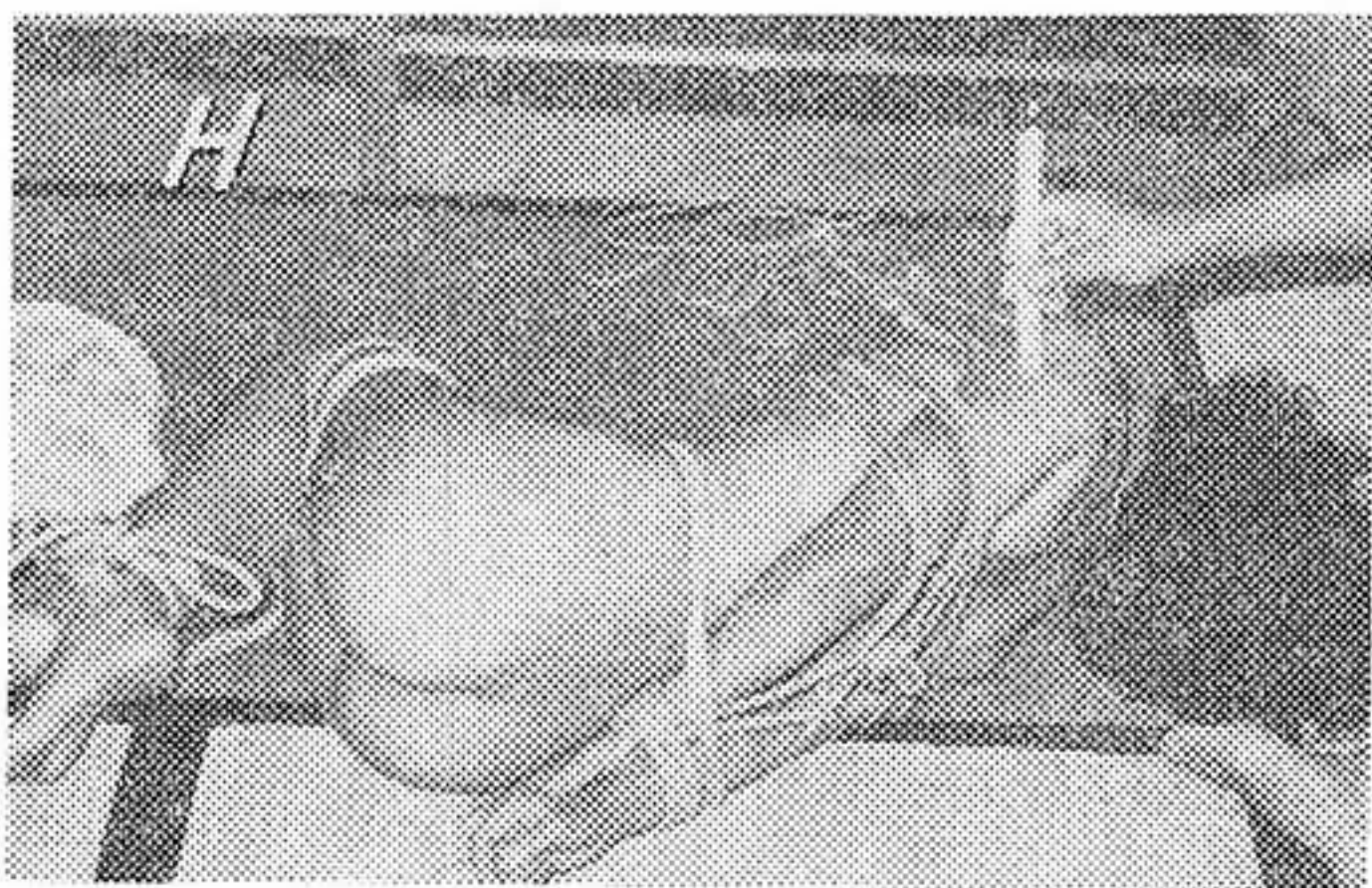
「お二人の命令はどんなことでも守ります」

「（復唱）」

「お二人の前で、どんな恥かしいことでもいたします」

「（復唱）」

「辻村様とよろこんで××××××××いたします」



「（復唱）」

私は呀っと思った。田宮恭介は愛する妻を人身御供にするつもりなのであろうか。しかしいわせた当人は、如何にも真剣であったし、夫人もその女として口に出せぬ言葉を敢えて復唱した。これはえらいことになりそうだと、私は内心とてつもない期待と不安に、心を熱くした。

「右臨時誓約します。昭和四十二年九月十日午後二時十八分。奴隷妻ヒサ公」

「（復唱）」

「よし誓約は終り、今よりは奴隷として扱う。」

夫の嗜虐性もさることながら、私は轟々と、寿子夫人の甘い陶醉の被虐の感情を知った。半年の成果では絶対ない。潜かに培養されていたM感覚が、活火山のように生き生きと火を噴き始めているのだ。

「じゃあ、辻村さん始めて下さい。どんなことでも結構ですから」

「いやいや、先ずやって下さい。私はカメラ

をやりますから……」

何も私の尻込みではない。ことの成行から見ても私の単なる緊縛より、田宮夫妻のプレイの方が、新鮮味があって、遥かに興味を覚えたからであった。

「じゃあ、興味あるかどうか分りませんが、ご覧になって下さい」

彼は首輪を外すと、夫人をボンと足蹴にした。

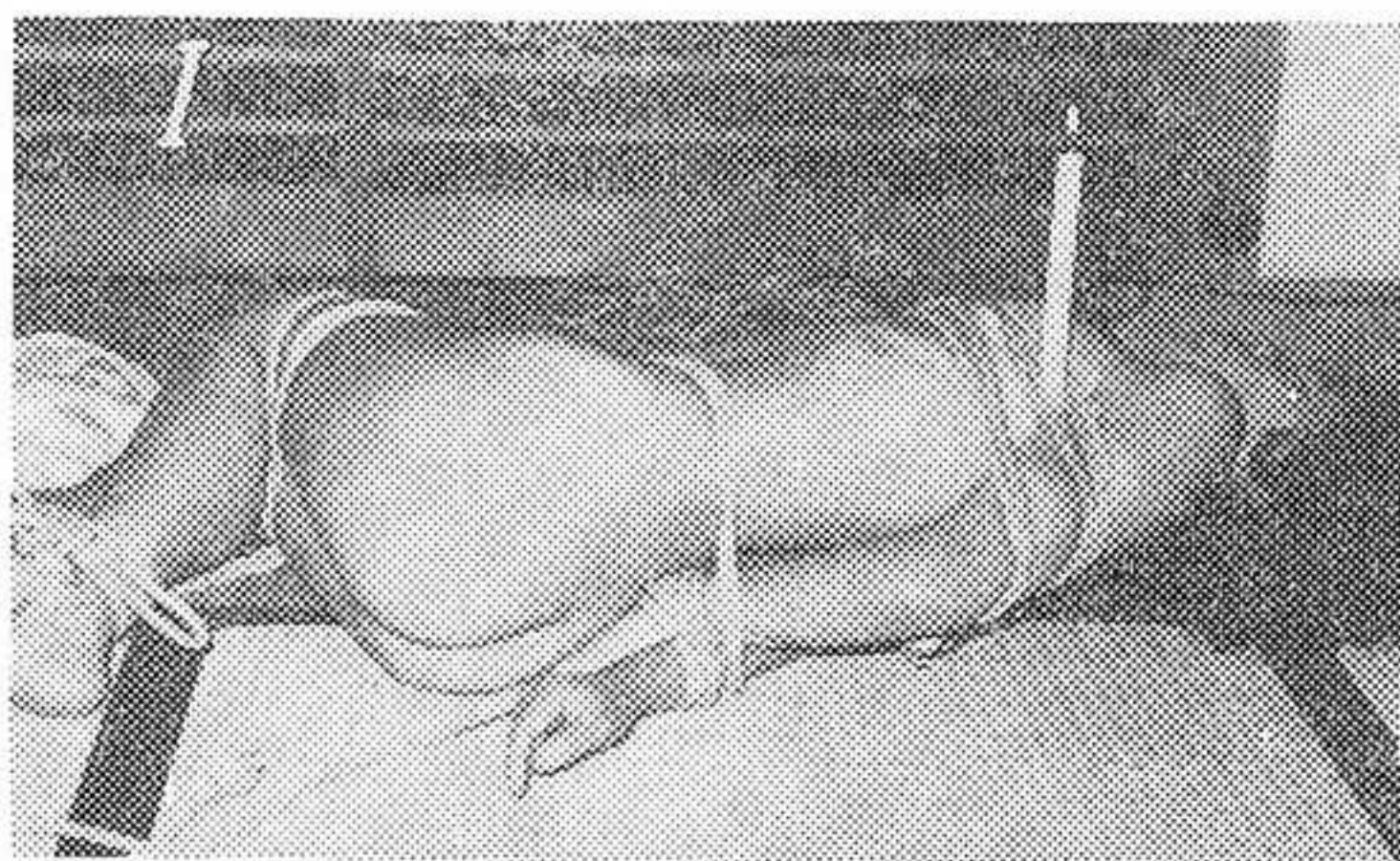
ジュータンの上で、彼女の体は軽々と横転し、仰向けに倒れる。倒れた体の上に、七十五キロ以上

もありそうな田宮恭介の体が、どっかと馬乗りになっておさえつける。

「ボクの縛りは、辻村さんのように手加減しないぞ。奴隷にふさわしいように、思い切り強く、力任せに縛り上げてやる。いいな」

寿子夫人は馬乗りになった夫に、微かにうなずいたようであった。

彼はやっと体を夫人からおろし、縄を握る



と、手荒く後手に縛り、背から首へ廻して、胸をギュウギュウしめつけた。ついで夫人の口を開かせて、縄でぐるぐると強く強くしめながら巻きつけていった。頬に喰い込んだ縄の激しさに夫人は喘ぎ、鼻孔が拡張し、顔面一杯に苦痛を漂よわせて歪んだ。

「アウウウ……」

苦しいというのだろうが、それは声にならない。柔肌にジツトリと汗がにじみ上ってきた。田宮恭介の手に茶褐色の細いゴム管が握られていた。一方は丸く尖って小穴が開き、二十五センチばかりの長さがあった。カテーテルである。

今、そのゴム管の先端は埋没し、点滴が一本の線となって、計量カップに刻々と液量をふやしてゆく。夫人の鼻孔から洩れる熱い吐息と、小さきみに震える臍窩の辺りに、苦悶と悦楽の交錯した表情があった。閉じた瞳に愉悦が走っていた。

田宮恭介は、一〇〇〇ccカップの約半量を

充たした液体にじっと見入り、やがて点滴が止まると、カップを捧げた。夫人のクワツと縄目の喰い込んで開いた口腔に、カップは徐々に傾むき、夫人ののどははげしくむせて動いた。ダラダラと液体は夫人の顎を伝い、胸の縄をしめらせていった、縄を伝い液は夫人の体をしとどに濡らしていった。還元された液体が夫人の腹部にさざ波のような、ささやかな波動を起していった。(E)

私は彼の一挙一動を、胸の張りさけそうな感動でみつめていた。まるで魅入られたように――。

× × ×

今、私達は応接間を出て、廊下を歩いている。簡単に後手に縛られた夫人を先頭に、縄尻をもつ彼、しんがりに縄やカメラ類を抱えた私。田宮恭介は、プレイの場として、家中をフルに使うつもりらしい。私はいつものように、ウロチョロと構わなかったことが本当によかったと思った。私自身、夫人を縛ったり、プレイしたとしても、それは夫に対する遠慮や気兼ねもあって、到底このようなことは思いもよらなかったに違いなかった。

いきなり、度胆を抜くようなカテーテルの洗礼があって、私は思いもよらない光景をま

ざまざと眼の当りにしたものだから、これから先、どんなプレイが展開するやら、ゾクゾクするような思いにかられていたのである。

二度、三度、田宮氏は私にプレイをするようすすめたが、その都度、私は婉曲に辞退した。その方がより新鮮なものを獲られると思った、私の算段からであった。田宮恭介自身も、私の手前、一層張り切っているらしく、夫婦プレイの可能の限界の総ざらいをする腹づもりでいるらしい様子であった。私はゲストとして、おとなしく、フォトのみ撮っていたればよい立場にあった。なまじ変な手出しをして、折角のいい雰囲気壊れるのを懼れる気持の方が強かった。夫人にしても夫なればこそ、如何なる責め屈辱にも耐えているのではなからうか――。

「台所にいい柱があるのです。あそこでひとつ、やりましょう」

振り向いて彼は私にそう声を掛け、リビンググキチンへの戸を開いた。茶の間へつづく硝子戸を開くと、いい具合に柱が一本、まるで縛り柱のように独立して立っている。台所の向うに見える鉄扉は、じかに裏へ通ずる勝手戸である。中から二重に鍵がかかるので、開けられる心配はないが、時偶、オートバイの

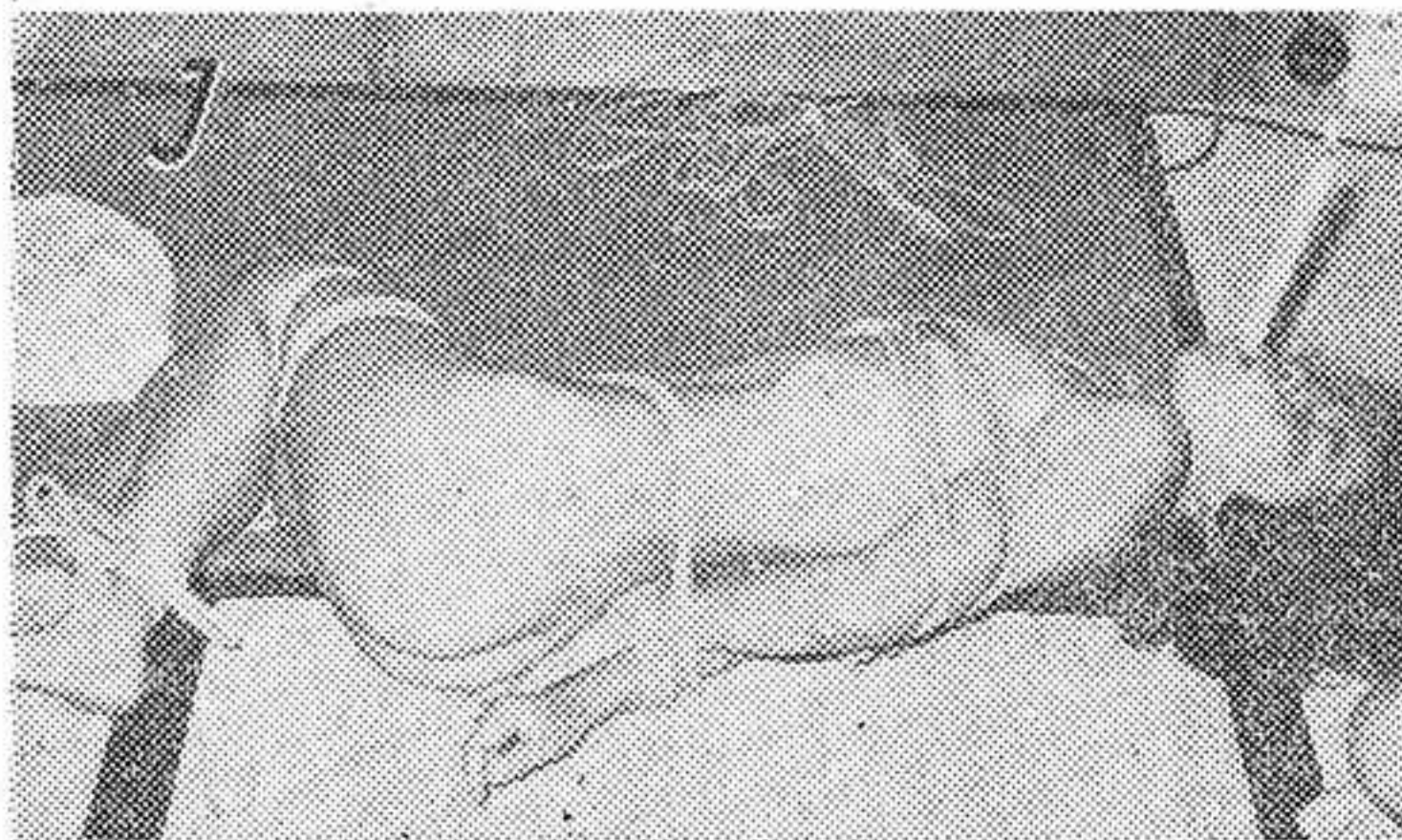
音や、人声が通る。

彼は夫人を柱の前へ直立させ、簡単に縛った後手の縄を一たん解いて、両手を柱の後ろで、改めて本縛りに縛り始めた。私の縄も提供することにした。次々と犂々縛ってゆくので、相当の縄が必要になってきたのだ。立柱に向って雁字搦目とはこのことか。

「辻村さん、およろしければ足の方を手伝って下さい」

彼の要請に応じて、私も手伝い始める。しかし、フォトで見れば分るように、上半身の彼の縛り方は丁寧で縄を有効に使っているし下半身の私の縄は、手早くぐるぐる巻きにしたことが一見して見てとれる粗雑さだった。二の腕と合掌縛りの後手の縄に痛むのか、時々夫人の口から、軽い遠慮し勝ちの苦悶の喘ぎが洩れた。その洩れた唇をこじ開いて、容赦なく夫の手で縄の猿轡がかまされていった。

極度の緊縛が、夫人の様相に徐々の変化を与えていっ



た。清楚な、どちらかというとあどけない寿子夫人の様相が、被虐への陶醉の歪みからか、苦悶の表情に淫靡な、妖しい笑いが、うつすらと浮かび上っているものであった。この淫靡なる表情は何を物語るのであろうか。謂わば、それはアクメに似た表情ともとれるのであった。合掌の両掌は既に紫色に変わり、首縄は呼吸すら幾分切迫させていた。しかもフ

ト浮ぶ、この猥らな不可思議な笑みに、私は女体の奥底深く潜む、神秘で甘美なMに耽溺し、埋没してゆく女心をあきらかに覗いた気がした。私はハント用のために、パンティ着用を頼んだが、田宮氏は早くそれを降したがった。(F・G)撮るだけ撮ったあと、彼の手が鉄が握られていた。ザクザクとパンティは切り刻まれて、寸断して足許に落下した。真新しいパンティ一枚、台無しにしても、田宮氏にとって

は、そのものが邪魔な夾雑物でならなかったのだ。

「これで少しばかり叩いてやって下さい。今まで鞭打ちは余りやらなかったのですが、半月ばかり前からぼつぼつ調教しているのです。未だ鞭打ちに馴れておりませんから、やんわりとやって下さい」

田宮恭介は、三十センチばかりの竹の棒に細く紐のように切断した革を十数本とりつけた、お手製の鞭を私に手渡した。

「叩いていいのですか」

「ええ、辻村さんに鞭打ちされて、責められているポーズを是非とりたいたと思ったので」

私はいわれる俚に鞭をうけとった。余り薙々と縛り過ぎてあるので、どこを打っていいやら一寸途惑ってしまう。叩きたいおしりが生憎と柱でかくれていて、細く小柄な夫人の体を打つのは、少し痛々しい気がする。

私は氣をとり直して、鞭を握りしめると、軽く撫でるように腰の辺りを一曳した。

「ウムム」と必死の身じろぎと共に呻きが洩れた。それに勢を得て、私の鞭は、夫人の体をサツ、サツと払うように擦過していった。一本の革なら、ピシリと当るうが、まるでホコリ叩きのような鞭では、ホコリを払うよう

なポーズになってしまう。しかし、数回重ねるうち、夫人の体に、薄い桃色の極細の条痕が浮かび上ってきた。パツパツと、田宮氏の曳光は絶間なく光って、私の体をはっきりカメラにとらえて構図に入れていた。

一プレイ終って、縄を解き放した時、ヨタヨタと夫人は思わずその場にへたり込んでしまった。ヒクヒクと肩がケイレンして、短くカットした断髪が微かに揺れていた。

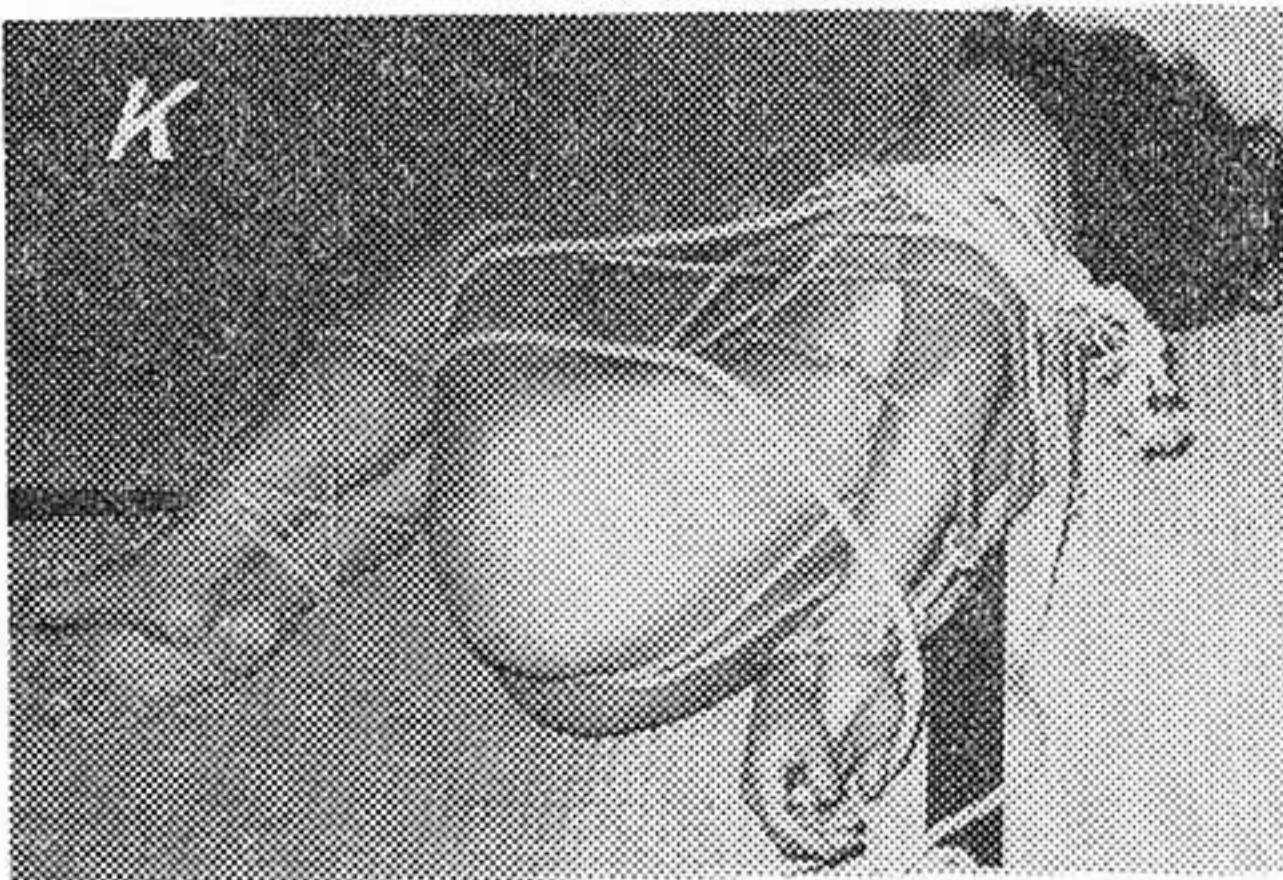
私も田宮恭介も、かなりの疲労を覚えていた。

「一杯やりましょうか——」

彼はそういつて立ち上ると小型の冷蔵庫を開いて、ビールを二本もち出して来た。私も、のどが渴いている。

打伏して、死んだように横たわっている夫人の傍らで、やがて男同志二人の奇妙な酒盛りが始まった。

「大分、奴隷もこたえたようですな」私はわざと奴隷という言葉をからませて用いた。「辻村さんがおられるという精神的ショックの方が大きい



んでしょう。未だ未だいけますよ。先程応接間でお見せした、一連のシリーズがあったでしょう。あれなんか、夜の十時から、明け方の五時半までブツ続けに続けたんですよ」

「どれだったかな」

「あれッ、一生懸命説明していましたのに」「何しろ沢山あって、どれがどれだったか、いっぺんにいわれても、覚えていないんですよ。失礼——」

「持って来ましょうか」

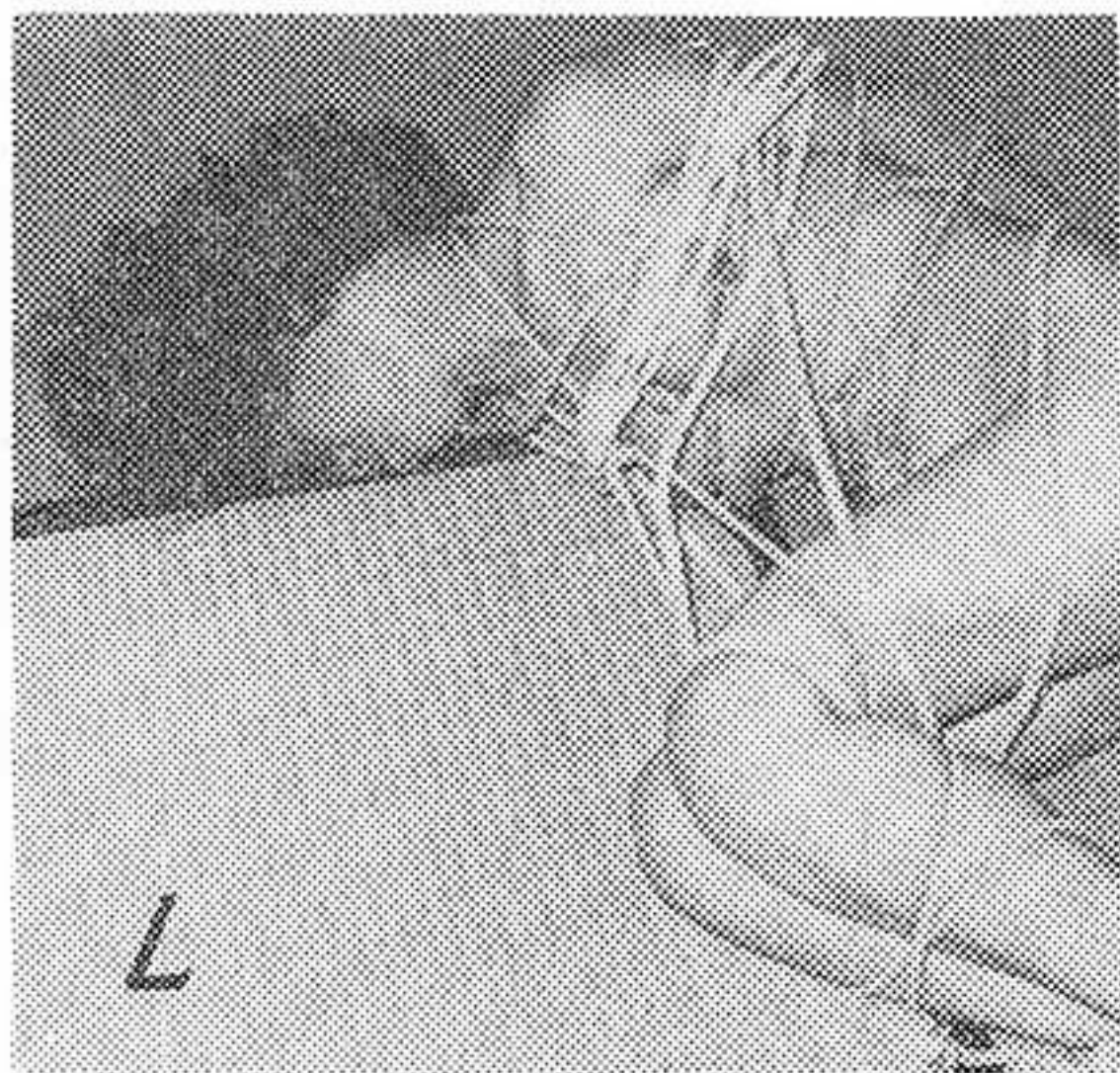
田宮氏は既に顔を仄赤くさせて、ヨイショと立ち上ると出ていった。

私はそつと夫人の打ち伏した肩に手をおいた。ビクリと肩が震えて、夫人は首をねじて私の方を見た。始めて視線と視線が意識的にピタリ合致した瞬間であった。

「痛かったでしょう」

思わず、いたわりの声をかける。彼女は無言で小さく、うなずいた。

「ご主人に頼まれてやっ



ているうち、つい力が入ったこともあったけど、ご免なさいね」

「痛いというほどでもありませんけど……」

夫人は声をきって、あらぬ方へ視線をやった。そこには田宮恭介が、道楽から始めて、今は趣味の域を超え、実益を生んでいる熱帯魚の水槽が五はいも並べてあって、蛍光灯に照らし出された可愛い熱帯魚のかずかずが無数に遊泳していた。酸素を水中に送る気泡が、美しくプクプクプクと白い泡沫を立てて涼しげであった。

「あの左はしの水槽にいられてある魚がピラニ

ヤという恐ろしい熱帯魚なんですのよ。大きい牛や人間も喰い殺すそうです。小さい魚ですのに……」

田宮寿子は、唐突に食肉魚のことをポツリといった。何の意味だろう。

「あなたも田宮氏に飼われている、ちっぽけな熱帯魚のようだが、隙があればご主人を喰い殺すというのですか——」

「まあ、どうしてそんなこと仰有るの？ 私は今の主人を愛していますわ。心から……」

「それなら、どうして、ピラニヤのことなど今、急に——」

「フフフ」

彼女の頬にアルカニックな微笑が浮んで消えた。妖しい魅惑に私はふと我を忘れて溺れそうになった。この人は表面に現わさぬ、不可解な深い謎めいた妖精のような魅力をたたえている。深くその心理を解剖してゆけば、泉のように、こんこんと尽きせぬ味わいを、男性に与える女人かも知れない。私は咄嗟にそんなふうには夫人を観察した。男心を誘う何ものかを彼女は内蔵しているに違いなかった。田宮恭介が、連日連夜のプレイへの耽溺も、あるいは、彼の心をそそのかす何かを彼を深みへ深みへと誘ってゆくかに思えた。

この小柄な、四十キロに足らぬ女体のどこに、妖しい魅惑が潜んでいるのであろうか。

田宮恭介は、目的のフォトを探しているのか、仲々戻ってこなかった。

寝返りを打って、寿子夫人の左手が、極く自然に私の足許へ伸びた。あるいは計画された演技かと感じつつも、思わず知らず、私は寿子夫人の細い、たおやかな指を握りしめていた。彼女は離そうとせず、じっと私のなすが俚に、五本の指を顰らせていた。

「私を含めてのプレイは、本当に奥さんの発案だったの？」

「でたらめですわ。主人が勝手に」

「本当に望まなかった？」

「……」

彼女は黙して応えず、うっすら笑って眼を閉じた。軽く開いた唇は、心なしか私の唇を待ち受けているようであった。

「さき程、応接間での誓約で、私との一条があったでしょう。私がその気になっても、奥さん、後悔しない？」

「プレイでしょう、最初から……」

「そう、プレイとしてでも」

「主人の、私を責めるタネがまた一つ殖えるのじゃないかしら」



私は意識して絡んだ指に力をこめた。

「主人が戻ってきたようですわ」

彼女は、少さく呟いた。その癖、絡まった指を離そうとしない。人妻の秘かな媚態を私は、まざまざと見る思いだった。

奴隷の誓約という、主人公認の隠れ簑で、夫人は、潜在する情念を吐かそうとしているのではなからうか。

「執れ近日封切りされますが『昼顔』という映画をご覧なさい。きっと——」

「『昼顔』ですね。見ますわ」

私は、それだけいって口を閉じ、指を離した。夫人は、さりげなくドサリと向うへ打伏して、元の姿勢に還った。

田宮恭介が、かなり分厚いフオトの束をもつて戻ってきた。

「ほら、辻村さん。これですよ、これ」

彼は妻の打伏した姿にチラッと眼をやり安心したように、もう彼女を意識の外において、しきりにフオトの説明を始めた。

「生卵を割るんですよ。欲びますね」

彼は縷々と説明する。その描写は残念ながら書けない。夫婦プレイの果ての微妙な二人っきりの秘かな欲びであったから。よく似た、一見して同じようなフオトが

番号順に羅列されたが、これはフオトの面白味ではなかった。

「8ミリならいいですよ」

「ええ、ボクもそう思いました。でも一人で撮ったり、プレイしたり出来ないでしょう」

「やってる人もいますよ。長尺リリースを使つての自作自演をね」

「研究して見ますよ。面白くありませんか、このアイデア」

「夫婦の和合には絶妙でしょうね」

「これなんか、どうですか？」

意見を求められたフオトを見て、私はハッと息をのんだ。こんな吊りが可能なのだろうか。顔面を極度にぐるぐる巻きに縛って、後頭部の辺りに吊縄を通して、手足は自由にして、顔面縛りの縄だけで吊ってあるのだ。

「こんなことよく出来ましたね。顔がひん曲ってしまう」

「数十秒なら出来ます。台をして外して、抱きかかえて離す。リリースでパッと撮る。すぐ抱いてやる。寿子は体が軽いのが取柄ですからね」

彼は、さも嬉しそうにニヤニヤした。

「えらい時間を喰いました。そろそろ奴隷を虐めましょうか」

「未だやりますか」

「未だ未だ、これからですよ」

田宮恭介は転がっている夫人を、軽々と抱き起すと、手早く後手縛りにして、胸から腰に縄をかけ、膝から足許まで縛り終ってから突き放すように転がした。

「辻村さん、ローソクですよ」

彼はローソクをとり出すと、私に握らせてライターで火をつけた。

「蠟涙を垂らしてやって下さい。体に近づけてなるべく熱いしずくを——」

私は蠟燭を受けとると、いわれる俚に腹の上に傾けた。真新しいローソクは、やがて傾きと共に溶け始め、ロー滴が、ボトボトと、彼女の側腹へ、したたりおちていった。

「体にローソクを立てましょう。腕の辺りな

んかどうですか」

私は、いわれる通りやって見たが、仲々うまく立たない(H)。あきらめて腋へ挟み、ついで夫人の口中へ立てる。(I・J)

夫人は必死にローソクを咥えているが、少しでも身動きして均衡が狂うと、ローソクが忽ち、夫人の顔面に容赦なく注がれてくる。彼女は身じろぎもせず、必死にこらえていた。蠟責めがやっと終り、一息つく間もなく、変った調教が始まった。

「辻村さん、奴隷にわざと抵抗させるんですよ。それを引っ捕えて、我武者羅に縛り上げる。これも面白いですよ。やりましょうか」
もう私は彼のいうが尽だった。既にフィルムは三本目にかかっている。こんなに撮っても、ハントに掲載されるフォトはその何十分の一に過ぎないのだ。それでも私は、こうしてアルファベット順に発表したい意欲に馳らされている。

「辻村さん、バタバタ騒いで、もし大切なカメラやストロボなど蹴とばしてもいいかもしれません。隅の方へやって下さい。始めますよ。さあ、逃げろ。逃げろ——」

彼は例のムチを握り上げてかなり力をこめて、妻の尻を叩いた。キーンという奇妙な

声が洩れて夫人は飛び上り、部屋の片隅に逃避した。それを追って夫のムチがまた振り降されんとする。台所につづく六帖の茶の間で、こわい鬼ごっこが始まったのである。じっとしていればぶたれるので、夫人はムチをさけて逃れた。それを部屋の片隅の、恰度縄がいつぱいにちらばった処に追いつめ、夫は妻の手をぎゅっとねじ上げた。もう滅茶苦茶としかいようなない、乱暴な緊縛が始まった。

夫人は既に私の存在を無視して、ヒイヒイと悲鳴をあげ「あッ痛いノ」とか「カンニン許して」とか、しきりに大仰に声を挙げて夫の縄目を逃れようとした。妻も夫も汗びっしりに濡れた体をぶつけ合って、格闘した。

挙句、何とも形容のしようもない縛り方が現出したのである。私のカメラが躍動したことは、いう迄もなかった。(K・L)

田宮恭介は、ハアハア息を切らせながら、

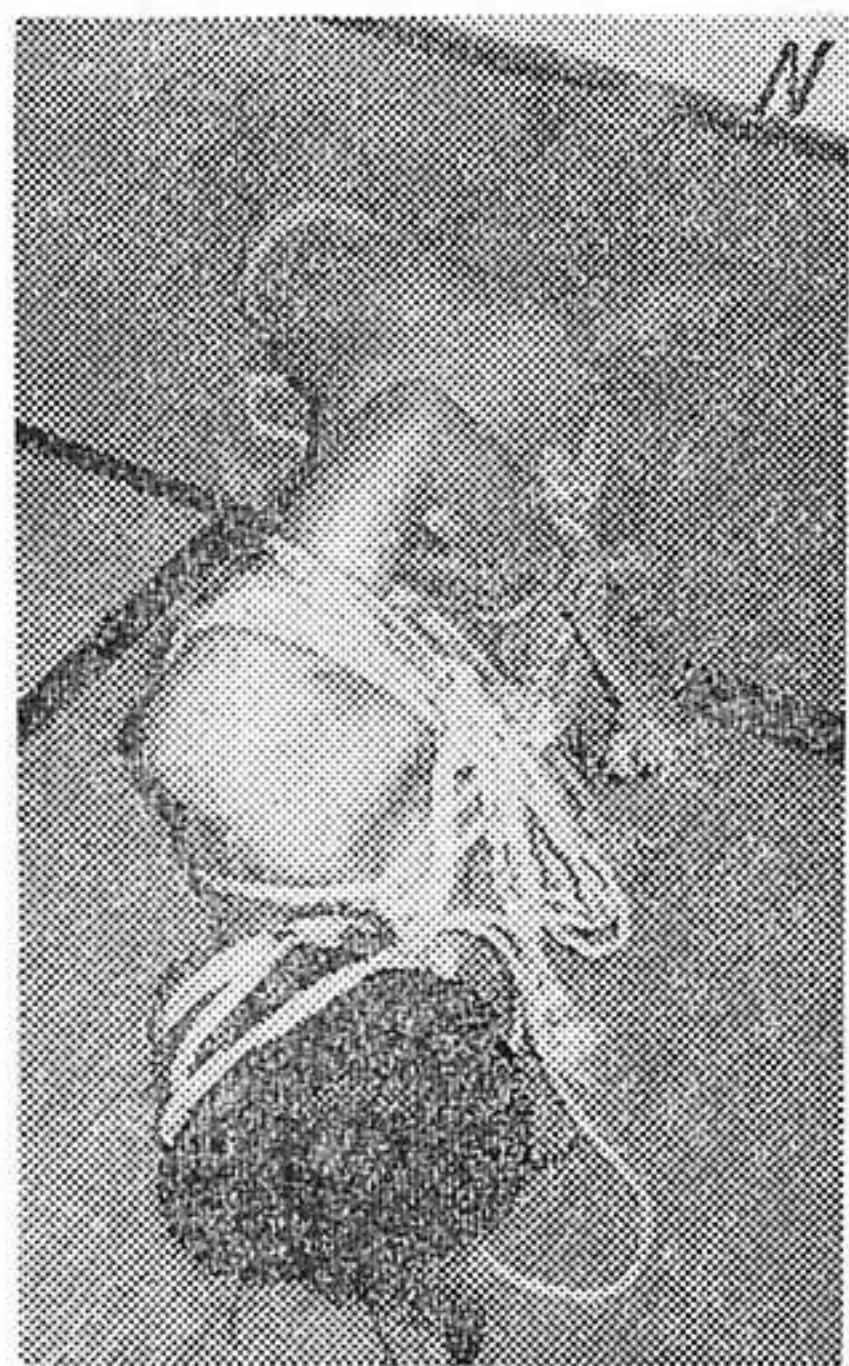
「このアマ奴、とんだ手数をかけやがって」

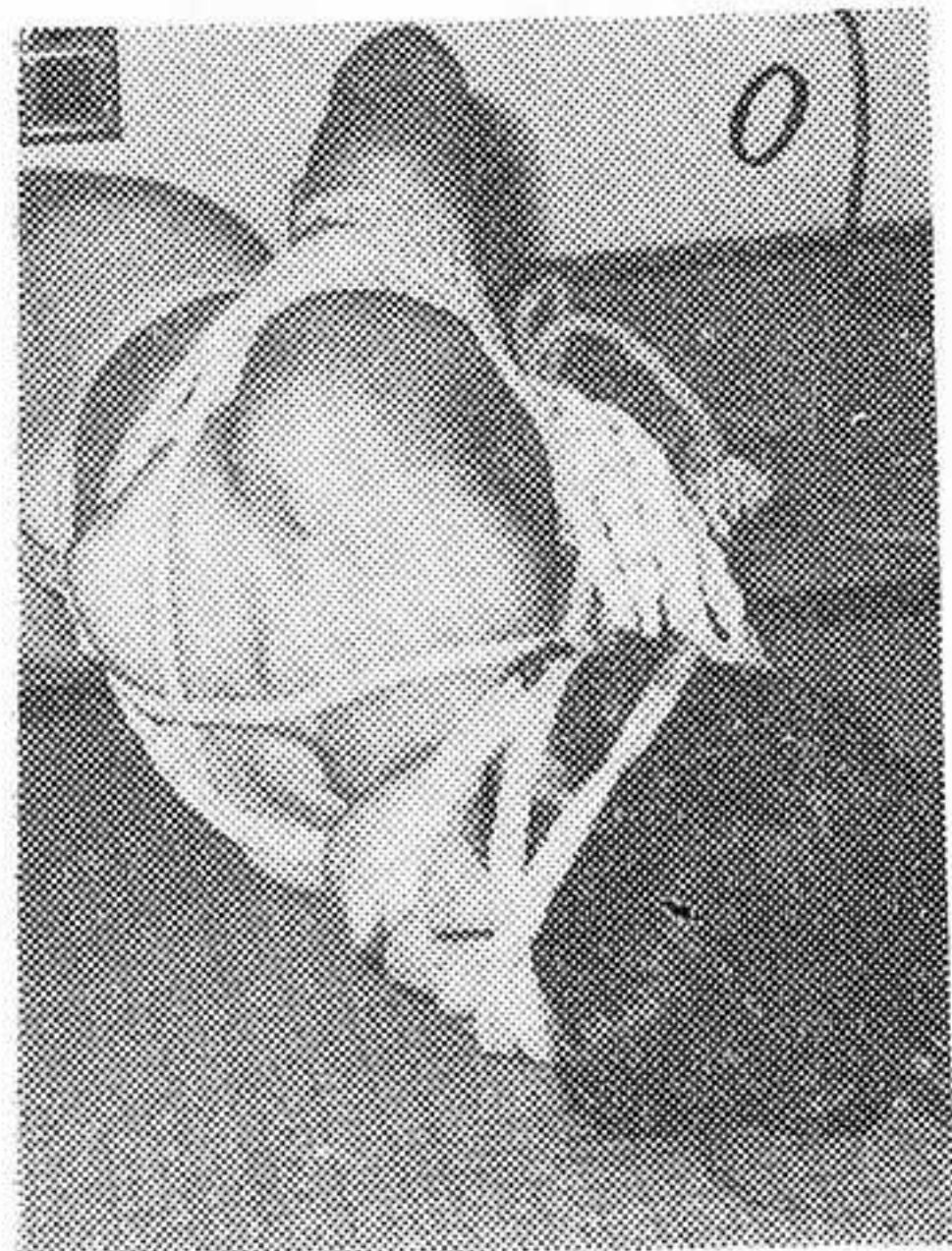
と、粗暴な言葉を吐いて、二、三蹴、足蹴にして、ドカリとその場に

坐って煙草に火をつけた。夫人はヒクヒクとうごめきながら、かすかに泣いているような嗚咽が洩れていた。

強烈な股縛りが深々と喰い込んで、一寸身じろぎすると、縄が擦れて痛むらしく、彼女は唯、喘ぎ、呻くだけであった。余りにも壮絶なプレイを眼の当りに見て、私はいつしか田宮恭介という人間に恐怖すら抱くようになったのである。半年足らずでここ迄の激しいプレイをして、これから先、どうなっていくのだろうか——。この危惧は、既に再三再四、私の頭をかすめていたのであるが、今ここに生々しいプレイの現状を見て、私の認識は更に改まったようであった。

「少し乱暴ですね。大切な奴隷は金で買えま





せんから、もう少し大切にしないとね」
「そうですか、乱暴に見えますか。辻村さん
のようなベテランがそう仰有るのなら、ボク
達の夫婦プレイも、どうやら一人前になった
ようですね」

「過ぎたるはおよばざるが如しといいますが
らね。私の場合、モデルが多いから、ついで
つもフェミニストになってしまう。今迄知っ
ている同好者の夫婦プレイの方々にくらべて
も、田宮さんの場合、少しいたわりがないよ
うに思いますけど——」
「そうみえますか。プレイだからなおさらそ
うやりたいし、今日は辻村さんがいらっしや

るから、なおさらハッスルしたのですが、ボ
クほど家内を愛しているものはいないと自認
しているんですが、奴隷にきいてご覧なさ
い」

「いやいや、あなたが自分の口で仰有るのだ
から確かでしょう。しかし、ショックでした
ね。流石にいささか参りましたよ」

「まあ、見ていて下さい。もう一ちようやり
ますから——」

情無用のジャンゴならぬ田宮恭介は、妻に
かけた縄をときほぐすと、立たせてまたぞろ
縛り直し始めた。彼は疲れを知らぬのである
うか——。二の腕を強くしめての後手縛りの

股縄、しかも口にかませた縄を、更に
眼隠しのように顔面をしめ上げて引き
絞って縛り上げていった。(M・N・

O・P)

この一見弱々しげな寿子夫人の、ど
こに強靱な耐久力が潜んでいるのだろ
うか。鞭打たれ、縛りに縛られ、既に
プレイは二時間半以上も経っているの
に、彼女は音をあげず、ひたすらに奴
隷の本領を守って、夫のするが儘に、
されるが儘になっている。この忍従力
は被虐の本性に通じているに違いない

のだ。緊縛され、虐たげられ、責められるこ
とに欲びを見出せなくては、いくら彼女が夫
に対する背信の代償とはいえ、これでは非道
すぎるというものだ。彼女の心に甘受する被
虐への陶醉あってこそ、こうした延々とつづ
く一方的なプレイは継続してゆくのではなか
ろうか。私自身、縛り方の様子をいちいち説
明するのが億劫になる程、緊縛は連続してつ
づいているのだ。僅かに、田宮恭介がフォト
をとりに応接間へ立った、僅か数分が、夫人
にとって緊縛より解放された、ごく稀少な時
間に過ぎなかったのである。なればこそ、僅
か半年そこそこで二千枚という膨大なフォト
を撮り得たのであったろう。

私もよく撮る方であるが二千枚というと、
優に五、六年はかかるに違いなかった。勿
論、彼のフォトも、それこそ玉石混淆ではあ
ったが、よくも撮りも撮ったりである。自ら
プレイし、走ってはカメラを握り、また戻っ
てプレイをつづける、そのファイトと小まめ
さに私は、唯々たじろいで、哑然とするばか
りである。愛すればこそ撮り、愛すればこそ
縛り、虐める夫の心が、妻には痛い程分って
いるに違いなかった。夫に対する全面的な協
力態勢が、また彼女自身の疼くような欲びで

あったとすれば、田宮恭介、寿子の夫妻は、結婚後数年にして知った、真の夫婦生活の理想像であつたかも知れない。

オブザーバーの私は、彼の手綱に振り廻わされ、唯、フォトを撮ることのみに汲々としてゐるに拘わらず、精神的にはフラフラに疲れてゐた。ショックの強さは、時には第三者に与える場合の方がプレイする本人よりも往々にして強いのである。

四谷怪談を演ずる役者は、自身怖くない筈であるが、観る者にとって恐怖を与えるが如く、サーカスのブランコ乗りが平気で演じて観衆は手に汗握るが如く、今、私は傍観者の立場にあつて、確かに手に汗し、心を異常に弾ませていたのである。苦しげに悶える夫人にも演技の下心があり、田宮恭介自身も、私に見せるために最大の努力を払つてゐるとしたならば、フラフラになるのは見てゐる私に外ならないのは当然であつた。

「疲れたでしょう」

「ええ、少しね。でも、これからですよ」

「えッ、まだやりますか」

「屋外実験をひとつ、お目にかけましょう」

これから引曳り出すのです」

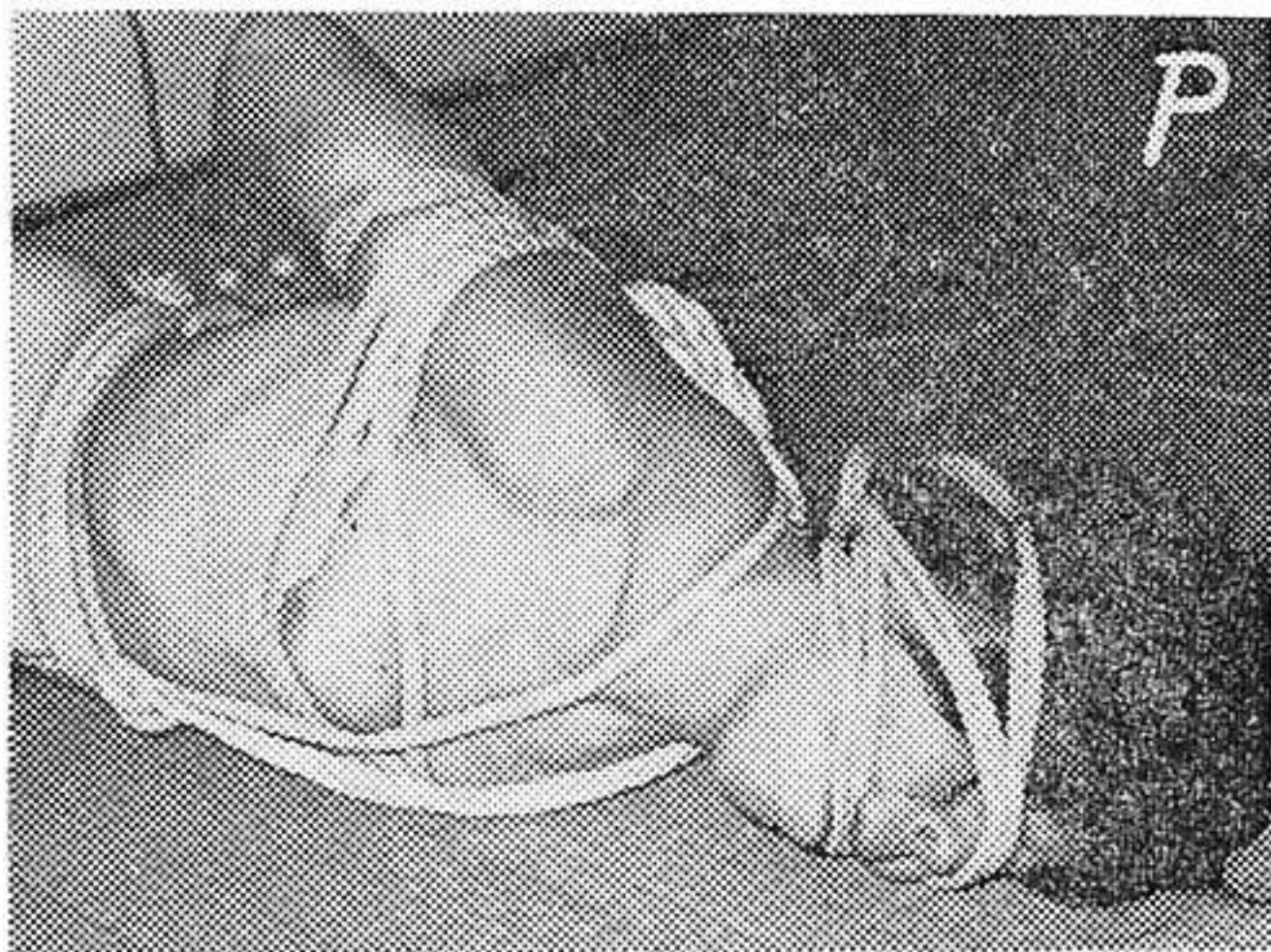
彼はサービス精神まことに旺盛である。相

手がベテランの辻村隆と信じ込んでゐるからこんな程度では満足しないとても過大評価してゐるのではなからうか。

「屋外実験をすませてから、最後に、辻村さんへの奴隷の奉仕をさせます」

誠に恐れ入った協力である。私は申訳ない気持ちになつてきた。Sの夫とMの妻のプレイするところ、どちらか一方が非協力では成立しないのだ。夫の命ずる俚に易々として忍従する寿子夫人の、優しい心づかいが私にはたまらなくいじらしく思へた。高価な代金を払つて、プレイさせるのなら

私も気が楽であつたが、私に対し何の代償も求めず、只管にプレイを開陳する田宮夫妻に対して、私は今日程、雑文書きの辻村隆という奇クで幾分の名前の知れた自分が有難いと思つたことはなかつた。田宮夫妻とて、もしこれが何者とも分らぬ男の前でなら、夫婦の秘事を開陳するはおろか、



一顧だにしなかつたであらう。毎月毎月、飽きもせず、読み辛い、大阪弁なまりのカメラ・ハントを、根よく書きつづけてゐるお蔭で、今こうした物質的には購えたのだから、私たるものまた、誠にプレイ冥加な奴である。

田宮夫妻のプレイには、増田夫妻、新宮夫妻、水野夫妻になかつた、奴隷妻としての強烈さがあつた。増田喜代司の如く、縄を解く

度毎に、綿々と妻のみゆきの体をマッサージする優しさもなく、新宮、水野夫妻のような、愛妻精神の上に立ったプレイの甘さもなかつた。少なくとも私の手前では妻を虐めて当然とし、奴隷の如く扱ふを至極として、妻へのいたわりは何一つ見出せなかつた。プレイに徹した彼の割切つたS感覚なのであろうか。

雁字搦目の縄を、彼はかなりの時間をかけてや

つと解き放した。間髪を入れず、犬の首輪が夫人の首をしめていた。くさりをはめ、ムチを持ち、彼は妻を四ツ這いにさせた。

「ほれ、裏の庭へ這ってゆけ。ゆくんだ」

パサリとムチがシリを打って、夫人は、いわれる俥にのろのろと這って、歩み出した。

縁側を通り、雑草と土くれと小石の庭を、

夫人はヨタヨタと膝で這っていった。

小じんまりした裏庭で、四圍からは遮蔽されて覗かれる懼れもない。土にまみれて寿子夫人の手足は薄黒く汚れ、その這うさまは、いとしくもまた、あわれであった。

「辻村さん、この奴隷は、今、犬並みですか、ひとつ餌をやっていただけませんか。喜んで何でもやりますから」

「どうするんです。弱ったなあ」

「このクッキーを辻村さんが半分噛って、その残りを投げてやって下さい。口で、じかに食べますから」

田宮恭介は、手にした数枚のクッキーを私に手渡した。ひそかな慕情を彼女に覚えている私にとって、この行為はいささか苦行であった。しかし私はプレイと割切って、請われる俥に、ジャムの挟んだクッキーを一枚おぼり、半分に割って、そのたべ残しを、たたきになっている、地べたへ投げた。

「さあ、有難く頂戴するんだ。辻村さんの唾のついたクッキーだぞ」

寿子夫人の眉に、悲しい翳が走った。しばし躊躇していたが、思い直してか、数十センチ這ってクッキーの落下場所へ辿りつくくと地べたに口を近

づけて、それを唇に挟んだ。微少なよぐれと共に、彼女はそれを口中に入れ、噛みくだいて嚥下した。

「よしよし、仲々よくいうことをきく。あとで可愛がってやるぞ。では辻村さんへのクッキーのお礼に、吊ってやるからね。逆吊りして下さいと頼め！」

「……」

「早くいわんか、吊って下さいと……」

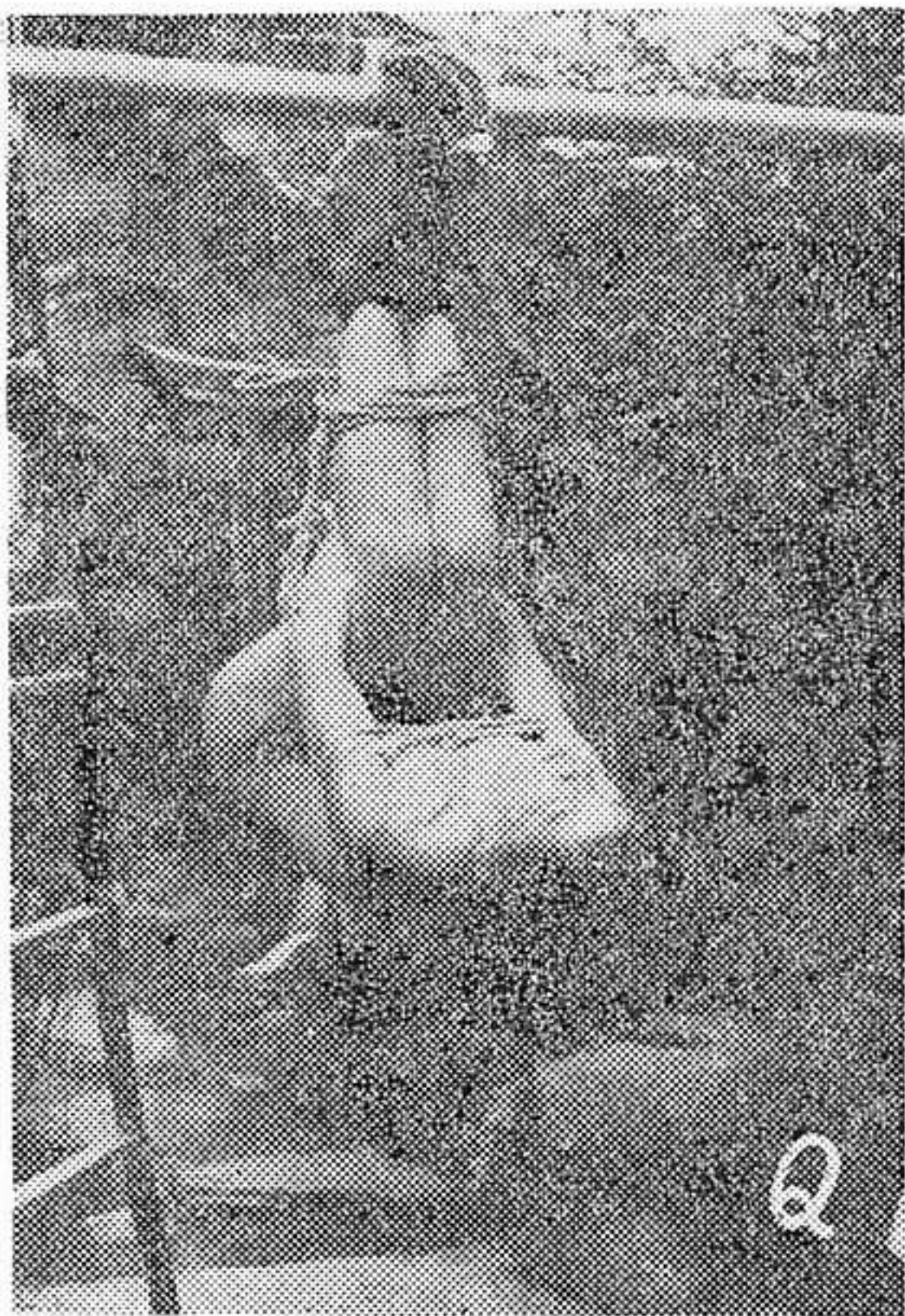
「……って下さい」

聞きとれぬ復唱が返って来た。

「フオトでご覧のように、大概の吊りはやりましたが、そうだ、今日は両手を膝のうしろで縛っておいて、両足で吊りましょう」

独りでいって独りできめた彼は、くさりの端を棒杭につなぐと準備を始めた。私は夫人の滑車を使つての、高々とした逆吊りを見たかったが、それは既にサロンにも彼が発表済である。彼のご意見に従って、猪吊りに似た吊りを拝見しよう。

田宮恭介は、便利梯子を持出して来て、一方に立て、片方は納屋の棟木の出ばったところに縄を通して円を作った。かなり太い竹を持ち出してくると、それを梯子と縄の円にかけ渡して、懸垂のようにぶら下ってみた。安



全をたしかめてからいよいよプレイとなる。

「何しろ、一人で吊るのもいつも大変なんです。辻村さん、差支えなかったら、一寸応援して下さいな」

「ああ、いいですとも」

彼は夫人の首輪を外して、地べたに仰向けに、無難作に寝転ばせると、両脚をあげさせて、膝の背後で両手を縛った。ついで胸に縄をかけ、両脚を揃えて脛の辺りで縛った。吊る縄は流石に重量がすべてかかると思つてか、彼がサロンで書いていた脚絆を持ち出してきて、それで足首をしっかり縛り合せて、竹の棒に結びつけた。

「ボクが奴隷の体をつぎ挙げますから、辻村さんは、この竹棒を、両方の上の方へ引っ掛けて下さい。じゃあ持ち上げますよ」

軽量の寿子夫人を夫は軽々と抱きあげた。

私は大急ぎで竹棒を、梯子の上段と、縄の円の両端にさし込む。

「いいですね、離しますよ」

そろそろ体を離してゆくと、巻脚絆の辺りで少し結びがゆるかったのか伸びたが、夫人の体は地上一米以上も高く、ゆらゆらと吊り下った。私と田宮氏のカメラの放列。ストロボなしの自然光線で充分とれる直射日光の明

るさである。

「シャッタースピードを早くして、絞りを開いて下さい。奴隷の体を押して、ぶらぶら動かしますから」

綿密なご注意をいただいて、私は絞り8の二百五十分の一のシャッタースピードに合わせる。

彼は手荒く夫人の髪を引攪むと、はずみをつけて大きくゆさぶって押した。ギイギイと竹の棒がきしみ、宙吊りの俛、夫人の体は前後に揺れた。(Q・R)

「いたたた。足が痛い、痛い。ヒイッ」
思わず、夫人の唇から絶叫と共に、苦悶の聲が流れた。庭の方へ廻ると、やや逆光線になるが、私は敢えて背後に廻り、そのウラを撮った。双丘が揺らめいて、明るい陽射しがまざまざと、その奥に照りつけて、斜陽が眩しく私の眼に乱反射した。

「ウーン、降して。イタタタ、早く……」

空間で、身悶えして、夫人は始めて哀願しなかった。きっと脚絆の縛りが乱雑であつたに違いなかった。私は思わず竹の棒に手をかけた。「いいんです。もっと痛めつけてやりましょう。奴隷が、ぜいたくをいっている」

田宮恭介は、夫人の苦悶と絶叫を冷やかに

凝視していた。何という非情、冷酷。

私は刹那、余りにも徹しきつた彼に、憎悪すら覚えた。

「降してやりなさいよ」

私は、ついきつい口調になった。そしてハッとした。と同時に、田宮恭介も私のきつい口調にハッとしたようだった。

「ええ、降しましょう」

素直に彼は妻の体を下から受けて抱いた。私は大急ぎで竹棒を外す。安堵に似た溜息が思わず私の口から大きく洩れた。

「もうここらで奴隷誓約を解約しませんか」
「未だ辻村さんへの奉仕が残っているんですかね」

「とてもじゃない。私はクタクタですよ。もう結構です。本当に——。お気持だけ頂いておきましょう」

「私なら構いませんわ」

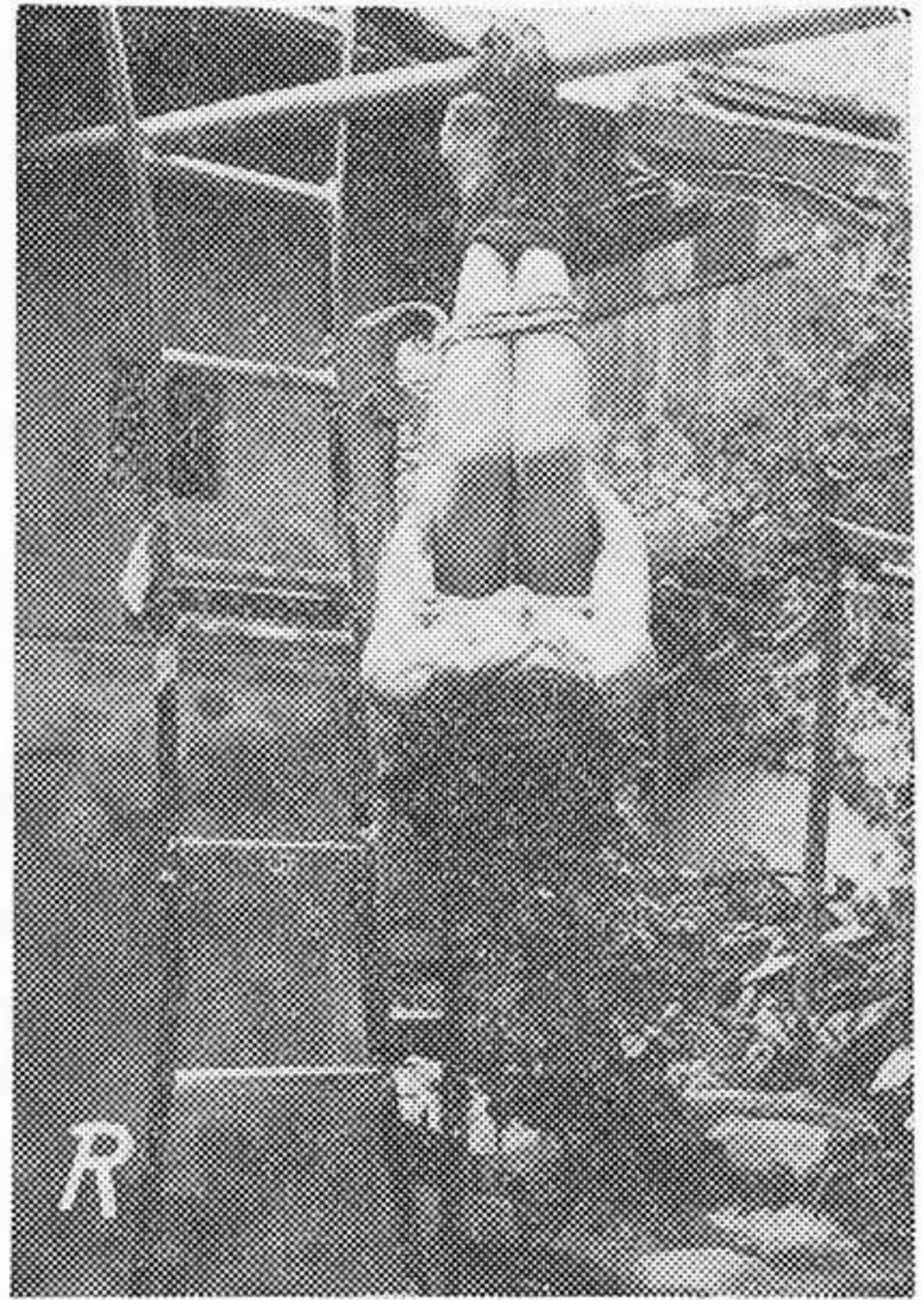
降ろされた寿子夫人が、熱いまなざしで私に応えた。その妻をジロリと夫は見る。奇妙な雰囲気があるにであった。

「やるのか？」

夫は妻に詰問した。

「私は、いいんですよ」と私。

「……」



妻の返事はなかった。ジェラシーめいたにらみが彼の瞳孔から走ったのを、私は判っきりこの眼で見た。

夫は夫人にやらすつもりで、飽くまで主動権を握っての言葉であったが、辞退する私に對して、奉仕を希望する妻の言葉に、夫の心は穏かでなくなったのかも知れない。

(最終になって、大変なしこりが出来たものだ。困ったなあ、これは)

「やらせましょう。奴隷が希望しているんだから——」

「いや、本当にいいんです。はっきりいいま

い。もうこれで充分過ぎるのです。分って下さいよ、私の感謝の気持ちを——」

熱が醒めたように、夫はだまって聞いていた。妻も地べたでうなだれていた。危険な死角に直面して、私は少しい過ぎると思ったが敢えていい切ってしまったのだ。いつか私の真意が分った時、田宮夫妻と私のプレイを通じての結びつきは、より鞏固なものになることを、私は信じて疑わなかった。

「奴隷を解放しましょうか？」

多少白けた口調で、田宮氏は蛇足をつけたすようにいった。

「是非どうぞ、もうここらが汐時ですよ」
「よし、解放だ。寿子、本当に有難う。いろいろと済まなかったね」

「いいえ、私……」

彼女は顔を伏せて、素裸で、はだしの俛、逃げ去るように、彼方に消えた。浴槽で湯を浴びる音が遠く聞こえてきた。

「気にしないで下さい。本当に嬉しかった」

私は、彼の手を握った。

「こちらこそ、つい我が出て、自分勝手に振舞ってばかりいて……。辻村さんの好意に甘えていたのですね。辻村さんなら何をしていても信用出来ると思って、つい……」

「ハハ、よかった、よかった」

私は田宮恭介の肩を心から叩いて、感謝の意を表明したのであった。

× × ×

風呂に入ってゆけ、夕食をしてゆけと、次々と親切にされて、遂々厚かましくも、私はいいなりになって、夕食までいただいていた。夫婦揃って、是非共、私の家を訪問したいという彼等に快諾して、ようやく席を立つ気になった時は午後八時を過ぎていた。

ヒサコ、ヒサコと、この夫は、まるで大きい子供のよう、可愛いく小さい妻に甘えて

いた。それでいいのだ。それが田宮夫妻の日常の本来の姿かも知れない。唯、一旦プレイとなると、Sに徹する彼の心情が、羨ましくさえ感じられた。

ビールのかすを放出すべく、彼がトイレに立った時、寿子夫人は一言いった。

「すみませんでした、今日は——」

「どうして——」

「分かっていらっしゃるでしょう？」

「奥さんはいい人ですよ。しかしプレイと本心を混同すると大変なことになる。これだけは今後に心すべきですよ。『昼顔』という映画はね、ジョゼフ・ケッセルという人の小説の映画化ですが、外科医の妻が主人公なんです。その妻の意識の奥底にひそむ欲望を、幻想と現実を混えて描いているのだが、検閲でも問題になった作品なんです。ルイス・ブニエル監督というのは、いつも物議をかもし、ブラックリストにのった異色人ですが、この映画はベネチア映画祭でグランプリをとったのです。幻想の場面に描かれている、鞭打ちや被虐願望のシーンを見て、奥さんの内面をもう一度しっかり確かめられたらいいでしょう。何一つ不自由のない外科医の妻の、激しい欲望をネ」

「ご覧になりましたの？」

「いいえ、私も見ていない。同好者の人から精しく知らせて来てくれたのです。スチールで見た主人公の妻になるカトリーヌ・ドヌーブのあの小柄な体と、喘ぐ欲情が、奥さんのイメージとダブってしまったのです」

「私にもあるのでしょうか？」

「えッ、何が……」

「ああされて欲ぶ心が——」

「所詮、女は受身なんです。変型的な愛情だけれど、ご主人は必死で今、奥さんを愛していられっしゃる。それはプレイをしない時の旦那さんの在り方で、奥さん自身一番よくご存知でしょう」

「それはもう、よく——」

「でしょう。理解のない他人がもし知ったらたまげるかも知れないけれど、お二人のご家庭をお二人で創られた。そのお二人の日常がピッタリと息の合った過し方が出来る——」

変型であろうがなかるうが、お宅の内だけのことなら、それが即ち幸福というもののじゃないですかね——。おっと、これは判りきったことを。どうも失礼」

「いいえ、そんな——」

「せいぜいお倅せに」

「余り激しいと、反って子供が宿らないそうですわね」

「さあ、それは」

いいじゃないか、子供なんて。しつくり心の通い合った今、母になることなく、存分に二人で愉しみ給え——。私はそういいたかった。

「孰れ、出来ますよ。いつかうまく宿るいい方法、教えたげる」

「あらッ」

寿子夫人は、はにかんで頬を染めた。

やれやれ、折角の大相撲の初日を見そなったわい。まあいい、それより十倍も百倍もの収穫を得たのだから。

台風二十二号の接近のニュース。そんなことも、どうでもいいや。

私は、長い田宮氏のトイレにしびれを切らせて、席を立った。

「あら、襟にはこりが……」

背伸びをして彼女は何かつまんだ。その肩の手に私は猿びをのばして、そっと上から押え、温かく笑った。寿子夫人よ有難う。あなたの奴隷は実に素晴らしかった。真赤なバラに似た雅妻よ。永劫に倅せであれ——。

私のマゾ雑記帳



馬場好男

八月十一日附の読売新聞朝刊に、輸出がさっぱりとまった真珠の記事が出ていた。この原因について、ベトナム戦争とミニ・スカートの流行が挙げられるという。

日本のドル箱、真珠の輸出量が、昨年にくらべて、ざっと三百三十六万ドルも減ってしまったそう。とくに最大のお得意先、アメリカでのボイコットが目立っているという。

真珠はもとも、不況しらずの優良株で、この二十年間、前年の輸出実績を下廻ったことはなかったそうで、これが今度の減少で記録は破られ、ただならぬ異変がおきたというわけだ。ベトナムの戦争でアメリカは増税に悩み、景気も下降線をたどっているので真珠どころでないらしい。

さてこのほかの原因として、もう一つあるのがミニ・スカートだという。

服装が簡潔になると、アクセサリも大きなものは嫌われ、指輪とかイヤリングが売れてきたという。ミニ・スカートそのものは、世界的な流行で、地球上の大半の女性がひざ小僧をみせているが、このミニ族でさえ、アクセサリとしての真珠の価値より、全体的なファッションを重視するという。

さて、この真珠と、マゾ雑記帳だが、これ

は余り関係のあることでない。先達で、東北の友人を駅まで送っての帰り、たまにはと思つて浅草に出てトルコへ行つてみた。

江戸の本場は浅草っ子というので、イキのいいトルコ嬢にでもぶつかると、内心期待をもつて入ったが、私についたトルコ嬢は、大変、若く美しく、下町っ子のハキハキした点はよかったが、世話やきの性格らしくて正に奉仕そのものである。

「あなたの脚はきれいだなア。帰るときキスしてゆくよ」というと、

「あら、そんなことしたら、きたないわよ」と、しんけんな顔で答えるし、それでも、そうするよと言いはつていたら、ゴシゴシと自分の足を洗いはじめた。

女にいじめられてよろこぶ男の話をしたなら（自分自身のくせに、あんまり相手が純真すぎて、年がいもなく本当のことがいえない）興味ありげに聞いていたが、

「でも私はイヤだなア。やっぱり男は男らしいほうがいいわよ」

ときた。マネをしたいから胸の上に馬のりになってほしいといったら、

「重いわよ」と尻ごみをする。

なだめ、すかして、客はそれをよろこぶの

だからと納得させてやつと乗ってもらうのだから、これが本当のマゾ雑記かもしれない。

胸の上に遠慮勝ちに跨った彼女の腰をだくようにして私の首の方へおしやると、

「顔の上にお尻をのせるわよ」

とイタズラっぽい顔で、にらむ。

「いいよ、その方がいいんだ」と私。

おかつぱを長くした髪を、頬の上にはいつぱいたらして、彼女は私を見下していたが、いきなり左手で自分と私とを遮断してしまつた。その時、私の唇に何かふれたのでよくみると、大きな真珠の指輪をしていたのだ。私は、彼女のクスリ指についている真珠を唇の中にふくんで歯をとじてしまふと彼女、気持ちをほぐしたように笑い出し、赤チャンがおっぱいをふくんでいるみたいといった。

きっかけはおもしろいもので、彼女は今度はすっかり馴れた顔つきで私の顔の上に、まだ成熟しきれないお尻をのせてくれた。

結局、何もしないで胸と顔の上に馬のりされたまま三十分位、上と下とで話をしたが真珠がとりもつた無言の進行劇ではあった。

帰りがけに、洋服ダンスの中に彼女の洋服がさがっていた。メキシカンルック調のハデな原色もので、ミニ・スカートである。

「あなたがこれを着たところがみたいだな。とても可愛いと思うよ」

という、この彼女、じゃ着てみせてあげると、いとも素直にその服を着た。

私は思わずその小魔女の前にひざまずいてヒザ小僧にキスをしてしまった。

彼女の笑い声といっしょに、そのヒザ小僧も私をみて笑っているようであつた。

安田道代主演で上映された『痴人の愛』の一部を、私なりに次のようにシナリオを書きかえてみた。これぐらいなら、公開されても大丈夫と思うのだが。

譲治とナオミが、イタリア語の教師をしているケイン夫人のパーティに招かれた夜の翌日、同僚からナオミの実態を聞かされて家に戻ってくるところがある。

。河合家 表（夕）

譲治、怒りにみちて、走るように帰ってくる。

。同 リビングキッチン（夕）

譲治入ってくる。

譲治「ナオミ！ どこにいる！ ナオミ！」

とナオミの室にゆく。

。同 ナオミの室（夕）

とびこんで来た譲治、狂ったように、洋服ダンスや衣裳棚の中をのぞく。いない。

譲治「ナオミ……」

叫びながら走り出る。

。同 譲治の室

ダブルベッドのみ、大きくみえる。

入って来た譲治、暗室の幕や、くしゃくしゃのベッドカバーをひきあけるがナオミの姿はない。

譲治「ナオミ！」

と叫んで、地下の浴室へ通ずる階段へ走る。

。同 浴室(夕)

階段をかけおりてくる譲治。

譲治「ナオミ！」

トイレのビニールのカーテンの中から
のんびりとナオミが答える。

水を流す音。

ナオミ「何よ、うるさいわねえ」

譲治「あの二人はどうした、どこにいる？」

ナオミ「とつくに車で帰ったわよ」

譲治「車で？ じゃ故障なんて連中のお芝居だったんだな」

ナオミ「さあ、どうかしら」

水着姿のナオミ、カーテンをあけて出てくる、譲二の必死な汗だらけの顔をみて、

ナオミ「ひどい汗、ふいてあげるわ」

手を拭いたタオルで拭こうとする。

……………

映画の中でも、洋式トイレから出てきたナオミが、かるく手を洗って(水をかけるだけ)手を拭いたタオルで譲治のひたいを拭くが、私は次のようなシーンを連想する。

譲治が地下室へおりてきて「ナオミ！ ナオミ！」と叫ぶと、「何ようるさいわね」とナオミが、パンツを上にあげながら出てきて、「いそがせるからぬれちゃったわ。いやねえ」とその脚をふいて、

「ひどい汗、ふいてあげるわ」

と譲治の顔を拭く。それから、ケイン夫人宅でのパーティから帰る時、ナオミがすごく酔っぱらい、学生の熊谷と、浜田を自分の家に一緒に連れて行くが。

。河合家 譲治の室(夜)

大きなダブルベッドの枕の上に、ポンとすわるネグリジェのナオミ。
パジャマの譲治、下着になった浜田、

熊谷を見わたして、はしゃいだ声で、

ナオミ「いいこと思いついた。男が三人たてにらんで私が頭の方にねるの」

熊谷「こうかよ」

と、ど真ん中にねる。

ナオミ「他の二人も早くねてよ」

譲治、浜田、仕方なく熊谷の両側にねる。

熊谷「えれえことになったなア、まるで豚小屋だ」

ナオミ「ぜいたくいわないでよ」

熊谷「人さまの家に泊めていただくのに、か？」

ナオミ「あたりまえさ」

熊谷「だけど、こう体がくつついちゃ、あつくてねられやしねえ」

ナオミ「いいじゃないの、どうせ今夜は一晚中、ねむらないんだから」

熊谷「俺ア眠るぞ。グウグウいびきをかいてやらア」

ナオミ「ねようたってねかしはしないわよ。ねえ浜さん、ねむりそうになったら、くすぐってやろうよ」

浜田「僕は女がそばにいと、おちつかなくて目が冴えちゃうな」

熊谷「俺ア平気さ。ナオミなんか女と思わ

ねえ」

ナオミ「女でなけりゃ、なんなのさ」

熊谷「あざらしだ」

ナオミ「ふん、電気消す？」

熊谷「ああ、まぶしくっていけねえ」

ナオミ、わざと熊谷をふみつけて電気を消す。

熊谷「いてえ！」

ナオミ、三人の枕もとに足をひらいてどっかと坐ると、三人を見下す。

ナオミ「まあちゃん、タバコは」

熊谷「うるせえなア、静かにしろよ」

オナミ「よう、こっちをおむき。むかなけりゃ、いじめてやるよ」

熊谷「ちく生！ どうしても俺をねかさねえ気だな」

ナオミ「そうさ」

と足で、グリグリ熊谷の顔をふみつける。熊谷、その足をおさえて、

熊谷「いてえ、けるなよ。いくら頑丈でも生きものだけ。もっと大事に扱ってくれ」

譲治、そのさわぎに背をむけてマユをひそめている。ナオミ気づいて、

ナオミ「譲治さん、あんたもこっちをむい

たら？ 一人で何しているのよ」

浜田「よせよ、河合さん。ねむっているのに悪いよ」

ナオミ「ねむれるもんですか、気がもめてそわそわしてんだから。ねえ、やせがまんはよしてこっちをむきなさいよ。

一人だけ仲間はずれなんて、ヘンだわ」

と足で譲治の背をこづく。仕方なく譲治ふりむいて、

譲治「酔っぱらってさわぐなよ」

ナオミ「どう？ このながめ」

女王のように威ばってみせる。

譲治「呆れたよ、お前には。全くあざらしだ」

ナオミ「フン、私がこのネグリを着るとたまらないっていったくせに。今夜は他人がいるから辛ばうしてるんでしょ」

熊谷「おいおい、おだやかじゃねえなア。

そういう話は明日の晩にして、今夜は公平に扱ってもらいたいね」

ナオミ「この通り公平にやってるじゃないの、うらみっこがないように、右足が譲治さん、左足が浜さん」

熊谷「俺は」

ナオミ「あんた一番得よ、こんなところへ頭をつき出してるんだから」

熊谷「光栄だな。だけど一晩中そうしてるのかい、ねるときはどうなる？」

ナオミ「どっちへ頭をむけようかな、浜さんか譲治さんか」

熊谷「俺アまんなかだから関係ねえ」

浜田「僕は頭より足の方がいいな」

熊谷「この女、寝相が悪そうだが、足だと夜中にけつとばされるぞ」

浜田「河合さん、本当ですか」

譲治「……ええ、一通りじゃありませんね」

熊谷「浜田、ねぼけて足のうらをなめるなよ」

ナオミ「いいじゃないの、譲治さんなんていつもなめてるわ。顔より足の方が可愛いって（譲治に）ねえ、そうだわね」

譲治「馬鹿な……」

ナオミ「じゃ公平に五分ごとにむきをかえるわ。最初は譲治さんから……」

と譲治の方へ足をむけて横になる。譲治の目の前にのびるナオミの足。

譲治そつと愛撫し、キスする。

……………

このシーンでは黒のブラジャーにパンティをつけた安田道代が、大たんのにびきった肢体をくねらせての熱演だ。

ここでは、思いきって、ナオミが熊谷をねかせないようにするため、電気を消したら、どしんと熊谷の胸の上に馬のりになって、

「さあ、これでもねむるか！」

と太ももで熊谷の顔をしめつけ、

「ねむったらこうしてやるから」

と、その顔の上にお尻をすえてしまったら最高だと思う。話が前後してしまうが、先程のトイレから出てくるくんだりでは、ナオミの浮気をしめあげていながら、譲治がナオミの弁解にまけて馬にさせられてしまう。

……………

譲治「じゃあくまで潔白だというんだな」

ナオミ「そうよ。あなたにかくしごとなんかしたことがあって？（という）と突然泣き出して）私がいくらかわがままだった、していいことと悪いことぐらいわかってるわ。今まで育ててくれた譲治さんの恩も忘れて、他の男と遊ぶほどバカじゃないわ」

と涙にぬれた顔をあげて、

ナオミ「世間のやつらなんか何ていったってかまわない。どうせ私は乱暴で教養がないんだから。だけど命の親だと思っっている譲治さんに疑われるなんて、情ないわ。くやしい」

と譲治にだきついて、

ナオミ「あなた、そんなに疑うんなら見てよ。私の体を、よごれているかどうか……………」

と裸になって譲治の前に立ちはだかる。譲治、圧倒され、顔をそむけて、

譲治「わかったよ。着なさい、水着を……」

ナオミ「まだ信じてくれないのね。いいわイタリヤ語も、ピアノもやめて誰にも会わないから。毎日この家に一人でとじこもっているわ」

譲治「……………それじゃ、さびしいだろう」

ナオミ「いいのよ。どうせ子供の時から、友達なんていなかったもの。私には譲治さんさえいればいいの」

譲治、改まった顔つきになって、

譲治「ナオミ、お前、子供を生んで母親になつてくれないか。一人でもいい子供さえ出来れば、本当の幸福な夫婦にな

れるよ」

ナオミ「（警戒して）いやだわ。譲治さんいつまでも娘のように若々しい方がいいっていったじゃない。私が早く年をとって汚なくなってもかまわないの。もう私を愛してないのね」

譲治「お前こそ、僕がきらいなのか」

ナオミ「私は今まで通りでいいわ。ねえ、むかしのよう馬になって……」

譲治「ナオミ、話をそらさないでくれ」

ナオミ「分った。私が背ものびて、目方もふえたからいやなのね。今、馬になったらつぶれちゃうからでしょう」

譲治「つぶれるものか」

ナオミ「じゃ、私をのせる勇気があって」

譲治「あるとも、のってみろ」

ナオミ「よおし」

。河合家 リビングキッチン（夜）

ナオミ、譲治を馬にして、得意になってのり廻している。

ナオミ「何て小さなヨタヨタ馬なんだろう。もっとしっかり走って」

と足で譲治の腹をけり、手で尻を叩く走り廻る譲治の顔にかなしみの色。

……………

三回ある馬のりのシーンの、この場面だけは譲治をつぶしてはしかった。畳の上に這いつくばってのびた譲治の背中に馬のりのまま「おきて歩くのよ。ほらほら、これでもか。これでも私を疑うのか」

と、きめつけてもらいたかった。まだまだいくらかもあるが、これ位にしておこう。

マゾの男と結婚した女性は倅せと思うが、世の中とはなかなかうまくゆかないように出来ている。マゾまでゆかなくても、フェミニスト的であっても、わがままな女性たちは必ずといっていいほど、「男らしい人がいいわ。ぐんぐん私をひっぱってくれる人」という。少々気の強い、負けず嫌いの女性でも、こう必ずいう。

十五年程前、或るのみやで知りあった女で一度、結婚して別れたというのだが、子供を一人、三つ位の男の子だと思ったが引きとっていた。ちょうどその頃、私も近々結婚することになっていたが、その女に子供まであることは知らなかったので、まだ結婚の相手もみつかっていないといていた。

十人なみの美人で、何となく気の強そうな女であった。これがひょっとしたことから、

兄妹のようになると、ままごとのようなことをいって、私のことを「お兄さん、お兄さん」と呼んで、せめて二人の時は兄妹のようにふるまってほしいというわけだ。

事実、私も結婚相手が決っているのに、他の女に手を出すのは罪悪のような気がしていたのだから、わりと純情だったといえる。その女にすると、私がなにもしないので、尚更よりそってきたのかもしれない。

結局、据え膳くわぬはの通り、名ばかりの妹と、ややこしくなってしまった。私はこの時、この女をM・Sのプレイにと思ったのだが、てんでそんなことは興味どころか、それこそヘンタイときめつけた。

「私、お兄さんにぶたれてみたいの。むかしうちの主人に、ずい分なぐられたわ。主人は軍隊にいたし、下士官だったのよ。だから、とてもなぐるのがうまくて、十や十五はすぐビンタをくうのよ。もうフラフラになってしまふのよ。でもこの時は本当に私、くやしくてね。だって憎しみでなぐるんですもの。お兄さんのようにやさしい人から、愛情でぶたれてみたいのよ。ねえ、私の悪いところをみつけて、一度それをおこって、ぶって！」

と私の領分をおかされたのには弱ってしま

ったことがある。案外ポカポカとやって、働かせて、みつがせたら、いいヒモになれたかもしれないなかった。もっとも、サディズム的だから男らしくて、女に弱いから男らしくないということはない。男らしい男が、いつも女性から逃げ出しているのは、小説ばかりではない。

早い時間にキャバレーに行ったことがある。いわゆるサービス・タイムである。本番についた女性が小さなバッグから針と糸を出して

「ごめんなさいね、すぐ終るから」

と店の貸与品らしい洋服のつくりをはじめた。すその方が小さくほころびたのだ。細い絹糸で、なれた手つきでつくり終えたので、針に残っていたその糸を私はもらった。二十センチほどの長さである。私はその糸をみせて、これで君の自由を束ばく出来ると笑いながらいうと、大柄の彼女は信じられないといって相手にしない。

「それじゃ、やってみるよ」

と彼女の両手を後手にして、親指と親指だけを、二巻きぐらいにして固くしばった。はじめは笑っていた彼女が、いたいわよオとにげようとしたが、他のホステスまでがおもし

ろがって彼女をおさえつける。

「指がきれそうよ。いたいわ」

「ねえ、自由をうばっただろう。僕はもう何でも出来るよ」と胸のところに手をかけようとすると、後手のまま体をよじって、「きゅー」と叫び「いたい、いたい」と泣きべそをかいた。絹糸だから指にくいこむのだ。

「ねえ、といて。おねがい」

と懇願するのを、すげなく「駄目だ!」とつぶねたら、

「じゃ、いいわよ。マネージャーにいてもらう」と席を、たってしまった。

後手のまま駆けてゆく彼女の姿に、しまった!と思ったが他の同僚は笑っているだけ。

「あなたって、ひどいわねえ」

と一人がいったが、内心私は恥ずかしい気がした。しばらくして、彼女は帰ってきたが、糸が指にくいこんで、それに固むすびになってしまって、とけなくて困ったわよ、と私をにらんだ。そして彼女が、私に小声でいった。

「マネージャーがね、気をつけた方がいい。サディストだよ、このお客はっていったわ」

私は、目を白黒させて弁解したが、彼女は笑ってうけつけない。

「今夜、つきあってあげようか。でも二人だけなら何をされるかわからないわね」とか、

「うんと、いじめられてみようかな」

と口ぐせのようにいわれて全く弱ってしまった。それでようやく弁解に弁解を重ねて、「むしろ僕は逆だよ、本当は君の馬にしてもらいたい位だ」

といったら、しこたまビールをあけていた彼女は、すっと立ってスカートをもちあげて太ももあたりまで脚をみせると、

「よし、じゃここへきなさいよ。馬にしてあげる」という。

「ここでは、どうも。人目があるもの」

「人がいたって平気よ。だってあなたは、人の前でしばったじゃない」

と、人をいじめにかかる。

「よし、じゃ……」

とその場に四ツ這うことも出来ず（本当はしたいくせに）考えるとやはり煮ても焼いてもくえない女のくさった？男かもしれない。

「これじゃとっても、もてっこないよ」

と「植木等」流の歌にでもなりそうだと。

池袋に外人女性ばかりのバーがあるというので出かけてみた。

成程、十人程すわれるカウンターに三脚ほどのボックスがおいてあるせまい店だが、アメリカ人や白系ロシアの女性らしいのが五、六人程いた。みんな若くて背が高く、均整のとれた肢体の美人揃いである。何で日本人相手のホステスをするのかは知らないが、きつといい日当になるのだろう。

金髪がほとんどで、茶色の髪もいる。名前をそれぞれいつていたが、ちよつと覚えにくい——というより、すぐ忘れてしまう。カタことの日本語が出来るのが、とりえて、喋っている結構おもしろい。

はじめての夜は馴れないのでカウンターに席をとったが、アメリカ娘の（A子としておこう）一人で、とても快活でよく笑うのが好きで、再来を約束して（A子は日本の指きりげんまんを知っていて、ハリ千本のおまじよといって笑わせた）次にボックスの方に彼女と二人で坐った。

カクテル等を余りねだらないのも気に入ったが、下手な日本娘？の態度と違って、客に退くつをさせないようにと一生けんめい気をつかう気持がひしひしと判って、実に好感がもてる。A子は顔で表情をつくっておどけてみせたり、君は美人だとほめると、誰でもそ

ういうけど、結婚しようという男はいないので淋しいといたり、注文してあたえた酒をのみながらA子はますます能弁になった。

いろいろな話の中から、

「日本のオトコ、ジョセイ、なぐるいけないね。わたし、なぐるオトコ、けつとばしてやりたい」

という。私は逆に女性からなぐられたいという、はじめはよく判らなかつたらしいが、軽く私の頬を平手で、はたいた。

「いい気持！」

と、めをつむってみせると、A子は笑って今度は私のひざの上に腰をおろして、

「おもいか？」ときく。黙って首をふったが大柄の彼女、なかなか重たくて、正直なところ、ももがつぶれそうだが、快よい感しよくである。

「僕は、君のドレイだ」

といったが、ドレイが判らない。スレイプというは今度はうれしそうに、いや、おかしそうに笑った。脚をくんだひざ小僧にキスすると、それでも短いスカートをもっと上にあげて、ここにキスしろという。ボックスで余り人目につかないのを幸いに、いわれる通りにすると、白い肌にうす赤くあとがついた。

A子は金髪をなびかせて英語まじりでおもしろい人だと喋っている。ビールを注文して、A子が席をたったとき、私はうっかりおしぼりをおとしてそれを拾おうと、せまいテーブルの下にもぐったらぐつと背中におもしがかけられ驚く。イキがつまりそうで顔をあげると、A子が私の背中に腰かけている。すぐ腰をあげたが私は内心うれしくなって、A子とM・Sのプレイをしたら楽しいだろうなアと思う。

私が手帳を出して、万年筆で仰向けにねている男の上にビキニの水着で、馬のりに跨っておさえつけている女の絵を描いたらそれにくれという。不思議なもので、日本人のホステスだとなかなかこんなことは出来ないが、外人だという気安さか、或は解放的な人種の相違であろうか。

もっと描けというので、馬になった男の上にいる女とか。後手にしぼった男の縄尻をとってひき廻す女を描いて、これが君で、男は僕と指でさすと、私のバンドをぬいて両手と胸の上に巻きつけてみたりしている。

五、六枚の絵をとりあげて破ってしまったら大声をあげてダメだという。今度、もっとうまく描いてくるからとゴマ化したがどうし

てもきかない。仕方なく、二、三枚描いてわたすと大事そうにしまった。余程、閉店後、連れ出そうとしたが良家の子女のようでもあり、ふられそうでもあるのでそのまま帰ったが、久しぶりに楽しかった。

又、行ってみようと思っている。

週刊でない月刊の「明星」八月号の少女小説の中に、青年にはまだならない少年少女が六、七人でエイト遊びと称して、砂地に8の字を書いて、男が馬になり女がその上に跨って完全に廻りきる競争をするところがある。挿絵も出ていて、男の子の上に跨った水着の少女の絵が、描かれてある。

松竹映画「智恵子抄」の中にも、発作をおこした智恵子（岩下志麻）が高村光太郎（天知茂）を馬にして部屋中を這い廻らせるシーンがある。この映画は、もともと女性映画に入るものだが、このようなシーンを、数多く女性に見せたいと思う。何度も紹介するが、「痴人の愛」を舞台でみせたら、とてもよいだろうと思う。どこかの劇団が扱わないものだろうか。今年は谷崎潤一郎が亡くなって、たしか三年忌に当るはずだ。

先程の「明星」でないが、たまたま友人の

家に訪れて、この雑誌に出ている女の馬のりを見たわけだが、友人の娘といっても中学一年生で、小学校五年生の弟を馬にして、お馬ごっこをして遊んでいるのだ。友人はそれをもても平気でいる。もちろん彼はMやSには興味をもたない？ 人間だ。この友人の娘が私にみせてくれたのが「明星」であった。

平気でお馬ごっこが出来るのはきつと正常なのだろう。これを意識すると、どうも自分がマゾのように思われはしないかと警戒してついそうでない顔をする。損な性分である。

勤務先に関係のある或る組合で、モデルを使ってカメラの撮影大会が、熱海で行われた。素人カメラマンが多いのだが、私も加って同行した。



作

木 庭

研 次

きれいなモデルは、洋服からタイツ、水着とかわっているいろいろのポーズをとる。二十人程のカメラマンは、思い思いにシャッターをきっているが、なかにはモデルの美しさにみとれている人もある。

食事ときには、モデルをかこんで四方山ばなしに花が咲く。脚をひらいたり、とびあがったりする活発なモデルだが、一緒に食事をしてみると品のいいしとやかな女性である。それでも図々しいのがいて、岩の上にまたがって欲しいと注文をつけるのもいた。尤も私も此の機をのがさずパチパチと撮ったが、あとで見たら同じものばかり十枚近くも撮っていたのには我ながら呆れてしまった。撮影会を終えて、ホテルのプールに行ったがここも色とりどりの若者でいっぱいだ。む

んむんと若さを太陽の下にさらして水しぶきをあげる姿は全くうらやましい。

この若者の姿を、特に女性のハツラツとした伸びやかな姿を、パチパチと撮りまくったが、船のような浮き袋に、うつぶせになったたくましい若い男の背に、ビキニの女性が馬のりになって、小さな板で舟をこぐようにして、足をバタバタやっているのもついでに撮った。いやついでというより私の特ダネである。そのうち、仲間がきてこの舟を人間ごとひっくり返したりして遊んでいた。まったく邪気のないノビノビしたハシヤギ方である。

我がマゾの人生も、もう少し遅く生れたらよかったとつくづくおもった次第だ。

△カット△春川ナミオ・画▽

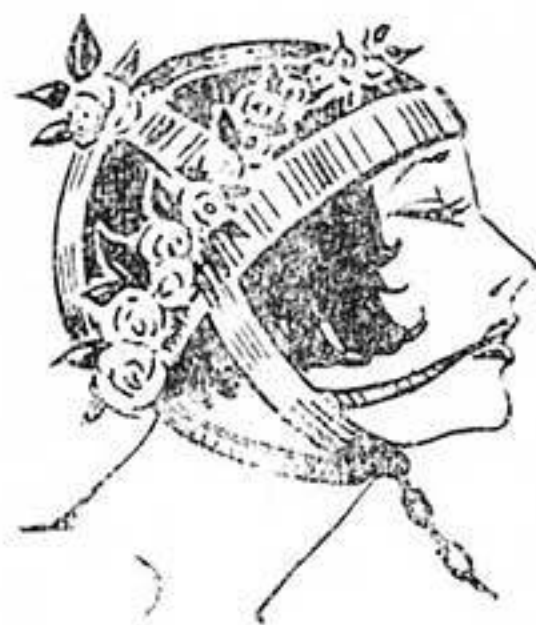
その日、私がアパートに帰ったのは夜中の三時を廻っていた。独身の気易さで、大抵の日の退社路は、出勤路の何倍かの道程に早替りするのだが、その日は特に、酒好き野郎に付合わされて、社と吾家との間がすごい迷路に急変したからだだった。

土曜日ともなると、アパートの窓の灯はいつも遅くまで点いているが、さすがにその日

ケチのついた

我が作品

自信



は寝静まっていた。長い旅路の終着駅の感じで、吾が「城」のドアに鍵をさそうとして酔眼ながらドキッとなった。開いているのである。べつに盗られるほどのものもないが、確かに戸締りして出た筈のドアが、留守中に開けられていれば気持の良いはずはない。

「ヤレタ？」 私は恐る恐る吾が城に入った。闖入者がいた。しかもその不屈者は、私の布団を引出して高いびきなのだ。気をもたす書きぶりは、やめよう。この際必要はない。

闖入者は、私の親代りの叔父だった。元ジャーナリストで、私の最も苦手とする関西の住人だ。中学時代からの恩人で、無事に大学まで出して貰い、こちらで就職が決まると、

友人の経営するこのアパートの世話までしてくれた。亡き実父以上の恩があり、従って私としては、この世で一番コワイ人だ。

そうと判ればヤレヤレの筈だが、枕もとの灰皿に並んで乱雑に置かれてある物を確認するに及んで、私の残り酔いは一度にさめざるを得なかった。押入れの一隅に秘蔵していたK誌の数冊、それに、私の丹精こめて執筆中の原稿用紙の束だ。叔父が、待てど帰らぬ私の留守中に、それらをみつめて読んだであろうことは明らかなのだ。

原稿、それは私の自信作である。私がK誌上の創作類に不満を覚え、私の渴望を自ら癒すと共に、満天下の読者をうならしめるために、本心を真正面から睨みすえ、赤裸々な希

求を具体化したものに私なりの美を加え、手の届かぬ理想像を強引に引き寄せ、握りしめたものなのだ。出来るだけキメ細かな描写を心掛け、行き届いたクライマックスの連続で、正にサディズム小説の最高峰をきわめる傑作と自負してはばからない。編集部は驚嘆し、読者の狂喜する様が目に見えるようだ。書いた本人がいうのだから、間違いはない。枚数は二百枚を優に越す。現在のナンバーは百九十二。八分通り書き進んだところだ。

テーマがテーマである。女性の人格無視どころか、玩弄物視もいいところ。縛り、虐たげ、責め、苦しめ、そして、羞恥と汚辱と苦痛の中から、愛情と悦びを見出し、肉体と誠意で奉仕するのが女性の宿命であり、美德であるときめつけてあるもの。K誌対象なら自信満々のこの大作も、この叔父に対してはとも大きな顔をして見せられるシロモノではない。それをだ、その場の状況は明確にコワイ人の目が通ったことを証明しているのだ。

私の頭の中はガンガンと鳴り始め、いい気になってふらついていた自分は棚上げし、アパートのオヤジを恨んだ。

いくら友人とはいえ、主の留守中に合鍵を渡すとは……。叔父も叔父だ。恩人には違い

ないが、オレにもプライバシーがある。上京するならするで、知らせぐらいはしてから来るもんだ。

私は完全にウロが来た。恨みと怒りはあつたに違いないが、心の秘密、嫌悪しながら逃避しきれない性癖、どうにもならない生来の性向。それが叔父に知られてしまったという、理由の説明出来ないような恥かしさが先立って、何かとり返しをつかない大事件を冒してしまったような混乱の渦の中で、立ちつくしてしまったものだった。

マクラが長くなり過ぎた。私が今書きたいと思っていることは、そんな状況レポートではない。こんな具合で、思いがけなく胸の内を知られた私が、翌日、臍を固めて叔父と対座した会話を紹介したいのだ。尤も、私は未練げに、なんとかゴマカそうとし、口数も、用心して極端に少なかったのだが……。

「ホナラ、これ、アルバイトちゅう訳やナ」
「え、ええそう、そうですとも。近頃物価が高いでしょう。だからバイトでもして、少しでも稼ごうと……。バイトですよ、バイト」
「そんなに力いれえでもええ。……フーン、なるほど。バイトね……。まあええワ」

「そんなのを、疑・惑・の・マ・ナ・コ・っ・ていうんだぜオジキ」

「おまえも、よう勉強したらしいナ」

「ハア？」

「いや、バイトにしては、こんな心理をよう研究したもんや思うて、感心しとるんや」

「やっぱり信用はせんだろうナ」

「いや、えらいもんや」

「えっ？」

「おまえも売文で少しでも稼げるよう……、

いや、稼ごうと思うようになったちゅうのが

えらいもんやいうてんのや」

「おほめに預ってどうも……」

「なかなか思いついたこと書いたもんや」

「何分、募集先が特殊な雑誌で。テーマは変ってるが、自信はあるんです」

「えらい又、くだくだとしつこいナ」

「多少冗慢な方が行き届いて。それに、今までの発表分程度では物足りないし……」

「物足りん？」

「い、いやその……読者はそうだろうと」

「そんなことないやろう」

「はあ？」

「この中でネチコイのがあるぜ。えーと、そやそや、これや、この花と蛇とかいうのんな

んか、えらいネチネチ書いたある」

「ああそれは……」

「読者にはえらい好評らしいやないか」

「僕は、それはサド小説というより、サド的な背景を利用した軟派小説だと思ってます」

「フム、そういや、お前のは大分様子がちやうようやナ」

「それはもう。僕は、だから余り高い評価はしてないんです」

「なるほど」

「だいたいこの種の小説は……」

「オット、口はわざわいのもと。危い危い」

「どないにしたんや？」

「いえ、その、とにかく特殊な雑誌で……」

「この雑誌は、ワシらも昔からよう知つとるぜ。ある意味で注目しとったんや」

「そ、そうですか。それで？」

「生身の人間の心理やろけど、その内の重症患者の呻き声を集めたもん……ちゅう感じは変つとらんナ」

「呻き声……ね」

「すると、オレの作品は断末魔の声か……」

「たいへんやろナ」

「え、ええ、それはもう、なんせ、こういう好みの人に合せて書くのは……」

「アホ。おまえとちがう、発行所や」

「オレの作品のことじゃないのか」

「久し振りに読ましてもらったが、編集がたいへんやろと思う」

「でも、こういう好みの方は、現実社会では受け入れられない悩みを、どんどん書いては送っているらしいから、それを整理して……」

「それがたいへんや」

「しかし、世の中には真実ほど、人の心を打つものはないでしょう」

「そらそうや」

「だから、マニアの偽りない投稿をそのまま誌面に反映させたら、真実の声が共鳴者の心を打ち、特異な性情の、真実の生態が浮きぼりにされて読者に訴える。そこにこの雑誌の価値と使命が……」

「おまえ、ナンボ貰うた？」

「はあ？」

「えらいPRするやないか」

「一寸、調子にのり過ぎたか」

「おまえ、これに、おまえのいう偽りのない投稿そのままが載せられてると思うてんのかいナ、ホンマに」

「それは、多少の整理はされても、原稿そのものでしょう。真実だから動かせない。素人

だから文の幼稚さは仕方ないけれど、創作にないツールズ、すなわち真実さが……」

「アホ。真実々々てよういうやっちゃ。そらまあ、真実の望みちゅうのを書いてるんやろけど、さて、そのままやろかな」

「違うって云うんですか」

「そうは云わんけどナ」

「当然でしょう。デッチ上げで、出来るわけがない」

「おまえの書いたもんなあ」

「作品といって欲しいネ、作品と」

「あれは真実か創作か知らんが……」

「もちろん創、創作……」

「じゃねえ、正真正銘の俺の望みだ」

「採用されると思うてんのか？」

「か、とはナンダ、かとは」

「活字にして貰えるやろか」

「冗談じゃない。編集部が驚く筈だ」

「驚くやろナ、さぞ」

「オッ、わかってるんだな」

「こいつ、どないかしとるんかいなと思うてナ。呆れるやろ」

「どういう意味だい」

「もし、このまま活字になって発行されたとすると……」

「読者が狂喜するよ、きっと」

「よう売れるやろナ」

「認めたんだナ、この素晴しさを」

「けど、すぐに発禁でパーや」

「な、なんですって？」

「おまえ、なんの為に大学まで出た？」

「……？」

「公刊物の限界もわからんか」

「子供じゃあるまいし」

「こういうもののホントの真実ちゅうもんはあからさまには出来んもんとちゃうか」

「そんな馬鹿な。言論はあくまで自由。あるべき物があるといい、欲するものを欲するというのがなぜ出来ないことですか？ タブーであるべきセックス描写でも、扱いようによっては法に触れないはずですよ」

「それだけの気を配って書いたというんか？これが」

「そういわれると、チョット……」

「この雑誌に限らんけど、よう読んでみい。どれもこれも、人間の本能的にみて、行きつかんならんとこで、そらしたるやないか」

「だから、俺が行き届かして書き上げてるんじゃないか」

「これだけ切実に、自分をさらけ出して訴え

るような投稿をする人間がやな、縛ったり叩いたりすることはこと細かに書いてながらやで、みんなが尻切トンボで送ると思うか」

「じゃ、投稿は編集部で勝手に改竄^{カイザン}してるんでもいいんですか？」

「まあ、ものに依ってはやるけどナ」

「そんな馬鹿な！」

「ただの整理程度やないと思うわ」

「言論の圧迫になるぞ」

「でなかったら、活字には出来んやろ」

「それならまるで、投稿者の意図は無視されてることになりますか」

「なるやろな。けど、投稿者の方で出版物のルールちゅうものの認識が、どこまであるかちゅうことも問題やろ」

「しかし、この雑誌は、ただの娯楽誌と違って、その人間ギリギリの真情をぶちまけるところに価値が……」

「これ、日本で発行されとんやろ」

「フザケルナ」

「今の日本ほど、平和で、自由で、寛大でこんな有難い国はザラにないぜ」

「敗戦サマサマですナ」

「こんな日本でも、限度は自らわきまえなあかん」

「じゃあ、編集部でどうしても、執筆者は何もいえないって訳ですか」

「文句いうのは勝手やろ、権利やからナ。そやけど、発行所にも、選択権も編集権もあるやろし、責任もあるわナ」

「それじゃ、ちっとも言論の自由じゃない」

「そんなことはなからう」

「でも、実際のことが発表出来ない……」

「一対一の対談と、公衆相手の講演会との違いやろナ」

「公刊物だといいたいんだろ」

「おまえの書きもんナ」

「作品です！」

「えらいようけあるけど」

「二百数十枚の大作だぜ」

「くず屋に売るのはチと少ないような」

「なんだと！」

「骨折り損のなんとやらいうナ」

「おこるぜ、ホントに」

「まあ字の練習にはなったやろ」

「いい加減にしろ！」

「わしは、この雑誌、表だっけの支持はようせん」

「やっぱり古いんだナ」

「けど、おもしろいナ」

「どっちだというんだい！」

「これまたえらい熱心に、パートナーを求めていうのが、ようけあるナ」

「それだけ、この世界の人は恵まれてないことがわかるだろ」

「これに返事があるんかいナ」

「そう易々とある訳はないだろう」

「縛っていじめてくれる人が好きやていう女子はんちゅうのは、どんな女子やろかナ」

「美人でグラマーです、みんな」

「こんな投書一つで、そんな女子はんと仲良うなれるんやったらええナ」

「そう簡単にはいかんといってるだろ！」

「わしも投書しようかな」

「どうぞ勝手に」

「ワシら二十年以上のヨメハンでも、たまに手でもかけたらエライこっちゃ」

「叔母さんの方が強いんです。お宅は」

「女の細腕いうけど、あら嘘や。強いぜえ」

「マゾにおんななさい、マゾに」

「いじめられる程、その男を好きになる女子はなんて、ええやろナ」

「羨やめ羨やめ」

「けど、いろいろあるもんやナ」

「ハア？」

「なにがだよ」

「種類がや」

「しゅ、しゅるい？」

「けどまあ、こらわかるわナ」

「どうわかるっていうんだい」

「ワシは、こんにゃくが好きでな」

「そういえば、よく喰べてましたナ」

「あれは、科学的にみて栄養がないそうなん
で、ウチのおばはんが、喰わすのをいやがり
よってな。けど、ワシは、うまいと思うて喰
うと、ビフテキなんかより身につくと思
うし、いつも関東だき屋で喰うと、事実元気が
出るよってに不思議や」

「わかりました。晩飯はオデンにします」

「世の中にはゲテモンばかり搜して喰って
る会もあるそうナ」

「もう、腹が空って来たの？」

「一般の人は好奇心で、顔をしかめながらで
も、やっぱり熱心に見たり聞いたりしてるち
ゅうのが、いつやったかテレビニュースでも
やとったナ」

「オヤツにソバでもとろうかな」

「食い物で、ウナギは普通でヘビは異物。食
用ガエルは当りまえで、ガマや青ガエルはお
かしいちゅうのは誰が決めた？」

「知ってる訳ないでしょう」

「そうそう、こないだ金魚の刺身でゴチャゴ
チャいい合いをしとったナ」

「コンニャクと刺身にします。晩は」

「食い物一つでも、こう一人一人違うんやか
ら無理ないわナ。いろいろ種類があっても不
思議やないとわかる」

「あつ、そのことなの」

「何のことや思うて聞いてたんや」

「もう一寸、筋を立てて話して欲しいね」

「結婚するワナ」

「だれが？ コンニャクと金魚と？」

「何年か経って子供が出来なんだから」

「出来るかな？ コンニャクに」

「周囲のもんがいらん心配しよる」

「愛情が足らんのでしょうか」

「愛情が」

「アレッ。言葉に出さなかったぜ、オレ」

「どんな形で交換されるもんかちゅうことを
一般に決めてるからやろ」

「まあ、そうでしょうね」

「子供が生れると、皆が祝福するワナ」

「まあ、大体はね」

「けどな、もし仮りにやぜ」

「ハイハイ」

「わてらは、こんな具合にして、この時にヨ
メハンがこうしよりまして、わてがこういう
風になったときに、ヨメハンがどうしよりま
してちゅうようなことを、祝いに来てくれた
人にいいふらしたら……」

「ふらさんでしょう、それは」

「色気狂の子が産れたことを悲しむやろ」

「病院行きでしょうよ」

「おまえの書きもんナ」

「また！ アレはサク・ヒン！」

「ちようど、それやぜ」

「エエツ？」

「いや、その色気狂いのたわごとみたいなも
んや、いうてんのや」

「ひ、ひでえことを……」

「文句ありそうやな」

「そりゃあ。まあ文句じゃないが……見解の」

「遠慮せんといひ。見解の相違か？」

「僕は、K誌というこの、特殊な分野を探究
して、異常とされているものの生態を、当人
からの訴えによる生々しさによって掴みと
り、暴走以前に昇華せしめようとするこの方
針に賛成して……」

「チョイまち。そう標榜しとるんかいな、こ
の雑誌は」

「……いや、そのう、改^{テイメント}つての宣言という訳じゃないが、僕としては、そうに違いないと……」

「フム、なるほど。アバタもエクボか」

「ハア？」

「いや、まあええ。ほんで？」

「つまりそのう……既成観念からみてアブノーマルであるという理由だけで不当に自欲に圧力をかけ、悶々と自分の性向に悩みながら、ひた隠しにしなければ、他人から妙な目で見られるという不幸な生れ合せの人間に、せめて活字の上だけでも理解し、慰めとなつてこの雑誌に、現実には到底不可能な夢を綴つて、一時のオアシスにするということぐらひは、許されるべきだと思うんです」

「フム、フム」

「ただ、その根本が『性』に依るものだけにインスティンクト本能であるとは誰にでも理解されながら、それだけによけい誤解を受け易い。本能的に不幸な生れ合せだから慰さめる必要があり、必要だからその本能に応じたアピールをすれば妙に誤解される」

「すると、ワシも誤解してるちゅうのか？」

「もちろん！」

「えらい力いれよんな」

「色気狂と一緒にされてたまるか！」

「形が違うだけで……」

「なんの形だよ！」

「セックスちゅうもんは大差ないんとちがうんかいナ、普通、いや大部分の人と」

「人間には変りないから」

「いまの日本は有難い国や。上べだけかも知らんけど、ホンマに結構や」

「グドイのは、やはりおトシですナ」

「恋愛が、大きな顔して通用する」

「サゾお羨ましいこと……」

「ヨロメキであろうが、不倫であろうが、恋愛モンちゅうと、ええオバハンまでが目の色を変えてテレビの前で涎れをたらしとる」

「お宅の叔母さんも？ あのお顔で……」

「相当キワドイ物語りでも、口あけて、ええ

なあ、というような顔付でシビレとる」

「観物でしような、キット」

「わざとややこしゅうに、もまして、益々主人公をアツアツにさせよる」

「常套手段でしょ、作家の」

「えらいアツアツの二人が、やっと想いが叶うて結ばれる」

「悲恋ものだって多いですよ」

「あんな苦勞した二人のことや、最初の夜は

さぞかし——と思うのが人情やろ」

「それはまあ、大喜びだから……」

「きつと、激しい愛の誓い合いになるにちがいないと期待して、続きを待つ」

「待つでしような」

「名のある作家ほど、読者や、観者に期待させる盛上げを作る」

「それが値打ち」

「読みたい。観たい」

「小説の真価でしようナ」

「書いたら行き届くやろ」

「それは、筆がたつんだから」

「書いたもん、あるかな？ そこまで」

「な、なにがしたいの？」

「ワシもずい分、いろんなもん読ましてもらて来たけど……」

「ジャーナリストですからね」

「そこまで行き届かしたもんはまだ知らん。

公刊のもんではナ」

「は、はっきりいえ、はっきり」

「自由自由いうても、こと性に関しては一定の線までやぜ、言論も」

「制約は当然だといってるだろ」

「わかったかいナ」

「え、ええ、まあ」

「おまえの書きもんの話やぜ」

「やっぱり……」

「この種のもんやったら」

「どうだってえの！」

「縛りたい、縛られたい……が、恋の芽生え」

「なるほど」

「かるく、チョットククルぐらいが、デート

中のチュッ、チュッ程度」

「じゃ、本格的なプレイとなると？」

「あれは誰やったかナ……。エエと、戸川昌

子はんやったか。……たしか女流作家には違

いなかったと思うんやが……」

「肝心なところでそらして貰っちゃ困る」

「ハダカの女が縛り上げられている、一種の

春画……」

「シュンが？」

「ちゅうようなことを書いとったことがある

ように憶えとるんやが……」

「そんな馬鹿ナ！」

「何でもないヌード。週刊誌なんかによけ

載っとるヤツでも、見方によってはみな春画

的要素が含まれとるやろから、そう、おこり

ナ」

「これがおこらずに居れますか！」

「読者の意表を衝く題材で、ただ肩がこらん

で面白いのが小説ちゅうもんやったら」

「そういう作家もいるでしょうね」

「相当につっこんだことを書く人もようけ居

やはるけど……」

「そう。ずいぶん大胆にね」

「この種の、性を起源とするもんやったら」

「書き込まなきゃあ価値がない」

「ほどほどにしとく方が……」

「エエッ！」

「奥行きが出来て、ええのと違うんかいナ」

……

私は掛合漫才の台本を書いているつもりは

ない。だが、自然とこんな具合になってしま

った。

叔父という人は、二流以下の地方紙ながら

新聞で飯を食ったことがあるだけに、私のよ

うな立場の人間にすら、頭から押えつけよう

としないところは、さすがだと思う。

だが、じんわりと持って廻って、説教には

違いなことを、それから二時間余も聞かさ

れて辟易した。何よりも、毎度のことながら

人を担ぐような話術が頭へ来るが、いうこと

は考えさせられることが多い。やはり、私に

とって有難い存在といわざるを得ない。（叔

父のことだ。どこかで又、本誌を読むかも知れない。ひょっとすると掲載して貰えるかも知れないこの雑文が、叔父の目にとまった場合のことを考慮してお世辞ではない）

叔父は、その夜遅く帰阪していったが、四日後に手紙が届き、その上京の目的が、私の縁談を持って来てくれたものだったことを知ったのだ。そして、「おまえは、見合結婚より、恋愛の末に自分で選ぶべきだ」と結んであったのである。さすがに、マゾ女性を探せとは書いてなかったが、縁談からは手をひくと宣言したのと同様のことだ。私は気恥かしさと同時に、一沫の淋しさを感じた。私は、マゾ女性云々より、自分の伴侶ぐらいは自分で、という持論だから、手をひかれるのは一向に構わない。しかし、淋しい。この奇妙な淋しさだけは蔽うべくもない事実である。

ケチをつけられたからではないが、「自信ある作品」は「自信なき書き物」に思えて来たので、一応白紙に戻して、書き直すつもりになった。どのくらい日時がかかるか見当もつかないが、叔父の言葉も、頭から否定出来ないものがあるように思えるので、じっくり考えてみようと思うのである。

（おわり）

＝ 懸 賞 入 選 作 品 ＝

狂^{きよう}獣^{じゆう}の^の宴^{うたげ}

(中)



—— 能 美 積 ——

13 狼

杉田の室は和洋折衷の豪勢な物だった。無論、美苑も蟹浦の経営なのであろう。

房代は一旦、縄を解かれた。

“先ず先約の方を済ませて貰おうか”

杉田は上着を脱ぎ捨てると、あいの襖を開け放った。なまめかしい夜具が、房代の眼の中に飛び込んで来た。エレヴェーターは四階まであがっている。逃げ道は入口しかなかった。その鍵は、上着の中にある筈だった。

“その前に湯を使うかね”

“ああ、あなた、どうぞ”

“そんなら俺もやめるさ。汗を流した後で、一緒に入ろうじゃないか”

ゆっくりと近寄って来た。

“ま、待って下さい”

“待てないね。俺はそういう男だと言った筈だぜ”

“そ、その前に高倉さんを調べて下さい”

“調べる必要は無いだろう。あんたの方に確証がある。それで充分だ”

“か、蟹浦さんは関係ないのですか?”

“先ず寝るんだな。その後でゆっくり真相を聴かせてやる。さあ、こっちへ来い”

「あ、あなたは……」

「何だい？」

「なにもかも御存知なんですね？」

「おっと此奴はうっかり語るに落ちたな」

房代は逃げようとした。逃げられない事は分っていても、そうしないではいられなかった。杉田は猿臂を伸ばすと、房代の襟首に手をかけて襦袢を、もろに引き剥いだ。素肌である事を、この男は知っている。

「た、助けて……」

袖が腕に絡んで、胸を蔽うのが精一杯の房代。

「フッフッ。温和しくするんだな」

たった今、解かれたばかりの麻縄を杉田は足で引寄せた。その一端を口で啞えて細い蛇のように、豊かな胸を締め上げる。両手が袖から引きぬかれて乱暴に手首を縛る。引き立てられて夜具の上に放り投げられ、狂わんばかりの羞しさに軀を丸く縮める房代。其処で杉田は一服つけた。燃え上る欲望の炎を長引かせる為の煙草の味は格別だった。

「その前に、目の正月と洒落こむか」

もう一度邪慳に房代は引き起こされる。室の仕切りに柱があった。それを背中に抱かせておいて、杉田は伊達巻に手をかける。房代

は必死に足をばたつかせた。

「往生際が悪すぎるぜ、あけみ」

杉田は身を屈めると、バンドを抜きとって足首を柱にまとめた。そのまんま、伊達巻をとき、細紐もといいた。長襦袢を剥ぎとると、パンティ一枚の素裸だった。

「なかなかいい軀だ。綺麗な女の肌は眺めるだけでも、ぞくぞくするぜ」

がっくりと房代は顔を伏せた。正視出来ない男の顔が、じっと見上げている。必死に瞼を閉じ合わせても、どうにもならない地獄の図だった。

「あけみ、次郎を殺したのは高倉だ。殺らせたのは、無論ボスだよ。次郎はな、何を戸惑ったのか大切な俺達の取引の場所に入りこんで来た。それが奴の災難さ。秘密を知ったものは生かして置けん。それがこの道の鉄則なんだ。お前がどういう証拠を握っているのかわらんがね。俺はお前の色香に迷った。本気だぜ。其処でだ、お前を俺の女にする気になったんだ。そうすりゃあ、せんの亭主の事なんか、じきに忘れる、そう思ったんだが、これは俺の考えが甘すぎたようだ」

「……」

「可哀想だが死んで貰う。もっともその前に

たっぷり楽しませては貰うがね」

「……」

「亭主に抱かれた時、どんな声で泣いたのだい。縛られて身をくねらせているそんな姿もこたえられんが、是非その泣き声もききたいもんだな」

「……ああ……」

「雪のような膚^{ハダ}だな。麻縄を喰い込ませるには、もってこいの色艶だぜ」

杉田の指先が、少しでも触れると、その度に房代の軀がこわばった。香ぐわしい女の匂いが羞恥と恐怖に身を揉む程に、杉田にとっては一層たのしい観物でもあった。

「さて、そろそろ」

どうやら杉田にも忍耐の限界がきたようだった。彼は手早く柱の房代を解いた。前屈みに床の上にひきたてられ、たった今舌を噛んでも死にたい思いの房代であった。

「舌を噛みてえ気持だろう。遠慮はいらないぜ。断末魔の肌は、随分うめえ味がするって話を、どこかで聞いた事がある」

「……ああ……」

「もっとも亭主の仇を討つまでは、そう簡単には死ねんだろうがね。フッフッフ。俺の流義は、ちいっとばかり、えげつないぜ」

声もなく、ただ打ち震えるばかりの悩乱の姿態を杉田は床の上に俯伏せると、左足を折り曲げて両手首と繋ぎ合せた。片足さか海老縛りだった。無情に仰向けにする。

“ヒイッ……”

右足に細紐が巻かれ、それは強引に横に引かれる。

“や、やめて。な、なにをするの……”

紐の一端は柱の根元に結ばれた。

“これが俺のやり方さ。おっと肝心な物を取るのを忘れたな”

美しい犠牲を見下ろしながら、杉田はゆっくりとネクタイを取った。最後の布切れは引き千切れば事足りるのだ。

けたたましくベルが鳴った。燃えあがった火に、いきなり水を掛けられたような不愉快さを露骨に刻ませて、彼は受話器をとった。寸時の間ではあるうけれども、一応は危難から解放されて、房代の乳房は大きく波打っている。存分に折り曲げられた左足と引き絞られた右足が、必死に身をすくめようと、空しいあがきをしているさまを、杉田は眼だけで楽しんでいた。

“なんだと高倉から……よし、つなげ”

沈黙がすぎた。

“ああ私だ。なんだ今頃。なに、何だって。二人ともパクられた”

“伊藤というのも一緒です。どうなってんです？ 花田も小池も、あんたにつけてやったんだ。それが路上で取っ組み合ってたってのは、どういう訳です”

“それで、どうなった？”

“分らない。たった今、サツから連絡があった。酔っ払って出会いがしらに喧嘩になった。伊藤と言うのがすごい張ってるそうですよ。あけみはどうなったんです”

“無事だ。此処にいる。よし放っとけ。会長か、こんな時間に知らせる必要はない。いや待てよ。そうだな、とにかく俺の処に来てもらおう、その上の相談だ。そうだ尾行に注意しろ。誰かって、それが分らんのだ。あけみに吐かせよう。すぐに来い、直ぐにだ”

ガチャリッと、手荒く杉田は受話器を置いた。

“少しばかり情勢が変わったよ、あけみ。寝るのは一時延期だ。今、高倉がくる。お前の仇のな。口を割って貰わねばならん事が出来たんだ。けつに火がついたんでな”

杉田は足の先で豊かな乳房を踏みつけた。

犯してしまう時間はあったが、聴き出す前に

貞操を踏みにじるのは、不利だという事をこの狼のような男は敏感に嗅ぎとっていた。

14、鬼

雄吉は深夜ではあったが一応釈放された。

相手の二人が札付きのやくざであり、保証人として立花の名をあげたのが幸いした。連絡をうけた立花は、すっとんで来た。

“あんた、警察で何か話しましたか？”

“なんとも言わんよ。下手して警察に介入されては、反って房代さんが危険になるからね。

それより、そっちの方はどうなった”

“残念ながら失敗です。しかし大体の見当はついています。その傷、大丈夫ですか”

“もう少しでのばせる処だったんだ。締めあげて吐かせようとしたんだが、お節介野郎が騒ぎを知って、一一〇番しやがったらしい。

で、その見当ってのは何処だい”

“美苑という名のホテルです。これは蟹浦の経営だときいています”

“あたってみたのかい”

“駄目です。連れ込み専門なんですね。私一人では行けません。夜が明けたら助手とアベックを装って潜入してみる積りです”

“大丈夫かな、房代さんは……”

「女の子に美苑を張らせています。事務所に戻ったら警察から連絡があったんでね。真夜中に気の毒だとは思ったんですが、叩き起して見張らせているんです」

「警察で、ぶちまけた方が良かったかな」

「無駄ですよ、確証がありませんからね。緊急手配は望めないし、……とにかく、客として泊ったのなら、朝になれば出てくるでしょうが、出てこなければ完全な誘拐です」

「これから……どうする……」

「あなたは帰って休んで下さい。すべては明日。いや明けてからです。私はもう一度、美苑に引き返してみます」

……○……

その美苑では、同じ時刻に地獄図絵が展開されていた。房代は先程と同じように後手首と左足首とを直結され、俯伏せに転がされている。右足は高々と持ちあげられて柱の中程に結びつけられ、白い皮膚に脂汗をにじませていた。それだけではない。杉田は持ち出してきた白鞘の刀を、二の腕と背中の中に挟みこみ、唇を割って細紐を咥えさせ、その両端を思い切り締めあげて鞘の中央に止めてしまった。舌を噛ませぬ用心であり、顎をのけぞらせ軀を弓なりに反らせる事によって、捕え

た獲物を痛めつけている残忍苛酷な拷問方法でもあった。玩弄寸前に思わぬ事から邪魔が入った腹いせが、サジスチックな彼の行動に非情さを加味しているようだった。薄いパンティが、かろうじて房代の羞恥心を救っているにすぎない。麻縄も細紐も身をおおうための物では、無論ない。伏せる事さえも許されぬ、その顔の前に狼はあぐらをかいて、ウィスキーを舐めていた。右手にグラス、左手には房代の髪から抜きとったヘアピンを持ってある。それが鼻孔を弄るかっこうの責道具になっていた。苦しい、なぞという表現は適切ではない。鼻孔をコチヨコチヨとなぶられるのは、傍目にはどうという事もないが、房代にとっては正に地獄のそれであった。

「いい加減に吐くんだな。あけみ、いつまでも強情張ると、体中の水分がなくなるぜ。ほら、ほらよ」

「……ム、ムウ……」

「どうした、口は利けるだろう。お前の持っている証拠ってえのは何だ。それにあの娘は誰なんだ。ほら、もう一遍、どうだ」

扉が鳴った。

「来たな、お待ち兼ねの高倉さんだぜ」

杉田は立って行った。高倉は目を見張った

まま棒のように、息を呑んでいた。

「強情な女だな。又、そこん処が魅力だが、もう時間がない。どうだい、あんた抱いてみるかね。亭主の仇に抱かれりゃあ、本望だろう。どうせ吐かんのだ」

「あ、あんたは……」

「女なんて者はな、抱くだけのもんじゃあない。俺は結構たのしんだぜ」

「……」

「いいかい、ここんところはな、クスグリに弱いんだ。腋の下は御覧の通りで楽しめん。あしの裏の指の付根が急所ってえ事さ」

杉田は吊りあげてある房代の足の裏に、ヘアピンをゆっくり這わせた。

「ひ、ひいっ……」

身動きならない房代の肌が、傷ついた獣のように悶え狂った。

「高倉さん、足を解いてやんな。このままじゃあ不自由だろう」

悩乱の姿態から房代は、ようやく解放された。後手と抱かされた刀は其のままだった。

「さあ高倉さん、存分に可愛がってやんな」

「ま、待ってくれ……杉田さん」

「なんだね……」

「わ、僕もあんたと同じ方法で楽しみたい。」

教えてくれ、どこを、どうしたら女はあんなに悦ぶのかね。み、みなさい、乳房がくびれて、素晴らしいじゃあないか。汗。凄い汗だ。た、たのむ、教えてくれ”

杉田は笑った。笑いながら房代の肩を押し倒した。絶叫がほとばしった。背中の白鞘が羞恥も屈辱も、考えさせる余裕さえ今の房代から取り上げているのだった。

“高倉さん、それを脱がせてみようじゃあないか。女の急所がどれほど物を云うか、二人がかりで聞いてみよう。吐くかも知れんぜ”
“やろう、やりましょう。足を、足を押えて下さい。儂が、わしが脱がせる”

一匹の狼と、突如鬼面に豹変した高倉とが夜の明けるのも忘れて、白滋の肌に迫って来た。地獄の夜は、房代にとって何時果てるのか。あわれな賢に救いはなかった。

15、吊りの罰

蟹浦剛三は、不機嫌な表情で考えこんでいた。起きぬけに、おしのから知らされた事がその原因である。高倉から電話があつて、事故にみせかけた殺しが、なんらかの形で証拠のようなものを握られている。という事が剛三を、先ず驚かせていた。あけみは押えてい

るが、小池と花田が逮捕され、しかも伊藤雄吉が一枚噛んでいる、という事は尋常ではない。まして、その雄吉が美沙子を紹介してきただのである以上、美沙子とあけみと雄吉とが、なにかのつながりを持っている事は間違いないのだ。あの殺させたバンド・マンが一体どんな証拠を残しておいたのだろうか？
確証がない事は、はっきりしていた。あれば直ぐにでも、警察へ届け出るに違いない。いやそうともいえぬ。ひょっとしたら自分達の力で報復を考えているのかも知れぬ。とにかく詳しい事を知る必要があった。つまらぬ事で、これまでに築きあげた地位や財産を失うような真似は断じて出来ない……のだ。高倉の私邸へ二度目の電話をいれる為に受話器へ手を伸した時、おしのが入って来た。

“美沙子は、どうしている？”

“はい、湯浴みと朝食をすませ、お部屋へ繫いでおりますが”

“お前一人でか？”

“勿論でございますよ。それにしましても旦那様。あの娘どうしてまあ、あんな美しい肌をしているのでございましょうかね”

“私は、まだ見ておらんのだ”

おしのは、キョトンとした表情をした。が

すぐに納得したようだった。

“それでまあ、お召物をお汚ごしになって”

“くだらん事を言いなさんな。飯をすませたら会う事にする。仕度をしておきなさい”

“畏こまりました。それで御趣向は”

“……………”

“旦那様、あれなぞいかがでございます”

“なんだ”

“ほれ、^{カケ}×の字のさかさ磔でございますよ。

噛めないように口を開いた箆口具を嵌めておいて、颯りながらお楽しみになる。おしのはあれが一番良い方法かと……”

美沙子が聴いたら卒倒しそうな事を、おしのは平然として言った。

“少し調べたい事があるのだ。往生柱を使いなさい”

“責めるのですか、大丈夫ですよ。羽根をもがれた雛同然の小娘に、何が出来るものですか。お遊びになる方がお得でございますよ”

“私の死命に関する大事なんだ。言う通りにしておきなさい”

“はい、はい。承知致しました”

美沙子は首輪を外され、真紅のネグリジェを着せられていた。今朝、枷を嵌められたままおしのもよって入浴を強いられ、再びこの

室に追いこまれて手枷も足枷も新しいのと取り替えられ、旦那様好みだというネグリジェを着せられたのであった。無論おしのは逃げる隙を与えなかった。例のベッドに拘束され、片手ずつ交互に用心深くやられたのはどうする事も出来なかった。ただ、今は室の中を歩く自由だけはある。しかし電源を切っておく、とおしのがいったように、室を脱け出す術はなかつた。美沙子は壁に背をもたせて緋色の絨氈に坐っていた。なんとなく。まだ逃げ出せるかも知れない、という一縷の望みが残っていた。羞しめは受けただけで、身を汚されていないという事が、美沙子に勇気を与えているのだ。不意に壁が開いて、おしのが入ってきた。美沙子は坐っていた事を後悔した。立っていれば突き飛ばして逃げられたかもしれない。

「サア、お立ち。こっちにくるんですよ」

おしのは邪慳に引き起した。

「この丸印の中にたつて、体を少し前屈みにして、それから手は、うんと後におのぼし」

美沙子は言われた通りにした。この女には逆らわない方がいい。もし又、前手にでもされる機会があつたら、首を締めてでも倒してやる。なにかにぶい音がした。と同時に固い

物が背中に触れた。思わず身を起した時に、丸い直径五寸程の円柱が、背と腕との間に差し込まれていた。

「これはねえ、往生柱という物なんだよ。名前通り、この柱を背負ったら往生するっていう事さ。さあ少し飾りつけをしてあげよう」

「お、おばさん、逃げたりなんぞしませんから、ヒ、甚い事はしないで下さい」

「旦那様の御命令だよ。あんたに訊ねたい事がおありだつてさ。素直に白状するんだね。そうすりゃあ、可愛がつて下さるよ」

ロープを持ってきた。そして手枷のまま美沙子の手首を、一つに重ねて縛り合わせた。

「イ、痛い」

美沙子は思わず悲鳴をあげた。両手は高々と背骨のあたりで組み合わされ、ロープは胸乳の上に一卷きされた。それだけで若しいのに、おしのは残りのロープを脛の上あたりに巻きつけて力一杯、引き絞った。

「く、くうっ」

「どうだね、痛いかね。痛かったら涙をお流し。そしたら少しは楽にしてあげるよ」

美沙子は耐えた。拷問に屈するのは自尊心が許さなかつた。剛三が入って来た。往生柱

に括られた真紅の衣裳の美しさに、彼は改めて感嘆の瞳をこらし、分厚い唇をペロリと舐めた。死命に関する大問題も、美沙子の前ではコロリと忘れた。

「旦那様、皮の鞭になさいますか？」

「いや、其の前に目の保養をさせて貰おう」

美沙子は戦慄した。拷問よりも何よりも剛三の淫らな視線が怖かつた。

「前をはだけるのだ、おしの早くしろ」

おしのは慌てた。剛三の鋭い口調に気押されて急いでネグリジェをはがしにかかつた。繩に圧迫されて容易には、はかどらぬ。

「駄目、やめて、許して下さい」

引き裂きかねない烈しさで剥いでいったが腰の処だけは繩を解くより法がなかつた。

「だ、旦那さま」

「よし、それでいいだろう」

おしのが身を引くと、美沙子にはどうする術もないのだった。一筋の涙を落して美沙子は長い睫毛を伏せた。

「こうしてみると、さぐってみた時よりも、数倍いい軀をしているようだな。それに色の真っ白いところも……」

「ほ、ほんとに旦那様、それ胸の処なんか」
「なかなかよろしい。なにしろ生娘なんだ

からな。これからマッサージでもしてやれば
ますます素晴しくなりそうだ”

剛三の一言一句が美沙子の心を鋭い針のよ
うに突き刺していた。正に悪魔の声であり、
生贄である美沙子の羞恥に身をもむ反応を楽
しんでいる、鬼のような奴であった。美しい
唇を血の出る程に噛みしめて、美沙子は剛三
を睨みかえた。

“悪魔！ 鬼！ あなたは、あなた方は、獣
です。犬畜生にもおとる、けだものです”

おしのが膝前を割って剛三に見せつけた。
真っ白いふくらはぎがのぞいているのが、ど
うしようもない辛さ、羞かしさ。

一歩、剛三が近寄って来た。

“おしの、此の娘の軀は餅肌というのだな”

“餅も餅、上等の餅肌ですよ”

“これから存分に味わってやろう。おしの、
縄をときなさい。取調べは後だ”

“ち、ちくしょう。く、口惜しい”

“美沙子。昨夜も教えておいた筈だよ。そう
いう言葉は教養のある娘の口にする事ではな
いとね。お前に相応しくない”

剛三は腕を伸すと、乱れに乱れた黒髪を鷲
掴みにして、グイッと顔を仰向かせた。

“お前は全体何者なんだね。都築とか云う男

の身内なんだろう？ まさか兄妹。いやそう
だとするとこれは大変な事になるがな。その
方が遥かに楽しい。面白いじゃあないか。始
めて知る男が、兄の仇だというものな。ま、
諦めるんだな。往生柱の抱き心地もよからう
が不自由でいかん。しっぽり濡れるのは矢張
り床の中が一番宜敷しい、な”

“旦那様、まるで時代劇を観ているような気
分になって参りましたよ”

おしのの声に、剛三がニタツと笑った時だ
った。美沙子が最後の呪いをこめて、剛三め
がけてペツと烈しく唾を吐いた。総ての望み
を絶たれた今、死を決意した美沙子の許され
た唯一の反抗でもあった。

不意を喰って剛三は激昂した。

“わ、僕の顔にツバを吐いたな”

丁度その時、室の一画でベルが三つおきに
二度鳴った。

“高倉だな。よし、一寸、待っとれ”

壁の釦を押す時に、剛三は美沙子を振り返
って出ていった。余程頭にきたらしい。自分
の所業は省りみずに、人を憎む事しか出来ぬ
男であった。数分で戻って来た時、不気味な
笑みを漂わせていた。

“あけみという女も、相当強情らしいな”

美沙子は目を瞠った。

“お前の肌に傷をつけるのは好ましくない。
其処であけみを代役に使う事にした。高倉が
相当痛めたらしいが吐かんのだ。大変陳腐な
やり方だが、あけみを連れてきて、お前の目
前で責めてみる。その間、お前にも多少の仕
置をせねばなるまい。なに大した事はない。
私の顔に唾を吐いた、ただそれを埋め合わせ
るだけだ。おしの縄を解きなさい。それから
枷のキーも出すように”

美沙子は、羞恥の圧迫から一部ではあるが
解放され、ネグリジェも直され、後手の枷は
前手に訂正された。縄が鎖の中心に巻かれる
のは、おしのの時と同じであった。美沙子は
ベッドの上での苦痛を思い出していた、が、
違っていた。銀色のキーを剛三は、ポイとベ
ッドの方に放っておいて、

“おしの、チェーンを降ろしなさい”

と命じた。音を立てて、フックの付いた太
い鎖がぶら下ってきた。縄はそのフックに結
びつけられた。

“よし、釣るんだ”

再び、音を立てて、太い鎖は捲きあげられ
ていった。嫌だに美沙子の両手は頭上に
あがり、足枷の嵌った素足は爪先だった。

「サア美沙子、もう一度ツバしてみるかね。其の分だけ余計あけみを責めつけてやるよ。一時間とは待たせないよ。フッフッフッ」

16、脱 出

おしのは、SとMとを混じり合せた中性の女であった。その体内に流れている被虐性は生活の為に蟹浦剛三に身を任せ、知らずしらずの内に飼い馴らされたものである。そして年と共に剛三に相手にされなくなってからは今度はぎゅくに剛三に協力して、女を責める事に興味をもつ加虐性に変貌していた。

美沙子は、床に爪さき立ちで揺れていた。

「退屈でしょう。旦那様のお帰りまでにあたしが相手をしてあげますからね。ほらこれを御覧。この羽毛はね一本何万円って高価な物なんですよ。もっともそれだけの価値は充分ありますよ。旦那様のお説ではね、羞しさとくすぐったさで、悶える肢体のうごめきが、とっても楽しい眺めなんですってさ。それにこれ、箆口具っていうんですよ。勿論これをはめる時はあたしがお手伝いをします。形のいいお鼻をつまんで無理矢理唇を開かせるのですよ、まん中の丸い穴は。そうそうあなたはまだ旦那様のあれを知らないんでしたね。」

これはお耳とお鼻を掃除して貰えるんですよ。ええっと大道具も沢山あります。あの椅子はね、お酒のお相手を務める器械。手も足も括られた俵で、旦那様のお口にお酒を吞ませたり、おつまみを運んだり」

いつまでも、おしのは饒舌は続くのだ。血も心も凍りつかんばかりの恐怖心に、美沙子は必死に耐え続けていた。ベルが鳴った。おしのはインターホーンの釦を押した。

「はい、蟹浦で御座居ます……はあ、……なんでしょう。戸籍調べですって。いえ只今、主人は他出しておりますので改めて……駄目ですよ、そんな処でお待ちになっては」

「助けて、……助けて下さい……」

突然、美沙子が絶叫した。おしのは不意を喰らった恰好だった。

「此の娘はまあ、なんて声を……いいかい旦那様にとって警察の調べなんかどうって事もないんだよ。今追い帰してくるからね。其の後で、うんとお仕置をしてあげますよ」

おしのは、あたふたと玄関へ走った。覗き窓を開くと、私服の男が立っていた。

「旦那様は、お留守なんです。出直して下さいましよ。でないと、私が困ります」

「別に迷惑は掛けません。此処で待ちます」

「そ、そんな、あんた？」

それこそ一大事である。まもなく剛三は帰ってくる、然も若い女が運び込まれるのだ。おしのは扉を開いた。この厄介なデカをどこかの室へ招き入れる必要があった。が男は、あがりやまちに、どっか、と腰を据えた。雄吉だった。深夜、花田と小池を相手に撲り合った名残りの傷に大きな膏藥を貼っていた。短気な此の男はなんの証拠も無いにもかかわらず剛三に直談判に乗り込んだのだ。雄吉はおしのは狼狽振りに何かを察知していた。でテコでも動かぬ意気込みで坐りこんだのだ。た。おしのは急を知らせる為に勝手の方へ走った。玄関の電話は使う訳にはいかないのである。

其の頃、美沙子は、超人的な努力をしていた。此の機会においては絶対に脱け出せないのだ。爪先に精一杯の力をこめて跳躍した、三度目に指先が縄に絡んだ。そのまま少しづつ縄をたぐって、美沙子は登った。両手が鋼鉄のフックに触れた時。嬉し涙が溢れ出て来た。ドサリツと音を立てて、美沙子は飛び降りた。釦を押すと壁も開いた。助かった、助かった、そう叫びながら、匍うようにして廊下に出た。鈴の音と、ドタドタ駆けあがって

きた雄吉の足音に、おしのも又飛び出してきて、信じられない光景にたちすくんだ。

“あんた。次郎の妹か？”

“は、はい”

“馬鹿、なぜ始めに俺にそれをいわんのだ”

“す、すみません”

雄吉は美沙子の惨めな姿態に、後の言葉が続かなかった。怒りは、おしの方に向けられて爆発した。

“糞婆あ、貴様もグルなんだな。斯んな甚い事をしやがって”

然し暴力を振える相手ではない。

“とにかく鍵だ。こいつも外す物を早く取ってきてやがれ。もたもたするな”

この時、雄吉は、おしの方について行くべきだった。あの秘密の室を知るために……。

“蟹浦は本当に留守なんですか？”

“はい、姉さんを連れてくるといって”

“房代さんを何処にです？”

“知りません。でも、一時間位で戻ってくる、確かにそんな事を……”

おしのがキイを持って戻って来た。手足を解放されると、精根尽き果てたように、美沙子は雄吉の逞ましい腕の中に崩折れた。失神したのだった。雄吉は美沙子を抱きあげると

応接室に踏み込んだ。既に白壁は閉じられていた。受話器を取ってダイヤルを回す。

“ああ立花さん。居ないのですか、貴女は助手の方ですね。彼は美苑を張っているんですね。あなた車に乗れますか。有難い、すぐに来て下さい。蟹浦の邸です。鈴木、いや都築里絵さんを救出したのです”

十分程で立花の助手は、やってきた。美沙子は、まだ失神からさめていない。雄吉は残る積りだった。だが女手一人では美沙子を運び出すのは困難だった。

“婆さん、いいか三十分程で戻ってくる。蟹浦にそう伝えとけ。俺は警察なんかじゃ無い。だがな房代さんに危害でも加えてみる、この人を証人に誘拐罪でうったえろとな。房代さんさえ無事に帰したら何もかも目をつぶってやる。いいか婆さん確実に伝えるんだ”

“は、はい。それで貴方様は……”

“伊藤雄吉、そういえば分る。いいな”

“イトウ……ユウキチ”

“さあ早く此処を出しましょう。里絵さんを連れ出さん内に戻ってこられては不味い”

“あたしのアパートにお連れしましょう。それから医者の手配をします”

おしのは、ぽかんと立ったまままで三人の

後姿を見送っていた。

17、三 国 人

杉田は、洪という名の三国人と相対していた。房代に対して暴虐の限りを尽した高倉はたった今帰っていった。房代の口から何一つ聞き出す事が出来ず、一旦家へ戻って会長の指示を仰ぐ為であり、花田と小池の身元保証人として警察へも出頭しなければならなかった。洪は麻薬の取引相手として、杉田にしてみれば大切な客なのである。一睡もしていないので頭の芯が痛んでいたが、取引きの場所や時間を打ち合わせる為には、そんな贅沢もいってはいられないのだ。

“スキタさん、もうせんから気になっているのですが”

洪は、出されたカカオをストレートで飲みながら視線を杉田の背の方に向けた。和室との境の襖は締められていたが、真ん中の柱の中央と根っこの方に細い麻縄が巻かれているのを不審に思っているのだった。

“ああ、あれですか”

杉田は苦笑した。うっかりしていた。

“洪さん、あんた女は好きですか？”

“オンナ、おお、勿論です。でも女とあの縄

なんの関係あります”

“お見せしましょう。いらっしやい”

杉田は洪をともなつて和室へ入った。素裸の房代がそこに縛りつけられていた。後手の裸身が極度の羞恥で精一杯にちぢんでいる。だが豊かな麗肌は蔽う術もなく佇立させられているのだった。

“どうです、お気に召しましたか”

“おおスパラシイですね。サスガにスキタさん、素晴らしいペットをお持ちだ”

“いや、これは私の女じゃあない”

“そんなウソ。人のものにコンな甚い事出来ないね”

“本当ですよ。私の物なら、もっと大切に扱いますからね”

杉田は、手にしていたタバコを乳房の谷間に近付けていった。ぎくつと房代が顔をあげる。顎もくびれんばかりに嚴重な猿轡が噛まされていた。タバコの先が皮膚に近づく。熱さが肌に突き刺さった。

“ああっ——”

“一晩中痛めたんだがどうしても吐かない”

“おお、オナナのスパイですか”

“まあ、そういう処です。止むを得るので、ボスの指示をまって殺す事になりますよ”

“クロス。ノウ、そんなモツタイない”

“仕方がないですよ。勿体ないのは、たしかだが、生かしてはおけんです”

“そ、そんならスキタさん、此のひと、私に下さい。ね、たのみます”

“それは困ります。此処で楽しむ分には差支えはありませんがね”

“いや貰います。お金、いや薬で取引きしましょう。沢山、沢山あげます”

杉田の表情が変わった。麻薬の魅力は彼にとつては絶対だった。

“このひと名前、なんといいます?”

“あけみ。そうよんでいます”

“おお、ますます気に入りました。スキタさん、取引き、あなたとだけでもかまわない。

あけみさんをわたし本国に連れて行きます。そしたら二度と日本へは帰れない。つまり殺したも同じ事です。ぜひ是非分けて下さい”

“洪さん。此の女にはボスも絡んでいる”

“……………”

“よろしい、こうしましょう。私の不注意で逃がした事にする。しかしですね、当分の間内地で飼って貰わねば困ります。此の女はあなたやボスの秘密を握っているのです。必要が生じた場合は、もう一度、私が会います。

多分、一兩日で解決するとは思いますが”

“OKです。私の家に連れて行きます”

“若い者に運ばせましょう。今、荷造りの用意をさせます”

“チョッ、一寸、待って。あけみ、もう私の物です。だ、誰にもこの軀みせられない”

“いいですとも、道具だけ運ばせますよ”

杉田は急ぎ足で室を出て行った。早くする必要があった。ひょっとしたら高倉がボスの使いでくるかも知れない。彼は知らなかったが、既に剛三は高倉の家へ出向いている。二人限りになると、洪は慾情を剥き出しにして房代に迫った。

“あなた素晴らしい別嬪ね。洪さん朝からツイてるね。おいしい匂い、まっちゃん、むっちり肥えていい肉付きね。日本の女、たまらない。洪さんはこんな縛りかたしないよ。うふふ。もっともっと美しい縛り方沢山知ってるよ。これサルグツワ、取る駄目ね。ああこれ予防注射の後ね。すべすべした肌にいかさないよ。そうね刺青して隠すあるね。お乳、とってもとっても綺麗あるね、ひっひっひ”

めくらめくような屈辱感に、房代は襲いかかる新たな魔の手にさいなまれる我が身を呪いたかった。

18、取引き

里絵を立花の助手である叶映子のアパートに送り届けて、其の足で雄吉は車を拾ってホテル美苑の近くで乗り捨てた。立花は辛抱強く張り込んでいた。

「それは良かったですね。後は房代さんが出てくる気配はありません。ナナエの高倉が今朝早く出て行って、それからまもなく、今度は蟹浦と高倉、それにあのチンピラが来たんですが、どういう訳か甚く慌ててね、蟹浦が先に帰り、高倉達も直ぐに飛び出してきました。変だとは思ったんですが、里絵さんが助けられた事を知った訳ですね」

「里絵さんの話だと、房代さんを連れてくるといっていたらしいんだが」

「急を知って予定を変更したんでしょうな。とすると、房代さんが此処にいるのは確実です。しかしこの勝負は此っ方の勝ですよ、後は里絵さんの証言で警察が動いてくれます」

「其の前に俺は蟹浦に会う約束がある」

「その必要はないですよ。私はこれから叶のアパートで里絵さんの証言を取り、書類を持って警察へ出頭します。それで終りだ。貴方はアパートへ戻って吉報を待って下さい。急

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

用の際は此処へ電話下さい。助手の処です」

雄吉は納得いかぬ節もあったがこうなった以上、立花の指示に従うより他はなかった。

美苑に乗り込んでいって房代を連れ出したいのだが、これだけのホテルでは一人の力では到底手は廻らない、まごまごしている内に他へ移されては大変である。警察力が必要だった。雄吉はもう一度車を拾うとアパートへ帰ってみた。意外な客が待っていた。

「なんだ貴様等、人の室へ勝手に入って」

「伊藤君、娘さんを返して貰いたいね」

「なんのこった。俺は知らんよ」

「そうは言わさん。あの娘に金を貸す時、あ

んたは証人になったんだからな」

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

「成程ね。しかし、期限は一カ月の約束だろう。まだ、四、五日も経ってないぜ。それにだ。あの人を檻禁したのはどういう訳だ」

「契約不履行ですよ。あの娘は金だけとって逃げようとした。で、押えたんです」

「俺は知らんよ。大体だな、貴様達いやにのんびり構えているが、もうそろそろ美苑にも手が廻る頃なんだぜ」

「それは、どういう事かね？」

「とぼけるな。房代さんがあすこにいる事はちゃんと調べがついているんだ」

高倉は傍の小池と顔を見合わせた。此の男は房代の逃げ出した事を知らないとみえる。

「それは見込み違いだな。房代は別の処に押

えてあるよ”

“な、なんだと?”

“伊藤君、斯うなったら、お互いにザックバランに取引しようじゃあないか”

“なにを、どうするとうんだ”

“あんたの欲しいのはあけみ、つまり房代の方なんだろう?、なんにもいわずに渡そうじゃあないか。その代り娘の方は貰い受けたいね。無論君の方が責任を以って監視してくれらというのなら拘束などという事はしない”

“……………”

“とにかく警察を介入させるというのなら止むを得ん、房代は殺^やらせる”

“誰にだ。貴様等、一步も外には出さんぞ”

“儂の若いのが、もう一人いるのは君も承知だろう。どうかね?”

雄吉は押し黙った。単純な彼は老獪な高倉の罠に少しづつ、はめられていていた。

“じゃあ、きくが、鈴木という娘がだな。逃げようとしたので押えた、というのは解るが房代さんを捕えているのはどういう訳だい”

“二人は共謀者だ。君、其んな詮索は後回しにした方がいいのじゃあないかね”

“よし、解った。俺の一存じゃあいかんからな、電話をしてくる。待っててくれ”

雄吉は一息に階下へ降りた。立花に電話を入れると仔細をかいつまんで説明した。立花はすぐに行く。そう言って電話を切った。

立花は映子を連れて、雄吉のアパートの少し手前で車を降りた。ポケットには小型のテープレコーダーを設置してある。高倉達を誘導尋問のような形で証言になりそうなものを引き出す積りであった。

“映子ちゃん、三十分経って私が現われなかったら一一〇番だ。解ったな”

“そういう置いて、彼はアパートへ向った。”

“これはどうも、大変おそくなりまして”

“あんたは、何者だね”

“無論、伊藤君の友人ですよ。そして貴方達の

の良い相談相手でもありますかね”

“まあ、いいだろう。それで用件は……”

“いいですか、高倉さん。電話でおききましたんですが、あんた都築房代さんと、ええっとそう鈴木美沙子さんでしたな。二人を交換したいと言われたそうだが、そんなぶ細工な話ってありますかね”

“なぜだ”

“古来、人質交換というのはですな、私の方があんた方の誰かを人質にし、あんた方も私共から人質を取っている。この方式の上で成

立するものです。然るに現状は、あなた方が一方的に犯罪行為を犯しているんですぞ”

“此の野郎、ふざけやがって”

“そちらのお若いの、大声はお止しなさい。

“どうです、話し合いは三十分という事にしましょうや。冷静にですな”

……………◇……………

“ス、杉田さん。わしです、花田です”

“どうした。なにを慌ててる?”

“様子が変です、例のほら、甲虫のような”

“フォルクス・ワーゲンか?”

“名前は知りませんがあの車です。男と女が乗ってきて、男だけが奴のアパートへ入って行きました”

“女は、美沙子か?”

“違います。ハクイスケですが、新顔です”

杉田は、暫く受話器を持ったまま考えこんだ。けわしい眼光だった。

“どうします、室の様子をみましょうか”

“よし、花田、その女を掴まえろ”

“そ、そんな無茶な。人が一杯ですよ”

“文句をいうな。いいか、俺のいう通りにしろ。高倉の車は乗り捨てにしとけ、直ぐに取りにやる。お前はその甲虫に乗り込め。女はハジキでも持つてる振りで黙らせるんだ。そ

のまんまボスの処へ直行しろ。俺も行く。いな、失敗は許さん……絶対にだぞ”

……………◇……………

都築里絵が肉体を抵当に金を借りた事実。

然も、房代と共謀し逃走を企てた。高倉の切り札は立花にとっては手痛い打撃となった。

人身売買、それに似た罪で高倉を告訴する事も可能ではあるが、都築姉妹にも責はある。

次郎殺しの確証が何一つないのだから正にお手上げの態だった。立花は警察への連絡を断念せざるを得なかった。待機させている叶映

子に、その事を告げる為に一旦外に出た彼は、愛車と共に映子が居なくなっているのにめんくらった。まさか白昼堂々と誘拐事件が行なわれていようとは、流石の彼も気付かなかった。室へ戻って、三十分は経過したがパトカーの駆けつける気配もない……。

“どうしたね、立花さんとやら”

高倉も平静を装おってはいるが内心は焦々しているのだ。逃げ出した房代の行動を抑える為にも、何としても美沙子を手に入れる必要がある。房代が雄吉を訪ねるか、或はマンションへ戻るか。そのどちらかと判断して、両方に手分けはしたのだが……。

“どうも弱りましたな。……どうです。結論

はもう少しのばすという事で……”

“駄目だ。三十分はそっちの口から云いだした事だろう。下手な小細工はやめて貰おう”

“小細工、とんでもない。私はただ二人を無事にいたきたい一心なんで……”

“だったら美沙子を渡して貰おう。俺はあけみを返す。その上で金の問題を解決すれば、無論、美沙子もお返ししますよ……”

“どうにも先方に利がありすぎるのだ。”

“もう暫く考えさせてくれませんか。金策もせんならん事だし”

“よろしい、では後三十分だ。俺は下で電話を拝借する。小池、後を頼むぞ”

剛三の指示を仰ぐ考えだった。

19、剃 刀

洪は、表向き廃品回収を業としている。無論、本日休業である。使用人には手当を与えて追い帰した。彼等にとって、それは別に珍しい事ではない。洪がなにかの大家である位の事は知っていたし、景気如何に依って荷受中止をやる事も再々であり、そんな事に一々不審を抱く程利口な奴もいなかった。積み重ねられてむれたような悪臭を放つ藁束の山。薄暗い倉庫のような一隅に、房代は繋がれて

いる。嚴重にいましめられ車のトランクに詰め込まれて、此の室に運び込まれるまでは長襦袢を着せられていた。だが今は、洪の手によって、再び身に着ける物はなに一つないのであった。既に四肢は疲れ果て、けだるい痛みが全身に重く沈んでいる。

“せめて、せめて着物だけは脱がさないで”

此処から出してくれと頼むのは無駄に等しい。杉田と高倉によって、散々に弄り尽されたとはいえ、新しい加虐者の前では、耐えられない屈辱だった。ゆるむ事のない轡^{クツワ}だが声を出す自由はある。が、洪は無頓着だった。

“着物イラナイね。女の人、ハダカの時が一番うつくしいあるよ。すばらしいね”

洪は、切れの悪いノコギリを使用して忙しく立ち働らいている。柱の根元に少しでも身をひそめようとする凄艶な肢態に、三白眼を走らせながら、適当な長さに切った角材を天井の梁に打ちつけるのだ。

(このままの姿で、あの木に括られる……)

想像しただけでも顔が歪む。柱の後で縛られた両手首が必死の思いで震えているのに、別の角材が膝元に転がされた。洪は何本かの荒縄を持ち出してきて、おぞましい羞恥責めに取り掛った。

「夜になったら、いれずみする人、来るね。それまでに、しとく事、一つある。さあ足出すね、別々に縛るの事ね」

「いやです。やめて、かんにんして」

「かんにんなしよ。うっふっふっ」

洪は右足首に手をかけると強引に引きよせる。そうさせまいとするのだが、男の腕力に叶う筈はないのだ。後手首が床に鳴って、引き伸ばされた足首に縄と角材がつながれた。

「さあ今度は、そっちの足、括るあるよ」

「ひ、ひいッ」

洪の意図を知って房代は絶叫した。開股縛りにされるのだ。総身の毛穴がそそけだつ思ひだった。夫の仇である杉田や高倉に責め問われた時、房代は執念で耐え忍んだ。だがこの化物は房代をなぶりものにする事だけが目的なのだ。両足を括りつけられた房代は、必死に太腿だけを閉じ合わせた。洪は終始笑い声を止めなかった。背後に回って手首の縄を解き放った。もっと苛酷な運命が房代を襲ったのは数分後の事だった。

「つ……痛うっ。う、うっ」

天井の角材に、房代は両手をいっぱいに拡げた恰好で吊られてしまった。爪先は、床上数厘の処にあった。あられない大の字で、

豊満な裸身が躍り狂った。

「う、う。お、おろして」

「しばらくの辛抱ね。用事すぐすませるよ」

洪は、安全剃刀の刃を手にした。

「あたしの国の女、無駄な毛一本もなしよ。あけみさん、あなた、あたしのおくさんなる約束ね。だから無駄な毛、いらぬ」

「きゃあ……」

「おお、動く駄目。けがするよ、危ないね」

腋の下に刃物が動いた。その触感に房代はみじめにけいれんする。

「さて、こんどは用心、用心ね」

「いや、もうやめて。ゆるしてえ」

「やめなしね。もっときれいにする事ね」

「やめて。そ、そんな事をし、しないで」

洪には然し通じなかった。むしろ房代の鳴咽がうれしいのだろう。艶肌に脂汗がふき出して来た。苦痛が、失神の自由さえも与えてはくれないのだった。

「あとは夜の事ね。その前に、いれずみ早くすませるよいね……」

20、映子

「さあ、早く歩くん」

叶映子は、杉田によって引き立てられてい

た。ハンドバッグをぶら下げて花田が続く。

剛三は、これ以上まげられない程の洪面を造ってふさぎ込んでいた。つい先刻まで杉田に對してあらん限りの罵声を浴びせていたのだ。然も美沙子が逃走するという信じられない事態が発生した。それは剛三自身の命運に関する一大事であった。房代はともかく、美沙子に逃げられた事は致命的である、彼女は密室の存在を知っている。如何に警察の目は胡魔化しても……。

「花田の手柄です。褒めてやって下さい」

「其の小娘がなんの役に立つというのだ？」

「バッグに名刺がありました。こいつは、興信所、つまり探偵の秘書という役目をしているのです」

「それがどうした」

「美沙子の事を吐かせる事が……」

「もう遅いのだ。二人の内のどちらかが警察へ馳け込んでみる……どうなる……」

「しかし、あけみは丸裸ですし、それに美沙子だって裸同然であれば、一応何処かに潜んでいるのかも知れません」

おしのが顔を覗かせた。

「旦那様。高倉さんからお電話ですが、此方におつなぎ致しようか？」

いざという時の場合に備えて、応接室へは誰も入れないように総ての装置がなされているのだ。

「よし、一寸、待たせとけ」

剛三は立ち上って映子の方に歩みよった。

おしのが、軽い驚きの声をあげた。

「どうした、おしの？」

「ハ、はい。いえ此の娘は……」

「お前、少し様子が変だぞ。なにをそわそわしている……此の娘がどうしたのだ」

「実は先程、伊藤という人と一諸に、美沙子を拐っていった娘なのです……」

剛三は目をむいた。

「たしか自分のアパートへ連れて行くとか」

剛三は一旦デスクに戻ると、小箱を取って再び映子に近寄った。

「お嬢さんいい給え。美沙子をどうしたね」

「知らないわ。知ってても言わないわよ」

「此奴。よし二人で押えてろ」

剛三は小箱を開いた。中には新しい画鋏がびっしりと詰っていた。その一本を蟹のような手が握んだ。と同時にブラウスの上から力任せに胸乳の上部に突き刺した。映子の唇から絶叫がほとばしった。容赦はなかった。のけぞった首筋のあたりに二本目の鋏が喰い込

んだ。金色の丸い鋏の下に血がじんわりと惨み出てきた。

「百本あるぞ。裸に引ん剥いて、体中に植えこんでやる」

「か、会長。此の娘の住所は解っています」

三本目が、ブラウスの胸元からのぞいた、小麦色の肌に押しつけられた。

「美沙子は何をしやべった。さあ吐かせ」

「ひいっ。知、しらない」

「よし、花田、指を出せ。早くしろ」

「ま、待って」

「……」

「あの人は気を失っていたんです。……医者に鎮静剤を打って、も、もらって」

「眠っているのか？」

「ハ、はい」

「しめた。しめたぞ。よし、私が行く。すぐだ。すぐに支度をしろ」

「ボス、此の女はどうします？」

「……ふうむ……」

「殺らせますか……」

剛三は、ギョロリッと杉田を睨んだ。

「杉田君、死んで貰うのは君の方かも知れんぞ。……あけみを逃がした。これは絶対に許せんミスだ」

「ま、待って下さい。あけみは必ず」

「よからう、一日の猶予をやる。但しだ、サツに駆け込まれた後では駄目だ」

「わ、解りました」

ほっと、杉田は吐息をもらした。

「花田、ピンを取ってやりなさい。此の娘も新鮮な果実の匂いがしとる。美沙子には及ばんがな。縛りあげて置きなさい。二人、いや三人だ。私の秘密を嗅ぎつけようとした不届者だ、三人揃って制裁しよう。そうだ電話に出らねばならんな。あの馬鹿者共を暫く釘付けにしとく必要がある。サア出発だ……」

21、三人の贅

洪の眼の前に房代の大の字に吊るされた肢体は、いたずらに空しいもがきを露呈するばかりだった。

表の方で人声がした。それが杉田のものだと解ると、洪は不承々に房代のいましめを解いた。大急ぎで襦袢を絡ませ、すでに抵抗の気力も失せたあわれな女を、もう一度後手に縛り直すのだった。彼は薬束の中から梯子を伝って下へ降り、表へ向った。

「スキタさん、何事です」

「取引きの件です。急に変更になったので」

“それで、とりひき、いつです”

見せてはならない秘密の個所から、大きな鞆

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千元	20篇

▽内
容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性譚美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲などで、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

した。

「ボスには内緒だ。取っつけ」

“有難うございます”

もう一つの小袋を齒で喰ひ千切り、杉田はすでに死体と化した洪の全身にまき散した。

“勿体ないですね”

「線香代りさ。さあ後は金に代えて分けてやる。そうだ、ボスの土産だ。あけみを連れ出さねば。探せ……」

蟹浦剛三は、大満足の表情だった。大ソファにふんぞりかえって、足元に展開されている華やかな色彩の蝨めきに、細い目を一層細めて、やにさがっていた。真紅のネグリジェの女、都築里絵は菅沼によって、再び拘束されるものとしていた。おそらく映子の好意によるものであろう、淡い水色のスリッパを下に着ていた。逃げようとする里絵の両手が空しく床をかきむしった。

「さわぐなよ。静かにしてくれないと痛い思いをするだけだぜ」

「構わん、構わん。こらしめの為だ、少し強く縛ってあげなさい。その為の縄なのだ」

縛りながら菅沼は、むちむち抵抗する、その柔らかな感触を楽しんでいるようだった。

白いブラウスに紺色のスラックスをはいている映子の方は、すでに其の縄尻を剛三の手に握られている。作業が完了し里絵の縄尻も又剛三のものとなった。

おしのが扉を開き、後手に縛され猿轡を噛まされた、あわれな房代が、軀を二つ折りにして引き立てられてきた。

「あ……ッ。お、おねえさん……」

髪を乱して里絵は膝で匍いようとした。

「ふっふっふ、おとなしくするんだ」

「あっ、さ、里絵ちゃん……」

「そうか。矢っ張りお前達姉妹だったか……面白い。よろしい、三人をそこへ並べて正座させなさい」

金糸銀糸でふちどられた妖艶な長襦袢姿の房代。無情な麻縄が乱れた胸のあたりを締めつけて、張り切った胸乳の妖しいあえぎ。

真紅のネグリジェの裾がめくれて、真っ白いふくらはぎが、ヒクヒクと恐怖をみせてい

る里絵。そしてブラウスの胸元に薄く血を惨ませている痛々しい映子。三人の生贄は、その縄尻に追い立てられて、剛三の眼前に並ばさせられたのだった。

「美沙子、里絵というんだったな。里絵には既に云いかせてあるが、君達は今日から私の所有物となる。いいね。里絵には百万円支払ったが、思いがけん高価な利子までついて大いに満足している。これも里絵は体験済みだが、これから私の寝室に案内する。絶対に脱けだす可能性はない。解ったな。先ず三人には夫々手紙を書いて貰わねばならん。失踪したのでは無いという事を証明する物だ。むしろ素直に書く必要は無い。それを書かせるための手段も、私の楽しみであるからなのだ。次は諸君の、いや諸嬢のだな、貞操を頂戴する。これも、私に取っては辛い事だが、絶対に強制はせん。服従し屈伏し、自から身を投げだすのを気長に待とう。つまり徳川家康の心境だな。里絵はむろんだが、映子か、どうやらお前も生娘らしい。あけみ、いや房代だったな。お前は既に結婚しているので簡単に許せるだろう。もっとも、亭主の仇という事になると、はなしは別かな……どうだね房代……」

「ヒ、ひとでなし……」

「菅沼、房代の頭を押えろ」

言われた通りに菅沼がした、猿轡にくびられた房代の顔に、剛三は、あしのうらを押した。

「ム、むううっ……」

「それが終わると、愈々調教に入る。私の奴隷として一生奉仕するための教育をやるのだ。解ったか。……誰も答えるのかね。映子お前は答えられるだろう。私に対して何等憎しみを抱く理由はない筈だからね」

「あなたは狂人です。けだものです」

「けだもの。なるほどそうかもしれん。狂人のけだもの、となると狂獣の宴か。獣宴の始まり、はじまりとござい」

剛三は、三本の縄尻を一束にして、三人の贄を引き立てた。腹の底から、こみあげてくる喜びが、こらえようのない笑顔となって彼は、そこにいる誰の存在をも気付いてはいなかった。大切な助手でもある、おしのの存在さえも失念してしまっていた。

白壁がゆっくり開いた。房代と映子は奇異の瞳をこらしてみたが、里絵だけは、もうそれだけで真珠色の涙を頬に光らせていた。

△贗作カメラ・ルポ▽

縄と汗とカメラと

蓑 輪 三 郎

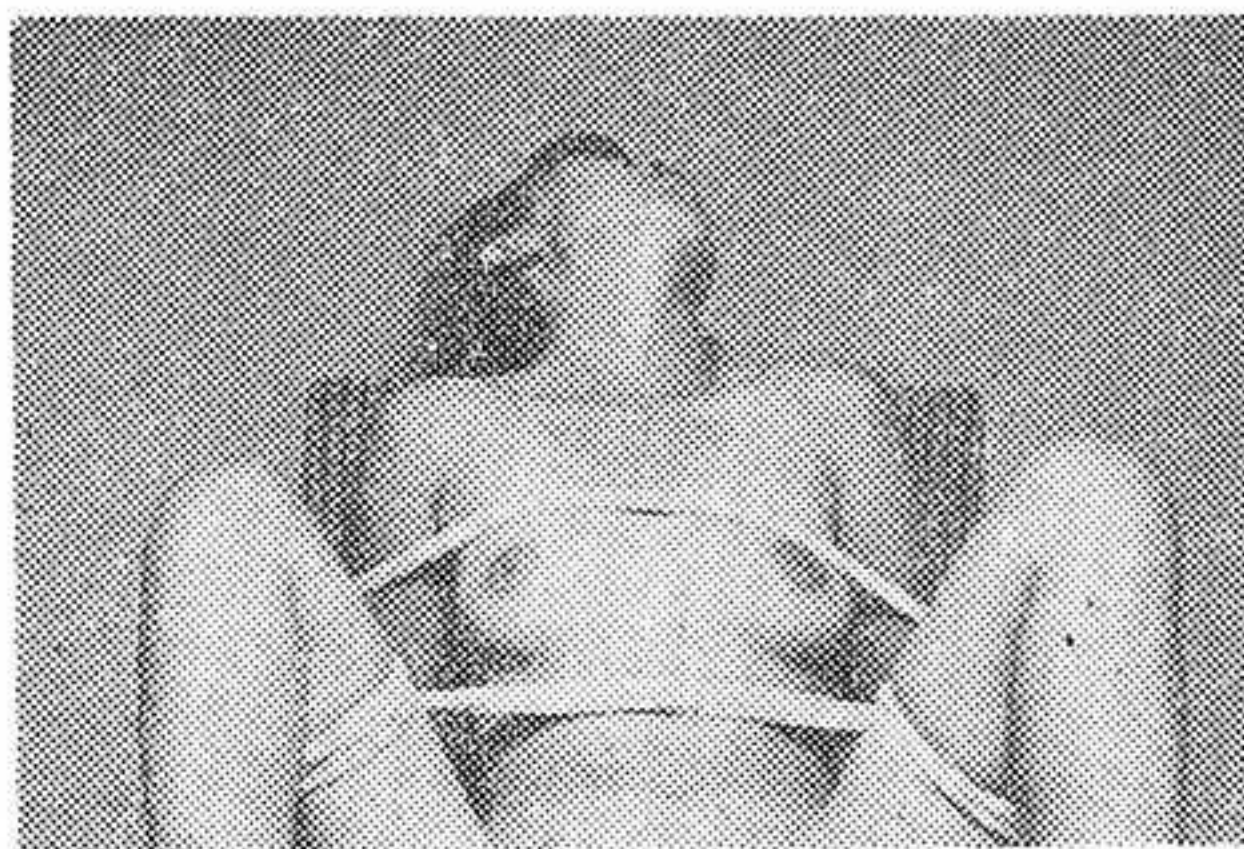
このところ、北陸地方は連日の暑さで、うだっていた。フウフウ云って金魚をうらやましく眺めている。そんなある日、友人のK君から電話があった。かねてから依頼しておいたモデルが見つかったというのである。撮影の内容は話をしてあるから、どこまで撮るかは、君の腕次第だという。こういわれては、はりきらざるを得ない。暑さなんか、とたんに忘れてしまうから妙である。早速、都合の良い日をきめて、連絡を待った。

約束の日、八月十三日の午後七時半、国道ぞいに車を停めて待っていた。打ち合わせの目印は、白のブラウスに緑のスカート、手に女性週刊誌を持っている。合言葉は「谷さんですか」である。時間が少しあるので、カバンを開いて道具一式を点検する。カメラ、ストロボ、縄は長短二本、奇ク五月号一冊。五月号を選んだのは写真が一番多いと思ったからである。

待ち合わせの七時半を五分過ぎて、待ち兼ねる思いの彼女は来た。身長一米五十五釐ぐらいで、一寸痩せ気味の感じであるが、一見して大人しうである。彼女であることを確かめると、車にのせて走り出す。しばらくは二人とも黙っていた。

目的地まで行く間に、なんとか写真の内容などを話しておかないと、いよいよその時になってからあわてるようでは困るので、こちらから話しかけた。

「よく来てくれたね。少し遅れたので、来な



いのかと心配していたよ」

「ええ、すみません。一寸、用事があったので……」

「君はK君から、ぼくのことをどういう風に聞いていたの？」

「Kさんは、（写真をとるのだが、少し変わったことをするかもしれない。しかし、悪戯^{わるさ}はしないからね）といって、雑誌を見せてくれました。その雑誌には、縛られた女の人の写真が沢山のつていましたけど、余り長い間見ているのも恥ずかしいので、すぐ、Kさんに返しましたわ」

「なるほど。で、君はその雑誌を見て、どう思ったの？」

「どうって？」

「そんな、縛られた女の写真を見た時にさ」

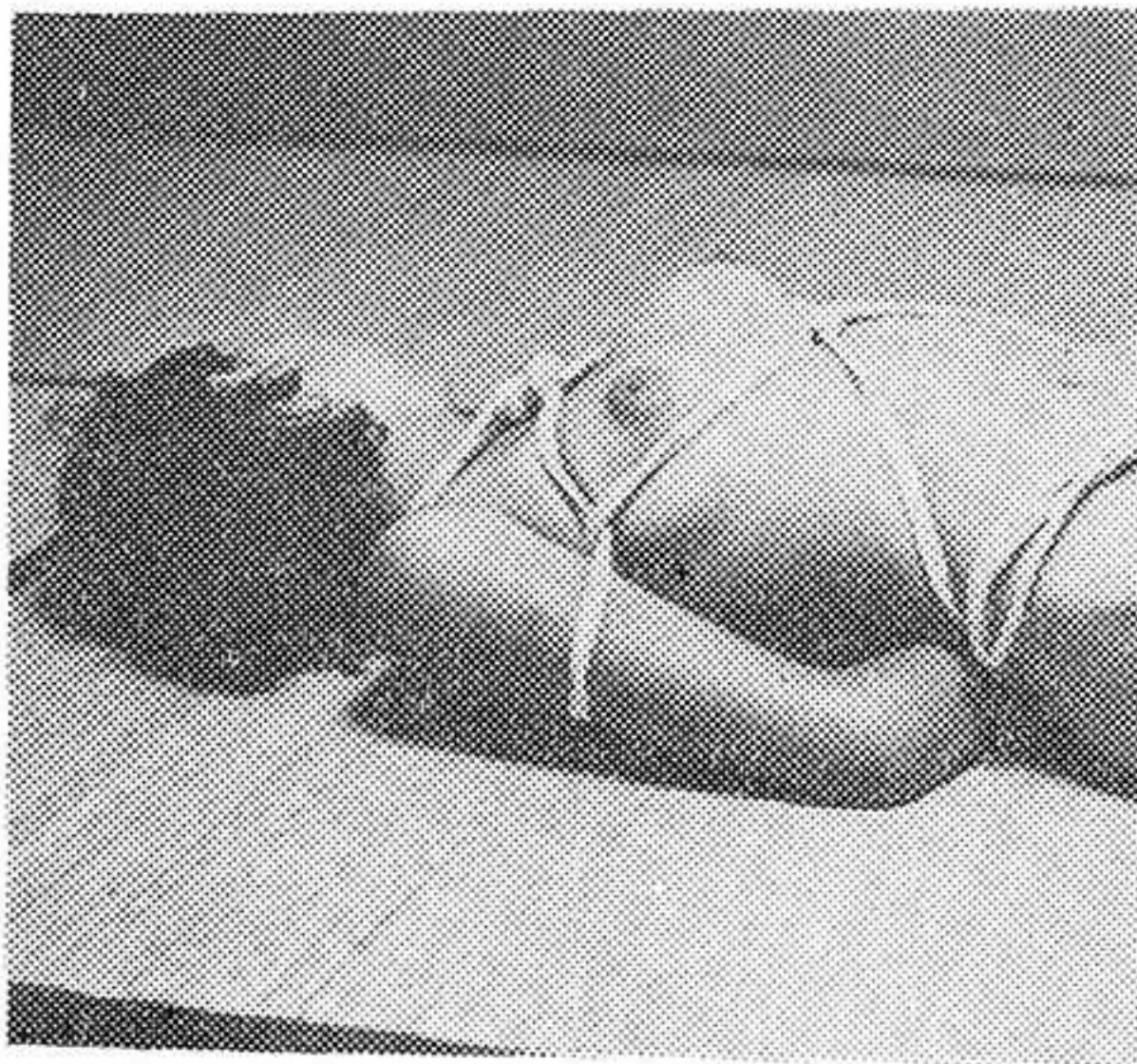
「こんな写真を撮るのかしら、いやだなあ。」

でも悪戯^{わるさ}さえしなければ、撮らせてあげても良いだろうと思いました」

彼女は、うつむいたままだったが、低いがハッキリした声でいって、こちらをチラッと見て、すぐまた眼を伏せた。

「よかった。実は、そのことをいっておこうかと思って、さっきから迷っていたんだよ。」

君がそう思っていてくれれば、有難い。ぼく



もたいへんにやりやすいよ。ぼくは写真を撮っている時が一番たのしいんだ。君の写真も、やたらに人に見せないよ。それは絶対に約束する。だけど或いは、この雑誌に載るかもしれないけど、かまわないね」

「ええ、でも顔は写さないでね」

「うん、出来るだけ写らないようにするよ。」

写ったものは送らないしね」

そんな話をしている中に目的地についた。

ホテルかモーテルでもよいのだが二時間半ぐらいで時間を区切られるのがいやなので、時

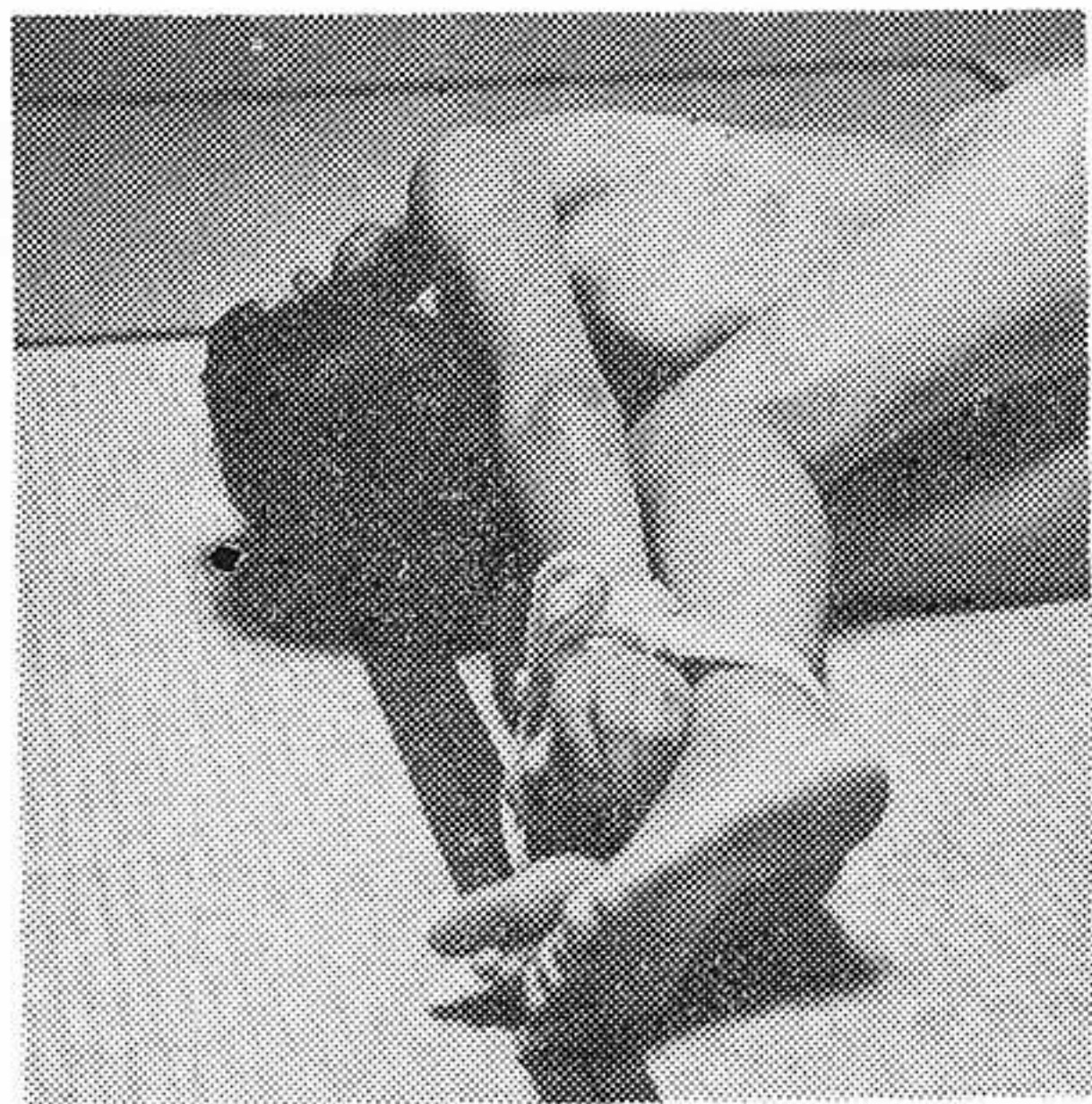
々会合に使用しているビルの一室を無断借用することに、心を決めた。管理人もいない日曜日でもあるし、ビル内には誰もいない。四坪ほどの部屋に椅子を一つ持ち込んだ。吊りをやりたいのだが、ハリもなければ鴨居もない。仕方がないので今回は椅子を使った縛りで我慢することにした。

「じゃあ、脱いで下さい。全部ですよ」

というと、「ハイ」といって、意外なほどアッサリした態度で、するすると脱ぎにかかった。年頃の娘さんのことだ。余り手がかかっても困るが、もう少しは恥ずかしそうに脱いでもよさそうなものだが、現代娘^{かたぎ}気質^{かたぎ}というのだろうか、実にあっさりしている。年令は十八ということだが、全体にボリウムに乏しく瘠せているが、乳房は、まあまあというところだ。

まず椅子に坐ってもらい、胸を椅子の背と一緒に一卷き、膝から下を拡げて椅子の足に縛る。そして前後、左右から十枚前後撮る。どうも、うまく撮れない。フェミニストであるせいか、強く縛るのにどうしても気がねをしてしまう。これでは、いけない。こう自分にいいきかせて、次にとりかかる。

足の縄をとくと左右に大きく開いて、ひじ



掛けに膝を固定する。開股椅子縛りの出来上りで、全裸の女体のあられもない姿が眼前にあった。流石に彼女は恥ずかしいのか、顔をそむけている。心なしか、胸が波打っているようである。これを手早く十数枚撮り、今度は膝と椅子の背を連結して引きしぼった。前にもまして、女性として最も恥ずかしいだろうと思われる姿が出現する。しかし彼女は、自分のとらされている姿に満足してか、うっとり目をとじ、胸で大きく息をしていた。彼女は同じく十五、六枚撮り、縄をといた。彼女は

しばらくじっとしていたが、やっと体を起した。見ると、手と足には縄のあとが、くつきりとなっていた。

クーラーのない部屋で服をきちんと着ての作業なので、熱いこと、熱いこと。服の下を汗がダラダラ流れ、下着がビショビショになってきたのがいやでもわかる。彼女は裸でいるせいか少しも汗をかかず、平気な顔をしているが、こちらは暑さのせいで胃のあたりがキリキリして来た。まだ一時間ほどしかたっていないのに、よわったことである。テープ

ルを引っぱり出し、その上にねてもらい、大の字縛りをしようと思ったが、どうもうまくいかないで、グルグル巻きで我慢する。一度、股間縛りをやってみたかったので後手に縛ってから、首に廻して結び、左右に分けて胸に廻し、腕を縛って腰に廻し、股間を通して後手にもっていった。しかし、辻村氏や山本氏のようにキッチリとはいかず、何かゆるい感じになってしまった。立ち姿から横にころがし、足を開かせて数枚撮る。

胃がますます痛くなって来たので、強烈なのを一つやってからやめようと思い椅子に逆さに縛り、足を開かせて縛る。

ここでローソクを使ってみようと思ったが、デコレーション用の太いやつだったので、うまく使用できず次の機会にゆずることにした。この次には細いローソクを使って人間燭台を実現してみたい。

約二時間、流れる汗と胃痛のたたかい。それでも、どうやら三十六枚撮りフィルム二本を消化した。奇クに発表するためには、ハンカチか何かを利用した写真を撮っておくべきであったが、夢中であつたので忘れてしまい露出過度(フィルムにあらず)のフォトばかりになってしまった。

彼女は、しないという固い約束はあっても少々のいたずらぐらいは覚悟していたらしかったが、文字通りのモデルだけのことに拍子抜けした様子だったが、気持よく次回の日時を約束してくれて別れた。

どうもはじめ思っていたようには出来ず、下手なフォトばかりであるが、カットをすれば使えるかもしれないので、九枚の写真を同封した。次回のフォトと撮影記も出来次第お送りしたいと思う。

〔編集部より〕お差支えなければ住所氏名御連絡下さい。稿料をお送りします。

美女決斗図絵



△裕姫戦記▽

女 四 条 噺

鶴 見 和 男

(一)

浮島の美女同士の一騎打ちの噂は、たちまちにして近隣に伝わり、やがて京でも評判になった。反徳川方は快哉を叫んだが、おさまらぬのは本多忠次であった。力攻して敗れたならまだしも、兎戯にひとしい術策を弄して、しかもそれが失敗したとあっては不面目も甚だしい。これがそのまま家康の耳に入ったら、お咎めはもとより、切腹すら免がれない。彼はこの策を案出した妻がうらめしかっ

た。

しかし桂の方は勇婦であるばかりでなく、賢妻であった。万一の事を慮かり、父本多忠勝を通じて手は打ってあった。家康といえども、忠勝の愛娘桂の方の願いとあらば、余程のことでない限り聞き届けざるを得ないはずであった。

(この度の長浜攻めの失敗は、夫忠次の罪にあらず、桂の胸のうちから出たこと。それも第一の策は失敗しましたが、第二の策を用意しております。それを成功させるた

めに、あと十日程の御猶予を。それまでには必ず長浜の城と裕姫の首、進上致しまする)

というのである。そして十日の猶予は与えられた。桂の方は第二の策の準備にとりかかる。策といっても、もはやこの後は力攻の外はない。しかし桂の方にもかなりの成算はあった。ひとつには、本多勢が引き上げたことによって、城内の志賀方がある程度の油断をしていること。それに今ひとつ、今度こそ寄手があとに引けぬ死物狂いの兵であること、

である。この決死の兵で、敵の不意を討つ。

さすがに戦場経験豊かな桂の方らしい策略であった。しかし何よりもまず彼女からしてが必死であったのである。第一、策の失敗を辛じてつくろったとはいえ、今度失敗すれば確実に夫忠次の生命はないであろうし、桂の方自身もむざむざ生き長らえては居られまい。

「あたら美智姫をむざむざ死なせたのも妾であれば、その手向けのためにも、この手で裕姫の細首、捻じ切ってくれねば——」

と傍らの侍女達にも豪語し、

「そのつもりで、そち達も存分に、働いてくりゃれ」

と激励するのであった。

彼女はさらに、長浜城攻めの最初の失敗者板倉重勝を利用することを忘れなかった。浮島の一騎討ちの公約上、数日も経たぬうちにその武士の誓いを反古にして、本多勢が攻めかかるということは、如何に鉄面皮でも出来るわけではない。そこで世間態には、板倉重勝が私怨をはらすための私斗と見せかけたのである。それこそ「勝てば官軍」で、手段はどうであろうと、有無を言わず裕姫さえ討ちとってしまえば、「死人に口なし」である。重勝自身この桂の方のはからいに、感激して

必勝を誓ったぐらいであるから、実におそるべきは、美しき女人の口先三寸である。

ただ板倉勢は、その大半を失って意気も沮喪しているから、攻城軍の主力はもちろん本多勢であった。それが悉く板倉勢の旗幟を押し立てたのである。そして桂の方は夫忠次が憤激のあまり輕挙妄進するのを案じて、わざと城攻に参加させず、ただおのれは事実上の総大将として、いざという場合には、自らの手で裕姫を討つべく、鎧、具足も充分に着込んで、七百人もから成る女軍の先頭に立ったのである。

(おのれ、猪口才な小娘。權威に刃向うものの末路がどんなものか、今度こそ思い知らせてくれますぞ)

キツと長浜城の天守閣を睨む桂の方の顔は、まさに鬼女の面さながらのすさまじさであった。

(一)

重ねて言うが、實際桂の方も必死であったのである。それこそ日数にとられず、じつくり攻めるなら、援兵のない小人数の敵は何時かは力尽きるであろうが、家康との約束はわずかに十日である。もちろん彼女の考えは

不意の夜襲で一夜のうちに城を落すつもりなのだが、そのためにも敵を油断させる必要上なるべく城攻めの期日を延ばしたかった。したがってその強襲が失敗して、敵が態勢を立て直し、固く籠城をし始めたら、それこそ裕姫の生命がなくなる前に、桂の方自身が生命を落さねばならぬ羽目になる。

(のるか、反るか。その方がかえって好いのだ)と自分で自分の心を励ましながらも、みるみる過ぎてゆく日を、桂の方はじりじりした気持で送ってゆくのがあった。

遂にその日は来た。浮島の一騎打からちょうど十日目の十月三日、風の強い夜の中を本多勢ならぬ板倉勢は、枚をふくんで長浜城におしよせ、翌四日の丑満時、総攻撃を開始した。城内は、たちまち上を下への大騒ぎになる。

志賀方もとよりこのような来襲に備えをしていないわけではなかった。公約によって本多勢は一時は兵を引いたが、あの家康がそのまま志賀氏に所領安堵の承認をするとは思えない。さらに他の大将に命じて攻めてくるであろうぐらゐは覚悟して、軍勢はそのままに城内に屯していたのである。しかし、何の前触れもなしに、このような卑怯な夜討をか

けて来ようとは夢にも思っていなかったのである。不意を討たれた志賀勢は、四方から本多、板倉勢に乱入され、見るまに三の丸をおとされて二の丸に退いた。しかしそこで一の丸からかけつけた味方に力を得て、押しつ押されつの激戦になった。この時の寄手の軍勢はざっと三千というところであったが、もちろんその全部を投入したわけではない。入口は狭いからそう一時に大勢入れないし、また三の丸をおとしたからといって、あまりに多勢で後詰をしたところで、闇の中ではあり、かえって同士討をおこし易い。これに対して志賀勢は八百くらいの小勢ではあったが、一旦体勢を立て直したとなると、むしろ勝手知った城内のこととて、あちこちから、出撃して寄手をなやました。しかも最後には、城将裕姫が、あいも交らぬ美しくも凛々しい姿を見せて、侍女と若侍を交えた二、三百の精鋭を率いて迎撃すると、たちまち主客、所をかえた。

「裕姫、裕姫だぞっ!!」

寄せ手は本多勢と板倉勢であるだけに、姫の手並の程は肝に銘じて知っている。その上風にも堪えぬ気な美女が、大軍の中に割って入って不死身の奮斗をするその神秘性に、名

状し難い恐怖を覚えるのである。反対に城兵はこの神秘性に愈々勇み立つ。かくて夜が白々と明ける頃には、遂に寄手は雪崩れを打って城外に敗走し、志賀勢は三の丸も奪い返した。

第一回の夜襲は失敗に終わった。しかし桂の方はあまり失望もなかった。それは不意を打たれた城方の死傷者も、おびただしかったからである。さすがに歴戦の勇婦である桂の方には、その辺の手応えが分るのであって、夜襲に参加していない新手の二千をもって、もうひと押しすれば、城はとれると感じたのである。ただ問題は裕姫である。桂の方が眼のあたりに見たように、この姫の働き振りが如何では、いかなる奇蹟がおこるかもしれない。あるいは、たとえ城を落しても敵に何等かの妙策があつて、裕姫がこの場を逃れ、さらに再挙を計るというようなことがあったのでは、桂の方の面目は、まる潰れである。(何としても、まず裕姫を討ちとらねばならない)

彼女は部下に次の総攻撃の準備を命ずると同時に、敵は小勢であり、裕姫は一介の美少女に過ぎぬことを言い含め、裕姫の首を挙げた者には莫大な恩賞を与えることを約した。

一方、城中には多くの矢文を射こんで、(この度の城攻めは、家康の命によるものであり、後詰めは続々と進発しつつある。到底支え得る城ではないのだから、早く裕姫の首を討って差し出せ。そうすれば、その余の者の命は助けてやる。正午までに返事がなければ、再び総攻撃を行う)

という意味の勸降状を送り、城兵の戦意を喪失せしめようとした。

城内では主だった諸將四十余人が、裕姫を囲んで静かな座談を交していた。もとより作戦会議なのだが、既に今日あるを覚悟していた人達であるから、おのずと思うところはひとつであつて、大声を出したり、激論になる要がなかったのである。

まず裕姫は、ほんとうに寄手が自分の首のみで満足して、他の者の命を助けるというなら、快く自害すると申し出たが、たちまちに否決された。卑怯な徳川勢がそのような約束を実行するはずはないし、もしそうであるとしても、これまで戦って来た以上、裕姫と共に潔よく城を枕に討死しようという点では、全員が一致していた。ただ如何に戦うか、その死方の問題である。主将裕姫は容を正して「皆の志、嬉しく思います。そうとあれば

姫にひとつの頼みがある。今日の敵は旗差物

こそ板倉のそれであるが、実は本多勢であり、大將は桂の方であることは鏡を掛けて見るが如く、實際斥候の者が見届けて来ています。とあれば、妾は何としても敵の大將桂の方を討ち取って死にたい。未練と思われようが、人の道を踏み外して何とも思わぬその心根が口惜しい。正義の戦とはこのようなものであるということを思い知らしてやりたいのじゃ。もし天が味方して、桂の方の首級を挙げることが出来れば、本多勢の非行は一目瞭然、たちまち天下に知れわたり、ひいては徳川家の威信にも傷がつき、せめてもの亡夫への手向けとなりましょう。そのために妾の替玉を立てて敵の主力を城へ引き付け、妾は敵に悟られぬ小勢をもって敵中を突破し、桂の方の本陣に斬り込んで見たいのじゃ。なれど、いうまでもなく、これは至難の業。全員が一致してこの目的のために働いてもらわねば出来ぬことですし、またそなた達には最も辛い死方をさせることになります。如何であらう、卒直な意見を聞かせてくりゃれ」

姫の妙な声音が熱っぽくなるにつれて、一座には強い感動の波が流れた。

（女性の身ですら、このように雄々しい決心

が出来るものを——）

大の男が何で否やを言えよう。

「感じ入ったお言葉。われわれは、ただ姫様の御命のままに従います。何卒、御本懷をお遂げ遊ばしますよう——」

その答えに、見る間に、姫の滑らかな両の頬を伝わって真珠のような涙がぼろぼろとめどもなく、まろび落ちた。かつて見せたことのないそのような姫の姿に、一座の男女はこらえかねて、声を上げて泣き出すのであった。しかしひとたびその激情がしずまると、急に心は深く澄み渡って、言いしれぬ力が湧いてくるのを皆ひとしく感じていた。

（人間死身になったら、どの位の働きが出来るものか、憎い敵に思い切り叩きつけてみよう——）

やがて訣別の水盃が廻される。裕姫はこの時、事の成就しなかった時の用意に、この座の評議の内容を詳しく認め、その終りに、
 八七生まで背恩の賊徳川氏をこらしめ、もって正義を後世に弘む

と結んで裕姫以下ここに集った四十二名の名前を書き連ねた。内八名は女性である。かくて覚悟を定めた志賀勢は、諸準備を整えたと正午になる前にサッと城外に討って出たの

である。

(三)

「奥方様、城兵が討って出てまいりましてございます」

「さもあるう、降服致す敵ではない。裕姫以下、死を定めての突撃と見える。それこそこちらの思う壺じゃ、おし包んで一人残らず討ち取りや」

「畏まりました」

「なれど、窮鼠の敵、噛みつかれぬよう充分心して進退しや」

「心得て居りまする」

桂の方も勇躍して部署を定めると、一旦はみずからも馬を乗り出したが、城中では、裕姫以下の女人勢が、櫓に居流れているのを見ると、

「裕姫との決戦は、今しばらく後刻となるう。その折までそち達は充分休息して、英気を養い置け」

と部下の女軍に言い渡し、おのれも後陣に引き下って、鎧を脱ぎ、床凡に腰かけたまま戦況を見守っていた。

さすがに決死の志賀勢は、小勢ながら激しく戦って、なかなか後へ引こうとしない。し

かし徳川方も、肝心の裕姫を目の前に見ていたので、あせらず、ジリジリと左右翼を縮めて、城兵をおしつみ、圧迫しようとする。そんな時になっても、なお櫓の上の裕姫は動く気配がない。桂の方もあまりに時の移るのに、ようやく焦慮を感じ、寄手の主力との距離が離れてゆくのに不安を感じ、再び鎧を着ようかと後ろをふり向いた時である。なお遙か彼方ではあるが、思いも寄らぬ後方に当って、ドッと鬨の聲が上り、烈しい格闘の音が聞えたと思うと、一陣のつむじ風が捲き起るかの如く、こちらに馳せくる敵の一隊。

(裕姫——)

直感的にそう思った桂の方は、かつてない恐怖を覚えて、身体が硬直してしまった。

「て、敵が後方に。皆の者、よ、用心しや」

辛うじてそう言ったが、手はぶるぶる顫えて、鎧に手を掛けることが出来なかった。

「敵、敵——」

「ヒエッ——」

桂の方にもまして部下の女兵達は、あわてふためいた。具足もすっかり脱いで横になっていた者が大部分であったからだ。

「敵だ、久保様の陣は突破されたぞ」

「一大事、そち達は死を賭して防げ。汝は横

山勢に連絡をとれ！」

さすがに男兵は迅速に動いて、一隊は志賀勢を迎え撃ちにゆき、他の一隊は防備の態勢を布くとともに、左右の味方の陣に連絡兵を走らせた。と見て、桂の方は女兵をまとめようとしたが、いずれも手足がおののいて、容易に武具をつけられない。徒らに時間が経って、ただ上を下への混乱をしているところへたちまち天来の聲が彼等の耳朵を打った。

「不信不義の本多勢、大将桂の方はいずこにありや。志賀裕姫が見参！」

その透き通るような声音は、桂の方の肝をでんぐり返した。さしも千軍万馬の勇婦桂の方も、このように鮮かな奇襲を受けたのは初めてだけに、目指す裕姫を目の前にしながら勇躍迎えうつべきその身体が、ぶるぶる顫えてとまらないのだ。そして

「キヤッ——」

「ワッ——」

血しぶきを上げて部下の女兵が二人、三人仆れたのを見ると、もう堪えられなかった。

(助けて、死にたくない。何とか——)

生への執着がかえって人を臆病にする。いつもはごく自然に生死の巷の戦場をかけめぐっていた桂の方が、この時ばかりは恥も外聞

も忘れて、逃げまどう部下の女兵にまじって這うようにして逃げ出したのである。

(この勝戦に、妾が死んでたまるものか。死んだら何もかもおしまい。逃げるのだ、ここさえ逃げられれば——)

胸は早鐘のように鼓動を打って、今にも裕姫の鉄手がおのれの頸すじにのびやしないかという妄想だけにおびえて、無我夢中にけつまるびつする。その態の見苦しさ。

しかし裕姫もそうたやすくは、桂の方に及び難かった。姫は早朝から、忍びの者を放って、桂の方の陣地の位置、彼女の物具の特徴などを調べさせておき、敵の陣地と陣地の間隙を縫って後方に速周したのである。しかし桂の方の後詰には久保修理亮の勢があつて、これを突破しなければならなかったし、桂の方の麾下が迎撃している間に、その左翼を固めていた横山勢が救援にかけつけ、激戦になっていた。ただ裕姫とその前後を守る四、五名の精兵は、左右を顧みずに真しぐらに進むので、一番早く桂の方の本営に斬り込んだのである。従って本多方の女兵の中にも健気に踏みとどまる者もあって、裕姫等はなお数倍の敵に囲まれ、戦っていた。

裕姫はこの日も、鎧、具足を避けて、小袖

の着流しであつたが、浮島の一騎討の時とは打って交つて、紫の地に燕脂の菊を染めた粋な粉装であつたが、抜けるように白い頸すじや、二の腕の肌の色によくうつり、殊にキリりと締めた黒地の帯が、気品高い美しさを一際盛りあげていた。黒柄の小薙刀を縦横に掉つて、本多勢を薙ぎ倒す、その切先の鋭さは相も交らぬ。ここでも真先に敵の輪を切り崩してなおも逃げ走る女人の姿を求めて、

「卑怯なり、桂の方、出会えや」

と呼ばわりつつ、追おうとしたその時である。右手に当って意外な声が返ってきた。

「小賢しや、志賀裕姫、重囲を突破してここまで来るは健気なれども、畢竟は飛んで火に入る夏の虫。汝が求むる本多忠次が妻桂、これにあり。この手で引導を渡してくれる故、かかつて来や」

「何と、桂の方——」

裕姫、目を見張ってその方を見るに、まさしく覚え知った小桜織の鎧に、緋の直垂をつけた年の頃三十前後の眉目美しい女人が立ちだかっている。

しかし、折も折、逃げまどっている桂の方がハッと驚いた位であるから、これはもとより桂の方その人ではない。桂の方も多くの武

将がするように、おのれの左右に背恰好のよく似た女人を侍らしていたから、その影武者の一人園江と呼ぶ女で、主の一大事と健気にもその身代りに立ったのである。一方にはやはり腕に覚えのある女のこと、一か八か裕姫の大将首を挙げてやろうという功名心もあつたかもしれない。

無念や、裕姫にはその見別けがつかなかった。無理もない、あの勇婦の桂の方が敵に背を見せるとは考えられなかったからである。（うれしや、八幡！ 目ざす仇にめぐり合つたか——）

と飛ぶように走り寄ると、

「いざや、大将同士、快く勝負せん」

名乗るももどかしく、袖を翻えして斬りかかる。迎えうつ桂の方こと園江も薙刀である。水車の如くふり廻しつつ、早くも丁々発止と火花が散る。珍しい美女同士の一騎討ちに目を見張る敵味方。しかし、桂の方ならでそれよりも数段腕のおとる園江のこと、裕姫に敵する筈がない。まして決死の意気込みの裕姫、十合と打ち合せずに

「エイッ——」

と横に払った腰車。鮮やかに園江の右の弱腰をもろに薙いだから、何条たまろう。

「アッ」

と一声、バツタリと横に倒れる。してやつたりと裕姫は、薙刀を捨てて鎧通しを引き抜くや、起しもやらずその上にのしかかつて第二刀、敵の草摺の間から、ふくよかな腹部をグサと刺し通したから

「ウーン」

としなやかな身体を、えびのように反らしてもがき苦しむ。

見事な裕姫の勝利に、志賀勢の間からどつと喜びの声が上る。一方本多方はあつけにとられて、誰も主を助けに走り寄る者もない。

（討った、敵将桂の方を……）

思ったより弱い敵に、やや拍子抜けを感じながらも、一方には限らない喜びに胸をはずませて、もはや抵抗する力もないその女体の上にムンズと馬乗りになると、乱れた黒髪をつかんでグイと仰向かせ、なまめかしい手付きで、鎧通しの鋭い刃先をピタリと抜けるように白い右耳の下の頸筋にあてがい、

「関ヶ原の役における夫小太郎の仇は言わずもがな。その後志賀家に対する卑劣な行為の数々、今こそ思い知りましたか。そなたの首級、裕姫が申し受けまする」

と銀鈴を振るような声で引導を渡す。

「アレー」

まだ息のある園江は、冷い刃の感触に哀れにも悲鳴を上げて、細い首すじを左右にうねらす。しかし裕姫は今は躊躇せず、鎧通しの刃先を突き立てるようにその首すじの中程に斬り入れる。

「きえっ！」

生きながら首を斬られる苦痛に絶叫を上げつつ、胴も千断れんばかりに身をよじつてもがく影武者園江。しかしそれも束の間、纖手一閃、鮮やかな裕姫の刀捌きに、その細首は草の茎よりなおもろく、水もたまらず掻き落されて、流れ出る血汐の中に、力の抜けた園江のから紅の胴体はぐんなりと横たわった。

「取った。仇、桂の方の首級を」

本懐を遂げたうれしさに、スックと立ち上った裕姫は、味方の歓喜の声に答えるかのように、高く高く、美女の生首をふりかざすのであった。

(四)

喜びが大きかっただけに、身代りの首と分った時の失望落胆はあまりにもみじめであった。贗首と聞かされた時には、さしもとやかな裕姫も柳眉を逆立て、

「卑怯者！」

と一喝して手にしていたその首を大地に投げつけた程。しかしハッと我に返ると、自分の行為を愧じ、一旦コロコロとまりの如く転った園江の首を拾い上げ、丁重に傍らの岩の上に置き、

「憎い女ながら敵にとっては忠義の身代り、見上げた最期と思いまする」

と両手を合せた。四条畷の小楠公と好一對の美しい行為だが、姫はしばしその面に眺めいつて

「どうやら、そなたの働きのため、妾の運命もきわまったようじゃ」

と細っそりとした両の肩を落した。

その言葉通り、園江が討たれている間に九死に一生を得た桂の方は、やっと駆けつけた右翼の吉田千右エ門の勢に救出され、新手の吉田勢はジワジワと残り少い志賀方をおしつみつつかつたのである。

「姫様、も早御運もこれまで。御生害遊ばしませ。わたくし共その間を防いで、後からお供つかまつりまする」

そう言うて姫の前に身を投げ出したのは、姫の最も愛する侍女初瀬。女ながらよく此所までついて来たのだが、かなりの手傷を負っ

たと見えて、半身はベツトリと血にそまり、

氣息竜々の態。姫がふり返ってみると、なお十数人の男女がつき従っていたが、手傷と疲れのために、いずれもほとんど立つことも出来ぬ有様。しかし不思議なことに当の裕姫のみは、全くといってよい程手傷を受けていないのである。姫は一瞬目を瞑ったが、またキツと敵の方を見やって、

「初瀬、許してたもれ。妾は息のある限り戦つて、桂の方と刺し違える覚悟。まだ半刻やそこらは戦えるつもり。敵の主力はまだ戻らぬところを見ると城中の味方も戦っているのです。妾は最後まで望みを捨てぬ」

すさまじい程のその斗志に、従者達はさらに奮い立った。初瀬も嬉しげに、主の顔を打ち仰いで、

「姫様らしい雄々しいお言葉。行つて本懐を遂げられませ。なれどわたくしは最早お供叶いませぬ。ここでお先に果てまする」

「姉上様、わたくしも」

彼方から、そう呼んだのは妹の春瀬。

「おう、そなた一緒に死んでたもるか。さらば差し違えて——」

姫はじめ囲りの者が止めようもなかった。同じく重傷の妹の春瀬と相寄ると、互いに咽

喉を差し違え、重り合つて最期を遂げた。

「妾もすぐにまいる故、そなた達も三途の河原とやらで待っていてたもれ」

姉妹の屍に合掌し終ると、裕姫は再び薙刀を小脇にかいこんで、十二人の部下と共に吉田勢の中に割って入った。

「フーム、恐るべきお転婆姫——」

やっと落ち着きをとり戻した桂の方は、何時もの不敵な態度に返っていたが、あくなき裕姫の突撃には、さすがに呆れ顔であった。

自慢の小桜緋の鎧は、首をとられた園江がつけていて、腹巻だけの姿であったが、何ともみっともないので陣羽織を掛けていた。

「まあよい、今は彼女も疲れ果てていよう。

先程は不意を打たれてあわてたが、今度こそこの手でそっ首刎ねてくれよう」

と大刀を執り、女兵に集合を命じた。しかし侍女達はなおも危なかしがって、

「裕姫は稀代の魔女にござります。軽々しく一騎討ちをなされてはなりません。万一のことがあれば、それこそ彼の女に名を成さしめるだけ。わたくしどもがしかと討ちとめてから、奥方様のお手で首をお挙げなされば、お方様が討たれたも同じこと」

と前に進ませない。

一方、裕姫も今は悪戦苦斗であった。多勢

に無勢、それも桁が違う。吉田勢を突き破つて、桂の方の女軍に近附くことは到底不可能に見えた。薙刀は使えなくなり、止むなく部下の斃れた者の刀を執って戦った。手傷か返り血か、美しい衣裳も朱に染み、雪の膚にも幾筋かの赤い血の線が流れていた。それでも心気は衰えを見せず、

「妾の相手と望むは桂の方のみ。邪魔せずに退きや」

涼しい声を張り上げつつ、前に立ち塞る者を斬りつ、払いつ、前へ前へと進む。しかし次々と部下が斃れると、敵は後ろからも迫った。そして遂に重傷を見舞われたのか、ガクリと膝を折って草中にうずくまった。

「それっ！」

と見て、桂の方の麾下の女兵がバラバラと走り寄る。吉田勢に姫を討たせず、息の根は自分達の手でとめようと言うのである。吉田勢もそれは心得て、退いて遠捲きに見守る。

「裕姫お覚悟！」

刀を杖に立ち上ろうとする姫の姿目がけて真先立った女兵の一人が拝み打ちに真向から斬りつけた。しかし立ち上りながらわずかに体をひねりつつ、横に払った姫の刀の方が早

かった。

「ウツ、ムムツ——」

鮮かに脾腹を割られたその女兵は、苦鳴と共に前のめりに草の中に倒れ込んだ。

「えいっ——」

あわてて他の一人が、姫の背を狙って槍を送ったが、これも見事にかわされて、千段巻を掴まれ、引こうとする所を、放しながら入れた姫の突きに、胸元を刺されて、これは声もなく後ろにのけ反る。もう動けまいと思つた裕姫の鬼神のような働きに、女兵達は思わず後退りする。

「桂の方、出会えや。尋常に勝負！」

腰と腿に傷ついてよろめく足を大刀で支えながら呼ばれる。その悲壮な姿に、桂の方も侍女達も固唾をのんで声が出ない。

黒髪はバツサリ顔を掩って柳の肩まで乱れかかり、帯がずり落ちて胸元も少しはだけ、裳裾も割れたしどけない姿がかえってなまめかしい。

「えーい、折重って討ちとれ！」

年嵩の女兵の下知に、一斉に白刃が姫の四方から迫る。華奢なその身体がクルッと一廻転して、バツタリ草に倒れたが、

「アーッ」「ムーッ」

命を落したのは本多方の二人の女戦士。

「おのれっ！」

先に下知した年嵩の女が倒れた姫へ、大上段で迫ったが、倒れながら青眼に構えた姫の刀の切尖が無気味にふるえているのを見ると、釘づけになったまま振り下せない。と見て他の一人が横合から斬り込む。姫の体が地上を一転したと思うと、相手の刀が宙に飛んだ。しかし今度はその小柄な女兵は、捨身に、刀を失った両手で姫の弱腰にしがみついたのである。

「あっ！」

振り払おうとしたが遅かった。年嵩の女が斬り込む刀、それを受けて突き放すその際！小柄な女兵は、矢庭に懐剣を引き抜いて、姫の牌腹を一突き。

「あっ、ああー」

烈しい衝撃に、姫の右手からポロリと大刀が落ちた。しかし、そこは神女裕姫、重傷に屈せず、女兵の懐剣を捻らせず、その手をとって、逆にすかすようにおのれの膝元に投げ落した。そして抜く手も見せず引き抜いた懐剣で、小柄な女兵をもろに刺し貫いた。

「ウーン」

急所を刺されたのか、その女兵は功名も酬

われぬまま、両手を投げ出して姫の膝下に息絶えた。しかし姫も崩れるようにその上に打ち伏す。相打ち、姫も遂にこと切れたのか？（フーツ）

（五）

瞬、一瞬、裕姫は動かない。ああ、あの正義のためには勃然と燃えさかった熱血の女体も遂に冷え切ってしまったのであろうか。

桂の方は、その時はじめてツカツカと近寄って、それでもなお用心深く刀を構えながら「如何に裕姫、さしものそなたも力尽きたと見ゆるのう。そのような無惨な姿になったのも、徳川に楯ついた罰じゃ。望み通り、そなたの首級、この桂の方が申し受けまする」

言いつつ歩を進めたその途端である。姫の細い身体がピクツと動いて、静かに静かに顔が上り、上体をもたげると、先の女兵の胸を刺した懐剣を引き抜き、それを胸の前に逆手に構えたではないか。桂の方と聞いて、まだ息のあった姫は、最後の余力をふり絞って決戦すべく、立ち上ったのである。

ギクリと桂の方の足がとまり、思わず右手

に刀をふりかぶる。

「あっ、お方様！」

そこは魔女裕姫、この期になっても如何なる秘手を弄するかもしれない。主人の身を氣附かって、女兵達も我を忘れて叫んだのだが――。しかし悲しいかな、裕姫も既に精魂を使い果していた。身体は重傷のために利かず、しかも武器は短い懐剣ひとふり。ただ目指す仇という一念のみで立ち向ったのだから、如何なる秘策の施しようもなかった。

一閃――情容赦なく振り下された桂の方の大刀、よけも交すことも出来ぬ身の、まるで据物斬りさながらに、左の優肩をバツサリ斬り下げられて、

「うーん、無念！」

悲痛な声を残すと、しなやかな体を弓なりに反らせてから、バツタリと裾を乱して仰向けに打ち倒れた。

「お見事！」

はじめて女兵達の間から歓喜と賞讃の聲が上った。

見よ！ 勝負の世界の何という冷酷さ。つい先刻までは容色無双、剣をかざす天女として徳川勢を戦慄させた神女裕姫も、今や戦敗れ、怨み重る敵の女将の手にかかってあえな

い最期、その白玉五尺三寸もあろう麗身を長々と地上に横たえているではないか。斬った桂の方も、倒れた敵姫のあまりにも美しい肢体に、血したたる大刀を右手に提げたまま、しばし呆然と見入るのであった。

三十二相を具えていると讃えられたその美顔は、バツサリと黒髪に掩われたまま横にかしいでいるので定かではないが、後れ毛を噛みしめた朱唇に無念の表情がのぞかれて凄艶味を発し、同じく房々とした黒髪を背景に、天下の絶品といわれた鶴のように白く、細く長い首筋が、クッキリと形の良い線をなし、さらにふっくらと盛り上った乳房から、キュッとくびれた胴につづく、丸味をおびた腰から臀部まで流れるような曲線を描いている。

思い切って伸びた下肢は、乱れた裳裾からあらわになった両の脚は開いていたが、大字に投げ出されたのではなく、少し立った両膝は固く合わさっているさまが、いかにも姫らしく、しかもなまめかしかった。武術で鍛えたためもあって、全体によくしまっているとともに、またふっくらと柔らかい肉感は、あたかも処女の清純さと人妻の豊艶さを併せもっている女性としての、絶頂期の美しさであったからであろう。

「……美しい……」

思わずもらした自分の声に、ハッと我に返った桂の方は、今度はその美に対する年増女特有の嫉妬の念がむらむらと湧いてくるのを覚えた。そして美しい花を無惨にむしりとりたような邪念に駆られて、ツーツーと近くまで歩み寄る。

虫の息ではあろうが、まだ完全に息がきれたのではないことは、少しく前がはだけてムッチリとした豊かな胸のあたりが静かに上下し、虚空をつかんだ左手のしなやかな指先が地上の草を搔いているのでも分った。

桂の方の目は今や、裕姫の雪のうなじにキリリと注がれた。

（このうなじを断ち切って、身首二つにしなければ、まだほんとうの勝ではないのだ！）

大刀を捨ててムンズとその柔らかい美女の上に馬乗りになった桂の方は、まず左手の指先を、細く尖っている顎先にそえて正面を向かせ、右手が顔を掩っている乱れ髪をかき上げた。瓜実型の玉のような面に、目鼻立の涼しい絶世の美貌がそこにあらわになる。さらに両の衿を肩先までおし開いてから、腰の短刀をキラリと右手に抜き放った。そして左手で艶やかな黒髪をとって後に引くと、その伸

びた首筋のつけ根に近く、短刀の刃先をピタリと当て、押し殺したような低い声で、
「やよ、賊將志賀裕姫。徳川に楯ついて、世を騒がせ、その上に本多家に恥をかかせたむくい、思い知ったであろう。天下への見せしめ、そなたの細首、桂の方が貰い上げまする」

と——その声が心魂に届いたのか、裕姫は一旦うしろに引かれた顔をもたげ、それまで糸の如く閉じていた両眼をカッと見開いて、ハタと桂の方の面を睨んだのである。

「あっ！」

断末魔の人のそれとも思えぬ涼しい眼差で真面に射られて、思わず刀で刺されたような衝撃を受けたのは、桂の方に自ら愧じる後ろめたさがあったからであろう。

そして何か言おうと、裕姫の花唇が動きかけるのを見ると、桂の方はあっとあわてて力まかせに左手で姫の顔を仰向かせ、夢中で右手の懐剣の刃先を、嫋やかな頸部の皮肉にグサと切り入れた。そして右へ引こうとしたが、姫に臨終の言葉を言わせまいとする焦燥と、おのれの卑劣さを恥じる恐怖から、刀持つ手がぶるぶる震えては、うまく切ることが出来ない。皮肉はジグザグに切り破られて、

あわれ、裕姫は鋸の刃で首を引かれる思い。

「キエッー、ククッ」

姫とても生きながら首を搔かれる苦痛は堪えられない。華奢な女体を海藻のように左右に揺らせながら七転八倒する。うっかりすると刎ねとばされそうなその死力に、ますます桂の方の心は動揺する。その足搔く体をおさえつけつつ、首を取るのには容易ではない。

(とどめを刺してから、首を刎ねればよかった。このあえかな姫の何所にそんな生命力があるのか——)

後悔してみたが後の祭り。刃は姫の頸の皮肉に喰い込んで抜くことも出来ない。戦場で男武者の首を搔いたこともある桂の方が、この女の細い首を半分も斬らないうちに全身汗びっしょりになってしまったのである。それが憎い仇に首を取られまいとする裕姫の執念とも思えて、彼女はおそろしかったのである。事実、無念さの為か、苦痛のためか、ここまで斬られても、姫はなお花顔を左右にふるのをやめない。その度にその重味に堪えかねる如く、長いくびすじが、ゆらゆらとうねるなまめかしさ。

(えーい、こんなことでは——)

家来監視の中とて、逆上した桂の方は、左

手を今度は姫の滑らかな顎の下にかけておし上げ、右手の持ち方を変え、刀を横にねかせて、渾身の力をこめて押し切るようにした。

ガッ！ 頸骨の折れる音がして、一緒に切られた頸動脈から、プツと血潮がふきとび、同時にそれまで蠢いていた胴体が、ブルンとひとつ大きくゆれたと思うと、次第に四肢を萎えさせて、やがてぐったりと静かになった。

すると首に加えた刀の方も、その後は嘘のように軽く動いて、スーッと柔らかな皮肉を斬抜けてゆき、そのままフツツと後れ毛のまつろいついている最後の一片まで断ち切ったから、あわれ、玉のような裕姫の首は、胴から離れて長い長い黒髪をつけたまま、ゴロリと草叢に転ったのである。

「フー」

極度の緊張感から解放された桂の方は、大きく肩で息をつき、額の汗をおしぬぐいながら、しばしは茫然となってしまう。

(首を斬らせるまでこんなに手古摺らすとは、ほんに執念深い女。しかし、たしかに首を落したのだから、もう怖れることはない)

彼女はなお馬乗りの姿勢のまま、黒髪を掴んで裕姫の生首を引き寄せると、血したたる懐剣を口にくわえ、右手をくびれの深いす

べすべした顎の下へさし入れて、さも重たげに抱え上げた。それでもなお、桂の方はその死顔を見るのがおそろしくもあった。苦痛の表情か、無念の形相か、とにかくにも、首をとられる寸前に、おのれの顔を睨んだ眼差が忘れられない。あるいはこのような烈女は、首になっても相手の咽喉首をかみ破るかもしれない。

(何の、たかが死首——)

おそろおそろ斜に構えて、横目に面を眺めてみたが、眼も閉じられ、意外に安らかな表情なのにやっと安心して、今度は正面からしげしげと見入る。やはり覚悟の討死であったからでもある。キュッと結ばれた唇が後れ毛を噛みしめているところに、ちよっぴり無念の表情をあらわしているが、苦痛の影は和らぎ、むしろ天女が眠っているような気品とあどけなさがあった。

(天の成せるというか、ほんに首になっても美しい——)

羨望のあぐく、桂の方の右手の指先が、知らず、裕姫の首級のみずみずしい唇にふれ、滑らかな頬から顎の下へとまさぐってゆく。幾分ぬくみの残った冷やかな皮膚の感触が快い。そして何よりもあのつぶらな澄んだ瞳が

長いまつ毛の下に固く閉じられているのが、自ら敗北を認めたものの悲哀を漂わせて、桂の方の勝利感を満足させたのである。

（おとなしくして居れば、そなたの容色はますます輝きをましたであろうに、なまじ正義の信義のとふりまわす故に、あたら花の身を二つにせねばならないのじゃ。姫様剣法のなれの果て、思い知ったであろう）

と敵姫の首をはずかしめて溜飲を下げ、（これで家康公への申しわけもたつ。夫と妾の首もつながったし、美智姫、園江はじめ、裕姫の手にかかった者達も成仏してくれよう）

と安堵の胸を、なでおろすのであった。

天上何ぞ無情、不信の悪人達に抗して奮斗を続けて来た名花裕姫も、悲願空しく賊手に斃れ、盛りを待たで十七才を一期に戦場に散ったばかりか、天下無双と謳われたその美首を仇桂の方の手に授けてしまったのである。「皆の者、喜べ。賊將志賀裕姫の首、この通り桂の方が討ちとりましたぞ」

桂の方は血に染んだ裕姫の生首を高々と掲げて、得々と女軍や吉田勢に見せてまわる。

まことに勝てば官軍。つい先刻、裕姫の強襲にあわてふためいて逃げ廻った人とはとても思われない。惨酷な顔首図絵も、勝利者の側

から見れば、華やかな武者振りに違いない。

寄手の男女は、改めて桂の方の武勇を祝福するのであった。

槍先に懸けられた女主人の死首を見せられ、では、生き残っていた裕姫の従者達も、今は事終れりと、悉く刃に伏して倒れた。それまで健気に徳川方の主力を支えていた志賀の軍兵達も、「裕姫討死」と聞いては、怒るより落胆が大きく、俄かに総崩れとなった。

桂の方は裕姫の首級を槍先に掲げたばかりでなく、むくろの両足首を結んだ縄をおのれの乗馬のしっぽに結びつけ、その馬を疾駆させて、首のない裕姫の胴体も地上をひきずり廻したのである。

しかし、この残虐な行為は、まだ姫の替玉として櫓にあった侍女白妙以下、城内の男女を憤激せしめた。首級の方は遠目にはしかと分らないのであるが、あでやかな紫地の衣裳につつまれた白玉の肢体は疑うべくもなく、「姫様の亡骸だけでも、とり返せ」

「桂の方を八裂きにして、姫の御無念をはらそうぞ！」

と一団となって突出し、桂の方に襲いかかった。彼女がまたも危機に曝された。志賀兵は遂に馬の縄を断ち切り、一旦姫のむく

ろを取り返したが、多勢に無勢、本多勢に取り囲まれて全滅した。その多くは姫の亡骸に折り重って倒れた。

とにかく、こうして長浜の城は落ちた。

幾度か冷汗をかかされた桂の方は、にくしみのあまり、見せしめと称して、裕姫の衣裳を剥ぎ、胴体を長浜の城下で逆さ磔刑にかけたが、首を失っても尚、均斉のとれたその美しい肢体は、見る人の目に焼きつき、かえって艶名を高めたという。

首級の方は、家康の許に送られて首実検を受けた。綺麗に化粧された死首は、生前の凛々しかった面影よりもなまめかしく、好色の家康を喜ばし、しばらくは手許から離そうとしなかったが、やがて京の鴨の河原に曝され日本一の美女の生首を見ようとする群集はひきもやらず、中には弁当持ちでひねもす見物する連中もあらわれた。

一方、姫達が壺に収めて土中に埋めた血判書は、間もなく何者かに持ち去られ、その内容がやがて京一帯に喧伝され、本多家の醜行はたちまち明るみに出た。桂の方も家康の不興を蒙り、長く不遇のままに終わったと伝えられる。

—— す い ち ゅ う か ——

陰 影



予備校の講義はまだ終っていないが、教授が黒板を振り返って生徒に背を向けたとき、牧二郎は机の谷間を這った。大講堂でのワイアレス・マイクを使つての講義だけに、二人や三人途中でエスケープをしたってわからない。二郎は徹夜までして名物講義の席を取る様な熱狂的な受験生ではない。

水 中 花

芳 野 眉 美

明け方、寿美麗夫人に襲われて二郎は睡眠を破られた。朝の早い鬼頭老人が起きる時間でもあった。二郎が訝ると、主人はとうに眼をさましているわ、と寿美麗夫人は答えた。

「だから、ちょっとよ」

寿美麗夫人が寢室を出たとき、老人は別に何も言わなかったらしい。夫人がトイレに立ったものだとばかり思っていたのだろう。その「ちょっと」が三十分ばかりになった。寿美麗夫人は、じわじわと身体を二郎にあずけてきた。二郎は寿美麗夫人の全身に荒縄の跡が残っているのに、はっとした。

寝不足も手伝って、二郎は講義に出席していてもねむくて仕方がない。始めからうしろ

の席に坐っていたのも、半分、寝たい為でもあった。うつらうつらしていると、講堂の窓に貝塚絵馬の顔があった。二郎は受験勉強を放棄した。

廊下の壁に張ってある「毎回、試験の結果を発表し、優秀者氏名の掲示を行つて表彰し、各人の奮起を促す」というちらしと、ずらりと並んだ百点満点の答案用紙を横目で見ながら、二郎は絵馬と腕を組んで予備校を飛び出した。大学なんて勝手に勝手にやがれ。絵馬と奮起していたほうが、よほど青春らしい。

予備校の近くの菱形のトレリスのある喫茶店で着代えてきたのだろう。絵馬は袖の無い

ハイネックの丸首シャツに、膝上二十糎というミニスカートであった。長い髪を束ねて、左に何気なく、さらりと流しているのも美しい。

「ねむたそうね」

「ああ」

「寿美麗夫人が、ねさせないでしょう」

「違うよ」

絵馬は、はっきりしたことをいう。二郎は、あわてて打ち消した。

「徹夜で英語の問題にとっくんだったんだ」

「うそ」

「うそなもんか」

「もんかじゃないわ。顔が赤くなったわ。いやらしい」

二郎が絵馬を銀杏の大本の陰にかくした。歩道は違うが、寿美麗夫人が駅から歩いてくる。絵馬が、げんなり顔をした。

「どうかしたの」

二郎は答えない。深い草色の、平絹に波を染め出した古典的な江戸小紋のその婦人が、寿美麗夫人だと絵馬は気がついたらしい。絵馬の瞳が光った。寿美麗夫人に会うのは、はじめてであった。どこに行くのだろう。だまって寿美麗夫人の背中に視線を送っていた絵

馬が、

「つけてみましょうよ」

小声で二郎をけしかけた。二時頃である。

予備校の前で寿美麗夫人は、ちらっと二階の教室の窓を見た様であった。二郎を意識したのかもしれない。五分ほど歩いて、銀杏並木に添ったホテルに何んのためらいもなく入った。慣れている。今度は絵馬が棒立ちになった。異母兄の中雄一郎が、絵馬を呼び出したホテルであった。それも誰かと逢っていたあとで。

「いこう」

二郎は不機嫌な声で絵馬にいった。

「待って」

絵馬は二郎の腕をつかむと、呆氣にとられて二階を引っ張って、そのホテルに入った。絵馬は女中にチップをわたして、寿美麗夫人の隣りの部屋をとったのである。

ダブル・ベッドだけの小さな洋室は、昼下がりの光線の中では、人間の欲望を剥出しにしているようで妙に白々しい。ベッドに坐った二郎は、なんとなくゆううつそうな顔で、ドアに密着して廊下の気配をうかがっている絵馬を見つめていた。

寿美麗夫人の行動を探ろうとする絵馬の気

持がわからない。寿美麗夫人に男がいたというショックで、絵馬のいいなりにホテルに入ってしまったのだろうが、二郎は急に逃げ出したくなった。面白くない。

「帰るよ」

ベッドから立ち上り、背中を見せている絵馬にいった。

「他人の秘密をさぐるなんて、いやだな」

「だまって」

階段を上るらしい足音がして、いらしてしますよ、という女中の声が聞えた。部屋の前を通ったとき、絵馬がドアを少し開けた。男の背中を見たらしい。

絵馬がドアを閉め、かぎをかけた。二郎を振り返り、

「絵馬を、このままにして帰るつもり」

ハイネックの丸首シャツを脱いで叫んだ。

「カーテンを閉めて」

あまりにもそっけない、感情を押し殺した事務的な声に、二郎は呆然として絵馬を見守った。ミニスカートが床に落ちた。

「ぼやっと立っていないで、絵馬を抱いてブラジャーを外すぐらいの勇氣はないの」

可愛い花模様の半カップのブラジャーと、ビキニのショーツの絵馬は、二郎を思いのま

まに翻弄する。

「早く脱ぎなさい」

絵馬は、さっさとブラジャーとショーツを取ってベッドに横たわった。

国電M駅に近い、森と大理石で囲まれた円型のGプールの芝生で、たんねんに焼いた絵馬の肌は、ビキニのあとだけが白くくつきと浮き上り、妙に生々しく二郎を刺激した。

丸首シャツで強調されていた胸は、ブラジャーを取り去って、すでに成熟したふくらみを見せていた。固い蕾だった乳房はすでにやわらかく開花していたのである。小山の頂点の一つは奥深く埋没し、一つは鋭利なナイフの刃の様に突起していた。

意外に分厚い腰部から、息苦しいほどにのびやかな太腿に流れる曲線は、小麦色に焼けた肌と白い地肌の美しいコントラストを得て、二郎がしばらく見惚れてしまったほど素晴らしかった。

が、ベッドに横たわった絵馬は、一方的に二郎を翻弄しているものの、思いがけない内心の羞恥を必死にこらえているのを、経験の浅い若い二郎は気がつかなかった。絵馬は奔放な言葉とうらはらに全身を染め、四肢は、かすかにふるえていたのである。

二郎はダイビングのようにとび上った。従うことのみに過してきた二郎にとっては、はじめての男らしい荒々しさであった。隣室に寿美麗夫人が見知らぬ男と二人きりでいるという意外な事件が、二郎を突然、狂暴にさせたのかもしれない。

絵馬は眼を天井に向けたまま、じっとしていた。堤麻耶のクラブでのハプニングのときの絵馬とは違っていた。あのときは、二郎の気持などは完全に無視して、勝手気ままに二郎を自由にした。その凄まじさに二郎は圧倒され、無抵抗のまま絵馬に翻弄された。絵馬は二郎に滝を浴びせるという大胆なこともやっていたのである。

すすり泣きが洩れ、二郎の胸は絵馬の涙で濡れた。幼児を泣かせたような困ったような戸惑いが二郎を襲った。

と、不意に絵馬が二郎を押しつけて、ベッドから下りた。窓辺に立ち、カーテンを開けて陽の光を浴びると、二郎に背を向けたまま「タバコとビールを注文して」

強い声で二郎に命じた。

冷えたビールが火照った身体をひやす。絵馬はリリに電話した。トレリスのある喫茶店で待ち合わせていたらしい。十分ほどして、

腰までたれた長い金髪のかつらをなびかせたサングラスのリリが勢よく飛び込んできた。光線によっては、薄いミニドレスがすけて、みるみる丸みを帯てきた豊かな肉体の線がすみずみまで露呈されるようだった。リリは下着をつけないことが多いのである。脱ぐのが面倒らしかった。

二郎をリリにまかせると、タオルを胸に巻いて、お風呂にはいつてくるわ、と絵馬は部屋を出ていった。廊下ですれ違った客はさぞびっくりしたことだろう。涙を見せたウェットな絵馬は姿を消し、大胆な行動的な、いつもの絵馬にもどっていた。

金髪のリリが、当然のようにミニドレスをかなぐり捨てた。

欄 干

カーテンを閉めた薄暗い部屋で、寿美麗夫人はぼんやり椅子に坐っていた。生花の稽古で家を出たときは、別に、中雄一郎と会うつもりはなかった。駅を下りて師匠宅に歩いていくうちに、今朝の二郎との意外なひとときを思い出して、不意に雄一郎の声をききたくなった。眼についた電話ボックスに入り、雄一郎の会社に電話した。

「お待ちしていたのですよ、電話を」

はずんだ明かるい声をきくと、

「お会いしたいの」

声を聞くだけで満足するはずだったのが、

そういつてしまい、あわてて電話を切った。

自分の心がよくわからない。

昨日一日、鬼頭老人は少ししつこかった。

二郎とのかんじを感づかれてしまったのかもしれないと思つたほど、老人の顔は嫉妬をむきだしにしていた。中雄一郎とのかんじはわかるまい。

昨日の朝のことである。久し振りに一人でやすんだ老人の夜具をかたづけ、離れの掃除をしていた寿美麗夫人を、老人が渡り廊下と呼んだ。老人は庭を見ている。

白砂の州を二郎が箒でならしていた。老人の意のままに、ただ一直線に箒目をつけていく。二郎の仕事は丁寧である。こせこせしたところはない。ゆったりと二郎の素足は敷砂を踏みしめる。京都の白川の白砂は、自然園の森のあざやかな緑に囲まれて、ひととき美しく浮かびあがる。

寿美麗夫人は廊下に膝まずいて、欄干に片手を置いた。自然な仕草だったが、いつもは老いぼれて枯木のように精彩の無い老人の顔

が、悪尉の面のように恐ろしげな表情に変わった。腰を浮かせる、と老人は呻るような声でいった。

「えっ」

「腰を浮かすのだ」

「――」

「欄干に両手をつけろ。身体を支えるのだ」

白砂をならしている二郎が離れの廊下に近づくと、欄干にもたれている二人に伏眼がちに軽く朝の挨拶をし、くると背を向けて、白砂に箒目をつける作業を続けていく。

老人が寿美麗夫人の着物の裾に手を伸す。

「あっ」

「二郎からは見えんよ」

「いけない」

「静かにしろ」

押し殺したような老人の声がかぶさり、突然、白い割烹着の下に異変を覚えた。やめて、という声を寿美麗夫人は飲み込んだ。二郎の肩が不自然に動き、箒が止まったからであつた。老人は二郎の背中を射るようにならみつけている。二郎は足許の落葉をひろうと、静かに箒を動かして遠のいた。

深い嘆息が寿美麗夫人の唇から洩れ、その瞬間、意志とは反対になくなくと廊下にくず

れ落ちた。寿美麗夫人は割烹着の袖をかみ、声を殺した。無法な老人の動作にさからうどころか、かえって無意識の裡にねっとり、からみつくように容認してしまう、女の性が哀しくもあつた。

「許して」

寿美麗夫人は誰にともなく、心でいった。

老人の顔は白式尉の翁の面の如く柔和に、黒式尉の面のように飄逸に、めまぐるしく変化し、またもとの悪尉の能面にもどつた。老人にもまだまだ青年に劣らない一時があるのである。

欄干をひしと握りしめる寿美麗夫人を老人が責めるのは、老人が秘蔵している浮世絵の一枚に似た光景があつたのである。

鈴木春信だか、磯田湖竜斎だか、作者はよくわからないが、高輪か洲崎の海に見える街の雪景色を背景に楼上で戯れている男女を描いたものであり、欄干にもたれて雪景色に見とれている女の着物の裾をめぐっている錦絵であつた。

ふつくとした頬の感傷的な美人画は、時と場所を選ばず、生の欲びを誼いあげる男女の美しさを、気高く甘美に見せてくれる。老人の頭の中にこの絵があつたのかもしれない

った。ただ雪景色と違うのは、眼の前に庭を掃除する二郎がいるということである。

老人がはなれたとき、寿美麗夫人は廊下に坐ったまま欄干に顔を伏せていた。いつのまにか二郎の姿は庭から消えていた。

午後になって二郎が予備校に行き、水石を観にいくのを中止した老人は寿美麗夫人の居間を訪れた。日中はむし暑く、風通しのいい寿美麗夫人の居間は過ごしやすい。廊下のガラス戸も部屋の障子も開け放れて自然口の森と扇形の池を通して、涼しい風が入ってくる。

老人は居間に入るなり、寿美麗夫人に着物を脱ぐように命じたのである。老人の手に荒縄が握られていた。自然口の裏手の土塁に迷い込めば、寿美麗夫人の部屋は覗かれる。その危険がないわけでもなかった。

老人は二郎が帰宅するまで、寿美麗夫人を使って、種々な緊縛を試みたのである。後手縛り首縄とか、後手足首連繫、亀甲、胡坐縛り、片足吊り、そして海老責めが終ったとき老人も寿美麗夫人もへとへとになって、脂汗さえ浮かべていた。

老人は寿美麗夫人のあられもない姿態をカメラに収めている。すべてカラーであった。

責めのアルバムをつくるつもりなのだろう。

その夜、寿美麗夫人は股間縛りのまま布団に放置された。

明け方、荒縄を解いてもらい、トイレに立った寿美麗夫人は、ふと足を止めた。足音を忍ばせて二郎の部屋に近づいた。急に二郎が恋しくなったのである。厳しい縛りの荒縄が急に解き放された反動的な虚無感のせいかもしれないなかった。

緊縛の遊戯を老人が尚も求めるかもしれないとも思った。老人は荒縄の対象を待っているかもしれない。求めてもかまわない。ただその前に、二郎の若々しさに接したくなかった。不思議な心理であった。

寿美麗夫人は二郎の枕元に立ち、しばらくの間は、二郎のやすらかな寝顔を見つめていた。老人の老醜に満ちた寝顔を見たくない反動かもしれない。二郎と雄一郎を知ってから、老人の存在がなんとなく、うるさく厭うようになったのも事実であった。しかし、妻であればその存在を拒否するわけにはいかない。

寿美麗夫人は二郎の横にそっと身体をすべり込ませた。二郎は、はっとして眼をさました。何もいわなかった。黙って寿美麗夫人

の肌に焼きついた荒縄の跡をみつめていた。

寿美麗夫人は長襦袢の裾をひるがえすと、二郎の顔をまたいだ。トイレの前で思いついたことをしてみたくなったのである。

老人はスイレンの茎をカテーテルの代用にした。全身緊縛のまま寝かせて明け方、尿意を訴えると、飲んで舌なめずりし、強引にいやがる寿美麗夫人の便器になろうとする。そんな寿美麗夫人が今、自分の意志で二郎を老人に置きかえてみたいと思ったのである。

二郎の顔を見下しながら、

「二郎の口に……」

と寿美麗夫人は、あきれるほどぶしつけな言葉でいった。

「わたくしが好きなら、受けられるわね」

「――」

ハブニングに誘われて絵馬から浴びせられたときと同じ様に、二郎は亦なんのためらいもなく自然に受け入れようとしていた。二郎は、まるで夢遊病者のように寿美麗夫人が命じるままになっていた。

「よくて」

二郎の眼の前が暗くなった。

寿美麗夫人が居間に戻ったとき、おそかつたな、と、ものうげな声で老人はいった。

「顔に坐れ。もう一度、ふき直してやろう」

「きたないわ」

「きたないことがあるものか」

「親切ね」

ほがらかな声で答えると、寿美麗夫人は長襦袢のまま老人の枕元に廻った。老人の鼻口をふさいで悶絶させたら面白いだろうと思っ

た。危険な考えであった。

寿美麗夫人が老人から解放されたのは、生花の稽古にいく寸前であった。

ホテルの部屋のドアが開いて、中雄一郎が姿を見せた。仕事の途中をぬけだすのだから約束の時刻に間に合うのはめずらしい。

雄一郎はうしろからやさしく肩を揺くと、

寿美麗夫人の美しいうなじに軽く唇をつけた。なんともいえない深い嘆息が、寿美麗夫人のわずかに開かれた唇から洩れた。

激しい接吻のあと、寿美麗夫人は、ひっそりとベッドに横たわっていた。

床に坐った雄一郎は、寿美麗夫人のすんな

りとのびやかな素脚に眼を据えて動かない。

型の良い小さな足、削いだように細くなった足首、やわらかくふくらしたふくらはぎ、か細く繊細な下肢は、急に別人のように肉づきが豊かになって雄一郎を悩ませる。

ねっとりとした艶のある暖かそうな肌の色は、あるいはアイボリーに、あるいははぬけるほど白く、あるいは青ざめているようだった。

不意に部屋のドアが開き、雄一郎は反射的に飛びのいた。夏の洋掛けがすばやく寿美麗夫人をかくした。

「お兄さま」

タオルを胸に巻いた絵馬であった。

「浴室を借していただけないかしら。絵馬のお部屋にはシャワーもないのよ」

「――」

「おじゃましてごめんなさい。絵馬、このお部屋に浴室が有ること、この間、お兄さまがここに呼んで下さったから知っているの」

呆然と突っ立っている雄一郎にかまわず、

絵馬はドアを開けて叫んだ。

「二郎、リリ。いらっしやい。お兄さまから浴室をお借りしたわ」

寿美麗夫人が雄一郎の腕をつかんだ。

(続く)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



エネマの思い出

吉村 絵梨子

看護婦がかん腸間違え

女子高校生死ぬ

S市、国立N療養所で、石炭酸水をかん腸液と間違えて使ったため、患者が死亡する事故があった。股関節骨髄炎のため入院していたS市、建築業Eさんの二女、M子さん（一五）は午後一時からの手術をうけるため、午前七時半頃、担当のA准看護婦（一九）にかん腸をかけてもらったが、五分後、容体がおかしくなり十一時過ぎ急死した。同療養所の話によると、食塩水を使うべきなのに、間違って三パーセントの石炭酸水一〇〇〇CCを使ったため、石炭酸中毒を招いたという。

旅行の途中、S市に泊り、朝ホテルのベッドで地方紙を広げた途端、四段抜きの記事が目飛び込んで来ました。このような痛ましい事故は滅多にないことですが、関心の深い浣腸のことだけに読み流す訳にはいかず、いろいろ考えているうちに、いつとはなしに私自身の昔の体験の回想にふけりました。

忘れもしない高校三年の春（十七才の時でした）前夜いただいた睡眠剤がよく効いたせいか、ぐっすり寝ていた私はナースのTさんに起されました。二日目前にこの市立病院に入院して、今日手術することになっていたのです。入院する半年ほど前から、お腹の右下の方に時々つるような鈍痛があり、慢性盲腸

炎ということ、かかりつけの内科の先生に

この市立病院の外科を紹介していただいて、手術することになったのでした。市立病院といっても、田舎のことですから、おふとんを持参しての引越みたいな入院でした。ベッドに横になっていると、程なく医長先生の回診があり、少し遅れて受持のS先生が見え、若くて美しい看護婦のTさんに

「生理は、きちんとあるのね」などと尋ねられ、ぽーっとなっている間、医長先生がS先生とお話をなさっていました。ドイツ語を混えてのお話ですから、私にはわかる由もありません。病室での診察はいいねい、お腹の触診も色々姿勢を変えて綿密でしたが終りの頃、医長先生はS先生に

「S君、後で……を忘れないように」

と、おっしゃったようでした。

「それから君ね、腸のレントゲン検査をやってから手術するかどうか決めますよ。バリウムは飲むかね。それとも入れるかね」

と私におっしゃいました。私が、何のことか分かりませんので、ぽかんとしていると、「まあ、若い子だし、とにかく飲んでみて、それからだね」

とおっしゃって、次の患者さんの方へ行かれました。後で看護婦さんに聞いてみたら入れるというのは、バリウム注腸検査のことだと分かりました。医長先生が次の患者さんの

方へ行っている間、S先生は私の側に立ったまま、ベッドの区切りのカーテンを引かれました。看護婦のTさんが戻ってきて、後の方で何か手渡して準備をしているようでしたが、Tさんが

「Yさん、すぐ終わりますから、一寸我慢して下さいね。お腹の診察をしますから、壁の方を向いてごらんなさい」

と私にいい、その通りにしますと

「腰を後へ引いて、お膝を曲げて下さいな」

と話しかけてきたと思ったら、私の下着を膝まで一気に下ろしてしまいました。私が、あわてる間もなく

「口をあーんと開いてお腹の力を抜くのよ。

いいね。一寸気持ち悪いけど、お浣腸の時と同じよ。すぐ済みますよ。ああ、駄目ね、力をいれちゃ」

私は、その時まで浣腸したことがなかったの、思わず反射的に逃げたのです。それから触診や圧診を入念に受けました。その時は夢中でしたがこのS先生には、手術後、化膿してはいけない、ということと二度ほど直腸の触診をされました。確かに慣れてくると痛いという感じもなく、そう気持ち悪いものではないようです。次の日は腎臓の検査があり腕の静脈に注射して二十分ぐらいたってからレントゲンをとりました。この時、お腹のガスを抜くということで、グリセリン浣腸が行

われました。外科の病室は活気があり、手術がうまく行くと、重症で入院して来た患者さんも、どんどん良くなって退院して行きます。また、朝は七時前から、その手術を受ける患者さんの処置が始まります。手術前夜、お薬を飲みますが、お友達の話では、盲腸の手術ならお浣腸なしということでしたのに、看護婦さんの手には、先に太い赤いゴム首がついた大きいイルリガートルが握られているではありませんか。S市のK子さんも、足の手術なのに、やはり早朝イルリガートルで浣腸されたそうです。

その後、あまり具合はよくなりず、二年経ってまた、急に腹痛に襲われた時は、自分一人で市立病院にかけ込みました。この時は腹痛があまり激しかったのでよく覚えていますが直腸触診や高圧浣腸の後も腹痛がおさまらないので、とうとう婦人科の先生が呼ばれて始めて婦人科の検診台の上で診察されました。この時も夢中でしたが、処置のうちで激痛を感じたのは導尿だったようです。私は洗滌液の冷たさを感じながら泣いていました。そして右卵巣の腫れ物ということでした。手術されることになりました。婦人科の診察といっても、まだ未婚なので触診などにはずいぶん気がつかって下さったそうでしたが、今度はバリウム注射しながらレントゲンを何枚も撮られました。バリウムを注入され

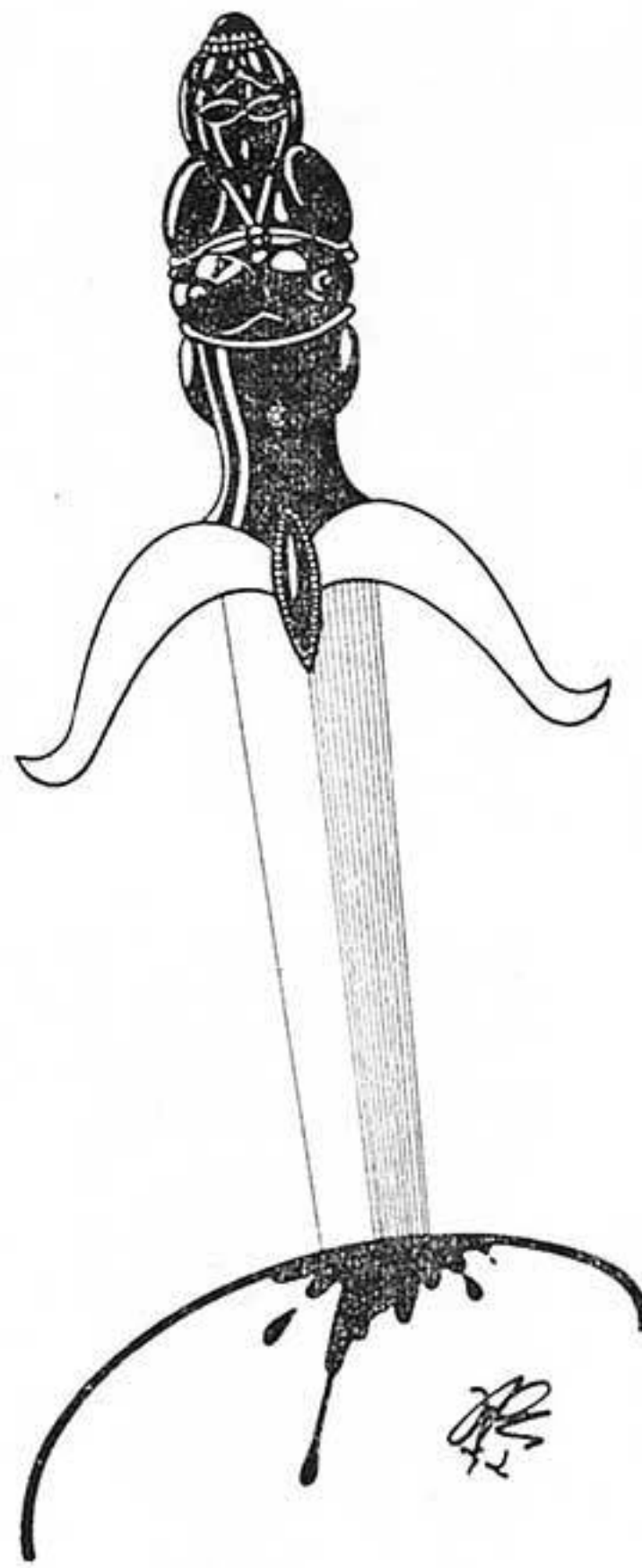
るのはとても辛く（二〇〇〇CC位入れるそうです）もうお腹が破れるのではないかと思いました。幸い手術は前の手術の痕をもう一回切っていただけで済みました。ただ婦人科の手術で嫌なのは、必ず手術前の完全剃毛処置があることと、看護婦さんに伺ったところでは、手術も外科と違って婦人科と同じ姿勢でやり、手術に入る前に未婚者でも普通の触診と導尿をするのだそうです。導尿は手術の後でもされましたが、本当につらい処置で、これに比べるとお浣腸の方がどんなに楽か知れません。その後、ある偶然の機会にK誌の存在を知り、エネマに興味を持つようになりました。そして看護婦のTさんが今勤めている診療所へ遊びに行き、夜の急患の人に先生が見えるまでにしておく必要があるというので、Tさんのお手伝いをしてお浣腸したことがあります。

私は今度Y市に戻ったら、実は見習い看護婦のアルバイトをしてみようかと思っています。その時にはまた、レポートを書くつもりです。それにつけても、エネマファンの皆さんとともに、新聞に載っていたMさんのような痛ましい事故が今後、起きないようお願いしますと共に、自分でも十分気をつけたいものです。

復

讐

(その5)



Ⅱ (ガンペッタ) Ⅱ

千 葉 青 鬼

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

天 狗 面 (続)

不思議なことに、恵利香の怒りは新藤に対してではなく、見知らぬ金髪の女に向けられていた。これほどまでの汚辱を自分に与えた奇妙な異国の女をズタズタに引きさいてやりたい程に憎いと思った。

どんなに責めさいなまれても、新藤と二人

きりの方が遥かにましだったと思う。それだけ、この余計なちん入者は邪魔な存在だった

のである。

のである。しかも、新藤の巧妙なリードによって、恵利香に苦痛をあたえる直接の原因はいつも緋沙絵夫人だったから、今まで抑圧され鬱積されて来た恵利香の憤満が、金髪の緋沙絵夫人に向かって行くということとは、ある意味では自然の成行きだったのかも知れない

たとえその事が恵利香にとって、はかりしれない程長く感じられたとしても、実際はホンの数秒間の出来事でしかなかった。けれども、僅かの間だったとはいえ、汚辱にまみれさせられた恵利香は素早く、その心中に瞋恚の炎を点火したのであった。

気性の勝った恵利香は、怒りをぶつける相手が出来たことを覚ると、若者にのみ見られる無鉄砲さを示した。つまり、固定された頭部を動かさないようにしながら、両足を曲げて、足首を椅子の前端にからませ、力一ぱい踏張って、美事に緋沙絵夫人を椅子ごとひっくり返してしまったからである。

新藤は声を立てて笑った。思う壺に恵利香がはまってくれたからでもあるが、天狗面をふり立てて、苦しみ抜いている緋沙江夫人の姿が、それとは裏腹に、ひどく滑稽なものに見えたからでもあった。

蝶々の標本を思わせるように恵利香の両耳をおさえていた二本の釘が、まだ笑い声を止めていない新藤の手によって引き抜かれるやいなや、極度に興奮した恵利香は忽ちハネ起きて緋沙絵夫人に向って突進した。顔ばかりか、髪や胸乳のあたりまでもおぞましいものがコビリついているので、みるみる緋沙絵夫人の艶かな肌の方も、自らのもので穢がされていった。その上あちこちに、恵利香の歯型があさ黒く浮いて行くのである。緋沙絵夫人の悲鳴は天狗面の下にくぐもって定かでなかったけれども、全身が鳥肌だって硬直したところから、そのショックが如何に激しかったかが、ありありとしていた。

新藤が、引きはなさなかったら、狂ったような恵利香は、天狗面を歯で引きむしって、その下にかくされていた母の顔を見出してしまったかも知れなかった。そうなのは計画が水泡に帰してしまうので、さすがの新藤も一寸あわてたのである。足蹴にされ、床に転がされた恵利香は、起きあがろうとして、ふと新藤の方に視線をうつした瞬間、さっと恐怖に青ざめ、たじたじと後ずさっていった。新藤の手が消防手が持つようなホースのノズルを握りしめていたからである。太いホースで結ばれた消火栓には強い水圧がかけられている。そして、このノズルには噴射する水を太くも細くも出来る調節装置がついていて、太くひろげると人間さえ押し倒すほどの勢いがあつたし、細くしぼって行くと刃物のように鋭い水棒が走った。恵利香は、これまで何度となく、この道具にいじめぬかれている。だから、たちまち怖れおのいたのであつた。

間髪をおかず新藤はバルブを全開した。恵利香は太い鉄棒でぶたれたような気がしたかと思うと、アッというまもなく打ち倒され

る。激しい水流に押されて、壁におしつけられた。激痛から少しでも逃れようとして、キリキリ舞いをして逃げようとしても、蛇口は執拗にどこまでも追いかける。遂に部屋の一隅に追いつめられてしまった恵利香は、棒立ちになったまま、まともに水撃を顔に受けてしまった。水圧と水しぶきで息もつけない。思わずくらくらとして、そのままうずくまってしまうのに、ところかまわず鞭のような水が襲ってきた。

水量も大きい。床に落ちた水は溜々と、恵利香の倒れたあたりにある排水口に突進した。床をよごしていたものも、それと共に次第に洗い流されて行った。室内に充滿していた臭気もなくなった。それは、あたかも、この部屋全体が巨大な水洗便器と化したような状態だったのである。渦巻く水流の中で、水勢に押されて、のたうちまわっている二人も肌にこびりついていたものの残渣を知らない間に洗い落されていたのであつた。

暫くして、新藤が水栓を閉じたころは、二人共、殆んど溺れてしまひそうだった。やっと、自由に息ができるようになる。胸乳が大きくあえいでいた。

部屋の隅で、大の字になってノビてしまっていた恵利香の激しく上下している乳房を新藤の土足が踏みにじった。

「いたいっ!」

と叫ぶことはできたが、疲れ切った四肢は鉛になってしまったようで、もがくことすら不可能だった。新藤が例の調子で「立てっ」

と命令しても、何の反応もない。すると、新藤は矢庭にホースの蛇口を恵利香の肌に突き立て、押し殺した声でいった。

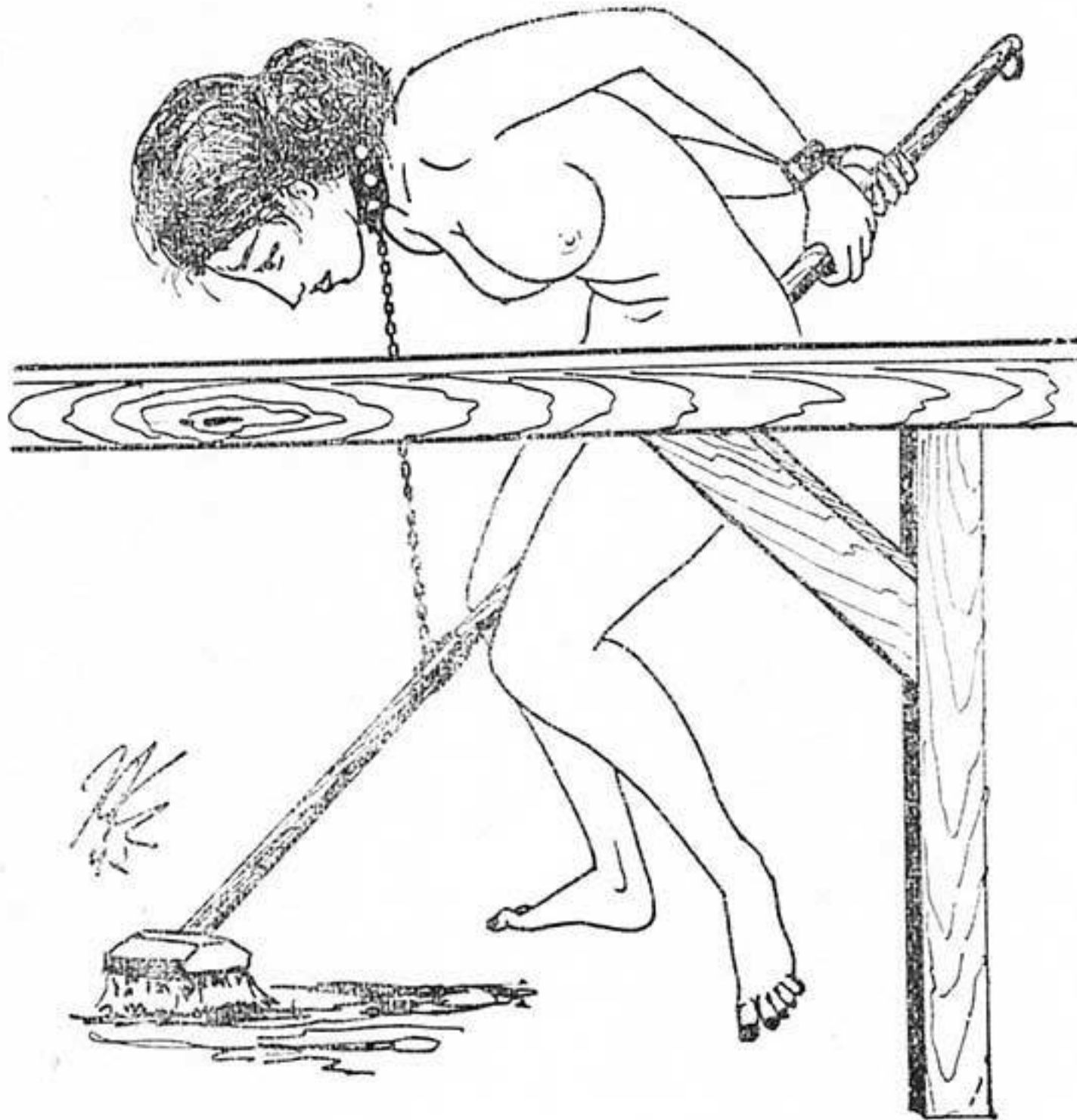
「どうだ、栓をあけようかね」

フーッと、気が遠くなりかけていた恵利香も、突上げられた刺戟に引き戻され、新藤のドスのきいた言葉を耳にするや、何でたまろう。

「ヒューッ」

とわけのわからぬ悲鳴をあげながら、ハジカれたように立ち上った。

ホースのノズルがはずれて、コトンと床に転がった。ふらふらしながら、それでも辛うじて



平衡を保っている恵利香の美しい肢体は水に濡れて艶かに光っていた。その豊かな髪はいばいに水を含んで、しずくがポタポタと落ちていた。

「さあ、床掃除だよ」

新藤が持つて来たのは長柄のブラッシであった。柄の前方約三十センチのところに鎖が

ついていて、それを恵利香の首輪に結びつける。股下を通って後に廻った柄は、後手錠につながれる。やっと不自由な両手で握ることが出来る程度に鎖の長さを加減してある。子供が遊ぶ馬乗り棒を逆にしたような形を想像していたきたい。恵利香は、このように不自然な姿で床磨きを強制されているのであった。ブラッシをシッカリ床に押しつけるためには、どうしても腰を落して支点とし、後手を引きあげるしかない。いいかえれば、その柄の支点に一番力をかけて押えなければならぬのである。その上前後に動かして床を磨くとなれば、勢い苦しみが甚しい。恵利香は歯を喰いしぼり、膝がしらをガクガクさせながら、それに耐えて働かねばならなかった。

それでも、三十分ほど床磨きをさせられている間に、たまり水はすっかりなくなり、床には幾分しめり気を残してはいるものの、もと通りキレイな部屋になったのである。そして、その三十分の労働で、恵利香は淋漓と流れる汗にまみれ、金魚のように口をパクパクさせてあえいでいた。いうことを聞かなければ、更におそろしい責め苦を加えられるかも知れないので、自分でも不思議な程頑張りがきくのである。その耳に口をよせて、新藤が

ささやきかけた。

「これからが、最後のつとめだ。うまくできたら、今夜はゆっくり寝かせてやるよ」

実際、夜昼となく責め抜かれて来た恵利香は、絶えず睡眠不足に苦しんでいた。眠ること、これが現在の恵利香にとって最大の願いだったのである。こんな訳で、思わずコックリとうなずく恵利香の顔に、新藤はもう一つ、天狗面を持って来て装着する。

「いいか、金髪女を思いきり泣かせてほしいんだがね」

面を締めつけながら新藤が言いつける。恵利香には、それが何を意味するか、わかりすぎる程ハッキリしていた。一方、彼女としても、この金髪女には恨みがあり、憎しみがあつた。だから残忍なアイデアに、少しの躊躇も見せない恵利香だった。

緋沙絵夫人はというと、先程恵利香に仰向きにひっくり返されてから、固定された身を動かす術もなく、相変らず腰を椅子の中にハメ込んだ体だった。

汗と涙の調教をされて、自らを試験台として、嫌応なく生体の機微というものを知らさしめられて来た恵利香である。どうすれば、どうなるものか、手に取るようだった。案の

定、緋沙絵夫人の全身が又もや鳥肌立ってきた。

四肢を固定されている緋沙絵夫人である。わずかに自由なのは、面を被った頭部だけである。その天狗面を右に左にうちふるわせ、あるいはのけぞって、どうにもならない人間の弱さをさらけ出しつつあった。次第にくずされてゆく自らの心の内の防波堤の危さ、あさましさ、しかも、そうしたおぞましい攻撃が、自分の最愛の娘によって加えられている贖神感に、気も狂わんばかりにさいなまれるのであった。

緋沙絵夫人が、どんなに絶望のドン底にあえいでいたからといって、自分の母親とは夢にも思っていない恵利香は、ただこの金髪女をうとましく、呪わしく思うばかりで、少しも容赦しようとしなかった。相手をトコトンまで追いつめて、命じられたとおりにしなければ、自分が罰せられるのは自明のことだから、嫌でも応でも一心不乱にならざるを得ないのだった。

正に爛熟期の、あらゆる琴線が思いもかけぬ攻撃にうろたえ、結集されていく。すでに炉には埋れ火があつた。薪を投げ入れられて何で燃えあがらないことがあるのか。いうま

でもなく、理性は全力でそれと斗った。しかし、意思のコントロールを脱して勝手に動き出しつつある何かがあつたのである。

緋沙絵夫人は縛られた手足を引きちぎらるばかりに悶え、身をよじって不甲斐ない我身を恨み、叱咤しようとしていた。しかし、暴虐の攻手は緋沙絵夫人を圧倒して去った。

新藤の手が恵利香の後頭部のトメ金をはずした。脂汗にひかる顔をあげた恵利香の心中に、残忍な悦びがあつた。あらあらしい息づかいを両肩にみせ、胸を大きく上下させながら、むしろ勝利者であるかのように、誇らしげに足下の金髪女を見下していた。そうした恵利香の後から、不意に新藤の手が、伸びてきた。

「アッ……」

とさけんで逃れようとするところを、両腿を抱えて持ちあげてしまう。足先きをバタバタしてみても、たくましい新藤の腕はビクともしなかった。腰掛けたまま持ち上げられたような恥ずかしい姿が、マジックミラーに映っていた。

「おまえも、ずいぶんひでえことをするじゃないか」

新藤はぬけぬけとからかいながら、そのま

ま、緋沙絵夫人の頭の方へ廻ると、上向きになったままグッタリしている面に狙いをつけ、いきなり両手を離した。

「いたいっ」

と恵利香はのけぞる。横へ倒れかかろうとする恵利香の upper body を、新藤が支えた。ピシッと頬が鳴った。

「しっかりしろ。ぐにゃぐにゃするな」

声をあらげて新藤が畳みかけてくる。嫌といたらどんなことをされるかわからない。それに、どっちみち命令には服従させられてしまうであろう。泣きべそをかきながら恵利香は覚悟を定めた。

一方、虚脱したようになっていた緋沙絵夫人の方も、限られた視野から何が始まったかを覚ってしまうと、愕然とならざるを得ない。わずかに動かせる頭部をふり立てて避けようとする。皮肉なことに、その逃避がとりも直さず、新藤の思う壺であるとは露ほども考え及ばなかったのであったが。

恵利香は、新藤の冷酷な行動力をいやというほど知らされているので、一旦命じられたことは、どうしても服従しなければならぬという反射的な習性が身についていた。いささかでも拒否のそぶりをみせようものなら、

それは、とりも直さず、死ぬよりも辛い苦痛を要求することになるのだ。そして、その苦痛を味った上に、絶対に最初の命令が撤回させられることはないのだった。つまり、苦痛がオマケになるだけのことである。

恵利香は、命令に従うべく努力した。しかし後手に縛られている不自由に幾度か横転した。その度に新藤が苦笑しながら引き起し、遂に後手を解いた。見返える恵利香の眸が感謝の気持ちを表わしていた。

衣・食・住

今まで長々と書いて来た出来事は、実際は僅か数時間の描写にすぎない。地下室には夜も昼もないし、二匹の哀れな家畜は、それを考えることすら許されないのであったが、新藤だけは夜の来たことを知った。空腹を覚えた彼は食事をし、そして眠ろうと思う。

緋沙絵夫人の天狗面は、まだそのままだった。やっと拘束椅子から解放されても、節々がシビレて、ぶざまに転がっているだけだった。再び後手錠がかけられ、恵利香に引摺られて浴室へ連れ込まれる。今度は、恵利香の手が、汗によごれた緋沙絵夫人の全身を洗い

清めた。しかし、さすがに後手のまま洗われることは、それが自分の愛娘とはわかっていても緋沙絵夫人は羞恥で身をかくすのだ。恵利香はそんなことはお構いなく、新藤の命令だから、いやでもやるのだといわんばかりの邪慳さで、人間扱いもせずに洗いあげるのだった。すっかり綺麗になると、浴室の一隅に正座させられる。固いタイルが膝に痛く、また寒々としたかかった。

次は恵利香の番である。久しぶりで温湯を使うことが許可され、これも久しぶりで自分の手で洗うことが出来る。恵利香は新藤のしているのも忘れて、ウツトリと湯舟に浸かっていた。長い髪を洗い、丁寧にくしけずり、後に巻いてまとめる。簡単なことなのに、これは又何という欲びであろうか。恵利香は思わず歎息を洩らした。自由の意味が、それが如何なる財宝にも増して貴重なものであったかが、あらためて思い知らされたからである。そしてこれは又、新藤の慎重な計画であった。苦痛の連続はそれに対してすら一種の「馴れ」を生ずるであろう、加虐者は、被虐者が絶えず新鮮で最高の苦痛に呻吟することを欲するものである。責め苦が幾分でも割引

されるような馴れ方を与えてはならない。時には過去の生活をよびさます様な状態を犠牲者に還元してやり、その束の間の歓喜から、その後にくる辛苦を一層鮮烈にさせようとするのが新藤の常套手段だったのである。

「もういいだろう。さあ、両手をうしろに廻しな」

降って湧いたような新藤の声に、恵利香はハッとわれに返った。やっと人心地がついたというのに、また畜生道に突き落とされるようなものだと思う。しかし、さからってみたところで、今の恵利香に何が出来るというのだろうか。むしろ、そのためにもっともっとひどい目に会わされはしないかと怖れ戦のく。これがこの一カ月ほどの間、恵利香が叩き込まれた生活の知恵だった。しおしおと手を後に組む。ガチャリと鍵の落ちる音がして、恵利香の手は、ふたたび自由を奪われたのである。

新藤の手が首輪にかかると思沙絵夫人はあわてて中腰になった。何をされるかわからないからである。

「腹が空った。食事にしてもらおうか」
真紅の絨毯が敷きつめられたC室に移動す

ると、思沙絵夫人は膝を立てたまま仰臥させられる。

後手の恵利香がガスコンロを不自由そう

に持って来て

そのやわらかな腹部の上に

据えた。ガス

管が膝の間を

通って部屋の

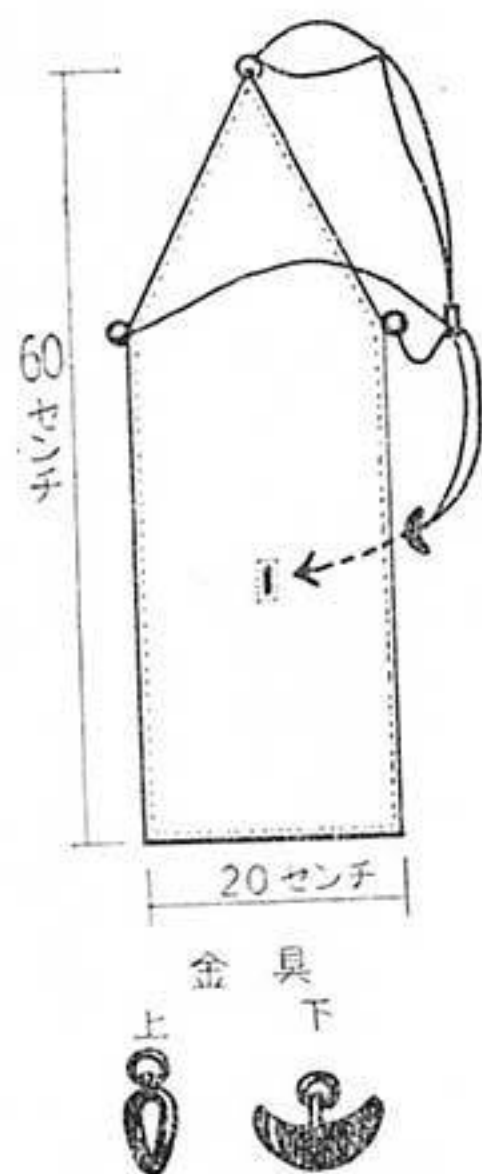
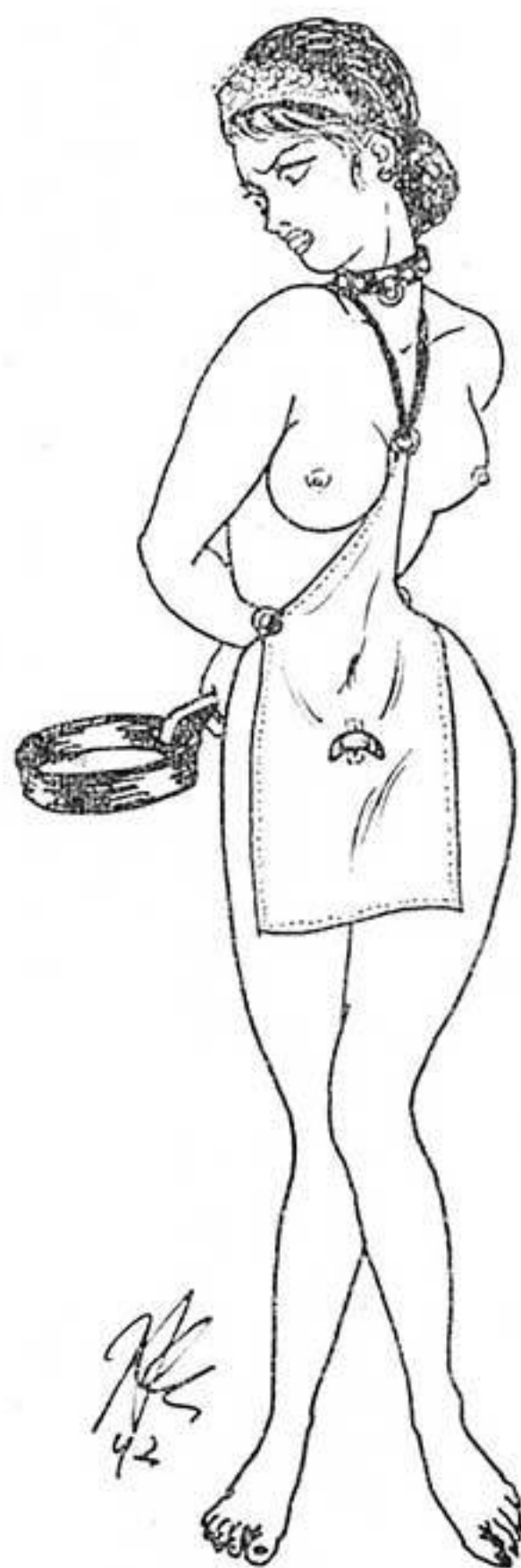
一隅にある元

栓にはめこまれる。恵利香は、これらの仕事を口だけでしなければならぬ。底に水を入れたコンロは、思沙絵夫人をふるえあがらせた。

「動くな。動くと火傷をしてしまうぞ」
新藤が鋭く言った。鉄鍋がズシリと載せられて、コンロに火が入れられた。

ペルシャ風のストールとクッションにはさまれて新藤は、ゆったりと胡坐していた。その傍にひざまずいた恵利香が、いつもしつけ

られていた通り、おそろおそろ言った。「あの、おそれ入りますが、エプロンをおかけ下さいませんか」
そして、うしろを向いて、握っていた白い布切れを差し出す。よく晒した、それでいて丈夫な帆布製であった。形は下方が方形で、上方が三角形に尖り、その先端の金輪から二本の麻紐が約六〇センチ程のびていて細長い金輪に結びつけられている。又、中央部の両側につけた金輪に、夫々、これも約六〇センチ程の麻紐がつけてあって、先端の中五セン



チ程の三日月型をした金属ボタンで一緒になつていた。帆布の寸法は、天地約六〇センチ巾約二〇センチで、上端から約四〇センチのところ、三日月ボタンを通すための穴が切つてある。つまり、上端と両側の金輪に、このボタン穴を加えて菱形になるように配置されていゝのであった。

さて、新藤は背を向けひざまずいてゐる恵利香に、頭から下の麻紐をはめるようにして、帆布を前に落した。次に、上の麻紐で作られた輪を首に通して後首のつけねのあたりで結び目をつけると、残りを背後に垂らした。下の麻紐のついた両側の金輪は丁度、恵利香のウエストに位置してゐた。三日月ボタンを上紐から垂れ下った細長い金輪に通して、ギョツと引き絞ると、たった五五センチと美事にくびれた恵利香の細腰が、痛々しいまでに締めあげられたのである。肌に喰ひ込む紐の痛さに、恵利香は低くうめいた。

「膝立ちになれ。足をひろげろ」

ギクツとして、身体をひらく恵利香。その股下をくぐつた三日月ボタンが、思い切り引き上げられた帆布のボタン穴にはめこまれる。各部の紐の寸法は、ピッタリというより締めつけ気味に短く仕上げられていたので、

前はエプロンだが、後から見れば完全な縦縄縛り、しかも、前期の通り、帆布の三つの金具と容易に外れない三日月ボタンが四方に帆布を引っぱつて、菱縄のような効果をあらわしてゐたのであった。何回も、このエプロンをつけさせられたのであるが、そのたびに無情に喰ひ込み、締め上げられる苦痛に、耐えきれなくなつてしまふのである。その上、新藤の方に向き直り、正座をして、額を床につけて

「ありがとうございます」

と言わされるのである。そのとき、紐は自分自身で、更にしめつける結果となるのだ。

「あつ、あつ、ああ……」

身もだえして苦痛を逃れようとして、ベソをかく恵利香に、

「鍋が焼けてるじゃないか、早く肉をのせなにか」

と叱咤の声がとぶ。天狗面の下で緋沙絵夫人が低くウメキ声を洩らしはじめた。熱気が肌に伝わってきたからである。思わず身をふるわせて苦痛を避けようとするので、コンロがグラツと揺れた。

「バカッ。動くなというのがわからんのか」

新藤の激しい怒号、二の腕がツネリ上げら

れる。緋沙絵夫人も、自分のお腹の上で、グラグラ煮えたつてゐるスキヤキ鍋のことを考えると、もしそれが覆えたらと想像して慄然となつた。脂汗が吹き出してくる。それでも、必死に力を入れて平衡を保つしかないのであった。

新藤は美味そうに喰べた。時々、いたずらそうに、クチャクチャ噛んだ肉片を、緋沙絵夫人の乳房の谷間のあたりに投げ出して、恵利香に喰べろと言いつける。恵利香は、これにも一礼して、大切そうに喰べなければならぬ。断つておくが、以前だったらムカつきそうな新藤の喰べ残しであっても、今の恵利香にとっては大変な御馳走なのである。恵利香の日常与えられる食事は、それ自体が一種の拷問だった。生きてゐる蛙や金魚を喰べさせられたり、ドッグフードを噛まされたりしたことがあつた。嫌といへば死ぬほどにいためつけられる。新藤にとって、方法はいくらでもあつた。飢餓に際しては人肉すら喰つたという例もあるではないか。餓えに悩んだ恵利香はどんなものでもガツガツ喰べられるように飼育されつゝあつた。

(未完)

告白



続・フェチの

海水浴

安田隆夫

先日、生理バンドをまもって女性に嘲けられた私の願望を告白しましたが、その後も海水浴場の彷徨は続いておりましたところ、はからずも、大変に貴重？ な経験をする機会に恵まれましたので、再びそのレポートをお送りしたいと思います。

その日、私は砂浜の仮設休憩所で着替えをしました。夏も終りに近く、なごりを惜しむ

かのような遊客は居るには居るのですが、一時のような混雑さではありません。

例の月経帯その他だけを包みこんだ風呂敷をさげ、休憩所の席を借りました。ご承知の通り、申し訳程度の仕切りがあるだけの、食堂兼更衣所の仮小屋ですから、中はどこからでも見通せそうなお粗末さは、どこの海水浴場でも大差はないと思います。

私とその店へ入った時には客は居らず、ホッとすると共に幾分ガツカリしました。他に客、それも女性の客が居てくれないと、折角のスリルが味わえないからです。けれども浜には色とりどりの水着がハシャイでいるのを見て、とにかく着替るべく席を借りました。

スリルはないかわり、落着いて着替えられます。ズボン脱ぐとズロースが顔を出します。家からはいて来たのですが、黒色でフンワリと腰を覆い、裾ゴムが強く、しっかりと太腿に喰い入っています。そのままズボンをたたみ、風呂敷包みの、前開きの黒い月経帯とピンクの生理バンドとを取り出して足許に並べました。次にシャツを脱ぎ、ズロースを脱ぎかけた時、後に気配を感じてドキッとなりました。

仕切りには、カーテン代りのムシロがかかってにいますのですが、穴だらけの上に、半分以上も千切れていて無いも同様で、入口からも通路からも、その気になれば丸見えです。そんな通路に、二十四、五才と思える女性か四人、肩を並べて見ているのです。

ズロースマニアならおわかりと思いますがズロースというものは、押し下げて脱ごうとすると、裾ゴムがあるためにどうしても腰ゴ



もいきません。

四人の女性たちは、こそこそ話をしながら不遠慮にジロジロと私を見据え、バンドを眺めています。派手なセパレーツを着た彼女たちは、水商売畑の女性だということはすぐに感じとれたのですが、その無遠慮な態度と視線は明らかにさげすみを表わしていました。

ムのところは先に降りてしまいます。すなわち、両脚の太腿に喰い込んでいる裾ゴムを中心に腰ゴムが膝の辺りに来るように裏返ってしまいがちなものです。

私が人の気配に気づいたのは、ちょうどそんな変な恰好になった時でした。しかも、その足許には、ピンクと黒の、一見してそれとわかる女性専門のバンドが並んでいます。

別にのぞきこまなくても、通路から、角度によって自然と視界にとびこむこともあるでしょう。彼女達は、意識せずに奇異なものを見てしまい注意をひかれたのではないでしょうか。

私は、希望していながら、思いがけない結果にすっかりうろたえてシャガミこんでしまいました。ズロースはもう足首のところまで落ち、裏返っていてとっさに引き上げる訳に

ぶらしています。とたんに、背後でクスクス笑い出すのが聞え、私は大慌てで引き上げましたが、慌てると余計にうまく行かず、常ならなんでもない前開きのボタンが、なかなかとまってくれないのです。

「やっぱりバンドじゃないの。ヘンタイね」

ハッキリ確認した女性の一人が、はすっぱな口調で、聞えよがしに大声を出しました。ドツと黄色い哄笑が湧きました。

難事業はまだ残っています。私は最高の感激に浸りながら、最高のうろたえ方で、花模様も派手なピンク色の生理バンドにも脚を通したのです。

「あら、可愛いバンド」

どういうつもりで見詰めているのか、背後の女性たちは面白そうに冷かします。

「二枚も重ねるほど、ひどいの？」

ワーと哄笑が举ります。

私は腰と足がガクガクとなり、指に替ゴムがひっかかり倒れかかりました。

「アンタ、まさか、それ盗んで来たんじゃないでしょうね！」

なじるような声が、強い口調で私をびくりさせました。

「い、いえ、か、買いました。……好きで」

私は、思いもよらぬ好結果？ にうろたえながらも、ままよとばかりに、用の足さないズロースを脱ぎ捨て、黒色の月経帯を取り上げました。ご丁寧にも、前開きのボタンが皆、はずしてあるのです。背中に、好奇の眸をこらしているのが痛いほど感じられ、困りました。が今更、仕方がありません。けれども四人もの若い女性に見詰められたまま、生理バンドをはかなければならないというような素晴らしいお膳立ては、希んでもそうやすやすと出来ることではありません。そんな夢のような体験が出来ると思うと、両手に持ち上げた月経帯がぶるぶる慄えてしまっただけではありません。

ようやく脚を入れることは出来ましたが、前開きの替ゴム用の部分が、両脚の間にぶら



私は一生懸命にかすれた声を出しました。警官でも呼ばれてはかありません。ようやく穿きおわった私は、とにかく外へ逃げ出そうと思いました。もっと見詰められたい。もっともっと嘲笑してもらいたいという欲望はあるのですが、足は逃げ出すために勝手に動き始めます。八つの眼に包まれてこそそこそと食堂の端づたいに出ようとした時、丸太柱に当たれてあった釘の頭にバンドのナイロン布がひっかかってしまったのです。仮設の丸太作りですから釘がゆるんでいたのでしょうか。見送っていた四人の笑声が一際高くなりました。私はますますうろたえ、逆上して無理にでもとろうとしますが、ナイロンは丈夫で

す。いくら引いても伸びるだけで破れてもくれません。私は柱に刺し止められた恰好になり、四人の女性は腹を抱えて笑いこけています。キャアキャア、ワアワア賑やかなこと、この上なしです。私は真剣になんとか外そうとするのですが、大きな釘の頭がスッポリと入ってしまったのでどうしても取れないのです。

その内、奥から、この休憩所の小母さんが若い男と一緒にとび出して来ました。小母さんは、最初、なんのことかわからなかったらしく、「まあまあ、これはどうも済みません」と私に謝っていました。釘の処置をできなかったことに責任を感じたのでしょうか。が引っかかっているのが生理バンドと気付くと外そうとしていた手をひっこめました。

「まあ、何です、これは……。妙なものを穿いて、イヤラシイ」

若い男も、びっくりした顔付で、私を睨みつけました。小母さんは、四人の女性の方に「どうも済みませんねえ」と愛想笑いをしてから、私の方に向き直り、

「まさか変なことではなかっただろうネ。妙な素振りでもすると、警察を呼びますよ」と叱りつける口調です。私は、悪いことをした覚えはないので不満でしたが、とにかく

謝るだけは謝っておきました。若い男は四人連れの女性の傍へ行って何か訊いているようです。彼女達は笑いながら首を横に振っている。私は安心しました。

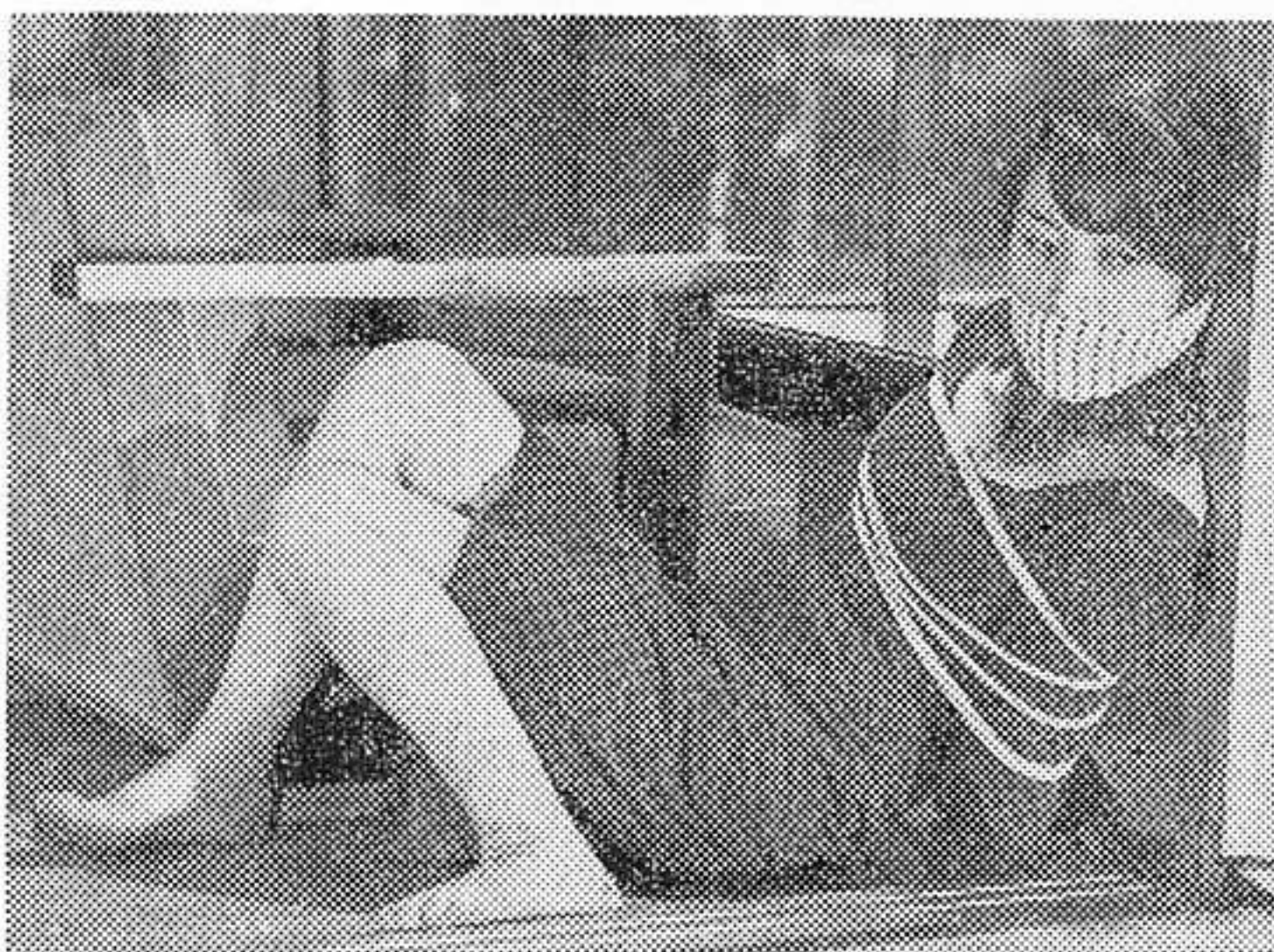
「これは一度、脱がないと……」

小母さんが、そう云うなり、後からバンドに手をかけて一気に引下しました。私はハッとしましたがもうその時は、黒い月経帯がさらけ出されていました。息をのんだ小母さんが、呆れたという表情で「アンタそれでも、男かい！」というなり、腰を強く押ししました。不安定な恰好になっていた私は不意をつかれて前に倒れこんでしまい、乱暴に足からバンドを引き抜かれたのでした。

顔を砂だらけにして振り向いた私の顔に、小母さんの手で釘から外されたバンドが投げつけられました。皆の笑い声が又もや、わあわあ、きゃあきゃあ湧き上りました。

「アンタのような人は困るね。間違いのないうちに早く帰っておくれ。うちはお断り！」小母さんは強く、そういいました。

私はしょんぼりと、皆の視線の中を再び更衣室へ引返しました。けれども、その胸の内には、思いもかけぬ大収穫に、満ち足りた嬉しさが一杯に溢がっていたのでした。



懸賞入選作品

私評論

優しい女たち

—裕子からアケミまで—

木見

修

プロローグ

想像の世界を自由に逍遙する、あのドン・キホーテですら生の倦怠をしばしば感じたことであろう。日常という名の化物が、いま私の首にべったりくっつき、私を甘美な死へといざなう。亡き妻が、さそうのか？

ほとんど窒息しそうになりながら、私は叫

ぶ……優しいひと、いとしいひとたちよ、姿を見せよ。そして私をなぐさめよ。

エウリュディケーを冥府から連れ帰るのに失敗したオルフェウスの例もあり、過去の薄明よりわが優しきひとたちを甦えらせるとは大それた所業、おそらく空しい結果になるであろうが、私は未来の映像よりも未来への欲求につき動かされ進むつもりだ。

だが、現在、私の感情といえば、どうしようもない淋しさのみ。

同好の士よ、あなた方と感傷的な一夜を共有することができれば、と私は念じる。よろしくつきあい給え。

妖しき邂逅

女は男にしたがい密室に入る。またたくま

に平板な現実が去り、幻の世界が現われる。微かに熱気だけゆらめくその部屋では、男と女の劇がはじまろうとしている。

みよ、一布まとわぬ女の裸身を犬の鎖りがしめつけている。無数の小さい輪が、かたく冷たく、くびれるまでに肌へくいこんでいるのだ。そして口には猿轡が、……おそらく男が十数日も身につけていたものがまず詰めこまれ、その上を金属の箝口具がきつく抑えている。

女は静かにうつぶせに、ただ待つ。皮膚からほのかに洩れる女の生気が、部屋の濛気と呼応している。女は、まだ待っている。

男は冷たい眼差しをうずくまる肉体に向ける。陶醉への欲望に目は充血している。行動への衝動はまだ訪れないのか。狂暴な血こそいまの彼には必要なものだ。静かすぎる、穏かすぎる獲物を前にして、猟師が行動に飛込めるのは、燃えたぎる兇暴性によってだ。

なぶれ、倒せ、殺せ！

もり上る白い双丘が憎いか。柔らかな曲線を見せる腰が腹立たしいのか。この貞淑を装う美の形は何だ。それにあまりにも静かすぎるのではないか。いま、意識をも溶かす灼熱の部屋において……息苦しすぎる。もっと新鮮

な空気が欲しい！そのためには均衡を破れ、破壊するのだ。ついに爆発する。

「もっと足を開くのだ」

「ウウウ……」

「もっとだ、甘えるな。裂けるまで拡げるのだ」

女は懸命になって身をよじる。はりさけんばかりに両足がひらいて行く。男は、なおも冷酷な命令を続ける。ようやく異った行為が生じる。女の伸びきった足先はパイプとおぼしき棒の両端にひきつけられ、固定される。それを知り、女は足をすばめようとする。羞恥が襲うからであろう。残酷な姿態がそこにある。けれど、女の体には、もはや一片の自由も残されていないのだ。女は羞恥の思いを噛みしめるのみ。突き出た尻が不様な苦痛の表現を反復するだけだ。

そして、陶醉の時は刻々と近づく。

男の手にはムチがある。ムチは空間に輪を描き、部屋いっぱい張りめぐらされていた熱っぽい幕は切断される。爽やかさを味合う男の隆々たる体軀に、エネルギーが溢れる。

白い丘へ最初の一打ちが、赤い一筋が走り丘は、ひくくと動く。また一閃、ひくくと動く白い塊。うねる、当る、くねる、走る。ム

チは迅速に重ねられ、ますます白い獣の波うちは激しくなる。

獣は鞭打ちを避けられぬ。横に転がることもできず、ただひくひくと哀れに苦痛のもたえを見せるだけだ。伸ばした肘と、足を固定した長い棒が横転の自由すら奪っているのだ。乗馬鞭の先は白い肌の隅々まで、適確に目標をとらえて走る。

「アア……ム……、アア……ム……」

そう、喋ることができないのだ。こいつは柔らかな獣に過ぎぬ。

女の口腔いっぱい男の体臭がひろがる。絶え入りそうになりながら、女は被虐を味合っている。喉の奥へ浸みこむ男の暴力を女はよろこんでいる。その間も、肩へ腰へ腿へ、腕に尻に、ひろげきった体の至るところへと鋭利な痛みを感じる。

（苦しいのです。痛いのです。苦しい、でも苦しくて甘いのです。わたしは幸福なの。もっともっと激しく打って。きつく打って……）

消えいるような微細な意識の糸をくりながら、女は恍惚とともにいる。安らぎさえ所有している女なのだ。だが、肉体は感覚を裏切り、哀れなバツタのごとき尻ふりダンスは滑稽にも続いている。

男も、言葉を発しない。紅潮した顔面には金色に輝く瞳がある。眼下の芋虫さながらの肉塊がエネルギーを失い、もの憂げに淋しげに、やがて泥のように眠るまで男は打ちすえるだろう。極限まで追いつめ、引きずって行くことが彼の務めであることを男はよく知っているのだから。

赤く染められた尻をひくつかせる獣。だが鞭の動きとともににはねる豊かな尻の反応はしだいに鈍くなって行く。

いまや最後のとどめを刺そうとする猟師は、屈服した獣に、きびしく尋ねる。

「おまえは何者だ」

「ウワ、……ウウウ……アアアッ」

箒口具の裏で女は叫ぶ。

「なんていつているのだ、聞えないぞ。はっきり云うのだ」

「ウワ、……アアアッ」

いつしか止んでいる強烈な鞭、そして失神寸前のファンタジーをさまよう女は、男の問いに必死に答えようと悶える。

「わたしは、あなた様の奴隷です」

述べたいのは、この一句である。しかし、女は獣の吼える音しか出せぬ。女は焦立ち、悲しむ。いつか、両眼に涙が光る。

男は非情だ、ひきつづいて不可能を強要する。赤い縞の獣の休息に似た姿態が憎らしいのだ。

「名前は何というのだ」

「ウルウウ……エウウ……」

「そうか、名前などなかったはずだな。奴隷なのか……、いや、そんな高級なものではない。俺の思いのままぶっ毀してもよい玩具。そうだな、おまえ」

「ウァ、ウァ、ウァ」

「答えるのだ、はっきり答えるのだ。このけだもの奴」

ふたたび細竹はしなり、獣の白い肉体をすべて曝したグロテスクな蛙ダンスが展開されるのだ。極端にひろげた両足に激痛が集中しているのか、脂汗が鈍い光沢をみせる。真白な足の平が空間におどる。妖しくエロチスムが舞っている。

「いえ、いえ。泣け、わめけ。叫べ」

男は憎悪に似たある感覚で頭を痺れさせている。独立の生き物のごとく腕は旋回し、まいる肌のそこかしこにムチ先がめぐる。男はすでに幻のとりこになっている。これが現実なのだ。汗に汚れたこの女、このけだもの。そして、それを征服している自分と。

女の頬をぐしょぐしょの涙がつたわる。もはや反撓する力を失った肉体に比して、この涙には新鮮な生気が宿っている。

「ウワ、オオオ……」

(……うれしい、わたしはうれしいのです。こんなにまでしていただいて、もっと強く打って。気が遠くなりますわ。わたしは低級なペットですもの、あなたのお好きなようになさって下さいまし。……でも、なぜわたしは虐められるのを喜ぶ女なの。悲しい業、汚れた女に生れついている。わたしの夫、あなた。あなたは今、どこにいらっしゃるの。あなたはわたしを汚辱の淵へひとり残して、どこへ行ってしまったの。あなた、あなた、答えてちょうだい。いつもあんなに優しくかったあなたなのに。いけない、……いけない。もっときつく、もっと激しく打って。この人が、こうしてわたしを責めてくれているの。打って、打って、虐めて、虐めて、虐めぬいてください。殺してえ)

女の祈願にもかかわらず、その肉体は既に泥のようになっており、男の懸命の打擲にもただわずかに半身をひくつかせるだけといった状態になっている。

限界を見せつけられて、男は焦る。薄れゆ

く陶醉を呼び止めるため、男は更にみじめな愚行に陥入って行く。

女の足を束縛しているその棒の中央に手をかけ、岩のごとき肉塊を宙吊りに、そして、どさりと畳へ投げおろす。いつしか仰向けの姿態がそこにある。乳房、腹部、あらゆる所を畳の目の模様を刻まれた女体が展示されている。男はごくりと生唾をのむ。たちまち狂暴な所作が始まる。

女は極端に折りたたまれ、高く突きでた尻が新たな苦痛に悶え始める。そこへ強烈なムチが飛ぶ。確かな手応え。からだ全体が大きく震えている。女は逃れられぬ。両足をとらえている棒を枕にしている、自分の首の重さがうらめしいだろう。飛ぶ、当る、しなる、当る、同じ箇所、柔らかな肉の塊りに向ってムチ先が、……だが有限ってやつ。……女は気を失なう。

はじめてのことではない。箆口具を外すと唾液を吸いつくした布片が出る。ウィスキーが唇を濡らすと、女はすぐ還ってくるのだ。

「ブル・ド・スイフ（脂肪の塊）か」

横たわる肉塊を、男の険しい視線が刺す。

男はどうしようもない空虚のなかにいる。甦りつつある女が確実に幻覚に酔っているとい

うのに。

ついに女の嗚咽が男を現実にはさそう。涙でふくらんだ高貴な瞳がある。しなやかに差し出されている両手がある。そして、うねる豊かな胸が。男にも欲喜が許される時が訪れるのだ。

「わたしはあなた様の奴隷です、奴隷です、奴隷です。ね、思いきり虐めて、虐めぬいてください。一生、愛して虐めて、捨てないでね、殺されてもいいの、でも捨てないで」

……劇はふたたび始まるうとしているのだろうか。ニヒルの厚い幕を切断するだけの力が、この二人に残っているのか。すべては業か。いずれ空しさに襲われると知っていながらも、男と女は嗜虐の世界に入って行く。たまゆらの生を求めて、……。

裕子とともに

女の名はたしか古川裕子、そして男の名は知らない。

裕子が私の最初の優しい女である。バツタのようにゆらゆらと奇妙なもだえを好む生物として、私の前に出現したのだ。そのイメージの再生を右に試みたのだが、私の非力な筆ではとてもあの爛熟した女、古川裕子をよび

戻すことはできない。彼女が私にあたえた印象は、もっと鮮やかな原色の強烈さともいえるものだった。とにかく裕子の赤裸々な手記によって、私は一気に妖しげなSMの世界へ誘いこまれたのだ。

もう十年余になる。

うだるような暑い日であった。関西の小都市から上京して三カ月を経っていた。倒産、父の自殺、家の崩壊、……そのじめじめした湿っぽさを逃れてきたものの、将来の目標など何もなく、ただ冷奴とおひたしの夕食と、気ばらしのパチンコやジャズにうつつをぬかすために、日雇いの肉体労働を重ねていた私はその日は務めを休んだ。頭が痛かったからだ。だが真昼、灼熱の外気に誘われた。ええい、からだをめちゃくちゃにしてやれ。青春期にのみ起りうる自暴自棄への衝動である。さまよい出た私は、目蒲線の線路伝いに当てのない歩行を続けた。

走り去る電車は熱風を浴びせ、鈍色の太陽の光がまともにふりそそいでいた。私の頭は痺れきっていた。私はただ歩く、線路に沿った道をぐんぐん歩いていった。アスファルト路に出るとゴム草履の裏がとけてくつつくのであった。溶ける、何もかも。このまま軀も溶

解してしまえばよい!

洗足駅の近くに古本屋があった。何気なく入る。奇妙な幻想的な表紙が私を招いた。まづ縛られた女たちのグラビアが。あわてて中をめくると、鎖りをまとい尻にムチ跡をつけた女の肢体が目射た。妙にきつい吸引力があった。頭の中から、痛さと痺れが消えていた。ごくりと生つばを呑みこみ、私はすばやくその吸着物をカウンターへ運んだ。狸に似た面相の中年女が、怪訝そうな一瞥を私に与えた。

鎖で縛られ鞭打たれる裕子のいた雑誌の名は『奇譚クラブ』。それがまた本誌と私の邂逅となった。

レモン一個にアンニユイの呪縛を吹き飛ばす爆弾を仮託した、梶井基次郎という詩人もいる。私は爆弾を抱きかかえるようにして下宿に帰った。そこにはあまりにも鮮明な憧憬の映像が充満していた。私は完全にその世界の妖気の捕囚となっていた。三日間である。私の棲処、せまい三畳の部屋いっぱい裕子の嗚咽、もっと、もっと打って……裕子の悦虐の嘆声が響き、私の夢が混った重い空気がたちこめていた。

何度、同じ活字に目を曝したとか。いや

想像の領域では飽きたらず、私は自らの足を箒の両端に結びつけ、ハタキのムチを自分の尻へと当て、呻いていた。裕子との交歓の永遠につづくことを求めたからだ。

私の性癖にはいささかのMはなく、完全にSである。男のMを描いた小説・映画などに對してほとんど感興の湧かぬことがこれを証明する。しかし、私は右の三畳の部屋での狂態と類似した衝動をしばしば経験した。すなわち、想像裡にも、現実の行為にも起りうるS的行為の極限におけるマゾへの傾斜なのである。被虐体との同化をめざす欲望ともいえる。自分が征服した対象Ⅱ女の内部に現在生じている感覚を、みずからも実感してみたという思いである。

完全に支配下においた女、意識のうつろな女に肩を噛ませる。女の体臭で口を塞いでもらいたいなどがこれだ。いかに酷薄なサディストでも、彼が生の実をねがいSMの世界を旅する人であれば、かくのごとき体験をもつであろう。そして、このような微妙な転移が、二人の人間、孤独な男と孤独な女がエゴイズムの彼方で、真に結びつく機縁となるのではなからうか。

ともあれ、妖しき洗礼は終わった。三日間の

耽溺ののち『奇譚クラブ』のバックナンバーを求めて、私の彷徨が始まった。古川裕子を探して、といった方がいいかもしれない。私の優しいひと裕子!

この熟れきった女は、つぎつぎと新鮮な姿態を、私に開示した。思慕はつづいた。最初は爛熟した香りの捕囚となっていた私だが、余すところなく裕子の手記を知りつくしたとき、奴隷裕子を想像の世界において自由に支配しうるサディストとなっていた。

いま手もとには、裕子の告白が掲載されている『奇ク』は一冊もない。大学入学の際の愚かな身辺整理がもとで、すべて失ってしまった。しかし、私の脳裡にはかなり明確な裕子像が刻みこまれている。おそらく一生消えることのない刻印なのだから、……

「長期刑」の裕子、……夫に責められる一週間が描かれていた。

夫のきついにおいのこもるパンツを口に、手を前に縛られた裸身をさらし家の掃除をする裕子、彼女がつま先立って棚を拭いているその前には夫が、じっと見上げている。羞恥に身を震わせる裕子。……この姿を想像する度に私は、小さな前掛けのみをまとい、立て

膝のポーズをとる、あの梨花悠紀子のグラビアを思い出す。

夫の排泄物を前にして、強要される裕子。

……それを拒むと、猿のごとく床柱にくぐられ、強い鞭打ちをうける。ついに屈服し、開口具で開かされた口へ無理やり流しこまれ、涙を流す裕子。

眠るのも責めとなる。地下室で晒されるのだ。素肌にゴム引きのレインコートのみをまとい、坐るも立つもできぬ中腰の恰好で、大きな鏡に面して拘束された裕子、はじらいから生じる微かな動きがレインコートのすそをただけ、余計に羞恥をかきたてられるのだ。

レインコートといえば、ゴムの好きな裕子なのだ。嵐の夜、雨具を肌じかにつけ立木に縛られた裕子は、暗闇のなかで雨風に打たれ、よろこび泣き叫ぶ。

静かな山のなかで、白昼、責められる裕子……あまりにも明るい陽の下に、縄にせかれて身をくねらす裕子なのである。

拷問などというものではない。勿論、夫も裕子が郷里に行き家を数日あけたという事実が、刑罰を加えるにふさわしい罪であるとは思っていない。しかし、夫はあくまで苛酷な責めの執行人となり、妻の裕子は自由を剝奪

された女囚を装おう。一篇のドラマである。

ギリシア悲劇が暗い宿命を忘れるためのカタルシスとして起ったものとすれば、夫婦のSMプレーは、日常生活の深く暗い陥穽として近代以後の人間性を衰弱せしめている「アンニユイ」を積極的に打破するために、当然なさねばならぬドラマなのだ。

そう、プレイなのだ。裕子夫妻。この二人には常に無垢な魂を求める心の激しさ、謙譲さ、優しさがある。男女の魂が合致して放つ一閃の光を捉えうる繊細な精神のみが、プレイをドラマに昇華することができるのだ。自由を奪われ、自律性を全く喪失したときに、被虐をよろこぶ優しい女が誕生する、……このような奇蹟をはらむドラマなのだ。

拷問はちがう。自白の強要などという事務的な目的を伴うか、あるいは、憎悪という単一色の感情に動かされて行なう拷問というやつ。私はこれを好きになれぬ。拷問にはエロチスムを感じないからである。また、拷問的行為からは、決して優しい女を期待できないからだ。

たとえば、小森白氏の映画『日本拷問刑罰史』の一挿話。姦通した女が四肢を固定されローソクの火でじわじわと焼かれ、身をよじ

る。この場面においてはあるエロチックな戦慄をおぼえたが、女が木に吊られ、夫である武士の刀で三段斬りに斬って捨てられる結末となつて、私は失望の嘆息を洩らした。ねばい口腔にはグロテスクな残酷味のみが残る。

あの密室での責めのシーンのあとに、武家夫婦の屈折した情愛が何らかの形で展開するという期待から、私はエロチスムを感じたのだが、武士側の一方的な憎悪の表現に過ぎなかったのだ。私は完全にすかされたようだ。とすれば、あの責め場面は心理のエネルギーが描く軌跡には見当らぬ、つけたりの見世物であつたのだ。処刑の際に女の表情よりも、三段斬りのテクニックを誇示した小森氏とすれば、あの方が必然の筋書となるのだろう。

つけ加えれば、続篇の『拷問』を最後まで観ることができず、グエーッと嫌な思いをかみ下して、途中で劇場を去つたのは、はたして私ひとりであろうか。

人間が解体されてはならない。屈辱の極点にいる女にも微細な心理的必然は残っているはずだ。いかに意識の限界をさまよう女にしても、人間らしい優しさを受容する余裕があつてこそ、はじめてSMの夢幻境が成立するのだ。

ナチスはユダヤ人を大量に殺戮した。ユダヤ人の体の脂肪で石けんを作った。頭髪で電灯のかさを捻らせ、日常に使用した。

カラマーゾフ家の次男イワンの有名な神の不在証明、……母親の面前で赤ん坊の腹を銃剣で裂く兵士、赤子の顔先に銃が突き出されると、はしゃいで赤子は銃を取ろうと手を伸ばす、その瞬間にズドン、赤子の頭はめっちゃめっちゃに壊されてしまう。

あらゆる拷問は右の事例と相通じるものをもっている。そして、これらに出会うとき、私たちはある種の強烈な戦慄をおぼえるだろう。だが、私はこれを好まない。拷問的事件を現実経験したことはないが、その可能性が起るとすれば、私は極力かかるグロテスクを避けるであろう。『のおと・あと・らんだむ』の賢者千草忠夫氏に倣っていえば、エロチスムのないSMの世界などナンセンスである。拷問的行為にはエロチスムを伴うのがごく稀有であるから、私はつとめてこれを回避するのだ。

どこから話がそれたのだ。わが優しき女、裕子のもとへ急いで戻ろう。……そう、裕子たち夫婦はプレイによって、じわじわ襲い来る「アンニユイ」を忘れようとしている。

両手両足を一まとめに逆海老に縛られた裕子は、その不自由な姿のまま放置される。苦痛の末に顔を涙でぐしょぐしょに濡らしてやっと許されるのだ。

ある優美なプレイの形式。両手と両足を別々に縛られた裕子、制限時間内に、遠く離れた夫のいる部屋へ到達することを命じられる。襖を口でこじ開け、障害物としてわざと設けてある縁側の机を、不自由な身をくねらしながら乗り越え、彼女は目的地へ急ぐ。しかし、夫の膝に息も絶えだえに頭をおいたときには、時計の針は冷酷にもリミットの超過を指しており、お仕置として、夫はさまざまな甘美にして至難な課題を命じる。懸命に努力し、涙にむせびながら、裕子はその遂行に汗を噴き悶えるのである。

プレイに歓喜する日々が永遠に続きそうではないか。裕子たちのプレイは熟した、溶け合ったもので、もはや新しい形式など創造できぬ所までに達していたようだ。危ない。リフレイン、くりかえしという奴、こいつが倦怠を人の心に運びこむ運送屋だ。このまま進めば危険、死へのいざないを囁くアンニユイが裕子たちを取り囲もうとしていた。

だが、厳粛なドラマほど幕間の笑劇を派手

に要求される。突然シーソーゲームの一方が質量を失ったため、片方の裕子は不様にも地べたへ叩きつけられる。夫の急死である。空中で舞っていた裕子は、一気に地べたを這う獣と化したのだ。被虐の追憶をいだいて、あまりにも透明な都会の空気をさすらう女として、裕子は生れ変わったのだ。

笑劇か、ファルスか、いま私がこの言葉を使ったのは、私自身を励ますためだ。裕子は夫をなくしたとはいえ、既に徹底的なSM行為のうちに完全な融合、実存と実存が触れ合う瞬間を、いく度も体験したと思える。私の場合はちがう。ようやくSMの恍惚を実感しはじめたというものの、多くの未知の機微を秘めた青い肉体であった妻の真紀を喪失したのだ。だが、私はあくまでこれを笑劇としたい。私の人生のドラマには無関係な、あるドタバタ劇が終わったのだと思いたい。

裕子の場合は、七幕物の劇でいえば、六幕目の始まる前のファルス、もう劇の筋は決定されている。私はちよっと異なる。一幕が終った時に誤って演じられたファルスだ。また新しく一幕からやり直せる、と信じたい。

私事がまじり、失礼。ふたたび裕子の姿を追おう。

夫の面影をさぐりつつ、夜の月と星、ざわめく落葉に、わたしを責めて、と頼む。フランス象徴派の詩人たちに言葉を借りて、裕子は切ない胸のうちを吐露する。ある旅館で、プレイに耽ける男女の狂態をのぞき見して、胸をときめかせるのもその頃だ。

裕子はようやくプレイの相手を見出す。この雑文の冒頭「妖しき邂逅」に登場する青年だ。かなり強烈なプレイにまで発展し、絆がでし始めたころ、青年の母と称する老婆が登場、机一面におおむけに横たわる裕子を、失神するまでホースで殴りつけ、息子と切り離してしまう。甘美な陶酔など起ろう筈がない痛烈な乱打の下で、裕子はただ苦い涙をこぼしていた。

裕子はいかに秘密ショーの道具にまで転落する。

ゴム引きのレインコートを裸身にまとった裕子は、残酷で軽薄なサディストの群がるホールへ。首枷に首と手を固定され、折った膝を鎖で枷にひきつけられた裕子は犬である。犬の光る肌にムチがうなる。甘くはない、ただ苦痛のみを与えられるムチ、ムチ、ムチ。気を失ない横倒しになる裕子。失禁すら起る真の苦痛の極限の場である。

責めは多数の手によってなおも執拗につづく。片足に縄をかけ限界まで引き上げられ、つま先立ちで回転する裕子の肉体を、鳥の羽根がどっと襲い、おぞましいいくすぐりが始まる。豊かな胸を枷でしめられる裕子、朦朧とした意識の底で彼女は絶叫する。

……あなた、どこにいるの。わたしは汚ない女。こんないやしい人たちの手で罵られて、いるのに、愉悦の涙すら浮べている汚ない女なの。でも、あなた、わたしを助けて。あなたがいつも賞めてくれた、わたしの無垢な心っていうの、いまでもあなたお一人のものですわ。わたしを連れて行って、あなたのお側へ、そして、いつもしたように、責めてちょうだい、ぶってちょうだい、あなたの透きとおるような御足でめちゃうくちやに踏みつけて下さいまし、裕子を救って！

私の胸裡からは果しなく裕子のいとしい姿態が湧き出そうだ。でも止めよう。手前勝手な自慰は戒めねばならぬ。だが、裕子は私の最初の優しい女である。そして、おそらく私が生涯の棲家となすSMの世界にあって、つねに私の行為や形式を決定する大なる力としてとどまってくれるだろう。裕子は私の求

めに応じて、いつでも想像の空間をいきいきと飛翔してくれるのだ。

青くさい青年が、いま、当時の裕子と同じぐらいの年齢となり、以前より一層つよく裕子を思慕している此頃だ。

群舞する優しい女たち

古川裕子は去った。彼女は私の心に嗜虐の世界、……確実に存在しているが、未開拓な妖美な領域への志向を植えて、姿を消した。私大のフランス文学科に進んだことも、彼女との出会いが最大のモメントとなったといえる。象徴派を好んだ。

例えば、アルチュール・ランボー、『地獄の季節』の一節。

「もう秋か。だがなぜ永遠の太陽を惜しむのだ。われわれはきよらかな光の発見につとめる身ではないか、季節の上で死んで行く人びとから遠くはなれて」『アデュー』

平板な感覚をすて、新しい感覚の発見に心をくたく。そして一度とらえた新鮮な感覚を洗練し、それを生活の核として生きぬく、これこそ私の人生だ。ランボーのいう人きよらかな光√：クラルテ・ディヴィーヌとは何処で見つかるのだ。そう、SMの世界にはきつ

とクラルテはある。いや、その世界の彼方に存在するかもしれぬ。ともあれ、出発だ。

漠然としていたが、かなり激しい信念につき動かされて、きよらかな光を求めて私の行脚は始まった。そして今、洗練されていないかもしれないが、完全に皮膚感覚にまで達したS感覚で、私は生きている。いま欲しいのは、大学入学当初の一途な思いである。

現実にも私の感覚的実験に身を供してくれた優しい女たちがいる。だが、最後の伴侶であった妻の真紀を今年二月に失ってから、私は完全に孤独だ。でも彼女たちはいつかフイクションとして造型し、その優しさを私自身も再体験したいと思っている。葉子という女性と訣別した後の淋しさを、傑作『痴人の糧』に結晶させた山本一章氏に倣って。

話を交えて、十年来の知己『奇ク』誌上に登場し、私の心に触れた優しい女たちを語りたい。思いつくままにである。

古川裕子に似た面影をもって私の脳裡を占拠したのは、小説『淫火』の小百合夫人である。たしか松井頼子という人の創作で、喜多玲子氏の、繊細でのびやかな挿絵が非常に美しかった。

『淫火』に登場する人物はすべて嗜虐の世界

に生きており、M性のほとんどないと見られる貴婦人の小百合が、もっとも執拗な責めを加えられるといった構成のものだ。小百合夫人は『花と蛇』のヒロイン静子夫人の原型といえよう。

浴衣だけの裸身を笹やぶに投げ出し、後手を縛られているゆえ脱れるすべもなく、しだいにだけける肌を、蚊や虻にさいなまれる小百合夫人。

サディストの家に連行され、装身具までも剥奪された小百合は、首と太股を短かい紐でつながれ、尻をつき出したヨチヨチ歩きの引廻しを受ける。そして大きなそろばんの上に坐らされ、その上には重い裁ち台が置かれ、なお無惨にも火ばちをかかえた恰好で、まき上る煙に責められ、身をよじる小百合。

ついに秘密ショウに出演させられ、くすぐり責めにあう。そしてパートナーの被虐女とともに徹底的に責め抜かれる小百合夫人なのだ。その熱っぽい舞台をじっとみつめるMの夫という仕組みであった。

私は次々と強烈さを増してくる責めのフォルム（形式）を激しく追ったものだが、小百合夫人は裕子ほど私の想像の宇宙を羽ばたかなかった。小百合夫人には女の実存を感じさ

せるような体臭が稀薄だったし、責める側のSに形而上的な裏づけがなかったからだ。いま思っても、小百合という女性とは係りなく責めのフォルムだけがパノラマのように浮び上る。

エーゲ海で戯れるニンフのごとき明るいM女性を描いた蒼野礼氏の諸作にも触れたいが印象がまとまらないので、先に進もう。

『奇ク』グラビアに若い肢体をみせた優しい女たちへも一瞥を加えねばならぬ。私の心に縛られた女の型を彫りこんだのは、彼女たちであるから。

だが、グラビアのモデルについて、私はある疑惑をもっていた。彼女たちは職業としてかかるモデルになっているのであり、誌上の表情や姿態はあくまで偽装されたマゾに過ぎないのではあるまいかと。

絹川文代、固く青い乳房が年月とともに円熟したまろやかさをつけていった、あのノーブルな彼女に私はすっかり魅了されていた。しかし、その文代嬢が、M男を責めるフォトリに欣々として役割を演じているのを知って、私は唖然としたものだ。

右のような心の蠶を徐々に払いのけてくれ

たのが、次の女性たちだ。

梨花悠紀子。塚本鉄三氏の友人の妹とかいうこの素人娘が、モデルとして責めのポーズをとっているうちに、凄絶な吊り責めすらのぞむマゾ性を開眼していったのだ。彼女がのちに伊吹真砂子と演じたというSMのドラマを、フィクションによってでも、辻村氏かだれか具現してくれないだろうか。ともあれ裸身に前かけをまとい、爪先立った緊縛の身を静かにうなだれている悠紀子の姿は、エロチズムの化身といえるほど美しかった。

東浦ひかる。最初のグラビアに接したとき私の驚嘆は大きかった。今までにない、恐ろしくきつい責めのリアリティがそこにあったからだ。奇妙なしっぽを植えつけられ、馬として引廻されるひかる。顔中を縄でくびられ虐められるひかるなど、みずから強く被虐を

求めた彼女にふさわしいものであった。

そして、関谷富佐子。激しいムチ打ちを願う貴婦人、天性のマゾともいうべき女が実在したのだ。古川裕子の再現、私にはそう思われた。私の妻となった真紀が現われたのも、ちょうどその頃だ。六三年、呻く媚態を塚本鉄三氏の前でくりひろげた富佐子。六七年、辻村隆氏のおびただしい甘い鞭を浴び、マゾの極限を開示している富佐子。私はギクリとする。真紀の表情なのだ。

……口に、ひとつのみかんを頬ばり、膝にもひとつのみかんをはさんだ真紀が、うしろ手を結えられ、赤い部屋のまわりをヨチヨチ歩いている。胸が大きく震えている。みかんを落したら罰が加えられるのだ。何度も何度も動物園のサルさながら、真紀は廻っている。

汗が輝やく。そしてリミット。動物はドタリ横転する。

「どうしたのだ」と私。真紀は頬を畳にこすりつけ、みかんをやっと吐き出す。白く唾液が流れ出る。

「罰だぞ、罰だ」

「だいて。……ねえ、抱いて」

坐る私の膝に頬を押しつけ、伸び上ろうとする肩先に一閃のムチが、……真紀は不様に転がる。うらめしげな視線。

「おねがい、もう許してください」

「バカッ」

二つ三つ、細い鞭がしなる。打たれながらもにじり寄る優しい生物。私はその長い髪をつかみ、引き上げる。

「三十回まわれと命令したのに、その半分も遂行していない。お仕置だ。いいな」

おとなしい獣は、うなずく。床の間の柱がその場所だ。柱と垂直に延びる円いガラスの棒。

ムチが飛ぶ。

「イイイ……」

はじめは野獣の音声。それが、やがて赤い肌面に紫色の筋が走るころ、

「ぶって、もっとぶって。あなた、もっと虐

天星社刊 〆限定版グラビア写真集 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」

二女緊縛『女斗緊縛競艶写真持集』 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美8」

「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部 一〇〇〇円 (送共) 略号「美9」

M写真集「女王様に飼育される日々」 一部 一〇五〇円 (送共) 略号「M特」

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

めて。このまま殺してください。アア」
しかし、いつも燃えたぎる妻を残して、私の情熱は断ち切られるのだ。プレイの終焉だ。真紀！唇をつけると、強い力で反応を示す。私はたじろぎながら、その奔放な生きもののなすがままになっている……

思わず話がそれてしまったが、六三年一月号の『奇ク』、「笞打ちに悶える媚態」……すなわち関谷富佐子の恍惚の表情に目を曝している、急に真紀のことがしのばれ、胸がしめつけられる思いがしたのだ。

ひかる、富佐子の出現によって、静的な美であった『奇ク』グラビアは、動的な行為の要素が加わり、人間臭の濃厚なグラビアに変化したのだ。

そして、この傾向は、グラビア廃止後は、『奇譚三十九夜物語』の作者、柔軟な精神の所有者、辻村隆氏によって深められ、洗練され、その「SMカメラ・ハント」はM女性の細やかな感情の襞までのぞかせるに至っている。毎号新たな女性のMを展示してくれる辻村氏の労作や山本章氏の「カメラ・ルポ」には、いつも敬服しているが、深い羨望も禁じえない。

アケミをめぐって

わが『奇譚クラブ』はここ二、三年、目をみはるほどの大きな質的進歩を遂げたように思われる。グラビア廃止のさびしさを完全に凌駕した、内容の充実である。『奇ク』誌の本質すら変りつつあるのではないか。

主たる要因を具体的に述べれば、いまなお羞恥責のフォルムを余すところなく展開しつつある、団鬼六氏『花と蛇』のエネルギー的な連載であり、プレイという名のエロチックな行為を一篇のドラマに結晶させている。

辻村隆氏『SMカメラ・ハント』の健在であり、今までごく私的な趣味的な範囲内にあったSMの嗜好を、一挙に思想的一般的な位置に高め、新しい人間性の確立のためのサディズムといった問題提起をなした、千草忠夫氏『のおと・あと・らんだむ』の活躍であり、はてまた千草氏の形而上的な視点の延長上に生れたとさえ錯覚しうる、サディスティックな思想小説、山本章氏『痴人の糧』の連載である。

『花と蛇』については、六七年三月号所載の九鬼二郎氏の感慨にかなり同調する。この小説が本誌に掲載され始めた当初、千草忠夫氏

にも劣らぬほどこれを熱愛し、くい入るように読んでいた私だが、最近号においては三行とばし読み程度に接しているに過ぎない。なぜか。

『花と蛇』前篇の終りに、次のような叙述がある。剃りあげられた後の、静子夫人の心の動きである。

その瞬間、静子夫人は、自分の体内に、新たに生れて来た別世界の女の血が、小さく渦巻き出して来た事をはっきり自覚した。

続篇が登場したとき、私は期待した。静子夫人はこれからどのように、マゾの女として変貌していくのだろうか。だが、私の期待は満されなかった。静子夫人はいまだに優しい女として生れ変っていないのだ。

綿々と羞恥責のさまざまな形式がくりひろげられているのだが、これを受ける静子夫人をはじめとする受難の美女たちの心理的反応はまことに単純なのである。被虐の女たちが成長することは、作者によって全く拒否されている風にも見える。小道具や、小情景のみがめまぐるしく変化しているだけだ。

かつていきいきと息づいていた静子夫人の

生身の美しさは、もはや見られず、リモコンで動かされる金属玩具のごとく、女体の剥製がギコチなくうごめいている風景が、この頃の『花と蛇』ではなからうか。

しかし、この作品はその通俗性により、本誌の読者層をぐんと広げたことは否めない。いや、他人事ではない。私個人について云っても、妻の在世中、責めのフォルムを存分に教授してもらった作品なのである。感謝は述べきれないが、私のような読み方をしている読者としては、最近号の『花と蛇』はやはり不満足で、団先生よ、一度おすてになった、形而上的な可能性を追求してください、と頼みたくなるのだ。妄言失礼。

妻が私の視界から姿を消したのは二月だ。ごたごたのあとで、へんてこりんな虚脱感が残った。六月のある日、二十冊ばかり『奇ク』を書庫の隅からひっぱり出して、ひとりぽっちの部屋にひろげてみた。

『痴人の糧』を一気に読み、ふたたびなめるように読んだ。漫然と読み捨てていた『のおと・あと・らんだむ』を(一)から(九)まで目を通して、眩むような衝撃をうけた。これらの影響か、妻のイメージが明確な形を伴って、甦ってきたではないか。

私は気づいた。妻真紀とのSMの交わりにおいて、私は強烈な実感のみを追っていたのだ。そして、『奇ク』の小説、SMカメラ・ハントなどを実際のプレイのための資料に用いていただけだ。パターンとして。

なんと愚かな接し方であったのか。『奇譚クラブ』はもっと深い内容を包む雑誌であるのだ。『奇ク』を通じて、私は妻との間に、もっともっと豊かな日常を保てたのではないか。残念だ。でも、これはくり言である。

追憶であれ、未来への欲求であれ、私は全エネルギーを傾注して、私のSM感覚を結晶化していくだろう。これが私の道だ。

さて、この雑文の最後は、やはり優しい女でしめくりたい。『痴人の糧』のアケミがふさわしい。澆刺とした肉体と、柔らかな心をもつSの女性だ。千草氏の創造した淑子はともすると、猛の意識のかげに隠れて見えなくなるし、まだ馴染めない。

アケミがいい。少し理屈っぽく、わが優しき女アケミと、その周辺を探ってみよう。

虐められて喜ぶ女、恥辱と苦痛の中で、快感すら感じる女。：性の喜びは未知の世界に

あったが、自分が虐待の中で感じる痺れるような恍惚に較べれば影が薄いようであった。

(狂妄)

アケミは天性的にマゾの女だ。SMの世界にのみ属する人種だ。セックスすら、この世界外の領域とされ、アケミがそこに没入することを許されていない。実際、アケミの主人たる大山に肉体を委ねたときの歓喜は、数人の男に強姦される時の感情の高ぶりより、はるかに劣るのである。アケミにとって、セックスは単純すぎるのであり、そこでは己れの実存に触れることはできないのだ。

彼女の媚態を眺めているうちに、彼女を徹底的な苦悶と屈辱の中に投じる意欲がより強く、湧き上ってくるのを感じた。犯されたい、泣きわめけばいい、汚され血まみれになったらいい——それでも、なお俺を愛せるか。

(汚辱)

アケミに慕われる大山は、このような男である。完全なサディストである。否、感傷的なニヒリストと称する方が相応しい。政治参加は勿論のこと、この世に自分を委ねるもの

を、何一つ見出すことができない男なのだ。だが、常に生の充実を求めている。感覚的な触角はいつも鋭く働いているのだ。

「現代のスタヴローギン」と名づけようか。

しかし、ドストイェフスキ『悪霊』の貴公子スタヴローギンが、観念的に人生の意味を擱もうとする理性的なニヒリストであるのに対して、わが大山は宿命から生じる感傷的な体臭を、いつも漂わせている感傷的なニヒリストなのだ。

アケミ、おれはおまえが好きなのかもしれない。でも、おまえを極度に凌辱し、おまえの肉体や意識を崩壊寸前にまで追いやらなければ、おれはおまえを受け入れることができないのだ。許してくれ、この呪われた宿命を、右のような叫びが大山のものだ。SMの世界を彷徨しながらも、なお本質的な満足の得られぬ大山は、その焦燥から、女たちを徹底的に虐める。しかし、アケミにしる、セツコにしる、百合子にしる、大山からにじみ出るこの感傷ゆえに、余計に彼をいとしく思い慕いつづけるのだ。

鄭はセツコの尻を撫でながら、唇を寄せてきた。彼女は悪寒が背すじを走るような気も

ちになって、顔をそむけた。（矜りもの）

大山のような感傷をもたぬサディストたち（鄭や老人や医者）とは交歓し、真に触合うことを、女たちは拒絶する。言葉を替えて述べれば、大山はエロチズムの範囲内におけるサディストであり、鄭らはエロチズムの限界を逸脱し、女の首を切断するとか、肋骨をへし折るたぐいのグロテスクな領域にまで突入する可能性を孕む。徹底的なサディストなのである。

グロへの傾斜を有する、かかる徹底したサディストたちは、マゾの女がキラリと光らす微妙な優しさなど、ともすれば無視する。ところが、その微細な間隙にこそ女の全生命が賭けられているのだ。それをないがしろにされた女は、男をただ憎むだけだ。

十字架に縛りつけられたアケミの首に、大山はグロテスクな蛙をつるす。おそらく、この延長上に鄭・老人のグロテスクな欲望が渦巻いているのだ。大山がはじめて見せた、グロへの傾きに、私はハッとした。だが、これこそ鄭の本性を象徴しているものであり、十字架上のアケミの裸身を喜悅する鄭の心のうちには、いつも残酷なグロを希む、暗い欲望

がある。そして、おそらく、グロを求むサディストは、女の実存と男の実存とが触れ合う恍惚の時間など経験することは、できないであらう。

「アケミノ！ しっかりしろ。アケミノ！」

手首の縄を解きながら大山は泣いていた。

……「きらいになった？」

彼女は頭を横に振ると、彼の喉もとへ坊主頭をもたせて、顔をうずめた。

……彼は迷っていた。そして彼は、アケミの全身を拭い終った時、決心した。（アケミは俺のものだ）

（わたしは大山さんのものになった！）

自分は大山のものになったという満足感が現実のものとして存在した。……大山とアケミの二人は、この時点において正しく孤独と訣別していた。あるいはこの結合が更に二人を孤独に追いやることになるかもしれない。しかし今の二人にとっては、未来もなく過去もなく、現在だけが幸福感をはべらして存在しているだけであった。

愛とはそんなものかもしれない。（拷問）

大山に命じられれば死ぬことも辞さない、

可憐なアケミなのだ。右の引用文のごとく、大山とアケミは「愛の瞬間」を共有する時がある。だが、これはかげろうのごとく、余りにも淡く短いものなのだ。大山＝山本章氏は完璧主義者なのだ。淡い触れ合いに定住し満足できる性質の人ではない。

「汚辱」において数人の男に犯され、「女の国」において、百合子・セツコに責められ、はてまた「雪国への旅」で生命力の極限までもて弄ばれるアケミなのだ。大山の完璧な結合をねがう執着が、アケミを次々とあくどい凌辱の沼へと叩き落す。

大山の求めるクラルテ（輝き）とは何か。それは千草氏のいう「洗練されたサディズム」かもしれぬ。

俺はこの女を本当に愛しているんだ。汚されてしまった女だが、俺の女なんだ。

（雪国への旅）

この大山の叫びとともに、一応「痴人の糧」は終わった。一応、飽くまで一応である。続篇は必ず山本氏の手によって書かれるものと、私は確信している。アケミのモデルである葉子嬢への追憶が終ったにせよ、現在、カ

メラルポで新しい触れ合いを重ねている山本氏のことだ、形而上的に高まった地点を把握するにちがいない。

このフィクションの果てに、なにか驚異的な人間性の発見がなされるかもしれない。私はそれを待ちのぞんでいる。

ただ気にかかることが一つある。大山の姿勢である。大山は決してグロに墮することはしない。しかし、他人に委ねてアケミを汚すことが余りにも多いのである。新しい人間性の開発などという大冒険にのり出しているサディストなのだ。被虐体であるアケミとギリギリの対決をなさねばならぬ。それなのに、今までの大山のエネルギーは稀薄で淡泊すぎるのだ。是非、彼みずからの手でSの行為を、そして極限にまで灼熱した彼の精神が、新鮮な優しい女としてのアケミを創造する、……私はそう願う。

ともあれ、アケミは若い。アケミの輝く肉体には決して荒廃は訪れぬ。夜に苦悶の跡を刻みこまれても、翌朝になれば、白磁の美しさを取り戻し、光輝ある弾力をみせる、わが優しい女アケミなのだ。

彼女の未来にクラルテあれ！

ニヒリスト大山氏も、悠然と浸りうる充実

した湖を、わがものにしたまえ！
新生は此岸に、……このSMの世界にこそあるのだ。

以上で、この稿を終る。雑文を私評論などと名づけた愚かさを、いささか悔いはじめている。私の性癖としては、批評的な言語では物事のコアを語ることは難しいようだ。いまこれに気がつき、言い残した諸事が、本当は最も重要なものではなかったのかと、反省している。

だがこれを執筆している間、妻なき寂寥がかなりまぎれたようだ。とすれば、私の自慰的な文章につき合ってくれた諸兄姉に深謝しなければならぬ。

背徳の徒という勿れ。女性の敵と指弾し給う勿れ。願わくば、夜空に太陽を求め、山中に大魚の群を望むに似たる心情を扱み、虹の美をわが手に握らせ給え。

さらば同好の士よ、つぎは己れのフィクションに酔いしれる痴人として、ふたたび現われることもあるう。

（終）

（タイトルフォト・絹川文代）

〔 創 作 〕

枕 辺 に 訪 れ る

吾 が 理 想 妻



残 照 の 中 で

河 村

操

夜七時に会社から帰った。私の家は郊外にある公団住宅の四階の一室である。階段を踏む靴音がハネ返って私をつつむ。

入口のドアをあけた玄関口にはすぐトイレがある。その中の美佐は、もう鍵をあける音

で、いや足音で私の帰宅を知ったことだろう。きつとすぐに出してもらえると、身を揉んでいるに違いない。

私はわざと便所を無視してキッチンから奥座敷に入る。暑い。クーラーをつけ、テレビ

のスイッチをひねり洋服をぬぎすてゆっくり一服つける。それから、やっとトイレの戸をあけてみた。

美佐の目がとびつくように私をみる。「ムウツツ」と猿ぐつわの奥でうめいている不由な体がクネクネと許される範囲一杯に悶えをみせる。この暑い最中、朝からいままで便所の中にとじこめられていた美佐は、衣服は何一つないとはいえ、顔も、身体も涙と汗でべっとりと濡れている。

猿ぐつわをしらべる。ゴムボールをくわえるようにした特別製のものだ。ボールを押えるゴム帯がホホにくいこみ、後頭部にまわりさらに頭の上で交叉するようになっている。ゆるみもしない。

首には真黒で巾広ななめし皮の首輪がピッチリはまっている。鈴がまわりに四つつけてある。あまりあばれると鈴の音が、外へまできこえるようになっていく。

両手を背中に背負わせて交叉させ、黒の細く丸い皮紐で縛り、身体の正面で丹念に菱縄にしてある。洋式トイレなので馬乗りにならず、両足首に鎖をつけて便器のまわりにつないである。腰縄を便器のうしろの、水洗把手に縛りつけておいたのも、そのままだ。当

然のことだがびくともしていない。

私が朝、家を出たのは九時すぎだから、美佐は約十時間、この拘束のままトイレのせまい世界の中でうめいていた訳なのだ。自分から望んだとはいえ、さぞ苦しかったに違いな。チットはこたえたことだろう。

猿ぐつわをといてやった。ホホにゴム帯の跡がクッキリと浮び上っている。

「どうだ？」

「お、おかえりなさい」

「だれかきたか？」

「朝からベルが、何度もなったわ。洗濯屋や米屋の外、昼頃、近所の奥さんも二、三度きたようだったわ」

「それで？便所の中はよかったのか、わるかったのか？どっちだ」

「やっぱり、丸一日はこたえたわ。でもあなたにされることなら、どんなことでも何ともいえない良い気持」

「腰をあげろ」

私は美佐の腰縄と鎖を解き放し外に連れ出した。

「縄をといてやるから、すぐ飯の仕度だ。風呂をわかそう」

「ハイ」

美佐は背中をむけて、解放されるのをまっ待っている。

さすがに空腹の夕食はうまいらしく、美佐の食欲は旺盛である。つい先刻までの苦しかったことなど忘れたような顔付だ。

「あなた。会社で私のこと考えてくれた？」

「冗談いうな。仕事の忙しいときに、そんなこと考えていられるか」

「そう。私はずっとあなたのことばかり考えていたわ」

「十時間もか？」

「そうよ。だってそうするより他には何もできないじゃない。身体を動かせば、動かすほど皮紐がくいこんでくるし、首の鈴はすぐ鳴るし、暑くって暑くって、気が遠くなりそうだったわ」

「お前の方から望んだことだからね」

「そりゃそうだけど。……でもね、あなた、きつと会社でソワソワして、私の姿ばかり想像しては仕事をトチって、課長さんに叱られてるに違いないと思っていたのよ。イイ気味だ……と」

「こいつ」

「フフフ……。ごめんなさい」

団地のせまい風呂は二人で入るには不便で仕方がない。まして美佐は後手に縛られた、木侶^{デク}の棒だから始末に困る。

風呂へ入るまえに美佐は今日は白い麻縄をえらんできた。「括って」縄束を私に渡して風呂の入口で後手にくんでまっ待っている。

両手首を縛って、二の腕はさけ、腋の下から前へまわし首にかけて、前面で×に交叉させ、また後にまわし縄どめをする。

「こんなの、たよりないなあ」

「今日はこれだけだ。文句をいうな」

美佐のハチキレそうな若い肉体は、今朝からの十数時間の縄かせもはねかえし、風呂を出るときは、ピチピチした輝きをみせている。

夜はテレビの前で一刻をすごす。私も美佐も「ながら族」で、雑誌をみながら、テレビをみる。

「あなた、めくってよ」

美佐は自分のよんでいる雑誌の頁をめくれと催促する。

後手錠をかけられているので、自分で頁をめくることが出来ないというのだ。

「めんどろだな。頁くらい自分でめくれるだろう。俺は忙しいんだ」

私はテレビをみ、雑誌をよみ、コーヒーを飲む。美佐の方までめんどろをみきれない。

美佐は仕方なしに、わざとウンウンいいながら腰をねじって後手錠の不自由な手で、大げさに頁をめくる。

テレビにも、縛り場面のあるが多い。そんなときは、私も美佐も雑誌はそっちのけで画面に熱中する。美佐は熱中すると、後手錠のまま、私の膝に倒れかかるようにする。

「コラ、しっかりみてろ」

「いじわる。私の方もみてよ」

今日は土曜日、週末を利用して、山へ一泊旅行にゆく予定である。午後一時、会社を出て車を美佐との待合せ場所に走らす。

土曜日の午後、仕事から解放された若者が、はなやかな色彩を街にあふれさせている。中には早くも家族づれで出てきた人達もある。都会の繁華街は流行と活気の氾らんでいる。

美佐との待合せ場所は都会の熱気が最も充実した〇×デパートの前にした。

「いやよ。そんなところ」

と今朝、美佐は私の命令をきいて半ベソをかきながら、抗議した。

「いやとは、なんだ。命令に背く気か」

「だって……」

「バカ、命令だ。いいか、一時にまっているんだぞ。いいな」

「ハイ」

しぶしぶ美佐はうなずいた。可愛想に。

車は〇×デパート前に近づく。指示していた場所前を道路寄りに、後続車をさけ、ゆっくり走りながら、美佐を探した。

居た居た。沢山の待合せ人のラララ、デパートのショウウィンドに身体をすりつけるようにして、美佐がキョロキョロ私の車を探している。窓から手をふってやると、救われたような顔をして、かけよりかけた。前にいる人達がジロリと美佐をふりかえるので、たちまち顔を真赤にして立ちすくんでいる。

勿論こんな場所では駐車できないので、私は車の中から、大きくジュエスチュアをして数百米いったところで駐車する。

やっと車をとめてふりかえってみると、美佐はもう前後もわきまえぬ態で、一目散に私のところへ走ってきた。すれ違う人たちがビククリしたような顔をして、彼女をふりかえり、見送っている。

美佐は、とびつくようにドアに手をかけ、助手席にころげこんだ。息をきらしながら、「早く早く、走って」

「ヨシ、ゆくぞ」

今日の彼女は特に美しく装っている。強すぎるくらいのアイシャドウもドギッサは感じない。流行の漆黒のドレスに黒の手袋、それに、黒白の大たんな配色の帽子、大柄でスタイルのよい彼女によく似合う。今朝の私の指令通りだ。ただ、彼女が困るのは足もとだ。ミニスカートからのびた細くしなやかな足先にはいてるのはダブダブのゴムの黒長靴なのだ。もう半月近く、秋晴れの良い天気がつづいている。まして今日の土曜は絶好の澄みきったような好天気。こんな日に、美佐のような最新流行のドレスをきた、若い素質らしい美人が、何の為にゴム長靴などを。それもエナメルブーツなんていうしゃれたものに程遠い、まったくレイン用の不恰好なゴム長をはいているのだから、みんながジロジロみるのはあたりまえ。ましてこの恰好で家をでて地下鉄にのり今まで最も繁華な〇×デパート前で私をまっていた美佐は、それこそ穴があったら入りたかったに違いない。しかし私の

今朝の命令はこの通りだったのだ。

助手席で、フウフウいい、肩をあえがして小鼻をふくらませている美佐を横目でみながら、私は大声で笑った。

「いじわるね。なによ、笑ってないで、しっかり運転して」

「本日のご気分をおたずねしてよろしいか、美しい奥様」

「ええ、結構よ。最高！」

私は美佐のタフを心から喜んだ。

「ねえ、あなた」

「なんだ」

「もう着替えていい？」

「そうだな。その先でとめるから、後の席へかわればいい」

大分、街はずれにきた工場街である。街を出るまでにまだ用事が一つ残っているの、このあたりで模様をかえることにする。車を一たんためて、美佐は素早く助手席から出て後部座席に滑りこんだ。後部座席には大きな衣裳カバンを積込んである。カーテンを閉めて彼女は着替えにかかる。

「おい、早くしろよ」

「エエ、もう少し」

わりに早くカーテンがあいて、美佐はブル

ーのハイネック、ノースリーブのピタリしたセーターにクリーム色のストラックス。ゴム長はぬぎすてて、ブルーの紐なしのスニーカーという軽快な姿で、助手席に帰ってきた。頭にはチェックのスカーフをかむっている。

「オーケー。出発進行！」

「ザァツ、ライツ」

再び前進、街を出きるまでに、場末の一寸した商店街がある。そこでゆっくり車を走らせて、ある店を探す。

「おい、しっかり、みてるよ。みおとすな」

美佐は両側をキョロキョロと見廻しながら商店の看板を追っている。

「アッ、あった。あなた、あそこ」

そこは間口二間ほどの小さなロープの間屋さんである。店の手前で前道によせて車をとめる。

「おい。お前、買ってこい」

「私が？」

「そうだよ」

「ウフン。何というの？」

「私が括られる縄がほしいんです、といえよ。太さはどのくらいがいいかしら？」

「よくしなくていい縄はどれがいいの？」 決してゆるまないようなのがほしいの。

「長さもはかってみて」と、そういえば教えてくれるさ」

「ひどいっ。でも、そういえば店の人、どんな顔をするでしょうね。ねえ、あなた。店にどんな人がいる？」

「おやっ。きれいなかわいい女店員が店番をしているぜ。おい、美佐、ほんとにそういつてみるよ。あの娘どんな顔をするか、面白いよ。やってみろ」

「ホント？ フン、あんな女の子なら、そういつてやろうかしら」

「おい、とにかく早くいつてこいよ。長さは十分とるんだ。そして真黒の麻縄があれば、それにするんだ」

「ハイ、わかりましたご主人様。美佐は只今よりあのお店に行って、女店員に用途を話した上で、美佐を括り上げていただく為に、私の好きな黒い麻縄を買ってまいります」

「ヨシヨシ。なかなか上出来だ。ただし、お前の好きな、ではない。僕の好きなお縄をだ。それをさがしてくるんだ」

「ハイハイ。かしこまりました」

美佐は、助手席をすべり出て、店に入ってしまった。女の子としきりに話している。やがて女店員が奥から黒麻縄の束と大きなハサミ

をもってきて、どのくらいきるか、きいてい
るようだ。美佐が縄を両手一杯にのばして、
胸にぐっとまきつけるような恰好をした。女
店員がびっくりしたような顔でみている。な
にをいつているのか？ 私も傍にいて、店員
をひやかしてやればよかったと後悔した。

やがて六米ばかりきった黒の麻縄束をもつ
て美佐がかえってきた。街の人がみているが、
彼女はもう平気のようだ。今度はこちらが、
ヒヤヒヤしだした。

「おい早くしろ」

私がいそがす番になって、いよいよ出発、
街を出ることになった。丁度二時、車はバイ
パスを快適に走る。美佐は縄を膝にのせ、ま
いたりのぼしたり、輪にして手首を入れた
り、わざと私に無関心な風で、縄と遊んでい
る。

「オイ、それをしまっとけよ」

「あら、おめざわり？」

「バスやトラックから見下されたら見えるじ
ゃないか」

「まあ、あなたは、それでお困りになるの？
これから私はこの縄で、後手に括られに行く
のって、大声でいつてやろうかしら」

「おい、運転中だと思って、そんな口をきい

ていいのか。あとでおもしろしてやるぞ」
「それが望み！」

「なにっ」

「ウウン、こっちのこと」

横目で笑いながら口誦むハミングが調子よ
く車の響きにのって、高速道路の快適なドラ
イブがつづく。

車が山荘についたのは、もう午後五時を大
分まわっていた。私は車を降りると、助手席
のドアの方にまわって、戸をあけてやった。

「おりろよ」

「ハイ」

美佐は不自由な身体をくねらして、スラッ
クスにスニーカーの両足を車の外に出し、身
をかがめるようにして外へ出た。

もうさきほど買ったまあらしい黒麻縄
が、ピッタリとした美佐のブルーのセーター
の上で、キッチリした菱型を二つつくり、肩
からむきだしの二の腕に二カ所と肘の下にギ
ッチリくいこみ、首縄がハイネックのまわり
に二重にまきついて、背後にまわされた両手
首を高々と吊りあげていた。ここへくる途
中、車を山の入口で止め、美佐を林の中につ
れこんで、念入りに縛りあげたのである。

山荘までの途中、車やハイカーにあうおそれ
があるので、上からジャンパーをきせておい
た。大分すれちがった車があったが、気づい
たかどうか。縛ったままで約一時間は走っ
た。美佐はカーブになると窓や、私の方にゴ
ロゴロとこるが。私の方にコロがったとき
は、「キスして」と甘える。

「バカめ。死にたいか」

「死にたい！」

「括られたままの死体を、みんなにじろじろ
みられるぞ」

「あなたもバカね。それ、私に関係ある？」

「まあ、ないね」

幸い、カーブもきりそこなわないで、山荘
についた。美佐はウキウキしている。

「まあ、ステキ！ きれいな場所、かわいい
ロッジ！ まる一日半の私達のお城。早く入
りましょうよ」

たしかにすばらしいながめだ。中腹の台地
林にかこまれ、雲海をみはらす絶好の場所。
そして両手を高々と背中に背負わされた菱縄
も嚴重なかわいい美佐。彼女は私達の一日半
のお城、といったが、本当は彼女にとって一
日半の楽しい折檻部屋なのだ。そして、彼女
は心からそれを喜んでいる。立木がある。枝

ぶりのよい絶好の吊り場所もある。今彼女が身につけている黒麻縄の外に、勿論トランクの中には、手錠も鎖も、いろいろな皮のかせ具も揃っている。

「そうだ。このあたりの土は柔かそうだ。スコップももってきたことだし、今晩は美佐にゴムの帽子とゴムの潜水衣をさせゴム長をはかせ、鎖と手錠で後手高手小手に縛りこの土の中に首だけ出し一晩中、生埋めにしてやろう。顔のまわりには金網をかぶせておこう。ここには蛇もいるだろう。網のまわりを蛇が

はいまわったら、美佐は何というだろう。勿論、猿ぐつわは嚴重にしておこう。

私は、この思いつきにワクワクしながら、美佐をみた。

後手にしばられたままの彼女は居間からベランダに出て、消えゆく残照に見入っていたが、フト私の視線を感じてふりかえった。私の顔の中に何かをよみとったのだろうか。居間に入ってくると、じゅうたんの上にスラックスとスニーカーの足をキチンと折りまげて正座した。

「あなた、美佐をいじめて。思うぞんぶんにおねがいします」

彼女は、おでこを床につけて、深々と私を礼拝した。高々と両手首を背中に括り合わせて、血色を失ったような可愛い指が、薄暗い暮色の中に白魚のごとく、うごめいた。

明朗なおちゃめ。そして美しい肌と驚くばかりのタフさを持つ女。それに加えて、拘束を喜び、被縛を好むマゾ性。私の求めてやまぬ女性像、美佐。理想の妻、美佐。……夜が明けても消えないで貰えないだろうか。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには

大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会
社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何
月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ
になりましたので、予約購読料は三月分三冊
一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分
十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間
誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送
料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御
送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読
者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。

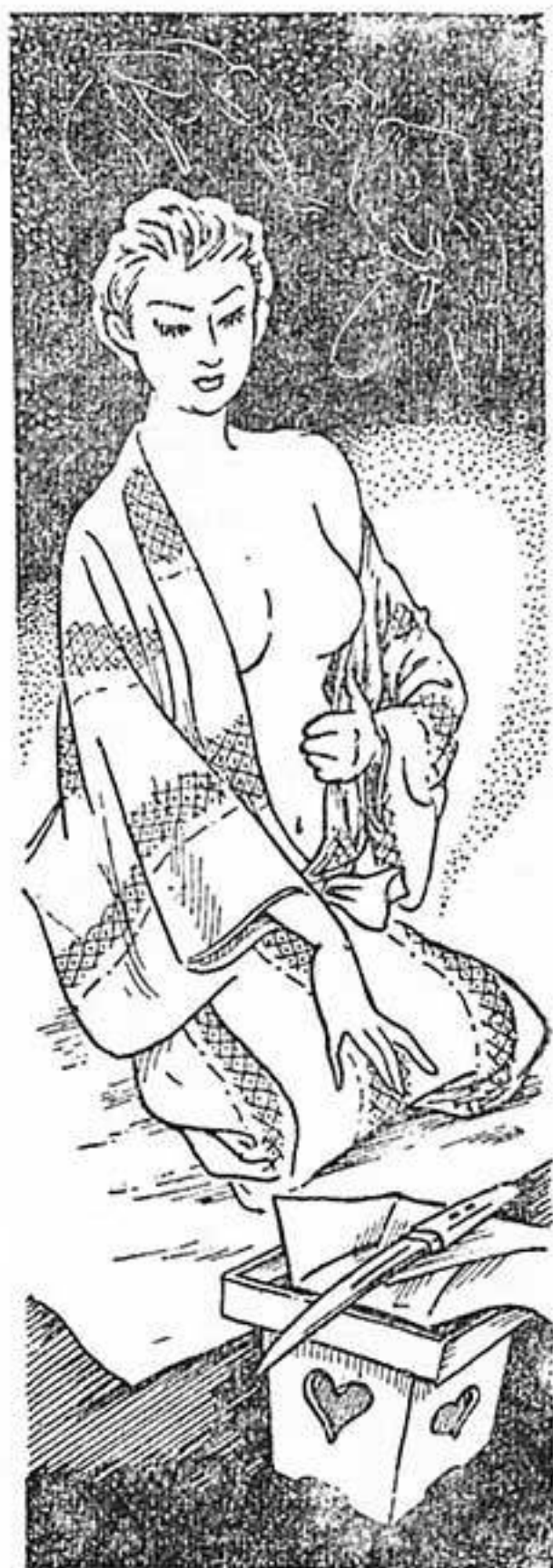
何月号からとお書きにならないときは、重複
や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に
「本号にて前金切」の判を捺印致しますから
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で御受領願います
局での留置期間は十日間です。その間に
お受取りにならないときは、発送人に返戻さ
れます。

— 切 腹 研 究 夜 話 —

愛と死の映像



— 中 康 弘 通 —

別冊近代映画66年9月号に紹介された映画「拷問」に、築城哀話として、愛娘を人柱に送り出した築城奉行の妻（藤園子さん）が、仏間に入って独り自刃する景がある。

経机をかたわらに、敷き延べた白布の上で彼女は、白装束で端座、用意の短刀を抜き放ち、「ウムッ！」と腹に双手突き、呻きつつキリキリと真一文字の見ごとな割腹。

更にとどめの一と突きを胸に立てて一と抉

り、ほとぼしる血汐の中に俯伏して、悲憤の最期を遂げてしまう。

これをしも、ただ残酷シーンと片づけてしまふには、あまりにも愴美を極わめてはいまいか。

しかしまた、ひるがえってこの凄絶な女腹切は、現代的センスから見ると、心理背景としての深く切なるものが乏しい。もはや今日では、ただ自己犠牲とか忠誠貞烈というだけ

で、映像化された美意識的感銘を支えることは困難である。

それほど現代人は、納得できる「死」でなければ、「死」を感動としては受けとりがたいまでに、錯雑した心情を持っているともいえよう。ことに女人の切腹において、しかりである。

かつて、松竹映画「切腹」は海彼で大きな反響を呼んだ。映画祭での受賞はもとより、公開に際し内外観衆に多大の感銘を与えた。日本のヒューマニズムとフェーダリズムの割目に生い育った銘木のようなこの作品が、武士道を象徴する「切腹」を題名としたことはもっとも当を得たものであり、また賢明でもあったと云える。

日本独特の自殺方法である「切腹」という行為を、あれほど凄烈刻明に描いた作品は、日本の映画史上にも稀であったし、それだけにまた、海彼でも瞠目させるに足るものがあったと云えよう。

勿論「切腹」の他にも切腹を扱う映画は少くない。しかし、その心理背景として、切腹の必然性をかくも納得させるに足る映画は、また稀と云えた。たとえば、そののちも切腹を扱う映画は多い。東映作品「右京之介巡察

「記」に於て、大川橋藏氏の演じた切腹場面は、悲壯を極わめていた。

それとても、歌舞伎における菅原伝授手習鑑の桜丸とか、妹背山婦女庭訓の久我之助のような、愛し合う女性の悲愁を背景に、添い遂げられぬ男女の哀しみを湛える悲愴美の世界とは異質のものがある。

やがて三島由起夫氏の「憂国」が、「愛と死の儀式」として、ツールの世界短篇コンクールで好評を得たとき、私は、はじめて官能^{エロス}と情緒^{パロス}が、切腹という一点で感動的かつ象徴的に描かれた、「愛と死の映像」を信ずる。

しかし是とて、青年将校の壮絶凄烈な切腹を描くものであって、女人のそれを描くものではない。果して女人の切腹を描いて、「愛と死の映像」を結晶させることは不可能なであろうか。

まず女腹切の芸能化を、一端なりとも探ってみよう。実際、女人の切腹場面は史実には少からずあるにもかかわらず、映画では稀にしか見られなかった。歌舞伎の「長町女腹切」とか、女剣劇での女平手造酒（先代筑波澄子さん）、女長兵衛（大東あけみさん）などは珍しい女腹切の芝居であるが、この世界では、むしろ、女弁天小僧（市川喜代子さん）

のように、女が男に化^なり、その男が女装しているという、二重の倒錯効果によって、切腹の凄惨さを妖美なものに見せている。しかしこうした妖美感は、結局は皮相にとどまってその内面性、ないし象徴性にはまだ距離がある。

女の切腹を描く映画の一つに、往年「長町女腹切」をもじったマキノ映画「真葛ヶ原女腹切」があった。泉春子主演である。

あらすじ――

峠を越えて行く老武士と娘、――熊本長九郎の奸計で上野藩を追われ、是船の銘刀を求めて漂泊する親娘の姿は、二年後の京洛に見られた。娘菊野（泉春子）は清水詣の行き帰りに親しくなった、美濃屋の伴十三郎から長船の消息を聞いたが、八十両の大金に悩む。

番頭久八は意頭の辰次に主人忠兵衛をおそわせ菊野に救われる一と芝居を策し、菊野と十三郎は公然の恋仲となった。しかし、出会った悪人長九郎を倒して金百両をうばい、長船を求めようとした菊野を、辰次は己が恋ゆえに盗賊と告げて美濃屋との婚約を破談にした。父は狂い、辰次の訴人で捕手に迫られた菊野は、今は是までと辰次を斬り、重囲の中で女ながら見ごと立腹、切って果てた。

薄命の親娘に代り、長船は十三郎の手で上野へと運ばれて行った――

是も、やはり典型的な女剣ものである。

ところが、先年映画化された清水正二郎氏原作「黄金の肌」（小森プロ制作、新東宝配給）において、三原葉子さんが見せた擬態は、一つのエポックメイキングな切腹の扱われ方であった。

典型的な娼婦となったヒロイン丘野鏡子の回想場面で、少女時代に肉体を鍛錬する修業の苦しさを示すのに、みずから切腹の姿を見せるのである。

まず長いオーバーラップで画面に回想を示す枠の中に、正座した鏡子の腹部がクローズアップされる。衣服が寛げられ、短刀を逆手に持った男の左手が見える。男は、彼女の両手に短刀を握らせ、切先を左腹部に押しあてさせるのである。

次いでカメラがバックし、娘の全身がやや右向きになって現われる。ほの暗い部屋の壁を背景として、男に相對して正座している。

髪はお下げで、黒っぽい大柄な格子縞の長袖ブラウス、スカートも黒っぽい。そのブラウスが乳房をおおって、腹部のみは押し開か

れている。ヒロインは、両手で短刀の切先を左腹部の素肌におしあてたまま瞑目し、切腹直前のおのきに耐えている。

やがて、唇を固く結んで思い切ったようにグッと、刃を腹に突き立てる。一瞬、衝撃の表情を見せ、そのまま苦痛を泳えてググッと臍下を右へ一文字、切先が白い腹皮にくい込むまでに引き廻し終えると、彼女は俯向いて刃を腹から抜きとる。

次の瞬間、カメラは静かに前進、ヒロインの苦痛に耐える表情を長く捉えて、顔のクロースアップでこのシーンを終るのである。このところ、三原葉子さんの熱演は迫力を籠めて行われている。

清水氏の原作にはこのシーンはない。映画化に当って挿入されたものであるが、清水氏に伺ったところでは、私の「切腹願望」についての理論から発しているとのことである。その後、更にこの女腹切の悲愁をカラーで描く作品が現われた。日本電波映画制作、松竹配給の「虎と狼（火野葦平氏原作、土居通芳監督）がそれである。

物語は終戦まもないころを背景としている。ヒロイン浜中ミネ（初名美香さん）は俠客の娘ながら、対立相手の代貸しを勤める青

年に秘かな想いを燃やしていた。

宿命的な対立は遂に最後の決斗を招き、当日ミネは、単身薄化粧して、刺青も鮮やかな双肌ぬぎにズボン、半長靴姿で相手の家に乗り込んだ。恋人の目の前で斬り死にする覚悟が、彼女の美貌を哀しく彩っていた。

「浜中ミネ、先鋒を承わります！」

いい切って、白鞘の大刀一閃、面をふらず斬り込む。若い裸身の刺青が、眼に泌みるような真あたらしい晒の純白に映え、悲愴の中にも婉麗さを見せる。子分も負けじと続いて殺倒し、迎え討つ相手との集団斗争が、ミネを中心に街頭で凄まじく展開する。

市街戦が終熄したとき、両家の戦士は相討ちに倒れ、死屍に埋まる街頭の一角、大刀を杖によろめき現われたのは、刺青の肩から鮮血を浴びたミネの凄艶な姿であった。

そのとき彼女の視野に入ったのは、軒先に倚りかかって瀕死の身を柱に持たせている、彼女の恋人である。必死に歩み寄り、すがりつくミネ、敵味方を超えて、恋人のかたわらに命を終る欲こびが、ミネの体を震わせた。

男の手には、血に染まった白柄の短刀がある。これで命を断とう——この腹を——ミネは恋人に寄り添い、立ちながらその短刀を執

る。

逆手に持ち直すと、静かにわれとわが腹に白く光る切先を当てがった。

「お先きに！」

「万斛の思いをこめた瞳をみつめると、刺青の肩を絞った。

「うむッ」

柄がしらに左手を添えて一気に双手突き。巻き締めた晒を透して、グーッと刃を腹に刺し込むとき、ガックリ首を垂れた。カメラは次の瞬間、ミネの腹部を大写にする。刃は深く腹に刺さり、晒に鮮血がにじむ。カメラがパンアップすると、眉根を寄せ眼をうるませたミネの、愛と苦悩に耐える表情がクロースアップされる。

かすかに唇を割って呻きがもれるばかりの切ない表情。その悲愴哀婉の美貌はすぐ一転して、全身像となり、みずから腹に突立てた短刀を手で抑えつつ、静かに絶命して行くミネ。崩折れ、いまわの吐息がアア……と耳に泌みる。

やがて街頭に累累たる死屍の一つ、恋人の屍に折り重なって、仰向いているミネ。腹に突き刺した短刀を握りしめ、眼を見ひらいたままミネは絶命していた。——

この映画を、ただの男性路線的现代チャンバラ、あるいは暴力否定の社会映画などと、見すごしてしまう人は多いであろう。

しかし映画は、画面に現われた現象のみを見て足れりとするものではないことを、外国映画から学んだ眼が、知っているのではあるまいか。

フロイドに従えば、刃ものは男性を、腹部は女性を象徴する。男の手から刃ものを受取る

って、女がみずからおのが腹へ突き立てようとするヒロインのポーズは、「金色の肌」にも擬態として見られ、愛の象徴と云えなくはないが、象徴的手法と見るには余りにも直截すぎる。

その点「虎と狼」におけるヒロインの死のポーズこそ、エロスとパトスが死を触媒として愛を完成する一つの象徴的映像を示している。そしてそのポーズに関連して、眉根に切

なく縦じわを刻み、唇を半ば開いたヒロインの表情が何如に象徴的であったか。

昔の、浮世絵師が美女白刃図を描いたときその悲愁の表情が、いわゆる秘画における女性の表情と、余りにも似通っていることを指摘した瀬川泰子女史の文章のあったことを、私は遠い記憶に留めている。

とあれ、こうした象徴的手法でエロスの世界を描くことにこそ、余りにも露き出しな、人間の愛の形象、というよりも、むしろ慾情の形相を描き尽くして来た最近の映画芸術の、今後の活路ないし課題があるのではなからうか。

つまりは、「憂国」の女性版とも云うべき作品が生れたとすれば、それこそ「愛と死の映像」として最高の実験映画になるのではあるまいか。

なおこの文章では刃ものと腹部を、男性と女性に見立てた場合として説明しているが、車中や路上で女性に刺傷を加える痴漢の変質犯罪とは根本的に違うのであって、あくまで女性自身の清冽なる心情に基づく切腹の映像化を対象としての仮設であることを、お断わりしておく。

山原清子 妖艶緊縛 刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部一〇〇〇円
略号 A美7V

全部最近撮影の力作！

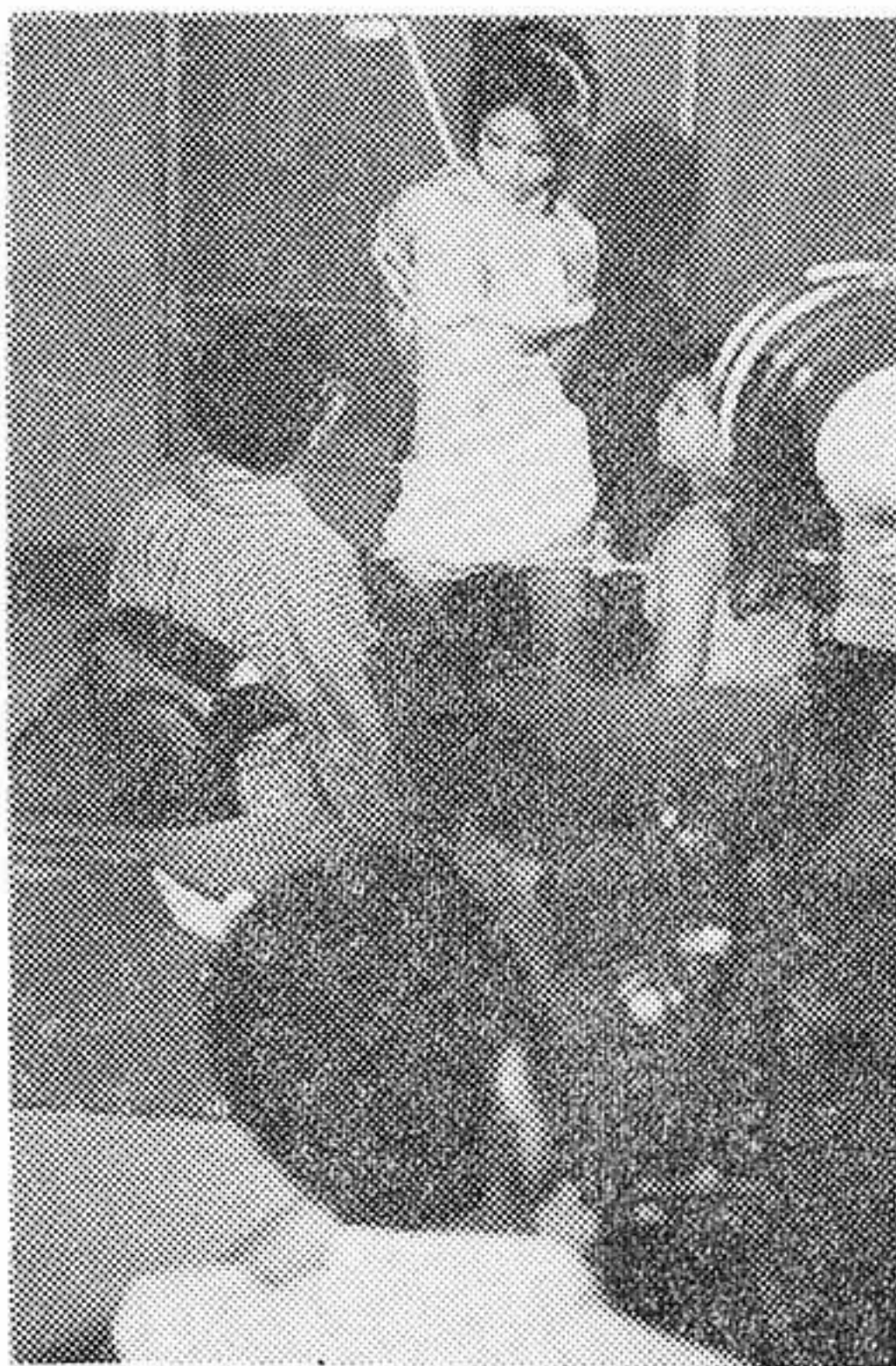
未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズばかり満載）

このグラビア写真集の写真を撮影するため、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴しい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

っております。一般市販はいたしておりませんから直接発行所へお申込み願います。
△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

鬼六談義



好きな人達

団 鬼 六

先月号は休載したが、ここ二三カ月、私は熱心にこの鬼六談義を連載している。花と蛇より、談義の方が筆は調子良く運ぶようだ。

原稿締め切りは毎月十五日と編集部より念を押されているので、東京の事務所の予定表に何日何時より花と蛇にかかる事と、ちゃんと予定し、事務所の仕事が終わりに、社員が帰宅し、閑散となった所で、花と蛇にこっそりか

かろうとするわけだが、どうもこの仕事だけは、味気のない事務所の机の上では完成出来そうでない。忽ち、いらいらとして、花と蛇と書いた原稿紙の第一頁を破り捨て、鬼六談

義に変更する事になってしまふ。つまり、事務所の机の上では、この談義は書く事が出来ても、花と蛇を書く事が出来ないのだ。花と蛇だけは、どうしても、そのムードに自分

を没入させねば筆がとれず、何度もいった事だが、自分の神経が悪魔的になるまで待たねばならないようである。

マニヤ小説というものは、やはり落着いた気分で、四角い日本間に気に入った緊縛写真など散らばせ、落語に出て来る蝦蟇の油売りじゃないけれど、四囲に張りめぐらされた鏡に写る己の姿を見た蝦蟇が、その醜さに驚い

てタラリタラリと油を流し出すような異様なムードの中で書くべきものらしい。出来上がった珍小説は正常な場合の私なら正視に耐えないうえげつないものになり、こわいもののように読み直しもせず送稿してしまふわけだが、それにくらべて、少しはまともな方だと自分では思っている談義を書くのは、そういういやらしい小説を書く事の罪亡し、口すすぎといったものだとも自分なりに理屈をつけている。

如何にマニヤを喜ばせるためだといえ、贈られたKKを読み、天を怖れぬ悪魔小説を書いた事の罪深さに慄然としてしまふわけだが、これとて何度も弁明したように、いくら作者の方が自制しようとしても、勝手に作中人物が活躍し始め、そうなる筆の方もまるで水を得た魚のようにピチピチ跳ねるように突進し始め、おさえが全くきかなくなってしまうのだ。作者が悪魔的になり切れず、ムードに浸り切れない時は、えてして出来が悪いようであり、それは作者よりもマニヤである読者の方が敏感に感じとられる筈である。

私は、マニヤ小説やピンク脚本を書く場合にそれにあまり時間をかけるといふ事は好まない。製作態度が不真面目であるという方がいい方

もおかしいが、こいつばかりは発情気分を大切にしてかかるものだけに、その気になった時、パツパツとやっつけてしまわねば具合が悪いのである。二日も三日もこれにとり憑かれていては体が参ってしまうのだ。若い時ならいざ知らず、美しい女性をいじめたい、泣かせたいという気分なんてものはそう毎日つぶくもんじゃない、また、つづけてはいけないとも思っている。

花と蛇は作者の好む変型エロチズムが、また読者の好む所という事を発見し、それに気を良くして、作者の筆は勢を得、えんえんとここまで続いて来たものと思われるが、最近では、この花と蛇愛読者の何人かと私は個人的に親しくなる機会を得た。これからは、そういうファンの人達のアイデアを大いに参考にしたいと思っている。もとより、この何年かにわたって続いている珍小説は、最初からの筋書きの中に人物と動きをはめこんでいくのではなく、出来るなればその時その時ファンのアイデアなど生かしてみたいというのが私の狙いでもあった。そこに新鮮さも生ずる事と思われる。かといっても、書くのはこっちだから、何が何だかわけのわからぬのやこっちの欲望をちっとも唆らぬのはやはり描

きにくく御免蒙るより仕方がないが、マニヤの好みやアイデアを聞くのは結構楽しいものだし参考にもなるのである。編集部の方よりも、時折、ファンから送られた花と蛇美女折檻のアイデアをしるした手紙を転送してくれるが、責めの方法を箇条書きにして、ぎっしりと便箋に書きこみ、羞恥にのたうつ美女の洩らす科白まで書きこんであるような熱心なものもあって、恐らくそのファンは、自己の着想を書きつづるうち、肉体がうずき、神経がしびれ、鏡の間で脂汗を流す蝦蟇のような状態になってしまった事が、その通信文を読んでいるうち感じとれるのである。

とにかく花と蛇に登場する静子、京子、小夜子、美津子等、マニヤにはそれぞれ好きなタイプがあり、自分の憑かれている女性が登場しない時は苦情が出るようで、それは作者にとつては嬉しい苦情であつて、私は以前より、こうしたマニヤのアイデアを大胆に、また露骨に作中に取り入れる事により、花と蛇ファンの興味を計算してみたいと思つていたのである。

私が花と蛇ファンというA氏とB氏に逢つてみようという気になったのは、そういう事からであつた。この二人は、お互にKK誌の

愛読者という所から親しい交際をする事になった間柄で、何度もYプロへ電話し、私への会見を申し込んでいたのである。

KK誌の愛読者の中では、自分の性情を人に発見される事を恐れ、またKK誌の置場を家人に見つけられる事にもビクビクし、家中が寝静まってから、寝床の中でこっそりと眼をしょぼつかせてむさぼり読み、隣で女房や子供がふと寝返りをうつと、ハッとして布団の下へKK誌を押し込むというような気の弱い人も多いようだが、また逆に、本屋へ出かけては、奇譚クラブはまだ来ていませんかと悠々と本屋の主人に問い合せて買い求める



と、電車の中でも週刊誌と同様、堂々と押し開けて読み始め、何度も読者通信に投稿して何日何時何分、どここの駅前へ来いとマニヤの女性に呼び出しをかけ、来なければ次の号にどうして来なかったか、と恨みがましい事をいい、他人に対しても、自分がこの種のマニヤである事をはっきり告白して何らはばかり事がないという豪傑もいるようだ。Yプロに電話し、私に会見を申し込んで来たA氏とB氏は、この豪傑型に属する人らしい。

私は、最初、多忙を理由に逃げていたが彼等は自分の住所電話番号をプロダクションの事務員に教え、先生が閑な時、電話してくれ

るようにと、ことづ言伝てているのである。

この種の人達と顔を合わすという事は、私としては妙に気さかしく、また、それをきっかけに親しくなっていくと、色々とわずらわしい事が生じがちだ。

というのは、以前から私が親しく交際しているマニヤの友人達は、これも熱心な花と蛇のファンであるが、時折私の家へ、来月号の原稿(花と蛇)は出来て

いるか、とKK誌の編集部でもないのに電話をかけてよこし、出来たといえやっ来て、生原稿を見せろという。つまり、あちこち、削除される前の、生原稿を見ておきたいというのだ。

わざわざ、遠い所から読みに来るなど、その熱心さにはあきれるがそれだけならとにかく、私の秘蔵する写真や絵などをしきりと所望する。モデルに迷惑がかかる場合があるので、他人に贈呈されたものや素人女性をモデルにしたものなどは彼等の眼には触れさせないようにしているが、それでもヌードモデルをつかったもの、ピンク女優をつかったものなどは、まるでオモチャ箱をひっくり返したように彼等の手でかき廻され、持って行かれてしまった。以前、私が病気で寝こんでいた頃、花と蛇の秘蔵版みたいなものを退屈しのぎに寝床で書き、昔、代書屋をやった事のある字の上手な男に頼んで、和紙を閉じ合わせて製本した豪華なものに、それを活字のように美しく墨字で模写させ、この道に通じている画家に極彩色の挿画まで描かせ、かなり金をかけた門外不出のたった一冊の自家製本をした事がある。巷に出没する本にはあき足らず、自分の趣向にぴったり合った趣味の本

を、自分で制作したわけだが、それを遊びに
来た仲間達にこっそり見せてやると、忽ち五
千円で譲れとか一万円でどうだとかしきりに
所望し始め、冗談じゃない、これは俺のため
に作った秘藏品だとニヤニヤして断ると、そ
れなら一週間ばかり借してくれとねばり出す
男がいて、仕方なく貸してやった所、仲間か
ら仲間へ、また貸し、また貸してな事にな
り、遂に行方知れずになってしまった。

マニヤがこうした珍品を求めるのは実に貪
欲で、それは別にSMに限った事ではなく、
マニヤとはそういうものなのだろうけれど、
とにかく、私のコレクションは、マニヤの友
人達の手でかなり荒らされてしまった。

全く、その道を好む人のその道を極める事
の熱心さには驚かされる事がある。さっきい
ったように、私の家へ削除されない生原稿を
わざわざ読みに来るといふ貪欲な人がいるか
と思うと、ピンク映画のオールラッシュを見
せて欲しいと、わざわざスタジオの試写室へ
やって来る人もいる。オールラッシュとは人
物の声や効果音がまだ入っていない生なまの映画
の事だが、この時はまだ映倫の手でフィルム
がズタズタにチョン切られていない。ピンク
映画としては、いわば一番値打のある所かも

知れないが、そこを見ておきたいという人が
いるのである。

ピンク映画を作る方では、映倫の手でフィ
ルムがズタズタに引裂かれるのを最初から計
算して、随分とさわりの場面を盛沢山に撮っ
ている。自重して製作したつもりでも、映倫
の方は商売だから、必ずどこか器用に見つけ
出し、いちゃもんをつけてチョン切るのにき
まっているから、どこをどう切っていいかわ
からぬ位、ふんだんにその場面をつけ加えて
おき、映倫の検査役をうんざりさせるのであ
る。勿論、片っ端からチョン切られる事にな
るが、必ずそこに切りこぼしが生じると、何
だか浅ましい位にみみっちい事を制作者側は
考えるものだが、カットされる前の映画をわ
ざわざスタジオまで足を運んでのぞきに来る
人もいるのだから、いやはや、人間というも
のは面白いものだ。

このように色の道に熱心な人がいると、色
の道に熱心な商売が、そこで繁昌する事にな
る。以前には想像も出来なかった、ピンク映
画界というものが出現したのも、それで、潰
れる、潰れるといわれながら依然として隆盛
を保っているのは、その道の好きな人々が多
いおかげだ。私が以前、よく原稿を書くため

に泊っていた熱海に近い或るホテルに、警察
官達が一度慰安旅行にやって来て、どんちゃ
か騒ぎをやったのはよかったが、そのあと、
ブルー映画の観賞会をやらかし、これが問題
になった事がある。警察官の分際でけしから
んななどといったはいけない。彼等もまた人間
なのであるから、その道は嫌いな筈はないの
である。私はブルー映画を観賞した彼等に親
近感をおぼえ、彼等は実にいい事をしてくれ
たものだと思うのだが。Y写真を巷で売り歩
いていて、捕ったチンピラが、その後も、係
官に執拗につけ狙われ、時には、のっそり係
官がアパートへやって来たりして閉口してい
る、と私にこぼした事があったが、恐らく、
その係官は、仕事に熱心だというより、その
道に熱心なのではあるまいか。などとは、し
よっぱかれるのがこわいから私はいわない
が、新しい面白い出物をチンピラが所持して
いるかも知れないのでのぞきに来ているのか
も知れぬ、と想像出来ぬ事はないのである。
だが、いくら色に熱心な人相手に色を熱心
に売るといっても、何時か話したトルコ風呂
などは、ちと熱心さが異常なのではないだろ
うか。彼女達に彼女達のサービス料金なるも
のを聞くと傑作だ。普通、三段階に分れてい

て、単なる手技だけのいわゆるスペッシャル料金が二千元、ダブルとかいって、客に自分の体を手で触らせれば三千元、そのものずばりのつまり本番なら五千元——という風に、彼女達がサービスを切り売りしている所が面白い。

二千元しか持合わせていないアルバイト学生が、トルコ嬢にその行為を依頼し、マッサージ進行中、どうにもやり切れなくなって、無意識のうちに彼女の胸をまさぐり出したら「ちょっと、そこをさわるなら、あと千円追加して頂くわよ」と彼女に叱られて、あわて手をひっこめた、と、あるトルコ嬢が笑って話してくれた事があったが、何とも、哀れなばかりに世智がらい話である。

赤線青線時代が懐かしくなってくるのも無理はない。娼婦の中には、少しは情のあるものもいたし、第一、あの頃は、スペッシャルとかダブルとか、そんな奇怪なものは見当らなかった。最近、人に聞いたのだが、五反田とか、池袋の盛り場あたりにあるトルコ風呂など、もっと世智辛いそうで、そこでは、ダブルにダブルという言葉がひつついて、通称、ダブダブといい、三千元に五百円のプレミアがつくのだが、トルコ嬢は客のさわるのが円

滑にいくよう裸になってくれるそうである。そのまま、ダブダブに、五百円のプレミアがついて、四千元になると、トルコ嬢は客と一緒に風呂まで入り、あちこち流してくれるそう、それは客と一緒に風呂へ飛びこむのだから、通称、ブクブクとい——いや、うそかほんとかわからないが、そんな所では、サービスが五段階にも分れているという事だ。

そうなってくると、彼女達の商魂は、がめついというより何か哀れなものに思われてくる。だが、それで店は結構、繁昌しているのだから、がめついとか世智辛いかというのは世の中の常識になってしまっているらしい。私の所へよく出入りするシナリオ青年は、もっぱら新宿のトルコ風呂へ通っていて、実に愉快な所があるから一度覗いて見ませんか、とニヤニヤしながらいうので、いわゆるハモニカとか尺八とかいう事でもするのかと聞くと、そうではなく、彼女は彼のPにゴム製の輪状のようなものをはめこんだり、プラスチックの棒でAを刺戟したりするという。最近では、娼婦の技巧も、プラスチック棒を使ったりして、機械化されてきたらしい。

さて、話は、トルコ風呂に脱線してしまっただが、さっきのマニヤであるA氏とB氏の所

へ戻る事にする。私は、この二人に対し、花と蛇ファンサービスという意味から、私の脚本によるピンク映画の緊縛シーンを見物してもらおうと思い立ったのだ。

映画はすでに熱海で撮影に入っている。私も、丁度、熱海で一本翻訳の仕事を上上げるつもりであったから、撮影隊ががんばっている近くの旅館へ予約を申し込んでいた。それで閑あらば熱海へ来遊されたし、とA氏に電話で連絡したところ、彼は、B氏を誘い、万難を排してお邪魔させて頂くという。そういうわけで、私は彼等二人と、撮影隊が根城にしているT旅館で落合うべく日時を定めたのである。

その日になって私の方は色々雑用が生じ熱海へ到着した時は、二人と約束した時間から二時間もおくれていた。あわててタクシーでT旅館へかけつけると、丁度、旅館の部屋を使つての撮影の最中で、私を見つけたスタッフ連は、さっきからお客さんがロビーでお待ちですよ、と告げる。再び二階からロビーへ引戻ると、奥のソファに二人の中年の紳士が、まるで二つの仏像を安置してあるように行儀よく並んで静かに坐り、俺は一体どうなるのか、といったようなむつかしい顔を前に

向けている。あわてて私は近づき、自分をさらけだすと、忽ち破顔一笑、初対面の二人は、私に対しこれはどうも、どうもと連発しながら、つまらぬものだがお近づきのしるしにと、舶来のウイスキーを私にくれるのだ。それで、こちらも忽ち破顔一笑、どうも、どうもと連発しながら、彼等を撮影の行われている二階へとりあえず案内する。監督のM氏に二人を紹介して、次の撮影予定は、悪漢達が旅館前で喧嘩するシーンになっていたが、それを緊縛私刑シーンに急遽変更してもらった。

この映画は、肉地獄という題で、別にSMを主眼にしたものではないが、親分の情婦がかつての親分の妾が誘拐し、妹と一緒に私刑にかけるという場面が数シーンある。そこをお二人にご覧になって頂くとういうわけだが私刑にかけられる女優は辰見のり子。純情型の役ばかりふり当てられている可憐なフェイスの持主で、借りて来た猫のようにおとなしい女優さんだが、乳房の豊かさはピンク女優の中でも抜群だと定評がある。これを悪女役



の藤ひろ子と林美樹がいじめるわけで、例によつての立縛りで申訳ないが、一寸、趣向をこらして、箒を足枷にして開股縛りを用いてみた。こういう段どりは私がつけたが、カメラの横に立って見物しているA氏とB氏に向かって、「どうです、何かいいアイデアがあったら出して下さいよ」と私は何度も声をかけた。二人は、ただニヤニヤするだけで「私なんか、とても、とても」とA氏は遠慮し、「取締りがとてもうるそうございますでしょうからね」とB氏は丁寧ない方をする。という事はもし取締りさえなければ、俺ならどえらい手を使ってやるんだが、という意味な

のであろう。

二人は、ただ用意して来たカメラを出して緊縛された辰見のり子を色々な角度からパチパチ写すだけであつた。この間、撮影は小休止。ライトマン達はこの二人に協力して、一せいにライトをともしてくれる。

私は机に坐つて監督と雑談しながら煙草をすっていたが、ふと思いついて、辰見の口に煙草を咥えさせてみた。マニヤの中には、こんなポーズを好む人もいるように思ったからだが、辰見が眼を白黒させて煙草をプカプカふかし始めたので、見ていたカメラマンもライトマンも一せいに吹き出した。A氏とB氏はただ黙々として、カメラのシャッターを押している。

それから、撮影が再開、A氏とB氏は部屋の隅へ坐つて熱心にピンク映画撮影を見学している。

私は階下へ降りて、俳優部屋に入り、出番を待っている俳優の一人と、碁を打っていたが、小一時間ばかり撮影を見物したA氏とB氏は満足そうな顔つきでやって来て、おかげで大分勉強になりました、といい、果物籠を置いて、これを世話になったスタッフの方々に食べてもらつて下さい、というのである。



実に気を使う人で、こっちが恐縮しているとこれから、私達のホテルで団先生に一献、差上げたいがという。彼等は、すでにこの近くのホテルに部屋をとっていて、最初から私に酒を飲ませてくれる予定であつたらしい。勿論、私も、熱海で馴染になつてゐる酒場に彼等を案内する予定ではいたが、彼等が最初から、ホテルで酒席の段どりをつけてくれたという事は、こちらも飲み意地が汚ないだけにしみじみ嬉しく、その好意に何か報わねば、と早速、林美樹と辰見のり子に彼等二人のモデルになつて、写真をとらせてくれぬかと交渉した所、今日の撮影は十時に打上げる事になつてゐるので、それからでよければ、と承諾してくれた。そこで、A氏達の宿泊す

るホテルの場所を彼女達に教え先に行つて待つてゐるぞ、といい残し、私はいそいそとして、A氏達のあとについてホテルを出た。

彼女達が、モデルをOKしましたよ、と告げると、二人は大喜びである。明日中に仕上げなければならぬ仕事か私にはあるのだが、遊ぶとか飲むとかいう事になると、ええい、何とかなるだろう、と、このこ彼等のあとについて、彼等のホテルへ行つてしまふのだから、我ながら、ふと浅ましかった。

彼等が泊る事になつてゐるホテルは、撮影隊が宿泊してゐるそれとは、くらべものにならぬ高層建築の立派なもので、部屋は、違い棚のついた品のいい日本間であり、間もなく女中達の手で運ばれて来た料理も豪華なものであつた。

改めて、挨拶し直すような調子で盃を取りかわし、SMと助平を通じて、仲良くなるとは、阿呆らしいやら、羞しいやら、と笑いながら、矢鱈に酒をすすめ合つて、飲むのである。

「女優さん二人がここへ来るまでの間、芸者でも呼んで、一つ、パツと騒ぎまひよか」

と、A氏がいうので私は、賛成、と手を上げかけたが、B氏が、そんな事は何時だつて出来る。せつかくこうして団氏と逢つたんだから、SM談義でも聞こうじゃないか、という意味の事をいい出し、A氏の提案を一蹴してしまつた。芸者をあげて飲んだ方が、ずっと愉快だろうに、と思うのだが、こっちは御馳走になつてゐるのだから文句はいえない。

それから、私達三人は、SMに関連した助平話を語り合いつつ、酒をくみかわした。閨房に入る前、女房に花と蛇を読ませているというA氏の話も面白かつたし、花と蛇に出て来る美女を一人一人映画女優に当てはめ、女優のブロマイドと照らし合わせるようにして読んでゐるというB氏の話も面白かつた。

同じ、マニヤであつても、陽性の人と陰性の人があるようで、A氏は、芸者でも上げて騒ぎまひよか、というだけあつて、陽性であり、むづかしい理屈は性に合わないらしい。B氏の方は、一応、磊落には振舞つてゐるが阿呆な事は自分の教養が許さない、といった威勢の悪い所があり、小さな声でしきりに自分について語り、ふと、陰性な所があつ

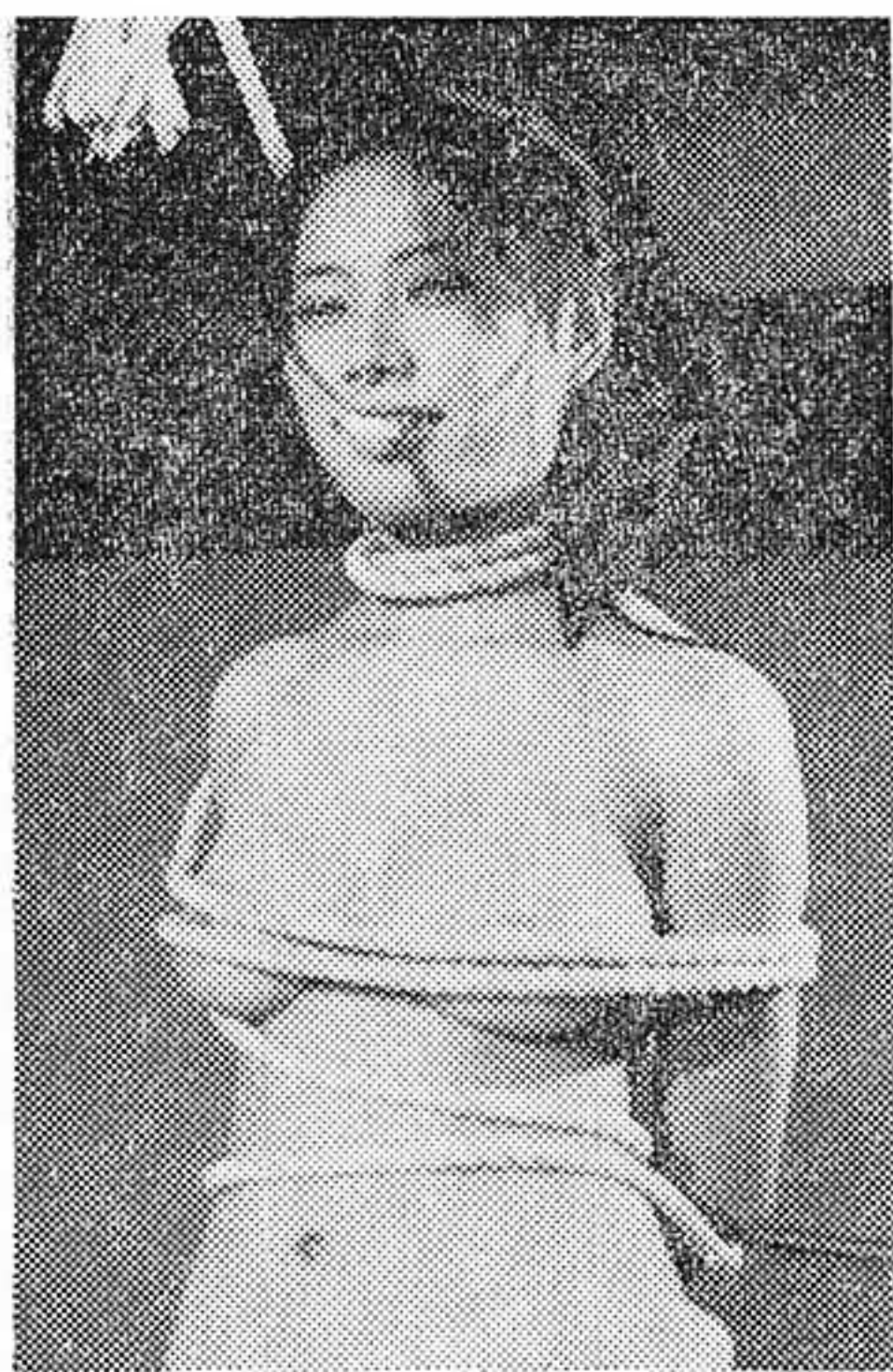
た。私の想像だが、この両者が酒場などへ行ってホステスを口説こうとする場合、A氏は、まず、ホステスの尻を撫ぜるという所から入って行き、B氏は、カクテルなどおごり、ネチネチした話術でホステスをごまかす型らしい。どちらも、いやらしい事には変りはないが、大体、マニヤというのはA氏のタイプよりB氏のタイプが多いと私は思っている。教養と分別が邪魔をし、というよりも助平と思われたくないの、酒場のホステスの尻をさわったり、××××などという卑語をみだりに口に出せないのだ。いやらしいくせに、そのいやらしさをおいそれと発揮出来ないやらしさがSMマニアには多いようだ。勿論、発揮しないにこした事はないが。SMマニヤには紳士が多いが、つまり、性的には孤独なのである。てな話が酒の席で話題になったのだが、それではそういうみだらな卑語を口にするいやらしい男と、うまい事を並べてネチネチ口説くいやらしい男と、女性の陥落する率はどちらが多いかという事をA氏は笑いながら私に聞いてくる。

私の考えでは、卑語を口にし、ヒップに手を廻すような男の方が、女性に信用されるのではないか。大体、女性という奴は男性のペ

ニスに一種の憧れを抱いているものであり、つまり、自分にはないものを男性は持っている——ないものというのはペニスの事ですか——と、A氏は念を押したが、まあ、そういう事で、ペニスに憧れると同時に、女の自分には羞かしくて発揮し得ない卑語を口にし、ヒップに手を持っていく男性の性的いやらしさにも、同様、憧れみたいなものを抱いているのだから、堂々と自分の助平さを発揮して来る男を頼もしく思い、助平のくせに助平さを隠そうとする男を男らしくないと思い——などと、私は、いい気持に酔って来て、勝手な珍論をしゃべりまくったが、弱った事に、A氏とB氏は、もっともらしい顔つきになって、うんうんと聞いている。

以前、この熱海銀座の酒場にK子というかなり美貌の女給がいたが、これは実に尻の軽い女で、バーテンやボーイ達とまで、気軽に体の交渉を持っていたが、長い間、彼女目当てに酒場へ通い、かなりの金を使ったのに、陥落さし得なかった有名な会社の重役クラスの人がいる。彼の口説き方に問題があったら

しい。おい、今夜、やらせろ、ああ、いいわよ、というような尻の軽い女であるのに、彼は彼女の人格を充分に尊重し、こわれ物にでもさわるようにチャホヤし、気長に紳士的に口説き始め、彼がそういう調子だから、彼女の方も淑女的に振舞わなくてはと、無理な努力をつづける事になったのだ。彼の口説き方は、紳士である僕が、もし、はしたなくも何かの間違いで君を口説くような事にでもなったら、淑女の君は、理性を失った僕を戒め、自分の身を守らなければいけない、といううな調子であったのである。交際を重ねるうち、彼女は、彼がますます薄気味悪くなり、淑女らしく振舞う事が、いよいよ、しんどく



なって来て、遂にその酒場から逃げ出し、彼の眼のとどこかぬ所へ行ってしまった。

このように相手を誤解して、女性を口説く男性がいるようだが、新宿の酒場へ勤める事になったその尻の軽い女給と最近逢って、熱海の重役は今頃泣いてるぜ、と私がかうかと、あの重役さんが静観荘のナイトクラブや箱根ドライブへ連れて行ってくれるのは有難かったが、こっちは、何時になったら、この男、私をホテルへ誘ってくれるのかしら、といらいらしていた、という。「女をものにするのに、ああまで慎重にやられると頭にくるわよ、全く」と、その好色な女給は、ぬかすのであった。

いや、水商売の女に限った事ではなく、堅



気の女性でも、助平でない男より助平の男の方を信用する。といういい方が汚ならしければ、色の道に熱心な男にひかれる微妙な心理を、女性は、口には出さねど心の奥に持っているもので、如何に熱烈な恋愛関係に陥っても、極端な話、相手がインポテンツてな事がわかったりすると、百年の恋もさめ、そんなもの強い愛情の前では問題ではないと口ではきれいな事いっても、必ずそのうち、女性インポテンツより逃走するにきまっているのである。といっても、助平、必ずしも女性に歓迎されるとは限らない。性的魅力のない助平なんてものはどうしようもない。それに陰性の助平ちゅうのもいかん。眼をしょぼしょぼさせ、書齋で本にかじりついているような

な瘦せこけた大学教授なんかより、陽気で筋肉隆々とした野球選手の方が、やはり性的魅力という見地から女性に歓迎されるのだから、陽気で性的魅力のある助平と三拍手揃うのが、一番理想的で——つまり、僕みたいな助平ですか、へっへ、と、私は、いい加

減酔払って来て、調子外れの笑声を立て、A氏とB氏にさされる酒を口をとがらせて吸いこんだ。

「私は最近、ある人妻とSMプレイをしているのですが」

と、B氏が、助平ほど女性に歓迎されると話が落着いたところで、縛りの話題を持ち出した。

B氏は最近、或る人妻と不倫な関係に陥ったというのである。その人妻は、夫に内緒で知人に多額の金を貸した所、それがとうとう戻らなくなり、夫に打ちあけられず閉口していた所をB氏がポンとその金を出してやり、それがきっかけになってB氏は人妻と、そういう関係に陥ったというのだ。

B氏は最初から彼女に対して、縄をつかい根生をむき出しにしたらしいが、すると彼女は、そのけがあるのかそれを甘受し、大いに燃えて、B氏を心底から満足させたという。月に二度か三度の逢引を重ねる事になっているらしいが、驚いた事に、何時も彼女の方から縄を使ってくれとせがみ、B氏は、ようやく理想の女性にめぐり逢えたような有頂天な気分になっているというのだ。金銭の貸借問題から、いわば、そういう関係になったわけ

だから、精神的には妙にわだかまり、しっくりといかぬものがあつたが、肉体的には、ぴったりと一致し、そこから愛情が惹起し、つまり、男がS、女がMであつた事がこの場合幸いしたとB氏はいふ。

男と女の場合、精神的な原則より、肉体的原則の方が優位に立つ場合はたしかにある。とくに最近の女性は（全部ではないが）とくに肉体的な事には敏感で、意識過剰であり、肉体を共有してからでないと男女交際がしっくりいかぬようである。ドンファンは、月よ星よ、すみれよと、最初はそんな事を並べて女性を有頂天にさせ、肉体交渉にまでじわじわ漕ぎつけていくものだが、最近のドンファンは最初に一発ぶちかましておいて、それから月よ、星よ、すみれよ、と持つて行く傾向にあるようで、前後の手順が逆になってきたようだ。

それはとにかく——B氏は、その人妻を全く気に入ってしまい、現在、何とかして、一緒にになりたいとまで思いつめているそうである。女の亭主は、そうしたけが全くないんだから、Mである彼女が可哀そうであり、Sである自分と一緒にになった方が彼女にとってどれだけ幸せである事か、とB氏はいふ。B氏は

は数年前に細君と別れており、お金持であり相手の女性にとっては好ましい条件が揃っているわけだ。しかし、プレイをしてみたら非常によかったから、という事で結婚するというのも何かお粗末な気がする。女をものにするのに肉体を用いるのはよいとしても、用いたら、よかったから、というような阿呆らしい程単純な理由で、結婚という事を考えるのは、エロ作家の私でも、いささか抵抗を感じるのだ。合法的に男女がプレイするのが結婚という考えは何としてもおかしいが、しかし、よかったので結婚を考えるといいのは、いい年した男でも多分に持ち合わせているものである。上べだけ見て、結婚するという変てこりんな見合という制度もあるのだから、それにくらべれば、まだましな方だと、エロ作家としては思うけれど——。

「しかしですね」と私は、しゃっくりをしてB氏の煙草を一本無断で抜きとり、口にして「その人妻がBさんに対して、縛ってくれとせがむのがどうも気に喰わない、そこに問題がありますよ」

ほう、そりゃ、どういう意味ですか、とB氏は、私の口の煙草に火をつけ、不思議そうな顔をした。私は、プカプカと煙を吐きなが

ら、いささか意地の悪い診断を下したのである。

金のために心ならずも夫を裏切り、この男と寝なければならぬ。真に夫にはすまなく思っている。自分は決してこの男を愛しているのではない。だから、和合という形でこの男と寝るのは嫌だ。この男に強迫され、縛られ、抵抗する術はなく、この男の暴力の前に自分は屈服してしまったのだ、という形にしておきたい——つまり、この場合、彼女にとって縄は精神的なお守りとなっているんじゃないか——彼女がMで大いに燃え、Sの男を悦ばせたからといって、本質的な愛情が生じる生じないは別の問題だと、私は、ちよっぴり皮肉をいったのだが、B氏は、成程、そういう事も考えられますね、と私の盃に酒を満たすのだったが、何か思いついた表情なので私の珍論に気を悪くしたのではないかと、私はあわてて、作り笑いをしながら、

「彼女の気持をたしかめるため、今度は一度縄を用いずやってみては如何がですか」

といった。むしろ彼女の場合、縄を用いないプレイに持っていった方が、彼女をして、一層の屈辱感を心身両方に与える事になるのかも知れない。劔を用いず、人を斬るという



極意みたいなものだと私が笑うと、SMプレイの高等戦術ですな、とA氏も笑った。

そんなことをしゃべりながら、酒を飲んでみると、さっき話していた二人の女優が訪ねて来た。どうやら、撮影は十時になっても終りそうではなく、夜中の一時、二時まで及びそうだと彼女達はいいい、出番待ちが一時間ばか

りあるから、それを利用してやって来たという。

どうも、どうも、とA氏とB氏は、盛んに二人の女優に恐縮したよう、ビールは如何がですか、お腹はへっていませんか、と気を使いは始める。

とにかく一時間しか余裕はないんだから、写真をとるなら急いだ方がいい、と私がいうと、A氏とB氏は「そうでございますね、それでは急がなければ」と、そわそわとして立上り、旅行鞆の中からカメラを取出すのだった。彼等は、私も一丁加わって、彼女ら二人を縛る事に協力してほしい様子だったが、「お二人にお任せしますよ。僕は一寸、酔い過ぎたようだ」

と、私は肘枕をし、彼等二人がどのように彼女を縛り、どのようなポーズをつけるか、ニヤニヤ観察していようと思ったのである。

A氏とB氏は、奥の間を片づけて、何か小声でペラペラしゃべりながら、撮影に入る前の段どりをつけ合っている、真に善良そうな人達で、サジストなんていう言葉は、彼等にはどうもぴったり当てはまらない感がする。

善良なサジスト。なんて言葉はないと思うんだが、A氏とB氏の、いかにも三拝九拝し

そうな有難たがりようを眺めていると、そんな名詞があっても不思議でないような気になってくるから不思議である。叱られたら恐い人や、ご機嫌をとり損じたら都合の悪い人にペコペコするのは、普通のことかも知れないけれども、自分がこれから一丁、縛り上げて、撮影しようとする女にこれほど気を使うと、それがこの場合、あたりまえかとも思うが、何だか変な錯覚に、頭がオカシクなってくるのであった。

二人の女優は肘枕をしている私の傍にぺたりと坐り、煙草を吸いながら奥でモタモタしているA氏とB氏を不思議そうに見つめるのである。

「先生、あの人達は、一体、何ですの？」

「あれか、あれは俺と同様好きな人達だよ」

へえ、つまり、エッチというわけね、と女優二人が顔を見合わせ笑い合った時、A氏とB氏は準備が完了したらしく、ニコニコしながら近づいて来て、丁寧な口で二人の女優にいうのであった。

「あの、それでは、すみませんが、一つ、よろしくお願い致します」

好きな人達は、そういつて、ペコリと頭を下げるのである。
(おわり)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

オムツ狂騒曲

川村順子

九月号の、原由貴子様のオムツ幻想曲「ある「レッスン」」を読ませていただきました。時の私の感激。夢中で、幾度読み直したことでしょうか。私が文中の主人公、美恵子になった気持で……。

それほど魅かれるというのも、勿論私自身の「オムツ愛好」の程度が、それだけ強いといえるのだと申せましょう。

既に主婦の座にいる、いい齢をした女が、「オムツに魅力を感じる」などとは、とても

ペンに依らなければ恥かしくて云えるものではないのですが、この自分でも理解できない衝動的な気持は動かせない事実なのですからなんとも仕方がないのでございます。

オムツの経験はどなたでもある筈ですが、赤ちゃん時代のことだけとされておりますが、れど、実際には大人の方でも常時使用しなければならぬ場合はいくらでもございます。

安静を必要とする「ケガ」や「重病」の人で現在、オムツの世話になっている方はたく

さんいらっしやいます。それに私たち女性には避け得られない月々のモノ、女性のみなさんの使用される生理バンドも、立派なオムツと云えないことはないと思うのです。尤も、私のように「必要」でもないのに使いたいというのは、勿論普通ではないでしょう。こんな気持になるのを、どういう病気というのかは知りませんが、強い魅力を感じることは事実ですから、どうにも仕方がないのです。

私が「オムツ」に異常な執着を覚え出したのは、高校を終えて社会の一員になれたところからでございます。

私は幼いころ、高熱を伴ったハシカに襲われました。どなたでも一度は洗礼を受けなければならぬハシカですが、私の場合は、ハシカというより、熱病という方が当たっているほど、激しい熱が伴っていたそうでございます。そして運命の神は、その後も尚私を悩ませ続ける置きみやげを置いて行きました。夜尿症という、やっかいなものでございます。

それは本当にやっかいで辛いものでした。中学、高校と年齢が増すにつれ、その辛さは余計私を苦しめました。高校を卒業しても、その症状は変わらず、毎夜といってもいいほどシクジル情けなさは、とても経験者以外には

お判りにはなるまいと存じます。

だから、当然オムツは、私の場合には夜具と同様に欠かすことの出来ない、必需品だったのでございます。人生で一番、見事に咲きほこる娘ざかりに、一夜としてオムツを手放すことの出来ない恥ずかしさ、辛さをご想像下さいませ。

学校生活で最もよい思い出となり、楽しいはずの修学旅行なども、私にとってはただ、みじめさを思い知らされるだけのもので、とうとう一度も行かずじまいでございます。その時期になると、神を呪い、我が身をなげいて親を悲しませ、いつそ死んでしまいたいとさえ、思いつめたこともございました。

もちろん、あらゆる療法は行いました。何よりも冷えないようにと、ネルの布地にビニールを張ってオムツカバーを作り、その中に浴衣地のオムツを挟みこんでいるものを、恨めしく思いながらも、療法が効かない限りは縁を切る訳には行かない情けなさ。

毎夜、夕食の時から、出来るだけお茶を控え、出来るだけ遅くトイレに行き、夏でも暑いのを我慢して、冷えを用心するのですが、全然、自覚のないままに、朝になると、その用心が役立っていないことを思い知らされる

のでございました。

こんな訳で、知らず知らずの間に陰気な女になっていました。絶えずひけめを感じ、妙に秘密めいた態度を持った娘だったに違いなかったことでしょう。

高校を出まして、ある会社の事務員として就職するまで、三度ばかり、他の大会社の面接審査でおとされました。きっと、その陰気さが出ていたのではないかと存じます。

ですが、本当に不思議なように、そのガンコな夜尿症が、ケロリとなおったのです。

それは、その職場を得て半年も経った頃でございましたか。お休みが続く時がありまして、同僚のお友達から、キャンプに行こうと誘われました。しかし、修学旅行すら、その原因のために行かなかった私が、どうして行ける訳がありましょう。私は、言を左右にして逃げようとしたが、そんな悩みをつゆ知らぬお友達は、再三にわたって同行をすすめるのです。私が行かなければ、その人も両親が許してくれないというのでした。まるで自分の楽しみを私が邪魔しているような錯覚におちるような勧め方で、たいへんな熱の入れようだったのでございます。

私も娘ざかりです。行きたい気持は十分に

ございましたから、その熱心な誘われかたには遂に負けて、承知してしまったのでした。勿論、生れて始めての外泊でございます。母も心配しながら、私がそんな気になったことを喜んで、オムツ類をリックに入れるのを手伝ってくれたり致しました。

いよいよ、キャンプ地での夜が来て、私はお友達のハシヤグのを見ながら緊張しきっておりました。勿論、用心に用心を重ねて準備し、お友達の眼をごまかしてしっかりとオムツとオムツカバーを締めたのですが、仲々に安心は出来ませんでした。

いつの間にか眠ってしまった私が、ハッと目醒めて最初にさぐったのが、オムツだったのは当然でした。ところがどうでしょう。無事だったのでございました。信じられませんでした。間違いなくオムツは乾いたままではありませんか。私はとび上らんばかりに嬉しく、涙がホロリと流れました。

本当に不思議でございました。それがきっかけとなりまして、まるで嘘のように、あのガンコな夜尿症がピタッと治ってしまったのでございます。

日が経って、いよいよ間違いなく治癒したと思えた時、私の心は晴れ晴れとなり、一度

に世の中が明るくなった思いで、身も心も本
当に軽くなったのでございました。殆んど、
物心のついたばかりの頃より、ついて廻られ
たやっかいもの、多感な娘心を悲しませ、情
けなく悩ませ続けられたうとましいオムツ。

私はやっと、このオムツに、さよならする
ことが出来るようになって、母親と手を取り
合って涙ぐんだものでございます。

ところが、一カ月も経った頃になって、ま
たもや、信じられないことに突き当たったので
ございました。これはどうした現象なのでご
ざいましょうか、あの呪わしいほどとまし
かったオムツが、恋しく思われだしたのでし
た。あれほどガンコであった夜尿症が、ケロ
リと治ったのも不思議でしたが、このように
オムツに魅かれる気持ちが湧いてくるなんて、
それにもまして不思議としか考えられないこ
とでございます。

たしかに、サッパリと身軽になった想いは
快適で、心配なくグッスリと眠れるのは有難
いのですが、何か説明の難かしい物足りなさ
に悶々とするようになってしまったのでござ
いました。そして、遂に私は、今度は母にも
内証で、しまい込んであったオムツとオムツ
カバーを秘かにとり出して、病氣中のように

穿き込んでみたのでございましたが、何かも
の足らなかつた気持ちがやや納った感じで、改
めて、この奇異な自分の気持ちにわれながら驚
いたものでございました。

うとみながら手離せなかつたオムツを、必
要がなくなつてから愛し始めるなんて、なん
と奇妙な現象なのでしょう。でも、いくら
奇妙でも不思議でも、また恥ずかしいと思っ
ても、私の気持ちがそう訴えてくるのですから
どうしようもございません。

その上、もう一つやっかいなことは、ただ
オムツとオムツカバーを穿くというだけでは
なく、あの病氣中に感じた、朝、目を覚めた
時の気持。しくじつて、泣き出したいくらい
に情けなく恥ずかしい気持と、ビッシヨリと
した冷たい感覚。本当におどましかつたそれ
らのことが得体の知れない魅力となって、私
の胸一杯にひろがって来たことのでございまし
た。そして、あれほど、何とかしくじるまい
と用心し、粗相しませんようにと神に祈りさ
えていたことを、再び繰り返してみたいと
いう欲望がわき上ってくるのを、どうするこ
とも出来ない自分に、驚いたり呆れたりした
のでございました。

そして、その想いの嵩じきったとき、迷い

に迷った末に、思い切つてその誘惑に身を委
せてしまったことがございました。

本当に不思議な魅力でございます。私は、
そのオムツを秘かに洗いながら、どうしてこ
んな布切や、小さなオムツカバーに、あれほ
ど私を悩ましたり、魅きつけたりする魔力が
ひそんでいるのかと、つくづく眺めたもので
ございます。

こうして、恥ずかしい魅力にとりつかれ、
執着ともいえる気持でオムツを愛好する女に
なつてしまつた私は、結婚し、主婦となつて
生活環境がガラリと変つたのに、このオムツ
という魔物から解放してもらえず、現在でも
夫を会社に送り出したあとで、まるで、一人
になるのを見すませて入り込んでくる暴漢に
捕われた女のように、オムツとオムツカバー
に玩弄？ されるのを心待ちにするようにな
っているでございます。

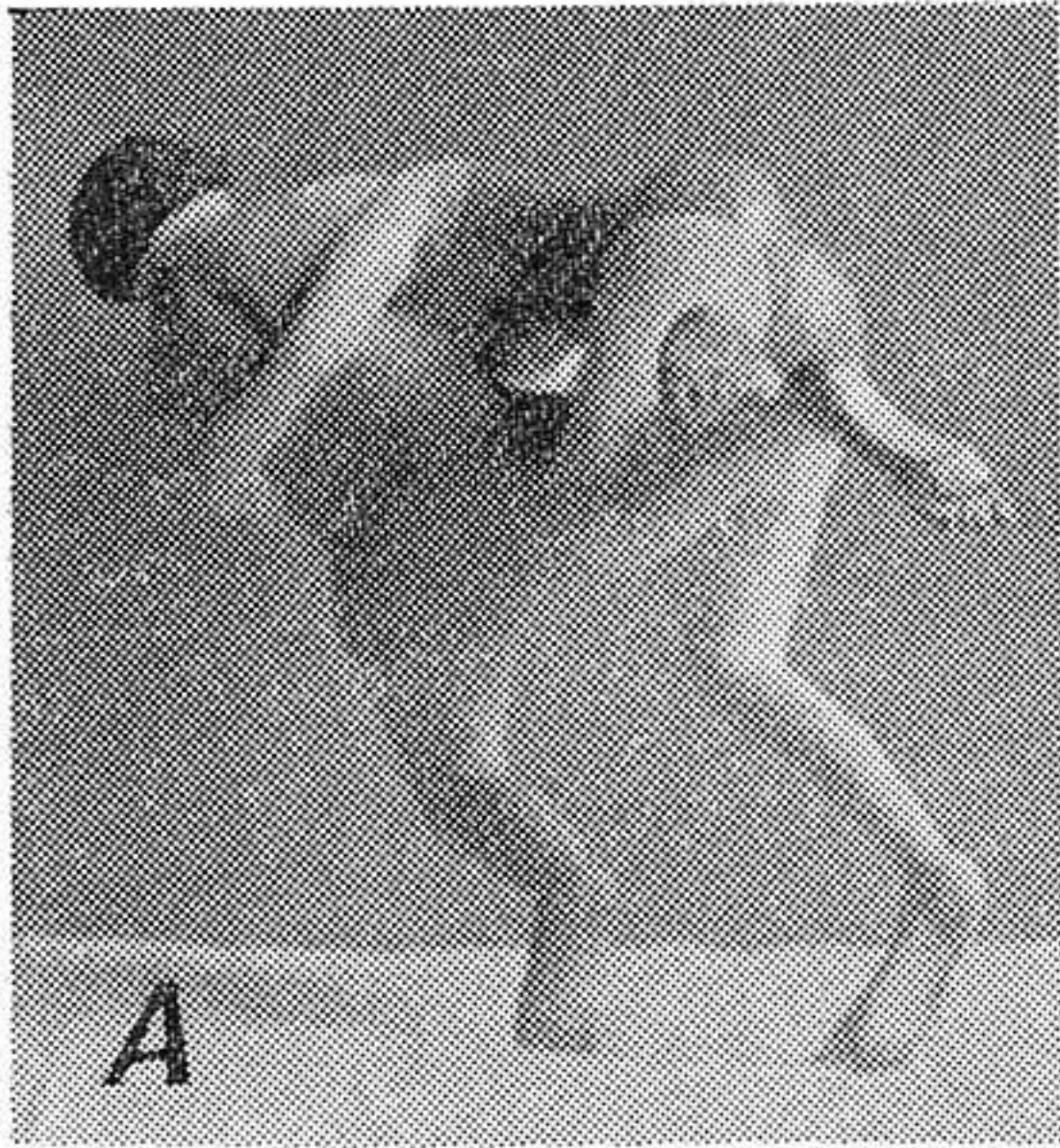
このオムツ・プレイ？ のことも書くつも
りでペンを執つたのでございますが、やはり
余りくわしく書く勇氣はございません。その
内に読んでいただきたいたとは存じますが、今
日のところは、こんな女も居るということだ
けを知っていただきとうございます。

(おわり)

女子レスリング人形

(首投げと足の裏の表現)

芦 浦 素 舞 夫



女斗美マニアの皆様お元気ですか。一昨年九、十月号の『デパート女子レスリング』以来すっかりご無沙汰いたしました。小生、昭和三八年七月号以来前記作品まで、約十編ほどの作品を発表してきましたが、勿論フィクションもいいところで、いずれも空想によるもので私自身、いささか物足りなさを感じていました。単に空想的な女斗美より一歩前進させ、直接視覚に訴えたものをお願い、女斗美の写真や、奇ク誌の挿画(主として小生の作品ですが)に小生の知り合いの女性の写真(顔だけ切り抜いたもの)を張りつけて、秘かに楽しんでいましたが、それでももう一つ

何か物足り無さを覚えはじめたのです。

そこで、写真や絵よりも立体的で、色彩感溢れる女斗美人形の製作を思い立った次第です。製作方法は、特殊な紙粘土を使い、ある程度形を整え、完全に乾いた所で彫刻刀で整形し最後に胡粉で上塗りして仕上げた本格的な人形です。ただ、顔の作り方がなかなか難かしいので今のところ、顔はわざと描いてあげません。これから人形の表情も研究してゆきたいと思っています。女斗美マニアの皆様もいかがです、一つ作ってみませんか。もしご希望の方がおられましたら、適価で作ってさし上げてもいいですよ。ただし、顔は省略してよかったです……。

さて、ここにお目に掛ける三枚の写真は、いささか軟調ですが、一昨年九、十月号に発表した、小生の作品『デパート女子レスリング』を人形で再現したものです。

実物の約五分の一、重量も二人合せて一キロ近くあり、どっしりしたポリウム満点の人形です。彩色は、太った女性の人形が、身体は浅黒い小麦色に、水着は黄色です。首を捲かれている背の高い女性の人形は、色白の身体にピンクの水着をつけています。なお、

この人形では特に足の裏の製作に入念な仕上げを行っています。小生の最も好きな長身女性の文数の大きい足の裏、特に脂足のべっとりした感じを出すのに苦労しました。どうか赤黒く汚れた感じを出すことができ満足しています。

では、三枚の写真について、試合経過をもう一度ふり返ってみたいと思います。マニアの皆様方の中で、昭和四十年九、十月号をお持ちの方は、もう一度読み返して参考にさせていただき下さると思ひます。

誌上録画中継

人形による女子レスリング試合

“デパート女子レスリングより”

この試合は九年前に或るデパートで行われた売場対抗、女子店員同士の女子レスリングの決勝戦です。

肥満女性		対 長身女性	
年令	十八才	年令	二十一才
身長	一五五センチ	身長	一六六センチ
体重	六三キロ	体重	五二キロ
足の文数	九文半	足の文数	十文半
頭髮	普通のパーマ	頭髮	アップ

一水着 黄色 一水着 ピンク色

写真説明(A)

両女性、最初から激しく手四つで揉み合ったが、肥満女性は積極的に長身女性の首を攻め、太い右腕をガツキと相手の細長い首に捲きつけ、得意の首投げで一気に倒そうとする……。長身女性は、倒されまいとして懸命に長い腕で肥満女性の太い腰に抱きつき、腰を落して必死に耐える……。

こうして、しばらくの間、両女性の激しい立技の攻防が展開されたが、肥満女性は、太い右腕で深く長身女性の首を抱え込み、強烈なヘッドロックを掛けながら、太い右脚を長身女性の長い左脚に絡ませ、強引な首投げを連発すれば、腰高の長身女性は遂にたまたらず、マットの上にどっと投げ倒された！

写真説明(B)

肥満女性も勢い余って、右



腕深く長身女性の首を捲いたまま、自分も相手の上に折重なって倒れ、組敷こうとしたがそこはテクニクをもって鳴る長身女性、巧みに肥満女性の抑え込みを逃れ、逆に相手の腰を強く締め上げながら上になろうとする……。しかし、肥満女性にがっちり首を固められている上、悲しいかな、体重が軽い為、相手をフォールに持ち込むことが出来ない……。長身女性在必死に斗っているさまは、彼女の大きなお尻が如実に証明している。

写真説明(C)

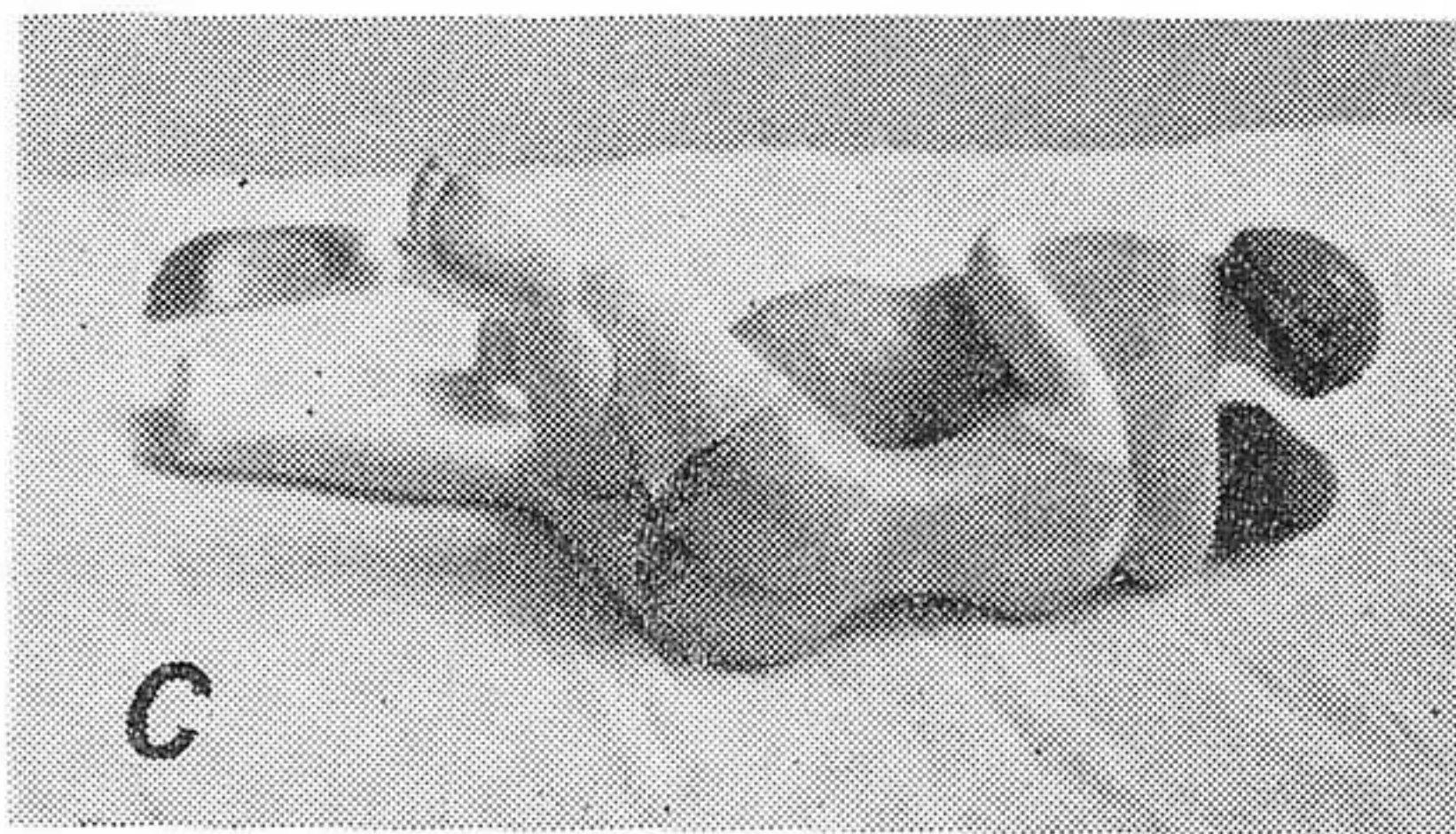
両女性の凄まじいばかりの力斗、秘術をつくした寝技の攻防は、なお続いた……。

しかし、時間が経つと共に、両女性の優劣がはっきりして来た。女子レスリングでも、力と体重に優る方が分の良いことにかわりはない。肥満女

性より十センチ以上も背の高い長身女性も、体重では逆に十キロ以上軽いのである。力も相手より弱かった。しかも、長身女性にとっては、肥満女性に首を固められるということは致命的ともいえる程に不利だった。やがて、肥満女性は、太い右腕で長身女性のほっそりした長い首を充分抱え込み、

強く締めながら、自分の重量を相手の上にのしかけ、完全に抑え込もうと攻めたてる。長身女性は、何とか相手を跳ね返そうと必死にもがいたが、力と体重の差は如何とも仕難く、フォール寸前に追い込まれる……。しかし必死に長い左腕を上げフォールを逃れようとしている……。

すでに両女性、汗みどろ。しかし長身女性の方が多汗症彼女の水着はぐっしりと濡れ、相手の太い腕で捲かれた首筋はどろどろになる様な汗である。長身女性の顔は肥満女性の豊満な胸の下に抑え込まれ息も出来ないくらいだ。



肥満女性がまた右腕に力をこめて首を締め上げる。長身女性はその苦しさに気を失いそうだった。苦しさの余り、凄まじい呻き声を上げる。だが彼女は長い脚をばたつかせて必死に耐える。肥満女性が、自分の大根足を長身女性の長い脚に絡ませている……。ちょうど

二人の足の裏がカメラの前ににゅっとつき出てきた。

彼女達の足の裏は、二人の体格の相違そのままを表現するかのよう非常に対照的だった。肥満女性の九文半の足の裏は、実に巾広い。足指も太くずんぐりとして短い。これに對し長身女性の十文半の足の裏は実に細長かった。しかも、長身女性は一、二倍ほどい脂足だった。先程からの激しい組み打ちで、彼女の十文半の細長い足の裏は、汗とマットの

ホコリで赤黒くべっとりと汚れている。彼女が色白なだけに彫りの深い土踏まずが、抜ける様に白いので余計に目立つのだ。

しかも、長身女性の細長い足指の股からべっとりとした脂汗が滲み出て、蒸れたような何とも言えない臭い匂いを発散させている……。長身女性の十文半の細長い脂足の臭い足の裏の表情は、肥満女性に首固めで抑え込まれている苦しさを如実に物語っていた……。勝ち誇った肥満女性の九文半の巾広い足の裏と全く対照的だった……。

こうして、試合は、肥満女性が強引な首固めで長身女性を討ち取ったのである。

現在、彼女たちは結婚して人妻となっているが、私の要請で時々奥様レスリングをみせて呉れるが、今でもやはり肥満女性が強く、例によって首投げで長身女性を倒して私を喜ばせて呉れている。しかも嬉しいことに、長身女性は、今もひどい脂足なのである。

これから作る人形には、何とか足の裏の蒸れた様な臭い匂いも出したいと思っているが……。匂いのするレスリング人形、何と素晴らしいことではないか。よきアドバイスを期待すること切である。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

今夏の回想

赤いウエット・スーツ

中 川 恵 子

十一月号の奇クを読んでいますと、千草忠夫さんの『過ぎ去った夏』という文章が、ゆくりなくも目につきました。今、私は真黒に陽灼けした自分の肌を眺めながら、過ぎ去っていった今年の夏のことを懐しく回想してみるのでした。

昨年の夏はモーターボートのハンドルを始めて握って、ビワコ・マリナーで水中スキーをやりました。始めて琵琶湖の湖面をボートで走らせたのは近江舞子で三十分三千円のヤマハボートを借りた時でした。水しぶきを上げて水面を飛んでゆくスピード感は素晴らしい

ものでしたが、平常に乗っている車から比べてみると、ドシンドシンとボートの底が水面を打って如何にも乗り心地がよくないので、もっとスピード感の味わる水中スキーをやりたいと思ったのでした。

初心者一日コースを終って、経験者コースを五回分ぐらいしてから、瀬田の唐橋をくぐって、南郷洗堰まで飛ばしたり、或は遠く琵琶湖大橋まで遠征したりして、すっかり水上スキーの魅力に憑かれてしまいました。腕や太股が痛くて困ったのは最初の二、三回位で、あとは水しぶきを上げて水面を走る爽快

なスピード感を思いきり楽しみました。

そして、八月も終りに近くなつて、スキンドビングで素潜りを覚えました。水中メガネとフィンをつけてスノーケルで呼吸をしながら水中を潜るのですが、始めて眺める水中の模様の美しさを堪能するまでに至らず夏も終りになってしまったのです。出来たら、アクアラングをつけて、スキューバダイビングをやってみたいとは思ったのですが、九月の声を聞くと、もう一緒に湖や海へ行こうという友達もなくなってしまいました。

今年の夏は私にとって、多分娘としての最後の夏になるだろうと思っていましたので、もう七月になって水浴場びらきやプールびらきが初まると、すぐさま真赤なウエット・スーツを買い求めました。身体に合わせて作ったこの総ゴム製のスーツは、ぴったりと全身の肌に密着して着心地は満点でした。部屋の中で一人で着たり脱いだり、水の中へ潜らなくとも大変ご機嫌でした。このウエット・スーツは厚手のゴム製ですが、スキ間なく肌にはりついているので、着ていてもまるで裸でいるように身体の曲線がすっかり出てしまうのも、私は大変気に入りました。

始めて身につけた時は、恥ずかしくてとて

も外へ着てゆけないように思えたのですが、庭の芝生の上で寝ころんだりしている中に、だんだんと馴れてきました。黒色ではなく、真赤なスーツにしたのも、私の好みでした。

小型ボンベ、アクアラングといささか出費でしたが、来年はひょっとしたら海へなんか行けないかもしれないと思うと、思いきって揃えてしまいました。夏休みになったら、遊びにおいで、と祖母や従姉妹たちが言ってきたのですが、七月末、待望のスキューバダイビングをやるため山陰海岸へ向いました。

今年の一月から七月まで、回数は多くありませんでしたが、奇クのお蔭で何回かの縛りの経験を得ましたし本当に充実した生活を送ることが出来て大変うれしく思っております。このことについて、八月に入ってから読者通信でお便りしたのですが没になってしまったのか十一月号には載っていませんでしたので、もう一度ここに書いておきます。

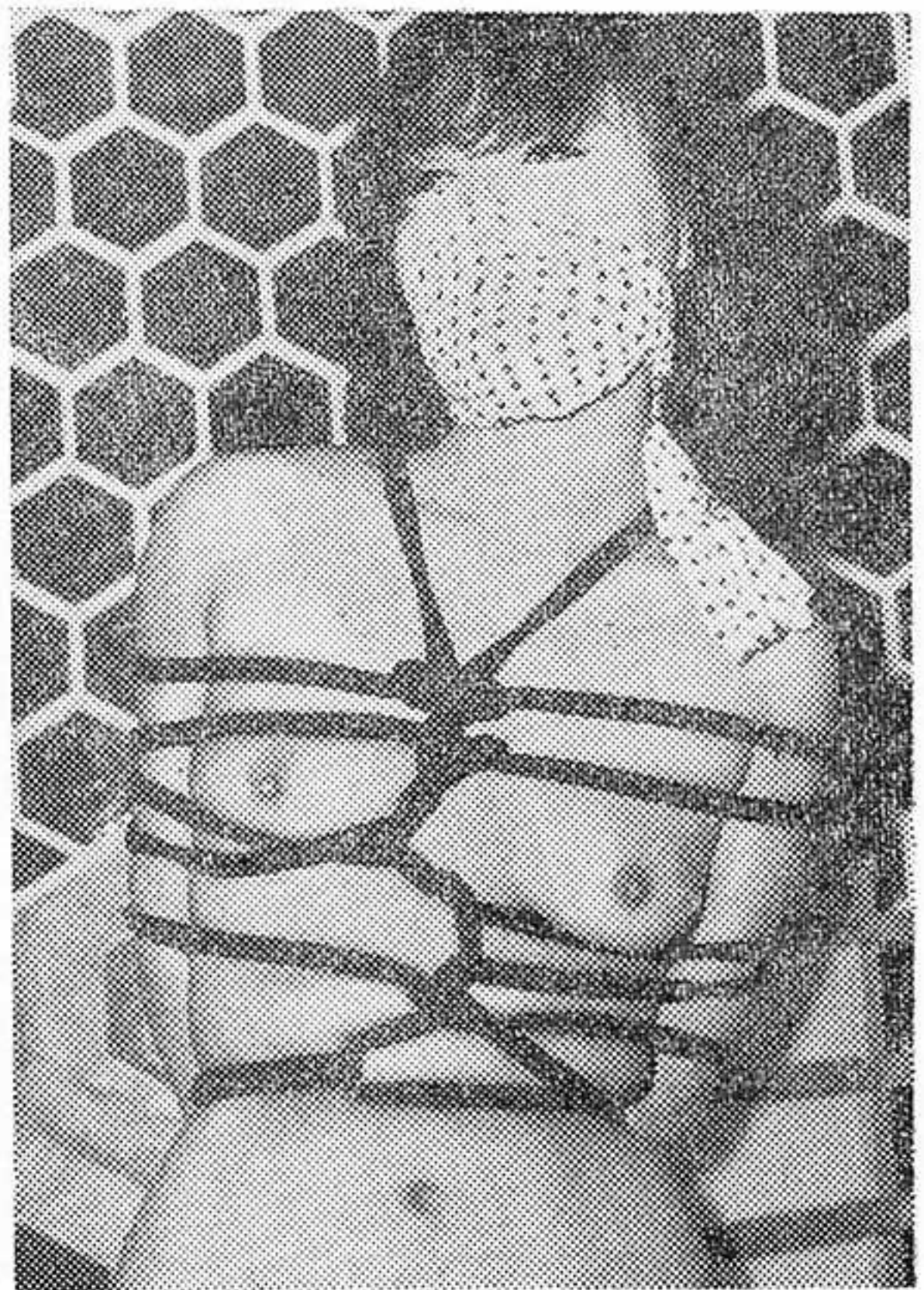
本当は十一月号に間に合うように、文章を書いてみたいと考えていたのです。十月号に載せていただいた文章の後日譚や、それから故郷へ車で旅立つ日のプレイのコトなど、いくらでも書きたいことは沢山あったのです。でも、そのいずれもが、不思議に生々しくて

ペンの滑りがなめらかでなかったのです。それで、なんとなく、とりとめのない文章を読者通信として送ってしまったのです。

十一月号にその読者通信が載っていたら、それを読んで又書いてみようかしら、と考えていたのです。キャンプ旅行に出発したのが七月二十九日でした。五日ばかりの予定ですが、思いきりスキューバダイビングを楽しみ

そして帰宅してから、夏休みの従姉妹たちと逢うため祖父母のいる故郷へ帰ろうと予定していたのです。それで、その前に二、三時間でもと編集部へ電話したのですが、休暇とかで私の望みも果されませんでした。

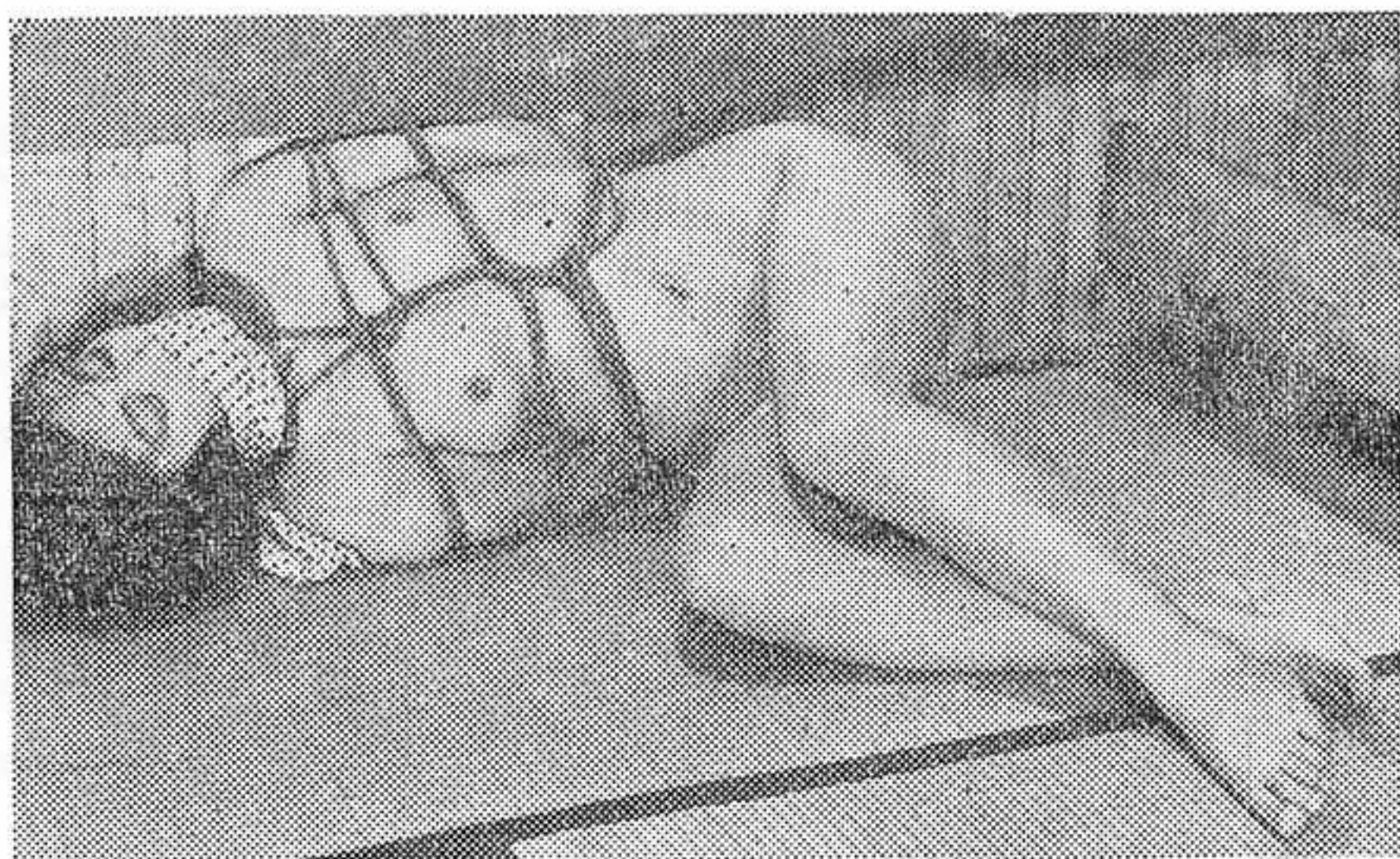
浜坂の海岸は岩また岩が重なる様に入込んで日本海特有の澄みきった海水が濃紺に静まりかえっています。小型ボンベを背負って水中の神秘を探ぐる海底散歩は本当に楽しい数日でした。真赤なウェット・スーツ姿で岩



の上にすくと立った私の姿を写真に残しておきたかったのですが、潜水用具やゴムボート、船外モーターなどを積込むのに大童で誰もカメラを持って来なかったので残念ながらも撮ってもらえませんでした。たしかに、こんな所へカメラを持ってきたら、潮風や砂で駄目にしてしまうでしょう。

朝五時ごろ、起きぬけに凪いだ海面をすいすいと泳ぐのは本当に爽快です。水着もつけずにタオル一本持ったままで沖まで泳いでゆくのもスリルがあります。沖ではタオルを首

に巻いて素裸で泳ぐのです。日中は肌が陽に灼けるので専ら昼寝をしたり、スキューバダイビングを楽しんだりしました。三台の車に分乗してきましたので、レジャー用品、寝具



などの外に、一台のライトバンには真水も相当積んできました。三台の車をコの字型に置いてテントを屋根の上へかぶせると急造の小屋が出来ます。

ウェット・スーツを着ていて考えたのですが、ゴム衣で全身を掩っていると、少々外部からの衝撃も肌にはこたえないので、こんな姿で強烈に縛られたり逆さ吊りにされたりしたら、相当のことでも耐えられるのではないのでしょうか。なんといってもウェット・スーツは素裸になって直接じかに着るのですから、私にとっても魅力のある衣裳です。若し冬なんか着せられたらゴムのぞっとする冷たさだけで一種の責めになると思います。そして一旦着用してしまったら、寒中でも水上スキューバをしたり、水中に潜ったりも出来るくらいですから、季節外れの野外での責めも出来るのではないのでしょうか。

お盆に故郷へ帰ったとき、私は従姉妹たちに、このウェット・スーツを存分に見せびらかしてやりました。余りお転婆と思われても困りますので、流石にスキューバダイビングの実演だけはやりませんでした。が、祖父母の家では、キャツキャツという黄色い声で沸きかえりました。私の乗っていった車で方々を

ドライブしたりして愉快な日を送りましたが二十日には帰宅、八月二十五日と九月一日の両日には、今までにない素晴らしい縛りと責めの体験をいたしました。この両日の体験は、今年の夏の終りを飾るにふさわしい、私にとって思い出の日となってしまうたからです。と言いますのは、あれから直ぐ、九月四日には祖母の急病のため、再び故郷を訪ねねばならなかったからです。

今、私は与えられた離れの一室でこの一文を書いていきます。なんとしても、あの両日の思い出だけは書いておきたいと思ってペンを持ったのですが、余りにも生々しくて書きづらいたので後刻、気が落ちついてからにしたいと思っています。祖母の病気もその後経過も良好です。ので、いずれ帰宅することになると思いますが、私の結婚が予想外に早くなりそうですね。です。いや、早くしなければならぬ事情が起ってきたのです。来春ごろと心づもりしていたのですが、とても、それまで待っておれないことになってきました。

そのことについても、気が落ち着き次第詳しく書きたいと思っています。お彼岸も過ぎ、秋風が一入、身に沁みてまいります。皆さま、お元気で。さようなら。

漫談千一夜物語

薔

薇

と

蜜

蜂

第一章 めぐりあい

田 俊 夫

かつつらはるる

をもちへりみす

口にまかせていひちらすは

やかてうきたることと聞ゆ

徒然草 第七十三段

薔 薇 と 蜜 蜂

1

昔、アラビアの国に一人の裕福な商人がおりました。若いころからさまざまの国に旅をして生涯を過ごしましたが、やがて巨万の富を得て安楽な余生を送るようになりました。

この商人にはメロンという名の、花のように美しい一人の息子がいました。年老いた商人がその息子を慈しむさまはかぎりなく、かたときもその傍を離れることを恐れ、常に

自分の手許において監視の目を怠ることがありませんでした。というのもメロンのまたとない美貌が仇となって、放蕩の裡に身を持ち崩しはしないかと心配したからです。

彼が十五才になったとき、その麗しさは完成の域に近づき、さながら美の女神と妍を競うばかりでした。その顔は雪のように白く、頬はばら色に輝き、涼しげな瞳と真珠の齒は見る人を魅了します。また、そのなめらかな肌は絹の手ざわりを思わせ、しなやかな四肢

は若い仔鹿を彷彿とさせ、ほっそりした腰は柳の小枝のよう、ふっくらと丸みを帯びた形のいい臀部はまるで砂山と見紛うほどの素晴らしさです。ですから数多い父の側女達が、愛らしい若主人を誘惑せんものと、さまざまの手練手管を弄したのも無理からぬこと。老父の危惧の念は日とともに増すばかりでした。

さてある日のこと、もう長くはないと悟った老商人は枕許にメロンを呼びました。

「せがれや、どうやらわしの寿命も尽きたら

しい。そこでお前に忠告しておきたい」

老商人は、いとも謹厳な面持ちでした。

「お前はまだ子供だ。世間のことは何も知らぬ。だから何をおいてもお世辞や追従で近づいてくる者を信用してはならぬ道理じゃ。それに、この世はすべて金次第。わしの財産はむやみやたらに使ってはいけない。それからもう一つ、酒と女を慎しむこと。この二つがすべて禍のもととなるからじゃ。分ったな、メロン」

「はい、よく分かりました。お父さん」

メロンは、とても悲しそうに、そう答えました。父親はしばし目を閉じて何やら冥想にふけりましたが、やがて言葉を続けました。「だが、おそらくお前は、わしの忠言を守るまい。そこで、これをお前に渡しておこう。もし、すっかり落ちぶれてどうしようもなくなったときに役立つだろうからな」

そういつて死期の近づいた老商人は、息子の手に小さなお守りを握らせるのでした。

数日後、老商人は黄泉の国へと旅立って行きました。たった一人残されたメロンは、何日も嘆き悲しんでおりましたが、やがて市場で父の商売を続けるようになり、しばらくは真面目に毎日を過ごしておりました。

だが好事魔多し、約束とは守られぬのが本来の姿で、メロンの殊勝な心がけも百日と続きませんでした。次第に彼は放埒な生活に深入りするようになったのです。そして亡父の心配したとおり、酒と女と賭博にうつつをぬかし、商売などそっちのけで夜昼となく遊びまわったので、さしも莫大な遺産も日に日に減少して、ついには店舗や屋敷をはじめ、一切の財産を手放さねばならぬ破目になってしまいました。気がついてみると、メロンには今やわずかに身をまとう衣服しか残っていません。やったのです。やっと自らの行状を反省したものの後の祭りでした。一文なしになったメロンは以前面倒をみた友達の家を順番に尋ねて行きましたが、みんな適当な口実をみつめて体よく門前払いを食わせるのでした。恩知らずな奴め、と腹を立ててはみても、もとはといえば自分の蒔いた種に他ならず、ある日のこと、すっかりおなかをすかせたメロンは町はずれの大樹の根元に腰を下して、過ぎた日の楽しい追憶に身を委ねておりました。

ああ、ばかあ何て不幸せな人間なんだろう。と人の世の無情を歎き、体制より疎外された悲哀をかこちます。何だ、こんなお守り、からきし役に立たないじゃないか。と的はずれの逆恨みをしたメロンは、亡父の形身である朱色の布袋をびりびりと引裂きます。きらり、一瞬、目が眩みました。中から燦然と輝くダイヤの宝石が出てきたのです。鳩の卵ほどもある見事な逸物です。そして、そこに小さな紙片がくっついていました。

——息子よ、この宝石を金に替え、商品を仕入れて航海に出るのだ。運命がお前に味方すれば、またもとの境遇に戻るができるだろう。すぐ市場へ行き……。

失意のどん底に、一抹の光線が差込みました。疎外よりの回復に可能性が与えられたのです。勇気百倍したメロンは、早速、町の宝石商のところへやってきました。

宝石商はその見事な色とあざやかな輝きに心を奪われました。しばらく打ち眺めて値びみをしているふうでしたが、金一万枚の値打は充分あると見極めると、

「ま、金三千枚というところかな」といいました。宝石の価値などまるで知らないメロンは大喜びです。一も二もなく強欲な宝石商の付値を承諾します。

「……お前さん、たしか一文なしのはずなのに、どうしてこんな高価なものを……」

「なあに、いざという時のための物さ」

ほくほく顔で代金を受取ったメロンは、床屋で散髪を済ませ、服屋で小ざっぱりした身なりを調べると、直ちに市場へ出かけて行きました。大勢の客や商人、貿易商などで大層な混雑ぶりです。メロンは市場の仲買人を呼び、自分は航海に出るつもりだからできるだけけもうけの多い品物を選んで荷造りしてくれるよう依頼しておいて、すぐ港へ直行します。

今しも一艘の大きな帆船が出航準備に大わらわのようすです。貫録充分の船長が水夫達にいろいろと指図をしています。

「おじさん、この船はどこへ行くのですか」

「黒檀島まで貿易品を運ぶのさ」

「そんなら、一緒に乗せてって下さい。市場でいろんな品物を買って来たんです」

船長は、うなずいてもうすぐ出港するから早く積荷を運んでくるよう、メロンに告げました。

やがて、船は港を離れ、漂渺たる大海原へと乗り出しました。さわやかな薫風は帆をいっぱい膨らませて、鏡のような海面を音もなく滑らせます。抜けるように青い空が、メロンの再起を祝福しているようでした。

最初の数日、船は天候に恵まれ順調な航海を続けましたが、七日めに急に風向きが変り恐ろしい嵐がやってきました。地平線に認められた一点の黒雲がたちまち全天をおおいつくし、すさまじい暴風雨に船は木の葉のようにあおられ、あっという間もなく沈没してしまつたのです。海中に投げ出されたメロンは運よく船から飛び散つた一枚の板子に縋りつき辛うじて溺死を免れました。そして逆巻く波にあおられ流されているうちに疲労が激しくなり、いつしか意識を失ってしまいました。

どれくらいの時間が過ぎたのか、ふと気がつくどと浜辺に打ち上げられています。潮流と風向きが幸運にもメロンを陸地にまで運んできてくれたのでした。あたりを見回すと、すぐ傍にこんもり茂つた果物の林があり、清らかな泉がこんこんと湧き出ています。甘露の水で喉をうるおし、甘い果実を貪り食って飢えを凌ぎ、ようやく人心地がつかしました。やれやれ、やっと命だけは助かったけれど、またもとの文なししか、とメロンはすっかり気落ちしてしまいました。それにしても一体ここはどこだろう。だが視界に入るものはただ白

い砂浜の海岸と青い草原だけの寂莫たる風景です。海面にはかもめが低く波に飛んでも、陸地には猫の子一匹おりません。そこでメロンは濡れた衣服を乾かすと、棒のように重い足を引きずりながら、海岸沿いに歩き始めました。

地の果実を食べ雨水を飲んで何日か進んでいくと、やがて花が咲き乱れ緑の樹々に囲まれた美しい町にたどりつきました。あてもなく賑やかな通りをぶらついてみると、一人の善良そうな老人がメロンを呼びとめました。「お若いの、どこから来なすつたのかね」

それまでのいきさつを聞いたその老人は、大層気の毒がって、ひとまずメロンを自分の家へ連れていきました。

「なにぶん、一人暮しでたいしたもてなしもできぬわけじゃが……」

と、老人は親切にパンや肉・果物などを勧めます。メロンは感謝しながら訊きました。

「ここは何というところですか？」

「カルピスさ。……わしはセツカイといつてな、金細工師なんじゃよ」

尋ねもしないことまで答えた好人物の老人は、それから一しきりおしゃべりを始めました。女房は去年食べすぎが原因でポックリ死

んだこと、子供は三人いてみな船乗りであること、また最近の世相をつらつら惟うに公害、汚職……、ぺちゃらくちゃら。

「で、お前さん、これからどうなさるおつもりかな」

「それが、どうしていいか……」

果然、セツカイ老人はメロンを引止めにかかり、自分のところで働くよう勧誘します。さしあたって行くところもないメロンも、まず生活の基盤を確立せねばなりませんから、渡りに舟とばかりに老人の申込みを承知したのでした。

こうして二人の共同生活が始まりました。

セツカイは我が子のようにメロンを可愛がって、細工のやり方などを教えこみ、時にはお菓子や絵本などを買い与えます。メロンもまた居心地のいい環境にすっかり馴染んで、老人の下仕事をしたり、市場へ製品を売りにいたり、食料などの買込みに出かけたりして毎日を過ごすようになります。

一カ月ほどたったある日のこと、メロンは金細工の材料を市場で仕入れてくるよう頼まれて、セツカイから金五百枚入りの財布を渡されました。メロンは早速、出かけました。そして、全く別のものを購入してくる結果に

なつたのです。

市場の近くまできた時でした。メロンは、ふと、一人の美しい女がラバの背に跨り、馬の手綱を従卒らしい男に引かせて進んでくるのに気づきました。馬上の女は年のころ二十三、四。気品のある美貌とすらりとした長身の乙女で、豊かな髪は金色に燃え立ち、顔ばせは雪のように白く、剣の刀閃く瞳はみる者を威圧します。そして身にまとう透明の布越しに、ふっくらと盛上った象牙の乳房、しなやかに波打つ腰、馬の背に悩ましく弾く砂丘のようなお臀がはつきりと感知され、臍だけたその妖冶な趣きはたとえようもありません。美の女神の再来かとみまごうこの艶麗な乙女を見ると、メロンはたちまち魂を奪われ、その馬のあとをつけずにいられません。仕事のことなどすっかり忘れております。うわあ、イカスなあ、一体どこの何者だろう、この女は。

やがて市場に到着すると、手綱を持ったくだんの男は美女を馬から降ろし、競売人を呼び出すと、意外なことにその美貌の乙女をせりにかけてくれるよう頼んだのです。物見高いはいずとも同じ。たちまち市場前の広場には、この素晴らしい美女を一目見ようとつめか

けた鼻下長族の大群衆で、立錫の余地なき混雑ぶりを呈しました。人垣の円陣が幾重にもぐるりと取巻きます。

「おい、前に出るな。見えないじゃないか」

「何だと、あとからきたくせに厚かましい」

前のほうでは右のような見苦しい争いが展開されますが、人垣の後方では、そもいきません。

「もしもし、一体どうしたんですか、この騒ぎは？」

「豚と羊がけんかしてるらしいですよ」

「なに、そうじゃない。乞食の女がお産しているんだ」

敏捷なメロンは人の間を巧みにくぐり抜けて、ぬかりなく最前列に位置を占めていました。競売人は黄金でふちどった椅子に乙女を坐らせると、やおら中央に進み出て一礼しました。いよいよ競売の開始です。

3

「さあて、お立合。買手の行商人衆並びに町の旦那方。これなる月の女神こそは……」

競売人ハッタリの大音声が四隣に鳴り響きました。すると、鶴のようにやせた一人の白髪の老人が前に進み出ます。町の商人頭ハリ

『あの助平じじい、一体どういう料簡なんだろう。一夜だって私達を悦ばせも出来ないくせに。それにあんな若いグラマー相手じゃ、

たった一晚であの世行きになっちまうよ』とね。わたしは人殺しになりたくないの」

この嘲笑を聞いたハリガ老は烈火のごとく怒って、競売人をどなりつけました。

「この女衒め、わしを愚弄するつもりでこのあばずれを連れてきおったな。いいか、二度とこんな真似をしたら、お前はクビだぞ」

そして、恐縮する平身低頭のハッターを睨みつけ大立腹のようすで立去りました。乙女はどこ吹く風とすました顔で、

「競売人さん、あんな年寄に売りつけるなんてあんまりじゃありませんか。もっとわたしにふさわしい人を探して頂戴」

と催促します。ハッターは苦い顔をしましたが、職務上止むを得ず、こんどは髭の警備隊長のところへ連れていきます。みると、身の丈六尺あまり、筋骨隆々として百人力を誇称する豪力無双の男です。

「この旦那なら別に不満はないと思うがね」

乙女は相手の容姿をしばらく眺めていましたが、ハッターに小声で尋ねるには、

「このひげのおじさんの商売は？」

「商人じゃないんだ、この方は。この町の警備隊長、ドオシ殿さ」

すると乙女は、隊長に質問し始めます。

「もし、ご立派な隊長閣下、そのおひげは本物かしら？」

警備隊長コケオ・ドオシはお世辞かと誤解して、得意満面、胸を張りました。

「無論だとも。……だが、どうしてそんなことを聞くのかね」

「いいえ、何でもありませんの。ついでに、も一つ伺いますけど、この町には泥棒が何人ほどれるのでしょうか」

「オッホン。このわしが警備しとるんだよ、娘さん。盗賊・泥棒はもとより、野良犬一匹寄りつかんわい。ワハハ……」

乙女は、その端正な顔に皮肉な笑みを浮かべました。

「それで得心が이었습니다。むさ苦しいおひげを生やして威張るのが、オバカさんの特徴だってことがね。……今ごろきつとどこかの家に盗賊が入ってるに違いないわ」

あまりといえばあまりの侮辱です。果然、怒髪天を突いた隊長、赤鬼のようなひげもじやの顔をゆがめて、

「だ、だまれ、小賢しい淫売め。へらず口を叩くと牢屋へぶちこむぞ」

しかし、美貌の女奴隷は一向、憶したようすもありません。いともあっさり、

「わたしの絹の肌に、その醜惡なひげ面をこすりつけるのだけはお断りいたしますわ」

隊長の憤怒指数は百を突破しました。

「う、うぬっ！ もう許せぬ。今すぐその美首を叩き落して……」

と、すさまじい形相で腰の刀に手をかけます。ハッターは意外なことになりゆきに狼狽して、必死にドオシ隊長をなだめます。

すると、丁度そのとき、町の警吏が一人、大層慌てたようすで駆け込んできました。

「隊長、大変です。いまさっき十人組の盗賊が町の宝石商を襲って……」

残念。隊長の權威もたった三分で地に落ちました。肉体美の奴隷娘はすかさず

「まあ、何という礼儀知らずの泥棒なんでしょう？ おひげの先生が、執務時間外だったこと、知らないのかしら」

大勢の群衆がどっと笑ったので、業務をサボってきていた隊長の面目は丸潰れです。

「……ふん。今日のところは見逃してやる。よく首を洗って待ってろ」

捨てゼリフを残して引揚げようとしています。「いつでもどうぞ！ 剣でも槍でも、お好み次第でお相手致しますわよ」

乙女はからからと笑って、追打をかけまし

た。こうしてその場はことなきを得たものの、ハッタリの洪面は一層ひどくなります。

「これ、娘さん。少しは言葉をつつしみなさい。もし隊長が刀を抜いたら、一体どうするつもりなんだったのかね」

「あら、それなら、なお好都合よ。あんな見かけだけの男にひけを取るわたしじゃありませんもの。この場で散々打負かして降参させあの大仰なひげをそり落してから、わたしの馬にして乗りまわしてみせるわ」

自信満々です。苦々しげになじるハッタリを軽くあしらひ、わざとらしく髪の乱れなどを直しております。

するとそのとき、先刻せりを争った、もう一人の人物、つまり、丸ハゲ小男の油屋が、二人の間に割り込みました。鶴老と髭男が空しく落選失格の憂目をみたので、ここぞばかり敗者復活戦を申入れてきたのです。

「どうじゃな、娘御。このわしならまず文句のつけようがあるまいて」

そういつて、大物の貫録を示しつつ、そっくり返ったものです。横目でチラとその姿を眺めた乙女は慌てて横を向き、手で口を押えました。思わず吹き出しそうになったからです。何しろこの先生ときたらヤカン頭につけ

ひげ、極端に短身なのに、ベンベンたる太鼓腹が突き出し、まるで酒樽そっくりの体つきだったからです。おまけに、歩きようがひどいガニ股ときているからたまらない。ところが何をどう勘違いしたのか油屋の大将、乙女が恥ずかしがっているものと思ひこみ、ニタニタ笑いながら猫なで声で話しかけます。

「自分でいうのも何だが、わしはあのご老体と違って精力絶倫。しかも無知な隊長などよりずっと紳士ですぞ。……一度わしと枕を交した女は皆いつておる。あのお方は鬼神の生れかわりだ、とな。お分りかな？」

聞くに耐えない下卑な話を得々として、キンカーンは教養の高さを自慢しはじめました。処置なしと観念した乙女は、脂ぎった油屋の発言を遮ります。——口うるさい競売人は、また小言をいうに決ってるけど、この調子でやられてはたまらないもの。

「旦那様、言値をせり上げるにも率というものがありませんよ。三枚や五枚の増値では聞いてるわたしの方が恥ずかしいのじゃないの」

「あ、そう。気にしない、気にしない。……で、中でもわしの最も得意な……」

「発言中止！ 一体どこから声を出してるのよっ！」

前二者のときと違って、今度は乙女の方が怒りました。気品のあるほりの深い顔が怒りに震え、美しく澄んだ瞳が憤辱に燃えています。キンカーンは一瞬ポカンとした表情です。そして、鳩が豆鉄砲を食らったような顔付です。

「……いや、わしのいわんとするところはですよ、要するに……」

「いいかげんにお止め！ 町に精神病院があるはずだよ。……それにあんた、縦と横の区別がつかないじゃないか。もう少し水と脂をしばって抜きなさいよ」

いかに鈍感でもこうあからさまに愚弄されると、さすが鉄面皮の油屋も憤然とします。

「ぶ、無礼者！ このわらばいを馬鹿にしおって。やいすべた、きちゃまなど……」

しかし乙女は、冷然と辛辣極まる止めを加えました。

「おだまり、トン助。豚には豚という立派な相棒がいるじゃないか。人間さまを相手にしようなどと罰が当るよ。第一お前、暗がりで顔とお尻をどうやって区別できるんだい」

縦横のちがいのない小男は、あまりの嘲笑に思わずくらくらと目まいを起しかけました。やっと気を静めたものの、悪口のいい合

いではとても分がないと悟り、ハッターにさんざん悪態をつきながら市場から出ていきました。これに反し、予期せぬ珍事の再発に大勢の見物人は大喜びです。

——やれやれ、この調子じゃ、とても商いにならないな。競売人ハッターは、ため息をついてそう考えました。乙女は一向、同情するそぶりもなく、

「ねえ、競売人さん。もっと、ちゃんとした買手を探して下さいな。でないと、わたし困るのよ」

とせがみます。大変な娘だな、この姫御前は。競売人はそう思いながら、

「困るのはこっちの方ですよ、娘さん。これ以上、町のお偉方を怒らせちゃ、こちとらは町で商売できなくなるんだぜ」

なるほど、ハッター氏の苦衷も察してやらねばなりますまい。内心では奴隷娘も彼に同情しているのです。

その時でした。何とはなしに群衆に目をやっていた乙女にメロンの姿が映じました。若柳の枝のようにしなやかで、仔鹿のようにすんなりした体つきの美しい若者です。つづらな瞳は悩ましげにうるみ、口許の小さなほくろがばら色に輝く頬にあでやかな色どりを添

えています。たちまち、やるせない思慕の念が乙女の胸に燃え上り、激しい恋情がその肺腑を傷つけました。奴隷娘はうっとりメロンを見つめ、ほっと吐息を洩らしました。

——やっぱり、夢占いは当たってたわ。早速この可愛い小鳩をつかまえて……。

「ねえ、競売人のおじさん。お願い、あそこにいるハンサムな男の子に売ってほしいの」
乙女の心中を知るや知らずや、ハッターは何となく気乗りのしない表情です。

「さあてね。あの若衆は一度もせりに参加しなかったよ、娘さん」

「では私から、じかに頼んでみるわ」

目の前に気品あるグラマー娘が近寄ってきたのでメロンはどきり。すらっと背が高く、丸みのあるがっしりした体つき、キングサイズのごい美人です。

「もし、愛らしい殿方、わたしを買って下さいな」

いきなり直接勧誘を受けたメロンは、しばし、その返答に窮します。

「わたしではお気には召しませんの？」

ベールを差上げ満月のように美しい顔を晒して、乙女は艶然とメロンに笑いかけます。強烈な悩殺電波に若者は完全に痺れました。

「い、いえ、そんな……しどろもどろ……」

金五百枚しか持っていないし、それもセッカイ老人から預かったものです。とても手の出ない高嶺の花と諦めているのに、向うの方から押売りにやってきたのだから、メロンの狼狽ぶりも当然でしょう。衆人監視の中、金がないとは、とても恥ずかしくていえないし、何か適当な口実はないかしらん、と押売り撃退策に苦慮しています。

にゅっとむき出しの脚が眼前に突き出されます。第二次挑発戦術の敢行です。メロンは息を吞みました。真白い大理石の円柱が、ほとんど股のつけ根まであらわになって、その全容を誇示しているのです。すらりと長く伸び切った白い壮麗な円柱は圧倒的な量感で若者に迫り、きりりと引締った形のいいふくらはぎと、むっと息苦しいほど充実したたくましい太腿が目には焼きつきます。ずっと地面に腰を下ろして最前列で事態を傍観していたメロンは、衣裳に包まれたグラマー娘の肉体美をあれこれ想像し、ひそかに楽しんでいたのですが、こう露骨に見せつけられるとかえって閉口し慌てて目をそらしました。が、眼前に屹立する壮麗な脚線美の魅力には抗しがたくなり、靴みがきが女客のそれを窺うように、時

折ちらりと視線を走らせ、上目づかいに眺めざるを得ないので。あまり健全な挙動とはいえません。

「近眼になりますよ、そんな不自然な見方だと。……お買いになってから家でゆっくりご覧ばせ」

どっと哄笑が湧き起り、即席セミヌード娘にからかわれたメロンは頰まで真赤になりました。わざと渋面を作って立ち上り、てれかくしに衣服に付着した砂などをはたき落します。きまり悪げに下を向いているメロンを、くすくす笑って眺めながら、乙女はなおも催促しました。

「お値段は、いくらでも結構ですけど……」

「でも、少ししか持ってないんです」

びくびくして逃げ口上を述べはじめたメロンでしたが、乙女もさる者、

「売れ残りだからお安くしておきますわ。金五千枚でどうかしら……じゃ三千枚、……二千枚でもだめ？……では千枚……」

と、バナナの叩き売り宜しく断固出血サービスに踏切って対抗します。自分の主人の意向などまるで眼中にないかのごとき振舞いです。メロンはどうしていいのかわからなくなりました。

「あの、ぼく用があるから、さよなら」

逃げ腰で後ずさりして人垣の中へまぎれこもうとしましたが、そうはさせじとばかりに美貌の乙女、さっと猿臂を伸ばしてメロンの手首を掴まえます。

「そんな挨拶はないでしょう……」

へっぴり腰で手を振り切ろうとしますが、万力のような美女の握力です。おとなしくしていればいいものを、なおも引張り外そうともがいたからたまりません。あっと悲鳴を挙げてメロンは膝をつきました。恐しく強い力で手首を握りしめられたからです。じーんと痺れて即時に感覚喪失、指に血の気が全然なくなりしました。片方の手を素早くメロンのかくしに突込んだ乙女は、中から金子入りの財布を保管者の許可なしに取出しました。万事休す、押売娘の快勝です。

「……三百、四百……五百枚か。これだけあれば充分だと……」

「でも、それぼくのお金じゃない……」

「そんなこと関係ありませんよ」

迷惑防止条例を無視してメロンの懐中から財布をひったくった押売娘は、ハッタリのところへ戻ります。全く乱暴な娘です。「競売人さん、早速契約書を作って下さい。」

あの若者を買ってもらうことにしますから。

……代価金五百枚也、とね」

「先方は承知したんですかい」

ハッターは懸念の体です。

「多分ね。どっちにしたって買わせるから同じことよ」

「金五百枚なんて、お前さんの値打ちが下るだけだよ、娘さん」

渋い顔のハッターは乙女に再考を促しましたが、相手は少しも取り合おうとせず、

「いくらでも、わたしの勝手じゃないの」「ま、そりゃそうですが、手前の手数料のほうかね……」

奴隷売買仲介業職務協定規約により、マージン（代金の五分）となっているのです。競売人が本音をはいたので、乙女はすました顔で「金四百枚あげますよ、手数料として」ハッターは度胆を抜かれ目玉が三角になりました。

「じゃ、お前さんの主人の取分は……」

「五百から四百引けばどうなってる？」

何だか狐につつまれたような具合です。だがこんなボロイもうけはまたとない。現金なハッターは急に元気百倍、大急ぎで証書を作成するとメロンの傍へ足を運びました。

「若旦那、あんたは全く果報者ですぜ。何せこのすごい別嬪をたった金五百両で手に入れるんだからね。……いや、何にしても全く似合いの若夫婦ってとこさね。結構結構」

さっきの渋面はどこへやら、満面くずれんばかりの笑みを浮かべてハッパをかけ、下手なお世辞を並べてごまをすります。

「じゃ、一つここにご署名を」

白昼、女強盗に財布をふんどくられたのと同じ状況下にあるメロンは、逃げ出すわけにもいかず半泣きの表情をしています。だが、利益第一主義に徹したハッターは我関せずとばかり、契約書突きつけました。

「何も買うなんていってないのに、無理やりぼくの財布を……」

「女奴隷など買った経験がないから、恥ずかしいのですよ、この坊っちゃん」

必死に抗弁しようとするメロンを、女奴隷は強引に圧殺してしまします。そしてグルになったハッターに目くばせして、簡単に止どめを刺しました。

「それにまだ子供だから署名など要りませんわ」

「あ、なるほど。そうしましょう」

一方的売買契約はかくて無事終結とはなり

ました。競売人ハッターは、法外なもうけに有頂天です。帰りにバー「H」で一杯やっておさわりといくか……。

奴隷娘の原所有者の姿は、いつの間にか消えています。トルコ風呂へでも出かけたのでしょうか。大勢の見物人も三々五々、メロンに野卑な冷やかしの言葉を浴びせながら散りはじめました。

もう夕方です。西に傾いた太陽の光線が、一組の男女の影を長くくっきりと地に這わせました。

4

「どうぞご主人さま、早くお邸へ連れて行って頂戴」

だれもいなくなった夕暮れの広場で、自分を無理やり買いとらせた美貌の女奴隷が、新所有者をせきたてました。しかし、他人の金を使いこんだメロンはすっかりしょげ切って、セツカイ老人に何と言訳したものかと、胸を痛めている最中です。

「何かわけがありそうですね。話してごらんなさい」

優しく肩に手を置いてメロンの顔を撫でながら、乙女はその理由を聞き糺しました。そ

こで、沈痛な面持ちでメロンがことの経緯を綽綽有餘におよぶと、乙女は少しも驚かず、「……そうだったの？ でも心配する必要などなくてよ。わたしが、ちゃんと取りなしてあげますからね」

と、幼稚園の保母気どりで一層優しく慰めるのでした。しかたなく、メロンは女奴隷の手を引いて、おそろおそろセツカイ老人の家へ戻りました。

材料を買いにやらせた内弟子が、予期に反して若いグラマー娘を連れ帰ったので、案の定、老人は驚きました。

「メロン君や、この娘さんは一体どうしたんだね」

「……あの、実は市場で……」

約束どおり、すぐそのあとを引き取って、乙女がことの次第を説明しました。もともと自分の方から押売りをしたとはいいいません。

「……というわけですの。でもおじいさん、この人を責めないで下さいね、気に入ったものは何でも買いたい年頃なんですから。……それに、お金のことはわたしが責任を持ってお返ししますわ」

「そうか、そうか。……ま、いいじゃろ。なに、金のことならそう心配せずとも……」

「一カ月だけ待って下さればよろしいの」

好人物のセツカイ老に文句もいわず寛大な態度を示され、メロンはほっと胸を撫で下ろしました。すると、途端に空腹を覚えます。昼めしも食ってないのに気づいたからです。

「となると、問題は部屋じゃな。……なあ、娘さん、ご覧のとおりわしの家は二部屋だけで、しかも隣り合せ。その上、境界の戸は壊れておって風通しがきわめて良好。壁は節穴だらけだし、都合の悪いことに建具屋は今週は休みときている……」

金銭の使い込みを大目に見てくれたのはいいのですが、余計な心配までされては有難迷惑です。若いメロンは赤くなってもじもじしています。が、奴隷娘の方は年長者の貫録充分。メロンの両肩にうしろから手を掛けおぶさるようにもたれかかって、くすくす笑っているのです。そして大胆不敵にも、

「つい立てでも置けば、どうかしら」

と宣い、メロンの顔を殊更に横からのぞき込みました。

「なるほど、それは名案じゃ。で、節穴のほうは……」

「あもう、ぼく市場へ行って夕食の材料を買ってきますから……」

別にメロンをいじめるつもりもないので、乙女は懷中から小銭を取り出して若者に渡ししました。

「御馳走を作ってあげますから、一番上等のものばかりにしてね。……早くよ」

やっと心理的拷問から解放されたメロンはバスケット片手に、すっ飛んでいきました。

パンや肉、野菜、果物、香料、塩、こしょう、蜂蜜、ぶどう酒、化学調味料(?)などを言われたとおりに手当り次第買いこんで家へ帰ってくると、乙女だけが待っておりました。問題の境界面は支障のない程度に光線遮断装置が設置してあります。ただし、音波のほうまでは手が回りかねたらしく、脈動数の大小とワット/平方センチメートルの対数のいかんがメルクマールになりそうです。

「おじいさん、今夜だけ外でお泊りになるんですって」

「ふうん……」

やがて、夕食の準備が完了すると、メロンと女は食卓に差向いになって仲良く一緒に食べはじめました。老人が気を利かせて外泊してくれるのでゆっくり水入らずを楽しめるわけです。が、それも束の間、おながが一ぱいになったところで一波瀾が起りました。

「メロンさま、あなたはまだお若いから、お酒はわたし一人でいただくわ」

これは明らかに逆効果です。未成年者飲酒禁止法の趣旨を正しく理解し、忠実に通用せんとする遵法精神が、かえって未成年者メロン君の反撥を招きました。

「いいや、ほかあ酒だってウイスキーだって飲めるんです」

むっとしてメロンは強くなりました。子供扱いされては憤慨するのも当然でしょう。だが、不興の原因はそれだけではありません。

そもそも、最初の出会いからしてまずかったのです。幾度となくからかわれ、人格を無視したやり方で子供扱いされ、その度に切齒扼腕の思いをしてきたメロンなのですが、年令の差と貫禄のちがいはいかんともしがたく、その上乙女の鋭い眼光に射すくめられると完全に参ってしまうのです。今、その光り輝く美貌と見事な肉体美を目のあたり見て、にわかに青春の高ぶりを覚えても、乙女の天性に備わった気品と威厳に圧倒されて、手も足も出ない状態にあります。かくてはならじと勇を振り起そうとしたが、しらふでは到底その実現の可能性なく、従ってアルコールの力を借りようと考えていたのです。つま

り、乙女の保護者意識は暗にメロンの酔態作戦の出鼻を挫いた結果になりました。そんな姑息な手段を企画するものだから、反対にひどい目にあわされるのです。

「酔払うと苦しくなりますよ」

「以前から飲みつけているんだ、エヘン」

「……じゃ、わたしが飲ませてあげるわ。ここへ来て膝の上にお坐りなさい」

あくまで女奴隷は後見人的態度を堅持します。メロンを自分の弟ぐらいに心得えているようです。自尊心を傷つけられた若者は、ふくれ面をして、そっぽを向きました。

面白くもない、どっちが主人なのか分らないよ、これじゃ。そういちいち、いうことを聞いてたまるもんか……

「さ、早くいらっしゃい」

「いやだっ！」

果然、実力行使の開始です。乙女はいきなり身を躍らせて、メロンを抱きすくめ、あっという間に利腕を取ってその場にねじ伏せてしまいました。片腕を立てて背中を押えメロンの抵抗を完封します。

「あ、……な、なにするんだっ！……」

「そんなに暴れると、関節がはずれますよ」
メロンは口惜しそうに足をバタつかせます

が、腰紐を手にした乙女は赤子の手をねじるような容易さで、膝下にもがく若者をあっさり後手に縛り上げてしまいました。どう見ても月とスッポンほどの体力差がありそうです。

メロンの襟首をつかんで引き起した乙女はやんわりと決めつけます。

「いかが、メロンさま。もう少し痛い目をなさりたい？」

メロンはベソをかいて頭を振りました。実力の格差をはっきり思い知らされて、シュンとなっています。

「そう。最初からそんな態度だと手荒なことをせずに済みましたのに……」

勇ましい娘は、縛り上げたメロンを軽々と抱き上げ、自分の膝の上に横向きに坐らせました。

「も、もうおとなしくするから、紐を解いて……」

「だめ。だだをこねた罰ですよ」

風変りなお仕置もあったのですが、乙女の真のねらいは第6節になれば分ります。

奇妙な酒宴が始まりました。通常ならばさしつさされつとなるところ、両手の自由を奪われていては相手の意思に完全に制約されね

ばなりません。とても見ていられないほどの濃艶な情景の展開です。

やがてメロンの顔にほんのり赤味がさすころ、乙女は手にした盃を捨てて直接口移しに飲ませるようになりました。手間もかからず簡単で、しかもその度ごとにメロンの唇の甘味を満喫できるという、趣味と実益を兼ねた一石二鳥の効果的手段だからでしょう。

ピッチが段々早まると、酔いも加速度的に増してくるのが理の当然です。次第に苦しくなつて、もういらないと首を振つても、「何ですか、これくらい。さっきの自慢はどうしたの？」

と、かさにかかって攻めてきます。

逃げてでも逃げてでも追ってくるいたちごっこです。唇を閉ざし齒をかみしめて頑強に抵抗するのですが、乙女は孫子の兵法に精通しているともえ、まず強引に唇を合せ、その自由を奪ってからメロンの鼻をつまんでしまいます。蛸が岩盤に吸着したあわびを引剥がすやり方です。熟柿の落ちるのを気長に待つ家康作戦にあわび君が降参したところを、さっと剥がしてむしゃむしゃ食ってしまうそうです。

二本足の蛸嬢のからめ手戦術に三本足のあ

わび君は完全にグロッキー。頬は真赤にほてり吐く息も苦しく、ダウン寸前に追い込まれました。

「……あ、ああ、もう、かんにんして……」

眼玉を白黒させて、愛情に満ちた献盃を辞退すると、やっとのことで、乙女は熱烈な口づけを停止するのでした。そして、さも未練ありげに、メロンの柔らかい捲毛をかき上げ白い額にさかんに親愛の印の雨をふらせました。

「わたしの身の上を御存知でしょうか、メロンさま」

頃はよしと、乙女は話題を転じました、市場からの帰路の道すがら、メロンの身の上話はすっかり聞いていたので、今度は自分の番だというわけです。

「何故あなたにあのようなやり方で買っただいたのか、これにはフカイ理由があるのです。今からそれをお話いたしましょう」

乙女はそう言って、膝の上にぐったり伸びているメロンをその腕に抱き起しました。

「酔さましをさせてあげましょう、メロンさま。眠ってしまわないように、このお目目をパッチリ開けていて下さいね」

子守歌でないことを強調してから、腕に抱

えたメロンを優しくゆすり、さわやかな銀鈴の声で歌うように語りはじめました。

5

——ではお聞き下さい、愛らしい若者よ。

ここより遙か西方にサントリーという美しい国があり、わたしはその国の王の一人娘として生まれたのです。サファイヤと名づけられたわたしは、父王トリスの寵愛を一身に集め、宮殿の奥深く大勢の侍女に囲まれて成長しました。何一つ不自由のない環境に恵まれて、わたしはあらゆる学問の道を修め、すべての技術の粋を極め、いずれの分野でも優れた才能を示して人を驚かせました。生れつき豪胆な性質と男まさりの体力を与えられたわたしは、また剣技・槍術をはじめ武芸百般に通じ、馬術に拔群の技倆を示し、国中でわたしに匹敵する勇士はだれ一人おりませんでした。

——さて、わたしにはアップルという一人の弟がありました。心根優しく容姿端麗で、まるで絵から抜け出たほどの美しい少年でした。わたしはそのアップルを何にもまして可愛がっておりましたが、丁度十五になった年に急に病いにかかり死んでしまったのです。

最愛の弟を失ったわたしは、どんなに嘆き悲しんだことでしょう。だがいかに泣いたとて死者が甦ることはありません。そしてそのときわたしは固く心に誓いました。将来の自分の夫には必ずや死んだ弟の面影を忍ばせる人を選ぼう、と。

——さて、いつしか私の美貌を伝え聞いた諸国の王や王子達が、自分の妃にとたびたび申込んでくるようになりました。そこでわたしは次のような条件をつけたのです。

「晴れの場所で正々堂々剣術と馬術の技を競いましょう。わたしを打負かさないかぎり、どんな方をも夫にはいたしません。だが、わたしより優れた腕の持主なら、その方の身分はいかようにあれ、よろこんで妻にさせていただきます」

無数の求婚者の中に、わたしは死んだ弟アップルの面影をひたすら探し求めました。そのような相手には、わざと負けるつもりだったからです。が、その望みは成就しませんでした。いつもいつも試合に勝ったあとで、わたしはほろ苦い勝利の味を噛みしめねばなりませんでした。

——さて、そんなある夜のこと、私は夢をみたのです。

……自分の飼っていた美しい鳩が突然いなくなり、その後を追ってわたしは何日も山野を漂いました。山を越え川を流り砂漠を過ぎ、どことも知れぬ遠い異国の地で、やっと探し求めた鳩を捕えました。が、そのとき一羽の赤い鷹が急に空から舞い降りて手の内の鳩を鋭い爪に挟んで連れ去ろうとします。わたしは怒り、その鷹を射落そうと矢をつがえて弓を引きしぼったとき、急に夢から醒めてしまったのです。

この夢物語を聞いた王宮の夢占い師は申しました。

「姫よ、あなた様は婿の君をこの国で得ることはできません。亡き弟君アップルさまに生写しの方が、遠い異国の地におられるのですから」

「それはどこ？ またその方のお名前は？ さ、早く教えておくれ、マユツバ」

せきこんで尋ねるわたしに、夢占い師のマユツバは答えました。

「ずっと東方、多分サラセンの国でございましょう。だがそれ以上のことは分りません。それに」

マユツバは眉をこすって語を継ぎました。

「たとえばその方を首尾よく手に入れても、姫

よ、あなたさまにはまた別の災難がふりかかって参りましょうぞ。折角探しあてた婿の君を、すぐに手離さねばならぬ破目になるやも知れませぬゆえ」

「赤い鷹とは何者なの」

「はてさて、このわたくしめには見当もつきませぬ。何にせよ、夫君を手に入れたあととはすっかり手の内に置いて、常に用心なさることが最善かと思ひます」

夢占い師はそう語って、一服するため安物のタバコに火をつけました……。

——さてその翌日、父王がわたしを呼びつけて申されました。今般アサヒ国のキリン王がわたしを是非にとの御所望、同国はその勢威あまねく喧伝される強大国ゆえ、もし申入れを拒絶せんか、どのような仕返しをされるやも知れぬ。よってこの旨をしかと考慮せよ、ということでございます。

「でも、あまりに首の長い男はわたしの好みのタイプではありません。伝え聞くところによると、確かそのようなお方かと……」

「いやいや、多少そうかも知れぬが、その代りホップのよく効いた苦味走った好男子であらせられるぞよ」

「さすれば父君、いつものように……」

「ならぬ。お前が勝つに決っておるわい。……それに、もう先方へは承諾の返事をしてあるのじゃ」

「そのような一方的なお話は困ります。そんな、わたしの意思を無視してまるで押売りと同じようなやり方で……」

（メロンはペロリと舌を出して肩をすくめました）

「だまれ。いつまでも娘のわがままを聞いてばかりはおれぬ。これ、サファイヤ、少しはわたしの立場を……」

と、それから長いお説教が始まりました。

キリン王は明朝サントリー国へ到着される予定だとのこと、もう一刻の猶予もありません。いかにしても、夢の世界に見た小鳩を現実の世に探しあてよう、そう決心したわたしはその夜、男の姿に変装し、騎士の装束に身を固めると、一頭の俊馬に打跨って秘かに王宮より脱走したのでした。

——さて、首尾よく御殿からは逃げ出したものの、ぐずぐずしては父の追手に捕まってしまう。とにかく大急で国境だけは越えなければなりません。わたしは夜も昼も休まずとても乱暴なやり方で馬を走らせました。激しく答をあて、鋭く拍車を蹴りこんで

ほとんど休息も与えず乗り続けたので、幸いにも追手に捕まらずやっとな隣国の領地へ到着したときには、馬は疲労のあまりぶっ倒れてしまいました。

乗り潰した馬を捨てて、それから長い苦しい旅が始まりました。死んだ弟アップルに似た美しい若者を求めて、わたしは多くの国や都、町などをあてもなく探しまわりました。でもそのことはあなたにお話する必要もありますまい。宮殿より逃亡して約二年の歳月が過ぎました。そして今日、幾多の辛苦のかいあって、このカルピスの町で、メロンさま、あなたという一番素晴らしい若者を探しあてたというわけです。

メロンさま、わたしは女奴隷ではありません。馬の手綱を引いていた男は別に持主などではないのです。奴隷娘のなりをして、市場であのように振舞えば大勢の人の目に触れることができ、求める相手を見つけやすくなるだろう。思案のすえそう考えたわたしは、どの町でも行きずりの旅人に頼んで奴隷商人の役をやってもらうのでした。わたしの身の上話はこれでおしまいです。少しは酔いもお醒めになったでしょうか、メロンさま——。

6

「さて、このような次第で」と長時間に亘る身上話を終えた美しくも勇ましいサファイヤ姫は、膝の上に座らせた若者メロンをいとしげにゆさぶり言葉を続けました。

「あなたは前世からわたしのものになる定めだったのです。もうこれからは片時もわたしの傍から離しはしませんよ。地位も名誉も捨てて、やっとの思いで手に入れた小鳩ですもの」

そういつて姫はメロンに頬ずりするのです。ほのぼのと心の暖くなる風景です。

メロンの酔いはすっかり醒めてしまいました。なるほど、姫の気品や物腰からして、とても奴隷などに思えなかったのは事実だけれど、前節のような因縁があるとはチートも知らなかった。メロンは今更ながら姫の高貴な美貌と逞ましい武勇に驚嘆の念を覚えるのでした。だが困ったことには、そんな高貴な生れのお姫さま相手では、いかに手を出し、いかに脱がせたらいいのかその要領が分らないし、第一依然後手に縛られている達磨的現状では手の出しようもないわけです。

才色兼備で武勇卓絶の超努級スーパーレデ

ィーに心底から惚れられた若者は、うれしいような、恐ろしいような、悲しいようなきわめて複雑な表情です。一体いつになったら解いてくれるのかなあ……。

だがその心配は杞憂でした。

「もう少しこのまま我慢しなさいね。ちょっと調べたいことがあるから……」

激しい恋情に燃えるサファイヤ姫はその情熱のたぎりを実行に移します。すなわち、自分の方から積極的に手を出し脱がせにかかったのです。メロンの若い肢体のぬくもりをしばし掌で楽しんでいた姫は、いきなり若者の衣服を剥ぎとろうとします。

「……な、なにするんですっ……」

狼狽したメロンは思わずそう口走って脚をくねらせばたばたさせました。

「だから少し調べるっていったでしょ……」

「い、いやだ、そんなこと、……こ、このままじゃいやだあ……」

と絶叫するメロン。が、姫は断固既定方針を遂行します。

まことに奇妙な争いです。実に愉快な風景でもあります。しかし、愉快なのは姫と局外者だけであり、メロン君の方は悲愴そのものといわねばなりません。何せ、今までこんな

屈辱的な取扱いを受けたことがないのですからメロンの狼狽ぶりも当然ですが、現実とは時として厳しく苛酷ですらある。姐の上の鯉は所詮逃れられぬ運命にあるのです。子供扱いどころか、まるで赤ん坊扱いに格下げされたようでした。

「聞きわけのない人ね。何も取って食おうというわけでもないのに、さ、これでおしまい、と……」

また一しきりむずかり、最後の抵抗を試みんとするメロンを、姉さん女房らしくなだめすかしながら、姫は所期の目的を達成いたしました。口惜しいやら羞しいやらで、耳たぶまで朱に染めた顔をそむけ唇を噛みしめているメロンですが、どうすることも出来ないのが残念です。というのも、始めから膝の上であおむけにされ、腰のあたりをがっちり片腕にかかえこまれていたからなのです。

姫はさもおかしそうに笑い、メロンは羞恥にあえぎます。と、果然お医様ごっこの点検開始です。

「あっ、あ、いやだ。いやだったら……や、やめて、やめてえー……」

「うそおっしゃい、いやだなんて」
くすくす笑いながら、メロンの悲痛な叫び

に耳を貸そうともしません。

「乱暴はいやだ、……理、理非を弁じないで腕力に訴えるなんて無法だあ……」

「安全保障理事会じゃないのよ、ここは。……さ、婿の君、そう強情を張らずにおとなしく遊ばせ」

押しかけ女房なら当然かような調査権限を保有しているのだといわんばかりの顔つきで督促します。抵抗の空しさを悟ったメロンはしくしく泣きながら遂に無条件降伏して我が運命を敵の管理下に委ねました。

それからしばらく落花狼籍の場面が進展しました。姫の腕にかかえられたメロンは、猟師のとりもちにかかった小鳥のようにその膝の上で翻弄され、赤ん坊よろしくあしらわれて、屈辱の極みに身悶えるのでした。やり切れない思いに呻吟しながら、その運命と闘っております。その間を利用して姫は未知のジヤングル開拓調査を終えた様子でした。敵を知れば百戦危うからずとの格言を実地に応用したともいえましよう。

最後の砦を最初に陥し入れてから、姫はメロンの他の砦にも進攻し、調査の対象を拡大させました。死刑執行の後で罰金を取られるようなものだから、メロンは姫のなすままに

委ねて、弱者の悲哀をかこつ他ありません。

このような検査を受けているうちに一旦醒めたと思えたアルコールの酔いが、再度猛烈な勢いでぶり返し、メロンはいつの間にか前後不覚に眠りこんでおりました。

メロンの寝顔へ視線をやると、今しも白河夜船の真最中、つい先刻ひどい目に遭わされて、何ともやり切れぬ屈辱に悶えぬいたことなど、まるで失念したかのごとく、幸福そうな顔付で、すやすやと安らかな寝息を立てているのです。

——一体どういう神経なんでしょうね、この子は。とにかくたたき起さないと話にならないわ……

——美しい牝豹に追いかけれあわやという瞬間、はっと夢から醒めて現実の世界に立戻ったメロンは、そこに一人のヴィーナスを発見しました。しきりにゆらぐ灯台のほの暗い光に映えて、豊潤な裸身を大胆に誇示した美の女神は、ぬめやかに輝く白磁の肌もあらわに、艶然と笑い、悩ましく手を差し延べているのでした。

……やがて、この家に住むねずみが、天井裏で目をさまさされて驚いていました。

(つづく)

あってもじっと耐えて生き抜くのよ。必ず救われる日が――」

静子夫人は、すすりあげながら、今にもその場にぐずれ落ちそうになって嗚咽し、追いついてられながら歩きつづける小夜子に声をかけるのだった。

小夜子は、涙を一杯浮かべた黒い瞳を夫人に向け、悲しげに小さくうなずく。

「何をブツブツいってんのよ。早く歩かないか」

銀子と義子は、左右から量感のある夫人の尻とふっくらと柔らかく盛り上った小夜子の尻とを平手打ちして叱るのだった。

調教室の前へ来ると、鬼源がドアの間から首を出して待ち受けている。

「別嬪さん達、御気分はどうかね」

鬼源は黄色い歯をむき出して笑いながら、「今朝はすっかり寝坊しちまったぜ。さ、早いとこ顔を洗って、朝のお化粧にかかんな。それからすぐ朝の調教開始だ」

突き入れられるように連れこまれた調教室の隣にある洗面所で、ズベ公達に監視されながら、歯をみがき、洗顔した夫人と小夜子は、次に、朱美の持ってきた化粧道具を使って、鏡の前で静かに化粧し始めた。

人間である事を放棄した凍りついたような冷たい表情で、化粧し、口紅をひく夫人と小夜子であったが、そんな二人の鏡にうつる美しい容貌をうしろからズベ公達はしげしげと見つめて、

「ほんとに美人ねえ。憎いくらいだわ」

と、溜息まじりにいうのである。

「さて、お化粧が終ったところで、鬼源先生に朝の御挨拶よ」

化粧を終えた夫人と小夜子を、再び邪慳に調教室に入れドアを閉めた銀子は、部屋の中央の椅子に坐って、煙草をすっている鬼源を指さした。

二人の美女は、再び、ズベ公達にわざと意地悪げに背や尻を突かれ、フラフラと鬼源の前へすすみ出る。

「それへ坐るのよ」

義子が鼻をピクピク動かしながら、二人にいった。

夫人と小夜子は、深くうなだれたまま、その場に膝を折って坐る。

鬼源は、そんな二人を面白そうに口元を歪めて見下しながら、

「おかしなものだな。お互に、もう片時も離れるのが辛くなってな調子だぜ。昨夜は大熱演

だったものな」

と、大口を開いて笑うのだった。

昨夜の息も止まるばかりの屈辱を思い起したのか、これから徹底して行われる調教に対する恐怖からか、小夜子は白い柔らかい肩のあたりを小刻みに慄かせながら、両手で顔を覆い、すすり上げる。そんな小夜子をいたわるよう静子夫人が手を、そっと小夜子の肩にかける。すると小夜子は、こらえていたものが胸を裂いて飛び出したよう激しく泣きじゃくって、夫人の胸のあたりに顔を埋めるのだった。

「朝っぱらから何でい！ メソメソしやがって。さ、俺に朝の挨拶をするんだ。先生、お早ようございますってな」

鬼源は、恋人同志のように抱き合い、慄えている眼の前の美人二人にそんな事をいい、胸をはって見せた。

「何してんの。モタモタせず、早く御挨拶するんだよ」

銀子がうしろから、夫人と小夜子の背を足先で突いた。

二人の美女は、ぴったりと体を寄せ合い、この屈辱を必死に切り切ろうとするかのよう、手をかたく握り合いながら、

「——先、先生、お早ようございます」

と、消え入るように頭を下げ、とぎれとぎれの声を出すのであった。

「いや、お早よう」と、鬼源は満足げにうなずき、

「今日からは、小夜子の調教をおめえに任せろ。いいな、静子」

はっとして、狼狽した顔を夫人は上げたが「どうしたい。そういう約束だったじゃねえか。何も驚く事はねえだろう」

鬼源は、せせら笑って、夫人の顔に視線を向ける。

静子夫人が、美しい眉を悲しげに寄せ、がつくり首を落してしまったのを見た鬼源は、ニヤッと笑ってからふと顔を上げて、銀子達に眼くばせをした。

うなずいた銀子と朱美が、小夜子のふくやかな肩に手をかける。

「さ、お嬢さん、お稽古を始めるのよ」

「嫌、嫌ですっ」

小夜子は、夫人にしがみついた。

「こわいっ、こわいわ」

小夜子は、夫人の肩に顔を埋めて、激しく泣きながら、駄々っ子のように首を振るのだった。

「手数をかけさすんじゃねえっ、何時までも甘ったれてやがると承知しねえぞっ」

鬼源は、突然、大声をはりあげた。

はじかれたように血の気の失せた顔を上げた小夜子に、銀子が含ま笑いしてさも小気味よげにいった。

「何もこわがる事はないじゃないの。今日のお稽古は小夜子のおねえ様となった静子夫人がつけて下さるわけよ」

さ、早くおいでっ、と、ズベ公達は、小夜子の肩や腰に手をかけて、引きずり起し、部屋中央へ連れて行こうとする。

「小、小夜子さん」

静子夫人は、思わず上体を上げ、悲痛な表情で、連れ去られる小夜子の方へ手を差しのべた。

「おめえは、モタモタせず、ここに居りゃいいんだ」

鬼源は、うしろから、静子夫人の背をどんと足で突いた。バタリと両手を床についた静子夫人は、そのままガックリと顔を伏せて、すすり泣き、

「——小夜子さん、辛抱するのよ」

と、声をふり絞るようにしていう。小夜子は、調教室の丁度、中央あたりに、

ズベ公達の手でスベスベした白い肩や背をつつかれて、引立てられて行く。

「さ、そこへ立つのよ、お嬢さん」

銀子は、白墨で円が描かれている床の上を指さし、その中へ立つようと小夜子に命令した。それは何時か、静子夫人が満座の中で、果物切りの珍芸を強制され、屈辱の汗と脂にまみれ、のたうった場所である。

今、小夜子は、その円形の中に立たされ、くの字型に体を曲げ、出来るだけ体を小さくし、身をすくませながら、羞恥に慄えている。羞恥というより、一体、これから、どのようなおぞましい調教を受けるのか、その恐怖に全身が慄えるのかも知れない。

「フフフ、みっともない恰好ね。もっと、しやんとしなさいよ」

銀子と朱美は、羞恥と恐怖に、もじもじしている小夜子を面白そうに見ていたが、ジーンパンのポケットから、ピンク色の長いしごきを取り出した。

「麻縄にすると、肌がこすれて、長い間の調教を受けるのは辛いだろうからね。特別にこういう優しい縄にしてあげたよ。お嬢さんにはきつとよく似合う筈よ」

銀子と朱美は、羞恥にむせびながら辛う

じて立っているという感の、小夜子の左右へ
つめ寄った。

「さ、お嬢さん、お手々をうしろへ廻わし、
ちゃんと胸を張ってごらん」

「——ね、小夜子に、どんな事を、さ、させ
るつもりなのです」

小夜子は、線の柔らかい白い頬に一滴の涙
を流しながら、哀願のこもった美しい瞳を銀
子に向けるのだった。

「さおね。静子夫人がお稽古をつけるんだか
ら、私達は何ともいえないわね」

銀子と朱美は、とぼけたような顔をわざと
作って、

「さ、ぐずぐずせず、手をうしろへ廻わすん
だよ」

と、小夜子の背を左右からつくのだった。

小夜子は、観念したように静かに臉を閉じ
合わせ、乳房と前を隠していた両手を徐々に
うしろへ廻わし始めた。

待ち受けていたように、銀子と朱美は小夜
子が背に廻わした両手首を重ねさせて、キリ
キリ、しごきで縛り始める。ピンク色のしご
きは、それから前へ廻わされて、柔らかそう
な白桃のような乳房の上下を、かたく緊め上
げ始めた。

きびしく縄がけされている間、小夜子は、
頬や首筋を充血させ、深く首を垂れたまま、
シクシクとすすり上げている。

いいようのない白い繊細な下肢を、小夜子
はかたくなばかりにぴったりと閉じ合わせ
全身でこの屈辱を耐えようとしているようで
あった。

「雪白美人とは、小夜子の事をいうのね。ほ
んとに見れば見るほど白い肌だわ。何んだか
癪だわね」

そんな事をいいながら、小夜子をきびしく
縛りあげた銀子は、調教室の壁の方に立っ
ている義子の方を見て、合図する。

義子は、うなずいて、壁についている把手
を力一杯ひいた。

ギイ——と金属の軋む音がして、天井から
一本の鎖が垂れ下がってくる。小夜子を縛っ
たしごきの縄尻を、銀子は垂れ下がって来た
鎖の先端に結びつけ、再び、義子に眼で合図
した。

再び、鎖は、上昇し始め、小夜子の縄尻は
たぐられて行く。小夜子の上体がピンと張
ったところで、鎖を停止させた銀子は、逃げ
も隠れも出来ないといった風情の小夜子を心
地良さそうに眺めて、

「これから小夜子は、ここで、静子おねえ様
から色々な芸当を、優しく教えて頂けるわけ
よ。しっかり勉強する事ね」

深く首を落し、小さくすすり上げている小
夜子のふくらした頬を指で突いた銀子は、
そっと体をかがめるようにし、象牙色をした
小夜子の輝くような太腿と、ひっそり息づい
ている絹のような……にじっと眼をそそぐ。

「きれいな艶をしてるわね」

銀子が、フフフ、と含み笑いしながら、そ
っと手をのばして行くと、

「あっ、嫌っ、嫌よっ」

小夜子は、必死になって身を揺すり、銀子
の手をさけるのだった。

「フン、何よ、昨夜は、こいつが——」

「お、お願い、もういじめないで——」

小夜子は、嗚咽の中から、唇を慄わせてい
った。

朱美がニヤニヤして、小夜子の前に立ち、
わざと顔をのぞきこむようにして、

「私ならいいでしょ。一寸ぐらいいさわらせた
って」

「嫌、嫌、ああ、お願い——」

小夜子は、世にも悲しげに美しい顔を左右
へ振りながら、縛り上げられた身をすくませ

声をひそめて泣き始める。

「へえ、やっぱり、静子おねえ様でなきや嫌だというのね。いいわ。私達、ゆっくり見物させてもらう事にするから」

朱美は、そういつて、ふと、静子夫人のいる方へ眼をやった。

静子夫人も声をひそめてすすり泣いている。床の上に立膝をし、両手で顔を覆っている夫人の傍に、鬼源が先程からあぐらを組み煙草を横に咥え、何か夫人に難題を吹っかけているらしかった。

「大体、そういうような要領で、小夜子を仕込むんだ。わかったな」

「――」

「おい、わかったのかい」

鬼源は、メソメソしている夫人に業を煮やしたのか、再び、大声をはりあげる。

静子夫人は、消え入るようにならずいて、承諾の意志を示す。

自分のかつての愛弟子であった小夜子に対する淫らな調教をこれから自分が行わなくてはならない。血も凍るばかりの恐怖感が夫人の胸にこみ上ったが、しかし、もうこの運命から逃れる術はないのだ。他人の手で、ズタズタに引裂かれるより、自分の手にかかって

奈落の底へ落ちた方が、小夜子にとってはまだしも救いになる事かも知れない。悲痛な気持ちで、静子夫人は決心し、鬼源に承諾の意志を示したのだった。

「じゃ、早速、始めて頂こうか」

鬼源は、そういつて立ち上り、静子夫人をうながす。

「さ、行きな。それ見ろよ。小夜子嬢がお待ち兼ねだぜ」

静子夫人が立ち上り、乳房を抱きながら、小夜子の方へ静かに歩き始めると、小夜子は涙でキラキラ光る美しい黒眼を夫人に向け、夫人の胸の中に泌み通るような哀しさを、その表情に現わすのであった。

「小道具を揃えてやんな」

鬼源が銀子達の方を向いていう。

あいよ、とズベ公達は、あらかじめ用意しておいたらしいものを棚の上からおろし、運んで来た。

十数個のゆで卵の入った箆を義子が小夜子の足元に置く。足元に置かれたそれにふと気づいた小夜子は、ひどく狼狽し、さっと首も顔も燃えるように赤くして、のけぞるよう顔を横へそむけてしまった。それが、どういふ目的のために使用されるか、小夜子はわか

っている。一度、鬼源にそれを使用され、あまりの恐怖と屈辱に、気が狂いかけた事があった。何という恐い事か、今日は、それを静子夫人の手で――。

嫌悪の戦慄が、さっと小夜子の身内を走ったが、恐い責道具は、それだけではなかった。銀子が、『村瀬小夜子、調教用』と表に墨字で書いてある桐の箱と何本かのガラス棒を同じく小夜子の足元へ並べ、何か得体の知れないドロドロしたものが入った壺を朱美も置くのであった。

わざと見せつけるような仕草で、そのような無気味なものを足元へ配置された小夜子は一瞬、気が遠くなりかける。

そんな小夜子を鬼源は、せせら笑って見つめながら、

「面白そうなものが随分と盛沢山に並んだがこれからこれを使つて、おめえの大好きな静子おねえ様が、お稽古をつけて下さるといわけた。いいな。今日は徹底的に――鍛えるんだぞ」

静子夫人も、そうしたおぞましい道具類から、あわてて眼をそらせ、恐怖の慄えで歯を噛み鳴らしている。

「それからいつとくが、ただ黙って味気のな

い調教をするんじゃないねえ。昨夜の大熱演のよ
うに、お客様を意識して、如何にも恋人同志
らしく楽しく調教をするんだ。いいか、わか
ったな。さ、始めな」

鬼源は、そういつて、その場に立膝して、
ちぢかんでいる静子夫人の柔軟な肩をたたいた。

「さっき教えてやった要領で、上手に小夜子
を仕込みあげるんだぜ。小夜子が、上手に転
がすようになるまで、何時間でもつづけるん
だ。いいな」

静子夫人は、泣き出す一步手前のような気
弱いまたたきをして、立ち縛りにされている
小夜子を見上げた。小夜子もまた、泣くよう
な哀願するような悲哀のこもった眼で、夫人
を見ている。

「何をぐずぐずしてるんだ。早く始めるとい
ってるのが聞えねえのか！」

鬼源に叱咤された静子夫人は、遂に立ち上
り小夜子の前へ近づいた。

「——小夜子さん、いいわね。覚悟をして頂
戴。私、鬼になったつもりで、貴女を調教す
るわ」

その言葉の裏に、どうか、静子を許して、
こうしなければ、貴女は、もっとひどい仕打

ちを受けなければならぬのよ、という血を
吐くような夫人の哀泣がこもっている。

そんな静子夫人の心を察知した小夜子は、
体の慄えるのを齒を喰いしばって止め、悲し
げながらきっぱりとして肯いた。

「——わ、わかりましたわ。小夜子は、調教
をお受けします」

「ああ、小夜子さん」

静子夫人は、あまりの不憫さに、思わず、
小夜子の一人、緊縛に自由を奪われたいた
たい肩を抱きしめ、すすり泣く。

「とても、とても恐ろしい事なのよ。でもお
願ひ、小夜子さん。がまんして。がまんして
頂戴」

「先生、小夜子に一つお願いがあるの」

小夜子は後手にしっかりと縛り上げられた
身を寄せて、静子夫人の頬に、涙に濡れた熱
い頬をすり合わせるようにして思いきったよ
うにいった。

「小夜子、先生の事を、ほんとにおねえ様と
呼んでいい？」

「いいわ、小夜子さん。そういつて下さい。
その方が静子も嬉しいわ」

静子夫人は、わっと泣き出したい程のいじ
らしさを覚えて、思わず知らずのうちに小夜

子の頬を両手で押さえようにし、小夜子の唇
に慰さめと励ましの意味をこめて、柔らかく
甘いベーズをする。

「何時までモタモタしてんのよ。頭に来ちゃ
うわ。全く」

銀子と朱美が口をとがらせるようにして、
夫人と小夜子に声をかけた。

「いいわ、おねえ様、始めて」

小夜子は、夫人から唇を離すと、何か訴え
るような陰影をたたえた眼を静子夫人に向け
静かに瞼を閉じ合わせるのだった。

そんな小夜子の頬に合図のように軽く口吻
した静子夫人は、次に、小夜子のピンク色の
しごきに締めあげられている胸の隆起の薄桃
色の二つの蕾に、そっと唇を寄せた。

挫折

やがて、静子夫人の華奢で繊細な指先が、
おどましい調教を開始すべく、胸の隆起にか
かる。二つの蕾をつまみ上げ、美しい掌が白
いふくらみを撫で、遂には、顔と手で同時に
胸許を責めながら、静子夫人は、シクシクと
泣き出すのであった。

——許して、小夜子さん、許して——

静子夫人は泣きながら慄えながら、小夜子に観念を与えるべく、心を鬼にして積極的になり出す。

かたく眼を閉じ合わせたまま、顔をねじるように横にそらせ、唇を噛みしめて堪えている小夜子であったが、夫人の唇と指先が次第に移動し始めると、次第に上気の色を顔面一杯に漲らせ、首を左右に振り動かすのだった。

静子夫人の白魚のように細く華奢な指先が慄えながらも思いきった気持を表わすと、小夜子は、うとうめいて、切ないばかりの身悶えをし、耐え切れなくなったようにカスれた声で、

「——ああ、おねえ様——」

と唇を慄わせながら、繊細なすすり泣きを始めるのである。

静子夫人は、幾度となく、ためらったが、その度に氣をとり直して、熱い接吻を浴びせかけつつ、いいつけられた通りの微妙な責め方をつづけた。

小夜子の身悶えと、すすり泣きの声は、次第に激しくなりつづけたが、静子夫人もすすり泣きつつ、涙にうるんだ切長の美しい瞳で小夜子を見上げ、鬼源に教示された責めの段

階に入るのだった。

「——ねえ、小夜子さん、ここは何という所か御存知？ 御存知なら、おっしゃって」

小夜子は夫人のその言葉を聞くと、はっとしたように顔を反対側にねじるようにそらせる。

鬼源と三人のズベ公達は、北叟笑み、貪るような視線を責める静子夫人と責められる小夜子に向けている。

「よ、小夜子、それが口に出来ねえうちは、何時間でも同じことをやってなきならねえぜ。それだけ調教が長びくんだ。調教する奥様に大変な御苦勞をかける事になるんだぜ」と鬼源が笑いながら声をかけた。

「——ねえ、小夜子さん」

静子夫人は、ゆるやかな責め方をつづけながら、涙にうるんだ^{かげ}の深い眼で小夜子を見上げ、

「お願い、勇氣を出して、おっしゃって。小夜子の——と」

そういった静子夫人は、自分達のあまりの浅ましさに耐え切れなくなったのか、小さなくぼみをかすかに息づかせている小夜子の白い腹部に額を押しつけ、激しく鳴咽し始めるのだった。

忽ち鬼源の叱咤が飛ぶ。

「やいやい、そんなメソメソした調教があるかよ。小夜子がそれをいう気になるまで、徹頭徹尾、責めまくるんだ」

静子夫人は、涙を振り切ったように美しい顔をあげ、再び、甘い微妙な責め方をくりかえす。

「——わ、わかったわ、おねえ様。小夜子、います」

もどかしげな身悶えをくり返していた小夜子は、半開きになった口から絞り出すかのよう小さく声を出した。

「——もう小夜子、おねえ様のいう事にさからわないわっ。許して、おねえ様っ」

責められる自分より、責める静子夫人の方が、どれだけ辛く、苦しい事か、それを悟った小夜子は、夫人と呼吸を合わせ、見守る悪魔達を喜ばせるための努力をしようと心にきめたのである。畏敬し、敬愛して来た美しい静子夫人の水々しいばかりに繊細な指先で責められているうち、妖気めいた情感がこみ上り、自分でも気づかなかった女の肉体に巣くう悪魔が、じわじわと顔をのぞかせて来たのかも知れない。

「——これは何という所、ねえ、おっしゃっ

て小夜子さん」

「——小夜子の、小夜子の——ですわ」

小夜子は、悲しそうな影の射す瞳を上の方へ向け、小さく口を開いた。

鬼源と銀子は顔を見合わせて、どっとはやし立て笑い合う。

丁度、その時、調教室のドアが開き、今朝方、一旦、遠山家へ戻っていた千代が兄の川田と一緒に入って来た。

「如何が、奥様の調教ぶりは？」

千代は、金齒を見せて笑い、立ち縛りにされている小夜子と、それにまといつくようにしている静子夫人の方へ、視線をなげかけるのだった。

千代は、堂々とした盛装で、羽織、着物、帯、帯じめなど、豪奢で高価なものらしかったが、それらはすべてかつての静子夫人の所有物に違いなく、指には、これも静子夫人が愛用していたと思われる三カラットのダイヤの指環をはめていた。

「なかなか立派な調教ぶりですよ。今、小夜子に、ようやくそれぞれの名前を口に出させ、これからいよいよ徹底的に鍛えるという所ですよ」

鬼源は、千代に向かってそう言うと、静子夫

人へ視線を戻した。

「さ、どんどん調教をつづけな。千代夫人もここへ来て御見物して下さいませ」

静子夫人は、慄然として、一瞬、うしろを顧り、ひきつったような表情になる。

「何も、私が見ているからって、そんなに驚く事はないじゃありませんか」

と、千代は、二人の美女の傍に進み寄り、「日本舞踊のお稽古より、そういうお稽古の方がずっと面白そうじゃありませんか。さ、私に遠慮する事ないわ。どんどんおつづけになって下さいまし」

といい、彼女特有の痾高い声でケラケラ笑い出すのである。

かつての女中であった千代の前で、再び、演じなければならぬ屈辱の行為。それは夫人にとつては、身をズタズタに切刻まれる事よりも辛い、苦しい、耐えられぬ行為に違いなかったが、夫人がためらえば、どのような責苦がまた夫人の身にふりかかるかも知れないと感じたのであろう。小夜子は、悲痛な決心をしたように顔をあげると

「おねえ様、次はどうするの。早くご遠慮なさらないでどしどしお稽古をつけて。ねえ、おねえ様ったら」

「——小夜子さん。とても辛い事だけど、辛抱するのよ」

静子夫人は、自分のために小夜子が責めを甘受しようとしている事に気づくと、いじらしく胸が熱っぽくなって来たが、そうした感傷を振り捨てるように、小夜子の足元に置いてある小さな壺を取り上げた。

「小夜子に、ちゃんと薬の説明をしてやらなきゃ駄目じゃないか」

鬼源が川田の差し出す煙草をとって口にしながらいった。

「こ、これはね、小夜子さん」

静子夫人は、唇をわなわな慄わせる。小夜子にどのように説明していいかわからず、遂に静子夫人は、万策尽きたのかその場へくずれるように腰を落してしまった。

「出来ないわ、出来ないわ。ああ、もうこれ以上は許して」

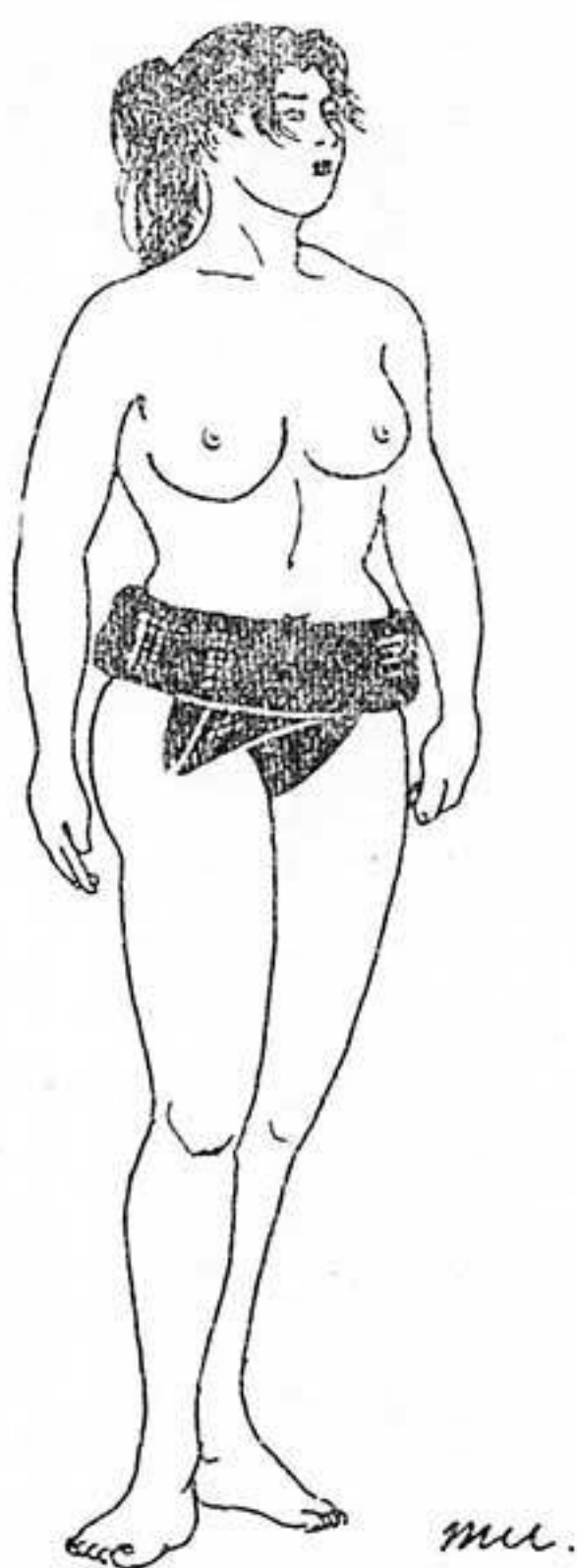
静子夫人は、こらえにこらえていたものがどっと胸をついて溢れ出、床へ顔を埋めて泣きじゃくる。

「あ、あんまりだわ。こんな恐ろしいものを小夜子さんに——私、絶対に出来ないわ」

静子夫人は、逆上したように泣きわめき、狂おしげに黒髪を左右に振るのだった。

娘相撲物語

若き領主の試み



海 野

美 津 男

細川盛隆は、三万石の小大名であった。彼の領地は、九州東海岸の、三方、山に囲まれたところにあった。

彼は、無類の相撲好きであった。

それも、自分から取るのが好きであつた。

相撲の盛んな土地柄のせいもあったが、それはひとつの気晴らしでもあった。

父の病死で二十一才の折、家を継いだのだ

つたが、その翌年、徳川が天下を取り、もと

もと一徹な強い性格で、武術にもすぐれていた

た彼には、泰平の世はなかなか馴染めなかつ

た。徳川が天下を取り、幕府を開いたその頃

から、彼の家臣を相手の相撲と武術の日課が

始まり、それは、二十六才になる今日まで続

けられていた。

次は、その盛隆があるきっかけから、側女と腰元たちに相撲を取らせるに至った物語りである。

(1)

盛隆には、その前年より二人の側女が侍るようになっていた。

五つちがいの正室、いとの間に、二人の女子があつたが、結婚して七年も経って、男子が生まれなためであつた。

側女の名は、一人は千代と言ひ、もう一人は美保と言って、家臣たちがすすめた九人の女のうちから、彼が自ら選んだ者たちで、ともに十八才であつた。

どちらも盛隆の好みで、体格の良い、健康美にあふれた女であつた。

千代は、五尺二寸で十三貫七百あり、背丈の割に体重があつた。

美保は、千代よりも背が五分高く、体重は十三貫であつたが、海辺の村に住む郷士の娘であつたためか、色が黒く、引きしまった身体をしていた。

千代は、城下侍の娘で、色が白くつやのある肌をしており、二人は対照的であつた。

共通していたのは、シンの強い、勝ち気な性格であった。

その面での何らかの欠陥を持っていたらしい上に、消極的な性格であつたといふのは、女として彼の意に満たぬ型に入るべき女性であることを知った盛隆は、二人の女に熱中し始めた。もちろん、昼間の彼に変化はなかったが、それまでむしろ苦痛でさえあつた夜を、彼は心待ちするようになっていた。

彼は二人を、順に寝室に入れ、そして三日目は休日とした。順に呼ぶということは公平と思へたし、どちらにも彼の心身を捉える魅力があつた。正室とは自然に冷たい風が意識されるようになっていたが、いとは大人しく妻の座に坐っていた。

それは、二人の女を得てから半年ほど経つた春の夜であつた。

その夜の千代は、なぜか極めて積極的であつた。

彼女は侍女達が下るやいなや、いきなり盛隆にしがみついていた。そんなことは始めてであつた。彼は一瞬驚いたが、女のはじめのそんな出かたが嬉しくもあり、いとしくも

感じて彼も自然と千代のふるまいに応じていた。

しばらくすると、我に還つたが、千代はフト力を抜き、手を離れた。そして、「すみませぬ」と小さな声で言う、自分の帯をほどき、彼のものもほどきにかかった。かねてはそこから始まるのであつた。

しかし、その手を盛隆の寝巻きの袖にかけたとき、千代は再び盛隆に武者ぶりついていた。

盛隆が、『相撲』を思いだしたのは、その千代の手が彼の下帯を無意識につかんだときであつた。彼は、相撲で寄り倒されたときのように錯覚したのだ。しかし、その相手の立場に立ち、ミツを取るように帯を握りしめているのが女であることを悟つた次の瞬間、彼にはその女に男と同様に帯を締めてやりたいという衝動がつきあげていた。

なぜ、そんな気持ちになつたのか、盛隆はのちになつてもわからなかつた。

ただ、その時の千代の、盛隆にとっては始めてのふるまいが相撲と帯を思い起させていたことだけは確かであつた。

しかしその時は、自分のやろうとしていることを落ちついて考える余裕はなかつた。

彼は、千代をはねのけ、押し倒すと、自分の下帯を茫然と目を見開いている千代に、ぐいぐいと締めつけていった。締め終つた時、千代ははじめて自分がされている事の次第に気づき、恥じらいに身をくねらせ、うつぶせになつて顔を蒲団に埋めた。

盛隆の胸に、「悪いことをした」という後悔の念が湧いた。だが、むちりとしたその臀にきゅっと締めこまれた帯が目にはいった途端、彼は何かにつかれたもののように引き起し、その喰いこんだ帯をつかみ、ぐいと引いていた。何かみくちやにしてしまいたい気持ちであつた。千代は「イタイッ!」と小さく叫んだ。だが、その表情には先刻の恥じらいはなかつた。自然と足を突っ張り、弓なりになつて盛隆と取り組む形となつていた。

盛隆には千代のその姿が忘れられなかつた。次の日、日課の相撲を取るため、まわしを小姓から締めてもらつてゐると、それが鮮やかに浮かんできて仕方がなかつた。

近習の侍たちと相撲を取つてゐる間は、どうやら無念無想でいられたが、日課が終り、風呂場で汗を流していると、再びそれは鮮やかに、そしてなまなましく思いだされてくるのだつた。彼は頭から水を何杯もかぶつた。

その夜は、美保の番であった。

盛隆は、何度もやめておこうと心に決めたが、抑えることはできなかった。

美保はしばらく逆らったが、やがてじっと目をつむると、為すがままになった。

盛隆は、抵抗の全くなかった美保に、フト意外さを覚えていたが、そのまま引きしまった美保のからだに、禪をきりきりと締めていった。

ほの暗い灯に、もともとこんがりと灼けた美保の肌が、赤銅色にさえ見え、白いさらしがくつきりと映えていた。

彼は、その姿に千代とはちがった魅力を感じた。じっと眺め入っていた彼を美保の声が驚かせた。

「殿は、私のこのような姿を、お好きなのですか？」

女にこのような姿をさせてという後悔が、にわかに起ってきた。

しかし、美保の声には、盛隆を責めるような響きがなかったことにホッとしていた。だが一方で彼女のその落ち着きに戸まどいを感じていた。返事をためらっているうち、美保は、それを救うように言った。

「私どもの村では、海女たちが、ちょうど、このような姿を致しまして海に入るのですが、殿はごらんになったことはないのでございますか？」

美保の目は見開かれていた。盛隆は正直に「ない」と答えた。昨日までの彼は、そんな姿を見たこともなければ考えたこともなかった。また、その場をとりつくろうことができなかった彼の性格が、そう答えさせたのであったが、彼は実のところホッとしていた。

この世で、自分だけが変ったことをさせ、変った姿を見ているのではないことを知ったからだだった。

美保は続けた。

「海女たちは、男たちと同じように赤い禪をいたします。ごぞんじかと思いますが、鮫の類がその色を嫌うからでございます。そして海にもぐり、鮑などを採るのでございます。

私たちも子供の頃、よく海女の真似をして水にもぐって遊ぶものでございました」

「禪を締めてか？」

「子供でございますから……何も……」

美保は顔を赤らめた。盛隆には、美保が落ちついていることができた理由がわかってきた。彼はそのことで、すっかり安心もしていた。

た。

「私、殿が、それをご存知のこととばかり思っております。私の村にはおいでになったことはないと思いますが、よその村にも海女はおりますから……。ですから私は、殿が興にお乗りになって私にもその姿をおさせになったものとはばかり思っております」

彼は、その言葉には答えず、海女とやらの赤い禪姿を想像していた。

美保は、その彼をじっと見つめていたが、突然、「殿！」と叫ぶと、いきなりしがみついていた。「殿！私は……殿をお慕い申し上げます。どうか……私をお離し下さいませな！」と、喘ぐように言った。

盛隆は半ば驚き、そして感動していた。前の晩、千代が見せた積極的な態度と美保のその言葉は、どちらもはじめてのものであった。

なぜ急に二人とも……と、彼は考えかけたが、その脳裡には土俵に争う二人の姿が浮び上っていた。

(2)

盛隆が、その二人に相撲を取らせようと心に決めたのは、二人が、ともにはげしく自分

を慕い、おたがいの中に嫉妬の火花が散っていることを知った時であった。

それは、二人の口から直かにわかったことであつた。なぜ急に二人とも……という疑問も解けていた。

美保から海女の話が聞かされてから、一日おいて千代の番であつた。

その夜、盛隆は、もう一本のさらしを用意していた。千代は何の抵抗もなく、彼の奇妙な好みに応えた。そして、あえぐように言った。

「殿！……私は殿が何を為されても構いません。私は……前々から殿を……。でも私は側女でございます。ですから私は氣持を押えて参りましたが、私は耐えることが……できぬようになりました。……殿を、殿を……自分だけのものに致したいのでございます」

盛隆は、そうした女の側からの積極的な言葉は、二日前の美保の場合がはじめてであつたが、千代の言葉はもっと強い響きをもつものであつた。

盛隆は、女に対するそれまでの観念を変えねばならぬと思つた。彼は、他の封建領主と同じように、男は女を何人持とうと少しも構

わぬことであり、女もまた男の専横を満足させることに甘んじ、

「自分だけのものにしたい」などとは考えてはならないものだと思つていた。

彼はまた、女の嫉妬心のはげしさをも知つたのであつた。それはその次の夜の、美保の言葉からであつた。

美保は、ゆもじをしていなかった。そのかわりその肌にはさらしが、きりりと締められていた。

美保は自分からそれを締めてきたのであつた。

驚く彼に向つて美保は、「殿のお好きなことならば、どんなことも……」と言つた。

盛隆がのしかかるように押し倒した時、美保は彼の禪を両手で握りしめていた。それはまるで四つに組んだ時のようであつた。彼もまた美保の禪をぐいと握りしめていた。

美保が、禪を握つた手の力を急に抜き、口を開いた。

「千代殿にも……あの方にも、このように為さるのですか？」



盛隆は、黙って頷いた。

美保は、強い力で彼の禪を握ると、その肩に頬を押しつけてきた。

そして、「千代殿に、負けは……負けは致しませぬ」と、きびしい調子で言つたのであつた。

その夜、盛隆は二人が相撲で争っている姿を想像していた。

彼は、女の相撲などあるべきことではない

と思い、その想像を打ち消そうとした。しかし、その想像の姿は鮮やかであった。

二人は禪をきりりと締め、一歩もひかず斗うのであった。打ち消そうとすればするほどそれはますます鮮烈になっていた。

何かを忘れようとするとき、いつでもそうするように、彼は翌くる日、クタクタになるまで相撲を取った。しかし、それを忘れることはできなかった。

彼はその夜、じっと考えこんだ。「あのよきな姿をさせたのがいけなかった」とも後悔した。

だが、やめようと思えるのと逆に、その想像はだんだんと具体的になっていた。

戦国の世に、単純に育てられていた彼には自分の気持を分析することはできなかった。また、絶対の権力を持っているということが彼の決意を早めさせた。そして、「こう」と思ったら実行せねばすまぬ性格が、その決意を決定的なものにさせていた。

(3)

晩春のある晴れ上った日。

それは実現した。

海に面した、たったひとつしかない盛隆の

別邸がその場所となった。

土俵は別邸の庭にもあった。

幔幕で囲まれた土俵には、新しい砂が、常よりも厚く盛られていた。女たちに怪我をさせまいという心くばりであった。

別邸の中には、その時間だけ彼の傍を常に離れたことのない小姓一人を除き、男は一人も入れないようにされた。警護の侍たちはすべて内外に置かれた。

それは、申の刻、午後四時から行なわれることになっていた。

それを心に決めた時、盛隆は、ほんとうは千代と美保の相撲を見るだけで良かったのだ。だが、それでは余りにもねらいがはっきりし過ぎると思い、腰元たちにもそれをさせることにしていた。

彼が考えた「大義名分」は、「女たちも男と同じようにからだを鍛え、一朝有事に備えるため」ということであった。そして、「薙刀や剣術だけでは、力をつけることはできない」と付け加えることにした。

また、「一挙にすべての女たちにさせることはできぬから、先ず、奥の者たちによって試みしてみるのだ」という理くつも用意してい

た。

余り策を弄することのできぬ盛隆にとってそれを考えたのが精一杯であった。

彼は先ず、二人に承知させることから事を進めていった。

美保から先に話した。

それは、美保が、禪を締めることに抵抗を示さなかったこと、自らすすんでそれを身につけてきたことから、千代よりも承知しやすいように思われたからであった。

いったん決めたことを押し通さずにはいられない盛隆のことであったから、どちらが先でも結果は同じだったかもしれない。

美保は、まっすぐに話を切りだした彼の言葉にハッと顔を上げたが、冗談とでも思ったのか、その目は笑っていた。

だが、それが本気であることを知って、美保の頬は、みるみる赤くなっていた。

「いやか？」と、盛隆は言った。

美保は面を伏せ、黙ってしまった。盛隆は次の言葉がうまく出てこなかった。

沈黙が続いた。

盛隆が口を開いた。

「まずお前に決心してもらいたいのだ。千代には、まだ話しておらぬ」



良くわかりました。私の腰元、椿にも承知させましょう」

と言った。そして「ただ、殿以外の男の前では絶対いやでございます」とつけ加えた。

千代に対しては、「美保も承知したぞ」と言う言葉だけで十分であった。

千代は、きつと顔を上げ、

「私は、殿の申されることは何でも致しますと申上げた筈でございます」

と言って唇を結んだ。

その表情には、盛隆が自分をさし置いて美保に先に話をしたことへの口惜しさが、はっきりあらわれていた。

彼は、あらためて女の嫉妬のはげしさを知らされていた。

彼はその次に、藩政全般の中心になっていた家老の筆頭者、井上隼人を説得しなければならなかった。

隼人は、何故に盛隆がそうしたことを考えるようになったか、大いにいぶかったが、武術に優れ、政事にも一応の力を備え、短気ではあるがカゲのない、女に関しても側女以外の腰元には手をつけたことのない盛隆を信じ

ていたから、その動機は彼の言う通りであろうと、結局承知してくれた。

隼人には、泰平に慣れず、焦燥さえ感じているらしい盛隆を、できるだけ好きにさせてやりたいという気持もあった。

当然のことながら、隼人は条件をつけた。それは、誤解を招かぬため、奥の者以外の者に知られぬよう注意が必要だと言うことであった。盛隆もそう考えていたので、もちろん異論はなかった。

あとは、奥のことを取りしきっている女、五十五才になるふみに納得してもらっただけであった。直接彼が話をする筋でもなかったから、説得役は隼人に頼んだ。

ふみは反対し、なかなか承知しなかったと隼人はあとで教えてくれた。

その反対の理由は、「女相撲などは下じもの女がやること」と言うものであった。

盛隆は、はじめて女相撲の存在を知った。それは、彼の領地の東端にある漁師の村で、夏祭りの際行なわれると、隼人は言った。

ふみの反対理由は、盛隆にとっては逆に、「この世にもそれはあったのだ」という力づけになっていた。

彼は、女の禪と言ひ女の相撲と言ひ、自分

美保と千代の間を意識して言ったのではなく、何か言わぬとどうにもならぬと思って言った言葉であったが、それが美保の心を動かしていた。

しばらくは押し黙っていたが、やがて、しっかりした声で、しかし面は伏せたまま、「わかりました。女の私どもにも、いざという時には戦える力が必要と言われるお言葉が

だけの想像の産物と思っていたわけであったが、どちらも実在することを知って、天下晴れた気持ちになっていた。

時刻が来ると、ふみが彼をよびに来た。隼人に説得された上、彼女は行司役まで仰せつかっていたのであった。

小姓は部屋に待たせ、盛隆は一人、幔幕の中へはいつていった。

そこには、身仕度を終えた腰元四人と、千代と美保が平伏していた。

彼は思わず、「ホウ！」とうなった。みごとな図であった。

女たちは、土俵の両側に敷かれた、花見の際に使う緋毛氈の上に、三人ずつ東と西にわかれて坐り、彼の坐る床几の方へ向けて両手をつき、深く頭を下げていた。

女たちは、彼の命じた通り、まわし以外の何ものも、その肌につけていなかった。

まぶしいばかりのその図に、彼は思わず気を吞まれていた。そんな己れをばげますように、彼は、「もうよい。頭を上げい！」と言った。

女たちは頭を上げて立ち上り、東西が互いに向き合って一礼した。

まっすぐに立ったその姿は、一層まぶしいものであった。

申の刻とは言え、新緑の季節の太陽はまだ高かった。それは、女たちの姿をあまねく映し出していた。

ほの暗い行灯の灯のもとでしかそれを見たことのない盛隆にとって、それは、全くみごとな絵図というほかに言いようのないものであった。

色の黒いものにも白い者にも、黒繻子のまわしが良く似合っていた。それも、盛隆が命じて、女たち自身の手で仕立てさせたものであった。

土俵の上に、最初の女たちが呼び上げられていた。

腰元は、側女のものも合せてわずか六人であった。少ないようであったが、質素に慣れていた盛隆は、それが当然と思っていた。参勤交代が始まって不便を感じ、倍にふやしたのは、まだのちのことであった。

盛隆自身に付けられていた腰元は、十八才になる文緒と、十七才のはるの二人だった。

千代には十七才のつやが、美保には十六才の椿がいた。

正室のいとは、二人の腰元が付けられていたが、その二人は相撲に加えなかった。二人は正室のものであったし、その好みのためか、二人ともなよした女であったからであった。また、その二人を通して正室に知れることは別に構わぬと思ったが、その父や親族にどんなことから洩れるかもしれぬと思つたためもあった。

東には、千代とその腰元つや、そして盛隆の腰元の文緒が坐っていた。西は、美保とその腰元の椿、もう一人は盛隆の腰元のはるであった。

呼び上げられたのは、つやと**はる**だった。二人はまず盛隆に一礼し、そしてお互いに一礼し、土俵の中ほどへ進んだ。

千代と美保以外の腰元たちも、すべて、彼の好みの健康そのものの女であり、体格が良かった。背丈も重さも大差なく、彼には、どの女が強いかわ測はつかなかった。

つやとは**はる**の場合も、わずかに**つや**の方が背が高く、肉付きが良いというだけで、何れ劣らぬからだをしていた。

彼は、身を乗り出して土俵上を見つめた。だが、その取組みはぎこちないものであつた。

た。女たちにとって、それは生れてはじめてのことであり、しかも、「殿の御前」であったから当然であった。

立ち上った二人は、互いに手を差し伸べ合い四つになっていた。その姿はまるで抱き合っているだけのように見えた。しかも、二人とも目を閉じていた。盛隆は、それは恥じらいのためであろうと思った。

抱き合うように組んだ二人は、じっと動かなかった。一瞬に勝負が決まることの多い男たちの相撲に比べて、それはずいぶん長いように思えた。

しかし、土俵上で女が組み合っているというだけで、その日の盛隆には十分であった。

だが、勝負は決まっていた。

つやが力を入れたな、と思ったとき、はるは土俵際に押しつめられていた。はるはあわてて力を入れたようだったが、その足はすでに土俵を割っていた。どちらもまわしを取っていなかった。

ふみの軍配がつやに上り、二人は目を伏せたまま盛隆に一礼して土俵を下りた。

次は、文緒と椿の番であった。

その二人も、恥ずかしさが先に立っているのが良くわかった。色白の椿の頬が、紅に染

まっていた。

二人は頭を相手の肩に当て、前の二人と同じように目を閉じて押し合っていた。

盛隆は、勝負よりも、その姿に見とれていた。

長い髪を後ろに高く紐で結び、先をパラッと垂らしているのが、彼には、凛々しいものに見えた。

彼は、目を美保と千代に向けた。

わずかに膝を開いて正坐するその姿は、夜見るよりも美しかった。美保は、じっと土俵上を見つめ、千代は伏目がちであった。

土俵の二人は、依然として動かなかった。

二人は、おたがいに両腕を、つかみ合っていると、言うよりは取り合って、じっとしていた。

頬だけでなく、からだ全体が紅潮しているように見えた。

ハッと思ったとき、椿が、つかんでいた文緒の腕を思い切り引いていた。引き落しであった。

つやとはるの場合も、長いことじっとしていて、瞬間に勝負が決まっていたが、それはじっとしていればいるほど恥ずかしさが昂じそれに先に耐えられなくなった方が、思い切り勝負をつけたためであったことを、盛隆は

のちに美保から、椿の言葉として聞いた。

いよいよ千代と美保の番であった。

二人の取組みは、先の女たちのものとは、やはりちがっていた。

土俵に上り、盛隆に一礼するまではどちらも目を伏せていたが、お互いに向き合ったとき、その目はきらっと光っていた。

最初は、つやとはるの場合と同じように、抱き合うようにして組んだ。しかし、二人の場合には相手を倒さねばすまぬという強い意識があった。

それは、美保が右手を伸ばし、千代の左上手をつかんだ時、一度に表面にあらわれていた。

千代は、すかさず美保の上手を取った。

二人の左手が、ほとんど同時に差し込まれて下手を取っていた。

がっぷり左四つの体制であった。

二人はしばらくの間、そのまま動かなかった。それは、相手の出方を見るためと言うより、生れて始めての相撲で、どう出たらいいのかかわからないためであろうと、盛隆は思った。

動かなかったが、力はいっていた。

負けるものかという意志が、全身に漲っていた。

その力と斗志は、まわしを握った両手に表われていた。

どちらも深くつかんでいた相手のまわしをぐいぐいと引いていた。力が入る度に、まわしは少しずつ、ずれ上っていった。

美保は、盛隆に背を向ける恰好になっていた。強く引かれたまわしがきりきりと食いこんでいるのがわかる。

千代は、美保の左肩にアゴをしっかりと当て、歯を食いしばっていた。

盛隆は、唾を呑んだ。

美保が先に攻勢に出ていた。

千代のからだをぐいと引きつけると、吊り気味に寄って出ていた。

その背中に、筋肉がぐりぐりと動き、汗の玉がきらっと光って流れ落ちた。

千代は、けんめいに寄り返そうとしたが、おそかった。そのからだは浮き、爪先立ちとなっていた。

土俵際で、美保は渾身の力をふるって吊り出していた。

負けた千代は、ぎゅっと唇をかんだ。その目には涙があった。

思わず握りしめていた盛隆の掌は、汗でじっとりとしていた。

(4)

盛隆は、恥じらいながらの腰元たちの相撲では感じなかったものを、千代と美保の場合には感じていた。



mu.

それは不思議な斗志であった。

男であり権力者である彼は、かつて、女に圧倒されるというような感情を持ったことはなかったが、その時、彼はそうした感情を覚えていた。

と同時に、彼は自らも土俵に飛び上って、この不思議な斗志をみせる女どもを、揉みくちゃにし、押し倒したいような気持も覚えていた。

彼は、しばらく息を呑んでいた。

行司役のふみが、次の指示を仰ぐようにして、自分を見ていることに気づいた盛隆は、あわてて勝ち抜き戦を命じた。

腰元たちの相撲は、やはり羞恥心が先に立つのか、きわめて優雅なものだった。

土俵には、先刻と同じくつやとはるが呼び上げられたが、二人は四つに組んだものの、じっと動かなかった。

盛隆は、やむを得ぬことだと思った。

控えに目を移すと、そこにも恥じらいに頬を赤くした椿と文緒の姿があった。

二人とも膝をきっちり合せ、緋毛氈に正坐し、目を伏せていた。そして、その手を膝に

当て、両腕を真直ぐに伸ばして、胸もとを見せまいとしていた。

それは、はじめて男の前に素肌をさらした女の精一杯の姿勢であった。

だが、太腿に食いこむまわしをかくすことはできなかった。

女の自然に具わる恥じらいの風情と、男のものである相撲まわしとの対照が、盛隆に、再び熱っぽい興味を与えていた。

気づいた時、はるが寄り出されていた。

力に耐えた者がと言うより、羞恥に耐えられなくなった者が勝っていた。

控えにいる時よりも一層頬を赤らめていた椿は、いきなり押し出た。つやの白く柔らかい、豊かな乳房が押し上げられていた。

椿の勝ちであった。

文緒も、頬を真赤にして土俵に上った。

千代と美保もそうであったが、女たちは腰を高くして仕切った。しかし、盛隆はそのおかしい恰好にそれまで気付かなかった。彼はやはり正常ではなかったのだった。

彼は床几に坐ったまま、仕切りの姿勢を教えた。

足を大きく開いて腰を落すことに抵抗を感じたらしかったが、二人は言われるままにした。

立ち上るなり、文緒は椿を寄り立てた。椿は簡単に寄り出されていた。

文緒の美保との取組みはあつかなかった。

それは、身分のちがいと言うものを意識した遠慮のためとしか思えないような負け方で文緒は簡単に寄り切られていた。

それが遠慮のためであったことは、翌くる日、盛隆の命で、遠慮なく斗うようになった時、一層はつきりしたのであったが……。

ともあれ土俵上は、再び千代と美保の対戦となった。

相手を倒さねばすまぬという感情に、慣れが加わったのか、二人の相撲は一回目の時よりも、ずっととはげしくなっていた。

二人は、立ち上りから全力を挙げて押し合った。千代が一步進めば、美保がまた押し返した。

しかし、体重に勝る千代が、じりじりと美保に押し勝っていった。二人の肌に、みるみる汗が吹き出していた。

何を思ったのか、美保はいきなり相手に押し当てていた両手を引き離すと、タタッと退いていた。

盛隆は驚いた。

そのままでは押し出されると思って、自らからだを離れたのであろうが、その足は土俵にかかっていた。千代が前へ出てひと突きすれば、恐らく美保は土俵の外へ飛び出していただろう。

しかし、千代は何もしなかった。相手の意外な行動に戸迷ったらしかった。

そこへ、美保が飛びこむようにぶつかっていた。

相撲を知り尽している盛隆にとって、そのできごととは全く突飛なものであったが、相撲が生れて始めてのことである二人にとっては精一杯のものであったかもしれない。

しかし、それからあとは、まともな、始めてにしては、目を見張るような相撲となっていた。

飛びこんだ美保は、すばやく左を差し、右手は上手も取り、一回目と同じように吊り気味に寄ろうとした。

しかし千代は同じ手を許さなかった。下手は取れていたが、上手の取れていなか

った千代は、美保の左腕を外側から抱えると大きく右へ振った。

美保は良くこらえた。

今度は美保が上手投げを打った。からだが大きく揺らいだが千代は良く残し、立ち直った時、上手をつかんでいた。

美保は続けて二度、下手投げを試みた。

しかし千代は足を踏んばって耐え、逆に力いっぱい上手投げをかけた。

砂が飛び、美保のからだは土俵に仰向けになっ

盛隆はその日の相撲を、それで終らせることにした。

千代と美保の取組みを、もっと見ていたかったが、はじめてのことで心もからだも疲れたのであろう。二人は大きく肩で息をしていた。

彼は、「少しずつ慣れさせてゆけば良い」と思い、三日間と命じた。残りの二日間に期待をかけた。

土俵から下り、背中に着いた砂を椿に払い落させている美保と、ゆるみかけたまわしをつやに締め直させている千代の姿には、たっ

た今、はげしく押し合い投げ合った者とは思えぬものがあつた。

その姿は、まさに女であつた。

盛隆は何か新しい発見でもしたように、それをじっと見つめた。

(5)

その日は休みの日であつた。

盛隆は一人、じっと目を閉じていた。

しかし、閉じた瞼には、女たちのその姿が鮮やかに浮んでいた。

はじめて白昼、正視した土俵上の女。

しかもそれは、りりしく相撲まわしを締めこんでいた。

彼は女が、男のものとされている襦を締めることによって、かつて感じたことのない、ふるいつきたくなるような不思議な魅力を持つことを知った。

そしてそれは、相搏ち、相斗つた。

美保と千代との汗みどろの四つ相撲を思い出した時、汗がじっとりと湧き上る想いであつた。

翌くる日。

盛隆は、その時刻が待ち切れなかった。

女たちのその姿を見た時、彼の胸は前日もまして昂ぶっていた。

その日は勝ち抜きからはじめられていたがその取組みが二番進んで、つやが、はると椿をどちらも押し出しで敗るまで、彼は相撲よりもその姿に見惚れていた。

土俵では、つやと文緒が四つに取組んでいた。それは依然として抱き合っていると云つた方が良い姿であつた。

いつまでもそうしたまま、勝負をつけようとしないうちに気付いた時、彼は相撲好きのいつもの盛隆に戻っていた。

彼は思わず、「何をしておる！ しっかり取組まんか！」と怒鳴っていた。

それは、自分でもハツとするほど早い気持の変化であつた。

『無理なことを言った』と思ったが彼は一度口にしたことを、引っこめる性質ではなかった。

怒鳴られた女たちの変化の早さも、彼に言葉をつがせる余裕を与えなかった。

二人はビクッと、反射的にからだを振るわせ、次の瞬間、同時に力を入れていた。そしてまわしをしっかりとつかみ合い、ぐいぐい

と寄り合った。

彼は、武術や相撲の稽古以外の時、男たちを怒鳴ることも余りなかった。むろん、女たちを怒鳴りつけたのはそれがはじめてであった。

思いもかけぬその叱咤は、女たちの気持を一変させたようであった。控えの女たちの表情も変っていた。

土俵上では、力一杯の寄り相撲が続いていたが、文緒が寄倒しで勝っていた。

つい先刻までは、土俵に押しつめられた者は、簡単に足を踏み出していた。だが、つやは弓なりになってこらえたのだった。

文緒が、つやの手をつかんで引き起していた。

「良くやった！」

盛隆は二人をほめた。

彼の叱咤の聲が、女たちに羞恥心を忘れさせ、その女たちの無念無想の相撲が、彼を余計、引きつけた。

美保と相対した文緒に、盛隆は命じた。

「良いか文緒！ 相撲に身分は無い。相手が誰であろうと構わぬ。遠慮なくやれ。わかったな！」

文緒は美保に思い切り、ぶち当たっていた。

簡単にまわしを許し合うところは、やはり経験の全くない者たちのことで、やむを得なかったが、四つに組んでからの相撲はなかなかのものであった。

どちらも、右に左に良く動いた。それは、投げを打とうとして相手に隙を作らせる自然な動きであろうと盛隆は思った。

彼の目は、女を見る目でなく、相撲を見る目になっていた。

だが、どちらも隙を作らなかった。

二人は腰を引き、土俵の中ほどでじっと動かなくなった。しかしそれは恥じらいのためではなかった。それはまわしを引き合う腕や

肩の筋肉がピリピリと動くことで良くわかった。大きく息をしたと思う瞬間、文緒が一気に寄って出ていた。

まわしを深くつかんでいた方が有利であった。上手を十分に取れていなかった美保は、こらえ切れずに後退していた。

土俵際の攻防は立派に「相撲」と言えるものになっていた。

美保は、齒を食いしばってこらえ、文緒を寄り返そうとした。文緒はしかし、まわしをぐっと引いて、それを許さなかった。

ぐいと押しつけ合わし、汗でベっとり濡れた胸もとが盛隆の目に入ったが、二人の斗志が、そこに女を意識させなかった。

文緒が、「エイッ！」と声を発した時、美保のからだグラツと揺れ、土俵の外に落ちていた。

盛隆は、思わず立ち上って叫んでいた。

「できる！ よし、お前たちにもできる」

千代と美保の争いが見たいばかりに思いつき、それに何かと理くつをつけていたのだったが、二人の相撲ぶりは、その時、彼に本気でそう思わせていた。

彼は、女たちに真剣に相撲を教えてみようと思った。

「良いか！ お前たち女にも相撲は取れるのだ。技もいずれ教えて仕わす。だが、何より相手を倒さねばすまぬと言う心構えが大切なのだ。文緒は良くやった。他の者も遠慮なく取組んでみよ」

盛隆は、そう言って床几に坐り直すのだった。

——女が、女が相撲を——思いがけない感激が湧き上ってきて、彼の五体をぶるぶると慄わせた。

＝ 評 ＝

＝ 論

「奇譚クラブ」を斬る

△ 読者の愚見▽

星 野 直

書くつもりは全くなかったのに、とうとう書いてしまった。お断りしておきたいのは、私は決して奇クの愛読者ではないということです。したがって私の意見も、時々本屋で覗いたりする一読者、一応こういうことに關心はあっても、現在の奇クには同調しない外部からの客観的な意見として聞いていただきたいのです。

貴誌を本屋の店頭や古本屋で立読みするにつけ、私が率直に感じることは、現在の貴誌は昔に比べて、かなり編集に工夫を加えていることが、はっきりとわかるのですが、それはあくまでも編集などの面にとどまり、根本

的には、いつまでたっても全く旧来どおりで進歩、特に旧来のカラを打破る努力を行っておらず、又、行おうという気持ちに欠けており、それは結局において、貴誌の読者を真に百パーセント満足させるものでなく、貴誌の目的にもそえないのではないかと思うのです。

もともと、この種の雑誌は、ゲテモノ的読物と誌上ショーから発達したものであり、読者に対する刺戟と興奮だけを目的とした物であったことは否定しえない事実でしょう。しかし、それは元来、このような種類の雑誌に接することができなかった日本の読者の要求

と丁度、合致したというだけではなかったのでしょうか。

貴誌の読者通信を見ても、貴誌の読者はイカレタ連中や下劣な人間ではなく、いたって善良で品行方正な人たちではないのですか。貴誌も当然、その人々を相手としているならなぜ、これまでの姿勢を根本から改めて、普通と著しく違った刺戟を目的としただけの単純なショーから、奇ク的な美学を研究する文献、奇ク的な美学による高尚な読物という形に脱皮しようとしないのでですか。

奇クの要素は名作文学と言われているものや、児童向の本の中にも実際に多くあり、こ

のことについては後章で例を示すつもりですが、なぜこれらの中にある高尚な要素を取り出し、純粋な姿に精錬した新しい世界を開拓しようとするのでしょうか。

ただ単に、SだのMだののギャグを追うよりも、もっと高度な物語や研究、高く深い精神的な味わいや、高尚なロマンチズムを含んだ静寂好み、潔癖性、微妙な精神的味わいに合致するものこそ、貴誌の真の役割ではないのでしょうか。

こう考えると、現在の貴誌は作る方もヌルマ湯につかっている、完全な本を完全な満足へと追求する気持ちに欠けているのではないかと思われても仕方ありません。

例を示せば、貴誌で人気を得ているらしい『花と蛇』にしても、従来通りの枠の中における、一つの最高点を示す作品と言えるでしょうが、それでさえも、もっと殻を破った要素を、ほんのちょっぴり取り入れ、少し工夫をすれば、ずっとよくなるはずですよ。たとえば、悪人側が、ただのグレン隊やズベ公というだけでは、余りにも旧来の殻に閉じ込みすぎて、設定として、つまらなくなります。こういうことを専門にやっている秘密結社や犯罪組織を考えて、単なるグレン隊より不気味

な、しかし、クールでスマートな存在とすることは容易なことですし、場所も、もっと人里離れた山奥や、沖に浮ぶ小島にある昔の武家屋敷や古い洋館とでもした方が感じがでるのではないのでしょうか。

ショーを仕込まれるという設定にしても、毎週日曜日にテレビで放送される『世界のサーカス』というドキメンタリーを見て考えたのですが、あのサーカスだの魔術ショーだの、スケート・ショー、更にバレエなどの中にある奇巧的美を取り入れたらよいと思います。たしか以前に、貴誌ではサーカスの女芸人のことを特集的にあつかったことがあったはずですが、余りにも見る目が狭くサーカスというものの全体的な雰囲気といったものを観察しておらず、芸人にしても、その服装など完全な分析をしていなく、単なる紹介にすぎなかったようです。

『花と蛇』でも、五人の女たちが、奇巧的なサーカスだの魔術だの踊りだのを仕込まれるとした方がよくなかったかと思えます。そうすると、五人の服装も裸だけというのは、余りにも陳腐に走りすぎはしないか。曲芸服だの、バレエ服だの、或は又、囚人服でも着せた方がよかったのではないか。貴誌の読者

は、ただ単に裸を好むほど下劣ではないはずで、古代ギリシャの美術の世界で、すでに発見していたように、服を着ることによって、かえって逆説的に裸の感じを出すという手法を感じる感覚性があるはずです。そうなれば性交というようなギャグも慎んだ方がいいだろうし、悪人側のやる遊びやゲームにしても、もう一工夫して、ドキメンタリー映画であつたように、夜の森に五人を放して狩りをしたり、洋の東西を問わず、中世の拷問道具や電気椅子のヒナ型ぐらいだしたらいいし、名作『O嬢の物語』のように、腰にリングをはめるだの、尻に焼印を押すなど、そういうものにした方がよかったのではないのでしょうか。

第一、この物語りは、話のより上り、クライマックスといったものに欠けている。誌上では初めの方は読んでいないので知りませんが、この五人の捕獲の場面が、余りにあっさりして、より上りがないのではありませんか。奇巧的物語では、他のどの場面より捕獲部分に工夫をこらし、その前後をたくみにもりあげると非常におもしろくなる。そのような重要なことに、なぜ気がつかないのでしょうか。それにもってきて、この話はもともと

骨組となるものがない。このジャンルにあるものとして、デンマークのカール・ドライエルが一九三〇年につくった世界映画史上、最高の名作として世界中に認められている「裁かれるジャンヌ」というジャンヌ・ダークの姿を、人間が人間に対して加える残酷な迫害のありさまを通して、人間の心の内を鋭くえぐっている。貴誌には、こういった骨組が話にならないため、こまぎれに読めばともかく、通して読むと話として弱い。これも何とかすべきではないでしょうか。

こう考えると、いかにも貴誌は、そのアイディアの翼を旧来通りの枠の中にとどめ、新しい澁刺とした新構想に欠けていると思えなくなります。もっと外の世界から、多くの資料をとり入れて、インスピレーションを捜すべきではないでしょうか。それと同時に、これまでのゲテモノ、低俗物、汚らしいものといったイメージを一掃して、真に読者の要求に応えてはいかがですか。例としました「花と蛇」にしても、書く姿勢さえ変えればあとはどこを変えなくても、どんな汚らわしいと思う場面も、すうーと清潔になったはずで、今のままですと不潔な感じがしてならない。とりもなおさず、これは貴誌がS・Mに

全くの刺戟や感情の高ぶりばかり追求しているからで、真に美や芸術を、高い文学や研究、娯楽を追求していかないからだと言えないでしょうか。巻頭に断り書きを出し、それに従って編集を変える勇氣があるのに、どうしてそれができないのでしょうか。

次に、私のアイデアをいくつか発表させていただきます。

先ず私が感じることは、貴誌（貴誌ばかりでないのですが）は、物語のキャラクターが余りにも工夫がなくて弱い。登場人物など、女の方は、そのへんにいるお姐ちゃんみたいだし、男の方も、これ又、胸の悪くなるような気品、魅力といったものに欠けているので物語が何となく不潔に感じられる。もっと程度の高い、強烈な魅力や個性を持ったものを広く一般から捜し出して下さい。

次に貴誌は、良識的判断で挿画を極力減らしています。たしかに、なかなかよいことだと思のですが、よく考えると、かならずしも、そうとは言えません。読む雑誌に挿画があつてはいけないということはありません。

第一、奇クの挿画が、かならずしも善良な風俗をみだすとは思いません。否、私の見たかぎりでは、青少年向けに文庫本の挿画に

も随分と奇ク的な場面がありますし、今はやりの漫画にも随分、参考になりそうなものがあります。どうも色々と考えてみると、挿画そのものよりも、これまでの貴誌の挿画に対する姿勢に問題があつたと思うのです。吉川英治の名作全集の中にも、奇ク的な挿画がでてくるのですが、私は挿画というものは、新聞の写真と同じように、物語に区切りをつけ、進行を助け、物語の中における夢や想像の翼を広げ、物語全集を美しく浄化するものであるはずで、貴誌のものは、私の知っているかぎりでは、どうも一コマ・ショー的な色彩が強い。考えてみれば、奇クの挿画だからといって、いつも奇ク的な場面でなければいけないということはないはずです。あくまでも上に述べたような目的のものであれば、むしろ挿画は入れた方がよいのではないかと思うのです。

正直に言って貴誌の挿画は、時々古本屋でみかける旧号の中で、女を責めている写実的な男の画、この男の顔はひどい。どうして、こんな醜い男を描くのか。私も男の一人として腹がたつ。とにかくひどい。これでは挿画を減らすのも当然でしょう。画家には手法があるのですが、もう少し研究してほしい

と思います。特に男の顔は、腹が立つより呆れてしまいます。あんな画なら、もう男の画は載せないでくれと言いたくなる。私の考えは貴誌の読者に共通するという確信がありますので、絵や物語のキャラクターやインスピレーションについて、ぜひお知らせしたいと思います。

その前に、もう一つ。貴誌は、もっと若い人を相手にできないでしょうか。十八才以上ということは、十八才も十九才に含まれていることであり、こういう人こそ貴誌をもっとも必要としているのではないのでしょうか。そのためか貴誌は余りにもその姿勢を、それこそゲテモノ・ショー的に疲れをいやすストレスを解消するといった消極的存在においており、これは必ずしも真面目な成人を相手にしているとは言えない。それよりも積極的に夢や活力を与えるという目的にした方が真の目的にそうのではないか。そうすれば、やはり初々しい夢に目を開くことが、結局、成人にも最高によい形となるのではないのですか。

次に、物語の設定や手法、キャラクターなどについて私の意見を述べさせていただくならば、先ず第一に物語の設定として考えると、ということが非常に大切なことであり、よく研

究の要があるのに、案外かえり見られていないということなのです。どんなジャンルのどんなところを舞台にした、どんなインスピレーションに導かれたものかは非常に重大なことで、適当に、思いつくままに、などではすまされません。

貴誌を見て考えることは、余りにも舞台が現代の、しかも普通のものが多すぎるということです。奇クの世界は現実にはない世界なのです。ですから、現代物は前述したサーカスなどの特別なところを舞台にするか、いっそ外国でも舞台にしたものでない限り、よほど考えてつくらないと、いたずらに醜態に流れ美しい夢が育たないばかりか、破壊されてしまう。時代物をはじめ、もっと舞台を改めるべきでしょう。それに物語も余りにもショー的です。奇ク的な場面は挿画と同じように減らしてかまわないから、もっと物語にして奇ク的な場面は美しい星のように要所々に効果的にちりばめ、それよりも話の骨組やインスピレーションに奇ク的な美を盛り上げる方がよいのです。

第二に手法として、貴誌の物語は余りに連載主義で、物語として読む場合、どうしてもクライマックスや、それぞれの部分に特有な

盛り上りがない。そこで考えられるのは「花と蛇」のようにS小説の場合、貴誌は常にショー的に話を進めている。文字通り奇ク的なショーを話の内容としたものでないかぎり、よほどの意欲的な創作でもなければよくならない。「花と蛇」は、あの手この手で、かうじて話をつないでいるが、感心しない。

そこで設定や手法やキャラクターについて实例を示して説明しようと思うのですが、何といっても清潔な美観や、甘く、それでいてしっかりした強い芸術性、それよりも澁刺とした巨大なインスピレーションがなければならぬことは勿論です。

先ずキャラクターから考えると、貴誌は登場人物が余りにも年増すぎるのではないですか。(なにも子供というのではなく、念のため人物像が年増すぎるという意味) どうせ実際にはない世界なのですから、もっと年少の者を登場させた方がいいし、その方が醜態をまぬがれて、あらゆる面でよいのではないのですか。さらに前に述べたように、貴誌は登場する女性の服装について全然、研究も工夫もはらっていない。これは重大なことで、奇ク的な観察による女性の服装で本が書けるほどです。

だいたい裸というものは、ミニスカートの
大根足を強調するように、醜態な肉体のいや
らしさばかり強調して、健全な人間にとって
よくない。奇ク的というところ、特殊な服装
となりませんが、先ず時代劇、それも一種の野
性美を強調したもので、一つのジャンルがで
きる。この例には、白土三平の漫画「真田剣
流」その続編「風魔」の第二巻などにでてく
る少女「桔梗」など好例ではないでしょう
か。あの服装など奇ク的美からいって最高で
すし、あの性格づけも奇クのキャラクターと
して秀れた材料であるし、物語もいいインス
プレーションや設定、手法などを提供してく
れるはずなのに、なぜ気がつかないのでしょ
うか。

このジャンルは「真田幸村」（テレビ）に
でていた野川由美子の服装など最高でしょ
う。又、黒沢明監督の「隠し砦の三悪人」の
ヒロインなども非常にいい。この中、「真田
剣流」を除いた二つを考えると写真は手に入
ると思うのですが、なかなか興味深い。一
方、土民的で、しかもそのくせ品があり（あ
たりまえ）よく似合っている。共通している
のは、太股から下が剥き出しで黒っぽい脚胖
をはいていること。この脚胖が重要で、時代

劇など奇ク的観点からは脚胖は実に美を強調
してよい。ああいった露出の方が裸より、よ
ほど奇ク的でよい。そのぐらいの工夫ならで
きるでしょう。

物語の設定や、その他にしても「真田剣流」
のような野性の少女忍者の壮大な冒険物語な
ど、原本のような美しい挿画入りで純読物と
して、奇ク的シーンばかり入れないで書いた
ら面白いのではないのですか。他の二つにし
ても、太股から上が土民、野盗、海賊などと
いったスタイルで、下は剥き出しの脚胖とい
うのは、奇ク的服装の時代劇における一つの
ジャンルを形成するほど強いはずですし、物
語のインスプレーションとして大切なはずで
す。

次に同じ野性として、テレビのジャングル
の女王、ジャングル・ジム、ジャングル・ボ
レバ、ジャングル・ガール、ターザンといっ
たジャングル活劇シリーズが、いかに日本で
高い視聴率を上げているかわかりますか。少
くともジャングルの女王、ジャングル・ガ
ールについては、この女王ターザンの奇ク的美が
うけたからだとはいえないでしょうか。女王
ターザンという設定自体、奇クの中に一つの物
語のジャンルをつくるはずで、現在のアフ

リカが新聞で伝えられるように舞台として適
当でないなら、舞台を日本の中世にうつすな
り、純奇クの想像の中の世界にするなど、方
法はあるはずで。

この二作について前作は普通の豹の皮です
が、後作は服装にも興味ある写真ぐらい手に
入ると思います。上は手首まで隠し、下はミ
ニスカート状になった、ちょっとロビン・フ
ッドを思わせるようなビロードのようになめ
らかなで、大きなバックルのついたバンドでと
めた上と下のつづいた服、すそが少し広がっ
た感じなのに、ビロード状のためピラピラし
ている皮の短長靴？ ヘアーバンドなどとい
ったスタイルは、挿画にそれだけでもってこ
いのはずです。しかも、この作、捕獲部分、
ようするに捕われ方が、例えば敵の村にの
びこんで発見され、危く脱出して象の背中に
乗り逃げるところを、木の上から首に投げ縄
をかけられるなど、工夫がこらされていてク
ライマックスが盛り上っているが、これなど
研究の余地があります。

△追記△今週のテレビ・ガイドに紹介されて
いる「おせん捕物帖」の重山規子の写真をご
らん下さい。この話など、随分参考になるの
ではないのですか。女捕物帳も一つのジャン

ルです。

次に一転して高貴な美となると正にドンピシャリ。三十五年十二月三十一日より三十七年末までテレビで放送され、四十一年にリバイバルされた「琴姫七変化」でしょう。これなど「女ターザン」同様、奇クの中に一つのジャンルをつくる姫物語の決定版なのに、いくら奇クのシーンが少なかったからといって問題にしなかったというのは、余りにも見る目がない。だいたい十一代將軍の末娘、つまり高貴な姫が男じみた姿や下賤の姿などでする七変化の設定自体が、奇ク美の最高であるはずです。琴姫が日本中を武者修業や悪人退治をしながらまわる話など、随分いい材料ではないのですか。松山容子の琴姫は正にハマリ役で実に品があつてよかった。いったいに姫剣士の話は昔からよく映画やテレビの材料として人気がある。これは高貴な姫君が男じみた姿をして剣を振るうという設定自体、S的で、それに受難場面でも出てくれば決定的です。剣を振るったり胸のすくような活躍をしている間は、むしろM的で、これは前項にも通じることですが、これが一つには受ける原因、つまり、そういったものが求められているからではないでしょうか。

「琴姫七変化」は、文字通り松山容子の七変化が見ものの一つで、姫姿、若衆まげの若衆侍、これに何といつても女やくざ姿がよかった。この姿は、この間の「剣」をはじめ随分テレビに出てくるのだけれど、どうも他の女優がやったのでは似合わない。やはり松山容子のように少年じみた感じのする女優でないと駄目のようです。前項同様、太股から上はやくざ、下は剥き出しの脚胖という定石通りがよい。それに前項の土民姿とは違った大原女姿や曲芸女芸人などのスタイルもよかった。前項的スタイルでもさせたらとも思つたのですが、松山容子が同じく主演した姫様シリーズ「月姫峠」「霧姫君」というのが三十八年より三十九年にかけて登場し、姫様物の根強い人気（松山容子がハマリ役だったというところもあるでしょう）を示しました。

物語の変装場面などは、元が姫という想定だけに言いようのない味がある。色々述べましたが、まとめとして物語の手法を申しましょう。貴誌は捕獲場面の演出が弱いことは前にもいいましたが、これこそ重要なことで、例えばどんなふうにいえば、悪人側が捕獲の作戦会議を開いて討論する場面や、大々的に準備するといった想定など、それだけで興味が盛り上るし、特に時代劇などでは、わざと捕獲されて敵地にのり込む。そして敵方に潜入している味方と結託して捕獲されたように見せかけるといったような手法が興奮を呼ぶものですし、前記の女側群像の心の隅にM的傾向を持たせるのもよい。要するに捕まる場面は文字通り、遂に捕まった、あるいは遂に捕まる………と思つた途端、危く逃れるが、もう一步で敵地を脱出するというときに再び捕えられるというドンデ返しの二重スリルや、計画的に進んで敵に捕われるなど工夫をこらすとよい。又、捕まる直前まで澁刺と活躍させておくと、生々しく感じるし、Mにもつながることができる。次に責め場は、「花と蛇」などアクが強くて一回は読めるが二回目は読む気がしない。何といつても責め手の男性像が不潔で程度が

ある夫婦のプレイ

深夜の引廻し

早 木 夢 二

1

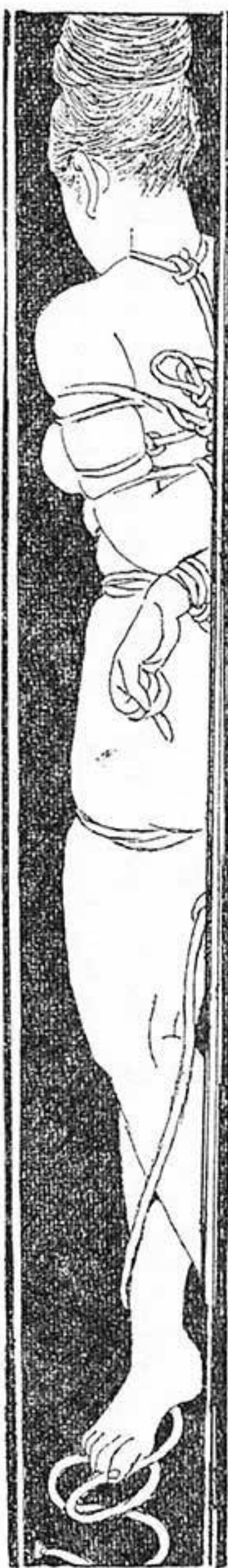
私も慶子も「引廻し」が大好きで、拷問プ

レイの最後の刑の申し渡しの際には、必ず、市中、裸引廻しの上……という文句を入れるのがキマリだった。

低くてひどい。時代劇など、よく俠客物に出てくるように、日本的善良さを心の隅に持っていた方がよい。又、責められる女もやたらに裸にするより、姫物など姫に前記のような土民だの野盗の服装をさせただけで、責め場の一つが成立するといったぐらいに考えたらどうですか。

縛り方ももっと多種多様に、道具を色々をつかい、森林、河川、草原といった天然の風景など、もっと生かすように工夫をこらし文献なども研究したらどうですか。更に登場人物など、もっと広く一般の映画、テレビ、雑誌、漫画など、どしどし取り入れるべきでしょう。これはギャグや手法も同じです。更に

「花と蛇」など、頭と尻っぱのない話のように、もっとはっきりした結末に向って書くことが必要だし、結末自身も終って、すがすがしい気持ちの上で余韻を残すようなものがよい。いずれにしてももっとギャグ偏重より物語偏重（重視）に移行するべきで、研究の要があります。



勿論、昔のハリツケや火刑に処せられる罪人が、きびしい縄目をかけられて裸馬の背に乗せられ、江戸市中を引廻わされて行く、その血を吐くような羞恥や苦痛とは何の関係もない。只、私たちのプレイのレパートリーの一つとして、楽しんでるにすぎない。

時々私が裸馬に交じて四つ這いになり、嚴重な菱縄をかけられ、縛られた彼女を背中に乗っけて、部屋中をのそのそ歩き廻る。

旅行中、彼女の肌に縄をかけたり、着物の上から菱縄をかけ、羽織や襟巻きで隠して映画を見に行ったりしたこともあった。

私はプレイの度に、慶子に必ず裸引廻しの刑の宣告をするのだが、ずっと前、ある小型の雑誌で、「湯文字の女」という小説を読んだ。湯文字一枚の姿で菱縄をかけられた女が

裸馬に跨って江戸市中を引廻されているさし画があった。姦通の女の処刑であった。男も一緒に引廻されているが、この方は獄衣に菱縄という姿であったのが、女に比べてひどく奇妙な対照であった。引廻しの途中、湯文字がめくれて、恥ずかしい姿が更に羞恥を倍增される描写もあった。

又その頃、同じような雑誌で「闇の家康」という小説を読んだ。キリシタンの女が家康の闇に待って、夜中刺そうとして未遂に終り捕えられる。一糸まとわぬ哀れな姿にされた女が、十字架を首からかけて物々しい刑具にとり囲まれて、裸馬に跨って江戸市中を引廻されているさし画があった。

残念なことに、完全な菱縄でなくて、首から二の腕へ縄を廻しただけの半菱縄であったが、一糸まとわぬ女の引廻しに、私は胸ときめかせて見入ったものだった。

八月も末のある晩、彼女が「ねえ、きょう、お引廻しをしていただけませんか？」と、いいだした。

「ここで？」ときくと、
「ううん。きょうは外で……おもてでお引廻ししていただきたいわ」という。

私は、ちよつとためらったが、夫婦だけの

拷問プレイが、どうしてもマンネリになって、なにか目先の変ったことを私も望んでいた矢先のこと、つい、承知してしまった。八月末ともなるともう大分、陽も短いが、十二時近くならないと、附近の人の眼をごまかすのは難しい。

彼女はもう、これからの引廻しのことをあれこれ想像して、妖しい昂奮に駆られているようだった。時々「早く時間がたたないかな」なんていつている。

十一時すぎた。私たちは、そろそろ仕度にかかった。彼女が私に真新しい縄を手渡した。

「お縄、いただきますわ」

「裸でだろう？」

「ええ、勿論よ」

彼女が裸になると、私は何時ものように菱縄、股間縄とかけていきながら、

「旨く見つからんといいいけどね」

「大丈夫よ。十二時ごろには、大抵休んじやうし、それに裏通りを行けば……」

こうなると、彼女の方が私よりはるかに大胆である。十二時近くなつて、窓から覗くと附近の灯も大分、消えている。

私は縛り終った彼女の肩に浴衣をひっかけ

た。両手を自由にすれば、浴衣の袖に手を通せるので何とかごまかしが出来るが、後手に縛ってあるのでは、どうにもならない。

それに、「嫌よ、私、両手は後で縛ってくれなきゃ……」と彼女が強きうので、浴衣の裾をたくし上げ、腰の辺りに細ひもを廻して形をつけた。

両袖がダランと垂れているのは仕方がないので、私が彼女の傍に立って、ごまかすことにする。縄尻は腰縄にたくし込んだ。

草履をはいた彼女と、こっそり外に出た。幸い人影はない。

裏通りに出ると、この辺りは小商売の家が多いので、まだ明け放った家もあるが、小走りに通り抜けて、しばらく行くと、一本道に出る。

片側は都営住宅の庭を仕切った赤煉瓦の塀が長々と続き、片側は有名な仏行寺の墓場の生け垣で、一丁ばかりの細道である。所々うす暗い街灯が点っている。この道をつき当たると、有名な仏行寺の境内になる。

こんな道だから、昼でも人通りは少ない。まして夜のいま時分となると、殆んど人通りはない。といっても全然ないと決めてかかる訳けにはいかないが、その時はその時のこ

と、道々入った所で、思い切って浴衣をパツとひき剥がした。

覚悟はしているというもの、流石に公道の真中で、誰も見ていないとはいえ、裸の緊縛姿をさらすのは恥かしいと見えて、彼女はもじもじ体をくねらせたが、すぐ立ち直って「お願いしますわ」

というと、草履を脱いで、きつと上体をそらした。私は草履と浴衣と一緒に束ねて片手に持つと、片手で腰縄にたくし込んでいた縄尻をとった。

「慶子！」

「ハイ」

「只今より、その方の裸引廻しを行う。ありがたうお受けせい！」

「ハイ」

彼女は、きっぱり答えた。顔をあげ、胸をはって歩き始めた。

雲が流れて、月が出たり隠れたりする。その度に彼女の体にかけられた白い縄が、きらりと光る。

むっちりした囚女が、縦横にせかれた肌に走る縄をしごくように、くねくねと、うごめく。

2

少し行くと、彼女が突然立ち止った。そして私の方をふり向くと、

「あのう、お役人さま……」という。

「何じゃ？」

「お願いがございます」

「申して見よ」

「ハイ。あのう……」

彼女は何か、いい淀んでいる。

「何じゃ？ 早く申せ！」

催促すると、彼女は思い切ったように、

「あのう、小用を足ささせていただきとうございます」

といった。

私は最初から、この道のどこかで、彼女に排泄させたいと思っていた。

縄尻を私にあずけたまま、彼女は墓地の側によって、背を墓地の方へ向けてうずくまった。草むらの先が彼女の肌を刺すらしく、くすぐったいと思えて、ちょっと困ったという態である。

私の顔を見上げて、

「よろしいでしょうか」ときく。

私は手伝って草を踏み分けてやる。

「すみません、お手数かけて……」

夜目にも白い彼女の裸身が、草むらの上にハミ出し、巨大な白い花が咲き誇っているようだ。

……静かな空気が乱した。

「ああ」

軽く彼女が呻いた。

「もういいか？」

「ハイ！ ハイ」

というものの、彼女はまだ立ち上ろうとはしないで、顔を深く垂れたまま、じっとしている。

「立て！」

私は頃合いをみて、縄尻をひいた。

「ハイ」

彼女が立ち上ると、私は縄がけを点検して背中を軽く叩く。

「歩け！」

後から見ると、何か彼女の体が軽快になったように思えるのが可笑しかった。

思わず、ふっと笑った。

「何ですの？」

耳ざとく聞きつけて、彼女がふり返った。

「何でもないよ」

「嫌ですわ。あのこと、お笑いになってるん

でしょう?」

幸いまだ人の影はない。然し油断はならぬ。いつやってくるか判らない。もしやってきたら、一本道だから始末が悪い。

与太者のような人だったら、からまれたりしないかな。酔っぱらいだったら、困るな。いやいや、それ以上に、お巡りさんにぶつかったら、それこそ大変なことになる。いくら私たちが夫婦プレイをやっているんだといっても、仲々諒解してはくれないだろうな。殊に女の方は裸で、昔の罪人のような菱縄をかけられ、おまけに追い立てられて歩かされていくときは、ちょっとやさそつとでは、いい訳のつくものではあるまい。

幸いお巡りさんが奇巧の読者か、こんな好みの判る人だったらよいが……。

女の縄は、昔のあなた方と同業のお役人が使った縛り方ですよ、といった所でいい訳はつくまい。

彼女はそんな私の心配にはお構いなしに、引廻しの気分に浸り切っているかのように、昂然と胸をはって、後で縛られた両手の指をぐっと握りしめ、形のよい尻をくりくり動かしながら、さっそうと歩いている。

縄尻をもったお役人さまの方が、あれこれ

と氣をつかって頼りなげな風情である。

向うに、ぼっかりと仏行寺の境内が見えるようになった。

流石に深夜の空気は冷えて、彼女の体をしつとりと包んでいるようだ。

「寒くない?」

ときくと、

「ううん、寒くなんかありません。楽しい」と張り切っている。

私は、ぐっと縄尻をたぐった。

「あっ」

彼女がよろよろと私の方へもたれかかる。

「どうなさいましたの?」

私は彼女をかかえ込むと、持っている浴衣や縄尻をすてて、後から彼女を抱えるようにして首筋にキスしてやった。

まだ一緒にならない時分、新宿の西にも、今のように大きな建物でとり囲まれたせこましい場所はなかった。その雑草の生い茂った原っぱの中においてあるベンチの上で、私は彼女と別れを惜しんだものだ。深夜の星が降るように輝いていた。

私が彼女の肩を抱いてやると、待ちかまえていたように全身を委せてくる。

片手をとって背へ廻してやると、残る片手

を自分で廻して背後に組み、喘ぐようにして私を見上げ、キスを求める仕ぐさに、私はいつも別れづらかった。

そんな風にして、私は彼女を、この駅から何度、見送ったことであろう……。

「ああ……」

私の唇がウナジを滑る動きにつれて、彼女の顔がゆらゆらと動く。

「嬉しいですわ」

私の顔を、首をねじるようにして振り仰いだ彼女はニッコリとして云い、抱かれている肩をゆっくりと振り動かした。

「お引廻し、お忘れになっちゃいやよ」

私はハッと手をはなした。再び縄尻をにぎると、

「歩け!」と照れ臭いのを隠すように、わざとときびしくいった。又、引き廻しが再開されたが、今度はさっきと違って、彼女は上半身を心持ち屈め、歩き方も何となくぎくしゃくと、両膝をすぼめるようにしている。

3

仏行寺の夜は暗い。

広々とした境内の奥に、本堂が黒々と横たわっている。右手の方の事務所の奥に、かす

かに灯が見える。左手の一劃は墓地からはみ出た墓や碑が所せましと立っている。

昔、ここにお役所があったという碑の前になると、私は浴衣と草履を下においた。

彼女は碑の前に突っ立って……お役所跡、と低い声で読んでいる。

女って、なんでこう図太いんだろう。いくら夜だからといっても、こんなあられもない姿で、お寺の境内に堂々と立っているんだから、全く感心する。

然し感心ばかりもして居れない。私は碑の後側に彼女をひいていて、小さな石ころがごろごろ転がっている空地を見つけると、

「坐れ！」と命じた。

裸の膝が石に当って、彼女がよろよろと不自由な体で坐っているのは、見た眼にもちよっと痛々しい。やっと坐ってから、ややしばらく尻をもぞもぞさせていたが、やがてぴったり形が決まった。

「痛いかな！」

私がきくと、

「ハイ。少し……でも我慢出来ますわ」

と彼女が答える。

私はその附近に転がっている、長さ二尺、巾一尺ばかりの、墓の台石と思われるような

石を拾いあげ、正坐している彼女の膝の上にとすんとおろした。

「うっ」

押し殺したような悲鳴をあげると、上体をくねらせた。

構わず、同じような石をもう二枚、計三枚を積みあげる。

そして、

「慶子！」

と声をかけた。

「ハ：ハイ」

「拷問だ！」

「ハイ。嬉しうございますわ」

彼女の顔はもううっすらと赤ばんでいる。

じっと顔を伏せて、膝の上の抱き石と直面している。時々、うっ、と声が洩れ、体がかすかにゆれる。その度毎に、苦痛が増してくるようである。

髪に手をかけて、ぐっと顔をひきあげると、軽く閉じた眼が、月の光を宿して、きらきら輝いている。

「苦しいかな？」

「ハ：ハイ。苦しいですわ」

彼女が、ひからびたような声で答える。

「慶子！」

「ハイ」

「この拷問は何と申すのだ？」

私は意地の悪いことをきく。

「……」

「え？ 何という拷問だ？」

私は彼女の傍にしゃがんで、顔をのぞき込んだ。

「申して見ろ！」

「ハ！ ハイ。石抱き……石抱きのお拷問でございます！」

やっと、そう答えた。

「そうだ。お前の好きな石抱きの拷問だ。嬉しいだろう？」

「ハイ、とっても……」

私は時々、前の方の事務所の奥の灯の辺りに眼をやった。

こんな時間になると、そろそろ夜警が巡り始めるかも知れない。いい加減に石抱き責めの拷問も止めなくてはならない。

私は彼女の膝の石をとりのけた。

「あああ」

思い切り口を開いて、彼女が息をする。

「よかったか？」

「ハイ。凄くよかったですわ」

彼女を立たせると、よろよろとした。

「大丈夫か？」

「ハイ。大丈夫でございます」

といったが、暫くうなだれて、膝を曲げたり伸ばしたりしている。体は汗と埃でうっすら、よごれている。

しばらく、そのままにしておいた。

4

そろそろ帰ることにしたが、今度は道を変えて、墓の間を通り抜けて、一本道の端に出ることにした。

もう大分、元に戻っているが、まだどうかするとびっこをひいている彼女をひき立てて暗い墓の間をあちこち抜けていった。

暗い闇の中に、彼女の白い体がちよろちよろする。時々墓の隅にぶつかって、低い呻き声を出した。

「あっ！」

突然、彼女が悲鳴をあげた。

ぐしゃっ！ と何か柔かい物を踏んづけたらしく気味悪そうに片足の踵をあげている。

「どうした？」

近づいて、月の明りでのぞくと、誰かがし残していったらしい塊りを、彼女がしたたか踏んづけたようだ。まだ余り時間が経ってい

ないと見えて、柔らかく臭いも生々しく強い。盛んに気味悪がって、左足をそこら中の落葉にこすりつけている。

お寺の墓地ともなると、こんなこともざらにあることだろう。

私は、ふっと思いついて、その思い付きに笑って仕舞った。

「何よ、笑って！」

彼女が腹立たしそうに私の方を向いた。

「代りにしてやったらどうだい？」

私がそういうと、

「ええ、代り？」

不審そうにきき返してくる。

「お前が踏んづけた代りに、してやったらどうかといってるんだよ」

彼女も、やっと判ったようで、

「あら、嫌だ！」

そういうと、ふんと、そっぽを向いた。

私は近よって、肩越しに彼女の顔をのぞき込んで、

「怒った？」

「ふふ……」

彼女はもう軽く肩をゆすって笑いながら、

「怒ってなぞいないわ」

「じゃ、しておくか？」

「いいわ。あなたがそう仰有るのなら、私が代りに、綺麗にしていあげますわ」

彼女も大分、その気になっているようだった。いつものプレイの一環の感じが、彼女の胸に甦っているに違いない。

とある墓石のかげに彼女が私の方に背中を向けてうづくまろうとした。見返った眼がいたずらっぽく笑っている様に私には思えた。

「嫌よ、そんなにご覧になっちゃあ——」

彼女はそういうと、又きつと向き直った。

しばらくして立ち上ると私に背を見せて、

「お引廻し願います」

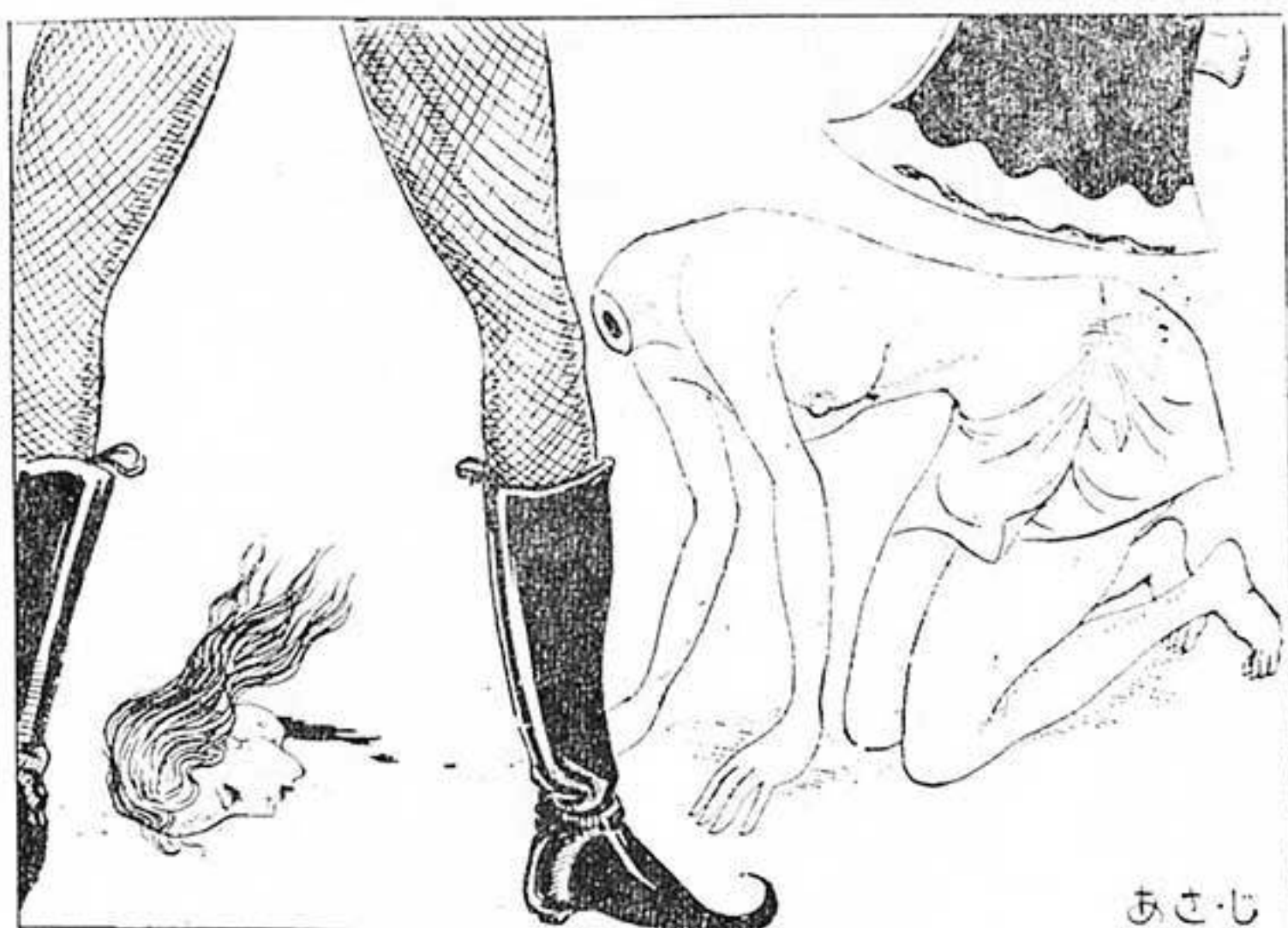
誰かが、今度は彼女のことを踏んづけるかも知れない。そして又その分だけ、愛する女のことを残して行くだろうか。

又もや、女囚の行進が始ったが、何か私は

心残りがして、何度か後をふり向いた。

無事、一本道の端に出た。どうやら今日の引廻しは、心配した事態も起らず、無事終ったようだ。

彼女は、すっかりいい気持になったらしく家に帰るとすぐ入湯して、体の汗と埃りを洗い落しながら云った。「今度は大通りを引廻していただきたいわ」そんな無茶な、と私は思いながら彼女の図太さに驚いたのだった。



あさ・じ

酷連処刑大会

私は殺される

黒田 寿

カット・室井亜砂路

わたしたち若く美しい女性三百余人、斬罪梟首の判決をうけ、いまここに、午前八時のサイレンを期して処刑されようとしている。

とは言っても、べつに悪いことをやったわけではない。罪名は「魔女」。男をポツとさす美しさを持てる者は魔女と見なすのが当然というのである。だから酷連邦に於ては「若

い」「美しい」ことが罪悪なので、女としてはむしろ死刑にならず、三十まで生きのびる方が恥なのだ。いわば、死刑宣告を受けた者は、ミスコンクール入選者といえるのである。十六才の若さで、早くも死刑をうける名誉にかがやく小百合が、誰に言うことなく話しかけた。

「死刑に選ばれたのは満足だけど、死ぬのはやはりいやね。でも、みんなごいっしよなのがうれしいわ。だけど、カッコよく晒されるには、斬られるときどうすればよいの」

知ったかぶりの佐知子がこれに答える。な

にさ、自分だって斬られるのは始めてのはずなのに。

「獄門台にのっかったとき、うらめしそうに白目をむいたり、歯をむきだしたりしないように、目をとじ、口を軽くむすび、四肢の力をぬくの。また頭だけにならぬよう、頸すじをできるだけ長くのばすといいわ」

（とは言ったものの、私にできるかしら）
（どこかで読んだわ、この文句）

サイレン鳴りひびくや、刑吏はまっさきに佐知子をひきすえ、大刀一閃、あっというま

に首をたたき落し、急造獄門台三百基の、最初の一本にヒョイとのせる。あまりの不意討ちに、目も口もポカンとひらいたまま……
 (ひどいわ、声ぐらいかけてよ。カッコわるいじゃないの)

二人目のとも子は、まだ自分の運命がよくわからぬかの如く、目を丸くしてこの光景を眺めていたが、無情の刃に軽く頸をうたれ、京人形のような可愛い首をおっことす。

(あら？あたし、もう死んじゃったの？)

処刑はつぎつぎとすすむ。だが、なんとあきらめがよいのか、それともみえぼうか、みんながみんな、おとなしく死んでゆく。ひとり位、往生際のわるいのがいてもよいのに。そのくせ、目は吊りあがり、冷汗は全身にながれ、四肢はこわばっているのだ。

竹子の頸に一刀が走ったが、すでに十人も斬っており、血で刃がなまったのか深くは入らず、頸動脈は断ったものの、首はまだ胴の上のこり、しかも電撃性死後硬直というのか、端坐したまま「固く」なってしまった。

面白がった刑吏たちは、てんでに、何度もくりかえし斬りつけたが、なかなか刃が食いこまず、ようやく二十七刀目で、固い薪がやっ割れるが如く、首は前にこるがった。

小百合の最期は見事であった。あの時以来黙々としていたが、首の坐につくや

「臆病ものです。よろしく願います」

と刑吏に一礼、静かに頸すじを長くさしのべ、目をとじ、口をむすぶ。雪よりも白い、あらわな肩、つぼみのふくらとした双の、処女の胸乳が痛々しく目をひいた。

あまりのいさぎよさは、みるものすべての胸をうち、刑場はシーンと、水をうったように静まりかえった。

「うむ、いい覚悟だ」

刑吏は小百合のため、新しい大刀の鞘をはらう。助手が手桶の水をすくい、サツと刃先にかける。刑吏は一、二度、大刀をうちふりきつと上段に構えれば、小百合はその下で両手を組み、なにかつぶやいた。おそらく祈りをささげたのであろう。

(実を言うと、痛くないようにって祈ったのよ。笑わないでね)

狙いは定まり電光石火、大刀、風を切ればバシヤッ！とぬれ手ぬぐいをはたくような音と共に、まっしろい頸すじがズバリと切断され、まっかな血汐が噴水の如く、一条の線をなして噴きあげ、汚れなき美少女の首は、ポ

ロリと胴体をはなれ、地上にころがった。

(うれしい！ちっとも痛くなかったわ)

助手が小百合の生首を拾い、髪の毛をつかんでブラさげ、柄杓で汲んだ水をザァザアとあびせ、血のりがおちてキレイにしてから、わしづかみにすると、獄門台に逆さにつきでている五寸釘にズブリ！とつき刺す。頬の筋肉が、幾度も痊れんをおこした。

よく見ると、その獄門台はほかより一段と高く立派で、ネーム・プレートまでついている。若アユの如きピチピチした胴体も、十パひとからげに穴にほうりこんだりせず、晒し台にのせられた。いかなる美女であっても、息をしなくなれば、ただの物体と変りはないはずなのに、なにからなまでに、小百合は特別待遇であった。

(だから、美人はトクね)

不運なのはあゆみで、若さも若く十八才。顔もまんざらではないのに、皆が小百合の死をいたむあまり、次の番にはまだ誰もみむきもしないのだ。これは最大のブジョク。恐怖よりも口惜しさであろう、涙がひかっている。(せめて、ひとりでいいから、こっちを見てよ。おねが……キヤッ！)

バシャ！
ポロリ！

紫電一閃するや、もう首はおちていた。拾いあげたとき、新しい涙が二滴、まぶたより湧きでて頬をぬらす。

エミとユミは、いっしょに殺してとの願いがいれられ、ふたり抱きあって顔と顔、胸と胸とをくっつけあっていたので、これは観衆の注意をひくことができた。

豪刀ひとふりすれば、刃はエミの頸のうしろから、顎の下のくびれを通過、首を宙高く刎ねとばし、ユミの咽喉にザックリと食いこみ、首落すには至らぬも、頸骨断って完全に即死さす。横ざまに仆れたふたつの胴体は、尚もかたく抱きあったまま、しかし、獄門台の上では、わざと遠くはなしたのは、むごいしうちであった。

(でも胴体は絶対にはなれなかったでしよ)

いよいよわたしの番になり、刑吏が両腕をとって引きすえる。ここで大声をあげてみたら、さぞかし気持のよいことだろう。首もまた、おもいきり遠くまでとんでみたい。ともかく、何か変った死に方をしなくては、オテンバ佑三子の名に反する。

しまった。何を叫び、なにをしたらよいだろう。早く思いつかないと、首がなくなってしまう。もう頭の上で刃が光っているのだもの。そうだ！ そうだ……あっ！ イタッ！
「バシャ！」
「ポロリ！」

(わあっ！やられちゃった。もっと早くから考えておくんだった。でも、首が五メートルもとんだのは新記録でしょう)

見渡す限り首、首、首。鮮やかに頸部切断された美女の生首が、ズラリと獄門台上に並び、一隅に掘られたさしもの大穴も、すっぱだかにひんむかれた、首なし死体で、なかば以上、埋まっています。

晒しが終わったあとの生首は、競売されるきまりですが、こう数が多くてはダンピング、ひと山いくらの価になるかもしれません。

英子も生首と交り、自慢の一メートルもある髪の毛が、獄門台からはみだし、長くたれています。斬るとき邪魔にならぬかなど、私もまもなく死ぬのに、余計な心配をしました。が、やはり斬りにくく、逆吊りとし、長くのびた頸に刃をあて、掻き落したのです。
(そうよ、とっても痛かったわ)

いま、見事に弧を画いて五メートルもすつとんだのは、佑三子の首です。お茶目なだけに、逆立ちでもするかと期待してたのに、特別のことなくあの世へ行きました。でも、最期ののぞんで「イタイッ」は傑作です。

私はふと、死体のなかにもぐりこんだら、或は助かるかもしれぬと思いつき、隣の妹・ミエの耳に口をよせ

「私が騒ぎをおこすから、あなたはそのすきに、死体の中にもぐりこむのよ。夜まで発見されなかったら、しめたものよ」
(玲子姉さんこそどうぞ、と言ってくれないかしら)

こうささやくと、私は大声をあげて逃げだします。今までがみんな従順なので油断してたのか、スタートでかなりの差がつきます。ちよっとふりかえると、あわててあとを追う刑吏の背後に、ミエがうまく死体のなかにかくれる姿が見えました。私に気をとられ、誰も気がつかぬようです。

(うまくやってね。さようなら)
かけっこは私が早く、差は次第について、或は私自身、逃げきれるかと思いましたが、突然、前方に数人の刑吏があらわれ、弓に矢をつがえます。

(待伏せしてたの？これでは話がうますぎる
 と思ったわ。仕方がない、死にましようや)

最初の矢は、狙ったようにおへソに命中、
 プツと血しぶきをあげながら、矢羽根もかく
 れんばかりに突立ち、続く四本はその上下、
 正中線に沿って食いこんできました。

(わざとね！死体を晒してなぶろうって言う
 のね。知らない、知らない、知らない……)

もうだめとあきらめた私は、両脚を大きく
 ふんばって立ちどまり、死をまちます。ひと
 りが進みでて、ふりかざす大刀のもと、私は
 ミエが無事でのがれることを祈りながら目と
 とじました。

(ああ、いやだ、いやだ。死にたくない)

次の瞬間、私は頸すじに、私の生命を断ち
 切る冷いものが、サツと横に走るのを感じね
 ばなりませんでした。

(こんなに若く美しい私。まだまだ生きたか
 った。姉なるが故、犠牲になってあげたの。
 三拝九拝しなさいよ)

あたしは姉の犠牲をむだにしまいと、急い
 て死体の穴にかけつけ、いくつかをおしあげ
 てもぐりこむ。耳にまだ、盛んにさわぐ声が
 聞えるのは、姉が追われているのだ。まもな

く歓声がひとときわ高くあがり、また溜息がも
 れ聞えたので、あたしは姉の最期と知った。

(ナムアミダブツ……迷わず成仏してね)

……剣光真横にとべば、皮一枚を残した首は
 背の方にたれさがり、噴血、雨の如くバシャ
 バシャ降るなか、哀れ即死した美女玲子は、
 ドオッ！と仆れる……こんな幻がうかんだ。

(妹と生れてトクしたのは、これが最初で……
 ……最後ね)

なんだか、あたりがさがしくなった。

“ここよ、たしかにこの穴よ”

あれは誰だろう。そうだ、比佐子の声だ。

まさか友達を売るつもりではないだろう。

“誰か、にげこんだわ。ひとつひとつ、槍で

突いてみれば、すぐわかるわ”

間遠いなく比佐子の裏切り。あたしは恐怖

と怒りで身もだえした。口惜しいことに、姉

の死も空しくなってしまうのか。あのメロウ

め、いずれあの世であつたら、ただではおく

ものか……

(キライ、キライ、キライ)

突然の激痛に、思わず“痛い！”と叫び、
 身体をピクン！とふるわせてしまった。脚を
 つかんでズルズル引きだされ、胴体の上にま
 だ首がついているのを見られては万事休す。

穴にはうりこむ前、両者は通常、斬りはなさ
 れねばならぬのだ。

“あっ！たす……”

突然けたたましい悲鳴が上空から聞えた。

みれば、大きく口をあけ、齒をむきだした比
 佐子の首が宙に浮き、地上にはいつくばった
 胴体は、ヒクヒク四肢を動かしている。これ
 が助命を願っての密告の酬いであつた。

(まあ、なんてダラシない恰好。まるでカエ
 ルみたい。どうせ地獄へ行くんでしょう)

(ちくしょう、首がとんではもうだめだ。や

っぱりわるいことはできない)

うらめしげに、目をひらいたままの首を、

順をまつ女たちに投げ与えれば、大勢で撲ら
 れ踏まれ蹴りとばされて、ふためとみられぬ
 顔となった。

(そのまま晒されるのよ。お気の毒さま)

あたしは、もうどんなことがあっても助か
 らないし、刀の下でこう叫んでやった。

“さあ、バレット以上、できるだけ苦しめてか
 ら殺すんでしょ。情けなんかかけないで、好
 きなように料理してちょうだい”

(虹のようなタンカでしょ。こうなつては、
 ふてくされなくては恰好がつかないわ)

心にもない言葉は反感を買って、刃は頸すじでなく乳房に加えられ、無惨にえぐられてから、穴に首だけだして埋め、一番最後にまわされた。それまで苦しみが続くのだ。

（うそよ、うそよ。強がりをゆるしてね。ほんとは早く首を斬ってもらいたいよ）

三百余人の処刑は夜になってようやく終わった。完全に静まりかえった刑場は、却って不気味である。あたしは目をとじ、苦痛をこらえていたが、死をもたらし刑吏の近づくのを知り、ホッとして顔をあげた。

斜め下にさげた刀身に、月光をうけ、地上に首だけだしているあたしの姿がうつっている。蒼ざめた顔がすごいほど美しく、われながらホレボレと、みつめた。

（ねえ、こんな美女を殺すなんて、惜しいと思わないの）

“なにか言いのかすことはないか。もっとも痛くないように斬って、などは古いぞ”

さきまわりの間に、あたしは無言のまま首をふった。

（シャクね。すっかりころえているわ）

ふりあげた大刀を、ゴルフ・スイング式にたたきつければ、カッ！たる頸骨を断つ音と共に、地中からドボッ！と鳥賊の墨のような

黒い霧が、石油の如く噴きあげ、あたしは美しい首を横にころがして、十九才をもって大往生をとげるのだ。

“カッ！”

“ドボッ！”

（わあーん、姉さん。ひどいめにあったわ。）

やっぱりオンナは、おとなしくすべきね）

わたしは絞殺を宣告された真知です。いま目の前で、かおるに馬のりにまたがった刑吏が、両手で柔かい頸を、グイグイおしつけています。

やがて、咽喉のおくで、なにか押しつぶされるような不気味な音がしたと思うと、四肢が急になえ、動きをとめました。美女扼殺のすさまじい光景です。

果然とみつめるわたしの頸に、背後からいきなり、細いロープがひっかかりました。

クゥーと咽喉に食いこむロープ、キリキリと絞りあげれば、わたしは、なかば吊りあがって、いつのまにか背中合わせになった刑吏にかつがれてしまします。ちょうど、笹に通した鮭を背にする、熊のような恰好でしょう。

（鮭じゃないわ。かわいい女の子よ！）

苦しい！息がつかまる！ウーツ、ウーツとうめき声をあげ、足をバタつかせて、空しく宙をけるだけ。いたずらに指で咽喉をかきむしるうち、気はだんだん遠くなるのです。この、息を吸いたくとも吸えないことほど、ひどい苦しみはありません。御想像つくでしょうか。

（いやよ、死ぬのは。いくらなんでも早すぎるわ。わたしまだ十六なのよ）

そうだ！死んだふりをしてみよう。思いついたわたしは、四肢をググッ！とつぶぱり、激しくこきざみにふるわせ、グンナリとたれてみせます。千番に一番のかねあい、危くほんとうに絶息するところでしたが、幸いにその寸前、ドサリと地上に投げだされます。

（だけど、止めたなんて、首をチョン斬られたらどうしよう）

このまま死体置場に捨ててくれれば、のされる機会もありますが、そううまくは、いきません。こんな話し声が聞えます。

“オダブツかね”

“いや、すこし早すぎます。タヌキでしょうが、いじらしいから、このまま首をもうでやりますか。それとも…”

“かわいいそうだが、ためすんだな”

(知っていたの？意地わる！)

鼻の上に薄紙を一枚のせられ、必死でこらえるも及ばず、遂に大きく息をつけば、薄紙は宙に舞いあがります。

(さあ、締め直しね。覚悟はできたから、今度こそ完全に息の根をとめてちょうだい)

「よし、死んだ！」

この声と共に、わたしは白刃が左の胸に沈みこんでくるのを感じました。不思議なことに、苦痛はまるでありません。死んでしまつて、亡霊となったためでしょう。

(あらあら、やっぱり首はずすのね。どっちみち、助かりっこなかったわ)

釜うで。このおそろしい刑罰、話には聞かぬが、まさかわが身になるなど、夢にも思わなかった。しかも私は、特別に水からゆっくり煮られるのだから、たまったものではない。

美女の釜うでが見られる。これはまたとない機会だと、刑場におしかけた黒山の見物人は、私たちの美貌と、完全ヌード姿に、ことごとく目を奪われていた。

「あれが幸代だ。しなやかな、いい身体をしているね。えり足をみろよ、実に美しい」

「まだ、はたちだろう。惜しいものだ」

読唇術を学んだ私には、彼らの話が手にとるようにわかる。

(どお、すばらしいでしょう。このプロボーション、ヤツパリ私が一番ね)

準備された釜のなんと大きいこと。ひとつには八分目ほど油で満たされ、下からの焚火で、ふっふっと煮えたぎっている。

「生きながら煮るのはよして。せめて首を斬ってからにして」

悲鳴をあげるマツエの四肢をひとつに、それも背のほうにたばね、起重機で吊りあげようとする。エビ吊りだ。たまぎる叫び声。

(ムシの良いこといわないで。あんた、私よりずっと楽に死ねるのよ)

「ギャッ！」

と一声悲鳴をあげ、縛られたままの身体がピンと、ほんもののエビのようにはね、こぼれた油がボウと炎をたてて燃え、ジ、ジュウ！と煙がたちのぼるなか、再び釜の中に落下し、それだけであっさりくたばってしまう。

(はい、一チヨウあがり！)

三分後に起重機がうごき、釜のなかに浮いている、ほどよい狐色に変じた美女の死体をしゃくいだし、四肢を大きくひろげて晒し台におけば、あたりいちめん、もうもうたる湯

気があがる。

(まあ、なんてよい匂い。まるでヒナのカラ揚げね。あとで食べちゃうのかしら)

これは、私たちが本当は魔女ではないのではないかとのうわさがとんでいるため、全身を観衆の目にさらけだすことにより、魔女だから、こんな美しい体をしているのだという証明にするのだそうだ。

(へんなリクツ。でもいいわよ。きれいだっていうことにはかわりないんだから)

続いていずみ、ヨシコ、美智子と、哀れつぎつぎ一片のカラ揚げに変わっていくの最期。それでも殆ど即死だから、私にとって、はうらやましいかぎり。

(だけど、私が最高刑になったのは、あんたたちより若くてきれいだからよ)

私は、そう思うと、どんなひどい刑の執行をされても平気だという気になれた。

(ねえ、その見物席のおバタさん。そのお隣のチンクシャさん。羨ましそうな顔付きね。死刑にされないなんてお気の毒さま。まあ、せいぜい、この変てこりんな国で、みにくい女でお暮しなさいな。女の誇りもなしに……じゃ、バイバイ)

(完)

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なブレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はわ▽

全裸の女体立ち縛り

中河 恵子 略号△はわ▽
大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はふ▽

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はほ▽

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はあ▽

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はう▽

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はさ▽

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はめ▽

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はし▽

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はも▽

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はむ▽

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はめ▽

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へも▽

ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へさ▽

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へし▽

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へす▽

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△へせ▽

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へゆ▽

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△へた▽

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へち▽

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へつ▽

竹棒の胸絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へて▽

竹棒開股胸絞め縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へと▽

〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円

鼻責めと鼻孔大写真

大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円

竹棒開股苔打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円

後手吊りにもかく女体

川越美佐子 略号「くて」 五〇〇円

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円

逆さ吊りと足吊り

愛知 葉子 略号「つよ」 五〇〇円

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つの」 五〇〇円

麻里子の裸身をあばく

左近麻里子 略号「つね」 五〇〇円

柱に立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ

左近麻里子 略号「つに」 五〇〇円

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

両膝頭開股宙吊り

中河 恵子 略号「くち」 五〇〇円

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円

両手吊りに悶える女

中河 恵子 略号「くい」 五〇〇円

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円

両手万歳吊りにもかく

中河 恵子 略号「くむ」 五〇〇円

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円

雁字搦目縛りにうめく

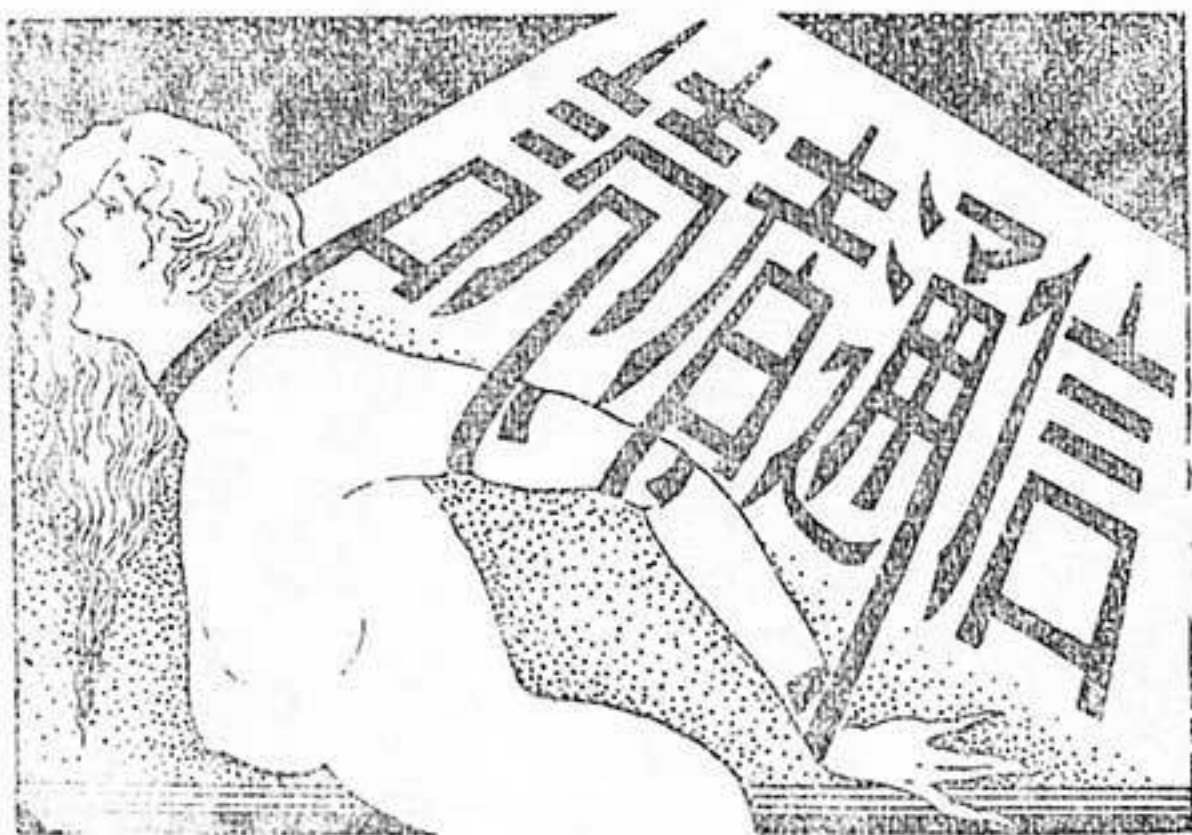
川越美佐子 略号「くと」 五〇〇円

八力月の妊婦に革具責め

増田みゆき 略号「へぬ」 五〇〇円

九力月の妊婦に首枷責め

増田みゆき 略号「への」 五〇〇円



○ 奇クを愛読されている女性の皆さま、お元気ですか。僕は奇クを読みはじめてから、まだ三年半ぐらいにしかならない駆出しです。自分でS傾向を持っていると気がついたのは、十七、八才の頃です。から、八、九年も前からです。三、四年前奇クを知ってから、それから毎月読んでいますが、僕は惨酷なのはあまり好みません。浣腸責めとかクスグリ責めなど、特に羞恥責めなどが好きなのですが、別にプレイをした経験ありません。

ので、まだ自分でも知らない面があるかも知れません。どなたか、奇クの愛読者の女性の方でプレイとはゆかなくとも、話相手か文通でもしてくれる女性を求めています。どうぞお便り下さい。

(千葉県松戸市・中塚弘)

○ 中宮栄さま。お手紙とお写真ありがたくお受けいたしました。厚く御礼申し上げます。私の声を是非聞いていただきたくお昼にお電話しましたが折あしく御不在とかで残念でした。私の声は電話を通じたら、凄く甘ったるくてチャームングだと言われておりましたのに。祖母が軽く中風で寝込んだと聞きましたので、明日、故郷へ見舞がてら帰ります。編集長さまから貴方よりのお手紙を頂きました。折、電話か手紙のどちらかを固く言われておりましたので、とりあえず、この通信を托して帰郷します。直接お便りしようかと存じましたが悪筆で恥しいので、次に帰宅しましたら、タイプで叩いてお送りしたいと思います。九月、十月は大体、故郷で過す予定をしております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(滋賀県大津市・中河恵子)

○ 小生、S的傾向を持つ24才になる一独身男性です。何か自分の欲求を満たしてくれる様な書物は無いものかと、神田の古本屋を歩き回っていたところ、一書店にて貴誌と初対面、パラパラとページをめくっているうちに「花と蛇」という小説が目にとまった。一人の女が高手小手に縛られ、無論、裸で尻の下に本の積み重ねたのを入れてあるカットがついていた。これはイカスと直感した。買おうとしたが値段が定価の三倍もするの迷った。結局、他の本屋で貴誌の一番新しい10月号を購入。カットのないのが残念でしたが「花と蛇」は真先に読みました。そして、この特集号の出ていることも知りませんでした。更に「花と蛇」に現われた羞恥責の類別」の中で脱衣、ポーズ、排尿、隠語、自慰等を読み、この物語のすべてを知りたく存じました。こんな素晴らしい小説が載っているのだったら何故もっと早く見つけなかったかと残念でなりません。団先生、どうか、凄い場面をどしどし書いて下さるようお願いいたします。

(東京・芝理泰三)

貴誌を毎月読み続けて、その発売日を首を長くして待っているファンです。限定版写真集は大体全部買い求めましたが次回作はどのようなものが出るか今から楽しみにしております。その登場人物は果して誰か。きまりましたら、ぜひ誌上で予告して下さい。出来れば左近さん、中河さん、大島さん達は必ず入れてほしいものです。それから外人女性のモデルさんはいないのですか。外人女のボリウムを日本風な縛り方で出してほしいです。例えばお座敷の中で縛られている外人の女性、或は日本式の庭園の中で縛られている外人女性。縄もいろいろ変ったものを使ってぜひ実現させてほしいものです。私は奇クに生き甲斐を感じておりますので、どうか末長く発展されるよう、祈ります。

(福島県猪苗代町・佐原元夫)

○ 十月号入手後、帰路急ぎ車中にページをめくっていると、中河嬢緊縛写真入りで、同嬢の「あすなろうの道」を見つけ、興味をもって読んでいきましたが、どうも不満に思う個処が出てくるようでした。Sである小谷氏との心ゆくまでのSMプレイを、Mである中

河嬢が書いたのであるから、当然大したものであろうと期待したのが間違いであり、又期待させるような写真が載っていないのだから止むを得ないでしょう。三度会って四度目に縛り、それもスリッパの上からでは小谷氏のSも頼りないものであり、又、緊縛を期待しながら下着にスリッパをつけている中河嬢も、どうかと思われま

す。勿論、家庭的に恵まれた環境の中で育った良家の令嬢であれば、止むを得ないかも知れませんが、自家用車を持っておられるのであれば、車中で小谷氏に会うまでに同氏に縛られやすいよう下着をとっておくべきでしょう。又、二人きりの間では、小谷氏は主人であり中河嬢は奴隷であり、奴隷として緊縛を希望して仕置をうけるのであれば、当然ある程度は覚悟しておるのではないですか。小谷氏も中河嬢と二人、この時は紳士であると同時に主人であり、遠慮は必要です。普通、私のようなSが考えることは、第一日は会う

◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中ですので、切手五十円同封

だけであり、双方、希望意見の交換を行い、四、五日後の第二回目の会う約束を行う。第二回目、会う時はSは主人であり、Mに奴隷として会うことになります。その際、第一回目の条件が気にいらねば行く必要はないが、約束通り会いにいった時は、双方条件を承諾したことになる。例えば、私であれば次のような条件を考えられます。(1)会う日時、及び場所、回数。

(2)奴隷の制服を何種類か決めておく。但し下着は一切不要。(3)中河嬢が良家の令嬢であっても、私と会っている時は奴隷であり、私は主人で命令は絶対服従。(4)緊縛あるいは責めに必要な道具は、奴隷が持つこと。勿論、私も持っています。(5)当日の緊縛並びに責めの希望を奴隷にも考えさせる。(6)緊縛準備体操を毎日、三回以上おこなうよう決める。これは、緊縛する時、もっとも効果のあるように、身体を柔軟にするために体操を考える。(7)私と会っている時の位置、態度、姿勢、その他、奴隷

の上、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号箕田京二宛御予約下されば完成次第第一号を直ちにお送りいたします。

として守らねばならぬ規定をつくる。(8)金銭上のこと。金銭上については何も出来ないが、勿論、私が主人である時の費用は主人負担です。まだ考えれば他にもあります。が、大体、右のようなものでこれを了解すれば第二回目には当然、緊縛にいくっていくものであり、下着を何もつけない中河嬢は全裸で主人の仕置をうけることになります。尚、奴隷としての装身具は、

その際、相談の上、考えておくべきでしょう。この際、中河嬢にいておきますが、身長一米五七で体重五十二キロは少し肥えすぎであり、緊縛準備体操を毎日くりかえし行えば、やせること間違いなしです。で、実施して見ては如何ですか。若し、小倉氏に引続き会うのであれば、右のようなことを相談してはどうですか。小谷氏も中河嬢に要求して実施すれば面白

いと思います。くだらんことを長々と書きましたが、中年男の話として参考になれば幸いです。(神戸市生田区・田中恭一)

ました。グラビヤ頁がなくなり非常に残念でしたが、内容は益々充実し毎号、面白い読物が掲載され発売日を首を長くして待つようになりしました。私は女性下着(パンティ、ズロース)に愛着を持っています。女性下着によるS・Mプレイの分譲写真をより多く出して下さるようお願いいたします。

(和歌山・伊藤 守)

○ 中河恵子様。十月号の奇クで「あすなろうの道」を楽しく拝読させて頂きました。今後このような作品をどんどん書いて下さいます。心からお待ちしています。私は奇クを読みだしてからまだ一年に足りない二十才になる若輩ですので、自分でプレイすることも同好の方を求めることも出来ません。私は貴女の作品を読んで大変感激いたしました。そして私は貴女のような方とプレイが出来たらどんなに幸福だろうかと思うようになりました。恵子様のお便りを誌上にてお待ちしております。是非お返事下さいね。編集部の皆様、呉々もお身体に気をつけて、私達ファンのために頑張ってください。奇クの発展を祈っております。(広島市・辻本貫二)

○ 奇ク読者の皆様、お交りありませんか。私は相当長い間の読者ですが、お便りを出すのは今回がはじめてです。自分でプレイを体験したことは一度もありません。いつも誌上で皆様の御活躍ぶりを見て、お便りを出して楽しんでおります。特に興味をもっているのは刺青と拷問です。拷問の記事はよく目にしますが、刺青の文章は余りお目にかかりません。自分でも拷問の道具はいろいろと考えていますが、でも試す機会がないので残念です。一度私のアイデアをクラブにのせてみたいと思っています。刺青は女性の刺青に興味を持っています。どなたか私と同好の方のお便りをお待ちしています。(神奈川県・高村須美男)

○ 長らく御無沙汰いたしました。私はたしか今から十数年以前の本誌に告白記を掲載していただいた者です。それ以来投稿はいたしません。本誌は毎月欠かさず拝見いたしております。私は女性の白い腋窩、そして黒々とした腋毛に絶大な魅力を感じていっているのです。実際に電車の吊革を握っているノースリーブの若い女性の腋窩を見

る機会も多いのですが、そういった腋毛の見える責め写真や、腋毛を見せて責められる女性を主人公にした小説なんかに関心を持っております。町陽一さんの作品に少しそういう傾向が見えます。アップで腋毛を見せて責められている美女のフォトを是非作成して下さるようお願いいたします。(静岡県・皆本其雨)

○ 貴誌盛々御発展の事お喜び申し上げます。さて私はK誌の熱心な愛読者でありS的なアヌスマニアの一人です。年は二十九才、妻は二十五才、一女の母ですが、現在の私の努力と飼育によって、すっかりアヌスファンになり愉快な夫婦生活を楽しんで送っております。初めのうちは苦痛ばかり訴えていましたが、現在ではもう苦痛どころか、大いなる歓喜の声を挙げています。様になります。すっかり私に協力してくれています。私の飼育過程を一度文章にして投稿してみようかと思っております。(愛知県・北川 進)

○ 初めてお便りします。奇クを読みはじめて二年になる一青年です。奇クに於ける数々のSMプレ

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八ても

ボリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らしい真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

イの内で私が最も興味をひかれるのは浣腸です。浣腸に関する記事はどんな短いものでも私の注目をひきます。最近では読むばかりではなく、私も一度、女性に対して浣腸を試してみたいという気持ちでいっぱいです。今までは古い奇クの浣腸記事を読みあさって、その欲望を満足させてきましたが、最近ではどうしてもそれだけでは物足りず、こうしてペンをとった次第です。そこで都内にお住いの女性の方で、他人の手で浣腸されたいという方、又は浣腸マニヤである方、一度私とプレイをいたしませんか。お互いの欲望を浣腸プレイによって満足させたいと思います。二十四、五才ぐらいまでのなるべく若い方とのプレイを希望いたします。どうか浣腸に飢えたる女性の方、誌上にて御連絡下さい。お待ちしております。

(東京都渋谷区・J・M生)

「奇ク」愛読者の皆様、初めてお便りいたします。私が「奇ク」を初めて手にしたのは、中学三年の頃でした。それは高校入試勉強の為に参考書を買おうと、ある本屋へ出かけて行きましたが、適当な本が見あたらず、なんと

く手にした本を、店員や他の客に注意しながら開いてみますと、まづグラビアが目に入り、その瞬間、私の体内のどこかに、何かが強く植つけられ、それ以来……といった所から、私のザディストとしての性格が現れ始めたのです。「奇ク」を愛読し始めて七年、即ちS・Mファンになって七年であり、まだまだ少年期といったところですが、私は、まだプレイした事がなく、一人で「奇ク」を読み、満足しておりましたが、最近、読者通信欄を見ておりますと皆様の色々な活躍がありありと目に浮かんできます。ぜひ私も皆様の仲間の一として戴ければと思います。ペンを走らせて居ります。私は、浣腸、吊り責め、鞭打ち、妊婦に対する草具責め等が好きであり、特に浣腸は最も好むところです。十月号の「甘い羞恥」は幾度も読ませて戴き、一度でも大島照代さんのような人と浣腸プレイを行ないたいと思って居ります。なにぶん、まだ初めてなので、できれば写真、プレイ等を見せて下さいませんか？ 申し遅れましたが、私は二十一才、大学三年、田舎から出てきて居りますから友達もあまりありません。吊り責め、鞭打ち

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れよ▽

羞らしいの股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れに▽

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れや▽

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れゆ▽

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れえ▽

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れぬ▽

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れぬ▽

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れの▽

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れむ▽

柱縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やか▽

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やき▽

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やく▽

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やも▽

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やし▽

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やみ▽

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号△なる▽

等の拷問、また浣腸、「花と蛇」等の羞恥責めのファンの方、お便り下さい。

(東大阪市・原田 進)

編集部の皆様を始め、皆様お元氣のことと存じます。久しく御無沙汰致しましたが、私も相変わらず

毎日の生活を元気に過ごして居ります。最後にお便りをしたのは、もう二年も前でしようか。早いものです。辻村様にも随分失礼なことを申し上げたりしましたが、あの頃は本当に純粋にぶつかっていたつもりだったのです。改めて、失礼をお詫び致します。その

後、自分の本業である勉学に励み、今も意欲をもって勉強が出来ることに大変満足して居ります。そういう訳で、決して忘れたわけではなく、冷却期間をおいてもう一度、こういったものを考えてみようと思つて奇クから離れていたので、私自身心身共にやっと大人になれたという状態で、皆様から見ればほんの子供でしょうが、私なりに理解を深め、自分の道を考えているつもりです。二年後に見た奇クの健在ぶりは、私を大変嬉しくさせてくれました。紙質もよくなり、内容も、幾つかの力不足の作品はあつても、それを補足して余りあるすばらしい作品があり、これからの発展を期待させるにふさわしい感を抱きました。新しい方にも随分お目にかかり、「旧きも新しきも」という皆様の御活躍に心から敬意を表したいと思ひます。二年の間に考えた事を書き述べてみたいと思つて居ります。では皆様の御健康と御活躍を祈り、この辺でペンをおかせて頂きます。

(東京・T)

前略、残暑永くきびしいみぎりいかがお暮しですか。奇譚クラブを読みながら元気で働いておりま

す。それもかくいう読み物のあればこそ、暑い日中も苦にせず働き家に帰り読書を楽しめるといふことです。私はゴムマニヤでして、「異」津田亜紀子(十月号)など特別に好きです。五年ほど前から津田亜紀子さんの告白物からして大変なファンです。今後とも、なるべく多く書いて下さるようお願いいたします。

(呉市・阿賀町・S・M生)

十月号を入手するのに、とても骨おりました。七・八・九月号を買い求めた店へ行くと五冊ほどあり、丁度その時は友人の家へ行かなければならず、帰りがけにと思い、友人の家でも心のはずむ思いで、意は遠く奇ク誌にあつて、そこそこ引きあげました。この間六時間ほどでしたが、無い！五冊とも無い！宙に浮いたように消えてしまったのです。それから都内の書店を十数軒、探し廻り、やっと見つけ家に帰って好きなものを読みあさりしました。こんな苦勞をするなら予約購読と思うのですが、父の都合で絶えず転居続き、それなりません。それにしても驚くほどの人気です。六時間で五冊売れてしまふ、きつと隠れ

た読者が多いのでしようね。このぶんなら、奇ク誌は益々発展、喜ばしいかぎりです。ただ、おむつの記事がなかったのが少し残念。黒淵嬰一氏の「海しよの譜」は私は別に女性を殺すのに興味を持ちませんが、気になる箇所がありました。九月号、一三六頁「東京では……」以下の節。氏は、どこからその事実を握られたのか。また、それは真実なのでしょうかと、いうのは、第二次世界大戦はコミンテルンの陰謀で、日本ではそれから指令を受けた尾崎秀実が、政府、軍部を操ったという説があるからです。コミンテルンの意向としては、日独と英米を長期戦に追いこみ、いずれが敗れるにしても、その国で共産革命を起させる腹だということ。そのために日本と中国政府との間で一度芽ばえた停戦の話を粉砕し、中国と日本を長期戦に追いやったということですね。詳しくは「戦争と共産主義」三田村武夫著、民主制度普及会、に記されています。いずれにしても面白い話です。そう言えばドクトル・ジバゴでも、共産主義者が敗戦革命へ導くために、自国の軍隊から一箇師団を骨抜くといううなことが描かれていました。奇ク

は面白いと思います。その面白さは、嫌味のない面白さです。私は同じような他の雑誌も二、三種類知っています。が奇クと他の雑誌では、どこか違っています。奇クを読んでも残虐性や卑しさを感ぜず、かえって仄かな清潔さを感じて身包むようです。きつと、これだけ編集部の方々が気をつかい苦勞しているからでしょう。良い傾向だと思います。奇クの愛読者には各々の性向があります。できれば、これらの性向の一つ一つを各号に洩れなく載せていただくと嬉しいのですが。夏も終わりました。涼しさに向つての頃、編集部の方々の健康をお祈りして筆をおきます。(東京都・井上俊彦)

前略、奇クの存在を知ってから七年ばかりになります。読者通信で、多くの人が多くの人と便りの交換を楽しまれていることにより同好の方の存在が、こんな私にペンをとらせました。過去、何度か何人の方より充実した生活のために、より多くの人と手を結ぼうとされ、その後、どうなったかは私の知るところではありません。一人のM女性の出現に多くの男性が我も私もと押しかけたのではたま

りません。多くの人は、さびしく手をひかねばならないのです。又このような本の愛読を人に知らせたくても出来ない多くの人がいると思います。そこで私は提案します。何人かの人が試みようとした読者会なるものの結成を今一度やってみたいのです。一人の楽しい友人と語るのもいいでしょう。また、御夫婦だけの楽しみでもいいでしょう。そんな人達は、それでいいのです。相手のない多くの人がある人を求め、従らに心を乱します。一人ぼっちの読者の方、話し合いませんか。物いわざるは腹ふく……。男女、年令とわず、ふるって編集部宛、書いて下さい。第一回会合で終了となる会にはしたくありません。御協力を。私は東京に住んでいますので、東京近辺の一人ぼっちを捜しています。又、東京に、こんな会がありましたらお知らせねがいます。

(東京・一人ぼっちのミグマ)

私は、ここ数年来、奇クを愛読している者です。今まで地方に住んでおりましたので、なかなか手に入り難く、月に一、二度、大阪へ来たとき書店で求めて来ました。私は特に女斗美に関心が強

く、奇クを手にして先ず女斗美関係の読物を一番に探します。一瞬に勝負の決する女相撲も大好きですが、それよりも原口氏の書いておられた女斗図「乳房責」或は「倫子と郁子の血斗記」のように、女性が無体で長時間にわたって格闘し、一方が力つきて敗れるとか、最後に急所責(乳房責等)で勝負が決するようなレスリング形式の女斗美記事を、これからもドシンドシのせて頂くよう、女斗美ファンとしてお願い致します。分譲フォトもぜひ分と女斗美あるいは乳房責めのものが広告されていますが、残念ながら今まで注文したくとも出ない事情があったのです。大阪へ来て九、十月号を手に入れましたが、女斗美、乳房責の分譲フォトが出ていません。しかし打切りとも書いてありませんので、一応別紙の如く注文いたしました。折返し御発送をおねがい致します。

(女斗美愛好生)

一人、S・Mの世界を描写して止まぬ(たとえそれがどんな形にせよ)奇クが存在価値を貴社の努力と高く高く評価し、心から感謝し敬意を表しています。グラビヤの分を何とかカバーしようと、毎

月の奇クに見られる貴社の努力にも敬意を表します。これが現在の奇クを支えているといっても過言でない。SMカメラ・ハントとカメラ・ルポが、最近とみに充実されてきたのを何より嬉しく思います。そして毎月、新しい若々しい美しいモデルの登場は、私々を奇クの発売に釘づけし離しません。新しい方からいって、左近麻里子、青柳千紗、中河恵子、ローズ、秋山、新庄美子、河森真理子、川越美佐子と興味はつきません。また団鬼六氏の談義、スナップ・フォトは我々を映画館へさそいます。ただこのところ限定版の写真集が約一年、全然発売されていないのは、どういうわけですか。カメラ・ハントに登場したモデルの特集号などドシンドシ出して下さい。とにかく我々の残された、こよなき愛人奇クの変らぬ発展と充実をしんぼう強く、力強く支持します。

(亀井美紀夫)

残暑きびしき折ですが、編集部の方々、及び読者の皆様ごきげんいかがですか。私は十年以上、貴誌の愛読者です。SとMに加えてゴム・フェチです。特にオシメカバー愛用者で、これまでも分消

費したものと我ながらあきれています。貴誌の愛読者で私同様オシメカバー(ゴム製)ファンが多々いることと存じますので、編集の方々にお願いなのですが、フェチ特集号を近く編集していただけませんか。勿論、内容はオシメカバーを含み全フェチ特集号で、出来れば五〇〇円以内で発売していただければと思います。編集部の方、オシメカバーファンの皆々様の御意見いかがですか。最近の貴誌にはオシメカバーの記事が少いので物足りないのですが、九月号の原さんの「あるレッスン」の美しい文章、つまりオシメカバー文学とでも申しませんか、ソフトタッチな羞恥文に魅せられました。原女史にお礼申し上げます。と同時に、今後とも我々ママニアのために麗筆を期待しています。それは私独りではない筈です。それから神戸の大西さん、山本さん、名古屋の水城さん、近頃読者通信にお便りがありませんが、いかがですか? 次に最近の貴誌ではMバンドの安田氏の「フェチの海水浴」や並川氏の「美女拷問考」鈴木氏の「母子契約」などは力作として拝見させていただきまして。さて、四十才ぐらいの

独身女性の方で異性とカバールプレイをしたいと考えていられる方がいらっしやいましたら、私と一度会っていただけませんか。お互いに秘密は守り、貴女の御希望の通り責めや恥ずかしめを満足させてあげますがいかがですか。貴女様御愛用のオシメカバーを着用し、同スペアを持って高知市堺町県交通バス待合室にて十月中、毎月曜日十二時より十分間お待ち下さい。目印に女性週刊誌を○型にして必ず白ハンカチにて結んでお待ち下さい。こちらから声をかけてあげます。では編集部の皆様、マニアの皆様よろしく。

○(高知市・丸沢 始)

妻の飼育を始めて五カ月に入りました。二十二才、中背、固肥り、色白、乳房標準、臀部極上。妻の大まかなデータです。当初は不馴れのためか、強度の緊縛に苦痛を訴えた妻も、その甲斐あってか彼女のM虫が目覚めたのか、幾重にも及ぶ胸部、腹部、股間への緊縛責めにも耐え得るよう成長して参りました。深夜、ダブル・ベッドの上で、悶え咽びなく縛姿に、私のSの炎も怪しく燃え上っていく新婚の夜です。妻は浣腸に

は殊の外、興味があるらしく、時には私を緊縛の上、棒状の物で私の臀部を責めさいなむのです。結婚当初は無垢そのものだった妻も最近では緊縛映画を観に行こうだの、開股ソーセージ責めを自ら口にするようにさえなりました。妻の今後の成長がたのしみな毎日です。月々の通信欄をみますと、越後人の内向的人間性のためか、新潟県からの通信が少なく、残念に思っています。長岡市から二時間以内の読者の方、出来れば御夫婦の方か、女性の皆様、通信下さい文通やプレイ交換の機会を持てましたら幸せかと思えます。十月号の美川芙美子様の通信文を読み、つくづく奇クの存在価値といったものを感じた次第です。辻村、山本両氏の御活躍を期待しております。出来ませうれば、御両人の夫婦プレイ・ルポでも特集して頂ければ、この上ない喜びだと心持ちにしております。

○(新潟県南魚沼郡・塩沢雪人)

私の一生の夢は女装です。現在夢の中で苦しい毎晩を過しています。すてきなブラウスを着て、スカートをはきたい。もちろん下着から完全女装です。そしてエプロン

を着て、お買物をしたり、お台所の仕事やお掃除、お洗濯がしてみたいのです。このようなことを考える毎晩です。女性の服装雑誌を買ってきて見ていると、とても楽しく時のたつのも忘れます。高校生の時、セーラー服を着たくて女学生になろうと考えたこともありました。今でも電車の中や町で女学生を見るとたまりません。長そでの白いブラウスにジャンパースカートを着てもすばらしいです。またオフィスガール姿も好きです。事務服を着て短いタイトスカートを着て、お茶くみやお掃除等をしてみたいのです。このようなことを考えるのは、私はすでに「異常性格者」なのですが、友人には、とても想像もできないでしょう。外面的には明るく真面目に毎日仕事をしている普通の男なのです。から。月一回、又は二カ月に一回でも、このようなことが実現したならば、私はこの平凡な人生にすばらしい生きがいを感じることでしよう。興味のある方、お便り下さい。返事は必ず出します。特に女性の方おねがいします。小生二十八才独身です。(東京・愛好者)

○十一月号の女斗彦様の無惨女斗

美模様「裸女血笑」は素晴らしい読物でした。モデルとされたのは、「紫練の眠狂四郎」と直ぐわかりましたが、たくみなアレنجにより、ふんどし一丁の大和撫子、美穂代が、五人の紅毛女刺客を血祭りにあげる描写は全くすばらしい黒田氏の作品とは異なった持ち味で楽しませてくれました。敗戦以来つづく日本人の外人コンプレックスを吹きとばすばかりの思いをしたのは、モデルにされた異人女の姿をグラマラーの外人スターに直ちに連想することが出来たからです。肉体美を誇示する異人女体が楚々たる風情の大和撫子の白刃に次々に血祭りにされる条りは、手本があったとはいえ、美事な書きぶりでした。特にエルケが血祭りにされる条りは、全く裸女血斗マニアにとっては素晴らしいものでした。女斗彦様の今後の健筆をファンのとして期待しています。

○(東京・KK生)

うれしいね、実にウレシイ、森田悦子さんのように若い女の子が奇クファンだって、僕と同じ年ぐらいでしょう。これで僕も勇気がわきました。変ないい方かな。実は新本の本屋で奇クを買ったこ

とがないのです。たいてい古本屋
それも二、三月おくればかり。で
もこれからは、何とか読者の皆様
方に追いつきたいと思ひます。そ
れから森田悦子さん、いや悦子様
たぶん、貴女には多くのお誘いが
かかると思ひます。……僕じゃ、
だめですか。僕も何も知りませ
ん。でも若い二人が考えてやれば
きっと素晴らしいと思うんですが。
それに十月号に投稿された西宮の
松田夫妻みたいな方に御指導ねが
えれば、きっと素晴らしいプレイに
なると思ひます。では吉報をお待
ちしております。

○(大阪・山田吾郎)

灯火親しむ候となり、ますます
読書の楽しみを増すようになりま
した。大阪の森田悦子さん、名古
屋の川村順子さん、十月号で拝見
しました。小生は、過去数年来、
昭和三十二年より奇クを愛読して
参りました。勿論、当時は年少の
ため、書店で買う時など、いささ
か気がひけた感じでしたが、今日
では発売される日が待ち遠しくて
なりません。また最近号におきま
して「花と蛇」や「復讐」など、
小生にとって、これほど楽しい読
みものはないと思ひます。愛しい

が上にそれだけ痛める男心、本当
に表現できにくいほど素晴らしいも
のであると思ひます。こう言えば
私は、かなりのSと思つていただ
けると思ひます。そうです、私は
美しく、しかも愛する、いとし
人を十分、自分なりの方法でプレ
イしたいのです。こんなことを申
しますと、相当、経験ありと思わ
れるでしょうが、現在まで一回し
か経験はありません。それで誠に
恐しゅうですが、ぜひ一度お逢い
して、お互いに理解しあえるよう
な楽しい夢園にしたい、お手紙を
書いた次第です。そしてお互いに
同好の友として末長く喜びを分か
ちあひ、助力しあつて楽しい人生を
送ろうではありませんか。申しお
くれましたが、私は当年三十才、
結婚はしていますが、絶対、迷惑
はおかけいたしません。京都の百
貨店に勤める真面目な男性です。
最後に奇クの今後の発展を心より
祈り上げます。

○(京都・サド愛好生)

私は、はじめてお便りいたしま
す浜野隆一という二十二才の会社
員です。奇クを愛読しはじめてか
ら一年ぐらになります。私の便
りを載せていただければ大変しあ

わせに思ひます。どうかよろしく
おねがい申します。十月号の名古
屋の川村順子さん、貴女の便りを
読みました。貴女のような気持は
多分、通常だけにでも持っている
欲望だと思ひます。縛りたい、縛
ってもらいたいと願っている人は
沢山いますが、もしそれを行動に
移すとすると、なかなか機会もな
く、勇気もあるものです。どうか
それを行動に移すチャンスを私に
与えて下さい。勝手ながら、差し
つかえなかったら、私に手紙を下
さい。心よりお待ちしております。
す。女性の中にも男性に縛られて
いたく、思いきりいじめてもら
いたいと思つている人がいると思
ひます。私は小さいときから女性
を縛りたいと願ひながらも、今だ
に実現していません。女性を裸に
して縛ってみたいというのが、私
の一生来の願望です。世間の人
は、それを変態と呼ぶかもしれませんが、
せんが、私はそうは思ひません。
縛られている女性が女性美の最高
だと思ひます。たぶん私の気持を
理解して下さい。M女性が必ずい
るというのを確信しています。そ
ういう女性の方の理解あるお手紙
を心よりお待ちしております。

○(藤沢市片瀬・浜野隆一)

冷秋の候、皆様いかがお過しで
しょうか。過日、久し振りに奇ク
を手にし、早速、一筆差し上げま
す。約一年ぐらいたんくがあり
ます。ここ三カ月分の奇クを拝見しまし
たが、いかにも安定したという気
がしております。我々のまわりの
変容、混沌といったものを感じる
時に、奇クの如何にも一定の方向
にまとまっていくなを感ずるの
は、おかしな気さえます。こうい
つた傾向の顕著なあらわれとして、
私は夫婦プレイというものと、M
男性の性向の画一化ということ
を感じます。ここでは、くわしいこ
とを述べることは避けたいと思
ひますが、十月号を読んで感じたこ
とを述べたいと思ひます。最も印
象深く、私自身が暗に期待してい
たものをさらけ出してくれたのが
トップの「憎悪の記」です。編集
部の方々が御期待されるように？
こういったものこそ、取り上げら
れるべき問題であり、SMの美を
いかにも、もったいぶってとかれ
る先生方の言葉より、さらに人間
の本質を探るものであると思ひま
す。ここにあらわれた女性の言葉
は、或は人間が本来、SとMの性
向を持つと云つて真面目な顔をし

て唱え、信じこんでいることの、偽りを述べているのかもしれない。どうも、文章に自分の気持ちがうまく表わせません。ともかく私達、もう一度、こういった問題意識をもつてみる必要があるではないでしょうか。以前のSM論争のような活気ある声がでてくることを期待しています。いつもながら辻村様の、いかにも人間的な（失礼ないい方かもしれませんが、お許し下さい）姿が、サロンの楽我記にも、カメラハントにもあらわれていて、ますます尊敬（？）致します。他に興味深く読ませていただいたものとしては、河本光三氏の「大島照代との顛末記」（これは前宣伝がきいていて、どなたも是非読みたかったものの一つと思います）千葉青鬼氏の「復讐」中宮榮氏の「夜の徒然草」など。それから、もう一つ通信の中の北幸一さん、私も二、三年前、同じようなこと書いたような気がしますが、こういった考え方をされる方が、もっと多くならないものかと思ひます。多分同じスネカジリと思ひますが、もしこれからこのような考え方を続けられるのなら、同じ東京のことでもあり一度、気軽に話が出来ればと思ひて

おります。

（東京練馬・泰）

○

小生、二十七才になる自動車セールスをしている独身青年です。私は今年の春、パーティでK化粧品会社につとめるマネキン・モデルの京子様と知り合い、何回かデートをかさねてまいりました。そんな或る日、突然、京様が、おもしろいものを見せるからといって、私をアパートに連れていかれました。そこで私が見せられたのが奇クだったのです。最初はページを開いて頭にカッと血が登るほどの強い印象を受けましたが、何冊か読まされている中に胸が高鳴ってくるのを押さえることが出来ないほどの興奮を覚えました。特にMの読み物には全く心を動かされ、京子様にまで心中をみすかされてしまい、そんな私に対して京子様は奴隷にならないかといわれました。私は、その場で嫌おうなしに京子様の奴隷になることを誓い、京子様から往復ビンタと唾を吐きかけられ、持っていた給料全部、京子様に差し上げ完全に服従したのです。それからというもの毎朝、京子様のアパートに通い部屋の掃除からはじまって、多種多様に御奉仕させていただくので

中河恵子新趣向写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト
片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

乱痴騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号△とは▽
中河 恵子

す。日がたつにつれて京子様の女王様ぶりも、だんだん大胆になり人前でも平気で私をののしられ、道端に土下座させられたり、お友達の前でビンタされたり、御一しよに私をなぶり者になさいます。ところが秋になって突然、京子様より結婚するから他の女王様を探せといわれ、泣く泣く私は最後の

御奉仕をさせていただき、お別れしたのです。それからというもの、第二の京子女王様の出現を願いつつ、日夜なやみつけづけてまいりました。どうか、こんな私でも御使用いただける女王様がいらっしゃいましたら、一日も早く憐れな私をお救い下さい。奇クの御発展を祈りつつ。

(東京都中野野方・山田五郎)

私は極く最近、貴誌を愛読し始めたものであります。十月号、二十四頁、山田佐一氏の「特製下着カタログ」は、特に私を魅了いたしました。と申しますのは、女装の趣味があると同時に生理バンド、おしめ並びにカバー等を装着することに、この上ない魅力を感じますし、最近、貴誌を知ってからは浣腸にもあこがれを感じております。二十四頁、後半の「OSM一人遊戯用下着」の「女装できちんと正装されて……あなたは迫ってくる苦痛にスカートの裾を乱しながら、ついに……」等は、日毎くりかえし読んでは、若しそのようなことが出来たらと思ひ、その場面を思い浮かべて独りピンクのネグリジェの胸を押えております。そして遂々我慢できず恥を忍んで、通信にこの便りを綴ってしまいました。そして又、一方もし通信欄に載ってしまったらと、恐れるような気も致します。貴方愛読者の方の中には、このような私の恥ずかしい趣味に御理解を持たれる方もあるのではないかと存じます。もし私のひそかなあこがれに御協力頂ける方がおられましたら

ら御連絡いただきたいとねがっております。ただし、勝手ながら昼間の仕事における私の立場等を考へますと、固くお互いに秘密を守って頂ける方でないとい御交際できかねます。私は四十才の男性で仕事の関係上、週日はほとんど東京におりますので、都内にアパートの一室を借り独りで住んでおり、気がねなく御交際できると存じます。なお、若し可能ならば読者の「紅かほる」様のお便りでも頂ければ幸いと願っております。

(東京都中野区・N生)

貴誌御一同様、いつも楽しく拝見しております。私事で恐縮ですが、最初に自己紹介を致したいと存じます。ブランドイと煙草と原稿用紙さえあれば好きなSM小誌を書いてごきげんに生きられると信じて、目下、本格的なSM作家を志望し勉強中です。つけ忘れまして。二十四才のオールドミスです。ある雑誌社を退め、横須賀の伯父に養女として引取られました。が、事情あって帰阪。以来、次々と事業に手を出し、見事に失敗に終りました。現在は、週刊誌や新聞などにくだらない記事を書いて身すぎ世すぎの片手間に、来年の

秋予定の渡仏費を貯えている次第です。私がSMに興味を覚えたのはまだ小学校の頃、その頃の時代劇映画の中で、縛られた女体を美しくスクリーンに登場させた「めくら狼」を見て、その美しさに魅せられてからだだった、と記憶しています。しかし、本格的にSM作家を志したのは二十才の時、この物語「白い玩具」のヒロイン、八重という女性に逢ってからです。私の体験が書かせた作品ですが、全部が事実ではありません。八重に、理想とするマゾ女性を加味して書きあげてみました。第三巻までになるとありますが、とりあえず送らせていただいた次第です。幸いにも、この作品が取り上げられる場合、事前に御連絡下さい。是非お目にかかりたいと存じます。できれば、辻村様か編集長にと厚かましく希望致します。また縛られ苦悶する女体を見ていると抱き締めたい衝動にかられる私はやはり、レスビアン主義者かも知れません。それも、友人にホモやレスが多いためか、自然に認める結果になったと申せましょう。来年予定のフランスは、同性愛の本場、今から楽しみにしているのです。また外国のSMもつぶさに見

て、将来の作品にプラスにしたいと思っております。しかし、男性に興味が無いわけではなく、自由奔放、明朗活発が信条の私に、男性に従い尽すなどという女らしさはないと、あきらめている次第です。まったく、くだらない自己紹介になってしまいました。が、お許し下さい。今後、よりいっそうの御活躍、御発展のほどを、貴誌愛読者として期待すると共に御一同様の御健康を心よりお祈り致します。

○

(大阪・清原麻耶子)

安原さゆりさん。貴女の通信を拝見しました。ぜひ貴女の肉体を私にゆずって下さい。小生、三十才になるサラリーマンですが、十分信用していただける地位にいるつもりです。あなたが、逆吊り鞭打ち、浣腸などがお嫌いなら、それ以外の徹底した羞恥責めを味わって下さい。あなたは、私の前で始めから、生れたままの姿にならなければなりません。私の命ずる恥ずかしい姿勢をとり、奴隷の身体を隅々まで検査され、批評されます。私は縄や鎖も用意します。がなるべく、あなた自身の手で自分の足を抱いたり、尻を晒したり、羞恥に満ちた恰好をとらせて

秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女

大手札四枚一組 略号 (たな) 五〇〇円
ローズ秋山

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号 (たに) 五〇〇円
ローズ秋山

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 略号 (たぬ) 五〇〇円
ローズ秋山

股間縛りを熱演する

大手札四枚一組 略号 (たの) 五〇〇円
ローズ秋山

女馬を調教する男

大手札四枚一組 略号 (たか) 五〇〇円
ローズ秋山

尻帆立て縛りの実演

大手札四枚一組 略号 (たき) 五〇〇円
ローズ秋山

秋山式縛りに喘ぐ女

大手札四枚一組 略号 (たけ) 五〇〇円
ローズ秋山

熱帯は柔肌を焦す

大手札四枚一組 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たあ) 五〇〇円
鞭と羽毛の擦り責め

早縄術を披露する

大手札四枚一組 略号 (たら) 五〇〇円
ローズ秋山

急所縄に慟哭する女

大手札四枚一組 略号 (たお) 五〇〇円
ローズ秋山

熱気を帯びた実演

大手札四枚一組 略号 (たそ) 五〇〇円
ローズ秋山

強烈な緊縛プレイ

大手札四枚一組 略号 (たさ) 五〇〇円
ローズ秋山

弄られる緊縛女体

大手札四枚一組 略号 (たし) 五〇〇円
ローズ秋山

鞭と縄に追われて

大手札四枚一組 略号 (たす) 五〇〇円
ローズ秋山

◎お申込みは、大阪市阿部野局私書箱第14号 箕田京二へ

みたいのです。十一月七日(火)十時半頃、国電お茶の水駅の秋葉原より改札口を出て、聖橋の中央附近に立って下さい。目印に「女性自身」を丸めずに、表紙が見えるようにして持っていて下さい。時間正確にまいります。とこ

ろでああなたの売値は幾らか判りませんが一万円ほどなら如何ですか。それ以上でも相談にのれるとは思いますが……。ぜひ、あなたを数時間でも買いたい、あなたに金で買われた女奴隷、人間の扱いを受けない素裸のメス犬としての

悲哀を味わってもらいたいと思います。(東京・吉崎一信)

○ 小生、奇クを愛読してから二年余りになりますが、常に私生活の一部に少なからず夢と希望を与えてくれます。私はM性に強い願望を抱く二十七才の独身青年です。身体は強健ですし、容姿の方も十人並以上であると自認いたしております。毎日の実生活が充実している反面、自分のM的衝動を押さえるのが私の唯一のなやみです。時々がまん出来なくなりますと、なじみのキャバレーや、バーに出かけていき、酒をのんだ勢いで、顔なじみのホステスに自分の欲求を満たしてくれるように頼むのです。その際も余りドギツク、奴隷にしてくれ”というわけにいかず店の中で、なるべく他人の目につく場所で男として恥さらしにしてもらうのです。特に、この私のM性をよく知っている数人のホステスは、おもしろ半分私のところに来ては、ビールの中につばを入れてそれを私のませたり、直接口をあけさせてつばを垂らしこんでくれたり、よってたかつて顔中につばを吐きかけたり、ほとんどがつばによる責めで、中にはビン

タや椅子の下にひいてくれる女性もおりますが、なかなか願望がかなえられませんが、まだまだ私のM性は、ごく初歩のものであると思えます。奇クの愛読者であられるS女性の皆様方に、この誌上をお借りして、私の理想の女王様になっただけよう、おねがい申し上げる次第でございます。お便りをいただければ、直ぐ御指定の場所へ参上いたします。プレイでも、グループで私を奴隷として御使用いただいても結構です。勝手なことばかり書き並べましたが、一日も早く素晴らしい女王様が現われますことを夢に思いつつペンをおきます。(東京中野・寺田)

○ 黒瀬さん、十一月号に「日本婦人部隊奮迅録」が見られなかったのは残念でした。「晴嵐の譜」からは始まり、日本の歴史上の最大の出来ごとであり、維新以来の転機となった太平洋戦争が、ほんの一つの歯車が噛みちがったなら、たどったであろうと思われる一つの可能性を想像させる異色作でした。特に「海しよの譜」は心憎ささを感じさせます。若い女性の緊縛や責苦を配しながら「想像される歴史的事実」を、これほど刻

明に記述される筆力に感心します。本誌向きの緊縛を取り去って興味深い読物です。レキシントー床下で十八万馬力の全力回転—三万三千噸の鋼鉄—。一式陸攻—インテグラル油槽—十二・七耗一発—古鷹の搭載魚雷誘爆。駆逐艦、天霧が三十節でP・T・一〇九号を割り割った雷速四十九節。九三式六十一糎魚雷百二十本の開進射線網。重雷装巡洋艦、北上、大井。ミシシッピー級の五十口径砲等々。深い知識と精密な構成には全く感服します。中部太平洋の艦隊決戦に続き、次は印度解放か豪州進攻かと、心待ちにしています。貴方としては先年の「アリアドネ」が快心の作かも知れませんが、ぜひとも婦人部隊の続編をまとめてください。これを読んで想い出したのは、昭和十二年頃か「日の出」の別冊附録として「日米戦未来記」があり、小学生のくせに読みふけりました。それにもマーシャルでの艦隊決戦がありました。帝国海軍の伝統、夜戦でサトガを撃沈、など。ただ惜しむらくは、力作がたとえ編集の都合とはいいながら分割されたことです。若し十月号だけに集中していたら一層に光をそえたと思われる

だけに、惜しいことでした。願わくは、奇クを飾る異色の健筆と、黒淵さんの御自愛を。(山口広)

最近、また物価が消費者米価を始めとして値上りしそうな気配です。それに伴い、奇ク旧刊号が便乗値上げをしなければと心配でなりません。そうでなくても経済法則から、また禁制品周辺にあるものとして高価なものになりつつある奇ク誌です。編集部の皆様は政治家ではないのですから、こゝらで読者のために何とか善処しては……旧刊号のダイジュスト版を発行するとか、また適当な嗜好に応じての各種特集号を出版するとかいろいろ手はあると思います。一部書店と結びついて？ 読者を無視しては、国会のなすことと同じです。私が奇クを知ったのは二年前、古本で六百元、現在ではその本も千円以上、土地価格をしのぐ上昇ぶり、まさにあれよあれよと思う間の出来ごとです。私一人の意見ではないと思いますので、よろしくおねがいいたします。ところで最近の朝日新聞に次のような一文がのせられてありました。「中古衣類を善意のオムツに」水害地の被災地から、人の肌にふれ

た中古衣類をもらうのはごめんだとの声をきくけれど、千葉縣市川市の国立国府台病院に勤める看護婦の深谷大子さんから「私のところでは重症患者に紙オムツを使おうとすると、家族に負担をかけまいと、ひどく気にする。木綿ならどんな古いものでもオムツにほしい」と小児科以外でもオムツの必要な患者は沢山いるとの便りがあった。毎年、秋にオムツの供出運動をして都内の施設などに贈っている東京善意協会にきくと、古い浴衣でけっこうといっているのに中には新しい晒で仕立てる家庭もある。乳児を預るところでは、便の色をみるために白いものを喜ぶ場合もあるが、身障児、老人、重症の病人にオムツはなくてはならぬもので、古い浴衣で結構ですかなるべく沢山ほしい、とのことだった。(以下関係なく略す)また「主婦と生活」の九月号だったと思います、寝たきりの老人に対しての看病、特におむつのことが詳しく書かれ、読んでいて楽しくなりました。おむつに対して意識的に注意するせいか、新聞雑誌を読んでも、また町を歩いていても、おむつやおむつカバーの乾かされているのがよく目にとまり

ます。奇クを知る前はこうでなかったのですが、それにしても影響力は恐しいものです。奇ク誌は己の嗜好を発展させてくれます。そして、ますます夢中にさせます。私は奇クの中では告白ものが好きです。必ずしも私の嗜好のみしか読まないというわけではないのです。告白物には、その話が自らの経験であり通常、起り得ること、何となく親近感を感じます。これからも、どしどし載せて下さい。

(東京・井上俊彦)

私は二十一才になる女店員ですが数年前よりパンティがわりに六尺フンドシを毎日しめています。私が六尺フンドシをしめるようになったのは、中学二年生のときでした。私のお友達の明子ちゃんが、「今日、試験だわね。お母さんたらね、試験のときはフンドシしめていくぐらいの気持がなくなっちゃだめよ、なんていうの。だから私、今日フンドシしめてきたの……」といったとき、私はびっくりしちやうった。その日、学校から帰っても明子ちゃんが六尺フンドシしめているといったことが忘れられず私も一度してみたいと思いました。七時頃まででしたら家の人は

次号(一月号)は十一月二十五日に発売します。

誰も帰ってこないで、私は着物の帯を出してきて、お風呂場で初めて六尺フンドシをしめてみました。鏡に写る私、ぴっちりとお尻から股にしまったこの気持が忘れられず、学校に行くときも家にいるときも、人知れず下着には晒の六尺フンドシをしめておりました。中学校を出てから三カ月ほど家にいて、直ぐ大阪へ女店員として勤めました。その時、私は初めて奇クを知り、古本屋で三十七年七月号を買いました。その中で私にピッタリ気のあっている方がいました。東京の小倉いくよさん。私は小倉さんのお書きになったように、フンドシは水色や赤、ナイロンのストッキングでつくったものなどをしていきます。私達は女性だからといってフンドシをしめてはいけないということはないと思います。ナイロンのパンティが用いられるようになったのも結局ぴったりと密着した気持から生れたものではないでしょうか。私は小倉さんのように、夏など白のタイトスカートに下着は真赤な六尺フンドシをしめて、スカート

の上から真赤なフンドシがすくみえるようにして露出欲を満足させています。冬でも白のタイトスカートか、白のストラックスをはきます。そしてストラックスも、少しかきつぐらいのをはき、お尻にぴっちりとした六尺フンドシのふくらみを見せています。私は小型自動車の運転をして毎日走りまわっていますが、車のそうじなどしている時、同性の方がいると、かならず私の方を見ます。タイトスカートやストラックスの張りきったお尻の部分に、くっきりとフンドシのふくらみが見えるからです。私は、こうして一人でも多くの同性の方のフンドシマニヤの方々の出ることを楽しみにしています。それから四十一年五月号の出雲さんの告白、「ふんどしをしめましょう」を私は楽しく読みました。四十二年八月号の「犬にのっしてみませんか」の六尺フンドシをしめて犬にのっている長沢圭子さん、私の写真みていただきたいわ。貴女のフンドシは普通の晒布でなくガーゼに近い木綿で目がよくつまり、洗えば洗うほど感触が

よくなるとお書きになっていましたので、私も買ってきて愛用していますが、感触がとってもよく、私を楽しませてくれます。同性の方で私に写真や六尺フンドシのしめ方をお教え下さる方。出来ませんことなら、私にこんな六尺フンドシしめさせてみたいとお思いの同性の方々、送って下さいね。ではよろしく。

(香川県仁尾町・越智しのぶ)

浜田市の志間みち子さま。お元気に、そしてより豊かな生活を送りなさっている様子、何よりも嬉しく拝見いたしました。久しく投稿されないで、もう奇クをお読みになつていないのではないかと半ばあきらめていました。このたびの投稿は大変なつかしく嬉しさで一杯でございます。駅までお迎えにいただいたことにつきまして、貴重な誌面でございましたので省略させていただきます。今までの私が投稿しました文章を今一度、見せていただきますのでしたら倉吉局止南恵子宛にどうぞ。奇ク掲載のカメラ・ハント「この女と」奇クサロン、大変たいのしく拝見、お会いして語り合いたいことばかりでございます。一

人、悶々としてのことより、同好者、合い寄りまして、語り合うことが出来たら、どんなに素晴らしいことかと思ひます。とくに隣県ですものね。投書文では語れないことも、また多くございませう。奇クが存在価値を確かめたい、奇クを中心に語り合うことも充分な意義があるように思ひます。からでございませう。一人で読み、一人で解決していても味気ないものでございませう。一人でできないことでも、二人寄ればできるのではないかと思ひます。そのようにしてこそ、また進歩もあるのではないかと思ひます。生意気いって、ごめんなさいね。夜間の撮影に不便を感じになつて御様子。ストロボをお求めになつてはいかがでしょうか。レンズシャッターのカメラですと、全速度に同調いたしますしフォーカルプレーンシャッター付のカメラですと、六〇分の一のシャッターで合います。ただし、被写体とカメラの間が三米前後が一番よい結果となるようでございます。フラッシュの球ですと、光量は充分でございますが枚数を多く写すときには不便があります。ストロボですと、家庭の電源でも撮れますし、求めるとき

は少々高価なようでございますが後々のことを考えますと、大変経済的でございます。それとフィルム現像でございますが、カメラ店にいかれましてその旨話されますと、教えてくれますし、その使用法は、その容器に説明されていすので大丈夫です。案ずるより生むが安しと申します。最初は枚数の少いフィルムで夜間撮ってみられまして、その薬品の処方通りにやってみられては、いかがでございますでしょうか。私の方は玩具の小さなバケツを買い求め（現像タンクを買い求めたのですが）安価ですものね。一カは現像、一カは停止、一カは定着といたしまして、

夜間風呂場でやっています。主人の指導よろしきを得まして、目下引伸しの方も見習い中でございます。カメラに弱い私でございますが、自分で仕上げた時の喜びは又、格別でございます。又、プレイの内容も、次はどのようなにしたら、興味も増してくるものでございす。最初から諦めないで、何でもやってみるものだと、最近特に感じるようになりました。

（鳥取県倉吉局止・南恵子）

私は二十八才の人妻で子供はございません。主人は結婚当初よりS的で私はM的だと思います。今まで夫婦プレイは何回となくやっ

ており、写真も大分撮りました。ここに数枚は同封しておきます。Aの印のものは誌上に発表されても構いません。この頃は自分でもよくわかるくらいM的になり、剃毛されており、いつもこのような状態を続けております。報酬はいりませんから御誌のモデルに是非使っていただきたいと願っております。本当は夫婦の相互プレイ、三人プレイ、四人プレイが一番好きです。一度お返事いただければ幸いです。

（岐阜市・金原喜代子）

先日なにげなく本屋さんの店頭で偶然奇ク十一月号を見て早速買

ってまいりました。中でも私の最も興味を持ったものは「女性の乳房礼讃」でした。私も前から女性の乳房には非常に関心を持っていました。あの記事を読んでみると、何故もつと早く奇クに気がつかなかったかと残念でなりません。記事を読んでいてだけで胸がわくわくしてきます。実際に写真で見ることが出来たら、どんなにすばらしいかと思ひます。ぜひ女性の乳房ばかり責めた写真集を発売して下さい。私は初めて奇クを買ったばかりなので手もとに何にもありません。編集部の皆様、ぜひお願いします。（埼玉・鈴木太一郎）

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担してまいりましたが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括し

既刊雑誌在庫案内

てお求めの際はハ小包Vにて発送申し上げます。

昭和39年7月号	（送共三二〇円）
昭和39年8月号	（送共三二〇円）
昭和39年9月号	（送共三二〇円）
昭和39年10月号	（送共三二〇円）
昭和39年11月号	（送共三二〇円）
昭和39年12月号	（送共三二〇円）

昭和40年2月号	（送共三二〇円）
昭和40年3月号	（送共三二〇円）
昭和40年4月号	（送共三二〇円）
昭和40年5月号	（送共三二〇円）
昭和40年6月号	（送共三二〇円）
昭和40年7月号	（送共三二〇円）
昭和40年8月号	（送共三二〇円）
昭和40年9月号	（送共三二〇円）
昭和40年10月号	（送共三二〇円）
昭和40年11月号	（送共三二〇円）
昭和40年12月号	（送共三二〇円）
昭和41年1月号	（送共三二〇円）
昭和41年2月号	（送共三二〇円）
昭和41年3月号	（送共三二〇円）
昭和41年4月号	（送共三二〇円）
昭和41年5月号	（送共三二〇円）
昭和41年6月号	（送共三二〇円）
昭和41年7月号	（送共三二〇円）
昭和41年8月号	（送共三二〇円）
昭和41年9月号	（送共三二〇円）
昭和41年10月号	（送共三二〇円）
昭和41年11月号	（送共三二〇円）
昭和41年12月号	（送共三二〇円）

昭和41年5月号	（送共三二〇円）
昭和41年6月号	（送共三二〇円）
昭和41年7月号	（送共三二〇円）
昭和41年8月号	（送共三二〇円）
昭和41年9月号	（送共三二〇円）
昭和41年10月号	（送共三二〇円）
昭和41年11月号	（送共三二〇円）
昭和41年12月号	（送共三二〇円）
昭和42年1月号	（送共三二〇円）
昭和42年2月号	（送共三二〇円）
昭和42年3月号	（送共三二〇円）
昭和42年4月号	（送共三二〇円）
昭和42年5月号	（送共三二〇円）
昭和42年6月号	（送共三二〇円）
昭和42年7月号	（送共三二〇円）
昭和42年8月号	（送共三二〇円）
昭和42年9月号	（送共三二〇円）
昭和42年10月号	（送共三二〇円）
昭和42年11月号	（送共三二〇円）
昭和42年12月号	（送共三二〇円）

☆編集後記☆

○この限られた頁数の小冊子の中に、あれもこれも載せようとすると、懸賞入選の大作も分割せざるを得なくなる。長枚数のものばかり載せてしまうと、少数派からは継子扱いすると叱られる。『花と蛇』の枚数をもっと多くせよという読者の声も少くないが、編集子としては出来るだけ、いろんな傾向のもので誌上を飾りたいのは、やまやまでである。

○今月号もそうした苦心の末の選択であったが惜しい原稿も数多く翌月回しとなった。連載物が多くなると、どうしても新人のものも掲載が遅れ勝ちになる。こういったときに新しく連載作品の持込みは頭痛鉢巻といったところである。

ころである。木見修の「私評論・優しい女たち」能美積の「女の縄のある限り」蓑輪三郎の「縄と汗とカメラと」などは一応読ませる内容を持っていて作品だと思う。

○常連、ベテランの辻村隆、芳野眉美、千葉青鬼、団鬼六などの作品は益々脂がのってきただけで今後の進展が楽しめる。中康弘通、斎藤夜居の重厚な研究資料は他の読物には見られない風俗文献的価値がある筈である。

○写真や絵画は出来るだけ数を制限し必要欠くべからざるものに限ったが、それでも見方によっては多きに過ぎたかもしれない。とにかく、盛沢山に似たと並べたてて、選りどり見どり好きなものを御自由に手にとつて頂くという八方美人的編集に徹したが。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものでは自作に限ります。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

十二月号

〔第二十一巻第十二号〕

昭和四十二年十一月二十日 印刷
昭和四十二年十二月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番▽
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二二日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等にとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。但し、本誌の発行を企図して下さる方には、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願